

MSV. 弾劾のハンニバル 《第一部完》

SUZ.

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

マクギリス・フアリド事件から7年が経過した、P.D. 3333年。鉄華団は失われ、生き残りたちは平穏に暮らす穏健派⇄復讐に生きる強硬派に分裂していた。成長したライドたちは「モンターク商会」のうら若き女社長のもと、いまだ戦いをやめられずにいる。掲げる旗は赤い華から青い狼へ、そして革命はふたたび興る——！

※ライド（21）&アルミア（18）中心の第一部《完結》↓さらに七年後、暁（14）主人公の第二部へ。

※p i x i vにも投稿しています。

# 目次

第一章 復讐は何も生まないなんて

序幕

001 仮面の女

第二章 勝てば官軍、負ければ生け贄

002 ブランカ

003 地獄の番犬

P・D. 331： 作られ（なかつ）た子供たち

第三章 猿でもできる聖者の行進

004 レプリゼンタティブ

005 回帰

006 家族の肖像

P・D. 329： クレイジー・テイー・パーティー

番外編

マーナガルムの整備長

第四章 デイープ・スロート

007 月へ

008 代償

009 リタ・モンターク

P・D. 332： 愛していると言ってくれ

第五章 獣の肯定

010 反撃開始

011 マーメイド・ラグーン

012 狩り場

013 恣意

1

6

25

37

53

71

88

102

115

122

134

148

165

179

187

195

206

215

014	レトログレード	223
015	瑕	235
P・D・333	補食動物の牙	242
第六章 喪主は七年前に死んだ		
016	スケープ・ゴート	253
017	花と祈り	266
018	モニターク邸炎上	275
019	過去の清算	285
020	インプリント	299
P・D・326	祈る言葉も知らないけもの	310
第七章 死すべき運命の戦乙女		
021	リブート	313
022	ヒューマンデブリの意地	324
023	不退転	336
024	指針	345
P・D・324	呪詛と祝福の指輪	354
第八章 ウイル・オー・ザ・ウイスプ【完】		
025	戦う相手	363
026	奴隸たちの英雄	374
027	ハンニバル	392
終幕		
断章 朝まで続く永い夜		
前編		
後編		
419	Born Yesterday	406

	001	夢見る宇宙	445
	002	イサリビ	456
第2章		Living Dead's Scratches	
	003	狼の血	469
	004	リビングデッドの爪痕	474
	005	見えない真実	491
	006	表と裏	500
	007	すれ違う心	518
マーナガルの整備長	II		527
			441

# 第一章 復讐は何も生まないなんて 序幕

P. D. 333

平原に点在する林に隠れるように、その小さな要塞はある。

上空から見渡せば広大に過ぎる草原の中には、背の高いポプラが濃い緑を寄せ合っている斑点がポツリポツリと数えられるのだ。その約半数ほどに、かつてSAU軍の〈シルダ〉が隠してあった。

国境紛争時に使われた古い補給拠点である。建造からはもう十年近くが経つ。前線にほど近く、急ごしらえの基地群であっただけに、老朽化したコンクリートからは赤錆びた鉄骨が突き出している。重砲をもらってしまった不運な森もいくつかあり、その豪快な吹き飛び具合はアブラウとの国境はどちら側かが一目で見取れるほど。

戦後ハリケーンにでも見舞われたのか、朽ち果てようはまさに廃墟だ。最寄りの街からざつと一二〇マイルは離れているせいで、無秩序なギャングの落書きもない。

残されているのは洗い流されなかつた血痕と、そして風雨によって抉られ、掂げられた弾痕くらいのものだろう。

カナディアンロッキーを臨むこのバルフォー平原のただなか、ポプラの林に潜みながら、無力な兵隊たちは死神の足音に怯えていた。

いくら前線に近くとも補給拠点には整備士がおり技術者がおり、炊き出しをする給養員たちがおり、兵站を運んでくる需品部隊が行き来するものだ。戦うばかりが戦争ではない。医師や看護師といった非武装の救護スタッフも帯同している。

戦闘員も非戦闘員もみな配置に従ってそれぞれの仕事をした。訓練と違っていつ終わるとも知れない過酷な環境に、なすすべもなく命を刈りとられていった。

国境線を幅広く接したアブラウとの戦争には、SAU政府もただ

北へ北へと兵を送り続けるほかなかった。

外交のチャンネルが何者かによって封鎖されていたせいだ。やむをえずギャラルホルンに要請し、地球外縁軌道統制統合艦隊が調停を持ちかけようと試みたが、情報が届くことはなかった。

あとになって判明したことだが、アープラウ防衛軍は人材不足から採用時の経歴チェックがザルで、とある傭兵の介入を受けたらしい。ガラン・モツサという偽名の男だ。傭兵部隊を率いてふらりと現れ、至極すんなりとアープラウ防衛軍の実質的な指揮官として居座った。

彼に雇われていた民間の傭兵たちは、リーダーこそ紛争で失ったが、もともと各地を転々としていた好戦的な戦争屋である。貸与されていたヘゲイレール・シャルフリヒターをもち逃げする格好で戦線を離脱し、今も次なる戦端をいまかいまかと待っている。

SAUの古い基地に身を隠し、今日もバーボンの瓶を掲げる。彼らにとつては痛々しい戦火の爪痕さえも生きる世界を構成しているパーツのひとつだ。珊瑚礁に生きる魚のように、彼ら傭兵は戦場跡地を自由に泳ぐ。法規に縛られず、MSの無登録所有も見咎められることはない。

戦争を稼業として生きる彼らに特定の敵はいない。戦乱のない場所では酒をたしなみ、色を好む。仕込みをしたら、あとは小競り合いが起きるのを待つばかりだ。

まだ日も沈まない初夏の午後九時、夕食後の余暇を楽しむ傭兵たちは聡いスポッターに見つめられていることなど気付きもしない。

『……こちらベンジャミン。ターゲット確認。人数、武装ともに情報通り』

黒人の男が報告する。まだ十代の少年とは思えないほど落ち着いた声だ。スポッターを担う機体のカラーリングは、夜闇にこそ紛れられる漆黒<sup>ブラック</sup>。

この季節、平原は午後十時すぎごろまで明るいため、黒は保護色にならない。狙撃手は目標から北に三キロばかり離れた古要塞に身を隠し、その千里眼で戦場予定地を見つめている。

『アルフレッド、了解』と隊長機が軽い調子で返答した。一際鮮やかな鮮紅色スカーレットの装甲には隠密性のかけらもない。琥珀色のバイザーで覆われたアイ・センサーが獐猛に光を散らし、『チャーリー、いけるか?』と笑う。

『いつでも!』

東洋人の男が威勢良く応答する。同じく十代後半の少年だ。ポップラの森に伏せた機体は大空のように青く、こちらも保護色とはほど遠い。

しかし実によく隠れている。MSの頭部を探して見上げればまず間違いなく見逃す地面すれの位置で、モノアイがぎりぎり剣呑にきらめいた。

うつ伏せに倒れたかと思紛う姿勢でも、双肩のヘビーマシガンは標的となる廃屋をとらえている。獣の両耳のようなブレードアンテナ、鋭い金目はまさにワーウルフだ。

右肩には〈狼〉のシンボル、左肩には稲妻がそれぞれ描かれている。三機に共通する両肩のノーズアートが、彼らの所属を物語る。

『——二〇五七。〈ハーティ小队〉、攻撃行動に移る』

隊長機がミッションレコーダーに宣言する。

〈ハーティ小队〉——厄祭戦末期に九機のみロールアウトしたというヴァルキュリアフレームをかき集め、その改修機のひとつであった〈グリムゲルデ〉に似せて作った〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉三機を中心とする実動部隊だ。

1号機にエンビ、2号機にヒルメ、3号機にはトロウが搭乗している。

鉄華団の魂が息づく狼たちが牙を剥く。

『オーブンファイア  
撃ち込め!』

エンビの鋭い号令を合図に重砲が鳴り渡る。轟く咆哮とともに駆け出したのは3号機だ。ポップラの森を焼き尽くすように、両手足から青い炎がほとぼしる。軽量ゆえの機動性を誇った本来のヴァルキュリアフレームにはなかった四脚可変機構を実現させ、四ツ足のホバーだけではない、野獣の駆動が大地を蹴って加速する。側頭部のバルカ



ンが牽制の銃火を放つ。

これから野営だという傭兵のキャンプは、一息にして色めき立った。

騒然とする廃墟を狙って撃ち込まれた砲弾が爆ぜる。爆音、悲鳴。炎の海からは戦場慣れた傭兵たちがぼろぼろ駆けでてくる。

「くそっ……何だ、ここがばれたのか!？」

「散開、散開だ!! どの誰が襲ってきたのか知らんが——!」

「了解だ、合流ポイントで落ち合おう。死ぬなよ!」

手際よく散っていく機影を、スポッターは見逃さない。コクピットのヒルメはヴァルキュリアライフルの狙いをさだめて、友軍機へ報告する。

『——ターゲット、北側へ退避してくる。へゲイレール・シャルフリヒター』が五機だ』

『こちらチャールズ! 基地の投棄を確認した。生存者はゼロ!』

置き去りの残骸たちを踏みつぶしながら3号機のトロウが吠えた。足許では碎けて潰れたスイカがじりじりと焼けこげていく。

『オーライ、こつちも予定通り二機を目視』

挟撃にする、とエンビは続ける。北では狙撃手タイプの2号機が罠を張って待ち構え、南東からは高火力タイプの3号機が追いつがる。三機連隊の隊長機である1号機のコクピットで、エンビは好戦的にくちびるを舐めた。

右腕にヴァルキュリアブレードを展開する。

『ヒルメ』と呼ぶ。黒の2号機は頭部装甲を展開し、高精度センサーを露出させている。千里眼形態ガンカメラモードの視界は既にへゲイレール・シャルフリヒター』のコクピットを正確に捉えている。

『いつでもいける』

『トロウ』と低く笑う。蒼の3号機は消し炭へと変貌していく。炎の森からのそりと現れると、スタートダッシュに姿勢をぐっと低くした。『待ちくたびれた』

あとはエンビの号令がひとつ響けばいいだけだ。

『殲滅しろ』

野放しの処刑人どもをひとり残らず喰い殺せ——と。  
狼が猛る。

## 001 仮面の女

我がモンターク商会は、武器や弾薬だけでなく人材も自信を持ってお届けしております。戦闘員はもちろんのこと、女性でも少年でも、お望みの用途にふさわしい人材をご提供する用意がございますわ。

さて、本日お客様がお探しいらっしゃるのは、阿頼耶識使いの少年兵でお間違いないませんか？

さすがはバーンスタイン議長閣下のご関係者ですね、お目が高くていらっしゃるわ！ 二年前のヒューマンデブリ廃止条約を受けて、旧時代のマン・マシーン・インターフェースを持つ戦士たちはすっかり稀少になってしまいましたもの。

でも、ご心配なさらないで。我が社にはとびっきりの青少年が集っておりますから。

「ご利用期間はお決まりでいらっしゃいますか？」

につこりと、仮面の貴婦人はあくまでも朗らかに微笑んだ。鈴を転がすような声は耳に心地よく、彼女の育ちの良さを物語る。遮りたくなるような長台詞でさえ最後まで聞いてしまったほどだ。

タイミングを見計らったようにメイドが現れ、上等そうな紙の契約書をローテーブルにセットしていく。

「そうじゃねえ」とうなったのは、ユージン・セブンスタークだ。

今日はお嬢の使いで来たわけじゃない、と言うに言えず、肺腑の底からため息をついた。

目の前に並ぶ飾り物のようなペンと、インクの壺。かつてのユージンならば、それが何なのか、何のために運ばれてきたのかもわからなかっただろう。

火星連合発足以前のクリュセには『紙媒体の契約書』なんぞ存在もしていなかったのだ。クーデリア・藍那・バーンスタイン火星連合議長様のSPだなんて仕事に就かなければ、紙とペンなんてものを見て、それが数ヶ月分の生活費に化ける高級品だなんて想像もできな

かったに違いない。

地球圏から持ち込まれた貴族的文化を目の当たりにして、我知らず眉間に皺がよった。ソファは座り心地が良すぎて、逆に尻の座りが悪い。

ユージンがこのオフィスを訪ねたのは商談のためではないのだ。契約のためでも、まして人身売買のためでもない。

契約書を一瞥してから「単刀直入に言わせてもらいます」とレディ・モンタークに向き直った。

「ライド・マツスつっう赤毛の傭兵が、ここにいるでしょう。あいつを返してもらいたいです」

睨み据えても、うら若い女社長は歯牙にもかけない。奇怪な仮面ごしにもわかるくらいに柔和な笑みを浮かべたままだ。

年のころは十七、八といったところだろうか。面差しはあどけない。このほど大学生になったクツキーやクラツカと同世代のように見える。

創業二百云年の歴史を持つ老舗、モンターク商会。

七年ばかり前まではマクギリス・ファリドが別名義で代表を務めていた、おそらくは武器問屋だ。鉄華団とも業務提携し、武器や弾薬、情報を提供する対価として火星ハーフメタルの利権を一部手に入っていた。

あのころのモンターク商会に大した知名度はなかった。火星を活動拠点にしてもなかったはずだ。

それが二年前にノブリス・ゴルドンが何者かによって暗殺されてから、目覚ましい台頭を見せはじめた。

ノブリスが座っていたフィクサーの椅子をいともあっさりかつさりらい、火星から全宇宙に影響力を持つやり手の武器商といえば、今ではモンターク商会が代名詞となった。

表舞台に現れたきっかけですらキナ臭いというに、いち民間企業でありながらギャラルホルン製のM<sup>モビルスーツ</sup>Sを直接買い付けているだなんて、どう見積もっても怪しすぎるだろう。

ギャラルホルンと取引のある巨大コングロマリッドであるあのテ

イワズでさえエイハブ・リアクターはサルベージ品だというのに、モントーク商会はヘゲイレールやヘグレイズといった旧型機をそのまま仕入れているのである。

一体どういうルートで、どういうパイプを持っているのか。ギャラルホルンと懇意にしているような様子もなく、その実態は杳として知れない。

ヒューマンデブリの取り扱いにしてもそうだ。

かつて鉄華団が大暴れしたおかげで子供が有用な戦力と見なされ、少年兵は一時爆発的な増加を見せた。

といっても、ただのガキを戦場に放り込んでも小さすぎる肉の壁だ。俊敏なだけで体重は軽く、MSを主戦力とする昨今の戦いではそうやすやす役に立つものでもない。パイロットとして育てるコストを惜しんで阿頼耶識の適合手術を強要されるのはどこも同じだった。

そうして急増したはずの児童傭兵たちは、二年前にヘヒューマンデブリ廃止条約が締結されたことよってきれいさっぱり姿を消した。

〈マクギリス・ファリド事件〉を受けて有機デバイスシステムの危険性、少年兵の凶暴性が改めて喧伝されたとはいえ、圏外圏における安価な労働力としてあれほどの数がいた宇宙ネズミが一体どこへ行つてしまったのか、疑問を抱かないほうがおかしい。

めつきり現れなくなった宇宙海賊どもはどこへ行つた？ どこかに潜んでいるのか、ギャラルホルンに取り締まられたのか。そこで使われていたであろうヒューマンデブリたちは一体どこへ消えた？

航路を荒らす宇宙海賊どもが現れなくなったと思ったら、先日にはドルトカンパニーの重役が何者かによって殺害されるという事件があった。

コロニー内部に所属不明MSが押し入り、建物から出てきた会社重役らを見たこともない炎で焼き殺したというのだ。

ドルト一件のみに留まらず、今度はSAUで傭兵の集団死が見つかった。現場はアブラウとの国境近く。隠れ家になっていたSAU

正規軍のキャンプ跡地ごと踏みつぶされ、連れ込まれていた女らしき遺体ごと焼き尽くされていたらしい。

ドルトコロニー群から地球までの距離を考えれば別働隊だろう。

しかしアリアドネが捕捉した監視カメラの映像から、凶行に及んだMSの肩には狼を象ったノーズアートがあつた——という共通点が浮かび上がった。

背筋が凍る思いだった。二年前に姿を消した、あいつらが乗っているのではないかと、雷のような衝撃がユージンを襲った。

ニュース配信を漁って目撃情報をかき集め、旧タービンスの伝手をたどってどんな情報でも欲しいと望んで断片をつなぎあわせて、やつとそれらしくなったシルエットから照合できた機体はヴァルキユリアフレーム。焦燥が胸を掻きむしって、夜もまともに眠れなかった。

だからユージンはここまで来たのだ。街中で偶然トドを見つけて衝動的にとちめて、モンターク商会のオフィスまでタクってきた。

ライドたちはここにいるのだろう。危険な仕事をしているのだろう。俺が連れて帰るとは言わないから、どうか家族のもとへ返してほしいのだ。

「恐れ入ります、お客様。個人情報の開示には相応の対価をお支払いただかなくては」

「金か？　いくら必要だ」

「金銭でなくとも構いませんわ。個人情報を売り渡すにふさわしいものでさえあれば」

「ソレが金じゃないってんなら何なんだ……。あんたは商人なんだろう」

相応の対価がいくらになるか、提示するのは商人あんなの側じゃあないのか。ユージンの声は苛立ちのまま低くなり、双眸は凄むように眇められる。

それにも女社長はそよ風に吹かれたように涼しい顔で、あどけないくちびるを笑みのかたちにしてみせた。

「そうですね、」と白魚の指先を顎に添える。

仮面の奥のひとみは、微塵も笑ってなどいない。

「お話によれば、火星連合は一部の市民に限って職業選択の自由を認められていらつしやらない……とか」

冷静な指摘。それは事実だ。ユージンの眉が胡乱に歪む。

一部の市民——鉄華団の残党に限り、学校に通うにしても仕事をすらにしても戦闘にだけは関与できないよう、クーデリアが配慮している。

戦いの中で多くを失い、傷ついてきた少年たちがふたたび戦場に舞い戻るなどあつてはならないという、彼女なりの救済措置だ。

学びによつて選択肢を増やせるようにと、火星連合は学校教育の充実を推し進めている。

子供が戦わなくていい世界を目指しているのだ、もしも「戦いたい」と子供が言うなら「戦う必要はない」と大人が諭す。保護者が守つてやりさえすれば、ガキどもが自衛のために、自活のためにと武器を手に取り物騒な仕事に従事することはないのだ。

戦いには何の意味もない。復讐は何も生まない。オルガ・イツカは仇討ちなど望まない。だから鉄華団の残党に限り、弔い合戦を封じるために『戦闘職に就かない』という制約がもうけられた。

そのことを知っているのは当事者のみのはず。

ライドが打ち明けたのか、それとも。

「……あんだ、何モンだ？」

「しがない武器商人でございます」

「違うな。あんだがやってるのは武器の卸売りだけじゃない。——人殺しだ」

喉奥から絞り出した糾弾は、しかし応接室の静寂の中に飽和した。

ノブリス・ゴルドンを暗殺したのはお前たちだろうと言外に糾弾しようとも、鉄仮面の前にはどこ吹く風。ミルクティーでも冷ますような少女のため息がユージンをいなす。

「あなたがただって、業務上の殺害は経験なさっているでしょう」

「……一緒にするんじゃないねえ」

ユージンがうなれば、「まあ」とさも驚いたような芝居をする。

「殺人に貴賤があるとおっしゃるの？」

仮面の奥でぱちくりと、青いひとみがまたたく気配があった。

……おそらくそういうパフオーマンスだろう。あの仮面には、目を隠す可変機構があることをユージンは知っている。

確かに鉄華団は、ギャラルホルンや宇宙海賊と交戦し、数多の犠牲者を出してきた。

CGS一軍のハエダ・グネル、ササイ・ヤンカスをはじめ、海賊をけしかけてきたヘテラ・リベリオニスのアリウム・ギョウジャン、地球支部をテロリストに売り払った監査員ラディー・チェ・リロトのような裏切り者に責任を問い、ケジメをつけたこともある。

ギャラルホルンとの交戦以外にも、国境紛争に巻き込まれた地球支部はSAU正規軍を相手取って戦った。

だが、あれらは仕事だ。

「依頼を受けて、任務遂行のためにやったまでだ」

殺さなければこつちがやられる。目的地までたどり着くには、障害物の排除はつきものだ。

「我々として同じです。依頼に基づき、頂戴した対価に不足のないようお役目を果たしているのです」

「同じだと？ あんたらのやってることは自分勝手な復讐じゃねえか！」

「まあ、そうなのですか？ わたしには依頼主のお心までは拝察いたしかねます」

いけしやあしやあとかわしてみせた女社長は、憎たらしいほど動じない。

最近の事件だけでもドルトカンパニーの重役暗殺に、SAU国境付近での傭兵殲滅。ちよつと考えればわかることだろうに。

もう十年近く昔の話になるが、ドルトコロニーでは労働者たちの大規模な武装デモがあった。

求めたのは労働への〈対価〉だ。コロニーは文字通りの宇宙植民地であり、そこに生まれ、そこで暮らし、そこで死んでいく労働者たち



の就労環境は劣悪きわまりないものだった。職種業種によっては命の危険もついてまわる。怪我や病気で働けなくなったときの保障がほしい、不慮の事故で命を落としたとき家族に財産を遺してやれるシステムがほしい——など、相応の対価を支払ってくれと声をあげるためのデモだった。

日々を生きるだけで精一杯の家畜のような生活から、人間として尊厳のある生き方へ。

望みは叶えられることなく焼き払われた。

ノブリス・ゴルドンが〈革命の乙女〉からの支援と偽って武器を大量に提供し、名ばかりの旗頭クーデリア・藍那・バースタインと彼女を守る〈若き騎士団〉こと鉄華団に届けさせたせいだ。

間者であったというフミタン・アドモスは狙撃手の凶弾に斃れ、ビスケットの長兄サヴァラン・カヌーレはデモの鎮圧を苦に首を括った。

当時、ドルト3の労働組合を仕切っていたナボナ・ミンゴ氏の自宅を訪ねたユー진은、社宅だという集合住宅で子供らに会った。

ドルトの争乱はクーデリアの呼びかけによって収束し、その後アフリカユニオン政府が労働環境改善を約束したと聞いたが、あのとときシノが遊んでやっていたあの子供たちはヒューマンデブリになったのだろう。

半年もしないうちに鉄華団が名をあげ、各地で少年兵の起用が活発化したのだ。業腹だがタイミングはおそろしいほどよく噛み合っている。

阿頼耶識システムが適合する年齢の——成長期を迎える前の——ガキの誘拐など、大人の手にかかれれば子犬を捕まえて箱に放り込むより容易だ。元手はタダ同然、適合手術に失敗したら廃棄すればいい。生き残っても行き場がないから命の限り戦い続ける。これほど都合のいい肉の壁は他にない。

ドルトカンパニーの労働者寮にはアフリカユニオン政府が補充した人員が新たに住み着いたろうし、親を失った子供たちの面倒を見られるほどの大人も生き残っていなかった。小学校や保育所だつて

まともになかったのだ、孤児院など整備されているわけがない。

すべてはノブリス・ゴルドンの手のひらの上で、武器と兵士の需要を作り出すために仕組まれたことだった。

〈革命の乙女〉クーデリア・藍那・バーンスタインの名前は火種になる。争いが起これば武器が使用され、弾薬が消費される。コロニーならばこそ遺体袋は飛ぶように売れる。(大地のないコロニーには埋葬という習慣がなく、閉鎖空間での衛生環境の悪化は集団死につながる。死体を早急に片付けられなければ『伝染病の原因』とでもレッテルを貼られ、コロニーごと処分されるはめになる)

独立運動を敢えて支援し、労働者と支配者の間に摩擦を生み、ギヤラルホルンによる掃討作戦を誘発させては巨万の富を手にしていた大富豪がノブリス・ゴルドンだ。

紛争の自作自演により利益を得ていたフィクサーの椅子は、今ではこのモンターク商会のもの。

商会が関与していると見て間違いない件の仕事の数々に、ユージンは違和感を抱いていた。

暗殺者<sup>ヒットマン</sup>を差し向けてくれと依頼しそうな相手が思いつかないのだ。コロニーで殺害されたドルト公社の重役も、SAUで踏みつぶされた傭兵どもも、殺したところで誰も得をしない。

だが〈相応の対価〉とやらが金銭ではないという言葉で、ユージンの疑念は確信に変わった。

「復讐を斡旋してるスポンサーはあんた自身なんじゃないのか」

元少年兵の眼光が仮面の少女を鋭く射抜く。

目的は経済の利ではない、政治の益でもない、誰かの溜飲を下げるためだけの私刑ではないのか。

モンターク商会と鉄華団の取り引きは七年前、ヘマクギリス・ファリド事件のただなかで断られたが、仮面男の羽振りの良さは莫大な資産を否が応でもちらつかせた。二年前にあのノブリスに取って代わったなら、経済基盤はさらに安定しているはずだ。なんとって、阿頼耶識使いの少年兵には元手も保険も必要ない。

戦闘経験豊富なガキに武器を持たせ、さあ報復を果たしていらっ

しやいと、あんたがけしかけているんじゃないのか？ ——ユージンは女社長の仮面をじつと睨み据える。

少女は目を逸らさない。仮面のまぶたを閉ざすこともしない。

「どうなのでしょう？ 先ほど申し上げました通り、対価をご呈示いただかないことには我々も情報をご提供するわけにはまいりません」何を言っても脅しをかけても暖簾に腕押し、ふわりふわりとかわされる堂々巡りに、ユージンは「もういいです」と嘆息した。

座り心地のよすぎるソファから立ち上がる。設計と素材がいいのだろう豪華なソファは、きつと何時間座つても腰を痛めたりしないのだろう。

だが仮面少女とこれ以上会話していたら、頭のほうがおかしくなつてしまいそうだ。

「また来ます」と捨て台詞を吐く。ドアノブに手をかけるまでもなくメイドが扉を開けたので、あまりのタイミングの良さにぎよつと目を剥いた。

メイドは会釈のようなしぐさだけで「こちらへどうぞ」と伝える。

……実に洗練された所作だ。おそらく自動ドアとなるべき一瞬を見計らうために、応接中の一字一句、一挙一動を漏らすことなく見張っていたのだろう。それでいて息苦しさを感じさせない。

見送りのメイドにいぎなわれ、玄関口へと出ればちよび髭の運転手が悠長に煙草をふかしていた。

「終わったかあ？」と手を振るので、ユージンは露骨に嫌な顔をした。

思わぬ客人を送り出して、仮面をとる。ふうと疲れた息を吐く。薄すみれ色の髪をあらわにしたアルミリアの背後で、本棚が音もなくスライドした。隠し扉を後ろ手に閉めてから、自己紹介のように靴音をたてて赤毛の傭兵が歩み寄る。

ライド・マツス——先ほど話題の渦中にあつた阿頼耶識使いの少年兵だ。

二十一歳と既に『少年』の年齢ではないながら、モンターク商会の

とびつきりの青少年たちこと、少年傭兵部隊へマーナガルド隊のリーダーとして雇われている。

「お姫さんにしては物騒な言葉が聞こえてきましたけど」

「そんなことないわ。すべて、わたしの本当の言葉よ」

「……似合わないことは言わなくていいですよ」

皮肉のようだが響きは何とも気遣わしい。ソファの背にもたれかかると、ライドはとすと腰を下ろした。

かつてオルガ・イツカが依頼主を『お嬢さん』と呼んでいたように、雇い主を『お姫さん』と呼んでいる。

セブンスターズの一家門たるボードウインの名を持つ純血の令嬢では、その姫というのもあながち間違っではないだろう。

「心配してくださいのね」

「あなたに折れてもらっちゃ困るだけです」

あぐらをかく暗殺者の気配をソファごしに感じながら、アルミリアは鏡と向き合うように仮面を見つめる。

この仮面がないと言えなかつたけれど、それでもアルミリアは？ 偽りなくユージンにこたえた。

うまく笑顔を作れなくなつたくちびるが、心細くふるえる。

「お気遣いに感謝します。あなたの言葉はいつもやさしいわ」

「やめてくださいよ。旦那に祟られちまいそうだ」

「……夫に？」

「ええ」

「彼は、わたしを責めてくれると思う？」

「さあ」とライドは肩をすくめた。「……あの世で怒ってりやいなつて思ってますけどね。俺は」

「ありがとう」

ユージンの指摘の通り、暗殺者を派遣しているスポンサーはアルミリア自身だ。

依頼主は暗殺者本人。モニターク商会は武器商として利益を得ながら、私刑執行を斡旋している。

創業者クライゼン・モンタークによる起業以来、モニターク商会は

人々の生活の質の向上を掲げ、多種多様な商品を取り扱ってきた。その二百年の歴史の中には人身売買を行なってきた記録もある。少女少女を調達し、見目によって振り分けて、売りさばいた過去がある。

マクギリス・ファリドも被害者のひとりだ。

彼に、親から与えられた名前はなかったという。火星の片隅に生まれ、誘拐され、このモンターク商会で高級男娼として客をとり、やがて売られた名もなき孤児。

それが彼の真実だった。

イズナリオ・ファリドに目をかけられ、寵愛のもとへヴィーンゴールヴンに連れ帰られたのちにファリド家の正式な養子——次期当主となったマクギリスは、モンターク商会を乗っ取った。従業員を全員解雇し、豪華な家具も売り払い、このモンターク邸を建築様式ばかりがうつくしいがらんだのオフィスに変えたという。

きつと彼なりの復讐だったのだろう。火星のスラムで彼をかどわかし、おぞましい手段で支配した奴隷商人たちへの。

表向きは武器問屋、その実は、人身売買に通じる老舗。二百年来のノウハウがあればこそ、ヘヒューマンデブリ廃止条約締結にともなうて行き場を失った少年たちを買い取り、五十名あまりを邸内に保有しているようにも足がつくようなことはない。

条約に背いていようとアルミリア・ボードウィンが社長の椅子に座っている限り、ギャラルホルンの監査が入ることもないだろう。セブンスターズの血統でありさえすれば罪はすべて赦される。免罪される。そういう〈法〉と〈秩序〉がギャラルホルンにはある。

その法が、その秩序が、マクギリス・ファリドを殺した。

ならばアルミリアは、セブンスターズの一家門たるボードウィン家の名を利用して悪逆の限りを尽くしてみせようと誓ったのだ。

紛争を起こし、それを武力で制圧することでギャラルホルンの存在意義を自作してきたギャラルホルンの子女として、先人に勝るとも劣らない戦乱の時代を招いてみせる。

「戦いは何も生まないだなんて、詭弁だもの。ギャラルホルンはずっ

とそうして栄えてきたわ。このモンターク商会だって、そうだったのよ」

小さな火種もいつかは戦禍となり、武器の需要を生む。護衛が必要とされ、雇用が生まれる。

暗殺にせよ復讐にせよ〈需要〉がある限り、そこには流通業の仕事があるのだ。みずから燃料をぶちまけて戦禍を呼べば、いともたやすく経済はまわる。

ギャラルホルンから武器を買い付けているだけでモンターク商会の懐は潤っていく。

憎しみは連鎖し、復讐者は無限に現れる。

たとえばドルトコロニーで両親を失い住処を追われ、ヒューマンデブリに身を落とした少年少女。

たとえば国境紛争で無駄な損耗を強いられ、仲間を無惨に使い捨てられた鉄華団地球支部の少年兵。

報復を望む同志たちが生まれ続ける限り、アルミリアは助力を惜しまない。

己が持つ牙の使い方も知らず、ただうずくまるしかできなかった獣たちに武器を与え、仇敵を教え、作戦とともに野に放つ。ノブリス・ゴルドンのやり方と同じだ。ラスタル・エリオン公だって、こうやって戦禍と需要を創り出してきた。

(だったらその利益、わたしがいただいたって構わないはずだわ)

いつかラスタルが邪魔だと判断する日が来れば、強制査察なり何なりの手段でモンターク商会は制圧され、廃業ではなく全滅という形で潰えるのだろう。

逆賊に仕立て上げたいならそうすればいい。殺したいなら殺せばいい。報復でしか生きられない、他の選択肢が遺されなかった孤児<sup>オルフェン</sup>たちのシエルターは、戦場にしかもうないのだ。

仇討ちよりも生産的な道を見出すなら、いつでも出ていけばいい――アルミリアは幼い傭兵たちにそのように言う。

鉄華団はそうだったという、ライド・マツスの言葉を信じた。

マクギリスは鉄華団を高く評価していたというトド・ミルコネンの

言葉を信じた。

信じられるものが他になかった。

さいわい邸内にはゲストルームが潤沢にあり、ベッドの数もあり余っている。ここを去るなら行き先は学校か路上かの二択になってしまうけれど、新たなIDを偽造し、少年兵だった過去はすべて伏せてみせる。ギャラルホルンという巨大なバックアップを持つ今のアルミア・ボードウインにはそれだけの権力がある。

恣意によってノブリス・ゴルドンを殺害し、武器・弾薬の流通ルート、報道機関にも手を回して、モンターク商会は今や、アルミアとライドの共通の仇敵であるラスタル・エリオン公と手を結んでいる。このアリアンロッドの職域で、可能な限りすべての復讐を遂げるつもりだ。

武器の需要を生み、軍需産業に利をもたらず。雇用を生み、圏外圏の経済に寄与する。アルミア・ボードウインは、そうやって必要性を自作自演してきたセブンスターズの一家門、ボードウイン家の息女なのだから。

「ライドさんこそ、よろしいの？ あの方……」

「元副団長がなにか？」

「あの方も、あなたの仇のおひとりなのでしよう」

アルミアが言いよどめば、ライドは「ええ」と無感動に同意する。音もなく立ち上がると「でも、まだ先の話です」とむすんだ。

鋭く上がったまなじりは、笑みのかたちだ。口角がっぴあがる。

ライドは、いつかユージンにも制裁を加えてやりたいと思っっている。

〈革命の乙女〉クーデリア・藍那・バーンスタインの悲願であった脱植民地化を果たした火星は、テイワズとアリアンロッドによって支配された傀儡政権に他ならない。

ギャラルホルン火星支部の実質的撤退により治安は急激に悪化し、クリュセ市警なる治安維持組織が濫造されたおかげで、CGSの一軍みたいな連中が幅を利かせるようになった。

権力者には媚びへつらつて、気弱そうな市民からは駐車違反だの公

務執行妨害だのと因縁をつけて小金をむしりつつていく。一見すれば平穩そうな街にはなったが、後ろ盾のない女子供にとっては危険極まりない。

あのユージン・セブンスタークみたいに絡んだら面倒なことになる男だけが、他者に害されることなく至極真つ当に暮らしていける世の中だ。

クーデリアは初等教育の義務化によつて貧困をなくそうとしているらしいが、教師の頭数を揃えるためにと教員資格保持者を招致したせいで大量の木星系移民を抱え込み、おかげで無学な火星地元民はひどい就職難に見舞われている。

職場を追われた市民はクリュセ市警のせいで路上生活もままならず、スラムに逃げ込むしかない。

木星からは医師や看護師も招かれ、医療保険制度が整備されたおかげで新生児死亡率は激減。五歳未満の子供が下へ下へと足を引っ張っていた火星の平均死亡年齢は劇的につり上がった。

だが、それも娼婦が出産よりも中絶を選べるようになったただけだ。今の火星の就労状況では、五十二歳だった平均寿命まで食いつなぐのも難しい。

地球経済圏の植民地の次は、テイワズの属領になる日も遠くないかもしれない。

そうした現状に、勘のいいユージンならとつくに気付いているはずだ。

ただ、人形師の思惑通りにしか動けない傀儡政権のいち職員には何もできないだけで。

自分自身に実害が及ばないせいで被害者の視点に立てないだけで。

ライドはさきほどユージンが出て行ったドアに手をかけると、靴音もなく部屋を出た。

「せいぜい泳がせておきますよ」

すべてはラスタル様の手のひらの上ですから。——シニカルに微笑する。

共犯者が笑う。



廊下を横切り、赤いカーペットが埋め込まれた裏玄関までてくてくと歩いたライドだったが、たどり着いたロータリーにはトドだけがあった。

ユージンが送迎を断ったのだろう。この裏玄関は宮殿のように豪華なつくりで、派手好きなたドのお気に入りだが、シャンデリアもランプもすべて高級娼館だったころの名残だ。無駄に長いリムジンでもゆったり停車できるロータリーから黒塗りの高級車に乗り、クーデリアのオフィスに帰るのはなかなか気まずいものがある。

きつと露骨に嫌な顔をして踵を返し、質素な正面玄関のほうから出て行ったに違いない。あちらはごく一般的なオフィスの姿をしているから。

ガラスの自動扉を出れば、かわいい火星のにおいが濃くなる。

優雅に紫煙をくゆらせる運転手の向こうずねを、ライドはつま先で軽く蹴った。

「おい、トド」

「いってえな！　なんだ、ライドおめえ帰ってたのかよ」

「さっき戻ってきたとこだよ」とライドは気怠くため息をつく。

昨夜の暗殺任務を無事に済ませ、共同宇宙港へ方舟の隠し格納庫でひと眠りして、近所のジャンクフード店で昼飯を食ってからモンターク邸に戻ってきた。

いや、今はそんなことはいい。

「あんた、どんだけ上前はねてやがんだ？」

「ああん？　浪費癖の奥方様のために、この俺様が貯金してやってんじやねえか」

「……あの人、まだ金銭感覚どうにかなんねーのかよ」

人身売買にも相場というものがある。適切な対価を支払えばそれ

でいいところを、レディ・モンタークことアルミリア・ボードウインは、その『適切』がわからないらしい。

トド・ミルコネンが仲介に入って相手に渡る額面を操作し、相場よりにちよつと上くらいを保っていたら、人生三周は豪遊できそうな成金になってしまった。

「奥方は住んでる次元が違うんでな。俺にヤキがまわるほうが早かったぜ」

昔はふっかけてはちよろまかして小金を溜め込んでいたが、もはやそういう次元レベルではなくなってきた。

まだ十八歳とお若い奥方様の将来のためにと八割がた貯金にまわしてもなお手に余るほどだ。

「あーあ」とトドは大口を開けて煙を吐き出す。

小洒落たスリーピースを仕立てたところで、誰に見せるわけでもない。自己満足にもいい加減飽きてきた。

はじめは葉巻も吸ってみたが、うっかり潰すとひどい悪臭がするの  
で慣れた煙草に落ち着いた。

とくべつ安いわけではなく、かといって高級な部類でもない、ごく一般的な銘柄だ。贅沢をする目的で吸っていたころとは打って変わって、うまいと思う煙を吸いたくなった。

短くなった煙草を灰皿に押し付け、新しい一本をくわえると、ふと隣のライドが眉根を寄せた。

「……そのヤニ、火星のじゃねえな。木星圏テイワズ……いや、タントテンボ月のもんか？」

「火星のなんぎ吸ってられつかよ。あんなもん三箱も吸や廃人になっちまう」

お前も吸うなよ、ともごもご釘を刺して、ライターで火をつける。吸い込んで、ふうと吐き出す。やはりこいつが一番悪くない味わいだ。

「ご忠告ごーも。ってことで、あんたが一本くれるんだよな？」

にこりと快活に笑んで両手を差し出したライドは子供のようだが、すっかり狡猾な振る舞いを身につけた。

煙草とライター。

言外に貸してくれよと要求されて、トドは箱から出した一本きりの煙草を投げ寄越してやる。すると手品師のように指先二本でキャッチするから、気障ったらしいのはどちらだかわからない。ライドは昔から手先が器用だった。

「てんめえ、ほんつとかわいくねえなあ」

「宇宙ネズミがかわいかったことなんてなかったろ」

「それもそうだけどう」

借り物の火を点すと、ライドは振り向きもせずライターを突っ返す。

肺腑に紫煙を吸い込んで、そしてふうと緩慢に吐き出した。

今夜こそはベッドで眠ろうと思つてわざわざ戻ってきたのに、副団長の顔など見てしまつて気が立っているのかもしれない。帰る場所など用意してくれないくせに返せだなんて、まったく無責任なことを言つてくれる。

明日になればまた仕事だ。少年兵たちを束ねる立場であるからライドが参加するのは短期任務ばかりで、地球まで出向くような長期の作戦はエンビの隊に任せてある。

ヴァルキュリアフレームの発展型機〈グリームゲルデ・ヴァンプ〉三機を中心に、整備班や医療班を帯同させた実働1番組〈ハーティ小隊〉は目下、ラストル・エリオン公の〈ゲイレル・シャルフリヒター〉を持ち逃げした傭兵どもを殲滅するためSAUまで出張中で、戻ってくるまであと二週間ほどかかるだろう。

寝て起きたらライドは、海賊船から鹵獲したヒューマンデブリたちで構成された実働2番組〈ガルム小隊〉を引き連れ、アバランチコロニー周辺まで作戦に出る。

今は月と火星が最も近づく時期であるから往復十日あまり、ごく短期の作戦だ。

マクギリス・ファリドが遺したモンターク邸で寝起きし、ファリド家のガンダムフレームだったという〈ガンダム・アウナス〉がライドの搭乗機になった。

へマクギリス・フェアリド事件へを受けてフェアリド家がお取り潰しになったため、バラして売却されたところをモニターク商会が買い取ったのだという。

へガンダム・アウナスブランカへとして改修された白いMSに乗っている。

その装甲が七年前に見たへガンダム・バエルへに似ているような気がするのは、ライドの思い過ごしではないだろう。まず間違いなくあのお姫様の趣味だ。

彼女にバエルを買ってやりたくて、トドは貯金をはじめたという。

鉄華団のなくなった日常を漫然と永らえながら、ライドは見てくればかり大人になり、阿頼耶識使いたちを率いて復讐稼業で飯を食っている。

煙草はじりじりと短くなって、消すべきタイミングを目視で判断でききる。

命もそういうものなら簡単だったろうにと、アスファルトに落としした火種を踏みにじる。

誰が掃除すると思ってたんだ、と横から文句が飛んできたが、どうせトドではないだろう。



残念なニュースが左から右へと流れていく。

道中で拾ったタクシーに揺られながら、ユージンは本日何度目になるかわからないため息を落とした。車内に垂れ流しのカララジオによれば、どこぞの活動家が変わり果てた姿で発見されたらしいのだ。

監視カメラは何者かによってすり替えられており、犯人はいまだ捕まっていないという。

目撃されたMSは白く、肩には例のへ狼へのシンボル。

焼き殺されたというその男も、ユージンの与り知らぬところで誰か

の恨みを買っていたのだろう。

## 第二章 勝てば官軍、負ければ生け贄

### 002 ブランカ

ランドメイスを振り上げる。そして鋭く振り抜くさまは、まるで死神の鎌だ。

かつてはヘゲイレルの主兵装のひとつとしてギヤラルホルンに正式配備されていたという巨大ピッケルは、何とも悪趣味な姿をしている。ひと薙ぎで新たな首を刈り取ると、ライドはモニタにざっと視線を走らせた。

戦闘はひとまずここまでか。

人質にとった輸送用ランチ一機を除き、宙域に動けそうな敵影はもうない。迎撃に出てきたヘジルダのまがい物はみな頭部を潰され、あるいは吹き飛ばされて漂流している。

残骸の海からは、ランチのブリッジで怯えるコロニー労働者数名の聲が頼りなく寄せて返すのみだ。

スパークが弱々しく痙攣するばかりのM Sモビルスーツはいずれもヘキサフレームの粗悪品で、乗っていたのも明らかに兵士ではなかった。引き金に手をかけるのも初めてだったのだろう素人パイロットの射撃は何ともお粗末なもので、ちよつと避けてやるだけで破れかぶれになつて突進してきた。

勝手に焦ってくれたおかげで、呆気なく全滅。ライドたちの姿を捉えているのは、もはやアランチコロニー群の非常用センサーくらいのものだろう。

タントテンポの警戒網だけあって精度は折り紙付きだろうが、どうせ白ブランカに目を奪われて、引き連れている四機の番犬たちまでは見えていない。

ASW—G—58「ガンダム・アウナスブランカ」——右肩には盲目の狼、左肩には稲妻のシンボルをそれぞれ描いた白い悪魔。

その名が示す通りのカラーリングはカメラの露出計を狂わせ、暗色の輪郭をより曖昧にさせる。

釘付けにされたセンサーでは、ライドが従えている黒褐色のヘガラム・ロディン四機を正しく捕捉することは不可能だろう。アリアドネのクローンがエイハブ・ウェーブを観測していても、スペースデブリに遮られて不明瞭なまま見失<sup>ロスト</sup>う。

厄祭戦中に碎けたという月の破片が飽和するヘルーナ・ドロップでは、LCSによる通信も不確かだ。

「よくやった、ギリウム！ お前らヘガラム小隊は撤収の準備をしろ。予定ポイントで合流する」

『はいっ！』

ヘルメットの内蔵スピーカーごし、実に景気のいい返<sup>イエス・サー</sup>事が跳ね返ってきたと思えば、間髪開けずにヘガラム・ロディン3番機が人質にしていたランチをブーストハンマーでぶん殴った。

爆ぜるように飛散した破片の中には人影も混じっていて、……あの速度で吹っ飛ばせば、まず生きてはいないだろう。ノーマルスーツを着用していなかった脇の甘さが命取りになった。

コロニーで運用されている主要なランチは短距離輸送用のためかナノラミネートアーマーがなく、MSの戦いに巻き込まれた時点で生存率はゼロに等しい。

無惨に粉碎された小舟は、衝突防止灯を心細げにまたたかせると完全に沈黙した。

すると四機のヘガラム・ロディンがわっと獲物に群がり、ひしゃげた外装をひきはがしにかかる。今回のターゲットであるコンテナをもぎとると手早くワイヤーフックをひっかけ、視界の悪い岩場をすいすいくぐって撤収していく。

さすが元宇宙海賊のヒューマンデブリというべきか、実に手際がいい。

遠い目をしてヘガラム小隊を見送るライドは、いつも苦しいような悲しいような、やりきれない気持ちになった。

「お前らが全員十代前半のガキだって割れても、どうせ誰も信じねえんだらうな……」

いや、教育熱心な学校では、少年兵とは残虐で凶暴で、人を殺して

生きる害獣と教えているくらいだ。ヒューマンデブリとはそういう生き物なのかと、ただ納得されるだけかもしれない。

鉄華団も、きつとそうだった。何も知らない第三者の目には、物騒で野蛮な人食いネズミ、破壊と殺戮を繰り返すテロリストでしかなかったのだろう。

働き者の〈ガルム小队〉だって、ただ与えられた仕事をこなしているだけで海賊と見紛う。

ブリッジを破壊するのは、通信管制が生きている限りアリアドネからの半強制的な交信を受け、位置情報を提供し続けるせいだ。行き先を知られたくないなら航行機能そのものを物理的に停止させるしかない。

そうやって発信器を無効化すればアリアドネが睨みを利かせる正規航路に近づいても探知されずに済む。

同時に疑似重力発生装置も制御不能になるため、無重力に支配された船は弛緩しきった人体同様、慣性のまま漂流するしかなくなる。

システムの機能停止を皮切りに酸素はみるみる減っていく、あとは乗組員が全員窒息するまでの短くも長いカウントダウンだ。

周囲に外装作業用のMSが明らかに戦闘破壊された様相で転がっていれば、ギャラルホルンも警戒する。初期対応の遅れは致命傷となり、救助隊員の安全を守るため救いの手を差し伸べられない救助マニユアルによって死人の口は封じられる。

そうした対応の遅さを逆手に宇宙海賊がのさばり、正規航路をちよつと逸れただけでそこはもう無法地帯である。

ブリッジに銃口を突きつけて脅し、操縦士が不要になったらあつさり殺す……、海賊育ちの〈ガルム小队〉は掠奪のやり口をごく自然に身につけており、統率もよくとれている。任務遂行に迷いはなく、ミスもない。今回もうまく撤収してくれるだろう。

本作戦の目的は、とある積み荷の回収、そして運び屋の殲滅だ。

アバランチコロニーの農業プラントから輸送されるコンテナを強奪し、乗組員のIDを確認・焼却処分した上で、積み荷は火星のモントーク邸まで持ち帰る。



事前に提供された情報によれば労働者による『不当な持ち出し』という話だったから、コンテナの中身はどうせ武器か何かだろう。タンクトンポもまたテイワズ同様マフィアに近い実体を持っている。

送り先の手に渡っては都合の悪いものを壊したり、奪ったり——今のライドはそういう仕事をしている。ラスタル・エリオン公にとって不都合な存在を排除して回る、ある種の掃除夫だ。

戦闘を一通り終えれば沈黙したMSのコクピットを検分し、あるいはランチから跳ねとんだ死体の身元確認を行なう。生き残りがいれば殺害する。

IDの照合を終えたら火葬だ。

ビームによる焼却処分を行なうのである。

このガンダムフレームへアウナスは初代ファリドが厄祭戦を戦った機体で、元来ビーム兵器など搭載していなかった。七年前まではギヤラルホルン本部へヴィーンゴールヴの地下祭壇に奉られていたという骨董品だ。

へマクギリス・ファリド事件を受けてファリド家はお取り潰しとなり、ガンダムフレームは売却。パーツごとに競売にかけられたところをモンターク商会が買い集めて改修、そこにマクギリスが独自に保管していたM Aへハシユマルのビーム放射器を移植した。(伝説の英雄が乗っていたという三百年来のアンティークをバラして売る、という行為がいまいちライドには理解できなかったが、ギヤラルホルンにはそういう慣習があるらしい)

骨も残さず葬ることのできる熱線は生も死も等しく焼き尽くし、痕跡を残さない。今日ここで絶命した労働者たちも、行方不明扱いになるのだろう。

さすがにヘキサフレームも厄祭戦当時の機体なので、コクピットブロックはビームを通さず、イオフレームへ獅電のように電気系統をやられるといった醜態も晒さない。

おかげでハッチをこじあけて、パイロットを直接焼かなければならない。

せめて殺した相手への憎しみでもあれば、こんな胸の悪くなる仕事

も呑み込めたらうに……、こういうときほど強く思う。

曲がりなりにもライドは少年兵育ちであるし、死体など見慣れている。折れ曲がっていても、臓物をぶちまけていても、今さら動じることはない。

とはいえ処理する遺体はいつも戦士だったのだ。

遺体が家族のものであれば、仇は必ずとると誓って遺体袋のファスナーを閉じた。交戦した相手であれば、ギャラルホルンであれ海賊であれ、ヒューマンデブリであっても敵対した以上仕方がないと思えた。

だが、この任務中ライドたちが打ち砕いてきたコクピットの中身はすべて解放を求めただけの労働者で、機体はヘキサフレームの粗悪品。SAU正規軍が配備しているヘジルダ〈からフードを剥ぎ取ったような機体は、オセアニア連邦のコロニーあたりから流れてきたシロモノだろう。

メインモニタの真正面、アバランチコロニーを一瞥する。眉根が歪むのは、あのコロニーにはテイワズフレーム〈百里〉〈百練〉、ロディフレーム〈ラブルス〉のような堅牢な機体が複数存在を知っているからだ。

ヘキサフレームは頭部にコクピットを持ち、手足はひよろりとしている。頭をかばえるような長物でも持っていない限り急所はガラ空きである。

だからヘジルダ〈にはフードのようなコクピット防衛装甲が足されたのだろう。

もしもバケツ頭のヘラブルス〈で出撃していたなら、こんなにもあっさり刈り尽くされることはなかった。

(そこまで織り込み済みで、つかまされたのかよ)

不要になったヘキサフレームを、乗りこなせないMSを。いつか弓を引きそうだから、鏃<sup>やじり</sup>を丸め、弦をゆるめて、希望に見立てて差し出したのか。

胸糞悪い思考を打ち払うように、ライドは頭を振った。

今はとつと仕事を済ませて撤退するのが先決だ。月が近いだけ

に、いつアリアンロッドの本隊と鉢合わせるとも限らない。

監視カメラの前で機影を少なく見せかけたところで、ギャラルホルンは金持ちよろしくハーフビーク級戦艦を差し向け、物量で攻めてくる。

清濁併せ呑む賢君ラスタル・エリオン公のため、八年ばかり前に没した密偵ガラン・モッサの代わりを担ってやっているというのに。ギャラルホルンは味方ではないのだから、まったく嫌になる。

汚れ仕事を引き受けるライドら別働隊の存在がアリアンロッド本隊に知らされることはなく、新司令ジュリエッタ・ジュリス准将とは一切の連携を行わない。

見つければ当然のごとく武力介入を受け、問答無用で殲滅されるのだろう。〈レギンレイズ〉によるド派手な物量戦はギャラルホルン最強最大の艦隊〈月外縁軌道統合艦隊〉の真骨頂だ。

諜報、暗殺、いらなくなった艦船や人材の廃棄、——そういうギャラルホルンが表立ってこなせない仕事は『依頼』の顔をしてモニターク商会に降ってくる。

数ある任務に私怨による復讐を紛れ込ませてやれば、あのラスタル様の思惑だなんて誰も考えやしない。

(……結局おれたち宇宙ネズミは、弾避けとして便利に使われるだけだ)

需要と供給の天秤がつりあう限り、そこには善も悪もない。

コクーンの前に敢えて姿を見せると、ライドはため息のようにバーニアをふかした。カメラの視線が集まる気配を感じて、これみよがしに踵を返す。

〈ガンダム・アウナスブランカ〉が阿頼耶識システムに対応していないのは、パイロットが宇宙ネズミではないというアピールのためだ。警戒用カメラの管理者たちは、学もないガキがまさかMSを操縦できるだなんて思っちゃいない。

火葬される死体を直視して嘔吐できたところが懐かしい。

あのころはまだ今よりマシな人間だった気がする。

▼  
モニターク商會が保有する少年傭兵部隊〈マーナガラム隊〉。それがライドの今の居場所だ。

総指揮官のライドを頂点に、エンビを中心とした実働1番組〈ハーティ小隊〉。ギリアムを隊長とする実働2番組〈ガラム小隊〉。彼ら二隊を作戦の要に据え、5番組までの連隊となっている。

構成員は、そのほとんどが海賊船や民兵の組織から保護した若いヒューマンデブリたちだ。

二年前、ギャラルホルンと火星連合の間で取り交わされた〈ヒューマンデブリ廃止条約〉は、彼らの居場所を根こそぎ奪い取っていった。

条約の制限を直接受ける各民間企業——警備会社、傭兵斡旋所——はしらみつぶしにアリアンロッドの抜き打ち監査を受けた。差し押さえられたヒューマンデブリたちは、その場で銃殺刑に処されたという。

逃げ出そうとしたヒューマンデブリばかりか、ここを処刑場にされては困ると願い出た社員まで処分され、デブリ狩りがはじまったという噂はまたたく間に全宇宙を駆け巡った。

社員の生活を守るため、関連企業はこぞって生け贄を差し出した。

このまま殺されるのは可哀想だ、どうか生き延びてくれと願いをこめて宇宙へ放流した会社もあったという。そんなことをすれば限られた酸素を奪い合い、蠱毒のように殺し合って窒息、全滅……という最悪の結末にたどり着くことは目に見えていたろうに。

一連の争乱の渦中で、放り出されたIDは本人に還元されることなく宙に浮いた。

奴隷のレットテルを貼られた子供たちは、人間に戻る機会を永遠に失ってしまったのだ。

とはいえギャラルホルンだって、正規航路の外は海賊が跋扈する危険区域でなくては都合が悪い。でなくば輸送船や客船がみかじめ料

を支払わなくなってしまうからだ。逆らうことなくヒューマンデブリを差し出した宇宙海賊は必要悪として看過され、今後とも圏外圏の治安を維持するため、非正規航路に迷い込む艦船を襲う。

鉄華団残党が戦闘職に就けなくなったのも、民兵の弱体化——ひいては海賊の保護——を狙った政策の一環だろう。

ギャラルホルンに通行料を払って安全な正規航路に行くか。護衛を雇って危険な非正規航路を抜けるか。惑星間航行を行ないたいなら選択はふたつにひとつ。どちらにせよまとまった金がいるが、安全は金で買える。

吝嗇<sup>ケチ</sup>な貧乏人が消息を絶つても「自業自得」だという風潮は、実にあっさりと完成した。



作戦開始から十二日目。

予定通りのランデブーポイントで〈ガルム小隊〉のランチと落ちあい、無事に共同宇宙港〈方舟〉まで戻ってきた。

民間輸送船がまばらに停泊する棧橋のそばに古い格納庫があつて、そこがライドたちのねぐらだ。

軍民とりまぜて発着する船着き場からはちやうど死角になっており、実は上下水道が生きていることすら誰にも知られていないという。

従業員にも認知されていない格納庫はしんと静かで、いつも薄暗い。

着艦を確認するとライドはコクピットを出て、おもむろにヘルメットを取った。癖の強い赤毛がやっと開放されて、汗の粒がきらきらと重たいグレーの闇に散る。

ギャラルホルンの一般兵と同じ仕様のパイロットスーツは、背中が少し窮屈だ。

喉元のファスナーに手をかけたところでドリンクボトルが飛んできて、片手でキャッチした。

「よう」と一言、整備士のカズマがふわりと飛んでくる。

チヨコレートドリンクを投げて寄越した張本人・カズマは、このモーターク商会の少年傭兵部隊〈マーナガルム隊〉で二十代に達しているふたりのうちの片割れだ。

ゆるくカールのかかった黒髪が特徴的で、無重力にふわふわ揺れる天然パーマのせいで緊張感のない風体ではあるが、整備の腕は抜群にいい。

背中に阿頼耶識がなくとも今のライドには気のおけない戦友である。

「任務お疲れさん。ブランカのご機嫌はどうだった？」

「今回のセッティングは特によかつたぜ。ビームの出力も安定してる」

「だろ？ やっぱ話のわかるパイロットはいいよなア」

整備のし甲斐がある、と白い歯を覗かせたカズマは、鉄華団壊滅後にカツサパファクトリーに就職し、三ヶ月と持たずに離職した前歴がある。

おやっさんの愛称で親しまれるナデイ・雪之丞・カツサパが興した工場ではMモビルワーカーWモビルスーツだけでなくMモビルスーツSの修理・整備も請け負うが、仕事はすべて依頼された通りにしか行えない決まりだ。

不完全な整備のせいでパイロットに死なれるのは後味が悪いからといって支払われた対価以上の便宜を図ってはいけない。整備費用をケチるのならばしようがない。

経理のスペシャリストである才媛メリビット・ステープルトンが会社経営の中心にいる限り、ただの便利屋に成り下がるような真似は厳しく取り締まられる。

見積もりを出し、リスクやデメリットも説明して、双方が合意した上で発注された仕事だ。親切心による契約外労働は、後の禍根となりかねない。

機械いじりが趣味で生き甲斐、余暇は食事と睡眠その他生理的欲求

ぶんだけあればいい——というカズマには馴染みかねる職場だった。鉄華団の同期でもあるザックとも折り合いが悪くて退職、今は〈マーナガルム隊〉専属のメカニックとして、この格納庫に常駐している。

「おれがいない間、何か変わったことは？」

「なーんにも！　いつも通り平和だよ、宇宙も地上もね」

カズマは肩をすくめて、ため息をついてみせた。

本当に何も無いのだ。クリュセ市警が組織されて以来、たいていのことが金銭授受でもみ消せるようになってしまったので、事件も事故も起こりようがない。

昔はテレビもラジオも〈革命の乙女〉クーデリア・藍那・バーンス・ティン嬢の話題で持ちきりで、地球経済圏の圧制に苦しむ火星植民地域がいかにも独立を求めているかを十五分単位で繰り返し繰り返し報じていたものだったというのに。

火星連合が発足してからはティワズ系企業のCMが増え、ニュース番組は縮小。教育系のバラエティ番組が読み書きくらいできて当たり前、テストの出来が悪いと親や先生に見捨てられてしまうかも——といった新常識をふりまいている。

連合政府は発足当初から識字率の底上げ、および就学率の向上によって惑星規模の貧困から脱却したいという方針であったから、方向性そのものに変更はない。バーンス・ティン議長閣下の念願かなってクリュセにおける退学率は限りなくゼロになった。

毎朝の『きょうの天気』のバックグラウンドには、うきうきと登校する学童たちの姿がリアルタイムで使われている。

「相変わらずか……」

ライドは独り言ち、眼下に臨む愛機の白さに目を細めつつ甘いドリンクを飲み干した。

ダストシユートに向かって投げ放つと、センサーが察知して蓋を開ける。空になったボトルは狙い澄ましたようにゴミ箱に吸い込まれていった。

「このあとギリアムを連れて地上に降りようと思ってる。荷物の段取

りは、カズマ、お前に任せてもいいか？」

「よしきた任せろ。へGNトレーディングへ名義、へモニター商会宛てでいいんだよな」

「そう聞いている。……悪いな、ブランカの整備を急がせちまう」

いくつかあるダミー名義のひとつを使って、強奪してきた貨物を地上に降ろすのだ。同時にへガンダム・アウナスブランカもコンテナごとモニター邸に届けなくてはならない。

こんな辺鄙な場所でフェアリド家のガンダムフレームがほぼ完全体で見つかれば、ギャラルホルンから疑いの目が向いてしまう。強制査察などされたらヒューマンデブリの全滅は免れないので、帰還のたびアルミリアの膝元まで持ち帰る必要がある。

いつもはカズマが整備を終えるまでここで待ち、貨物コンテナとしてモニター邸まで戻るのが、今日は一般のシャトルを使って先に降りるつもりだ。

「いーよいーよ。夕方の便でベンとチャーリーが帰ってくるからついでだ」

「助かる。そういやへハーティ小隊も今日帰還か」

SAUでの作戦は無事に完遂したのかと、無意識が安堵のため息を漏らす。へグリムゲルデ・ヴァンプへ2号機、コールサインはベンジャミン。同じく3号機、コールサインはチャールズ。

1号機を駆るエンビは引き続き諜報任務のためアブラウへ渡っておりしばらく戻らないが、ヒルメとトロウ、帯同していた整備班・医療班はへグリムゲルデ・ヴァンプへ二機とともに火星に帰ってくる。夕方の便ということは、五く六時間もすれば到着するだろう。

ヴァルキュリアフレームもまた一般企業が所有していること自体が不自然なシロモノなので、カズマのチェックが済み次第モニター邸に送られる。

ここに残るのはへガラム・ロディへをはじめとする汎用機だけだ。「ってか、なんでまたギリアムを？ 取り巻きひっpegすの面倒だろう」

特にあの3番機の……とカズマが口角をひきつらせる。



宇宙海賊から買い取られてきたヒューマンデブリで構成された  
マーナガルム実働2番組〈ガルム小隊〉はギリアム、フェイ、エヴァ  
ン、ハルという四人のMSパイロットを中心とした編成で、子供なが  
ら腕が立つ。メンバーはみなライドによく懐いているし、カズマにも  
敬意を払ってくれるのだが、何とも言えない近寄りがたさがあった。

中でも〈ガルム・ロデイ〉3番機を駆るエヴァンは隊長ギリアムと  
一卵性双生児にあたり、どこへいくときもべったりなのだ。

いつもなら苦笑を浮かべるところだが、今のライドにはそうできな  
い理由があった。

「……なんだか嫌な予感がするんだ」

## 003 地獄の番犬

整備士のカズマに雑事を任せ、ライドが向かったのは「ガラム小隊」の面々が暮らす格納庫だった。

元ヒューマンデブリという境遇もあってか、みなMSモビルスーツデッキ付近を根城にし、地上のモニター邸には降りようとしなない。

脚の不自由な仲間がいるのも無重力環境に依存する理由のひとつだろう。MSパイロット四人を中心に構成された「ガラム小隊」には十歳から十四歳までの隊員があわせて二十名ほど属しているが、オペレーターやメカニックたちもこのネバーランドを存外気に入ってしまったっているらしい。

しんと静まり、非常灯が頼りなく点るばかりの暗がりに踏み込めば、白いノーマルスーツの子犬たちが見つめている息づかいがそこかしこから感じられる。

警戒心が強いので、きつかけを作ってやらないと姿を見せない。

「お手柄だったな！ お前らみんな、よくやってくれたよ」

ライドは肩に提げていた鞆を掲げてみせて、なるだけ全員に向けて呼びかけた。

がま口バッグの中身は弁当だ。機体やキャットウォークの陰に隠れた闇の中で子供たちの表情がパアツと輝いたのが伝わり、笑いさざめく声も聞こえてきたが、食べ物よりも褒められたことが嬉しいのだろう。

応じるように奥から隊長のギリアムが現れ、ふわりとライドの前に着地した。靴裏の磁石が器用に床をつかまえる。

左右に半歩遅れるように、そっくり同じ顔をした弟のエヴァン、腹心のフェイ。両翼同士はあまり仲がよくないようなのだが、ギリアムの前ではそんなそぶりなど微塵も見せないのだから、統率力は見事なものだ。

弱冠十三歳のリーダーは大きな緑色の目でじいっとライドを見上げ、指示を待つ。

人種のせいか生育環境のせいなのか、小柄で実年齢より幼く見え

る。

「よう、ギリウム。お前らもみんなお疲れさん。弁当を持ってきたから、あったかいうちに配ってやってくれ」

「はいっ！」

「スープは熱いから火傷に気をつけてな」

「はい、ありがとうございます」

いつもは食事などレーションバーが一本ずつあれば充分だという顔をしているくせに、手渡されるのは誇らしいらしい。薄暗闇でもグリーンアイズが心なしかきらきら輝いているのがよくわかる。

ギリウムは小隊を代表してバッグを授与されると、そばに控えていたフェイへと受け渡した。

「全員に行き渡ってるか確認するの忘れるなよ」と釘を刺す横顔はリーダーのそれだ。

糸目のフェイはひとつうなずき返すと、機敏に踵を返す。最年長かつ最長身、強面の少年が隊長の右腕として従っているのがギリウムの箔ハクになっているのだろう。

左腕——エヴァンほうは隊長に追従するというより、兄貴のあとをちよろちよろ追いかけているドツペルゲンガーだ。こいつこそがカズマが示唆した『取り巻き』の最たる例で、MSを降りた瞬間からギリウムのそばを離れない。

ペしよりと垂れ下がる黒髪をふたつ両手でかきまぜて、ライドは苦く微笑した。

責任感の強い兄貴と甘えん坊の弟。性格はまったく正反対なのに、首をすくめるしぐさはやはり双子だ。

「悪いけど、ちよつと兄貴を貸してくれな」



“宇宙で生まれて、宇宙で散ることを畏れない、誇り高き選ばれた

やつら。”

鉄華団団長オルガ・イツカはかつてヒューマンデブリをそのように表現したのだと語ったのは、酒に酔ったダンテだった。

デルマもそのことを懐かしんでいたから、おそらく真実なのだろう。その場に居合わせなかったライドには、それ以上の仔細はわからない。

IDを握られ、ヒューマンデブリに身を落としたとき、人間<sup>ヒト</sup>として一度死んだことになるのかもしれない。それも新たな誕生として、団長は鉄華団に受け入れた。

過酷な環境を生き延びるため、海賊に命じられるまま略奪に加担してきたことも。オルガ・イツカは何ひとつ否定しなかった。同情もしなかった。過去は変わらない、それでも。

ただ「よく頑張ったな」と尊重してみせた。

ライドがやったのは彼の真似事で、ライド自身、ただ上辺をなぞっただけだと実感している。

それなのにヒューマンデブリたちはまっすぐな目でライドを慕い、ついてきてくれる。希望者全員に偽造IDと学校への編入を斡旋するという道も示されたが、八割近くが〈マーナガルド隊〉への所属を選んだ。

仕事をしたい。おれは戦える。戦力として、おれたちは役に立つ。

——汚泥の中に生きること慣れきった彼らは、自身の安全よりも、澱の中でも泳げることを武器に戦おうとした。

それは今も変わらない。彼らには、経験豊富な殺人人形としての矜持があるようなのだ。いつそ清々しいほど自然に、ヒューマンデブリという運命を受け入れている。

〈マーナガルド隊〉が暮らす格納庫に迷い込んでくるような輩がいれば速やかに射殺し、証拠を隠滅する——という、警備体制を自主的に築き上げたのも彼らだった。海賊船で生きてきた子供たちの秩序に基づき、侵入者は水際で排斥される。

何とも物騒な警戒網ではあるが、おかげでモニターク商会の安寧は細々と守られている。

モビルスーツ

M S デツキに引きこもりの番犬たちは、もう食事を終えたころだろうか。

共同宇宙港へ方舟から地上まで一時間弱。優先的にシャトルのタラップに導かれたライドは、瀟洒なスリーピースのスーツ姿で伸びをした。

茹だったアスファルトに落ちるシルエットはまだ昼間だろうにスラリとタイトで、……いくら見栄えがよくとも着用感はひたすら窮屈だ。日ごろからこんな気障つたらしい衣装を好むトド・ミルコネンの気が知れない。

クリュセ郊外にある発着場を行き交うのは大半が移民か労働者で、地球圏の空港と違って観光客や留学生のたぐいは滅多にいない。

こういう土地柄だからこそスーツが何かと便利なのはライドとて承知だ。

ライドに続いてアスファルトを踏むギリアムも、良家の子女風の違いでたちにしてきた。サスペンダーで吊った膝上丈の半ズボン、ソックスガーター。童顔もあいまって十歳いくばくのお坊ちゃんに見える。(風呂に入れてヒューマンデブリ共通のノーマルスーツから着替えさせただけで、印象はがらりと変えられるものらしい)

おかげでタクシーはすぐに捕まった。

いかにも金持ちそうな格好は、支払い能力があるかどうかの指標になる。クリュセ市警も絡んだら面倒なことになりそうだと見ればまづ絡んでこないし、タクシー運転手だって首は惜しい。

財力と権力をちらつかせて歩くほど安全だなんて、まったく嫌な世の中になった。

「付き合わせちまって悪いな」とライドはかたわらの少年に短く詫びを入れる。

ギリアムは「いえ、」と首を振った。

「仲間がどうしてるかは、おれも気になってたし。選んでもらえてうれしいです」

礼儀正しい口調ではにかむ、ギリアムがこうして年長者に敬意を払

うからへマーナガルム隊のヒューマンデブリたちがうまくまとまっている部分もあるのだろう。

隊長の振る舞いは、そのまま各小隊の性質として反映される。

主に暗殺任務を先導するへハーテイ小隊は元鉄華団年少組の中でも頭のまわるエンビを隊長に据えており、餓狼めいた性質を持っているが、〈ガルム小隊〉はその名の通り番犬<sup>ガルム</sup>らしい。

仲間の前ではリーダー然と指揮を執るギリウムも根っここのところは人懐こい子供で、正反対な双子も案外よく似ているのかもしれない。

やがてタクシーの車窓から見えてきた目的地は、小高い丘の上に立つ寄宿学校だ。戦い続けることを選ばなかった元ヒューマンデブリの少年たち十名あまりが学んでいる。

火星連合発足以来アドモス商会は公営企業となり、運営されていた孤児院や小学校は公立校ともども生徒や保護者の個人情報で連合政府に筒抜けになった。連合立、クリュセ市立などなど学校が乱立、ストリートチルドレンや児童労働者が一掃されるレベルで就学率は劇的な向上を見せている。

結果、これまでならスラムでのたれ死んでいた子供が生き残るようになり、さらなる教室が入り用になり、木星圏から教師が招致され、彼ら木星移民の子女らが通う学校も必要になり――、クリュセは数十もの小中学校がひしめきあう学問の街になった。

教育と移民が切り離せないこともあり、連合政府は個人情報の厳密な管理を強いられている。

おかげで、行政機関に対して一定の秘密が保持できる学校は片手の数ほどしかなく、各学校同士のつながりから情報が漏れないとも限らず、背後にライドたちの存在があると察知されなかったための編入先選びは骨が折れた。(クーデリアたちに見つかればエンビたち元年少組も、ギリウムたち元ヒューマンデブリも十把一絡げに学校へ押し込められ、普通の子供になるよう矯正されてしまう)

保護した少年たちの身の安全、個人情報管理体制、施設の充実な

ど多方面から絞り込み、ようやく白羽の矢が立ったのが、この寄宿制私立校だ。

ライドがここを訪れるのは三ヶ月ぶりほどで、ギリアムは戦友の見送りから数えて二度目になる。

タクシーは豪華なゲートの前で減速すると、うやうやしく停車した。

天に突き上げるような格子扉はいかにも高い授業料をとっていなうな凝った建築様式で、この向こう側には学校関係者しか入れない。

脇のインターフォンから呼びかければ、警備員ではなくカソツク姿の事務員がいそいそ出てくる。

「ようこそ、いらっしやいました。我が校の見学をご希望でございませるか？」

丁寧な歓迎はアットホームな印象を与える。柔らかな笑みを浮かべる彼女はしかし、何度訪問してもなぜだかライドのことを覚えていない。

「ええ。弟の編入先にと考えてまして」と、いつもの受け答えをしたライドの言葉は、前回までは真実だった。

戦いをやめて学校に行くこと決めた弟分たちを連れ、ライドは何度もここへ来た。いつも同じ職員が出迎えた。十回近く同じことを繰り返したはずだが、職員はいつも、まるで初対面かのように学校について説明しはじめた。

はじめは前回について言及もしたが、勘違い呼ばわりされるのが腑に落ちなくて五度目の訪問あたりでやめてしまった。

この女が盲目なのか、あるいは相貌失認かとも疑ったが、教職員同士がすれ違って挨拶をかわすさまを見るに、そういうわけでもなさそうだ。

マニュアルを読み上げるような解説を聞き流しながら、絵画やオブジェの飾られた廊下を進む。

どのクラスも扉は開けっ放しで、授業中でもないのに廊下に出てくる児童の姿はない。いつも不思議に思うが、私服校なのになぜだかみんなアンティークめいた制服姿だ。

教室をきよろりと一瞥したとき、ふと見覚えのある顔を見つけた。やはり色褪せた制服を着て、大人しく席についている。

ギリアムの視線も同じ面影に注がれているようだ。間違いないだろう。

「ちよつとすみません」と職員を呼び止める。

「はい、なにか?」

「ここには弟の友達が通ってるんですが……ほら、あの子です。挨拶しても?」

「ええ、もちろん!」

「よかったなカマル。感動の再会だ」

「ありがとう、兄さん! すぐ戻るから」

「いいさ。ゆつくりおしゃべりしてこいよ」

臨機応変な義弟がぱたぱた駆けていき、……事務員は微笑ましそうに見守っている。

にこにこ穏やかな笑みには、何の含みも感じられない。

やんちゃ盛りりの年ごろだろうに校内は喧騒とはほど遠い。富裕層の令嬢令息というのはこうも礼儀正しく物静かなもののだろうか。鉄華団年少組の騒がしきとは似ても似つかない様相で、エンビたちが過去通っていた公立校ともえらい違いだ。

館内の気温は暑くもなく寒くもない適温、本棚には貴重な紙の本まですずらり。こうも整備された教育環境ならば、金銭感覚のトチ狂ったアルミリアでなくとも、馬鹿高い学費を払って通わせたい親はいるだろう。

(しかし、どこも教室あたりの人数がやけに多いな……なのに空席ひとつ見あたらねえ)

アドモス商会の学校では一クラスあたり二〜三十人程度のはずだが、ぎつと六十人は詰め込まれている。さすがに過密すぎやしないか。

ギリアムが駆け寄った長机だって、ぎつしり横並びに座る想定で設計されたものではないだろう。教室という場所では本来どれくらいの間隔をあけて着席するものなのか、ライドは知らないが、書き物を



させるつもりがあるなら肩と肩がぶつかるほど詰めさせたりはしないはずだ。

教室前方には指導用スクリーンがあり、かたわらの掲示板らしきパネルには時間割が示されている：Language Arts、Basic Algebra、Social Studies。

その下には宿題らしき作文のトピックが書かれていて……、やはりここも同じだったかと無表情の仮面をかぶる。

(……嫌な予感が当たったか)

内心で苛烈に舌打ちする。先の任務で強奪したコンテナの中身は、やはり武器ではなかったのだろう。

「カマルー」と偽名で呼び寄せた弟の顔が取り繕うこともできないほどの寂寞に歪んでいて、すべてが確信に変わった。

帰りのタクシーの中でもギリウムは終始浮かない顔をしていた。

隠しきれない落胆を連れ、トドの運転するリムジンに乗り換えてからモニター邸へと戻る。

窮屈なネクタイをようやくゆるめたライドは、借りてきた猫のように神妙にしているギリウムに「どうだった」と、つとめて事務的に問うた。

半ズボンの上で拳がぎゅううと白くなる。悔しそうにくちびるが歪む。

「別人みたいに落ち着いてた。変わっちゃったどころじゃなかった」

ぎりりと奥歯が噛みしめられて、ずっとまとっていた寂しそうな空気がざわりと変質した。

運転席のトドがバックミラーごしにぎよっと目を剥く。

ずっと抑えていたのだろう『怒り』の発露だ。

「……あなたの予想通りだった……!!」

かすれた慟哭、いまだ甲高いままの声が苛烈にふるえる。

ライドは痛ましげに「そうか」とだけ、静かに応じた。

海賊船からモニターク商会に買い取られた子供たちは、うち二割ほどがヒューマンデブリであることをやめ、偽造された新IDで学校に通うと決断した。

彼らの選択を尊重し、アルミリアは筆記用具を買いそろえ、衣服を仕立ててポストンバッグいっぱいを持たせてやった。

新たな人生に踏み出していく仲間たちの門出に幸あれと、みんなで見送った。

なのに、いざ再会してみれば色褪せた制服を着せられていた。制服校ではないのに、アルミリアが用意した私服が着られないほど成長したわけでもないのに。それだけじゃない。

ギリアムのことを誰も覚えていなかったのだ。

よくない予感は見事的中し、職員は盲目でも相貌失認でもなかった。やけに物静かな生徒がぎちぎちに詰め込まれた教室、異様な出席率の高さ、不自然な忘却。

すべて辻褃が合う。

「あいつら、おれの仲間を薬漬けにしていやがったんだっ」

ライドが口をつぐんだ真相を吐き出して、八つ当たりの拳が白い膝小僧を打ち付ける。

ほんの数ヶ月前までともに戦っていた仲間たちが、みんなニコニコ笑って虚ろな目をして、初対面のカマル・マジリフを見つめていたのだ。

偽名だ、気付いてくれ、思い出してくれ——なんて、責任感の強いギリアムにはとても言えなかったのだろう。堅牢な理性は、こういうとき足枷になる。

「ちくしょうっ……おれがひきとめてれば、こんなことには——！」

「よせ、ギリアム。あいつらは戦わない道を選んだんだ」

人間の屑より薬物中毒になったほうがマシだなんて、彼らが思ったわけではないだろうが、それでも。

「……嫌なことを頼んで悪かった」

「いいんです。おれじゃなきゃ、もっとだめだった」

「できることならお前にもやらせたくなかったんだよ」

海賊船から保護されてたった数日の付き合いしかないライドのこ  
となど覚えていなくて当然で、だからこそ彼らの状態を確認するには  
顔なじみを連れてくる必要があった。だから人望の厚いギリアムを  
同伴した。

もしも他に確認手段があったなら、呂律の回らなくなった仲間との  
再会などさせたくはなかった。

戦うことも死ぬこともなく平穩に生きていくはずだった同胞は、あ  
ずかり知らぬ場所で薬物に侵され、大人に都合良く作り替えられて、  
教室という名の収容所で『子供』という名の人形に成り下がっていた。  
ギリアムのこと本当にわからなかったのだろう。いっそ不自然  
なほどにさっぱり忘れて「はじめまして」と舌足らずに握手を求めて  
きたという。

変わり果てた仲間を目の当たりにして、ギリアムは『学校』という  
空間に嫌悪を覚えたに違いない。

かつてのエンビたちがたどった地獄の下り坂だ。

アイデンティティの屠殺場から逃げ出したところで、行く宛てなん  
てどこにもない。

同じ道を歩ませてしまった罪悪感を、ライドは今後抱えていくの  
だろう。



トドの運転でモニターク邸へと戻ればロータリーにメイドが待ち  
受けていた。

リムジンが車寄せに滑り込むや否や、絶妙なタイミングでドアを開  
ける。丁寧な手つきにうながされるまま降り立つ裏玄関は、相も変わ  
らず掃除が行き届いて輝かしい。

そしてライドが顔をあげれば、ロビーの奥から現れたのは館の女主  
人・アルミリア・ボードウインだ。

いつ来客があっても迅速に対応できるようにか、それとも愛する夫のためか、いつ見ても実に身綺麗な女である。

「おかえりなさいー!」

どこかほつとした顔で出迎えられ、そういえば任務で十二日ばかり火星を離れていたことをライドはずいぶんと遅馳せに思い出した。終始能動的に動いているので、待っていた側の時間感覚には疎い。

「どうも。作戦はどれもうまくいってますよ」

「何よりです。あの子たちも、今日はここへ帰ってきてくれるかしら?」

ちらりとアルミリアがうかがったのは、番犬よろしくライドのそばに控えるギリウムだ。

邸内にも保護した少年たちを匿っているアルミリアは迂闊にここを離れるわけにはいかないし、共同宇宙港へ方舟の格納庫まで出向けるのもガンダムフレームとヴァルクリアフレームあわせて四機が揃うタイミングに限られる。

〈マーナガルム隊〉全員にあたたかい食事とふかふかのベッドを提供したいというアルミリアの申し出は、いまだ通ったためしがない。

やはりギリウムはくちびるを引き結んだまま何もこたえようとしていない。……今日の一件でアルミリアに疑念を抱いてしまったかと懸念したが、そういうわけではなさそうだ。

ライドは見守るように眺を下げると「どうでしょうね」と前置きした。

〈ガルム小隊〉の仲間の中には重力に適應できないメンバーがいるから、上陸要請を受けてもギリウムは決して首を縦には振れないのだろう。

2番機のパイロットを含め、戦闘や手術の後遺症を抱えるヒューマンドェブリは少ない。彼らは地上どころか重力ブロックに出るだけでたちまちバランスを崩して起き上がれなくなってしまふ。非力な子供同士で支え合って生きていくには、1Gの鎖は重すぎる。

「今日の夕方には〈ハーティ小隊〉が帰還する予定です。——ギリウム、お前の仲間を連れてこいっておれから伝えてもいいか?」

呼びかけてやれば、緑色の目がぱちくりとライドをふりあおぐ。

「ヒルメとトロウが戻ってくるんだ。あいつらなら車いすも手配できるし、子供ガキの十人や二十人連れてたつて不自然じゃねえよ」

ギリアムの仲間は東洋系の混血児が多く、赤毛のライドがひとりで引率すれば一体どういつながりかど勘ぐられてしまうが、あのふたりならその心配もいらないだろう。人種が共通していれば無用な衆目を集めることもない。

「ハートイ小隊」も元鉄華団年少組だけあつて弟分には基本的に親切だ。同じ少年兵同士、家族のようなものだと思つている。

エンビ、ヒルメ、トロウの三人は文字や戦術を教える練兵教官の役目も担つており、「ガルム小隊」のメンバーにとつては「ハートイ小隊」の全員がそれぞれ見知つた兄貴分にあたる。

ほつとしたようにギリアムの表情が明るくなり、ライドとアルミアを交互に見上げるとミツシヨンレコーダーにするように宣言した。

「ガルム小隊」は上陸要請に応じます」

「ほんとう？ では、みんなで夕食を」

「いや、まだ全員降りてくるつて決まつたわけじゃねえつすよ」

「ハートイ小隊」からはあちらで休みたがる隊員が出るだろう。「ガルム小隊」だつて、どうしても動けそうにない仲間がいれば腹心のフェイが護衛となる戦力とともに格納庫に残る。

ギリアムが小隊という単位で上の要請に応じる体裁をとつたのは、作戦に必要な人数だけ見繕つて連れてくる、という意味だ。

「今はそれで構わないわ。いつかみんなと一緒に降りてきてくれる、きつかけを作れたら」

朗らかに微笑したアルミアは胸の前で両手のひらを合わせ、指をぎゆうと組み合わせた。

彼女が感謝や感動を抱きしめるときにのしぐさであるらしい。

モンターク商会のうら若き女社長は弱冠十八歳とまだ若く、きつと家族と囲む食卓が恋しいのだろう。

七年前——いや、それよりも前に失われてしまった団欒を取り戻したくて、保護した少年たちみんなに何不自由ない暮らしを与えようと

する。食事もベッドもすべて自分と同じ質まで引き上げてしまおうとする。

ただ、アルミリアは自身と同じ年ごろの少年兵には接しかねているところがあり、複雑そうに青く澄んだひとみを伏せた。

SAUでの傭兵殲滅作戦を終えて火星に戻ってくるヒルメヤトロウに、何か思うところがあるのだろうか。

白磁のような頬に、長い睫毛の陰影が落ちる。

「……彼らは、憎んでいるでしょうか？ 命を切り売りするような仕事ばかり斡旋するわたしを」

「まさか。切って売れるものがあるのって、しあわせなことですよ」危険な任務に従事するのが嫌だなんて文句を今さら言い出す連中ではない。みな物心ついたころから生きるか死ぬかの日常を生き残ってきたサバイバーだ。

アルミリアに打ち明けるのは気が引けるが、ギリアムだって薬漬けにされるより戦い続けるほうがずっといいと暗に吐露した。

ライドたちも同じように思ったから、傭兵業を続けている。

たとえばラスタル・エリオンの道具として便利に使われようとMモビルスーツSを手放さずにいられるのはありがたい。

戦場の勘を失うことはおそろしいし、無力化されたあとのことなど想像したくもない。

「おれらの意思を尊重した仕事をくれる。対価まで支払ってくれる。これ以上何を望むっていうんです？」

「命を懸けてくれたあなたたちに報いるには、少なすぎるわ」

「ガキを雇って、給料まで払いたがる変わり者なんて、今の火星じゃあんたくらいですけどね」

トドが大幅に上前をはねて中抜きをしてなお有り余る報酬を払っておいてこの態度とは。

世間知らずもここまできると清々しい。

地球圏ではどうか知らないが、現状の火星における『子供』とは無邪気で愛くるしく、学校と勉強が大好きで、大人の言うことをよく聞くべき存在だ。

戦いたいなんて物騒なことを考えてはいけない。だって少年兵とは残忍で凶暴で、破壊と殺戮を繰り返すテロリストなのだから———そのように教えられる。

薬物で侵してまで刷り込まれ、信じさせられる。

今から七年前、戦いを生業にした名もなき犯罪者集団がへマクギリス・ファリド事件の陰で滅んだ。

鉄華団はいたって普通の民間警備会社で、特筆すべきは平均年齢の低さ、運営のクリーンさくらいのものであった。急成長企業は反感を買いやすいからと地元の雇用には積極的に貢献し、孤児院への寄付も惜しまなかった。近場でテロが起これば自発的に消火活動・避難誘導・交通整理に駆けつけ、実質上の治安維持につとめた。

火星の英雄とまで謳われた社会的信頼を食いつぶさないように、尽力していた。

ところがニュース番組で『マクギリス・ファリド元准将の指示のもと、破壊と虐殺を繰り返す犯罪集団』と報じられたら、誰も彼もがあたりと手のひらを返した。

アナウンサーの言葉というのはそれほどまでに信頼できるものらしい。逆賊マクギリス・ファリドはひどい悪人で、それに従う鉄華団も悪者なので、アリアンロッドが治安維持活動を行い、ラスタル・エリオンの威光のもとに肅正した———というプロパガンダがそのまま世界の『真実』になった。

もう誰も、オルガ・イツカの名を覚えてはいないだろう。

〈悪魔を討ち取った凛々しき女騎士〉ジュリエッタ・ジュリスが一体何を討ち取ったのかも、誰も気にとめていやしない。

民衆はみんな、過去をちよつと通り過ぎた名前なんてきれいさっぱり忘れてしまう。

かつて貧困の連鎖の中でしか生きられない火星の少年兵問題を憂いた〈革命の乙女〉クーデリア・藍那・バーンスタインも、全市民を守らねばならない立場になって迂闊なことは言えなくなった。

幸福を願うためには金がいるのだ。経済基盤をテイワズに、軍事力

をギャラルホルンに頼っている現状において、クーデリアが『火星の人々をしあわせにする』ための手段は傀儡政権に甘んじることだろう。ギャラルホルン火星支部撤退以降、アリアンロッドに頭を下げ続けなければ火星圏の安全は保証されなくなってしまった。

幸か不幸か生き延びた鉄華団残党は二度と戦闘職に就くことなく、少年兵であったという過去の汚点をひた隠し、阿頼耶識システムなど知らぬ存ぜぬを貫き通して、偽造された新IDに感謝と自責を抱きながら慎ましやかに生きていくことを推奨される。

圏外圏の海賊を野放しにするために、腕の立つ傭兵は都合が悪いからだ。非正規航路を抜けようとすれば海賊に襲われる、でも正規航路の通行料は高すぎて支払えない——そんな世界を今後百年、二百年と維持し続けることで火星人は生きていくことを特赦される。

モンターク商會がアルミリアによって引き継がれ、女社長が鉄華団残党やヒューマンデブリを積極的に雇用しようだなんて考えなければ、居場所を失ったライドたちは今もまだ、火星のスラムを失意のままさまよっていただろう。

故郷を人質にとられたクーデリアのために。どこにもたどり着けないまま。

「おれたちが魂まで売り渡さなくて済んだのは、全部お姫さんのおかげです。ネズミもデブリも同じ人間みたいに扱うことの難しさは、おれたちみんな身にしみてる。憎むだなんてとんでもない」

「特別なことは、何もしていないはずなのよ」

「いいじゃないですか。人徳があるってことで」

苦笑して、ライドは会話を打ち切るように一步を踏み出す。

緩慢な足取りで私室のある棟へ歩を進めれば、ギリアムが従うように後を追った。

アルミリアはただ、戦士たちの背中を見送るしかできない。祈りのかたちに握った両手が無力にふるえる。

いつもそうだ、こわばるアルミリアの指先はいつも、無事に帰ってきてほしい願うだけで精一杯だった。父ガルスも兄ガエリオも、マクギリスも、ライドたちも。みんな戦いの仔細をアルミリアには明かし



たがらない。

手を伸ばせば届く距離が、気が遠くなるほど遠いのだ。

ライドは多くを語らず、邸内に招いた〈マーナガラム隊〉のメンバーから不満の声があがったことは一度もない。

復讐に手を貸すと約束しておいて、諜報や暗殺といった汚れ仕事を幹旋し、それどころか、大切な家族の仇であるラスタル・エリオン公の手先として働かせているというのに。

恨まれたほうがずっとよかった。

こんな仕事をさせられるなんて理不尽だと弾劾してほしかった。

愛した人を殺した組織の〈法〉と〈秩序〉をアルミアが敢えてなぞってみせるのは、間違っていると否定してほしいからだ。

圧倒的軍事力で世界を恐怖させ、屈服させて支配するエリオン公のやり方は悲しみの連鎖を生み続けるだけだと。

ともに叫び、ともに抗ってほしかった。

なのに、どうして受け入れてしまうの。——アルミアはいつも、その問いを投げかけられずに繊細かほそい声を震わせる。

「あなたたちを人間ひととして対等に扱おうとしない、この世界は、あなたたちにとって憎むべき敵ではないの……？」

背中にぶつかった少女の嘆きは正気ゆえの矛盾をいくつも内包して、ライドが歩みを止める理由に足りない。

人を殺してはいけないなんて、そんなの知らなかった。

だってそうだろう、物心つくより前からエンビの周囲では人死にが耐えなかった。

花街で働く母親たちは赤ん坊の世話にかまける暇などないし、泣けば仕事の邪魔だと口を封じられる。

生まれた子供は半数ほどが一年以内に死んだ。五歳まで生き残るのは一握りだ。

双子の弟・エルガーとともにCGSに出稼ぎに出されたときだつて、部屋の隅にはヒゲをつける作業に失敗した残りかすが山と積まれていた。

さあおれも適合手術に臨むというとき、いきなり「同じ顔しやがつて紛らわしい」と頬を張られた。

吹っ飛ばされたエンビは側頭部を派手に擦りむき、エルガーが血を怖がつてわんわん泣くものだから、参番組の年長者が絆創膏と帽子をくれたのだ。

地味な赤色のニット帽は今さっき死んだ誰かがかぶってきたものらしく、エンビには少し大きかった。

背中に阿頼耶識のピアスを植えつけ、参番組に配属されても宇宙ネズミの仕事は弾避けだ。マシンガンを持たされ前線に整列する。

荒事のため、仲間があつさり減っていった。参番組には麻酔も消毒液もまともに与えられず、遺体袋がもつたないからいつぱいになるまで詰め込むように指示された。

何もなくても一軍の大人たちは気晴らしに子供を殴って、気まぐれに死なせた。

そんな育ち方をしたから、学校で「人を殺すのは犯罪です！」と声高に叫ぶ担任教師への不信感ばかり募ってしまう。

(誰だって大なり小なり、誰かを犠牲にして暮らしてるってのにな)  
ふうと細くため息をつく。スラムで一等陽当たりのいい広場で煙草をくわえて、エンビはぼんやりと空をあおいだ。

屋根や庇ひさしでいびつな四角形に切り取られたスカイブルー、天気がいい。昼下がりの陽気がぽかぽかと降り注ぐ、平穏。風はなく、砂嵐の心配もない。

クリュセは相も変わらず平和なのに、エンビは学校を抜け出しては蜘蛛の巣状の迷路をくぐってスラムに逃げ込み、風通しの悪い貧民街でただじつと夜を待った。

火事でもないのに煙を吸いこむ趣味はないので、煙草に火をつけたことはない。

というのに、ズカズカ近づいてきたヒルメに取り上げられて、砂埃の溜まった軒下のバケツに放り込まれてしまった。

「なんだよ」と恨みがましく睨みつけると、ヒルメは仕方なさそうにため息を落とした。

「あんまりサボると中学卒業できなくなるぞ。お前、出席ギリギリなんだって?」

「担任がうざすぎて不登校なんだよ」  
「宿題は?」

「全部出したし中間期末もA+。これなら副団長たちも文句はねーだろ」

「……優等生インテリめ」

「だって、今期のテーマまた『少年兵』だぜ? 自分が食つてくために入殺すヤツはクソ、飢えて死んどけって書いたらあの女、大喜びで満点つけやがった」

エンビのクラスを担当している若い女教師は、例によって木屋からの移民で、正義感が強く、ギャラルホルン様が大好きなのだ。

なんでも少女時代にテロに巻き込まれてとつても怖い思いをしたから、少年兵のいない優しい世界を作りたいらしい。

火星連合政府は発足後五年以内の識字率九〇%達成を公約に掲げ、学校施設の新規建造を急ぎ、教職員の募集を行った。教員免許所持者

を惑星外から大量に誘致した結果、教育現場は意識の高い移民による啓蒙の場となっている。

ことあるごと戦争をトピックとして扱い、少年兵とは残忍で凶暴で、人々のしあわせを壊す害獣なのだと言いつつ繰り返して聞かせてくるのだ。

貧困は自業自得。少年兵はテロリスト。生きるために人を殺すなんて人間のやることではない——、そんな因果関係をまるっと無視した与太話を延々と聞かされ続けるのだから、現役少年兵も学んでいる公立校の退学率は当然高い。ドロップアウト・レート（夜間部に限らず、父親の借金や病気の弟妹を抱えて警備会社で働く学生は決して少数ではない）

教室から逃げ出したって行く場所はなく、市街地へ出ればクリュセ市警に目をつけられる。CGSの一軍で見たような警官どもは警棒で武装しているし、学生寮にも同様の警備員が常駐していて問答無用で強制送還。

職場側も十六歳未満を学校に通わせていない現場を押さええられたら罰金、営業停止といった制裁が下る。

耐えかねた学生がIDを売り払う『ヒューマンデブリ墮ち』は後を絶たない。

就学率は思うようにあがらないまま、裕福な移民が通う私立校と貧乏な火星人が通う公立校の格差ばかり開いていく。

ついにヒューマンデブリ制度そのものの撤廃が連合議会にて賛成多数で可決され、四大経済圏もそれを支持。火星連合とギャラルホルンの間でヒューマンデブリ廃止条約が締結されることが決定し、調印式が来週にまで迫った今、学生の『駆け込みデブリ』が相次ぐ始末だ。本格的に禁止される前に稼ぎきりたい売人たちも便乗しているのだろう。

教師は出席率回復に躍起になって、少年兵の危険性をよりさらに強く訴える。

ヒューマンデブリになんかなるんじゃないと学生を引き止めたい言葉は上滑り、自己否定に疲れきった現役少年兵たちは、そんなに危険なら出て行ってやるよと虚ろな目をして消えていく。

今の公立校は、小中高問わずそんな感じだ。

スラムに身をひそめているのも、おそらくエンビたちだけではない。

地元底辺公立校の制服姿、成長期も半ばを過ぎた体格では換金できるリソースも内臓くらいのもので、予防接種の習慣がなかった火星人は健康体である確率が低い。

変な病気を持っているかもしれない男子学生など襲撃してもリスクばかりでうまみが少ないため、今はスラムが一番安全なのだ。

「なあ、おれ、すげー頑張ってるだろ」と落ち込んだ声は頼りない。色濃い疲労がにじむ横顔には、ヒルメも心が痛む。

「……悪いけど、その担任からお前を連れ戻してほしいって頼まれて来た」

「ご苦労さん。ワタシの教室に空席ができちゃうって泣きつかれたんだろ？ 今期に入ってもう四人も『デブリ墮ち』したからな」

「せっかく成績いいんだから出席日数不足で留年させたくないって言ってたよ」

「ははっ。モノは言いようだ」

吐き捨てるように笑い飛ばして、エンビは両手のひらで顔を覆った。

ニット帽を目許まで引き下げて、握る。くちびるを噛む。ヒルメ相手に毒を吐きたいわけではないのに、煙草でもくわえていないと余計なことばかり言ってしまう。

学校でのエンビは快活で文武両道に秀で、宿題もちゃんとやってくる貴重な優等生だ。制服を着崩すこともないし、煙草を吸うなんてありえない。騒ぎを起こしたことだってない。

少年兵は生まれながらのテロリストだと被害者面する担任の望む通りに作文だつて書いてみせた。

「おれは、いつまで——どこまでおれでいられるかな」

「エンビ……」

「名前が変わって、エルガーとも兄弟じゃなくなって、もうおれに家族はいない」

鉄華団が失われて早五年。

基地を爆破し、団員は全滅したと見せかけてアークブラウへ亡命、生まれ変わったIDには疑似の家族が紐づけられた。

人種や民族、性別に見合ったフルネーム、出身地、家族構成が人数ぶん捏造されたのだ。迂闊に目立たないためには『普通』になる必要があり、両親とは死別した事になっている。

独立した火星に、地球圏や木星圏から移住してきた。

白紙に戻ったIDで、みんな新しい人生をやり直している。

命だけでも助かってよかったという声は少なくなかったし、やつとまともな経歴が手に入ったと安堵する声も聞かれる。反応はそれぞれだ。

ただ、鉄華団は家族なのだと本気で信じていたエンビたちは、そんなもの単なる比喻表現だったと承知していた幹部世代の価値観についていけない。

『本当の居場所』だって実在すると思っていた。いつかはたどりつけると信じていた。だけどそんなものはどこにもなくて、鉄華団残党は『家族』だと言いつつも聞かされながらも、血のつながった家族とは明らかに違う扱いを受ける。

幼いころはあんなに憧れた『学校』も『勉強』も、蓋を開けてみれば胸糞悪い自己否定の連続でしかない。

それだって、勝手に見ていた夢から覚めて、自分勝手に絶望しているだけだ。

「結局おれは誰なんだ？ 別人なのか、それともおれ自身の亡霊か」

「もうよせ、エンビ」

あまり思い詰めるな——と、空虚な慰めを呑み込んだヒルメの沈黙を通り越して、次の瞬間、飛来した物体がエンビの横つ面をぶん殴った。

勢いよくすっ飛んできたボールのような何かが直撃し、頭蓋が揺れる。わずかな弾力、跳ね返った丸い包みをとっさに受け止めれば、どうやらオニギリらしい。

地面に落とさなくてよかった——ではない。

「……ッ トロウてめえ！」

「腹減ってるとよくないほうに考えちまうだろ。授業はともかく、給食までサボるなよな」

メシにしようぜ、と言い聞かせるように笑ってみせる。

昼休みのヒルメがなぜかエンビのクラスの担任から呼び出されていたことからいろいろ察し、配給所で昼食を分けてもらって追いかけたのだ。

トロウだつて学校に閉じ込められているより、同じ世界を生きてきた同胞と一緒にいるほうが落ち着く。（東洋系ならソウルフードだろうとオニギリを渡されたが、火星人にコメを食べる習慣なんかない）構わず包みを剥ぎ、率先してかじりついたオニギリの具はライムだ。人気のアボカドは競うように売り切れるので、先着順で勝ち取らないとまず食べられない。

配給所で出されるオニギリの具はライム、アボカド、塩（という名の具なし）、それから合成肉で四択だ。

エンビに投げつけたオニギリにだけ合成肉が入っている。

仕方なさそうに開封されるのはなかなか不本意だが、喧嘩がしたくて追ってきたわけじゃない。

「来週のデブリ廃止条約、あれも教科書に載んのかな」と独り言ちる。「載るだろうな。そんで社会科のテストに出る」

「だよなー……連合もルール増やすペース配分考えてくれりやいいのに。締結とか改正とか施工とか一年に何回やりや気が済むんだよ」

公立校は文字が読めても文章までは理解できない生徒が多い。識字能力も覚束ないのにもあれもこれもとルールが増えるわ変わるわけで、これでは暗記が追いつかない。

成績は低迷し、移民の子女らが通う私立校との学力差はどんどん開いていく。

こんなことも知らないのかと叱責する熱心な教師はだいたい移民で、火星人に対して『木星圏では常識だ！』『地球圏では通用しないぞ！』と憤る無意味さにも気付いていないらしい。

一般常識とやらが全宇宙の全人類に周知済みとでも思っていそう

な勢いだ。

「例の『人を殺すのは犯罪』ってルールはテストに出さねえくせにさ」もぐもぐと行儀悪く取り落としたトロウの愚痴に、ヒルメも「そうだな」と目を伏せた。

過去さんさん仲間を使い捨てられてきたので、殺人は『罪』にあたる、というルールは地球圏特有のものだと思っていたが、歴史を紐解けば厄祭戦勃発以前どころかもっとずっと昔、火星人一世が地球から移住してきたころにはもうあったというのだからばかばかしい。

嘆息をひとつ吐き出したエンビがシニカルに笑い飛ばす。

「ネズミ駆除は今でも適用外<sup>ノーカーン</sup>だろ？ 獣を殺しても殺人にはならないからな」

なんとたつて宇宙ネズミは人ではない。獣だ。だからCGSで一軍が参番組のガキを殴り殺しても『殺人』にはあたらないし、犯罪ではない。ギャラルホルンがやってきて民兵をさんざん殺しまくっても『治安維持』なので罪には問われない。

殺人には貴賤があるのだ。

この世界の法と秩序は『正しい虐殺』なら取り締まらない。

エンビたちが生まれて生きてきた世界は、物心つくよりずっと前からそういうルールでできていた。

鉄華団が発足したおかげで生身の拳に殴りつけられることはなくなったものの、ギャラルホルンやら海賊やら、営業妨害がしたくてたまらない大人たちが次から次へとよってたかって襲ってきた。

民間のいち警備会社として、鉄華団は依頼もない戦闘は極力避ける方針だったのだが、襲撃を受けては基地防衛戦を強いられた。

いつか『真つ当な仕事だけでやっていく』未来にたどり着けてたとしても自衛的戦力が必要になることは明白で、それならおれにも戦う力が欲しい、みんなを守りたいんだと、団員は次々<sup>モビルスーツ</sup>M Sパイロットに志願した。

最終的に、鉄華団はギャラルホルンの情報統制で『破壊と虐殺を繰り返した悪者』だったことにされ、いつの間にか降服勧告に応じなかったことにされて一方的に殲滅、やっぱり『名もなき犯罪集団』だっ



たことにされて終わった。

どうせへハシユマル」とかいいうM<sup>モビルアーマー</sup>Aの罪状を丸ごとおつかぶせられたか何かだろう。

多少時系列は前後するが、確かにあの巨鳥は採掘場を襲ったし、農業プラントを焼いたし、鉄華団がテイワズに管理を任されていたハーフメタル採掘現場で発見された。

正義のギャラルホルン様はまさか民間企業の私有地に勝手に入ったりしないし、厄災を目覚めさせたりなんか当然しない。MAの起動因子にあたるMSで近付くなんてありえない。(実際に起動させたのはアリアンロッド所属のMS部隊、指揮官機はパーソナルカラーのヘレギンレイズ)だったというが、行動が馬鹿すぎて無学な火星人になりつめたほうが辻褄が合ってしまう)

しかも当該戦闘地域はクリュセ郊外。アープブラウ領だ。

ギャラルホルンは当時、経済圏なり地元政府なりから要請がなければ部隊を動員することはできないルールのもと運営されていたが、MA騒動のときにはクリュセ行政府、アープブラウ代表、テイワズからも事後承諾を得た。

そのときの認可をスライドしたのだろう。

それでもアープブラウが首を縦に振らなかった違法兵器へダインスレイヴの使用だけは報道規制がかかった。

冤罪。陰謀。情報操作。遠い世界のニュースなんてどうとでも創作できるのだから、何をどうしたってギャラルホルンの大義は揺らがない。

当時のアリアンロッド艦隊総司令ラスタル・エリオン公は前々からギャラルホルンの腐敗を憂いていて、組織を浄化して世界を平和にしたかった超有能な政治家なのだ。

そんな素晴らしい人格者が密偵を使ってアープブラウの元首を暗殺させただなんて言いがかりで、証拠もないのに濡れ衣を着せようとした青年将校どもは嘘つきな逆賊として断罪された。

アープブラウとSAUが戦争をしたのは、両経済圏が軍隊を持ったからだということになっていた。(なんでも、自衛的戦力を保有したら

自動的に戦争が起こるらしい)

逆賊マクギリス・ファリドは死んだ。

ギャラルホルンの膿は除かれた。

名もなき犯罪集団は滅んだ。

平和を乱す宇宙ネズミは駆除された。

そしてラスタル・エリオン公が改革を行なった今の世界は、こんなにも平和でうつくしい。

「ギャラルホルンが正しくて、おれたちは間違ってた。少年兵は生まれついでテロリストで、存在が迷惑で、死ぬべきなのに死なずに生きてる邪魔な獣だ。どんな殺し方されたって自業自得なんだよ。抗ったら『治安を乱した』罪が上乘せされる。生きれば生きるほど罪が重くなる。無抵抗で死ぬべきなんだ。生まれる前に殺されるはずだったのに、勝手に生まれて、まだ生きて、」

「やめろ、エンビ。もういいだろ」

「なんでだよ？ だって、そう書いた作文にA+がついたんだぜ。少年兵問題に心を痛めておられるバーンスタイン議長様もさぞお喜びになるでしょうってな！」

「昔のクーデリア先生が読んだらむしろ落ち込みそうな内容なのに、変わっちゃまったよなあ」

「トロウ!! お前も煽るな」

「べつに煽ってねーよ！ 前にライドが似たようなこと言って、副団長に殴られたのを見ちまったんだ」

とつとつと吐露したトロウは、いやトロウだけでなく年少組の多くは『鉄華団は家族だ』なんて寝言を今なお本気で信じているのだ。ライドを筆頭に、エンビもヒルメもそのひとりだ。

ところが学校では、少年兵は生まれついでテロリストで、罪を償って駆除されねばならない害獣なのだと教えられる。

それなら最期まで居場所を作ろうとしてくれた鉄華団団長オルガ・イツカは、彼が見せてくれた夢も希望もすべて、無駄なあがきだった

たつてことなのか。

『本当の居場所』なんて、やっぱり実在しないのか。

大人に使い捨てられない生活を目指して仕事を続け、実績を積み、社会的信用と経済的基盤を作っていくはずだった。

金と立場が手に入ったら、血なまぐさい依頼は受けられないという選択肢も手に入る。いつか真つ当な仕事だけでやっていく未来を夢見て仕事をこなし、営業妨害は撃退し、敵味方に多くの犠牲者を出した。それはそんなに悪いことだったのか。

無抵抗で殺されなかったことは、そんなにも重い罪だったのか？

——そうした不安を、エンビたちはみな心の傷として抱えている。

数ある疑念をユージン相手にぶつけたライドが、右のグーでブン殴られた。

——お嬢だつて一生懸命やってんだ!! 終わったことをいつまでも引きずつてねえで、立場つてモンを弁えやがれ!

「クーデリア先生が一生懸命やってるとか、んなことわかってるし。ライドだつてべつに人柄まで疑ったわけじゃねーだろうに、副団長がすげー勢いで怒つたんだよ」

トロウが語つた事のあらまはぎつくりとしていたが、要はユージンがクーデリアを慮つてライドを殴つた、ということだ。

鉄華団残党はクーデリアのもとで平穩に暮らすユージン・セブンスタークから『穏健派』、ライドを筆頭にオルガ・イツカを信奉する『強硬派』に分裂しており、その溝は埋めようもなく深い。

今は三日月・オーガスの実子である暁の存在によつて膠着状態が保たれているが、均衡はわずかなきっかけで崩れ去るだろう。

ただでさえ現状に辟易しているエンビは露骨に嫌な顔をした。

「マジかよ……………なに、あのふたりつてデキてんの?」

連合議長と側近の立場だろう、ユージンがなぜそうも感情的に擁護したのか理解に苦しむ。

実はいい仲でした、なんて噂を立てられ〈革命の乙女〉が守り続け

てきた処女性に傷でもついたら事ではないか。

「それはさすがに勘繰りすぎじゃないか。クーデリア先生はアトラと結婚したはずだろ」

「でも、それって暁を引き取るためだよな？ 副団長をキープするくらい好きにすればいいんじゃないの？」

「木星圏ならな。火星はハーレム認めてないから、二股かけたら不倫ってことになるんだよ」

「あー、そういやそんなルールもできてたんだっけか……」

木星圏は男ひとりが複数の女を囲う婚姻制度だが、火星ではモノガミー一対一のみ。両親が揃っていて実子がいない家庭に限り、収入に応じて最大五人まで里子を迎えることが可能だ。結婚はあくまで子供を育てるためのシステムとして再整備された。

親が二名いれば同性同士でも構わないが、血のつながった子供がいる場合、規定の経済水準を満たしていない場合、犯罪歴がある場合などなどいくつかのケースで里親としての資格は無効となる。

配偶者以外と関係を結んだことも失効条件のひとつだ。(……というところまではとりあえず暗記しておかないとテストに出る)

社会科の成績について言い合うヒルメとトロウを横目に、エンビは手元のオニギリをもてあそぶ。

指先がぎりりと食い込む。

「暁は三日月さんが作った子供だ。それを捨てて副団長をとつたらいいよおれら強硬派を抑えておけなくなるくらい、あの人にわからないわけがない」

暁・オーガス・ミクスタ・バースタインは、その名の通り三日月・オーガスとアトラ・ミクスタの間で作られた子で、ID上は戦災遺児ということになっている。

五年前に両親と死別してアドモス商会の乳児院に保護され、のちにバースタイン連合議長が里親として預かった——という筋書きである。

名実共に三日月の実子である暁を手元に置くことでクーデリアはエリオン公を牽制し、鉄華団残党の象徴的立場に収まった。

万が一にもクーデリアに実子が生まれたら、里子の養育権は剥奪。不適格と認定された里親からは離され、孤児院に戻される運びになる。

鉄華団を引き継いだつもりでいるらしいクーデリアには、どうあっても避けたい事態だろう。彼女なら〈錦の御旗〉を手放すリスク、年少組が抱える疑念や復讐心についても重々承知しているはず。

叶う限り多くの市民の安全を保障し、幸福を実現しようとしている。クーデリアだって連合議長の立場でできる仕事はやっているのだ。

エンビたちが運悪く『最大多数をしあわせにする方法』からあぶれて、割りを食ってしまったっただけで。

(……それじゃあ、副団長は?)

もしもユージン・セブンスタークが『残党の解放』を企てているなら。クーデリアを孕ませることで里親の資格を奪うことも、あるいは。

(いや、副団長は穏健派側だ。強硬派の側には手を焼いてる、だからライドを殴った)

諦めて、エンビは頭を振った。ため息が重たく落ちる。

教師とともに医師や看護師が大量に移民してきた今のクリユセでは、中絶手術に医療保険が利く。両者合意で作った子供以外はとっとと墮ろしてしまえるようになったのだ、解放の手段として現実的ではない。

そもそも、IDを改竄してしあわせになる権利を得たというのに、まだ済んだ過去をひきずってじたばたしている強硬派は、火星連合にとっても鉄華団残党にとっても目障りな存在なのだ。

大人と肩を並べて働こうなんて考えず、従順で聞き分けのいい子供に撤していれば仲間を失うこともなかった。散り散りになってでも武器を捨て、魂を売り払って、食事と寝床を安定的に提供してくれる大人の靴を舐めればよかった。

それこそが正しい道だったのだと、元副団長ユージン・セブンス  
タークはその身をもって証明している。

穏健派の父である副団長様が、汚い手段を使つても主人を裏切り、胸糞悪い日常から解放してくれるかも……なんて下水を煮詰めた  
ような期待を寄せてしまうほど、エンビは疲弊していたらしい。

クーデリアが学校教育の充実なんか掲げたせいで教室という檻に  
押し込められ、自己否定に晒されているのだ。

なのに鉄華団壊滅時にそれなりの年齢に達していた団員はアドモ  
ス商会やらカツサパファクトリーやらに就職して旧名で呼び合つて  
いる。

タイミングよく『大人』側に逃げ切った幹部組が、『子供』の年齢を  
脱しきれない年少組を切り捨てやがった格好だ。

たとえそんなつもりはなかったとしても、これからの火星で生きて  
いくには学歴が必要不可欠なのだとしても。副団長は憎まれ役を  
買っているだけなのだとしても。

理性でわかつていたってやりきれない。少年兵は無抵抗で死んで  
こそ大義と教える学校教育（笑）に叩きのめされて、みんな疲れきつ  
ている。

アトラが無事出産したときだつて、あかちゃんつてどうやって作る  
んだ——？ という疑問でしばらくざわついた。

手段だけならガキでも知っているが、赤ん坊なんて、やらかしたら  
デキてしまう、腫れ物のようなものだと思っていた。

欲しい、作る、産む、といったアトラの発想とは、まるで結びつか  
ない。

ほどなくクリュセに医療保険制度が整備され、作られた子供しか生  
まれてこないようになった。

望まれて生まれてきて、愛されて育てられていく子供たちはしあわ  
せになれる。運悪く親と死別してしまっても里親制度のおかげで軌  
道修正が利く。

作られなかった同胞たちは、生まれてくる前に無抵抗のまま殺され  
ていく。

生来のテロリストは水際で排除され、世界は平和になる。

いつそ、反乱を起こすのも悪くないかもしれない。

そうしたら今度こそアリアンロッドが残党狩りに乗り出してくるだろう。ユージンがライド以下強硬派を売るか、クーデリアが残党全員まとめて切り捨てるか、火星もろとも滅ぶか、移民はどうするのか——という、テイワズも巻き込んだ泥沼の大戦争ができるかもしれない。

少年兵が生まれついての犯罪者なら、そのくらい、望んだって。

「——いつそ、」

「エンビ。……だめだ、もうそれ以上言うな」

ついにヒルメの静止が鋭く刺さって、エンビは口をつぐんだ。

ヒルメだって同じことを考えていたから物騒なことを口走る寸前で止めることができたのだろうか。

背にしていた路地の奥からも、同意のため息が追加される。

「そうだぞ、エンビ。そのへんにしとけよ」

赤いストールの人影がひだまりに踏み出して、特徴的な赤毛が揺れる。

明らかにになった髪色は、火星では珍しい色合いだ。宥めるように

「お疲れさん」と眉尻を落とし、同胞をねぎらう。

「ライド……………」

「頭のまわるガキは嫌われるぜ」

「学校ではちゃんとバカのふりしてる」

「そうやってバカを見下してたらそのうちボロが出んだよ優等生。無理すんな」

緑色の双眸を気遣うように細める。

オレンジがかった髪色も、主に日照時間が短い環境で発現する色彩だそうで、改竄されたライドのIDは火星出身ですらない。

地球に比べて大気の層が薄い火星においても、惑星間巡航船、あるいは高級娯館といった、窓がなく赤毛が生まれやすい環境は存在す

る。

いずれも芳しい経歴ではないし、希少であるということは足がつきやすいということだ。

ライドの身体的特徴がありふれている場所としてアープラウ北部、アンカレッジよりさらに北の片田舎の出身ということにされてしまった。

亡命していたアープラウから火星に戻るより先に『故郷』を下見に行ったせいでライドは学校に入るタイミングを逃し、アドモス商会関連企業でインターン生扱いになっている。

人生の辻褃合わせのために定期的な帰省を強いられることもあり、学校への収監を免れた唯一の例外だった。

うまく『大人』の側につけたのだから就職組と一緒に逃げ切つて、しあわせに暮らしたつてよかつたらうに。

ライドはみずから強硬派のリーダーとして、大人になれない子供の側に残っている。

エンビはようやく舌鋒をおさめ、口実としてオニギリをかじった。「いい子だ」とライドは碧眼を眇める。

そして、背後の路地に向かって声を張った。

「——誰が聞いてるかわからねえからな？」

四対の眼光が鋭く研がれ、警戒心が一斉に、近づく気配に向けられる。

いくばくかの膠着。

呼びかけに応じるように路地から現れたのは、わずかな護衛を引き連れた白髪の少女だった。

頭髪とは異なる質感の長い髪は、仮面とひとつづきのかつらだらう。

「女……？」とトロウが取りこぼす。

護衛は両脇にメイドがたったのふたり。

女三人だけでスラムに入ってくるだなんて危険すぎる。ここは身



ぎれいな女なら若くなくとも襲撃されるような掃き溜めだ。裕福な移民と見るや問答無用で引き裂いてやりたくなるやつだつて潜んでいる。

臆することなく華奢なヒールが進み出て、少女の声で微笑んだ。

「ごきげんよう、鉄華団のみなさん」

さらりと風が凧ぐように、清涼な声音を空間すべてが受け入れる。

スラムの濁った空気が遠慮して去っていったかの錯覚に、ライドは思わず面喰らった。

「わたしはへモンターク——と名乗れば伝わると、夫の右腕から聞いております。あなたがたはこの仮面に見覚えがあるはずだとも」

「……悪いがさつぱり心当たりがねえ」

「それも結構。それはそうと、わたし、ここから抜け出したいと思ってるの。護衛を探しているのだけど——」

ごく自然なしぐさで指先が持ち上がり、右手の手袋が引き抜かれる。細い手首、白魚の手と桜貝の爪があらわになり、握手を求めるかたちで差し出された。

「引き受けてくださらない？」

晒された白い手指と、視線を釘付けにする高貴な魅力。ライドの背後でも、警戒とは異なる緊張感に、三者三様に息を呑む気配がある。

ここからわたしが帰る場所まで、わたしを守って、連れて行って。

額面通りの言葉の裏には闘志が見え隠れして、野心とは似て非なる、何か鮮烈な光を感じさせる。小柄な少女を見下ろしているはずが、まるでシヨーケースの中の宝石でも鑑賞させられているような心地だ。

ともに戦ってほしい。——雄弁な双眸はスカイブルー、言葉もなしに訴えてくる。

しかし握手に応じることなく、ライドはひらり、両手のひらを開いて見せた。

「いいんですか？ 変な伝染病ヒョーキを持つてるかもしれないですよ」

「まあ。そのご病気をいただいて、へヴィーンゴールヴに差し上げるのもすてきだわ」

にっこりと微笑んだ少女に、ぎよつと目を剥いたのは背後のエンビだ。

「……バイオテロでもやるつもりかよ……」

絶句するヒルメと、想像してしまったのかトロウが腕の鳥肌をさする。

レデイ・モンタークはただ穏やかに、柔和に、笑みを絶やさない。

……覚悟は充分伝わった。

「いいぜ、おれらはあるたの話に乗ってやる」

「交渉成立ですわね、ライドさん」

「そこまで知ってるんなら話は早えや」

奪い取るように手を握っても、繊細な指先は怖じることなく丁寧な握手にしようとする。見かけによらず、なかなか肝の据わったお姫様だ。メイドだけ連れて治安の悪いスラムに出向き、護衛を現地調達してみせる度胸も。

取り交わした握手に白い両手をそつと添え、仮面の奥から宝石のような双眸でライドを見上げる。

「わたしは旧セブンスターズの一員ガルス・ボードウインの娘、アルミリア・ボードウイン」

少女の微笑はケースの中にしまわれて、復讐者がついに仮面を取り払う。

「逆賊マクギリス・ファリドの妻です」

その日、ライドたちの前に姿を現した狼フェンリルの花嫁は、やっと帰り道を見つけた迷子のようなだった。

復讐者らの結託から五日後、アーブラウの蒔苗記念講堂にてへヒューマンデブリ廃止条約が締結。

さらに数日後、クリュセのとあるホテルにてノブリス・ゴルドン氏が遺体で発見されたというニュースが世間をわずかばかり騒がせた

が、世界は滞りなく平和である。

### 第三章 猿でもできる聖者の行進

#### 004 レプリゼンタティブ

〃No<sup>軍</sup> More<sup>備</sup> Soldiers!<sup>撤</sup>〃

プラカードを掲げた人々が寄り集まり、声を上げている。拡声器から主張が響く。

そして、エドモントン市街を埋め尽くすほどの民衆が賛同する。

Get<sup>防</sup> Rid<sup>衛</sup> of<sup>軍</sup> the<sup>を</sup> Defence<sup>撤</sup> Forces!<sup>廃</sup>

〃  
行進する人々は口々に叫ぶ。

アーブラウには軍事力など不要であると。

『守るための軍隊など欺瞞です！ 防衛軍さえ発足しなければ、八年前の悲劇はなかった!!』



ひきたてのコーヒー豆はとてもいい香りがする。

コーヒーミルで渦を巻く芳香を「果物みたい」と評したタカキに、その豆は果実を加工したものなのだと教えてくれたのは蒔苗前代表だった。

もう五年ほど昔の話だ。

任期を円満に終えた蒔苗・東護ノ介前アーブラウ代表は、その晩年、ヒューマンデブリ問題の周知につとめた。

地球経済圏には、遠く離れた異星についての情報に乏しい。テイワズの鉄道が走り、火星ハーフメタルの輸入が当たり前になった今でさえ、圏外圏では好戦的な野蛮人たちが旧石器時代のような暮らしをしている——といった偏見は根強いままだ。人身売買や奴隷制度もさ

もありなんと思われている。

市民には、植民地として支配していた自覚もない。

宇宙の広さ、それによる情報伝達の遅さを憂い、蒔苗氏は残された人生を諸国漫遊に宛てた。

こんなことはドサ回り以来だと笑いながらタカキを同伴し、ブロンドとは違った風合いの金髪、柔和な風貌の彼は火星人であり元少年兵なのだと言っただけだ。

いまだ無学だけれど人当たりのいいこの少年が、アーブラウ防衛軍とともに戦ったひとりだと。

火星からやって来た少年たちがアーブラウのため最前線で体を張り、命をかけて国境紛争の尖兵となったこと。

発足式典では身を呈して守ってくれた恩人、チャド・チャダーンは〈マクギリス・ファリド事件〉に巻き込まれ、十代という若さで亡くなったこと。

タカキもまた紛争の中で家族同然だった戦友を両手では数えられないほど失ってきたのだとも。

情報の断たれたあの戦場では脱走を図った正規兵も少なくなかった。

終わりの見えない戦火から逃げたかった彼らの弱さを責めることはできずとも、アーブラウのため献身的に戦い続けた少年兵の勇氣は称えられてしかるべきものだろう。

最前線を守り続けた軍事顧問、鉄華団地球支部の奮闘の甲斐あって、後衛に詰めていた整備士や技術者、給養員から死傷者は出ていない。

その事実が、今日こんにちの火星連合との友好につながっている。

鉄華団の少年兵たちはみな快活で、地元のマーケットでは孫のように可愛がられていたが、アーブラウは広い。北アメリカ大陸北部からユーラシア北部へと伸びる雪国は東西に長く、SAUとの国境紛争すらシベリアの冷たい海を渡れば他人事だ。

アフリカユニオンともオセアニア連邦ともボーダーラインを共有する西側にとってみれば、SAUでさえ野蛮な田舎者でしかない。

八年前の紛争以来、南米を産地とするコーヒーは主に東アブラウでしか消費されなくなった。

蒔苗老の影響力もそこまでだったということなのだろう。

「アレジさん、コーヒーが入りましたよ」

「ええ、ありがとうタカキ。とてもいい香りです」

首都エドモントン、アープラウ代表執務室である。

本棚には書籍がずらりと並び、シンプルながら上質の木製インテリアでまとめられている。

コーヒーメーカーのたぐいが置いてあるのは、応接室を兼ねているためだ。隠すものは何もないというアピールでもある。

ラスカー・アレジ現アープラウ代表はこの二年でさらに広くなった額をハンカチでぬぐうと、プレジデントチェアを立った。

「そろそろ、一息いれるとしましょうか」

穏やかな呼びかけに、他の秘書たちも振り返る。タカキもトレーを抱いてはにかんだ。

地元アラスカから選出され、六年前に蒔苗前代表の支持母体を引き継いだアレジ代表は、国境紛争後の復興に長く尽力した。

支援は八年近く経過した今も続いている。火星ハーフメタルの積極的輸入による医療機器の保護、市街地にM<sup>モビルスーツ</sup>Sが現れたときの対策マニュアルの周知。エイハブ・ウェーブの干渉に起因する事故の犠牲者、遺族に歩み寄った社会福祉の構築。義肢や車いすの開発促進、流通支援など、これまでなら未来を奪われたままだった人々の未来に希望を点すため奔走し、退役兵や戦災遺族からは特に厚い支持を得ている。

むろん中には、火星連合やテイワズとの友好的関係による事態の平和的解決は『日和見だ』と責める声もある。

傷ついた人々を慮る戦後処理も『戦災被害者を食い物にして選挙を有利にした』と批判された。

蒔苗が火をつけ、アレジが消すマッチポンプではないかという陰謀論も絶えない。

第一秘書のタカキ・ウノの来歴にも、賛否の両論がある。

実際のところ、タカキの存在は火星への偏見、インプラントへの忌避感といった障害を緩和するためのアイコンにすぎない。アープラウのために戦った少年兵の一員であり、国境紛争の生き証人として、大人しく微笑んでいればいいだけの人形だ。

そのことはタカキ本人も承知の上で、みずから世界じゆうの子供たちが安心して暮らせる環境作りを訴えている。

通信教育でもうすぐ準学士課程を終え、リベラルアーツ A A 修了後に学士課程へ、修士課程まで修めて政治家としての立候補も考えてはいるが――、そのときには『火星人の侵略』とでも非難されるのだろう。

インプラントへの差別撤廃も、火星との関係性も、火星ハーフメタルの普及もすべてタカキ・ウノにアープラウを乗っ取らせるための謀略だったとでも。

今のタカキはコーヒーを上手に淹れるくらいしか役に立たない使い走り、だからこそ明るく朗らかな人柄がエドモントンの預かり息子として愛されている。

職員たちに分け隔てなくコーヒーを差し出す手付きには彼の気遣わしい人となりが表れており、同時に、タカキの身分がこの中の誰より低いのだと物語る。

前代表も本意ではないだろうが、火星人への積極的な差別がなくなった今も、対等であるとは思われていないのだ。

タカキはあくまでも火星からの『お客さん』にすぎない。仕事内容も掃除や書類整理、演説の同伴が中心で、見かけによらず力が強いから荷物持ちに重宝される。

むしろ番犬として有能だ。外科的に埋め込んだ阿頼耶識――いわゆるヒゲ――による空間認識能力か、それとも少年兵としての経験則か。警戒心が強そうには見えないのにSP顔負けに鼻が利く。

すべて承知でいるタカキと、その手からコーヒーを受け取る職員たち。

アープラウ代表として火星と地球の距離を眺めて、複雑な面持ちで目を細める。

「今日は、外がやけににぎやかですね」と独り言ちれば、すぐさまタカキが振り向いた。

「テレビをつけますか？」と気を利かせる。「今日はエドモントンで集会があるそうですよ！ 市街地のあちこちで民放各社のカメラがスタンバイしていました」

「ええ……では、お願いします」

「はい、すぐに！」

快諾したタカキがマホガニーのチェストを開けば、液晶スクリーンが隠されている。

黒い画面を明るくすれば、チャンネルは東アブラウの民放に合わせられていた。

中継されるエドモントン市街、石畳の街並みを埋め尽くさんばかりの人、人、人。

「わ、ずいぶん大規模なデモですね……！」

日ごろそれなりの交通量があるはずの表通りが行進するデモ隊に乗っ取られ、信号機の点滅もどこか困惑げに見える。立ち往生する乗用車が迷惑そうにクラクションを鳴らす。

軍備撤廃。我らの地球に戦争は不要。——掲げられたプラカード、バナーの中には『アブラウ防衛軍は解体すべし』と太い文字で書かれている。

びっくり顔だったタカキは、そして物憂げに目を伏せた。

「多いですね、最近……」

先週SAU郊外で傭兵の集団死事件があつたというニュースを受けて、反戦デモはその規模を拡大し続けている。行動も過激になる一方だ。地元市民はみな扉を閉ざし、雨戸を閉じて、生卵の飛来を自衛するようになった。

物々しい空気は、東アブラウ全土へと広がりつつある。

〈ゲイレル・シャルフリヒター〉の残骸が発見されたのは、アブラウとSAUの国境線を抱く広大な草原地帯。バルフォー平原だ。

八年前の爪痕が今なお残る戦場跡地である。

ガラン・モツサが率いていた傭兵団の機体だと、タカキは一目で思



い出した。

当時の国境紛争には〈フレック・グレイズ〉のほか、鉄華団地球支部の〈ランドマン・ロディ〉、外人傭兵部隊の〈ゲイレール〉などが参加したが、名簿にあったはずの〈ゲイレール・シャルフリヒター〉とそのパイロット八名が行方不明のままになっていた。

失踪していたMSの数と、先日見つかった〈ゲイレール・シャルフリヒター〉の数は完全に一致。

アーブラウが秘密裏にMSを動員し、密偵としてSAUに送っていたのではと疑う声が出てくるのもしょうがない。

組織である以上、下っ端が勝手にやりましたというわけにはいかないのだ。

ガラン・モツサの存在だって、一握りの生存者の不確かな記憶の中にのみ残された集団幻覚の後遺症のようなものである。まぼろしのように消えた男が確かに実在し、前線で指揮をとった証拠は何もない。

アーブラウ政府によるでっちあげ説のほうが有力視される始末だ。

事件現場となったSAUの前線補給拠点跡地からは、現場から二〇〇キロばかり離れた街の高校・大学に通う女子生徒らの遺体も見つかっているという。

体内に残されていた体液などから暴行後に死亡したものとみられ、誘拐殺人事件としても捜査を進めていくと発表があった。

陰惨な事件が引き金になり、デモは激化。

アーブラウは軍を捨てよ、八年前に奪われた平和を取り戻せ——という市井の演説もそこかしこで聞かれるようになった。

テレビの中で行進するデモ隊の中にも、拡声器を肩に掛けた青年が流暢な演説を行なっている。

……いや、演説ではなく煽動か。

物言いが理知的だとそれだけで説得力があるが、アーブラウ防衛軍など不必要とただただ繰り返しているにすぎない。

アカデミックな言葉選び、落ち着いた声音に秘めた豊かな情緒。実によく訓練された演説家だ。口許はマイクに隠されているが、ずいぶ

ん若い。デモ隊は学生スピーチコンテストの受賞者でも味方につけたのだろうか。

「あ、れ——？」

「どうかしましたか？」

「あの青年が、古い知り合いにとてもよく似てるって……」と、独り言のようにこぼれおちたが、そんなわけがないとタカキは頭を振った。タカキの知人で大学生になったのなんてクツキーとクラツカくらいだ。鉄華団壊滅後の仲間たちはみな一日でも早く就職したがっていたし、技術はともかく文化的教養とは縁遠い。

プロフィール 大学教授に提出する論文で使うようなタームを自在に使いこなす知識階級インテリとは、住む世界が違うのだ。

「——思っただけです。地球こごにいるわけがないってこと、忘れてて」

「世の中には、同じ顔が三人いるといえますからね」

「そうなんですか？　なら、きつと彼は三人目なんです」

「は……？」

困ったように苦笑したタカキは頓珍漢な言葉でその場をかき回したが、そうとは気付かずにテレビ画面を見つめた。演説に聴き入る。

こんな反戦スピーチができる青年は、タカキの知り合いにはいない。

(……でも、どうしてだろう。聞き覚えがある気がする……)

内容は似ても似つかないのに。力強い声の張り方には、不思議な既視感があった。

淡く褪せたウォルナット色の短髪、双眸は青みのグレー。白人で、十八歳くらいだろうか。

灰色の目は一等鋭くて、腕利きのスナイパーのひとみはみなグレーなのだと何かの本に書いてあったな——と、曖昧な記憶がよぎる。

『武器を持ちたがる人間を、どうして信用できますか。凶器を持った隣人と、ともに暮らせと言うのですか！　この世界に必要な力はギヤラルホルン角 笛ひとつと、人類は三百年も昔に誓ったはずだ!!』

賛同の歓声に後押しされながら、演説は続く。

彼が『アーブラウが軍事力を持つことに対する他の三経済圏の反応』について語っているのか、それとも『市民が個々に武器を携えることに対する隣人の反応』について述べているのか、タカキには図りかねた。

アーブラウ防衛軍は、あくまでもギャラルホルンの言いなりにはならないとアピールするための切り札だ。抑止力として存在し続けることに意義がある。

イズナリオ・ファリド公によるアンリ・フリユウ議員擁立、ラスタル・エリオン公による紛争幫助、広域な情報封鎖、植民地へのヘダインスレイヴン猛射など、アーブラウは看過しかねる実害をこうむってきた。

それらの凶行に対し、抵抗し、弾劾する用意があるという覚悟を示すためにも自衛的軍事力は今後とも維持せねばならない。

この八年間、アーブラウもギャラルホルンの監視のもとで安心して暮らすべきだ——と代表交代を呼びかける対立候補が絶えず現れた。

だが議会はギャラルホルンの干渉を固辞する方針を曲げず、政権はいまだ旧蒔苗派にある。

支配と自由とを天秤にかけ、民衆の過半数はラスカー・アレジ代表を支持し続けているはず。

(なのはどうして、アーブラウの人たちが防衛軍の撤廃なんか……)

確かに、軍備を持つことは経済圏同士の関係をより緊迫したものに変わるだろう。

お互い丸腰でないとわかっていれば、交渉を有利に進めるために軍備の増強を重ね、力を誇示する過当競争ゼロサムゲームにも発展しかねない。

「タカキ。今、わたしたちが軍の有用性を議論して、最も得をするのは誰だと思えますか？」

「え……？」と飴色の目がぱちくりまたたく。防衛軍の撤廃ではなく、「有用性についての議論を、ですか」と首をひねった。

「そうです。アーブラウをどうしたい勢力が、それを望むと思えますか？」

「どうしたい……」とタカキは復唱する。

厄祭戦後三百年、この世界で軍事力を保有する勢力はギャラルホルンのみだった。四大経済圏は軍事力を持たず、小競り合いは主に民間で勃発した。

どんな諍いも直接戦闘を行なうのはPMC同士だ。傭兵は雇用主次第で殺し合うし、共同戦線を張る場合もある。

信用が第一なので雇用主を裏切ることとは原則としてありえない。契約満了を待たず払いのいいほうへ乗り換えるようでは、そのうち仕事をなくして路頭に迷う。

一度貼り付いた『裏切り者』のイメージを剥がしきることは難しく、それゆえ、スパイじみた依頼を請け負う傭兵はまずいない。(密偵ガラン・モツサが非実在と断定されてしまったのは、そうした背景あつてのことだ)

経済圏が正規の軍事力を持って、民兵の仕事はこれといって減らない。

常に訓練された兵士と整備された兵器を有するPMCは、正規軍よりよほど実戦的、かつ身軽な戦闘集団だ。

圏外圏においては海賊をはじめとする略奪者から自身や財産を守るための警備員として一般に普及している職種・業種でもある……が、いかんせん軍備には莫大な維持費がかかる。

エイハブ・リアクターの製造技術はギャラルホルンが独占しており、新兵器の開発も民間では難しい。海賊などの襲撃が危惧され、非戦闘員でさえ安全は保証されないのでは、医師も研究者も寄り付かないのである。

結果、兵隊のほうに戦闘以外の仕事——たとえば整備、ハッキング、営業、果ては外科手術など——を身につけ、副業をはじめめるケースは案外多い。

売り物にできるのが戦闘力ただひとつでは出撃可能な戦闘員を常備しておくだけの資産が賄えないのだから、それもひとつのサバイバルスキルだろう。

民間警備会社である鉄華団が農業の手伝いをやっていたように、ま

たタービンを運送業であつたように、自前のMSを運用する民兵にとつては戦闘以外で得られる安定した収入源が生命線となる。

専業である正規軍は、兼業を前提とする民間軍事会社と競合しない。

アープブラウ防衛軍は確かにギャラルホルンの有用性をいくらか損なうかもしれないが、火星連合だつてギャラルホルンに頼らない治安維持のために各市警を組織した。

地元治安維持部隊を配備しても、世界を守護するギャラルホルンとは競合しない。

ギャラルホルンは地球上、いや、この宇宙で唯一にして最大の軍閥なのだ。

三百年前、地球という惑星を取り巻く環境そのものを壊し尽くした未曾有の惑星間戦争が〈ヴィーンゴールヴ宣言〉によつて終結を迎えてから、ずっと。

〈厄祭戦〉。

詳細は語り継がれることなく、当時のM<sup>モビルスーツ</sup>Sがぼつぼつと断片的な記憶を今に残すのみだが、歴史の教科書には『人工知能の暴走が発端』と記されている。

誰が、何のために、何を求めて行なつたのかはわからない。

確かなのは、独立思考型大量破壊兵器M<sup>モビルアーマー</sup>Aが地球上の人口を二十五%も失わせた、とんでもなく大きな戦争だつたことだけだ。

そして戦後、ギャラルホルンの支援によつて地球圏は四つの経済圏に分割。人類は瓦礫の中から立ち上がった。

アフリカユニオン、オセアニア連邦、SAU、そしてアープブラウとして新たに国境線が引かれたのが、P<sup>ポスト・ディザスター</sup>D 元年のことだとい

う。翌PD〇〇二年、四大経済圏は〈マルタ会談〉にて火星の分割統治条約をまとめあげた。経済圏からの要請を受けたギャラルホルンは、火星に大軍を派遣。まったく新たな火星政府を再建した。

さらに翌年、ギャラルホルンは火星の国境線を定め、各都市を四大経済圏の支配下においた。火星の植民地支配は、このPD〇〇三年か

らはしまった。

とんでPD二〇五年。いち早く火星植民地域の暫定自治権を与えたのがこのアープラウである。

のちのPD三一四年に弱冠六歳の才媛クーデリア・藍那・バーンスタインがへノアキスの七月会議で演説し、独立の機運は火星全土から、やがてコロニーへと広まった。

PD三二三年のドルトコロニー事変、翌年明けのアープラウ代表指名選挙での演説を経てへ革命の乙女の名声はついに全宇宙へと轟いた。

ところが彼女は、故郷の貧困を改善し、経済的独立へ導くための一歩を政治家ではなく慈善活動家として踏み出すと決めた。

鉄華団やテイワズといった、戦闘と切り離せない組織との提携を残して自身は非武装という、何とも危うい船出だった。

非暴力を選んだへ革命の乙女クーデリア・藍那・バーンスタイン。対照的に、戦力増強に邁進する新進気鋭のPMC鉄華団はPD三二四年、軍事顧問団を構成してアープラウへ派遣。地球支部が設立された。

PD三二五年、アープラウ防衛軍が正式に発足。

そして一ヶ月と待たずに全滅。

自衛的軍事力など保有したせいで戦争になったのだと責める声もある。戦力があつたから戦えてしまったのだと。

確かに、正規兵がいなければ民間から徴兵してまで前線へ送ることはしなかつたらうが、志願した兵士だって『死んでいい人間』などではない。

ひとりでも多く、叶う限り全員が無事に家族のもとへ帰れるように戦っていた。

しかし善戦むなしく、散発的な戦闘が繰り返されるうちに兵士は疲弊し、兵站もやがて底をつき、アープラウ防衛軍は約四千名もの犠牲者を数えた。

地球外縁軌道統制統合艦隊の斡旋で買い入れたはずのへフレック・グレイズ六十機も、うち四十機が大破。修繕不能と判定されてギヤ

ラルホルンに接收されてしまった。

発足式典中の爆発による被害を含めれば、死傷者は軍民あわせて五万人あまり。

当時、蒔苗氏の第一秘書をつとめていた青年も、あの爆発に巻き込まれて亡くなった。

蒔苗氏をかばって重傷を負ったチャド・チャダーンは見事回復を遂げたが、それも彼自身の反射神経と打たれ強さあっての奇跡だ。

適切に床に伏せた少年兵と、爆風の衝撃をもろに受けた政治家秘書。生き残れたのはチャドだけだった。

あの日、あのおとき、館内にいたのは蒔苗氏だけではない。議員、警備兵、清掃員、お茶を淹れた職員、弁当を仕分ける給養員もいた。建物の外には見物客もいた。遠巻きでも初めて垣間見るMSの姿に目を輝かせた子供の姿もあった。割れたガラスは飛散し、民間人の犠牲者も――。

ところが当時、MSのそばでも稼働しうる医療ポッドの配備数はわずか。

エイハブ・リアクターの影響下でも動作する、いわゆる〈宇宙式メデイカルナノマシン〉は短期的な治療しか行なえない『簡易型』といった扱いだ。宇宙船や宇宙港の医務室には当たり前前に備え付けられているそれも、地上配備数には限りがあった。

〈地球式メデイカルナノマシン〉ならば、時間こそかかるが身体機能を元通り回復させることが可能である。吹っ飛んだ四肢や眼球、臓器も、心肺停止前にすべてかき集めればナノマシンによる自己回復機能の活性化で、文字通り元に戻すことができる。

配備数が多いのは後者だ。

だがMSの居並ぶ会場付近では機能しない。地球の建造物ではエイハブ・ウエーブを遮断できず、微細なナノマシンを無線で稼働させる医療機器は動かないのだ。

初期対応の遅れは、被害者たちの多くに後遺症を抱えさせた。

高精度な地球式治療は義手や義足に対して『まだ欠損させたままである』という生理的嫌悪感を催させる原因の一端でもある。

救助が間に合わなかった人々は絶望の底へたたき落とされた。

アレジ政権は戦争の爪痕に苦しむ人々のため、火星ハーフメタルを政策によって普及させ、エイハブ・ウエーブ影響下でも地球式メデイカルナノマシンの稼働を可能にするよう対策を推し進めた。

市民を医療事故の不安から解き放ち、より多くの命を守るために必要不可欠な対応だ。

というのに、市街地で戦争をするつもりだろう、民間人の被害を軽視している——と揚げ足をとるような非難が絶えずあがってくる。

四肢を失った人々への能動的支援にも、自業自得だ、救済の余地はないというネガティブな標榜がつきまとう。

アーブラウ・SAU間の通信一切が遮断されていた弊害についてもそうだ。

開戦の影響で国境を渡ることができなくなり、旅行、出張、留学中の帰宅難民は敵国のただ中でふるえていた。

家族や友人、恋人との連絡がつかない。交通規制がかかり、いつ家に帰れるのか、本当に帰れるのかもわからない。

飛ばなくなった飛行機や動けないバスのチケットは無駄になり、返金もない。ホテルは交戦国の市民をいつまでも宿泊させてはくれないのに、アーブラウの夜は凍えるように寒いのだ。

否応なく戦時下に置かれ、心身に傷を負った人々にも補償が必要だろう。

紛争がもたらした民間への被害ははかりしれない。

ひと月近く続いた大規模な断絶によって流通は滞り、経済までも錆びついた。

当時タカキは兄妹ふたりが楚々と生きていけるだけの額を給料としてもらっていたが、物価が高騰すればその限りではない。銀行が機能しなくなっただけの意味がない。フウカが思慮深い儉約家でなかったらどうなっていたかと、あとになってぞっとした。

よく考えずに買い物をしてしまって……なんて、まとまった給料を手に入れはじめた鉄華団では頻出した失敗談だからだ。

「タカキ。どうか、これだけは覚えておいてください。わたしたちは、



戦争がしたくて防衛軍を発足させたわけではないと……たえ詭弁だと言われようとも」

「はい、アレジさん」

「背中に銃を突きつけられれば、人は『従って生きる』ことと『抗って殺される』ことを両天秤にかけなければなりません。一方的に銃を突きつけられ、生殺与奪を握られては、まともな交渉などかありません。我々に必要だったのは『対話を行う』という第三の選択肢です」

問題はいざというとき戦争というカードを切れるかどうかであつて、戦争そのものではない。

民衆の生活を守り、傷つけさせないためならば強権にも抗う決意を表明する必要がある。アブラウにはあつた。実質的な軍事独裁からの脱却。人的・経済的損失をとまなう『戦争』という最悪の選択を回避する道を選ばせるための抑止力を早急に手配しなければならなかつた。

「それが、アブラウ防衛軍発足の目的でした」

ところが戦争をも辞さない姿勢では意味がなかつた。

ギヤラルホルンという最強最大の軍閥が機能する限り経済圏同士の戦争は起こりえない——という大前提は、いともたやすく覆された。

「戦争などしたがるはずがない……そう考えてしまった我々の認識が甘かつたと、言わざるをえません」

ギヤラルホルンは内外の犠牲を厭わない。味方の犠牲を最小限にとどめようとするはずだという倫理がギヤラルホルンには通用しない。

そのことに気付かないまま自衛的軍事力保有を決定してしまつたのは、失敗だつただろう。誤算だつた。

経済圏同士の戦争が、いかにギヤラルホルンが世界にとって必要な存在であるかを示してしまつたのだ。

発足式典中に要人控え室で起きた爆発、犯行声明もないのに即座に

『テロだ』と断定され、軍備がSAUとの国境へ送られる決定が下るまで、わずかに数時間。

内部の犯行でなければできない芸当だろう。

タカキら鉄華団は『爆発』という事実に対して『テロの可能性』という動機部分、『何者かによつて爆弾が持ち込まれた可能性』という原因部分とを切り離して考えることができたが、余所からきた子供が「誰が」「どうして」「何のために」と叫んだところで誰ひとり、振り向きすらしなかった。

正規兵と軍事顧問団のすれ違いごと、軍備は国境へ。

なし崩しに、戦争がはじまった。

あの爆発が爆弾テロだったと断定された理由も不明のまま。誰が、何のために、誰を狙つて、何がしたくて爆弾を持ち込んだのかも、誰も、何も知らないまま。

そうした開戦理由のずさんさは、アーブラウ政府の首を締めた。

問題を『ガラン・モツサというまぼろし』に押し付けて戦争責任を逃れようとしたのではないかと、ギャラルホルンから糾弾を受けたのだ。

調停のためSAUについていた〈地球外縁軌道統制統合艦隊〉がアーブラウ側の主張にも耳を傾け、なるべく双方に不利のない落としどころを見つけるべく奔走してくれたことが完全に裏目に出た。

〈地球外縁軌道統制統合艦隊〉所属にして革命軍の青年将校ライザ・エンザ三佐が〈月外縁軌道統制統合艦隊〉総司令ラスタル・エリオン公による紛争幫助を指摘、密偵ガラン・モツサの介入を指摘したためである。

組織改革を掲げた軍事クーデターは失敗に終わり、逆賊の演説はすべて虚偽と断定。革命軍の決起からわずか半月で、アーブラウ政府は厳しい立場に立たされた。

マクギリス・フアリド准将、ライザ・エンザ三佐が逆賊とされた以上、恩義ある鉄華団への加勢もかなわない。

きつとまた火種は自作自演され、ギャラルホルンの信用を補強するための生け贄を要求されるのだろう。

第二第三のアンリ・フリユウが現れては政権を乗っ取ろうと画策

し、アーブラウはそれを『不支持』という形で退けてきたが、ギャラルホルンはついに内政不干渉前提を撤回。ラスタル・エリオン公を初代表として、軍閥として独立してしまった。

蒔苗氏の没後、火星連合を傀儡としてへヒューマンデブリ廃止条約の締結を実現し、あろうことか蒔苗記念講堂で調印式を執り行うまでの権力を得ている。

新生ギャラルホルン代表ラスタル・エリオン公と火星連合議長クーデリア・藍那・バースタイン両氏が手に手を取り合うようすは大々的に中継され、ギャラルホルン・火星連合・アーブラウの友好を全宇宙にアピールしたのが二年前のことだ。

クリュセ郊外での違法兵器へダインスレイヴ解禁に対して強硬姿勢で応じた蒔苗前代表への、痛烈な意趣返しだった。

当時アーブラウ領であったクリュセ独立自治区に、アーブラウ元首の承認なくへダインスレイヴを使用するなど免責されていい事態ではない。アーブラウの民を切り捨てる選択を『大義』と呼ぶことは、断じて宥恕できない。

蒔苗氏は最期までギャラルホルンの権威に臆さず、鉄華団を売り渡すこともしなかった。

ところがギャラルホルンはへダインスレイヴの使用を隠蔽。鉄華団殲滅はへレギンレイズ・ジュリアの活躍によるものと情報を操作した。

条約で保有・運用が制限されている禁断の弓矢は、解禁されてなどいなかったと歴史を書き換えたのである。

当時の火星の状況については各メディアも一切報じていない。

以来、東アーブラウは反ギャラルホルンを叫び、西アーブラウに反SAUが根付くというねじれた状況にある。

シベリアの海を隔てた向こう側にとつては他人事であれ、アーブラウは密偵を送り込まれて国家元首の爆殺を画策され、防衛軍発足式典を妨害され、SAUとの紛争を幫助されたばかりか、情報封鎖によって戦線を長期化させられた当事者——被害者である。

これほどまでに踏みにじられてなお、首都エドモントンの蒔苗記念

講堂でヘヒューマンデブリ廃止条約の調印式を執り行われてしまったのだ。

革命軍の演説によって首謀者——加害者であったと知らされたラストラル・エリオン公が泰然と手を振る姿に、戦災遺族の心の傷は一体どれほど手酷く抉られたか。

「どうか覚えていてください、タカキ。すべてを、見たままに」

報道されたいつわりの『真実』ではなく、ただそこにあった『現実』を。

教養をうかがわせる流暢な演説に流されることなく。

ニュース番組や新聞記事は、人の手によって書かれたものだ。そこには必ず何らかの意図がある。何を伝えたいのか、誰のために書いているのか。

原稿に対して、対価を支払うのは誰なのか。

誰が、何のために、何を求めて綴った歴史なのか。

「忘れないでいてください」と、元少年兵に語りかける。

今、この執務室で戦うべきは外敵ではない。無知で流されやすい民衆たちと、彼らを利用して世論を動かし、議員たちの信念に揺さぶりをかけようとする演説だ。

扇動者は民主主義社会を内側から破壊するすべを知っている。自壊へと誘導した彼らには、何の責任もふりかからないことも。

行進するデモ隊の中で演説しているグレーの目をしたあの少年も、きっと十分に理解しているだろう。

「……大人のために子供が犠牲になる時代は、もうおしまいにしたいものです」

## 005 回帰

「なあ、エンビが帰ってくるってよー!」

後部座席でトロウが声をはずませる。

手許のタブレットをかざし、運転席のヘルメに見えるように受信画面をうつしてみせた。

ルームミラーにちらりと意識を投げ遣って、ヘルメも「ようやくか」と表情を和やかにした。

SAUでの〈ゲイレル・シャルフリヒター〉排除作戦を終えたあとエンビは単身へハーティ小隊〈から離れ、諜報のためアブラウへ渡っていたから、約二週間越しの再会だ。

任務は無事成功し、今日の夕方にはモニターク邸まで降りてくるという。

火星を離れている間は連絡がとれないので、メッセージは共同宇宙港〈方舟〉の格納庫に常駐するカズマがQCCSで届けてくれたものである。

今ごろエンビの搭乗機 〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉1号機がカズマのメンテナンスを受けているはずだ。

「メールには何て?」

『めっちゃ眠い。がつつり寝たい三時間くらい』

「仮眠下手クソかよ……。明日から〈ハーティ小隊〉は休暇だ、朝まで寝かせてやるって返信しとけ」

「りょーかい」と応じて、肩を揺らして笑う。

メールを送信すれば、仕事中毒のカズマから不眠症気味のエンビへのバトンタッチはあつという間だろう。

今日の夕方、エンビがコンテナごと地上に戻ってきたら、〈ハーティ小隊〉は三日間の休暇をとる。

メンバーの多くは時間を持って余すだろうが、小隊長であるエンビの体力回復を見込んでライドが休みをねじ込んだのだ。

同じ白人系でもライドのような赤毛は印象に残りやすいし、黒人系のヘルメや東洋人のトロウは混血でもありコミュニケーションに紛れ込む

には適さない。

異人種の面影というのは、人を疑心暗鬼にするようなのだ。  
〈マーナガラム隊〉から諜報に出せる人材は、ホワイト・アングロサクソン当たり前障りのない白人で外ヅラもいいエンビしか残らなかった。

もともと頭の回るタイプだったし、他者から望まれる姿を演じるのが得意だ。要領がよく、暗記力もいい。鉄華団団長を思わせる力強いスピーチもたちどころに習得してみせた。

花街に繰り出しても可愛がられるのはいつもエンビで、「あいつばつかモテんだよなあ」と愚痴るトロウもなかなかどうして満更でもない。

「負けねーように、俺らも仕事頑張らねえとなー！」

意気込むトロウにああと相槌をうつて、ヒルメは後部座席で大人しくしている少年を各部バックミラーで確認した。

今回の任務へ向かう車内にはもうひとり乗っているのだが、隣のトロウとは対照的に静かすぎて、停車のたび姿を見ないと落としてきたかと不安になるのだ。

「……『リタ』だっけか。いい名前だな」

何かしゃべらせて存在確認しようと適当な話題を振る。

すると、ぱつちりと大きなライト・グリーンが鏡ごしにヒルメをとらえた。

まばゆいばかりのプラチナブロンド、同じ色の睫毛は朝焼けに差し込む光のようだ。二重まぶたがまたたけば、バサバサと音がしそうなほどまつげが長い。控えめな鼻、血色のいくちびるの配置は精巧な人形のように完璧で、……なんとというか、直視するのがためられる。ここまで文句のつけようもない美少年は人生でふたりとお目にかかれないう。ダブルジャケットのボタン並びから男なのだろうと察するものの、性別も判然としない。

無頓着なトロウは短くて呼びやすいと同調し、他意なく笑んだ。

「……らじゃあんまし聞かねえ名前だよな」

「そうでもないだろ。俺だって似たようなもんだ」

『『ヒルメ』?』」

トロウが首を傾げ、リタも無言のままごとんと右に倣った。

ああと首肯する。自嘲が混じって、「似てるつつつてもだいたい違うけど」と補足する。

「どっかじゃ婆さんの名前なんだってよ」

木星圏の文字で『日女<sup>ヒルメ</sup>』。

IDが書き換えられるとき、ヒルメははじめて自身に女の名前がつけられていた事実を知った。

改竄後のIDは性別相応、人種相応、なるべく印象に残らないようにと年代も考慮して再命名されたもので、黒人男性らしくないという理由でヒルメは本名を引き継ぐことができなかった。

花街で働く女が子供に一律女の名前をつけるのは案外よくあることのように、Em<sup>エ</sup>bi<sup>ビ</sup>にしても男の名前として一般的ではない。El<sup>エル</sup>gar<sup>ガー</sup>と男性名風のアクセントをつけて呼んでいた片割れだって、エンビが手ずから墓碑に刻んだ本当の名前はE<sup>エ</sup>lu<sup>ル</sup>ga<sup>ガ</sup>。やはり男につける名前ではない。

娼婦が我が子に女性名をつける理由は愛情であつたり、損得勘定であつたり、背景はそれぞれだろう。

手許に置くため、女兒と偽って売り払うため。あるいは仕事中心の男の名を呼んだあばずれと値切られないため。五歳まで生き延びる確率だつて五分なのだ、幼いうちは女の格好で育てたつて傍目に違いはわからない。

ヒルメ自身、今でも『ヒルメ』が男の名前で何が悪いのかわからない。

ただ一般的ではないから、そのままでは都合が悪かった。

由来と照らせばRi<sup>リ</sup>ta<sup>タ</sup>も同じ境遇だとわかる。

今はすわ美少女と見紛う姿でも、いつかは変声期が訪れ、身長も伸びる。そう遠くない将来、少年はマクギリス・ファリドのような美男子に成長するだろう。

そのときがくるまでに、一回でも多く『いい名前だ』と言ってやりたかった。

普通の人生と引き換えに名前を奪われることがあっても、過去を呪

わなないでいられるように。

ヒルメの運転するセダンはほどなく目的地であった高級ホテルに到着し、ロータリーに横付けした。

現れたドアマンには窓だけを開けて応じ、バレーパーキングサービスを断ると地下駐車場につながるゲートへすべりこむ。

滞りなく停車した黒いセダンから降り立ったのは、無個性なダークスーツ姿のヒルメ、対照的にラフな格好のトロウ。

それからトロウの手をとってしゃなりと車を降りるリタだ。

差し伸べられた手にエスコートされるさまは淑女レディのようで、はにかみ笑顔が何とも愛くるしい。

駐車場の最奥には、嚴重なセキュリティエックのついた扉がある。一見すると倉庫の入り口のようなのだが、それはカムフラージュだ。黒服のヒルメは念のためサングラスをかけてからカードキーをかざすと、ひとつめのゲートが重々しく道を開けた。

開かれた扉を抜け、さらに奥へ、もうひとつの扉をくぐる。

すると姿を現したのは鏡のように磨かれた大理石マーブルの床と、プライベート・エレベーターへといざなうきらびやかなロビーだった。

上層のスイート・ルーム直通のエレベーターだけあって、監視カメラの類は一切存在しない。

ヒルメがパネルを操作し、インターフォンを呼び出すとリタがぴよこんと飛び跳ねた。

来客用のカメラがリタの顔の高さまでスライドする。

背伸びをしたリタがぎこちなく、どこかこわばった笑顔をつくってみせた。

「あの、ご指名、ありがとうございますっ。リタ・モンタークです……」  
頑張つてカメラに近づこうとふらつくリタの顔がモニタに映し出され、背後に控えるヒルメは黒服の腰あたりしか映らない。

先ほどまでの落ち着いた振る舞いとは打って変わって視線をさまよわせるリタ。まばたきのたび、長いまつげがホールの光をきらきら散らす。



インターフォンの向こう側で中年の男がおお、と低く唸った。

『――入りましたまえ』

当該フロアにしか止まらないエレベーターが両腕を広げる。どうやら受け入れられたようだった。

トロウが目配せをして、ヒルメが静かに首肯する。

リタの金髪をポンポンと撫でたトロウは、兄貴ぶってにかりと笑んだ。

「お疲れさん、お前はここで撤退だ。あとは俺に任せときな」

「えっ、おれ……まだなにも」

「車で待つてろ。すぐ戻る」

運転手のヒルメにひとつうなずいてみせ、パーカーのフードをかぶる。カーキは返り血が目立ちにくい色だ。ラフなワークパンツの内側にはナイフや弾倉が仕込んである。

懐に銃を呑んだトロウがひとりで乗り込むと、エレベーターはつつがなく上昇をはじめた。

モンターク商会には少年傭兵だけでなく、高級男娼も匿われている。

今のクリユセでは十六歳未満の売春は禁止されており、リタのような少年を買うことは赦されない。

しかし、たとえ法が禁じようとも需要は根強く、クリユセ市警やホテル従業員をチップで抱き込んで少年少女を買いたがる男は減らない。

違法性というリスクがスパイスになるようなのだ。法の網をすり抜けてやったという達成感が犯罪者を増長させる。未成年の売買が以前よりぐっと慎重になったせいでレアリティが増し、最も希有な『金髪碧眼の美少年』を買うことは金持ちのステータスになってしまった。

そこでモンターク商会がはじめたのが、指名された高級男娼の派遣をよそおって暗殺者をお届けするという私刑の執行である。

絹糸のようなブロンドも透明度の高いグリーンのひとみも、またと

ない高級品だ。思惑通りリタへの指名は殺到し、今日だけで四件も回らなければならぬ。

エグゼクティブクラスを減らしすぎないようにと予約の一時停止がかからなければ、一体何人始末することになったのやら。

選ばれた者のみが足を踏み入れることができるスイート・ルームのドアの前に降り立つと、トロウは子供の高さに身を屈めて銃を構える。スライドを引く。

コンコンと控えめなノックを鳴らせばドアはすんなり解錠され、トロフィーを出迎えようとした好色な代議士がひとり、銃殺死体で転がるのだ。

白いバスローブに鮮血が染みていく。大理石のフロアを汚す蜂の巣を見下ろしても、トロウは何の同情も覚えない。

「……ざまあみろ」



車に戻る黒服に手を引かれ、リタはしきりにエレベーターホールを振り返っては名残惜しそうにヒルメを見上げた。

「ねえ、もうおしまい？ ボクのお仕事は？」

つないだ手をぐいぐいひっぱられてはしようがない。ヒルメは開いた手でサンングラスを取り払った。

「お前は囚役だ。ガキを買おうとする犯罪者をうまくおびき出してくれたら？」

「まだなにもしてない……」

「いいんだよ。九つのガキに売春させたら犯罪だ」

「でも、人殺しだってそうでしょ？ それなら、ぼくがしたって……」  
うつむくりタの言葉は、殺人か売春かどっちつかずのまま途切れてしまう。

自分で殺すと言いたいのか、体を売っても構わないと言いたいの

か。ヒルメは返答に窮して眉根を寄せた。

押し黙るヒルメに、リタはさつきまでの静けさが？のように言い募る。

「俺だってお仕事、できるのに。どうしてだめなの？　ねえ、ボク、役に立てない？」

甘えるように足にまとわりつかれて思わずよろめく。密着されてはさすがに邪魔だ。蹴つまずいて共倒れよりはと、仕方なく抱き上げた。

すんなりと目線が同じになって、リタの両腕がまきついてくる。

ぎゆうとしがみつかれ、——ああ、こいつはそっちのプロだったと腑に落ちた。

(……そーゆうアレか……)

内心でため息をつく。

ヒューマンデブリたちと違って決して痩せてはいないのに、抱き心地は羽のように軽い。

重心の位置を熟知し、抱かれ方を心得ているのだろう。九歳の子供と侮っていたが、さすが高級男娼だけあって熟練の業だ。

車から降りるとき、気の利かないはずのトロウが自然にエスコートしていたのも、おそろくリタがそうさせていた。エレベーターホールでの緊張した面持ちも、不安定な一人称でヒルメに抱き上げさせたのも。

知らず手玉に取られていたのかと頭が痛くなってくる。

「お前は充分すぎるほど仕事してるし、役に立ってるよ。売りがやりたきや十六になってからな」

十六歳の誕生日さえ迎えればひとまず合法だ。クリユセでは取り締まり対象を外れる。

できれば違う職業を選んでほしいが、本人がやりたいと言うならヒルメに止める権利はない。アルミアに志願すればやらせてくれるだろう。傭兵はよくて男娼はだめ、というのは筋が通らない。

「じゅうろく……」とリタがつぶやく。

「七年後か。過ぎてみれば案外すぐかもな」

「……そんなに経ったら、きつともうかわいくない……」

「リタ、」

薄い肩がふるえて、ぎゅうと強くしがみついてくる。

「いやだ」と繊細かほそい嘆きとともに、体重がかかってきた。

いきなり重くなったように感じるのを取り繕うのをやめたからか、それともこれも同情を誘うための演技なのか。支えてやるだけのヒルメにはわからない。

ただ子供特有の体温はあたたかく、九歳の少年の重みがそこにあつた。

静かすぎる地下駐車場の片隅で、ヒルメはただコンクリートの天井を見上げて、時間が過ぎるのを待つことしかできない。

七年先の未来は果たして、十六歳になったリタが円満に売春できる世の中だろうか。

過去七年間の激動を思えば、ヒルメには何とも言えない。リタ自身もあどけない美少年ではなくなっているだろう。背も伸びて、声は低くなって、引く手数多のクールビューティに育っているに違いない。

二十代に達するころには、あのマクギリス・ファリドのような絶世の美男子が再臨する。

ヒルメが記憶するマクギリスはMモビルスーツS乗りであつたし、火星出身とはいえセブンスターズに拾われた知識階級だつた。

きつと、リタとは似ても似つかぬ幼少期を過ごしたのだろう。

養父とやらが彼をどう扱ったかペラペラと自慢げに暴露していたが、語られた過去はパイロットとしてのマクギリスとはまるで重ならない。

阿頼耶識システムの恩恵なしに〈ガンダム・バルバトス〉と肩を並べた鮮紅色の〈グリムゲルテ〉、その腕前はあの三日月にも劣らなかつた。

鉄華団は民間警備会社だから、ヒルメも例外なく強いパイロットに憧れた。三日月・オーガスのような。昭弘・アルトランドのような。

子供時代は早く大きくなりたかつた。オルガ・イツカのように。ノ

ルバ・シノのように。だって、手足が短いとハンドルやペダルに届かないし、体重が軽ければ撃てる銃も限られる。体が小さいぶん一度に運べる荷物も少ない。

もつと仕事を任せてほしい年少組はみんな、一日もはやく長い手足と強靱な筋肉がほしくて成長期を待ち遠しく思ったものだ。

大人になりたいと考えたことこそなくても、子供のままだと願ったことはなかったから、ヒルメはうまく言葉を返せない。

しがみついてくる指先が背中へのヒゲをさぐるので「おい」と咎める。

「どうしてアルミリア様は俺もアラヤシキにしてくれないの？」

「そりゃあ、危険だからだろ。火星でできる適合手術は生存率が低いんだ」

「客もとらせてくれない」

「違法だからな。売春させたら捕まっちゃう」

「……………」

泣き出しそうな一拍の間があつて、抱きつく手から力が抜ける。

「仕事がしたい、」と心細く揺らいだ声は、まるで帰り道をさがす迷子だ。

「なんだお前、母ちゃんが恋しいのかよ——と言いかけて、ヒルメは口をつぐんだ。」

母親に会いたい気持ちは、なんとなく不名誉なことだと思つたからだ。

何がどう不名誉なのかはヒルメにもうまく説明できない。だが幼いころからヒルメはそういう空気の中で生きてきたし、顔も知らないよその女が何かしてくれるとも思えない。

CGSの参番組は親と死に別れたり、捨てられたり売られたりした孤児の集まりだったが、幼年組の中には母親を探して泣くやつもいた。

寂しがる姿を見て、同情を覚えることもあつた。指差して笑うやつもいた。

「一緒になつて笑つたことこそなかったが、ヒルメもそれが『格好悪い』ことだという認識は共有している。」

生きていくかもわからない女に何を願うのかわからなかったから、ただ無駄な寂しさだと傍観していた。

だが今なら、鉄華団が壊滅してすべて失った今だから、二度と戻れないあなたかな居場所を懐かしむ郷愁がわかる。

「お前にはお前の仕事があるんだ、リタ。客に指名されて、囚になってここまで来たろ？ これ以上をやらせたら俺らが捕まっちゃうから、十六になるまでは言うこと聞いててくれよ」

な、とあやすように抱き直す。リタは頷かない。当然だろう、よくわかる。ヒルメだって、ユージンたち穏健派に反発してここにいるのだ。

忌まわしい過去は捨てて前向きに生きろと諭されたとき、腹の底から湧き上がるような嫌悪感があった。戦闘職になんか就くな、家族のためにならない——と再三説教されるのが、死にたいくらい苦痛だった。

あんたたちにとって、これまで生きてきた人生は『終わったこと』なのかと。鉄華団の栄光も忘れたい過去なのかと。オルガ・イツカが目指した『本当の居場所』にたどり着くより、打ちのめされた昨日を捨て、強権の家畜に成り下がって生きる明日が幸福だなんて思えない。

居場所を守って全滅したってよかった。一度死んだことにして、普遍的なIDに偽装してやっと生存を赦免される世界に残されるより、ずっと満足に死ねただろう。

CGSのころから、まともな死に方ができるなんて誰も思っていなかったはずだ。

『本当の居場所』にたどり着けば、家族みんなが飢えることのない食事があるはずだった。みんな交代でゆっくり眠れるはずだった。

寝ている間に死ぬことも、殺されることもない。夜が明ければ全員が生きて朝を迎えられるような、平穏な日々があると信じていた。

威張り散らした大人に殴られたりしない、海賊やギャラルホルンの営業妨害もない。

そんなあなたかい場所が世界のどこかにあるのだと、夢を見て、夢敗れた。

生まれ変わって手に入れた新しいIDなら命の危険はともなわな  
いし、学校にも通える。

少年兵とは生まれてくる前に殺されておくべき悪なのだと認めて、  
思考を捨て、魂を売り払って傭兵業などやめてしまえばよかったのだ  
ろう。

それがしあわせだと『大人』は言うのだろうか。

受け入れろ、お前のために言ってるんだと気遣いの顔をされる不条  
理を身に試みているヒルメは、ただ、リタに不自由を強いているのは  
俺たちのせいだと責任を背負ってみせることしかできない。

俺たちのために過去を捨ててくれと言っているのだ。

単なるエゴの押し付けだ。

だって、自信を持つてやり遂げられる仕事を奪われたら、自分自身  
の価値が揺らぐ。無価値になる。何ひとつ成し遂げられないような、  
無力感という悪夢が迫ってくる。

何もしなくても生存していいだなんて、そんな理不尽なルールは  
知らない。

働いて、よくやつたと褒めてもらうのなら納得できる。だが、何の  
見返りもなしに衣食住を保証されるのは座りが悪い。

下心のない愛情なんて注がれたことがないから、上手に飲み込むこ  
とができない。

〈マーナガラム隊〉の少年兵たちはだから、みなアルミリアの愛情にひ  
どく懐疑的だ。

アルミリアを慕っているリタでさえ、無償の愛ではなく、仕事を成  
功させた対価としてアルミリアに認めてほしいと思っている。

だが思慮深いお姫様は、多感な年ごろの少年を抱きしめるような不  
用意な真似はしないのだろう。

母親か父親か、誰か大人の腕に抱きしめてほしいという欲求を売春  
で満たしてきたリタを、アルミリアでは救ってやれない。

ペド野郎の性欲のほうがその場しのぎの救済になるだけマシンだど  
いう現状は何とも胸糞悪いが、この世界でリタは『稀少な金髪碧眼の  
美少年』という商品でしかない。長らくモノ扱いされてきたせいで、

使えなくなったら捨てられてしまうと怯えている。

人間扱いされて育つ作られた子供だったら、こんなふうに泣かずに済んだのだろうか。

ヒルメだつて誰かに抱きしめてもらった記憶はないし、それが必要だとも思わない。

だが、いつか、もしも父親になるようなことがあつたなら、寂しくないように抱きしめてやりたい。

そう考えたとき、リタの体温が腕に馴染んだ気がした。

「おやすみ、リタ」



「そうしていると親子みたいだな」

? 氣にのたまいやがったのは、ひと仕事終えて戻ってきたトロウである。

泣き疲れたのかヒルメの腕の中で寝入ってしまったリタは、起きているときよりよほど子供らしく見えた。

人形めいた美貌より、こつちのほうがよほど少年らしい、が。

「せめて『兄弟』だろ……」

さすがに親子はない。

東洋人のトロウに比べればヒルメは長身で体格もよく、年長に見える。にしてもまだ十七だ。九歳のガキをこさえる甲斐性はない。(エンビを加えてもヒルメが一番長身でフケ顔、トロウが一番小柄で童顔なのは事実である)

悪態をさつくりスルーし、運転を代わってやると申し出たトロウは、後部座席のドアを開け放つてから運転席に乗り込んだ。

返り血を浴びたパーカーは丸めて助手席の足許へ放り込む。

「やっぱ緊張してたんだよな。あのクソペド野郎、もう一発ぶちこんどきやよかつたぜ」



「……ふや、」

そうじゃない、と否定しかけた言葉が途切れる。

上手く説明できないが、トロウの義憤は的を外れている。

(リタは、こいつは俺らと同類だ)

無償の愛より『対価』がほしい、(ハマーナガルス隊)の少年兵と同種の子供だ。

自分自身にできることを熟知し、仕事を必要としている。ヒューマンドレブリの少年兵たちと同じだ。

戦闘技術があるから、戦って役に立ちたい。役に立てば、報酬として食事は与えられる。役に立つから睡眠をとってもいいし、服を着替えてもいい。

だって、役立たずは始末されるものだから。

役に立っていない以上、殺されたってしょうがないから。

新しい仕事を覚えることに消極的なのも処分を恐れているせいだ。失敗は殺される正当な理由になる。間違えることは、自業自得の死を意味する。

戦う力があるのだから、戦って役に立ちたい。——ヒューマンズドリたちに共通する闘志は、ヒルメにも共感できるものだった。

少年兵にとつての戦いが、リタにとつては売りなのだろう。

仕事内容に対して一定の矜持を持ち、嫌だなんて思っちゃいない。

たとえ痛みをとまなくても、役立つ技能を手放せない。

阿頼耶識と同じだ。体に異物を埋め込む行為は危険で、死亡リスクも高い。手荒にされて失敗されて死ぬかもしれない。生ゴミとして捨てられても、何の保証もしてもらえない。絶対安全圏からふるわれる暴力から生還できる確率は高くない。

それでも、それで働ける。生きていく糧を得られる。

必要とされていると実感できる。

阿頼耶識の適合手術がなくなればいいと思う一方で、生きる術を失うのはおそろしかった。

背中のヒゲのせいで『宇宙ネズミ』と蔑まれても、心身に根を張った恩恵なしに生きる方法がもうわからない。

モビルスーツ  
M Sを自在に駆って戦える力のためなら、過去の激痛もリスクも恐怖も、もはや瑣末ごとなのだ。

死んだっていい。未来ではなく『今』を戦い抜くための自信が欲しい。

リタも、同じ思いなのだろう。

黒塗りのセダンは次なる目的地へと走り出し、予定時刻になればリタを起こさなくてはならない。

そのとき何を言うべきか、ヒルメは考えあぐねていた。

トロウは汚い大人の支配から弟分を庇護したいが、リタは変態野郎だろうが何だろうが抱きしめてくれるなら何でもいいのだ。

大人など信じていない少年兵と、愛情を求める無力な子供。帰れる場所を持たないという共通点だけで行動をともにしているものの、埋めようもない溝がそこにはある。

(俺は、……俺はただ)

自分自身を見失いそうな家族をほうっておけなかった。鉄華団という居場所を失い、戦う生き方を全否定され、未来を奪われた同胞が心配だっただけだ。

何を言えがいいのだろうと自問する。誰に話せば救えるのだろう。

窓の外にも鏡の中にも、正しい答えは見当たらない。

## 006 家族の肖像

メリディアニの道は今もガタついている。

かつてへガンダム・フラウロスへのキャノンが突き崩したティウ峡谷を左手に見つつ、ヤマギ・ギルマトンはクリュセへの帰路を走っていた。

開け放った窓を吹き抜けていくかわいた風が、肩口まで伸びたブロンドをなぶる。

裸足でアクセルペダルを踏むなんて、同乗者がいたら遠慮したところだが、さいわい車内にはヤマギひとりである。

クリュセから南へ約二時間半、隣都市ノアキスとの中間ほどにあるメリディアニ採掘場からの帰り道だ。作業用MモビルワーカーWの定期メンテナンスのため、カツサパファクトリーから技術者五名と営業マン一名が派遣されていた。

日帰り出張ということで、往路はこのジープめいたなりの小型トラックに全員で乗り合わせたのだが……、道中は舗装が行き届いておらず、時おり飛び跳ねるような揺れが突き上げてくる。

帰りは飛行機がいい！ とザックが言い出し、俺も俺もと乗っかって、ヤマギひとりになったのだ。

社用車もコンテナに積んでしまえば——という提案に、ヤマギは迷わず首を横に振った。

あのころシムド峡谷、ティウ峡谷、アレス峡谷が連なっていたここは、七年前にMモビルアーマーAハシユマルが侵攻した地である。

ヤマギが愛した四代目へ流星号が初陣を飾った場所だ。

今は亡きノルバ・シノを偲んでひとりで走るのも悪くないと思い、ザックたちとは一旦別れてごついタイヤのトラックを駆っている。

車高が高いせいか揺れもなかなか派手で、二人乗りしたコクピットを思い出す。

淡い、初恋の記憶だった。

生還したらふたりで飲みに行くという約束が果たされることはなかったが、うつくしい思い出が今のヤマギを支えている。

彼を吹っ切るのは諦めて、生涯独り身を貫こうと決めてからは存外すんなりと今の生活に馴染むことができた。

いつまでも引きずっていられない。仕事に熱中していたほうが自分らしく生きられる気がした。

(……あ、昼飯)

時計を見れば十三時半をまわっている。

すっかり忘れていたが、もともと昼近くまでかかる予定で、あちらでランチを食べてくるよう言いつけられていたのだった。

ザックたち一行は空港でどこかの店に入っただろう。

それじゃあ俺はどうしようかと思考する。健康管理を怠ると、我らがカツサパファクトリーのCEOメリビット・ステープルトン女史からお小言を食らってしまうのだ。

(まずったな……このあたりで領収書切ってくれそうな飲食店っていったら、)

助手席に放置していたタブレットを拾い、地図を確認するが、まだしばらく走らないとクリュセの影すら見えてこない。

「ハロ、ナビ出してくれる?」

『ヨッシャマカセロ! ヨッシャマカセロ!』

ダツシユボードでボール状のAIがぴよこんと飛び跳ね、カーナビゲーションシステムが起動する。

モニタに拡大された地図によれば、ここから北東へいくばくの距離バイオエタノールに燃料補給スタンドと小さな商店街があるという。

「サイドニア・シヨップینگセンター……ここから二十分ちよいか」

クリュセ到着には遠回りでも、なかなか悪くない距離だ。

名前だけご立派な平屋の商店街だが、タントテンボ月傘下のファストフード店も入っているという。大型チェーンなら経理に提出しても大丈夫

そんな領収書が手に入るだろう。

経路を表示させると、ヤマギは踏み固められただけの獣道へとハンドルを切った。



落書きだらけのシャッター商店街の中、目当ての店はすぐに見つかった。

ショッピングセンターというよりはバラック小屋の集合体で、営業している店自体がわずかだったのだ。

がらがらの駐車場はまるで難民キャンプで、都市部から流れてきたのだろう浮浪者がそこかしこでブランケットにくるまっている。

クリュセから徒歩でここまで来たのなら、早くて一昼夜はかかっただろう。みな砂まみれの頭をしている。

ヤマギは念のため窓をロックしてから駐車し、車上警備をハ口に任せて車を降りた。

テイクアウトにしよう、と誓う。

このようすでは治安も衛生状態もあまりよくなさそうだ。目当ては『昼食抜いていません』と上司に申請するためのデジタルスタンプひとつなので、食べられそうになれば捨ててしまった方がいい。

入店したファストフード・チェーンは、地球圏から圏外圏のさまざまなコロニーに出店するだけあって、さすがにまともな雰囲気だった。

奥から店員のシュプレヒコールが「いらっしやいませ」と響いてくる。

しかし、ヤマギの視線はひとつのテーブルに釘付けになって動かない。

青年がひとりでホットドッグをかじっているそばには、ナゲットの箱がふたつ。

「……ナゲットが好きだったなんて初めて知った」

歩み寄れば、じろりと鮮やかなグリーンのみとみが見上げる。

ライド。呼びたい名前は喉で錆びついて悶えてしまった。

鉤爪のような赤いまつげが無感動にまたたいて、ヤマギの呼吸をぎりぎりひっかく。

「いや、別に好きじゃねえけど」

「二年も連絡寄越さないで、何してたのさ……」

「さあね」

ライドは表情を変えないまま、残ったホットドッグを口に押し込むとボトルの水で流し込んでしまう。

ナゲットの箱は袋に詰めて立ち上がった。

ここから去るつもりなのだと思座に察して、ヤマギはとっさにライドの袖をつかんだ。

「待ってー!」

いつの間にかずいぶん高くなった目線に見下ろされても、ヤマギにとってライドは弟のようなものだ。

両の目で見据える。我知らず脅すような声が出た。

「今何してるのか、洗いざらい聞かせて。この二年間のこと全部だ」

俺たちが一体どれだけ探しまわったと思ってるんだ——と、言外に圧力をかけたが、ライドは冷めたひとみで動じない。

持ち上がった親指が出口を指し示す。

「……歩きながらでよければ?」

ファストフード店にいたのは、逃走経路を確保しておくためだったのだろう。

先に会計を済ませておけば、いつでも店を出て行ける。

「わかった」とヤマギは諦めて、ライドに続いて店を出た。

ふたり、連れ立ってシャッター商店街を歩く。

バラック小屋にも、駐車場や公衆トイレにまで人が住みついているようだった。

ヤマギが淡いピンクのつなぎ姿だからか下世話な視線も集まったが、男二人組だとわかれば過半数が興味を失っていった。

車中のハロを連れてきていればライドが見つかったと密告もできたらうに、何を血迷ったか今のヤマギは通信端末すら持っていない。

ライドは無言のまま角を曲がると、路地にいた物乞い風の少年に手にしていた袋を渡してしまった。

ナゲットはそのために購入していたのかと腑に落ちる。昔からラ

イドは、年下の子供たちのためにお菓子をとっておいでいた。

変わってないんだなと懐かしさが押し寄せるが、今は昔の火星ではない。

「よくないよ、そうゆうの」と、口先だけだがたしなめる。

その場しのぎの施しは、彼らが福祉の恩恵を受けにくくなるだけだ。

小規模な商店、飲食店がつつらつつら並ぶばかりのサイドニアで子供が就ける仕事はないだろうし、ここには学校もない。

もとより峡谷と砂漠の合間、燃料の補給にのみ立ち寄るような寂れたエリアである。採掘場のあるメリディアニまで行けば小学校がある——が、さつき見てきたあそこは労働者の子供たちが時間をつぶす児童保育所のような雰囲気だった。

ちゃんと勉強するなら親許を離れてノアキスにある寄宿学校へ入るのが主流らしい。

ノアキスといえば〈革命の乙女〉クーデリア・藍那・バーンスターンが演説したノアキスの七月会議〉が行なわれた伝説の都市でもあり、連合議長ゆかりの地だ。

クリユセと同様に社会福祉が行き届いている。

ここ、サイドニアまで来ればノアキスよりクリユセのほうが近いだろう。近年では実家から通わせる家庭が増えているクリユセでも、小学校から高校まで学生寮が完備されている。

公立校なら制服、給食、宿舎はすべて税金で賄われるし、学費も無料だ。卒業後も就労支援も受けられる。

「それじゃ、ヤマギがクリユセまで連れてってやれば?」

「え——」

「食い物やるのがよくないってんなら、相応の場所まで連れてきやいじじゃん。どうせ車で来てんだろ?」

こんな辺鄙な場所で路上生活を送るストリートチルドレンにまで行政の保護が行き届くのは明日か、明後日か。それまで生きているためには食糧が必要だろう。

飢えないための窃盗や略奪に手を染めさせないために、食べ物を渡

してやって何が悪い？

緑色の眼光に見据えられて、ヤマギは口をつぐんだ。

……確かに正論だ。やらない善より、やる偽善のほうがその場をしのげるだけマシだろう。

自分で救わないなら、救済の手を見咎めるのは筋が通らない。

「それもそうだな……。でも、俺はライドを連れて帰りたいんだ」

立ち止まる。鋭く上がったライドのひとみをまっすぐ見返し、ヤマギは拳を握った。

「いい加減こたえてよ。この二年間、ライドは何をしてたの？」

「フツーに仕事してたよ」

「どんな仕事？」

「守秘義務がある仕事だ。それ以上は言わない」

沈黙が降りる。重たい空気を砂混じりのつむじ風がかき乱し、ライドの赤毛を揺らした。

ヤマギは舞い上がる自身のブロンドをかきあげてひとつに束ねた。視界が開ける。

「もしかしてユージンのこと、怒ってるの？」

何故そんなことを聞いてしまったのかはヤマギ自身にもわからない。い。

だが過去、ライドとユージンがひどい喧嘩をしたことは変えようもない事実なのだ。

鉄華団がなくなり、残党はクーデリアのもとで平穏に暮らすユージン・セブンスターから『穏健派』、そしてライドを筆頭にオルガ・イツカを信奉する『強硬派』に分裂した。

なぜそうなったのかは、……。誰にもわからない。

ヤマギの中では『就職組』と『学校組』という枠組みのほうがかかりやすかったし、そのうちの誰がユージンにつき、誰がライドについていたのかも把握していない。

カツサパファクトリーの面々はどちらの味方でもなかったし、でき



ればみんな前向きに生きてほしいと思っていた。

それでも穏健派と強硬派の亀裂は胸にわだかまり、ずっと影を落と  
していた。

そんなときだ、ライドたちが忽然と消えてしまったのは。

おそらくノブリス・ゴルドンが火星を訪れるという情報が入ってきたことが引き金だった。強硬派側だった年少組が神隠しのように失踪、ノブリスの銃殺死体が見つかったときにはもう足取りひとつつかめなかった。

何故そうなる前に言葉を交わしておかなかったのかとヤマギはひどく後悔した。

ライドとユージンだって膝をつき合わせて話し合えば、何か他の道を模索できたろうにと。

先月だったか、ユージンが街中でトドを発見し、モンターク商会のオフィスを訪れてライドについて尋ねたと噂に聞いた。きっとライドたちを探し続けていたのだろう。副団長としてよりも、家族として。

弟分たちの身をずっと案じていた。

「ユージンを責めないでやってよ。団長に代わって手本を示さなきゃ、みんなが安心してしあわせになれないんだからさ」

「誰も責めちゃいねえよ。あの人はそういう役回りなんだから」

むしろ諦めている。ライドのため息は重く、双眸が鋭さを増す。「けど、」とつないだ声は、獣が唸るように低い。

「しあわせになんかもうなれねえやつらだっている。失いすぎて、もう何も残ってなくて苦しんでるやつらがいる。そいつらにだって味方が必要だ。誰かが居場所になってやらなくちゃいけねえんだ」

独白のように、慟哭のように、ライドの言葉が突き刺さる。第二のオルガ・イツカになろうとするような力強さに、ヤマギは懐かしく目を細めた。

「そうだね」と肯定する。「……まだ難しいのかもしれないけど。いつかはみんな、前を向いて生きていけたらいいよね」

こぼれたのは、笑うに笑えないような、曖昧な嘆息だけだった。

だって、目的を持って動いているならヤマギが何を言ったってライドは聞かない。

「ヤマギには、俺が前を向いてないように見えるのか？」

「俺にはそう見えるよ。あのころから変われずに、立ち止まってるように見える。……でも、いつかは一緒に前に進めるはずだから。俺たちはずっと信じて待ってる。帰ってもいいと思えるようになったらでいいからさ」

帰っておいでよ。——差し伸べた手は、パンとかわいた音をたてて弾かれた。

「お断りだー」

手ひどく振り払われた手が跳ね返ってきて、ヤマギはアイスブルーのひとみを大きく見開いた。

ひゅつと喉が勝手に息を呑む。

「なんだよ変われてないって、進んでないって!! あんたらだって前なんか向いてねえじゃねえか。済んだ過去だったって諦めて、失ったものから目を背けて、下を向いて生きるなんて俺はごめんだー」

「ライド、」

「いつペン死ななきやまともな仕事にも就けなかった、学校にも行けなかった。だけど別人になったから働ける、学校に行ける？ しあわせになれる？ それのどこが前向きなんだよ……!!」

泣き出しそうに歪んで揺らぐ双眸が、迷子のようにさまよう。グリーンの眼光に突き放され、足許が揺らぐ感覚がヤマギを襲った。

どこを見ているのか、指摘されてわからなくなる。

『前』はどっちで、『下』はどっちで、そこが『過去』の先にある『未来』かどうか、——敢えて考えないようにしていた。

だって。過去にはシノがいて、鉄華団があつた。でも未来にシノはいない。鉄華団もなくなった。IDを改竄して名前が変わり、苗字も変わり、ヤマギもギルマトンもノルバもシノもない人生に放り出された。

カッサパファクトリーのチーフメカニックで、ブロンドなのにどうして『ヤマギ』と東洋風のあだ名で呼ばれているのかと、出張先では意外そうな顔をされることもある。

ライドだってそうだ。ライド・マツスは死んで、仲間内で『ライド』と呼称されるだけの別人に生まれ変わった。

「死にきれなかったやつらだって大勢いる。別人になんかなれない連中が行き場を失って苦しんでる。だから俺はそいつらの側につく。……オルガ団長なら、きつとそうする」

「わかった。でも、ライド、もつと俺たちを頼ってよ。何の相談もなしに突然いなくなつて、みんなほんとに心配してる。俺たちは、家族だろ」

「相談すれば復讐は何も生まない、終わったことは忘れろつて諭された。帰れる場所も、逃げる場所も、生きる場所もどこにもなかった！」  
学習しただけだ。無駄だったから、見切りをつけた。

「……ヤマギは副団長の側なんだろ？ 俺らが何言つたつて『大人の都合に合わせろ』つて説教されるんじゃないややつてられねーつて伝えといてくれよ」

おどけたふうに肩をすくめたライドは、そのまま歩を早めた。

「待てよライド！」と路地に消えそうになる背中を呼び止め、ヤマギは絞り出すように問う。「……それじゃあ、復讐は何か生みだせると思う？」

ライドの返答はシンプルだ。

「雇用を生んでるよ」

皮肉げに笑んで、復讐者はひらりと手を振る。

「シノさんの仇も俺らでとつてくるからさ。そつちはそつちでしあわせになつてなよ」

「ライド!! 待っ——」

追いかけて駆け込もうとした路地に、しかし、ライドの姿はもうなかった。

まぼろしのように消えた弟分は、きつと土地勘があったのだろう。もう二度と会えないような予感とともに、喪失感が押し寄せてくる。ああ、と嘆きが重たくこぼれた。

「……領収書、もらって帰らないと」



黄昏のころ、モンターク邸に灯りがともる。

館の女主人から「夕食はみんなで」と言い含められていたので、ライドも薄暗くなるころにはロータリーまで帰り着いていた。

駐車場のトドに煙草をせびつてとりあえず一本吸ってから、豪華な正面玄関をくぐる。

カズマのメールによれば、アルフレッド——ヘグリムゲルデ・ヴァンプン1号機は夕方着の貨物便で降下するとあった。もちろんエンジンも一緒だ。地上へ降下する貨物ブロックは必ずしも気密エリアとは限らないので、基本的にパイロットスーツのまま、コクピットを閉じてモンターク邸までじつとしてるのが常である。

この時間ならトロウとヒルメも暗殺任務を終えて戻ってきているだろう。

大型貨物が発着する搬入口までてくてく歩けば、M<sup>モビルスーツ</sup>S用コンテナの入り口で立ち尽くしているアルミリアの背中を見つけた。

「……お姫さん?」

おろおろと不安げなようすで、内部をうかがっては何事か迷っている。

「どうしました」と声をかけ、ひよいとアルミリアの肩ごしにコンテナをのぞき込むと、——機体の膝許で団子状になって眠っている三人組の姿があった。

「ライドさん!」とアルミリアがほつとした声を出す。「おかえりなさい」と帰還を歓迎してから、両手の指先をくみあわせた。

床にごつちやりと折り重なって眠っているエンビたちの姿に、驚いたのだろう。

「ベッドルームを用意しておいたはずなのだけど……わたし、何か間違えたかしら」

「いや、エンビが生きて帰ってきたからじゃないっすかね」

今朝QCCSで届いたエンビのメールに『眠い』とあったから、寝落ちただけだろう。

MSのそばは年中あたたかいので、格納庫といえは昔から絶好の昼寝スポットだった。

さすがにモニターク邸は空調設備が整っているし、まさか三人まとめてコンテナの床で寝こけるとは思わなかったにしても、警戒心や責任感の強さゆえ不眠症がちのエンビが再会と同時に眠ってしまったのなら、それはそれでいいことだ。

〈ハーティ小隊〉を率いるエンビは頭が回るが、そのぶん精神的に追い詰められることも多い。諜報は気を遣うし、単独任務ではおちおち眠ってもいられなかったに違いない。

身を寄せ合う姿は、子供のころから何も変わっていない。十七になってもまだまだガキだ。

せめて安心して眠れる場所があつてよかつたと、ライドは目を細めた。

「……すいませんね、男同士でベタバタと。気持ち悪いでしょう」

「どうして？ あなたたちは家族なのでしょう？」

「は——？」

きよとんと目をまたたかせたアルミリアに、ライドのほうが面喰らった。

齢一桁の子供ならまだしも、凶体のでかい男同士で肩を寄せ合って眠るのは『普通じゃない』にあたるはずではなかったか。

しかしアルミリアの生きてきた世界もまた、火星とも地球とも異なる独自の文化でできていたらしい。

「眠るときには、お父様とお母様から『おやすみ』のキスをいただくの。もちろんお兄様からも。お父様やお兄様が任務から帰っていらした

ときにも『おかえりなさい』のハグをさしあげるわ。家族同士ならとても自然なことよ」

祈るように記憶を手繰るアルミリアのまなうらには、あたたかな家族の抱擁がある。

母から子へ、父から子へ。兄弟同士でも姉妹同士でも、親愛の情を示すスキンシップは何も珍しいことではない。

アルミリアにはガエリオ以外の兄はいないし、弟もいないが、兄弟姉妹が何人いても同じようにハグをしたし、同じようにキスをしただろう。

父ガルスは軍人であったし、兄ガエリオもまた軍人だった。どんな任務でも在宅の家族が出迎え、無事の帰還を喜んだ。兄の友人であったマクギリスには誰もハグしないから、アルミリアが率先して家族のぬくもりを分けようとした。

お仕事から帰宅した家族を笑顔で出迎え、再会を喜び合うのは当たり前の日常のはず。それなら、なぜ誰もマクギリスに『無事で帰ってきてくれてうれしい』と伝えないのだろうと、幼心に疑問に思ったのだ。

それが政略結婚の引き金になったのだとしても、それでよかった。「感謝します、神様。彼らをふたたび会わせてくれて」

しあわせだったころのボードウィン家の記憶は、あたたかな疼痛と なってアルミリアの胸を締めつける。

へハーティ小隊の束の間の休息は、たったの三日。四日後には月へ向かうアルミリアの護衛のため、MSに乗り込むだろう。

隊長のエンビは諜報任務をこなすためにアーブラウの訛りを覚え、言葉の響きを変えて、自分自身を変質させていく。ただ諜報向きの人種であっただけに、単独で遠方に送り出す仕事を任せ続けた。

どんな家族ももう二度とばらばらにしたいくないと心から願うのに、肌の色の異なる三人組は、一緒にいるだけで誰かの記憶に残ってしま いう。ライドの赤毛もそうだ。物珍しさはおのずと人の目を集めてしま いう。

彼らを引き離した世界は、何度でも彼らをはずたはずたにして今ある平

和を保とうとする。

「カミサマ——ね」

ライドが独り言ちるそばで、アルミリアは祈る。

どうか夢見る今だけでも、彼らがしあわせであるように。

格納庫の床に、影が長く伸びている。アルミリアはみずからの影を踏んで、彼らの領域に踏み込むことはできないだろう。あたたかな眠りから彼らを呼び覚ましてしまう。

フロアは硬く冷たいだろうに、狼の群れは静かに寝息をたてる。

家族の肖像の瓦礫のように、ただ安らかに。

常春の〈ヴェインゴールヴ〉は、いつも緑にあふれている。

地下祭壇には英雄たちのガンダムフレームが眠り、下層階にはエイハブ・リアクターの製造施設があるのだ。過不足ない熱を発生させる装置が周辺一帯を適温に保っている。外海に浮かぶギヤラルホルン地球本部、メガフロート〈ヴェインゴールヴ〉は夏の暑さを知らず、冬の寒さも知らない。

とはいえ遠洋のただなかだけあって潮風とは切つても切れない関係にある。髪を乱す強風は嫌われもので、外を出歩く人影は稀であった。太陽光を独占する表層階にはセブンスターズ各家の邸宅があるため、不用意に出歩くのは不敬にあたるという説もあるにはある。

セブンスターズの子女で温室の外を好んだのは、イシユウ家最後の娘カルタくらいのもだろう。

カルタ・イシユウ嬢は、幼少のころよりたいそうお転婆で、自由に外を駆け回るのが大好きだった。

父上イシユウ公は困り果てた顔をしながらも、庭木を枝の太い樹木に植え替えさせた。執事や庭師が気を利かせて薔薇という薔薇から棘を削ぎ、芝生は厚くやわらかに整えた。イシユウ家の大切な跡取りは女の子、お怪我をされてはたいへんだと、みなでお転婆娘を見守ったのだ。

その芝生は、今はふたたび短く刈りそろえられ、スプリンクラの惜しみない恩恵をきらきらと注がれている。

もう誰も踏むことのなくなった青さが、イシユウ家の滅亡を物語るようだった。

合議制が廃止されたことで、セブンスターズが集まる会議室につながるこの庭園もまた、惰性で維持される飾りものにすぎない。

露に濡れる緑の中に、今日は珍しく一對の溝が刻まれていた。肩幅



ほどの轍である。目線で追いかければ、たどり着いたその先には幾何学的なモニュメント。一体何を象ったのかもわからない無機質な鉄塊に腰掛けて、ドレスの裾を重たく濡らしたアルミリア・ボードウィンがひとりで紅茶を楽しんでいる。

緑を踏みにじってワゴンを押したのだろう。スプリングカラーに構わず庭園に分け入る彼女の姿は、へマクギリス・ファリド事件の収束後からときおり見かけるようになった。

あるときは各家のメイドを募り、あるときはたったひとりで、アルミリアは孤独なティータイムを謳歌する。あるときは格納庫で、またあるときは滑走路で。

神出鬼没のティーパーティーは彼を招こうと待ち構えていた。

ギャラルホルン初代代表、ラスタル・エリオン公。逆賊を討伐した月外縁軌道統合艦隊アリアンロッドの総司令官で、イズナリオ・ファリド公の汚職、逆賊マクギリス・ファリドの反乱のせいで失墜しかけたギャラルホルンの権威を見事回復してみせた時の指導者。

必然に招かれ、鷹揚な声が降る。

「これは酔狂なお嬢さんだ」

「ようこそ、ラスタル様。お待ちしていましたわ」

お茶会には絶好のお日和でしょう？ ——アルミリアはにっこり微笑して、砂時計を手を取った。そつと寝かせてからティーセットを並べる。

「方々も、どうかゆっくりしていらして。今お茶をお淹れしますから」  
カップとソーサー、ティースプーンを部下のぶんもあわせて三つ。ワゴン下部ではヒーターがポットをあたたためながら、廃棄熱で芝生までも痛めつけている。

マクギリスとの結婚生活のために、アルミリアはお茶を淹れる練習を重ねた。おいしいと褒めてくれる彼の気遣いだって嬉しかったけれど、ふたりでおいしいと笑い合えるくらい上手になりたかったのだ。

朝起きて楽しみたい紅茶の香り。朝食に合う風味。十時のお茶にはミルク・ファーストのやさしい甘みを。きつと帰ってくるマクギリ

スを待つ間も、不安を消し去れるように練習を続けた。

しかし夢見た生活は戻らず、おいしいよと喜んでくれるはずだった夫は戦場で亡くなった。

もしも生きて帰ってきてくれたなら、ともに罪を償う覚悟があったのに。いつかふたりでティータイムを楽しめる日がくるまで寄り添うつもりで待っていたのに。

逆賊にお茶を振る舞うことなどできるはずもない。

ミトンでポットをつかみ、赤々と夕焼けを溶かしたような水色すいしよくをカップに注ぐ。煎じられた芳醇な香りは、しかし潮風によって霧散させられる。

温室で楽しめばいいものを、もつたいたいことをするものだ——と集まった憐れみの視線は、アルミリアにも紅茶にも向けられていた。「紅茶だけは、ずいぶん質素な茶会だな。何か持ってこさせよう。甘い菓子でも甘くない菓子でも、欲しいものはないか？」

その言葉を境に、柔和に笑んでいたアルミリアの中から人形のような無表情が顔をだした。

三つのまるい水面が完成してから、無感動な青いひとみが仇敵を見上げる。

「バエルを」

「……失礼。聞き違いがあったようだ」

「ヘガンダム・バエル」と「ヴァナルガンド」をお返しにいただきたいです」

尖れない双眸でラスタルを見つめて、アルミリアは両手を胸の前で組み合わせた。祈りではなく強がりだ。

ギヤラルホルンの創設者アグニカ・カイエルの搭乗機であったガンダムフレーム一号機「ヘガンダム・バエル」を。それからファリド家のハーフビーク級戦艦「ヴァナルガンド」を返してほしい。

いとけない乙女の面差しにマクギリス・ファリドの影を見出し、ラスタルの背後では部下ふたりが息を呑む。

幼妻は強く強い意志を秘めてラスタルを見つめ、逸らさない。

「アルミリア嬢。申し訳ないが、あれらはギャラルホルンのものだ」

「ヘガンダム・アウナス」は競売にかけられたではないですか」

「あれは『取り潰し』の伝統に則ったまで。今後そのような風習はなくしていききたいものだがな」

「では、わたくしが買い取ることは？」

「買う？」

ラスタルが片眉をつりあげる。臆することなくアルミリアは、白くなる指先をほどいてみせた。いつそう落ち着いた声音で微笑する。

「我々〈革命軍〉の内部偵察によれば、ガラン・モツサなる傭兵が永らくラスタル様をお支えしていたのだとか。彼は士官学校時代から御家ぐるみの親交のあった、あなたの旧友なのでしょう？ 大切なご友人を亡くされたこと、後れ馳せながらお悔やみ申し上げますわ」

「これはよくご存じだ」

「メイドたちはおしゃべりですもの」

セブンスターズの家々のメイドたちとも紅茶を囲んだ。ファリド家のメイドとも、もちろんエリオン家のメイドとも。整備士や研究者もティー・パーティーに巻き込んだ。

みなアルミリアには同情的で、逆賊マクギリス・ファリドに振り回された被害者だと思っていた。十八歳も年上の、しかもファリド家の血筋でもない元男娼に嫁がされた哀れな少女として接してきた。生まれの卑しい男に嫁いだせいで頭がおかしくなってしまったのだと思ひ込んで、誰も彼も実にあつさり口をすべらせてくれた。

本当に、本当におかしくなりそうだった。

マクギリスのせいではなく、子供だからわかるはずがない、子供などに向き合う必要はないと軽んじる人々の冷たさのせいだ。無自覚な悪意で満ちた世界に、心が殺されていくようだった。

〈マクギリス・ファリド事件〉と名付けられたクーデターのあと、結婚はなかったことにされ、離婚もしないままアルミリアはボードウィン姓に戻った。とりまく環境は大きくは変わらない。アルミリアに仕えるメイドは、ずっとともにあるからだ。

兄ガエリオが生還し、フアリド家に嫁ぐ以前の生活が戻ってきた。大好きだった兄が生きていたころの生活に戻ったというのに、ちつとも嬉しくなかった。

お役目を果たし、生きて帰ってきた兄を、父はもう抱きしめなかった。

いつもなら『おかえりなさい』のハグをするのに、それができなかった。ガエリオのうなじに、忌避すべきインプラントが埋め込まれていたせいだ。

ガエリオは〈疑似阿頼耶識〉というマン・マシーン・インターフェースで、ボードウィン家に代々伝わるガンダムフレームにつながっていたという。〈ガンダム・キマリス〉はエドモントンの戦いでコクピットブロックを貫かれて機能停止していたはずで、回収されて地下祭壇に戻されていた。

というのに、本物のキマリスは月外縁軌道統合艦隊に接收され、エリオン公のもとで火星人の脳を搭載されていたというのである。

あまりの冒険に、ガルス・ボードウィンはおののいた。

圏外圏に生まれたスペースノイドが地球の大地を踏みしめるだけでも罪深いというのに、その臓器が英雄の搭乗機であった〈ガンダム・キマリス〉のシステムを侵していたのだ。

アイン・ダルトン三尉といえば、あの〈グレイズ・アイン〉のパイロットである。復讐心に駆られて禁断の有機デバイスシステムに手を染め、エドモントンで暴走したギヤラルホルンの恥部。あろうことかギヤラルホルンの機体で野蛮な本性を剥き出しにした火星人。そんな男が嫡男ガエリオ直属の部下だったというのだから、セブンスターズの一家門として一日も早く消し去ってしまいたい過去であった。

息子が生きて帰ってきてくれて喜ばしいと心から思うのに、埋め込まれた異物への生理的嫌悪感がこみあげ、愛しい我が子を抱きしめた手はふるえてしまう。迫り上がる嘔吐感を抑えきれない。

家族の抱擁は消え、父と兄は目を合わせることにさえ躊躇する。

あたたかかったボードウィン家は壊れてしまった。

家族の復讐を決意したアルミリアにとって、ラスタルこそが憎い仇だ。ガエリオと親しくしよう、兄との婚約も噂されるジュリエッタ・ジュリス准将の養父であろうと、ラスタル・エリオン初代代表による歴史の上書きは黙過しがたい。

このギャラルホルンは英雄アグニカ・カイエルが創設したものであるはず。しかし現状はアグニカが作ろうとした誰もが等しく競いあい、望むべきものを手に入れられる世界とはほど遠い。

「要求はなにか、アルミリア嬢」

「ご友人の身代わりとなる密偵をわたくしがご用意します。モンターク商会には、ゴルドン氏に成り代わる力がありますの」

「なるほど」とラスタルはあご髭を撫でた。口角をつりあげ、笑う。

「——やってみたまえ」

「ありがとうございます。戦果を期待していただきます」

アルミリアは曇りなくほほえみ返して、淑女らしくスカートをつまんでお辞儀をした。慎ましやかなしぐさはまさに貞淑な妻のそれだ。「失礼するとしよう」と踵を返したラスタルの背中をにらみつけるような不躰な真似もしない。

時の支配者を見送るドレスの裾は、しかしスプリングラーが撒き散らす水滴に濡れそぼり、緞帳のように重く垂れ下がる。控えめなヒールは芝生の緑を踏みにじる。

いつか必ず〈ガンダム・バエル〉とファリド家のハーフビーク級〈ヴァナルガンド〉を取り戻し、愛した人を殺した組織の〈法〉と〈秩序〉を全否定してみせると、アルミリアは過去と心に誓ったのだ。

圧倒的軍事力で世界を恐怖させ、屈服させて支配するエリオン公のやり方は悲しみの連鎖を生み続けるだけだと。世界に向けて叫んでみせる。

子供だから、純血ではないから、地球人ではないから——何かしらの理由をつけて蔑んで、人間として対等に扱おうとしない貴族社会から去る算段もつけた。だって。アルミリアの手の中には、もう何も残っていないのだ。家族のぬくもりも、夫の罪も。マクギリスの遺体は戻らず、弔うこともできなかった。

しあわせになんてもうなれない。  
だから残された選択肢はただひとつ。  
(わたしは復讐の道を往きます)



「……よろしいのですか、ラスタル様」と部下がそつと耳打ちする。  
背にした少女は十四歳と幼く、気が触れてしまったのだともっぱらの噂だが、腐つてもボードウィン家の令嬢だ。セブンスターズによる合議制が廃止された今なお、行動を起こすだけの財力と権力は持つているはず。

ラスタルは歯牙にもかけず、剛胆な彼らしく笑んだ。

「彼女は『我々』と言ったな。立派な革命の徒ということだ」

兄には似なかつたらしい妹は、マクギリスの影響を強く受けたのだろう。純朴ながら不思議なカリスマ性を持ち、思想や理想といった明確なビジョンも持っているらしい。

実に将来有望だ。成長すればふたたび革命軍を率いるだけの人望も勝ち得るに違いない。いまだ清廉な彼女がこれから外の世界を見、一体どんな味方を連れて決起するのか。

組織の膿として排除するのはアルミリア・ボードウィンの行く末を見届けてからでも遅くない。

角笛とは異なる神を信じる乙女の未来は、はてさて。

「ハエルの恩寵——、その戦いを見せてもらおうじゃないか」

## 番外編

### マーナガルムの整備長

さて、ここは共同宇宙港〈方舟〉にある格納庫だ。火星圏には港がふたつあって、うちひとつが今おれがいるここ〈方舟〉。もうひとつはギヤラルホルン火星支部の本部基地〈アーレス〉の軍港。

今日はこのおれ、カズマが共同宇宙港〈方舟〉の一角を、こつそりご案内しようと思う。

え、誰に向かつて喋ってるのかつて？ メタいことは言いつこナシでいこうぜ、TVでよくあるだろ？ 仕事人密着のドキュメンタリーとか。最近クリュセでもそういうの増えててさあ。

『クリュセ大学コミュニケーションイカレツジ、MモビルスーツS 整備課（夜間部）卒業

アシエント・オブ・サイエンス

A S —— 職業、メカニック（キリッ）みたいなやつ。

……まあ、学歴主義のプロパガンダ番組なだけどさ。制作サイドの思惑はともあれ、整備士の日常をカメラが追ってるって設定で脳内会話すんのが最近のマイブームなわけ。

おれ、実質一人暮らしだから独り言も多くなるのよ。許してください。

んじや、こつからはマーナガルムの整備長ことカズマが案内人だ。ナビゲーター

新苗字はなんか馴染まないから『カズマ』でいいよ。よしなに！

ちなみに今はおれの日課、弁当配りの真つ最中。

なんで整備長がランチ配ってんだよ、ランチ持つとけよ……つてツツコミは勘弁な。パイロットのメンテも整備士の仕事のうちなの。このだだっ広い格納庫を1日3回、規則正しく一周することでおれの運動不足も解消されて一石二鳥ってわけ。裏方だつていざつてときは体力勝負だからな。

それにへマーナガルム隊〈じやおれが最年長だからさ。やんちや盛り

の弟分どもの面倒見るのは年上の役目だろ？ 隊長のライドはおれより2コ下だし。今じやあすつかりやさぐれっちまってるけど、ガキのころはおれらん中でも一等明るくて、一生懸命なやつだったん

だ。絵が上手くてさ。

……なんかしみりしちやうな、この話題はやめだやめ！

やっぱこう、自分が兄貴分だつて実感すると、意味もなく年下の世話焼いてやりたくなくなるんだよな。この現象、名前あんのかなー。

閑話休題。

おれたちへマーナガルム隊は、ここの棧橋と、ここから枝分かれしてるドックのいずれかを寝ぐらにしている。

この区画は建造物そのものの死角になつてる開かずの間で、アルミリア姫の権限でゴツゴツすり拝借してるんだ。空気も水も重力もあるし、火星したに降りるも宇宙そらへ出るも自在な立地条件なので、おれたちの任務にはもつてこいだらう。

もともとはギャラルホルンで使わなくなつた戦艦なんかが繋留されてた場所らしいんだが、その当時は管理費などなどの諸経費がまるごと自治政府持ちだったとか。それで、脱植民地化後に連合政府が「この予算なに？」つて突つ込むと厄介だ……つてなつて、区画プロックごとモニターク商会に下賜された。

へマクギリス・ファリド事件の前までは『統制局』の下にあつた火星支部は、組織再編の中で『月外縁軌道統合艦隊』に吸収されたそうで、為政者様が表立つてやれない仕事を任せるにあたつて、非公式の実働部隊にここを下げ渡した……つてとこだろうか。

ああ、おれたちは「姫さん」「姫さん」つて呼んでるアルミリア姫だけど、リアルにプリンセスつてわけではないよ。

ギャラルホルンが七星貴族七家の合議制を取つてたころ、その一門だったボードウィン家のご息女、アルミリア・ボードウィン嬢。まさに世界最上級のお嬢様だ。

といつてもアーブラウ領クリュセ独立自治政府首相の愛娘……つて肩書きだつた当時のクーデリアさんがホンモノの『お嬢さん』なのも動かぬ事実だから、それならアルミリア様は『お姫さん』つてわけ。たまーにこの格納庫にもやってくるんだけど、そういうときはブランカとアル・ベン・チャーリーが勢揃いしてるので、おれはそっちにかかりつきりで生身の姫君とはほぼほぼ交流がない。



おれとしても、リアルタイムで会話するよりは、資料を添付したり参照したりできる通信のほうが何かと都合よかつたりする。

さあて、一番近いハンガーが見えてきたぞ！

やってきたのは、実働3〜5番組が共同で使ってるMSデツキだ。3番組のへマン・ロデイが四機、4番組のへスピナ・ロデイが五機、5番組のへガラム・ロデイが六機がずらり。

いつもはガラガラな格納庫だが、次の任務に備えて一ヶ所にまとめて置いてある。

モントーク商会の少年傭兵部隊へマーナガラム隊のメンバーは、総勢にして一二〇人ってところだろうか。うち六〇人前後がこの棧橋を住処にして、四十数人が姫さんのお膝元、残りは港と地上を行ったり来たり出張したり動きっぱなし。

おれみたいなメカニックはどの隊にでも同行するし、どこの所属かっていうのはない。

〈マーナガラム隊〉自体、ガンダムフレーム1機、ヴァルキュリアフレーム3機、残りは全部ロデイフレームつつう妙ちきりんなライナップだから、特殊な4機以外は潰しがきくんだ。

おれはどの機体の整備にも携わるから、この連中にも結構懐かれてるんだぜ。今ここに滞在してるメンバーはざっと四十人。

呼んでみよう。おーい！

「弁当、持ってきたぞーっ?」

……つい疑問形になった。いや、不本意だが。鉄華団の古参メンバーみたいな、こなれた喋り方は向いていない。うっかり見栄を張ってしまったが、おれはインドアだ。内弁慶なんだ。ちくしょう。

「ほい、弁当。あつたため……スープがまだ熱いから、気をつけて持ってくれな。ほい、お前も。お前も、ほい、ほい。ほいよっ」と

「ありがとうございます」

「うまそうっ」

「やった、ありがとー!」

「今日のべんとーなに?」

「うん? ああ、こつちがスープで、こつちがおかず。中にパンが入っ

てるから落とさないようにな。お前も、ほい。こつち側は熱くなってるから火傷に気をつけてな。……つと、みんな、弁当もらつてくれたかーっ?」

あ、ここ『全員』つて言うところだよな。しくった。

「みんな行き渡つたつて」

「ああつ、うん。ありがとうな」

「カズマ火傷した?」

「いや、してないしてない。まっすぐにして開ければ大丈夫だから」

小さいのにフォローされてしまった……。ここで「おう、ありがとうな!」つてハキハキ言えるようになるのが、ひそかなおれの目標だったりする。

整備では頼られてても、それ以外では敬われてないんだ。それどころか支えられる側。一人仕事向きのおれはいまだに、小さな凄腕パイロットたちを前につまらない人見知りをしてしまう。

明日こそつ。……なんて決意を新たに、約四十個の弁当をさばいたおれはあとふたつ、格納庫をまわる。

ここでは実働1番組から5番組まである各小隊がそれぞれのMSデッキで生活してるからだ。

今おれが会ったのが3、4、5番組のメンバー。

これから向かうのが2番組、通称〈ガルム小隊〉の格納庫だ。

どの小隊もパイロットを中心にオペレーターやらメカニックやらが集まる感じで構成されてて、〈ガルム小隊〉が一番の大所帯。なんと元宇宙海賊、元ヒューマンデブリの面々が二十人強も集っている。

兼任や帯同を除く固定メンバーだけで二十人オーバーというと、この〈マーナガルム隊〉では最大規模だ。

一番隊の〈ハーティ小隊〉なんかは隠密行動が多いこともあって、専属なのはパイロット三人だけなんじゃないかってくらいまで絞り、他のメンバーは別の隊のサポートにまわってる。ここまでバラけてるのも特殊っちゃ特殊なんだけど、準メンバー陣ももれなく専門性の高い技能を持つてるせいで、任務のたびに引っ張りだこになつてしま

おつ、そうするうちに目的地が見えてきたぞ。

……ここへくるのは、実はすごく、勇気がいる。人見知りとは別の意味で。変に警戒してたほうが怪しまれる……って思うほど挙動不審になってしまう。万が一侵入者と見間違われて射殺されたらシャレにならないどころの話じゃない。

なんせここだけ低重力だし、しかもいつも暗いんだよここ！ 電気つけるよ誰か!! ……って思いながら照明をつける勇気はない。明かりがついた瞬間マシンガン構えてズラツと並んたらマジで漏らすだろう。おれは想像力が豊かなんだ。勘弁してくれ。

格納庫内部には踏み込まず、どうにかこうにか重力のあるところで踏みとどまって、肩に提げていたガマバッグをひとつおろすと「とつたどー」的な感じで掲げる。

「べんとうだつ！ 昼メシの時間だぞーっ！」

今日はわりと噛まないで言えた気がする。ほっとしたのもつかの間、向こう側から三人組が姿を現した。

重力があるといえはあるしないといえない中途半端な環境だつてのに阿頼耶識使いは手すりもない空間をスーっときてカチツと着地。靴裏の磁石が接地する音が軽いなの。白いノーマルスーツが音もなくすうーっとな近づいてくるんだから、慣れてなきやホラーだ。

幹部三人組は器用におれの正面までくると、リーダーがでつかいどんぐり目でじいっと見上げてくる。13歳、約147cmというサイズ感にそぐわぬ存在感。

こいつが〈ヘガラム小隊〉の司令塔、〈ヘガラム・ロデイ〉1番機のパイロット『ギリアム』だ。

隣のドツペ……そっくりさんが3番機の『エヴァン』、隊長くんの双子の弟。それからキツネ目のほうが4番機の『フェイ』だ。常にこの三人はまとまって行動していて、実はもうひとり2番機のパイロットで『ハル』ってのがいるんだが、参謀役なので裏方よろしく表には出てこない。

このハンガーには〈ヘガラム・ロデイ〉4機しか置いてないのに下手

すると迷子になるくらい広いから、おれも深入りしないようにしている。

「ほい、これ、弁当な」

「ありがとうございます」

「えっと今日のスープ、熱くなってるから」

「はい。気をつけます」

さすがリーダー、余裕の対応だ。ギリアムくんはどこで教わったのか敬語が使える。

小さな司令塔のそばからはキツネつ子ことフェイクくんが両手をだして、荷物持ちを申し出る。メンバーはこの広い格納庫のあちこちで息をひそめてるから、弁当は幹部三人組が手ずから配りにいってやるらしいのだ。隊長のギリアムくんが両手で手渡ししてやれるように、隊員の中で一番大きくて力持ちのフェイクくんがカバンを持つんだろう。

鉄華団でも、団長が荷物を持つなんてだめだって副団長が奪い取って荷物持ちに徹してたりした、多分、あーゆうイメージ。

といってもおれの目の前ではあんまり会話してくれないので、ギリアムくん以外はあんまり声を聞いたことがなかったりする。

しかもその司令塔くんがペコリと丁寧にお辞儀するもんだから、おれはそそくさと格納庫をあとにしましたとき。

……まあ、あー、そうだ、気を取り直して、だ！

この弁当配りの旅も終盤にさしかかって、おれが向かうのはラスト格納庫。今は休暇中の「ハーティ小隊」のところだ。

3日間の休暇をねじこまれた「ハーティ小隊」のパイロット三人組は、はじめの2日はモニターク邸のベッドでがっつきり睡眠とって、外食したり花街いったりして経済まわして、最終日の今日この「方舟」まであがってきた。

一度は地上に降りた「グリムゲルデ・ヴァンプ」三機も次の任務に備えて待機している。

おれは技術屋だし、機械いじりが趣味で特技で仕事なマニア気質だから、休暇をもらったところで格納庫から離れることはないんだけど

……連中はそうはいかない。

ライドもそうだが〈ハーティ小队〉は専属メンバー・準メンバーを含め、それぞれ生身でも武器を持つ。暗殺、諜報、護衛、送迎、それから潜入のためには掃除夫やらベルボーイやらにも擬態するのだ。ノブリス・ゴルドン暗殺がスムーズにいったのは、こいつらが三ヶ月以上前から黒服やらホテル従業員やらに扮して手引きしていたおかげだった。

ちよつと前にはエドモントンの街頭デモで演説スピーチまでしてきたくらい、連中の仕事は多岐にわたる。

といっても筋書きを決めるのはエリオン公だし、原稿を書いたのはアルミリア姫。校閲も入ったあとのものを読み上げただけなのだが、スピーチに必要なのは内容だけじゃない。暗記力、演技力、求心力こそ評価すべきポイントだろう。

見栄えだってもちろん大事だ。画面ごしの弟分がなかなか男前に撮ってもらっていて、おれも誇らしかった。

アブラウの番組は基本的に反ギャラルホルン寄りなので、安心して見ていられる。

やっぱり、国境紛争の遺恨があるんだと思う。それと、旧蒔苗派の底力。アレジ代表が就任して間もなく亡くなった蒔苗老の葬儀も、前代表を弔う儀式としては地味なものだったが、生前の偉業を称える報道は何日も続いた。

アフリカンユニオンなんて親ギャラルホルン派だから、ドルトコロニーの社長を暗殺してやってもメディアの反応はあっさりしたものだった。お隣のアブラウのほうが詳しい状況まで発表してたくらいだ。

コロニー内部へのMS侵入、骨も残さず焼き尽くした謎の炎。コロニーの安全神話を覆す武力行使。

ギャラルホルン様は人民を庇護してはくれないぞという、動かぬ事実。

安全の守り方、権威の守り方はそれぞれだから、アブラウだって「いたずらに市民の不安を煽っている」という世論の誹りを受けてい

る。反対に、アフリカユニオンの報道関係者はギャラルホルンがドラト公社の役員という重要人物すら守ってくれなかった事件に苦言ひとつ呈さず、とつと切り上げることを選択した。

危ない真実には近寄らず、遠ざかること、黙って耐えることで守れる平和もある。

……確かにその通りなんだと思う。

おれだって、いつの間にか、どんな番組を見ているも聞いていても、制作会社が誰から金をもらっているかが透けて見えるようになってしまつて、裏事情なんか知らないほうが楽しく見てられたよなあつて不満を覚えることはある。

昔のクリユセで「革命の乙女」だの独立運動だのが持ちあげられっぱなしだったのも、メディアがノブリス・ゴルドンとズブズブだったせいだった。

今のような立場にならなきゃ、知らないままいたことばかりだ。

ノブリスを暗殺して以来、報道関係はテイワズが影響力を持つようになった。流通関係はモニターク商会がまるつといたでいて、……そのへんはエリオン公とマクマードさんとアルミリア姫と三人の間で、何か密約的なものが交わされたんだろう。

スクリーンの外からニュースを眺めるおれたちは、「現実つてそんなものだよなー」つて諦めて、遠い目をして笑い飛ばすべきなのかもしれない。それが正しいかどうかはわからないけど。それが『普通』なのは確かだろう。

少なくとも、プロパガンダを垂れ流すメディアに洗脳されないように、テイワズが求めている『模範的な火星』は、この情報を丸呑みにした姿なんだなあ……なんて一歩下がって俯瞰しようとするおれは、模範的な火星人像にはあてはまらない。

今こうして妄想してる脳内ドキュメンタリー番組だつて、いざ放映スクリーンつてなれば校閲と編集で99.99%別のものになっちゃうんだらう。

それで、仕事人おれ自身には『反社会性』とか『適応障害』とか曖昧な病名ラベルがつけられて、テイワズ系の病院に放り込まれて毒でも盛られて

突発的な多臓器不全で原因不明のジ・エンド。

ああ、やっぱ独り言は最高だな。

さてと、やってきましたラスト格納庫！

かなり嚴重な鍵がついてるが、おれはへマーナガルム隊のメカニツクなので問題ない。指紋認証クリア。網膜パターン認証クリア。

オーブン・セサミで声紋認証も解錠だ。

扉が開く。

「カズマー！」

真っ先に顔をあげたのは四脚可変機構を持つ3号機のパイロット、トロウだった。トレードマークの青い帽子を前後ろ逆にかぶっていて、ひょうきんな少年……だと思う。明るく元気で人懐っこい。ぱつと筋トレを打ち切ると、転がるように駆け寄ってきてカバンを持ってくれる。

「腹減ったあー！」

って言いながら、取り出した弁当はまず隊長に差し出す。自分のぶんを確保するのは常に三番目だ。猪突猛進に見えて順列をきっちり守っている。

搭乗機は四ツ足の猛獣みたいな動きをするけど、それだけでなくとも最近のトロウは狼っぽいなと思うことがある。

続いて寄ってきたのは、有翼変形の1号機のパイロット。へハーティ小隊の隊長でもあるエンビだ。余暇は読書ばかりしてるくせに身長をすくすく伸ばしやがって、ひよいつと上から覗き込んでくる。重量の偏りから、カバンの底でもうひとつ余っているのに気づいたらしい。

「カズマ、昼飯まだなのか？　ここで一緒に食ってけよ」

「いや、お誘いは嬉しいけど仕事があるから。おれは向こうで食べるよ」

「メカニツクは休暇じゃないのか……悪いな、おれらだけ休んで。何か手伝えることは？」

「ないって。優良スケジュールのおかげで疲れるほど動いてないし

さ。エンビたちは休暇でもなきやまともに寝れない任務ばかりだろう？ 今のうちにちゃんと休んでよ」

苦笑すると、納得いかないって顔をする。あからさまに表情に出すから、ああ、背は伸びてもまだまだガキなんだなって感じた。

いかに優秀なパイロットといえど生意気盛りの17歳。鉄華団発足以前からの古参団員、当時の『幼年組』、その後の『年少組』、現在の〈ハーティ小隊〉はみんな、何気ない仕草がちよっぴり幼いときがあつて、それが野性味と紙一重で、少年期から青年期に至る過渡期特有の空気感を持っている。

こういう面を見せてるのは、リラックスしているってことだろう。

懐かしくなつて思わず笑つてしまい、白眼で刺されるかと思つたが助け舟到着が早かつた。さすが千里眼の2号機<sup>ベンジャミン</sup>、視野が広い。一番でかくて黒くて、死角からの援護射撃は実に的確だ。

「カズマは頭脳労働専門なんだから、出張で飛び回つてるお前とは体力ゲージの減り方が違つて当然だろ」

「まあ、そうゆうこと。ヒルメの言う通りだよ。休養期間中のエンビを働かせたらライドの気遣いが無駄になる」

「そーそー。大人しく休んでな、隊長サン！」

トロウが弁当の蓋を開けながら笑う。おれも自分のぶんのランチを確保して、「それじゃあ」と片手をあげた。

本当は仕事なんてとつくに終わつてるんだけど、試してみたいセツティングがまだまだ山のようにあるんだ。ブランカもグリムも、パイロットがもつと自由に、自分自身の特技を活かせる機体に仕上げたい。

「夕飯時になつたらまたくるよ」

「ああ、よろしく頼む」

コミュニケーション能力の高い弟分たちに見送られて、格納庫を辞す。扉が閉じる前にちらつと振り向くと、弁当を食べていても気づいてくれる。……いや、三人とも気配に敏感すぎて気づいてしまうだけなんだ。閉まる扉の向こうで、トロウがにかつと笑つて拳を突き出すのが見えた。



いいやつらだなと、ほっこりする。

連中は警戒心が強すぎるからずっと一緒にいると息が詰まってしまうけど、疎外感はなく、おれも含めて会話がテンポよく進む。まるで頭の中の歯車に適度な潤滑油を注がれたみたいなのに、仕事もよく頑張れる。今ので最高速度だと思ってたシステムが実はもつとサクサク動くことがわかれば、おれの足取りも軽くなる。各機体の改良案がインスピレーション次から次へと湧いてくる。

こういう生活が、おれはすごく気に入っているのだ。

MSが並んでる格納庫に『アットホーム』なんて言葉は不釣り合いだとしても、食事をしたり眠ったり、読書をしたり筋トレしたり、気まぐれに腕相撲大会が勃発したりする生活拠点は、家以外ホームに言い表しようがないじゃないか。

だから家に帰ってきたような感じがするのも、きつと変じゃない。

おれが入団する前まで鉄華団は家族だったらしいから、あながち間違ってもないはずなんだ。

死んじまった仲間が流した血と、これから戦って流すおれたちの血が混ざって、鉄みたいに固まって——いびつだけど確かな『血の縁』になる。それが鉄華団だったと聞いた。

おれが入団したときにはもう急成長企業として『会社』の形されてたし、『家族』を継続してたメンバーとも現役当時あまり親しくなかったから、伝聞でしか知らないんだけど。

民間警備会社といったって、いわば『代理戦争屋』。誰かが戦争をしたいとき、戦力を外注する組織だ。

真面目に仕事してるだけで恨みを買って、目立てば同業者から妬みを買って、喧嘩を売られて……実際、割のいい業種じゃあない。家族を人質にとられる危険もついてまわるから、CGSのマルバ・アーケイとかいう社長さんも孤児を兵隊にしようと考えたんだろう。

おれは8つのときに技術屋だった親父に先立たれて、以来、スラムで拾った電子機器を修理しては転売したり、食い物と交換したりしながら生活していた。いわゆるストリートチルドレンってやつだった。

目覚まし時計、TVスクリーン、ランプにドローン……なんでも分

解しては組み上げてた。ガラクタひとつで寝食忘れて、三日三晩はワクワクし続けられる安上がりなガキだった。

あのころはTVに限らずラジオも電話も通信回線に繋がなきや単なる飾りで、電力供給も危ういスラムではクソの役にも立たないなんて知りもしなかった。鉄華団に入って、整備班の一員になって、ラジオが鳴らなかったのはおれの不手際じゃなく、本体が壊れてたせいでもなく、エイハブ・ウエーブによる電波妨害の影響だと教えてもらった。

おれの住んでた人気のない貧民街は、住人が市街地に移り住んでいった残り物だったことを雪之丞さんから聞いた。親父が仕事を失うのも必然だったわけだ。

理由もわからないまま、誰もいなくなってく廃屋の町で、おれは鉄くずを拾い集めていた。

おれにとっては夢のカケラだった。

二束三文の価値もない残骸の向こう側に、想像力豊かなおれは『日常』を夢見ていたんだ。

あつたかい飯があつて、雨風をしのげる寝床があつて。おれが機械を直せば、それが誰かの役に立って。外の世界の情報がじゃんじゃん入ってきて、そこにどんなアイテムがあればもっと便利になるか空想する。ああでもない、こうでもないって考えて、作ってみて、失敗して、もう一度作って、試行錯誤して。

完成したら一緒に喜んでくれる家族がいて。

おれが夢見る日常風景が、鉄華団の中にあつた。残念ながらカツパ・ファクトリーにはなかったけど、ライドに引っ張ってもらつておれはここへたどりついた。

戦えないおれにできることは多分、ものすごく少ない。けどおれは、どうすれば今の生活を守れるのか考え続けなきゃならないと思う。

人様には知ったこっちゃないこの日常を、今度こそ守り抜きたい。

おれは、家族が好きだ。

## 第四章 デイープ・スロート

007 月へ

ビスコー級クルーザー〈ヘセイズ〉は、月に向かって共同宇宙港へ方舟〈〉を出立した。

公転周期の都合により、火星から十日いくばくの旅になる。

最短であれば二週間で行って戻れる距離なのだが、いくらか離れた今は片道で十三日ほど。復路はさらに数日かかるにしても、地球の向こう側まで一年近く旅をせよと言われなかっただけマシだと思おうべきだろう。

到着まで残り三日。

行き先はギャラルホルン月面基地。

アリアンロッドの本丸だ。

「さあ、鬼が出るか蛇が出るか——」

艦長席のライドは気だるく頬杖をついて、パイロットスーツ姿でため息を吐く。苛立つつま先がコツコツと床を蹴りつけ、足癖の悪さをごまかすように組み替えた。

各操舵席についているのは〈ハーティ小隊〉のオペレーターで、鉄華団年少組が成長したままの顔ぶれである。

操舵士ウタ、砲撃手イーサン、そのほか管制室の面々まで〈エイサリビ〉を動かしていた主要クルーだ。

かつて鉄華団には火星本部、地球支部にくわえて『戦艦当直』という実質上の第三支部があり、ウタやイーサンたち当直組は日常の大部分を強襲装甲艦〈エイサリビ〉艦内で過ごしていた。

用命とあればいつでも宇宙に出られるようにとほとんど常駐状態にあつた彼らは今でも地上のモンターク邸より共同宇宙港へ方舟〈〉を拠点とする艦上生活のほうが肌に合うらしい。

前線を駆けた〈エイサリビ〉の戦術的特性上、〈ホタルビ〉のクルーに比べて血の気が多い傾向もある。

今では唯一の兄貴分となったライドの心中を慮って、右舷操舵席の

ウタが気遣うように眉尻を下げた。

「今さら何が出てきたって驚かないよ」

トド・ミルコネンによる『ピンハネ貯金』が、まさか〈ガンダム・バエル〉とハーフビーク級戦艦〈ヴァナルガンド〉を買い取れる金額に達していたことのほうがよほどびっくりだ。

あの小悪党野郎が、保管中の管理費もろもろまとめて支払える額を一括、耳を揃えて用意するだなんて一体誰が想像したろう。

「そうだよなあ」とライドも嘆息する。

眇められた緑色にうつるのは、どこか冷たい諦観だった。

（いい加減に腹決めて『世界』を敵にする覚悟を決めたほうがいいのかもな）

あなたたちを人間として対等に扱おうとしない、この世界は、あなたたちにとって憎むべき敵ではないの——？ アルミリアに問われた言葉が今も耳に残っている。

別に、世界を敵だと思ったことはない。打倒すべきだと叫ぶほどでもない。

支配者を挿げ替えたくらいで何が変わるとも思えない。

ところがアルミリア・ボードウィン嬢はみずからの足で〈ヴァイーンゴールヴ〉という箱庭を出て、法と秩序の破壊を目論み火星くんんだりまでやってきた。

ライドたち鉄華団残党を雇い、ノブリス・ゴルドンを殺害して火星随一の武器商人となり、手の届く範囲のヒューマンデブリを買い漁った。

そしてガンダムフレーム一号機〈ガンダム・バエル〉とファリド家のハーフビーク級戦艦〈ヴァナルガンド〉を買い戻したその先は、おそらくマクギリス・ファリドが目指した『変革』。

ギャラルホルンは本来主要な役職には就けないはずだった地球外出身者にも出世の機会を与えはじめたというが、そこに自由平等は存在しないとアルミリアは考えているらしい。

たったひとりでも、〈マクギリス・ファリド事件〉で全滅させられた革命思想を継ぐつもりでいる。

深窓の令嬢だろうに、まったく凄まじい行動力だ。

ここまでできたら地獄の果てまで付き合うほかないだろう。

表向きこそモンターク商会所有の傭兵部隊でも、〈マーナガラム隊〉の実状はアルミリア個人のお抱え私兵団だ。金銭感覚が狂いに狂った大口スポンサーの権力に庇護され、養われてきた恩義がある。悲願とあらば叶えてやりたい。

ようやく夫の形見を取り戻す女主人を無事に月まで送り届けるため、総力をあげてバックアップについている。

実働1番組〈ハーティ小队〉、3・4・5番組をまとめた〈ウルヴヘズナル混成小队〉を動員し、〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉三機、〈マン・ロデイ〉四機、〈スピナ・ロデイ〉五機、〈ガラム・ロデイ〉六機が出番を待つ。

ライドの〈ガンダム・アウナスブランカ〉を含めて総勢十九機。

実働2番組〈ガラム小队〉は拠点防衛のため〈方舟〉に残してきたが、それでも火星支部からのスクランブルを退けたり、非正規航路のそこここであつちする海賊を撃退するくらいなら充分すぎる戦力だろう。

「ライド、一時の方角に所属不明の機影がいる。強襲装甲艦が2、輸送船が1だ」

左舷火器管制席につくイーサンの報告に続けてメインモニターに拡大された強襲装甲艦、輸送船。規模は宇宙海賊〈ブルワーズ〉ほど、モヒルスーツMSらしきエイハブ・ウエーブの反応はないらしい。

「また海賊か……」

道中、一日二日進むたびにこうやって海賊船を発見する。

〈ヒューマンデブリ廃止条約〉締結の折り、飼っていたヒューマンデブリを生け贄に差し出して生き延びた連中だ。ギャラルホルンにみかじめ料を支払わず惑星間航行を行なう不届きな艦船のみを襲撃することを条件に、必要悪として野放しにされている。

ボードウイン家の紋章である八本足の軍馬スレイプニールを戴くクルーザーにみずから仕掛けてくる命知らずはまだいないが、もしもこちらがMSを出したら口実を得たとばかりに襲いかかってくるだ

ろう。

「ウタ、今回も戦闘なしで通過できそうか？」

「あちらさんが見逃してくれるかどうかだ、今回も」

「イーサン、あっちの射程に入るまでは？」

「最短で一〇分。だいぶ余裕がある」

MSデッキでは各隊が交代で待機し、出撃に備えている。ビスコー級クルーザーは全長五〇メートル程度と比較的小柄で、相応に小回りも利く。阿頼耶識がなくとも操舵士、砲撃手ともユージン・セブンスタークの曲芸航行を間近で見育て育ったヘイサリビのブリッジクルーだ。

頼もしく育ったイーサンが無感動に嘆息した。

「どうせ、こっちの戦力を探ろうって腹だろ？」

「だろうな。逸って飛び出さないようMS隊に釘を刺しておいてくれ」

「了解」

月面基地まで三日の距離ともなれば、近辺を航行していたアリアンロッドの部隊がいつすつ飛んでくるともしれない。海賊同士がドンパチやっていたので治安維持のためにまとめて始末しときました、とも言えばアルミリアお嬢様ごと葬り去ってしまえる。

歴史を綴るのはギャラルホルンだ。

(……海賊だって、俺らと戦うメリットはない)

〈ヘビューマンデブリ廃止条約〉は、海賊連中の戦力までも大幅に削いでいる。いくらでも替えの利いた戦闘用奴隷を根こそぎ生け贄に差し出したせいで、戦闘におけるアドバンテージは完全に失われた。

たとえギャラルホルンの恩赦を得ても海賊は海賊だ。略奪者であることに変わりはない。軍港で補給をさせてもらえるわけではないし、民間宇宙港に立ち寄れば通報を受ける。

むろん、通行料をケチった貧乏人を野放しにしてはならないので、PMCや整備工場の段階でMSの弱体化がはかられ、『海賊』傭兵の構図は守られている。それでも鉄砲玉を失い、自分自身の命を懸けねばならなくなったのは大きすぎる痛手だろう。水も食糧も弾薬もす

べて客船や商船を襲って調達しなければならぬ宇宙海賊にとって、ヒューマンデブリはなくてはならない剣と楯だった。

海賊にせよ、傭兵団にせよ、いたずらに兵隊と兵站を消耗させるのは避けたいはずだ。

……いや、連中の事情なんか知ったことじゃあない。慮ってやる必要などないだろうにと、ライドは自傷のように目を伏せる。

生活必需品を現物で調達しなければならぬ海賊。

生活費を得るために戦い続けなければならない傭兵団。

全部どうだっていいはずなのに、過去の鉄華団に重なるせいとか、理性を差し置いて記憶が懐かしんでしまう。

いくらか前にユージンと袂を分かった口論の意味も、今ならわかる。

——あのときのことはもう忘れる。復讐なんてオルガは望まねえよ。戦いは終わった。終わったんだ。

——何が終わったってんだよ!? 団長が目指してたのは、俺たちの『本当の居場所』だろ。俺たちがひとりだつて使い捨ての道具にされないような、ここじゃない、どっか——!

——んなもんはオルガの方便だ。鉄華団が進み続けるために、そう言っただけだ。

——団長の言葉を? にしないために、俺たちは戦ってたんじゃないか!

——とつづくにハツタリだつて割れちゃったろ。今さら遅えよ。

オルガ・イツカはもういない。三日月も昭弘もシノも、主だった戦力はみんな。MSも、MモビルワーカーWも武器はすべて基地ごと爆破し、戦う力は削がれてしまった。怪我人を運ぶのに精一杯で、荷物さえまともに持ち出せやしなかったのだ。手許には何も残らなかった。

戦意も、もうない。

——……戦つても、得るものはもうねえ。失うだけだ。

戦えば生活費が手に入るから傭兵業を続けていた。好き好んで戦いを選ばなくていいのなら、もう戦わない。

俺たちはもう戦えないとユージンは言った。

戦う理由も、力もない。これまで傭兵業をやってきたのは生活のためだ。人数分の水と食糧を合法的に買いそろえ、人数分の寝床を維持し、営業妨害がしたい勢力の襲撃に備えるだけの金が必要だった。新たにMSを買いそろえる費用がいくらになると思う？ 到底捻出できやしない。

IDを書き換えて別人になった今、危険な仕事はしなくてよくなった。連合議長様になったクーデリアが斡旋してくれる『真つ当な仕事』に就くことも可能になった。

——俺たちはよくやった。もう全部終わったことだ。過去は過去だって割り切つて、やっと前に進める。……そうしたいやつは大勢いる。

そうだろ、とユージンは同意を求めた。自分自身に言い聞かせているような声音だった。

鉄華団は解散、団長オルガ・イツカは殺害され、象徴であったヘガンダム・バルバトスは晒し首に処された。ギヤラルホルンの権威と軍事力があれば、鉄華団なんて零細PMCは任意のタイピングで犯罪者に仕立て上げて殲滅してしまえるのだと、ラスタル・エリオン公が行動でもって示してみせた。

静止軌道上からヘダインスレイヴを撃ち込む高次元の射撃能力を有している。宇宙にいても地上にいても逃げ場はない。

惨憺たる終焉を、ライドたち強硬派は『居場所を奪われた』と感じている。鉄華団が鉄華団である限り、大人による上から目線の暴力から逃れることは叶わなかった。

だが、いつかたどり着く『本当の居場所』など幻想だと、幹部組は知っていた。わかっていた。だからこそオルガは全員が死ぬまで殴られ続けるより逃げるが勝ちだと判断し、鉄華団の基地を爆破、団員は全滅したことにして、タービンスや蒔苗老の伝手を使って地球へ逃がしてくれた。

オルガのおかげで『真つ当な仕事だけでやっていく』ところまでた



どり着けたのだ——というのがユージンたち穏健派の解釈だ。

確かに、武器の維持、人員の管理、兵站の調達だけでも経営はずいぶん圧迫される。戦艦やMSの維持費だけでも馬鹿にならない額だ。優れたパイロットを育てるには時間も金もかかる。整備士や船医にいたっては、内々で育てるのはまず不可能である。

専門的な知識、洗練された技術をその腕に宿すには時間と経験だけでは到底足りない。外から好待遇で雇い入れたら不平等が生じないよう身内の給金も上げねばならず、戦い続けなければ生活できない自転車操業。

自前のMSを持つことは、リスクばかりでメリットがないのだ。

戦うことをやめたその瞬間から、水も、食糧も、ただ減っていくだけになる。資産も、社会的信用も、漸進的に尽きていく。命の残量がなくなっていくだけになる。

だから選ばなければならない。

武器を売り払い、権力の傘の下で生きるか。

武器を握りしめ、仲間の屍の上で戦い続けるか。

死に到るカウントダウンに抗いたいライドは、止まらない。止まっ  
てはいけないから、窮屈なギヤラルホルンのパイロットスーツなんか  
着て、ボードウイン家の紋章スレイブニールを戴くクルーザーの艦長席に座してい  
る。

適応そうちうしなければ、生きたいと願うことすらままならない。

(ここはそういう世界だ)

変革を実現できない限り、ずっと。



大容量の冷蔵庫、オーブンのたぐいも充実している。冷凍庫の中身も、乗組員数・客室数と照らしてこんなに必要かと首を傾げたくなるレベルだ。

豪華なキッチン設備は、さすがギャラルホルンの艦船と言うべきだろう。

エンビは鼻歌混じりに『FOOD ONLY』と太く書きつけられたサバイバルナイフを戸棚に片付けていく。鍋の火を止めると、転倒防止ベルトで固定した。鉄華団が発足したばかりのころ、まだ戦力にならなかった年少組は厨房でアトラを手伝っていたので、仕込みから皿洗いまでばっちりだ。

ランチボックスに小分けにして、配達用がま口バッグを肩から提げる。

するとそこへ、ちょうどよく交代の報せが舞い込んできた。

「おつかれ、エンビ。仮眠いってこい」

調理場のカウンターに現れたヒルメに、エンビは実に機嫌良く笑んだ。

「ナイスタイミング。出来立て食っていけよ」

うまくできたんだと誇らしく、パチンと蓋のロックを解く。大鍋の口からほわりと持ち上がった湯気は、さして空腹でなくとも食欲をそそった。

のぞき込めば、おおざっぱな調理ではあるものの子供の一口大まで細かく刻んだ肉と野菜がちょうどいい塩梅に煮詰まっている。全員にあたたかい食事が行き渡るようにというクライアントの要望通り、この船には食糧・食材が潤沢に積んであるのだ。

いたずらっぽく笑んだエンビは、「味見」と称してふたかけら取り分けると毒味するように片方みずから口に放り込んでみせた。

「羊とかいう動物の肉なんだってき。結構いけるぜ」

「ヒツジ？ 初めて聞くな」

「鳥とそう変わんねえかな。翼はなくて、四本足で蹄がある」

「ふうん」とヒルメは応じて、寄越された肉を味わう。

悪くない……と思うのは肉なのか、それともエンビの味付けなのか、いまいちわからない。トロウも含めて味覚がよく似ているせいで、うまいだろうと言われたものはだいたいうまいのだ。（おかげで買い出しは楽だが取り合いになると血を見る）

本作戦中はへハーティ小隊の誰かが持ち回りで調理場を担当しているため、先日ヒルメが豆のシチューを作ってライドに微妙な顔をされた以外には何の文句も出ていない。

アルミリアに出した食事が残っていた、捨てられていたという話も聞かない。

今回の作戦はさすがに危険がともなうとして、メイドたちはモンターク邸で留守を預かり、シエフやセクレタリにも順を追って暇が出された。トドも地上残留組だ。このビスコー級クルーザー〈セイズ〉には護衛任務に就く〈マーナガルム隊〉実働1・3・4・5番組、守られる側としてアルミリア、そしてモンターク邸内に匿われていた少年男娼たちだけが乗艦している。

何の戦闘訓練も受けていない子供はどこで何をしでかすかまるで予想がつかないし、逃げ足もたかが知れている。拠点防衛組として〈方舟〉で待機する2番組の足手まといにさせるのはばかられて、全員まとめて連れてきたのだ。

アルミリアごと艦内の最も安全なエリアに閉じ込め、念のため隔壁まで締め切って隔離してある。

「つてわけで、俺はM<sup>モヒルスーツ</sup>S隊に弁当届けて仮眠とつてくる。あとは頼んだぜ！」

ひらりと敏捷に踵を返したエンビに、「ああ」と頷きかけたヒルメはさっと青ざめた。

「……つて、待てエンビ！ つてことは——」

作った食事を鍋ごとワゴンに乗せてアルミリアたちのところまで持っていく、皿に盛りつけ、取り分ける作業はヒルメに任せるということか。

ひと仕事終えたと言わんばかりに伸びをしたエンビは、それがどうしたとヒルメを振り返った。

「だって、あそこのガキどもに一番懐かれてんのヒルメだろ？」

「トロウ以外は全員そこそこ懐いてるだろ……イーサンあたりに行かせろよ」

同じブロンドのイーサンなら、それなりに親近感もあるはずだ。昔

こそ野暮ったい感じだったイサリビの砲撃手は成長期で凄まじく垢抜けた。それに、次の交代で食堂に訪れる。

ヒルメが言い募っても、取り合う気すらないのかエンビは「なんで」と目をまたたかせる。

「あの一等はんばない金髪美少年ハニーブロンドがヒルメのこと待ってるぜ」

「リタか……!」

思い当たるふしがありすぎて、ヒルメは思わず頭を抱えた。

エンビが諜報任務で火星を離れていたとき、少年売春の現行犯を暗殺してまわったあの仕事以来だ。凶役として同行していたリタにばつちり名前を覚えられてしまったらしい。

淡い金髪に碧眼で、マクギリス・ファリドの面影があるからかお姫様にもずいぶん可愛がられているはずなのに、なぜだかべつたりと懐かれてしまった。

同任務を担当したトロウは気が利かず、全員一律『弟』扱いするせいで、あの美少年たちには人気がない。むしろ暑苦しがられて避けられている。(みな小綺麗にしているので、頭を撫でる手つきひとつとってもお上品にしてやらないと嫌がるのだ)

「一回くらい寝てやれば」

「冗談でもやめろ。九つの子供ガキだぞ」

「なら、ちゃんと距離とって接してやれよ」

トロウのように少年兵も男娼も関係なく弟分扱いできないのなら、エンビのように『脈なし』を態度で表してやらないのなら。

「優しいのは、ヒルメのいいところだけだよ。中途半端に構うのって逆に残酷だろ」

個々を尊重して接するヒルメの気遣いは、やすやす真似できることではない。誰だってブロンドはブロンド、ブルネットはブルネットと十把一絡げにしていまいたくなるものだ。東洋人は東洋人、黒人は黒人で一律に接するほうが楽だろう。

ヒルメの目にはイーサンとリタが同じ『金髪の白人』に見えるように、エンビだってアジア系の人種は見分けがつかない。トロウとフェイが同じ『黒髪の東洋人』に見えるし、ウタとギリアムのような褐色

肌のグリーンアイズたちにどんな民族的差異があるのかさっぱりわからない。自身と同じ白人同士の時だけ、人種や顔立ちの細かな個性が見えてくる。

そうした垣根を一切作らないトロウの接し方は、少年兵たちによく好かれる。〈ハーティ小隊〉は日ごろ練兵教官じみたこともやっていくが、長所を伸ばして強化してくれる兄貴分として、最も広く慕われているのはトロウだ。

俺たちは他に行く場所なんてない、だからここでもともに生きようと先導できるのは一種の才能だろう。みんな弟みたいなものだと一旦平等に均してから、ひとりひとり鼻肩目なしに大事にしてやれる、そういう天然の魅力とは無縁の育ち方をしてしまったエンビには、トロウのまつすぐな気質がなおさらまぶしくうつる。

個々に居場所を作ってやろうとするヒルメも、弟分たちから慕われる性分には違いない。一步引いて全体を見通し、短所をカバーする知恵を授けてくれる。孤立しそうなとき、どうしていいかわからないとき必ず気付いて助けてくれるヒルメには、すべからく敬愛が集まってくる。

だが、十名足らずの美少年たちから向けられる思慕は、少年兵の共同体の中で兄貴分に対して寄せる憧憬や信頼とは質も量も違う。

物心つく前から容姿によって選別され、仕事に必要な言葉だけを覚え、必要なしぐさだけを仕込まれ、最高の商品として育てられてきた高嶺の花。たった二時間の予約で云千万ギャラーもの前金をポンと支払われるような高級男娼で、一晩ともなれば億単位の金が動くという。

鉄華団全盛期の月収をはたいても到底手が届かない一夜の夢だろう。

だが、ヒルメの袖を引く動機が金目当てでないのは明らかだ。

「最後まで責任持つか、その気がないならちゃんとき放してやれ」  
一晩に何人もの相手をして生計をたてる花街の娼婦たちとは違う。

二度と来ない父親の迎えを待つ幼子のように、健気にヒルメを待ち続けるだろう。

「なんだよ、責任って。俺は何にもする気はねえよ」

だが、エンビの指摘ももつともだ。総勢にして一二〇名ほどいるマーナガルの少年兵とは打って変わって、十人もいない美少年たちはみなあまり仲がよくない。航行の邪魔だからとまとめて居住区画に押し込んで十日あまり、無事に往復できて一ヶ月かかるこの旅は、彼らにとっては永遠にも等しい孤独かもしれない。

モントーク商会に買い取られ、アルミリアの意向によって身の安全を保障されていることすら、彼らにとって『平穩』なのかどうか。

わざわざ連れてきたのも、ヒューマンデブリ育ちの少年兵との折り合いが悪いからだ。火星に残してきた実働2番組〈ガラム小隊〉の足手まといになりそうだとライドが懸念し、少年男娼たちはアルミリアのそばに置くように、3・4・5番組のへウルヴヘズナル混成小隊はエンビたち年長者が監督するように決定した。（2番組は隊長ギリアム、右腕のフエイ、左腕のエヴァン、参謀のハル——というMSパイロット四名を中心によくまとまった有能な番犬だが、同時にひどく排他的である）

同じ孤児でも、少年兵と高級男娼ではバックグラウンドが違いすぎる。思考回路もあまりに違う。幼いころから傭兵として育ってきたエンビやヒルメには想像もつかない世界の生き物だ。

九つの子供だったころ——、ちょうど鉄華団が発足して地球に降りたころだ。年少組と呼ばれていた。一日も早く成長期を迎えて、もっと多様な仕事を覚えたいといつも思っていた。強いパイロットに憧れた。

CGSでも鉄華団でも、人を撃てないやつは早世した。仲間の死に耐えられないやつは生き残らなかった。

傭兵業でやっていける心身の持ち主だけが生き残った。

金属アレルギーもなく阿頼耶識システムに適合し、食べ物に中ることもなく成長し、今もMSに乗っている。もう戦いたくないと残党の多くが戦場を去った中で、ヒルメは武器を手放さなかった。

だって。一方的に支配されるなんて鼻持ちならない。変態の玩具になるなんて死んでもごめんだ。娼婦の腹から生まれても、売られた

先は警備会社でよかったと安堵できるくらいには。

そんなだから、優しさが優しさになるのか、慰めが慰めになるのか、何をしたらリタあの子のためになるのか、考えるほどわからなくなる。

居場所を失って苦しむ兄弟を見捨てることができかねてヒルメはここにいるのだ。

父性を求めて対価に体を差し出してくる子供との接し方なんて、わかるものか。

「下手に会わないほうがいい。何を期待されても、俺にしてやれることは何も無い」

「逃げるのか？」

間髪入れず、エンビが声を尖らせた。

「それとも怖いのか。九つのガキが」

「別にそういうわけじゃ、」

「俺らだってまだ十七の子供だ。けど、あいつらの目には大人に見えるてる。わかるだろ？」

体格的には大人と相違ないのだ。少し低いエンビの視線に睨み上げられて自覚する。青年期に達した体躯は、自身が子供だったころ思い描いた将来像と重なりつつある。鉄華団発足時の幹部組、当時のオルガとユージンがちょうど十七歳だった。あのころはあんなにも大人に見えたのに、そうではなかったのだと追いついてみて初めてわかった。

拳でトンとヒルメの左胸を殴りつけ、苦く微笑する。痛ましげに歪んだ笑みは、激励であり諫言でもあった。

「現状維持を選んでいいのはお前じゃないんだぜ、ヒルメ」

それがリタのためになるかはわからない。ヒルメのためにもならないかもしれない。だが、ヒルメは現状を打開する力がある。何も持たないリタとは違うのだ。戦闘職に従事するヒルメが戦場に遺恨を持ち込むのなら、仲間の誰かが死ぬことになる。

背中を預けられるのも、厨房を任せられるのも、裏切り者ではないと知れているからだろう。

家族の無事を願うなら、ちゃんとケジメをつけてこい。

鉄華団残党で構成された〈ハーティ小隊〉も、ライド率いる少年兵集団〈マーナガラム隊〉も、みな兄弟のように思っている。エンビもそうだ。ヒルメだってもちろんそうだ。

ともに戦う仲間なのだから『喧嘩はとことん』は鉄則である。気に入らないことがあったときには腹を割るなり拳で語るなり、わだかまを残さないよう当人同士で解決しなければならぬ。仲間同士のコミュニケーションは「俺はお前の背中を撃たない」という意思表示になるが、逆も然りである。

結束力と戦闘力だけが取り柄だ。以心伝心の連携こそが武器だ。鉄華団は、〈マーナガラム隊〉もまた、そうして戦ってきた。

だけど高級男娼らは同胞じゃあないんだとエンビは突き放してみせる。

俺のせいにしていいからお前はこつちへ戻ってこい、と。

暗に圧力をかけて、エンビは踵を返した。

「……冷めないうちに弁当配ってくるわ」

「ああ、心配かけて悪かった」

背中にぶつかる謝罪にもエンビは振り返らなかった。

見送ったまま立ち尽くして、ヒルメは静かに瞑目する。鉛のような疲労感があった。

あんな言葉をエンビに吐かせたくはなかった。学校で諜報任務で繰り返された自己否定に疲れきった兄弟に。

みな居場所を奪われ、生き方を否定され、未来を失った同胞だ。それでも、復讐よりも仲間の安否が心配でここにいるヒルメにとって、優先順位は『エンビ』リタ』で揺らがない。

家族を守りたくてここにいる。

そのために、捨てなければならぬものもある。



アルミリア・ボードウインは、明日にも月面基地へ到着するという。海賊討伐作戦を無事に終え、しばらくぶりに帰還したジュリエッタが耳にしたのが件の噂話である。

ボードウイン卿の妹君は火星へ留学していると聞いていたが、なぜ彼女が月へ……？ —— 疑問を抱いても、一体どういうことだと部下に聞いただすわけにもいかない。ここ月面基地はギャラルホルン最大最強の艦隊アリアンロッドの本拠地。ジュリエッタ・ジュリス准将はその司令官だ。というのに、要人が訪れてラスタル・エリオンと会谈するという重要事項を偶然、しかも部下の噂で耳にしただなんて。それでも統率者かと笑われてしまう。

凜々しき女騎士と持ち上げられても、やはりそんなものかと諦観が胸に押し寄せる。

「まったく……、一体どれほど民間出身者を信用しない組織なんでしょうね！」

心の中にはしまいきれない毒を独り言で吐き出して、ジュリエッタは孤独にくちびるを噛んだ。地位に見合った情報が与えられない悔しさが消化不良をおこして、愚痴を吐いたくらいでは胃のあたりのむかむかがおさまらない。

棧橋に停泊しているエリオン家のスキップジャック級戦艦へフリズスキヤルヴをガラスごしに眺めながら、ジュリエッタは貴族院との距離感を何度でも実感させられるのだ。

威風堂々と赤いヨルムンガンドの紋章を見せつける巨躯は、ジュリエッタが指揮官をつとめる月外縁軌道統合艦隊へアリアンロッドの旗艦である。

だが、いかにアリアンロッドの船といえど、艦長席に座るのは代々エリオン家にお仕えしてきた家臣のみと決まっている。ボードウイン家の専用艦へスレイプニルにも同様に、セブンスターズの当主や嫡男が座乗する艦船には定められたクルーがいる。艦長だけでなくオペレーターにメカニック、執事、メイド、シェフ、仕立て屋にいた

るまで、みな生まれたときからそのように教育されるのだという。

主人の戦艦を預かるためだけに産まれて生きる専従者がいる以上、ぽつと出のジュリエッタなどが横取りするわけにはいかない。

マクギリス・フアリドが目指した『誰もが等しく競い合う世界』を本当の意味で実現されてしまつては、彼らはたちまち路頭に迷つてしまう。

エリオン家とは無関係にラスタル個人の私兵であつたジュリエッタはへマクギリス・フアリド事件を受けて正式に『准将』という階級を得たが、それだつてギヤラルホルンという組織は公平、平等に改革されたのだから文句を言うなど地球外出身者を黙らせるためのプロパガンダにすぎないのだ。

ジュリエッタがへガンダム・バルバトスへの首級をあげた一幕は、ギヤラルホルン・ドリームとして喧伝された。

『地球経済圏、コロニー、圏外圏の出身者でも悪魔の首を取ることでできれば出世がかなう。』

それが新しいへ秩序だ。あの戦場で殺されまいと抗い続けたチンピラどもの存在などきれいさっぱり消し去つて、ラスタル・エリオン公の威光のもと再編されたギヤラルホルンは『悪魔の首さえ手に入れば』という条件つきで、誰もが等しく競い合う新体制を実現してみた。

金品の贈答による口利きを排除し、ベッド・テクニクで成り上がった淫売を決して赦さない。

新たな方針が示されたおかげで兵士の士気はより向上し、各部隊は対ガンダム戦を視野に入れた対策をはじめた。

旧来の作戦にしがみついていたこれまでの部隊が、新しい作戦を立案し、我こそは出世の引き金に手をかけようと奮い立つ。ガンダム狩りという椅子取りゲームはギヤラルホルンをより強く、より豊かに作り替えていく。

みな向上心が強く、限られた上役のポストを求めてよく働くので尖兵として有用ではあるが……、これが『民主的』だというなら、おそろしいことだ。

地球経済圏からの出資で成り立っている以上、ギヤラルホルンにも予算というものがある。生活レベルを一定に保つためには、兵士が増えすぎては困るのだ。必然的に、人数を調整する必要がある。ゆえに不運なパイロットたちに運悪く戦死してもらおうことで現状を維持する。

さいわい、戦場では死因が何であれ戦没者として処理してしまえる。整備不良の〈グレイズ〉を割り当てられた兵士たちは、思惑通り戻らなかった。

ずっとそうだった。昔からそうらしいのだ。

生け贄たちには使えもしない武器を与える。これから鎮圧するコロニー労働者でも、膿であると断罪されたギヤラルホルンの兵隊たちでも。削減されるときは必ず兵器がそばにある。ジュリエッタが初陣を飾ったときには既に慣習化していた。

味方からも多少の被害が出ないと角が立つから——という理由で散らされていった数多の命。足の動かない〈グレイズシルト〉が、燃料不足の〈レギンレイズ〉が、〈ガンダム・バルバトス〉の前に差し出されては狩られていくさまを、同じ戦場で見届けた。不要になった機体ごと〈ダインスレイヴ〉の餌食になったパイロットたちは、そういえば火星の出身だった。

あのときジュリエッタが〈ガンダム・バルバトス〉の首を預かったのは、イオク・クジャン公が討ち死にしてしまったからだと思っていた。代役をつとめたつもりだった。

だが、違ったのだ。シナリオは最初からジュリエッタの勝利と決まっていた。

悪魔討伐であるべき鉄華団殲滅作戦に〈ガンダム・キマリスヴィダール〉は姿も見せず、作戦は火星支部の〈グレイズ〉と月外縁軌道統合艦隊の〈グレイズシルト〉を動員して行なわれた。

そして〈レギンレイズ・ジュリア〉が悪魔を討つて、前代未聞の大出世を果たした。

出身地がどうあれ実力によって成り上がることは可能なのだと、出自や身分を言い訳に恨み言を垂れる怠惰な兵士たちの鼻先にエサと

してぶら下げられた格好である。ジュリエッタ・ジュリスはM S操縦の腕だけでここまで成り上がった。だから、戦闘技能さえあれば出世はかなう。ゆえに、出世ができないのはお前の努力が足りないだけだ。……という、自己責任論に転嫁してしまったのだ。

根強いカースト意識によってへヴィーンゴールヴへ外出身者がおびやかな待遇に甘んじねばならない現状は、何も変わらないまま。

明日にもここへたどり着いてしまう彼女は、知っているのだろうか。

ファリド家のガンダムフレームである（ガンダム・アウナス）を別名義で買い取ったのは妹のアルミリアだ——という情報はガエリオとの雑談の中から得ているが、軍部の内情を詳しく知る術をアルミリアは持っていないはず。

アリアンロッドの職域で暗躍する『白いガンダムフレーム』の噂はジュリエッタのもとにも届いている。フェンリル狼をかたどったノーズアームも。エイハブ・ウェーブの固有周波数がアウナスと一致すること

も。  
（ラスタル様は、また新しい生け贄を用意されたのか……）

もしもアルミリアが護衛にガンダムを連れてくるなら、格好の的になる。ガンダムフレームと聞けば目の色を変えて前線配備を願いつてくる部下は数知れないだろう。今や『悪魔の首』は出世の夢を叶えてくれるアイテムだ。

海賊討伐作戦とあれば、ガンダムを秘蔵しているかもしれない志願者が集まるようになった。密輸の取り締まりと聞けば、ガンダムの首があるかもしれないと兵士が出撃許可をあおいでくる。

マクギリスが蜂起し、革命を鎮圧すればそうなるとラスタルはあらかじめ読んでいたのだろう。

どうやら十年以上も前から両者は互いを利用しあっていたらしい。厄祭戦後三百年が経過し、英雄たちは老いていき、ギャラルホルンは年月とともにそのありようを変えていった。その漸進的変化は権力の腐敗だとして、原点回帰を叫んだのがマクギリス・ファリドのもとに集った革命軍だった。

しかし体制とはシステムであり、時代に適した形に変化していくものだ。そうすべからくして、常に最適化されていく。現体制を刷新するという意図こそ『革命』かもしれないが、旧時代の価値観へ押し戻そうとするならば、それは退化をうながす『保守』の悪例である。

革命を騙る強硬保守派を組織の膿として殲滅すれば、ギャラルホルンは真の革新を得るだろうと預言したのが賢君ラスタル・エリオンだった。

“生まれや身分に頓着せず、身の丈にあつた立場で生きることが人類の幸福につながる。”

マクギリスとラスタルの革命思想は、言葉にすればぞつとするほど似通っていて、言葉を綴ることの恐怖をジュリエッタに見せ付ける。ギャラルホルンが守護している『世界』とは一体何なのかを、改めて実感させられるようだった。

人々の心の安寧を、世界の法と秩序によって守るのがギャラルホルンのつとめだ。

欲をかけば天罰が下り、献身が報われる〈法〉のもと、努力は必ず実を結び、怠惰であれば失墜する〈秩序〉を守る。公正なる世界において、被害者は必ず悪人でなければならない。何の落ち度もない犠牲者が出てしまうようでは、善良な市民が安心して暮らせないからだ。

罪なき者には幸福を。

罪ある者には断罪を。

すべての犠牲に罪状を——そして非のない民に火の粉が降り掛かることは決してないという約束を。

そういう法と秩序を、ジュリエッタは守っている。

だから祈る。どうか悪魔を月へ連れてきてくれるなど。

英雄ガエリオ・ボードウインの妹としてではなく、逆賊マクギリス・ファリドの妻として生きたかった乙女の志が手折られてしまうさまを、せめてこの目で見たくはない。

▼

旗を振るマーシヤラーの誘導に従い、ビスコー級クルーザーへセイズはつつがなくドックに侵入する。左右から伸びてきたアームが船体側面をつかまえて、穩便に停止した。

さすがギャラルホルン月面基地の軍港だけあって規模、設備ともに〈方舟〉の比ではない。

エアロックが順繰りに閉じていき、エリア内が大気で満たされたことを示すグリーンランプが点灯する。誘導灯を振っていたマーシヤラーたちもヘルメットをとって敬礼してみせると、低重力をふわりと泳いでそれぞれの持ち場へ戻っていく。

重力は、そして1Gへ。  
へセイズ〉からフロアへとタラップが差し伸べられる。

ライドのエスコートでアルミリアが姿を見せれば、月外縁軌道統合艦隊へアリアンロッドの兵士たちが最敬礼で出迎えた。やはりボードウィン家の名のせいだろうか。兵士たちのうやうやしい歓迎に左胸に手を当て返礼しつつも、アルミリアは複雑な気持ちになって目を伏せる。

かつて『エドモントンで亡くなった』と知らされた兄は——ガエリオ・ボードウインは、音信を絶っていた二年間、このアリアンロッドに身を寄せていたという。

フアリド家に続いてボードウィン家をも乗っ取らんと画策していた逆賊マクギリスを摘発し、ギャラルホルンを守ったと語り継がれる、新時代の英雄。もう戦わないと決意をかため、今もへヴィー・ンゴールヴで静養しているのだろうか。アリアンロッドの指揮官であるジュリエッタ・ジュリス准将との結婚も噂されている。

司令官の未来の夫の妹にあたるアルミリアにも最大の礼を尽くす必要があるのだろう。七家の合議制が廃止された新体制のギャラルホルンにおいてもセブンスターズの権力は揺るぎない。

だがアルミリアにとって、アリアンロッドは仇にも等しい存在だ。エドモントンで兄は亡くなった、そう伝えられたとき、アルミリアは偽物の遺体を前に目が溶けるほど泣き続けた。

実は生きていたことを、どうして教えてくれなかったのか。アルミリアにはわからない。どうして地球本部へヴィーンゴールヴの地下祭壇に偽物のへガンダム・キマリスを格納させ、家族の目を欺いてまで隠す必要があったのか。わからない。今でもわからない。エリオン公がそのように取りはからったのだと父に兄に言い聞かされて、納得したふりこそしたけれど。

知らなくていい、わからなくていいと突き放された心は、どこへも行けないまま冷たく凍りついて、この世界を支配するへ法とへ秩序への復讐心になった。

「長旅ご足労だったな、アルミリア嬢」

そして人垣を割るようにして現れた仇敵を前に、アルミリアは淑女然と一礼してみせる。

かたわらで秘書に扮するライドを興味深げに一瞥したラスタルは、事務的な直立姿勢を崩さない若き傭兵に向けて「道中いかがだったかな」と投げかけた。

潇洒なスーツ姿のライドは黙礼に撤して応じない。ここで会談を行なうのはアルミリアだ。

「今しばらく楽しんでいたい旅でしたわ」

「ずいぶん財を擲たれたのではないかな？」

「実り多い投資をさせていただきました。ラスタル様のお慈悲に感謝します」

にこりと屈託なく笑んでみせ、ラスタルとともに棧橋を見遣る。フアリド家のハーフビーク級戦艦へヴァナルガンド。消さずに残されていたフェンリルの紋章を見て、アルミリアは両手を胸に組み合わせた。ああ、無事だったのだと思えただけで胸に郷愁が押し寄せてくる。

セブンスターズの合議制が廃止とされた折り、ギャラルホルンには『統制局』『監査局』『警察局』『総務局』にくわえて『貴族院』という

部署が新設された。エリオン、ボードウィン、バクラザン、ファルク四家とその使用人たちのための所属局だ。(ボードウィン家のヘスレイプニル)の乗組員たちは艦長からオペレーター、給養員に至るまで、統制局から貴族院へ異動になったという)

取り潰しになった家々の艦船はナノラミネート塗料を上塗りされ、一般の部隊へ下賜される運命にあった。

叶うのならばフェンリル・ブルーの紋章を戴く艦船はすべて引き取りたかったし、贅沢を言うのならイシユウ家のガンダムフレームとカルタの座乗艦へヴァナディースも丁重に保護したかったのだが、間に合わずクジャン家の戦艦もろとも改修を施され、エイハブ・ウェーブの固有周波数という、アルミリアには知り得ようもない数字で見分けのつかない遠方へ遣られてしまった。

せめて夫の形見だけは、彼の最期の足跡をたどるものだけでも手に入れることができ、よかった。

みんなのおかげで、取り戻せたのだ。アルミリアひとりではどうにもならなかった願いを、みんなが力を合わせて叶えてくれた。

どうしようもなく胸がいっぱいになって、祈るように組み合わせた指先で感慨をぎゅうと抱きしめる。

「ご所望のバエルはへヴァナルガンド」のMSモビルスーツデツキだ。確認を？」  
「確認なら、手前の整備士に行なわせます。つきましては、火星の共同宇宙港へ方舟へ運ばせていただきたいのですけれど」

「それはできないな」

ばさり、ロングコートが翻る。

ラスタルの片腕が持ち上がれば、銃を持った兵士がずらりとアルミリアを取り囲んだ。ライドがさつとアルミリアを背後にかぼうが、……ご丁寧に退路は残されており、アルミリアの殺害ではなくラスタルの護衛という体裁をとっている。

銃口の数は十二。

この状況でライドが銃を抜くのはまずい。秘書ではなく護衛の傭兵であることは现阶段でラスタルにしか気付かれていない。うかつに武装を明らかにすれば、射殺の口実を与えるだけだ。



「これは一体どういうことですか、ラスタル様！」

アルミリアが氣丈を装って声を張る。怯えをおくびにも出さないのは、さすがボードウィン家の御息女というべきだろう。

確かにこのタイミングで警戒するのは商人としておかしい。仮面をかぶっていないなくとも、今のアルミリアはプライベートで管理・運営している武器商へモンターク商会の代表であり、今は取引先との会谈中だ。

かたや火星随一の武器商人、かたや法と秩序の番人。モンターク商会側は提示された金額通り、約束通りに支払いを済ませただから、ここで交戦の構えを見せることはラスタル・エリオン公の遵法精神を疑っていることになる。

渡すつもりのない商品を取り引きに出し、金銭を騙し取るなど、あつてはならない蛮行だ。商人にとつては一生ぶんの信用をも失いかねない不義理である。

……それとも善も悪も行なうラスタル様なら詐欺行為もやるのか。今のギャラルホルンの『英雄』はガルス・ボードウインの息子ガエリオ・ボードウインが取って代わり、三百年前に群雄の長であったアグニカ・カイエルなど創世神話の登場人物にすぎない。ガンダムフレームもまた過去に葬られた骨董品に成り下がり、もはや維持費ばかりかかる無用の長物のはずだろう。蔵の中にあるだけでよかつた一点モノのアンティークは、持っていてメリツトのない金属塊になった。

ラスタル・エリオン公の主導により生まれ変わった新生ギャラルホルンにおいて、三百年前の伝説など何の意味も持たないはず。

「ヘガンダム・バエル」――、その新たな持ち主は不運な最期を遂げるだろう」

「……ど　ういう、意味です……？」

わたしを殺して、接收しようというわけですか。ふるえそうになる声を叱咤して、アルミリアは細い脚を踏ん張る。トドやライド、子供たち。火星で雇い入れた仲間が働いて、稼いで、用意してくれたチャンスだったのだ。

アルミリアのために、トドが貯金をしていてくれた。マクギリスの最期はハーブピーク級戦艦へヴァナルガンドによる特攻だったと伝えてくれたのも彼だった。

この月面基地まで無事に送り届けてくれた年若い傭兵たち。戦闘もそれ以外の仕事も、みな嫌な顔ひとつせず、ふたつ返事でこなしてくれた。鉄華団という、生前のマクギリスが高く評価していた少年兵集団の生き残りだ。彼らの献身を、無碍にするわけにはいかない。

万事休すかとくちびるを噛みしめた、そのときだった。

凜と甲高い声が降る。

「アルミリア様！」

はつとふりあおげば、タラップを転がるように駆け降りてくる少年の姿が目飛び込んできた。淡い金髪はふわりと場違いなほどやわらかく、光源の少ないドックでさえきらきらとまばゆい。

リタだ。

「こちらへきてはだめ！」

制止も聞かず、銃口には目もくれず、アルミリアめがけて一目散に走ってくる。飛び込んできた小さな体をとっさに抱きとめると、ああと一度強く抱きしめた。

アルミリアが外へ出るとき、非常用シャッターの点検を兼ねて隔壁を一度デフォルトに戻したから、そのとき逃げ出してしまっていたのだろう。部屋で待っているように言い含めておいたけれど、もう十日も窮屈な思いをしてきたのだ。言うことを聞けなくてもしようがない。

膝をついて、言い聞かせるように頬を撫でる。ライトグリーンのおおきなひとみが、心細くうるんで揺れている。

「リタ、ここは危険なの。みなさんと一緒に待っていて」

「危険ならなおさらアルミリア様を置いていけない。一緒に帰りましょう？　ねえ、帰ろうよ」

アルミリアとライドの手をひとつずつつかみ、ぐいぐいと引っ張る姿は両親に甘える幼子のようにだ。――が、不意にびくりと肩を跳ね上げた。

彫像ように固まってしまったりタの視線を追って見上げれば、ラスタルと目が合う。

「ほう？」と検分するように、ラスタルがあご髭を撫でた。「これは驚いた。マクギリスのクローン……ではないようだが、実によくできた<sup>みがわり</sup>代替品だな」

「いいえ、この子はこの子です！ 誰の代わりでもありません。いたずらに信頼関係を損なう発言はお控えになってください」

「言葉を返すようだが、その程度で壊れる関係しか築けなかったあなたの至らなさを転嫁されても困る」

「詭弁を……っ」

「凶星を突かれ、詭弁だとレッテルを貼るしかできない——、まったく子供の屁理屈だな」

アルミリアはただ押し黙って、畏怖に身を硬くするリタを抱きしめる。

その姿に、ラスタルは失望を禁じえない。

(……マクギリスに似ていると思っただが、……)

少なくともマクギリスは、人前で弱さを見せるようなことはなかった。幼い子供のころからだ。ひとりであれば孤高に、親友ガエリオとふたりであれば親しげに、他者に囲まれていればまるで崇拜を集めているかのように見えた。

イズナリオ・ファリドに見初められて〈ヴィーンゴールヴ〉に持ち込まれ、愛玩動物<sup>ペット</sup>から養子へ、後継者へと大出世を果たした二元男娼。幼少より目をみはる美貌の持ち主だったが、容姿のうつくしさに反発するかのよう<sup>に</sup>に媚びず、飾らず、みずから粗野な印象を与えようとするかのような立ち振る舞いが実に特徴的だった。

七星会議におもむく養父が見せびらかすように同伴していたときでさえ、片手には必ず本を携えていた。

法を学び、秩序を糧とし、その明晰な頭脳をもってギャラルホルンの現状を打破しようとした。イズナリオ・ファリドのような搾取者が二度と現れないよう、世界そのものを変えてしまいたかったのだろう。二十年にも渡る略取の日々を耐え抜き、アグニカ・カイエルの提

唱した本来のギャラルホルンを取り戻そうとあがいてみせたのだから、見上げた反骨精神である。

手段さえ見誤らなければ、もう少し野放しにしてやっても構わないとラスタルは常々思っていた。

(これではマクギリスも鉄華団も浮かばれんな)

同じく光彩脱目の美少年だろうに、リタは自身の魅力が通用しないラスタルを本能的に震えおののき、その恐怖を隠そうともしない。

怖がってみせれば甘やかしてもらえなくても学習したのかもしれない。みずからの容姿がいかに愛くるしいかを自覚し、より可愛らしく見えるよう計算ずくで振る舞っている。ラスタルではなくイズナリオの前であれば、喜んで尻尾を振ったのだろう。

嫌悪をあらわにこそしないが侮蔑を含んだラスタルの眼光に戦慄し、子鹿のようにふるえている。

何とも情けない姿だ。かたわらで虎視眈々と反撃の機会をうかがっている鉄華団残党のほうがよくほど気概ある青年ではないか。

旧友に代わって取り立ててやった赤毛の傭兵は、今も脱出か報復かを天秤にかけ、知恵をめぐらせている。雇用主もろとも全滅してよしと判断すれば迷わずラスタルの喉笛を噛み切るのだろう。

アルミリアの秘書らしく殊勝にスーツをまとい、必要とあればギャラルホルンのパイロットスーツに袖を通してMSを駆る宇宙ネズミ。阿頼耶識システムの恩恵もなくガンダムフレームを操る技能まで備えている。

平静をよそおうグリーンアイズが、奥底では復讐心に爛々と煮えているのがラスタルにはありありと伝わってくる。

だがお荷物がふたりに増えた今、彼は報復を断念せざるをえない。

大人になれなかった愚かな子供らにはじめて覚える感慨。それは同情だった。

撃ち方、構えよと合図する。

「哀れな逆賊の妻よ。せめてファリドの名ともに送ってやろう」

「あなたは……ボードウインの名に傷がつくのがお嫌なのでしょう！ イエスマンだけの軍隊に『個』はいらない、そうお考えなのでしょう

うっ」

「組織は個性を主張する場ではないのだよ、アルミリア嬢。作戦に個人の情を持ち込む兵士は障害になる。『個』は集団の和を乱す。肥大した個はやがて、世界を蝕む膿となる」

火星支部の汚職も、地球経済圏との癒着もすべて、自分だけが甘い汁をすすろうとする『個』が引き起こしたものだ。ギャラルホルンの威信を傷つけ、恥部とまで呼ばれたアイン・ダルトン三尉の動機も私怨だったという。

自分ひとりだけでも目的を遂げようとし、その手段を選ばぬような兵隊は、ギャラルホルンに必要ない。何事も定められた手順を踏み、組織や上官、恩人の名誉を傷つけぬよう配慮すべきだ。上位者から許諾を得、周囲から認められた上で行なわれなければ反発が生まれる。ラストルではない、ギャラルホルンの法と秩序が黙っていないだろう。

絶対であるべき組織の瑕疵を、守られるべき人々に晒すのは悪手である。

軍閥と言えどギャラルホルンは所属する個人の集合体であり、ひとりの罪を摘発すれば、外部から『罪の集合体』と見なされてしまう。

すべての罪を暴かずとも、隠しておいたほうが穏便に済むものは隠せばいい。誰もみな安心したいのだ。ギャラルホルンという圧倒的軍事力の庇護のもと、世界は平和であり続けると。安寧を夢見ていたのだ。ひとりが黙って耐えれば済んだものを、わざわざ露呈させようなど、まったく馬鹿げている。

これから刷新する組織の汚職を公にし、ただでさえ失墜していた経済圏からの信用を完全に失わせようとしたマクギリスのやり方は、ラストルに言わせれば稚拙でしかない。「俺を搾取した大人はこんな汚いやつらだった」と被害者ぶつて泣き叫んで、自分に酔っている子供のヒロイズムだろう。実に滑稽だ。

力のない犠牲者にはせいぜい我慢させておけばいい。

やがて不満が爆発するころ武器を卸し、見せしめに一掃してやれば世界は『ふたたび安寧を手に入れた』と実感できる。テロリストの反

乱と、鉄槌を下すギャラルホルン。ここは公正な世界であるというイメージこそ、民衆が求める安らぎの姿だろう。

ノブリス・ゴルドンに取って代わってやると息巻き、マクギリス・フアリドの革命思想を引き継いでなお、モニターク商会の仕事はどちらの真似事も中途半端なまま。

だから子供だというのだ。

ふたたびギャラルホルンの信用に傷をつけるならばアルミリア・フアリドもまた膿として断罪せねばならない。

「……賢明な兄には似れば長生きできたものを。こうまでマクギリスに似合いの娘だったとはな」

「本望ですわッ！」

知らずリタを抱きしめる腕に力がこもる。どんな言葉を綴ろうともラスタルまでは届かない。叫びはことごとく打ち消され、否定になって打ち返されてくる。

ついにあふれそうになった涙を隠すように、リタが腕の中でみじろいだ。

もがくように抜け出して、アルミリアの前で両手を広げる。

「やめろー！ アルミリア様をいじめるなっ……」

立ちはだかつて壁になるにも、小さな子供ではあまりに頼りない。だが、凶らずも細く短い両腕をめいっばい伸ばし、両手のひらを見せていれば、非武装であることは明らかだ。傭兵が同じことをやれば問答無用で射殺されていた。

この子供も、そこまで計算ずくではなかったろうが。

「よく躰けられた騎士<sup>ナイト</sup>だな」とラスタルは鷹揚に笑うと、痛ましげに目を眇めた。「だが、可哀想に。洗脳を受けているようだ」

「え……………?」

「彼女は君に本を与えなかったか？ アグニカ・カイエルの伝説——いや、鳥の凶鑑だ」

「……………?」

明らかに動揺する幼子は、金髪碧眼の容姿ばかりうつくしく、努力もすべて胡麻搗りに使い果たして頭の中は空洞らしい。希有な美貌

に甘えた、なんとも愚かな子供だ。

憐憫に目を細め、ラストルはゆるやかにとどめをさす。

「やめてください、ラストル様！　どうか！」

「哀れなマクギリス・ファリドの代替品、きみは、きみ自身の役割をよくわかっているのではないかな？」

「リタ！　耳を貸してはだめ！」

アルミリアの呼び声も虚しく、白い頬はみるみる青ざめ、あどけないひとみが絶望に染まる。広げていた両手がぱたり、力を失って落ちた。

「あ……あああ……っ」

男娼としての生き方を、アルミリアによって否定されたことは事実なのだ。

仕事を失ったら生きていけないのに、仕事をさせてくれないアルミリア。あたたかい食事を振る舞ってくれるし、清潔なベッドを用意してくれるし、絵本を読み聞かせてくれる。

でも、九人いる金髪の子供みんなに、アルミリアはいつも平等だった。

客をとれば、みんなリタを特別だと言ってくれたのに。透明感のある金髪も、くすみひとつない白い肌も、これは稀少な品物だと珍しかった。緑色の双眸をのぞき込み、こうも明るいライトグリーンが人間に現れるのは希有なことだと称賛した。なのに。

モニターク商会では誰もリタを可愛いと言ってくれない。特別きれいだと誰も言ってくれない。アルミリアも、ライドも、エンビもヒルメもトロウもみんな、リタを他の子供と同じに扱う。

以前、夕食を囲むためにと宇宙から降りてきたという少年兵たちは、リタよりも年上なのにヒルメやトロウに抱っこしてもらっていて、仲間同士でも車いすを押しあつていて、——うらやましかった。仕事をして、アルミリアやライドに褒められ労われているあの椅子に座っているのが、どうしてリタではないのだろうかと泣きたくなった。

あんなふうになれたらいいと思う。でもわからない。仲間なんていない。同世代の友達なんて知らない。リタの仕事はひとりと呼ば

れていくものだ。みんなで作る仕事じゃない。

リタだって、リタだってああやって頭を撫でて褒めてほしいのに。彼らと同じ戦う仕事ができる体にもしてもらえない。

「愛しているわ、リタ。あなたはあなたよ。聞いて、怖いことは何もないの、リタ」

上滑りする言葉は涙に歪む。アルミリアが捧げようとする無償の愛は、リタだけのものではない。

アルミリアの好きな人はリタじゃない。一番大切なのも、特別に愛しているのも、リタじゃなくて『マクギリス』だ。

リタは高級男娼だが、火星では十六歳未満、地球では十八歳未満の売春が禁じられている。（木星圏なら制限はないが、あちらでは店主が女を貸与する商売だ）

幸か不幸か火星では、法と秩序の目をかいくぐり、偶然見目うるわしく生まれただけの子供たちが略取され続けていた。

そうした現状を憂いて、モンターク商会は少年男娼たちの身柄を売春宿ごと買い取った。もしも違法な売春が発覚すれば、売ったほうも買ったほうも有罪になり、食い物にされただけの子供たちまで未来を奪われてしまうからだ。

幼い日のマクギリスを救いたい代償行為だったかもしれない。それでもどうか幼い子供たちが罪に汚されてしまう前にと、傭兵を使って私刑を執行もした。

しかし、リタはいつだって現実を受け入れてきた。未来など望まない。明日よりも今日、今、誰かに抱きしめてほしいのだ。

だって、いつまで愛してもらえる容姿のままいられるかわからない。

愛してくれるなら誰でもよかった。褒めてもらえるのならどんな仕事だってやる。稀少な金髪碧眼だけが取り柄で、成長してしまうまでというタイムリミットがリタにはある。美少年でいられる今のうちに体売って、一生ぶんの愛を買わなくてはならない。

リタはだから、とても従順で、いつも人形のように大人しい。絶えず現実を憎み、疎み、怒りの中で変革を望み続けたマクギリスのよう



な強靱な野心は持っていない。思想など持ったこともない。何をされても嫌がって泣いたりしない。逃げたりなんか絶対しない。血を流しても痛くないふりでにつこり笑って、ありがとうございますと温情に感謝してみせる、大人に都合のいい子供であり続けた。

この世界に適応し、順応して平穩に、生きることが赦されているはずだった。

「みずからの罪を暴かれるのが怖いか？」

支配者はすべてを見通して、憐れむように眦の皺を深くした。

## 009 リタ・モンターク

「みずからの罪を暴かれるのが怖いか？」

世界すべてを見下ろすように、ラスタルは憐れみの目でもってアルミリアを睥睨した。

「わたしの罪など……、すべてはあなたの思うままになるのでしょうか！ 旧態依然とした組織を守るため、セブンスターズの豊かさを維持するためなら、あなたはどんな罪をもでっちあげてしまわれる……!!」

アルミリアが忘れるはずもない、へマクギリス・ファリド事件へなんて、ひどいものだった。今だって思い返すたび悔し涙があふれてくる。

調べてみれば、証拠はひとつだって出てこない。鉄華団はマクギリス・ファリド元准将の指示のもと、破壊や虐殺を繰り返した犯罪集団である——という報道は、ギャラルホルンによる創作だったのだ。

マクギリスはセブンスターズの当主たちを人質にとったが、ひとりだって手にかけていない。へガンダム・バエルへが持ち出されたとき各家々のガンダムフレームを格納していた地下祭壇が一部破損したというが、格納庫はすべて電子ロックで、守り手はいなかった。現場からいくらも離れていないファリド邸に音も振動も響いてこなかった。革命軍のクーデターは、ギャラルホルンのへ法へとへ秩序へに則って行なわれていた。

それでもマクギリスのやり方は間違っていたのか？ 組織の膿だとして排除されなければならぬくらい、間違っていたのか。

被害者不在の濡れ衣を着せられ、世界から弾劾されなければならなかったのか。

アリアンロッドがアープラウ植民地域であるクリュセ郊外にへダインスレイヴを撃ち込み、それを隠匿したのは、それが罪だという自覚があったせいだろう。当時アープラウ代表をつとめていた蒔苗東護ノ介氏は領内への違法兵器解禁に難色を示したことは、東アープラウの教養層が当たり前に記憶している。

なおも革命の徒は『悪者』なのだと言伝を続けた結果、地球圏では騙しきれなかった東アブラウのみが反ギャラルホルンを叫び、対立は外から中へ。誘導されるがまま、民衆が抱いていたギャラルホルンへの不満は噴出しなくなった。

鉄華団残党を今もそばにしているラスカー・アレジ現代表は、ギャラルホルンが恣意的に創作した東西アブラウの溝の板挟みになりながら、それでもアブラウの民衆を守る政策をとり続けている。

そして変わらない安寧を取り戻したのは、表向きの『合議制の解体』によって糾弾を逃れたセブンスターズだ。

「アリアンロッドのほうがよく、罪もない人々を犠牲にしてきた……子供たちまで！ あなたこそ、その罪を暴かれ、弾劾されるべきではないのですか!!」

「あなただって肉を喰うだろう。何の罪もない動植物を殺め、糧としてきたはずだが？」

鳥の肉を、羊の肉を。食らって生きてきたはずだと。牛の肉はとても美味しい。そうしたすべての食肉に、命があり、親があり、子があがる個体もいただろう。

きつと、死にたくはなかった。

しかし肉食は罪とされない。何故だ？ それが『食用』であると免罪されているからだ。罪もない動物を殺めたのではないと、罪悪感を除く教育が行き届いている。

皿の上のその肉は『食べ物』であるという文明の庇護下に生きているからこそ、食肉を調理し、切り分け、咀嚼し嚥下できる。食卓に並んだ皿を見て、いちいち罪なき命を奪ってしまった……などと自責に囚われてしまったのは健全な精神が育たない。だから狩りのときには『獲物』と呼び、食卓では『肉』と呼ぶのだろう。

生命倫理に縛られることなく、円滑に殺害できるように。

戦場でも同じだ。あれは『敵』だと贖宥状を与えてやれば、兵士は迷わないで済む。火星は『出がらしの惑星』で、そこに生きるのは『労働力』だと教えてやればいい。あるいは大義のために排除すべき『悪』

であると命令してやればいい。あるいは『獣』を狩れと宥免してやれば、赦された兵士たちは躊躇も罪悪もあつさり消し去り、意気揚々と『戦果』に手を伸ばすだろう。そこには負うべき罪も、責任も後悔もありはしない。

死すべき運命の害獣が、運命に従って死んだだけだ。

人はなぜ何の罪もない他者を殺めるのか、彼らを食い物にする権利があるのか——、そんな余計な疑念を抱き、思考にとらわれた者の人生に楽しみはない。肉を喰う隣人までもおそろしい加害者のように見えてくるだろう。

嗜好品を見て、これも労働者の血と汗と涙の上にあるのだ……と悲嘆に暮れてどうなる？ 食卓の肉を見て、この獣にも家族があり、事切れる寸前まで殺されまいと抗ったのだろう……などと想像してどうなる。

罪悪感という足枷を引きずって進む未来は、閉塞感ばかりの暗闇だ。

「知らないほうがしあわせだということもある。みずから考えず、定められた規範に従うことで人類は安寧を手に入れられる」

あなたもそうだろう。ここにいるみなが罪人であろうと、支配者は双眸を眇める。

「……お姫さん」

脱出を。——ライドが静かに耳打ちする。

ここで足止めされていたらアリアンロッド艦隊に囲まれてしまう。指揮権はジュリエッタ・ジュリス准将に委譲されており、ラスタルからの討伐命令が通っている可能性もある。モンターク商会ごとここで切るつもりなら充分ありえる話だろう。もとより長居は危険だ。

逃げるなら今しかない。外にはヒルメのヘグリムゲルデ・ヴァンプン2号機が待ち構えており、ナノラミネート塗料が劣化しやすいカタパルトデッキを遠距離から狙撃できる。MSでの追撃を防ぐだけの時間稼ぎだが、ヒルメ機のガンカメラモード、ウタの操舵テクニク

を合わせればヘルーナ・ドロップへ側へ加速し、デブリ帯へ逃げ込める。

背にしたタラップの向こう側ではエンビとトロウが待機している。アルミリアのアクセサリーに仕込んだ盗聴器のレシーバー越しに、今ごろ出てくる機会をうかがっているはずだ。ラスタルによる発砲命令にはエンビが射撃で返すだろう。エンビはへマーナガルム隊の中で最もシューティングテクニクに優れている。

打てる限りの手は打ってある。

複雑な面持ちでうなずいたアルミリアのスカートにとりすがるように、リタが背伸びをする。小声で交わされる何事かから仲間はずれにされて不満なのか、アルミリアとライドを交互に見上げる。

リタは、——想定外の荷物だが、ライドが小脇に抱えるしかないだろう。居住ブロックに閉じ込め、大人しくしているようヘルメが重ねて説得してくれたと聞いていたが、一体なぜ出てきてしまったのか……。

アルミリアのロングスカートの中には発煙筒が仕込んであり、足払いのように蹴り上げて抱きかかえればスモークの中へ逃げる事が可能だった。(ライドがジャケットの中に仕込んだ拳銃を抜くよりよほど安全だ)

宇宙ネズミの空間認識能力をもってすれば視野の悪さなど大した問題ではない。だが、想定通りにアルミリアを抱えればリタを置き去りにすることになる。リタを抱えればアルミリアを誘導するために両手がふさがり、ライド自身が丸腰になる。

せめて阿頼耶識使いをもうひとり連れていけば何とかなつたのだが……、エンビはアーブラウ街頭のデモで演説したときテレビに顔が映ってしまっているし、トロウはトロウで秘書や黒服に擬態する芝居が下手だ。貴重な戦力であるMSパイロットをわざわざスーツに着替えさせて護衛につけるのは非合理的だからと、連れてこない選択をした。

仲間は今、ライドの荷物を半分持つてくれる距離にはいない。

横目にちらり、タラップを振り返る。アルミリアがライドの手を

ぎゆうと握った。

このままアルミリアに足払いをかけてリタをひつつかんで、駆け上がって逃げ込むまで——うまくいって約十秒。スモークに乗じたエンジンの援護射撃、トロウの誘導でタラップを引き上げて「ヘイズ」が発進するまで、……あわせて二〇〇秒あまりか、あるいは。

つかまえた小動物でも観察するように見下ろしてくるラスタルと睨み合う膠着を、破ったのは銃声だった。

ぱん、とかわいた音が一発、静寂を割る。

息を呑む暇もなかった。スローモーションのように翻ったアリアンロッドグリーンのマント、まるでライドの心を先回りしたかのよう、ぱつと赤く弾けた鮮血。

火を噴いた銃口は十二のうちのどれでもない。拳銃はラスタルの手の中で、細い煙をまよって揺れる。油断していた。

眼前で紙のように吹き飛ぶ小さな体。荷物になると疎んじてしまったせいなのか、アルミリアの手は届かない。

絹を裂く悲鳴が反響する。

「リタ——！！」

とつさに駆けすがった白いジャケットは、既に泉のような赤である。凶弾は薄い腹を貫通し、ライドの背後でフロアに跳ね返って赤い爪痕をひとすじ残す。

「リタ！ しつかりしてっ……だれか、誰かお医者様を！！ すぐに医務室を手配してください！」

ひざまずいて抱き寄せれば、スカートは重たく濡れ、端から赤く黒ずんでいく。薄い下腹の風穴はどく、どくと断続的に血を吐き出させているのに、あどけない面影は、自身に何が起こったのかもわかっていないようだ。

弱まっていく脈動とともに赤は流出し、体温、血圧の低下とともに顔色は青白く褪せていく。真つ赤な口紅が、ごぼりと口内からあふれた。

「ア…… ミ、ア さま、」

血の気を失つたいとけない両腕が、弱々しくも精一杯、アルミリアに向かつて伸びる。今にも失われそうな命をつなぎとめようと、アルミリアはただ抱きしめることしかできない。どうか出血が止まるように、どうか。

しかし血だまりは無機質なフロアにまるく広がり、十三の銃口に見守られたまま、リタはほうと安心したように微笑んだ。

アルミリアにしっかりと抱きしめられた腕の中、静かな呼吸をふうと終える。

息を引き取るそのさまは、まるで幸福の中で眠るように安らかだった。

「リタ………う？」

どうして。これ以上なく満足そうに短い一生をしめくくった少年の頬に、あつい涙の雨が降る。アルミリアの悲しみだけが、蠟人形のような頬を滑り落ちていく。

銃口の細い煙が絶えたころ、静かに口火を切ったのはラスタルだった。

「人間が真に奴隷となるのは、奴隷の鎖を外されたときだ」

奴隷であったのだと教えられ、憐れまれて鎖から解き放たれ、さあ自由になれ——と命じられたとき、足枷以外の何も持たない自分自身に愕然とする。

それこそ、人間が本当の意味で奴隷に成り下がる瞬間だ。

少年男娼も、少年兵も。セブンスターズの子女も、その使用人も、みなそうだろう。選択肢という存在を知らない限り、いかなる人生もひとつの運命として成立する。高級男娼も、場末の売春婦も、傭兵も、ヒューマンデブリも。食い物にされているとは知らず、役目を全うしているという心意気で穏やかに永らえ、往生することが可能である。人には生きるべき世界がある。

その世界を治める法と秩序に迎合し、適応しさえすれば、従順で聞き分けのいい『いい子』であり続けたならばこんなふうに幸福に果てることができる。

火星のメディアでも教えていただろう。子供とは無邪気で愛くるしく、学校と勉強が大好きで、大人の言うことをよく聞くべき存在だ——と、すべての子供がしあわせになれる方法を。

アルミリアの腕の中、赤い血に彩られたくちびるは満足そうにほほえんでいる。

「あんたは——っ」

糾弾ではなく戸惑いを装って、ライドが身構えた。ここでラスタルを責め、詰るならば言葉による反撃とみなされ、撃ち殺す口実を与えてしまうというつつさの機転である。

フロアに広がる血の海にひざまずいたまま、細く嗚咽をこぼすアルミリアを、いつでも引きずって逃げられる姿勢だ。抱えきれない荷物は捨てていける。傭兵として、ライドにはその覚悟がある。

「お前たちが望む世界では、それだけではない犠牲が生まれるぞ？」

お前にならばわかるだろうとライドを巻き込むように、ラスタルは眼光を剣呑に尖らせた。

……そうだ、ライドにはわかる。大人の道具として育ててきた少年兵、男娼たちは、いざ『普通の少年』であることを求められたとき、自身の生い立ちの異常さを知ってしまう。

かつて火星では、男児は警備会社へ少年兵として、女兒は花街へ娼婦として売られるのが常だった。誰も彼もそうであったから、それが『普通』だった。

だが、両親のもとで作られた子供たちという比較対象を目の当たりにして、ライドたち少年兵は普通ではなくなつた。誰からも望まれない『作られなかった子供』なのだと思い知つた。学校を抜け出し、街に背を向け、スラムに逃げ込んで耳を塞いでいなければ、少年兵は害獣なのだと誹り、罵る声はやまない。

へヒューマンデブリ廃止条約の調印以来、宇宙ネズミどころか少年兵すら少数派になつた。

ライドたちは生まれながらのテロリストだと誰もが知つている環境。居場所なんてどこにもない。これまで生きてきた人生とは、何の価値もない時間と資源の無駄だったのだと突きつけられて、同情さ



れ、憐憫を浴び続ければ、正気を保っていられる期間は長くない。魂を削り落とされ、砕かれて、過去はがらがらと音を立て崩壊していく。火星の孤児に限った話ではない。

たとえばアルミアつきのメイドたちは、ボードウィンに仕える家系の生まれである。男は執事になり、女はメイドになる。軍人にはならない。のちにエリオン家の艦長となる男も同じだ。のちにボードウィン家のメイドとなる女も。みな家々同士で血を交わし、先祖代々そのための教育を受けて育つ。主君と命運をともにすることが生まれる前から決まっている。

父も母も、生まれたときからそうなのだから、疑問を覚えることもない。

知りたいと願ったわけでもない奴隷に、現実の悲惨さなど教えてやる必要などないだろう。そのように生まれ、そのように生き、そうして生きていくのだから。

「そうやってっ……わ たしたちが……奪い続けた、からっ、リタはお父様お母様に抱きしめていたかくことすら知らないまま……!! 幼いころから命を切り売りして明日を買ってっ、そうしなければ生きられない世界にしてしまったのは、わたしたちギャラルホルンではないですか!」

犠牲を生んだのがアルミアだと言うなら、それは間違っていない。だってアルミアはセブンスターズの一家門ボードウィン家の息女だ。

子供だとか、獣だとか、膿だとか。火星人だとか、コロニー出身者だとか。都合よく理由をつけては無実の罪で処刑してきたギャラルホルンに生まれ、何不自由なく育ったアルミアは確かに加害者のひとりだと、ふるえる声のみずからの罪を肯定する。

火星など出がらしの惑星だと教えられれば、考えもせずそれを信じた。真偽など確かめようとせず、圏外圏に生きる人々を差別する言葉を鵜呑みにした。生まれや身分に頓着せず、身の丈にあった立場で生きれば、幸福に生きて死ぬのだ——そんな価値観を上から目線で押し付けて、銃を突きつけ脅してきた組織に迎合してきた。

ギャラルホルンは今もなお、自分自身が責任を負わない方向へと論点をずらしては安全圏に逃げ、みずからを正当化し続けている。身の丈とは何なのか、誰が何のために創り出したカーストなのか、そこにある『現実』を見つめようとしてもしないで。

罪のある存在だったから断罪されたけど、自分の中の差別意識を相手の持つ属性のせいにして。都合のいい『真実』を創作し、運よく持って生まれてきた免罪符を後生大事に抱きしめて。

そんな卑怯な〈法〉と〈秩序〉に守られて生きるのは、もうたくさんだ。

「どうしてギャラルホルンはみずからの罪を隠し、偽りの罪で民間人を罰しようとするのですか？ 革命を『膿』と笑い、子供たちを『獣』と蔑んで、わたしたちが歩む未来に幸福は残るのですか……!？」

「それはあなた次第だな」

「指一本で子供の命さえ奪えるあなたが『あなた次第』だなんて、無責任だわー！」

「その子供は、あなたの監督不行き届きで死んだのだが？」

「あなたが撃たなければ失われなかった命です！ あなたの兵士たちが、おひとりでもお医者様を呼んでくださればこの子は助かったはずでしょう!!」

「兵士というのは、あなたを接待する職務ではないのでな。それに、その体格で下腹を銃弾が貫通しては、救命は不可能ではないかな」  
「お仕事じゃないから見殺しにされるだなんて、そんなのおかしいわ……！ わたしにこの子を守りきれなかった罪があるから、あなたがこの子を撃った罪がなくなるなんて……」

「では……その少年のおかげで、火星の要人が四名も殺害された。彼らの仇だとしても言えばいいか？」

「それは………っ」

例の私刑のことだと、アルミアは乱れた呼吸を詰まらせた。くちびるが引き攣る。モンターク商会は独自に少年売春を取り締まり、確かに民間人をも手にかけて。『現行犯』として見せしめにしたのだ。

リタを囮として使い、ヒルメとトロウふたりの実動部隊が手にか

た政治家や医者、弁護士といったクリュセの要人たち——火星人だった。

ギャラルホルンの高官を手にかけてしまわないようにと予約を締め切ったのはアルミリアの采配だ。

もしも民間企業の男娼がギャラルホルン所属の将校を殺害したと公になれば、モンターク商会は強制査察を受け、廃業に追い込まれるだろう。そうなればライドたち鉄華団残党は処刑され、ギリウムたちヒューマンデブリは全員射殺され、リタたち高級男娼は逮捕される。

現行法において、クリュセの十六歳未満の売春は売ったほうも買ったほうも等しく有罪とされてしまう。ヒューマンデブリもまた、所持していた罪を問われる。

万が一にもモンターク商会が摘発を受ければ、子供を商品として売買・消費する加害者は野放しのまま、被害に遭った子供たちだけが一方的に未来を奪われてしまう。

そうならないための選択は、おのずと『殺していい相手』か『殺してはいけない相手』かの振り分けになっていた。

「殺害現場は凄惨を極めたそうだ。従業員や警官が何人も離職している」

むろん、執行人をつとめた傭兵が血液や臓物をぶちまけたまま現場を去ったせいで、だ。

よく訓練された暗殺者ヒットマンが、微塵の躊躇もなく、積年の恨みを晴らすかのように蜂の巣に変えた肉の塊。

銃弾一発を腹に食らって眠るように旅立った少年リタの最期とは比べ物にならない、それはひどい死に様だったろう。ホテルの従業員やクリュセ市警のような、遺体を見慣れていない善良な民間人にとっては正視に耐えない惨劇だった。

私刑を執行するとき、傭兵はなぜ迷わなかった？ 被害者を庇護し、加害者を断罪するという大義名分があったからだろう。手慣れたもいた。傭兵たちは『仕事』でさえあればいくらでも殺すことができる。これから銃殺する相手にも家族があり、悲しむ者がいる——と踏みとどまることはない。

死体など見慣れているから、血の海に沈められた男の遺体というものがどれほどのショックを与えるのかも知らなかった。人肉ミンチなど見飽きてしまった少年兵には、想像することができなかつたのだ。

第一発見者になるだろう従業員、捜査に携わる市警といった『普通の人間』にとつて、それが人生を狂わせるほどの恐怖であると。

『人間』を殺めたのが『人間』と思えばこそ、復讐者は生まれ続けるだろう」

憎しみの矛先がそこにあるから人は憎む。命があるなら命を奪うことも可能であるはずと、生命体であることを希望に殺害という報復を目論む。害すれば殺せるのだと、復讐者たちは武器を取る。

「ならば『獣』を殺したのが『秩序』であつたなら？」

憎しみの矛先に『人』がいなければ。奪えるものが何もないなら。人は諦め、過去に見切りをつけて、前に進むことができるはずだ。

三百年の昔、人類は瓦礫の中から立ち上がった。文明を滅ぼし、人類の二十五%を死に至らしめた自立思考型兵器 M Aにはパイロツトがいなかつたからそれが可能だった。

人類がその存亡をかけて戦うとき、背後には家族や友人、恋人の存在があるだろう。だからこそ一致団結し、危険を顧みず戦つた。

敵は M A という、人ならざるもの。

暴走し、破壊と虐殺を繰り返す『敵』に立ち向かうため、人類はようやくやくひとつになれた。

そうして終戦に漕ぎ着けた三百年前、天使に蹂躪され、傷ついた人類は学んだ。学習したのだ。大規模な戦乱は文明を滅ぼすが、小規模な戦争を散発的に繰り返していけば、人々は団結し、戦い、その果てに何度でも平和を取り戻した喜びに涙するのだと！

「かつての厄災が『天使』であつたから、世界はこうも復興した。今度は『悪魔』を討つことで、世界は何度でも安寧を取り戻す」

支配者はあくまでも淡々と、両手を広げてみせた。これからは悪魔

の首級をあげることが安寧の象徴となるだろう。

『平和を勝ち取った英雄』という名の椅子を欲し、兵士たちは免罪符を握りしめて戦乱を望む。

そして何度でも人々は歓喜するのだ。

「あなたは、神にでもなるおつもりなの……………」

「あなたにはおれがそう見えるのか」

剛胆に笑んでみせたラスタルの言葉に、アルミリアは戦慄する。

殺害から罪悪感を除くことで人々は健全な精神を構築できるとラスタルは言う。生命倫理など不要と笑う。……………すぐさま否定できないのは、すぐそばにライドがいるからだ。

傭兵として数多の死にその手を汚してきた。ヘマーナガルム隊の中には、罪の意識を持たない少年兵だっているだろう。そうしなければ生きられなかったからだ。地球圏による搾取、ギャラルホルンによる圧制が創り出した貧困の中、生きる糧を得るために戦場を駆け、身を寄せ合って生き残ってきた尊い命だ。否定したくない。不用意に傷つけない。

多くは動物の肉を食す習慣のなかった少年兵たちに、栄養をつけてほしいとエゴの赴くまま与えてきたのはアルミリア自身である。

「それでもっ、犠牲者の声を封じることが健全な秩序だなんてわたしは……………きやつ あう！」

銃声はサイレンサーの向こう側から割り込むように響き、重たく濡れたスカート裾がぶわりと重たく舞いあがる。声を遮られたアルミリアがよろめき、細い腕はライドがつかんで引き寄せる。

ころりと転がり落ちた金属の筒。わずか一拍ののちに、発煙筒が勢いよく白煙を噴き上げた。

撃ったのは十四番目の銃口。

エンビだ。

威嚇ではなくアルミリアの脚を狙い、スカートの中に仕込まれた発煙筒を正確に撃ち抜いた。

煙に巻かれるただ中で、エンビの銃口はラスタル・エリオンの心臓を正確にとらえている。ヘルメットのバイザーが双眸を黒く覆い隠

してはいるが、うかつに発砲すれば上官の命はないぞという、兵士たちへの脅しは十分な効果をもたらしているらしかった。

敢えてアルミリアの言葉を遮り、敢えてアルミリアを狙い、しかしアルミリアを傷つけることはなかった腕利きの射手。

高精度の射撃能力は背中に直接銃口をめり込ませるほどの交渉能力になる。

射撃の腕も確かとは、楽しませてくれる——ラスタルがうつそりと笑う。

今だとライドがアルミリアの手を引いたが、アルミリアは両手でその手を握り返して首を強く横に振った。

「待って、リタが……っ！」

「悪いがおれはひとりしか抱えられない！」

「だめ！ あの子を置いてはいけないわ……！」

踏ん張るアルミリアは、リタを抱きしめようと膝をつくが、抱き上げるには力が足りない。九歳の少年を抱き上げるにはアルミリアの腕は細く頼りない。

荷物を下ろせなかったライドは、内心で苛烈に舌打ちした。

こんなことならエンビが脚を撃って動けなくしてくれていればとさえ思ってしまう。へセイズ∨の医療ポッドは高性能で、脚の銃創ひとつくらい数時間で治してしまえるだろう。

逡巡している間にもエンビとトロウは攪乱のため白煙の中を駆けていく。内側から風穴を開け、外に待たせたMSにたどりついて宇宙へ出る手筈だ。エンビがへグリムゲルデ・ヴァンプ∨1号機にたどり着けば、合図でヘルメが外から射撃を行ない、エアロックをぶちぬくだろう。

騒乱が聞こえてくる。今にこのドックは、気密エリアではなくなる。

「……見たくないなら目をつぶって、聞きたくないなら耳も塞いで。今は死なないことだけ考えてください。三十秒で済ませるんで」

じつとしてろ。

脅すように低くなった声に、アルミアアがひゅつと細く息を呑む。ライドが半ば力ずくで抱き上げようとしたそのとき、爆発音が断続的に鳴り渡った。

景気よく飲み干したアルコールが心地よく喉を焼き、ごくごくと食道を通っていく。酒がうまい季節になった。

いや、季節の問題ではないか。雇用主であるクーデリアの公務は繁忙期を過ぎ、仕事は忙しいものの翌日は休み。休日出勤もない。宿舎までは徒歩で帰れる。

連合議長様のいちSPでしかないユージン・セブンスタークの仕事に、ご大層な中身はない。

ぶはあ、と心地よいため息を吐き出して、空になったグラスの底がテーブルを打つ。ほどよい酒気で店内はすっかりあたたまり、ユージンもネクタイをゆるめた。

さつき脱いだジャケットはメリビットに回収されて壁際でハンガーにかけられている。

カッサパファクトリーの敏腕営業部長ことザック・ロウのイチオシだという居酒屋は、原則禁煙。ということなので、臭いがつく心配もいらないうらなう。（大口のお取引先様は特別に吸っても構わないので頭に『原則』とついている）

アルコール度数4〜7%程度のビールをサイダーやら何やらで割ったカクテルは、歳星で楽しんだものと同じだ。

近年、クリユセでも爆発的に普及しはじめた。

何かにつけて顔が利くビジネスマンの仲介もあって、店内はカッサパファクトリー起ち上げメンバー——という名目の鉄華団残党——によって貸し切られ、みな思い思いの酒を楽しんでいる。

「まるで同窓会みたいね」と微笑むメリビットを除き、参加者はみんな男だ。

どぎついピンク色のカクテルを見つめてうっとりしているヤマギがなんとも言えない雰囲気醸し出しているが、それもアトラヤクーデリアといった女性陣の目がないからできることだろう。（こうなるとヤマギは「流れ星がおれめがけて落ちてこないかなあ」なんて言い出す）



ユージンたちは二十代の前半〜半ば、メリビットは四十すぎ。余裕で母親の年齢である。人妻、さらに二児の母ともなれば、なおさら母親みたいな存在に思えてくる。

小さな子供がいるというのにベビーシッターに任せて夫婦で飲み会にやってくるあたりは、さすが元バリキャリといったところか。

地元の雇用に貢献しつつ、対費用効果を重視して、自分たちが楽しむことも忘れない。

こういうメリビット・ステープルトンのようなしたたかさこそ、時代を生き残るために必要な素養なのだろう。

昔からクソ真面目なクーデリアは、子供がいるから……と、帰れる日は必ず家に帰っていく。

アトラもまた、家族団欒用の料理を作って待っている。暁には父親がいないから、そのぶん母親ふたりの愛情をめいっぱい注いで育てていくのだそうだ。

仕事を優先しがちだったクーデリアが最近になって帰宅を最優先にしはじめたのは、小学生になった暁が『少年兵をやっつけろ！』という絵本データを配布されたのがきっかけだった。

なんでも学校からの配布物で、男の子を中心に人気があるらしい。

主人公が『少年兵』をやっつけて、世界が安寧を取り戻す物語。

クーデリアが神経質になるのも、わからないではない。

絵本の中の『少年兵』とやらは頭の上にとがった耳をふたつはやし、口許からは大きな牙を覗かせた、野獣のような姿に描かれていた。

主人公は暁と同じやわらかな茶髪だ。男の子の活躍によってやっつけられていく黄色くてすばしっこい狼に、大きな灰色の狼。大ボスは一等でつかい黒狼で、そいつには真っ白い毛並みの嫁さんがいる。

嫁さんは家族の命乞いをするのだが、主人公は『うそつき！』と白狼の汚い思惑を看破する。

最後のページでは、嫁をやっつけられて弱った親玉を踏んづけ、英雄のように勝利を掲げてハッピーエンド。

悪い少年兵はいなくなりました、めでたしめでたし！

……そんな話のどこが面白いのかユージンにはさっぱりわからないが、暁にとつては『自分に重なる男の子が悪いやつを倒し、世界を守る』物語なのだ。

ヒーローに憧れる少年期は、ユージンにもいくらか覚えがあった。子供特有の自信。正義感。あの絵本は、自分自身には『お母さん』を守る力が宿っているのだ——という、何の根拠もない誇らしさを後押ししてくれるのだろう。

幼い日の記憶が蘇るようだ。

今では顔も覚えていないが、幼かったユージンにとつて母親とは『愛する女』だった。父親のいない環境で育ち、女手ひとつで小学校まで入れてくれた母親は英雄であり、ユージンの世界で唯一無二のヒロインだったのだ。

というのは過去の話で、新しい男を見つけて妊娠したらユージンを置いて行方をくらましたあばずれに未練はもうない。あの男に捨てられていればいと恨む気持ちと、どんな男と一緒にでもいいから無事でいてほしいという願う気持ちが半分半分、ギザギザの境界でせめぎあっている。

ユージンが沈みゆく思考を遮るように、ドン！ とグラスの底がテーブルを打ち付けた。

珍しく出来上がってしまったらしいザックが、これまた珍しく目元を赤くしている。

「今だから言えることですけどオ」

時間経過とアルコールの勢いに任せて、ザックはああとため息をついた。

「おれ、鉄華団って苦手だったんすよね」

「どうして？」とヤマギが続きを促してやる。

「だってきアーみんな気のいいやつで、すげー頑張って仕事するし？責任感とかア、おれがちゃんとやんなきゃって気イ張って、でもピリピリしてないっつう」

「なあんだ、大好きじゃないか」

あはは、とヤマギが機嫌よく笑う。ふたりとも口調がもはや酔っぱらいだ。

酔っていないと言えないのだろう愛憎を、ザックはだって、とか、そりゃあ、とか言い訳しながらつらつら吐き出していく。

ザックが就職したとき、鉄華団は火星の英雄だった。

アーブラウ領クリュセ自治区首相の愛娘、クーデリア・藍那・バーンスタインお嬢様を地球までエスコートして、あのギヤラルホルンに一泡吹かせたというのだ。最高だ。

地球経済圏による植民地支配、ギヤラルホルンによる間接統治という二重の締め付けが、クーデリア姫の交渉によってばあつと緩んだ。痛快だ。

今まで『アーブラウの取り分』と『ギヤラルホルンの取り分』で100%だったところに『火星の取り分』をねじこんで、火星ハーフメタル採掘事業がどんどん就労のきっかけになっていく。孤児院が建てられ、小学校が増え、クリュセは見違えるほど豊かになった。

ギヤラルホルンが信用をなくし、同時に火星の独立運動も活発化したせいでテロも増えたが、以前に比べればめちやくちやマシになったのだから、情勢不安など些末な問題だ。

そうした栄光の中心であった鉄華団は、高校中退だって雇ってくれろという。給料もいい。学校でMSモビルスーツシステム関連の勉強をしていたザックは、退屈な授業から飛び出すように、鉄華団の門を叩いた。死ぬ危険がある、というのを甘く見ていたので、はじめは戦闘部隊への配属を希望した。

いざ初陣に望んだときの、あの心臓にナイフを突きつけられたような焦燥は忘れない。

同期だったメールがMSの砲撃を食らって、MモビルワーカーWごと爆散させられた断末魔は今も耳に残っている。あのととき、ザックが操舵士として搭乗していた複座式MWの砲撃手はハッシュュだった。

ハッシュュももういない。

予備役を終え、正式な配属は戦闘部隊にと希望したハッシュュと、やっぱり整備部隊を選んだザック。

十歳やそこらのチビが旧式のMWを乗り回し、最前線に躍り出ていく狂った環境。

「頭おかしいんすよ、みんな、仲間の命と自分の命を天秤にかけて、迷わず仲間のほうとつちやうんですもん。……気持ち悪いっすよ、ほん」と

グスン、とザックは独白の合間合間に鼻水をすすする。

阿頼耶識搭載型MWを駆る、年少組だか呼ばれている子供が、負傷者を救助する仲間の盾になろうと走り出てくる。馬鹿かと思った。頭がおかしい。狂っている。今ここで仲間数人が生き残るためなら、自分ひとり死んでも悔いなんか言わんばかりの行動が、ぞつとするくらい怖くて、気持ち悪くて、——最高に格好良かった。

「あんなふうになりたいって、おれ、実はすっげー思ってたんすよ……」

海賊の巨大艦隊を前にしても朗々と響く団長の声。オルガ・イツカというカリスマ。彼の鼓舞に賛同する、男臭い歓声の中には、まだ声変わりもしていない子供も多数混じっていた。

やがてアリアンロッドとの徹底抗戦の前に「ボーナスも出してやれないが」と申し訳なさそうに沈んだ声。

金よりも名誉よりも、最後まで戦うことを望んだ過半数の団員たち。

ザックには理解できなかった。馬鹿かと思った。もちろん言った。馬鹿かと。頭ついてんなら使えよと。最後までってなんなんだよと。

だって、働くのは給料のためだろう。金を稼ぐのは生活を豊かにするためだろう。買い食いたり、ちよつと贅沢したり、パーツと遊んだり。いつもの弁当を1ランクいいやつにしたりとか、そういう自由のためだろう。

仕事なのだからザックだって努力はした。我慢もした。だが、身体を壊したら元も子もない。死んだら、それこそ割に合わない。

プライドよりも命だろう。仲間よりも自分自身がまず生きたいだろう、そうだろう？ みんなそのはずだと信じていたのに、鉄華団員は仲間の未来のためなら命を投げ出してもいい覚悟で戦っている。

死ぬつもりなど毛頭ないと口では言うくせに。死ぬのは怖いとうそぶくクセに、戦場ではこれっぽっちも死を恐れやしない。

基地を爆破して逃げるときも、ハツシユは遊撃隊の一員として基地防衛戦に残った。副団長らとともに戦ったパイロットは、やっぱり年少組というくくりのガキどもだ。

——おれたちは他に行く場所なんてねーんだからな！

あの青い野球帽の少年——トロウ——は獅電に乗り、戦って、降りて走って追いついてきた。

四人組が三人組になっていて、ザックは言葉を失った。

補給部隊にいた双子が、片方だけになっていたのだ、気付かないわけがない。いつもセツトだったものが単品になっていたのだ。

ぞつと背筋が寒くなった。

それから、地球へ逃げて。火星に戻ってきて。なんやかんやあつて。カツサパファクトリーを興すから働かないかと元整備士全員に声がかかった。

IDが変わってしまい、ザック・ロウは死んでいる。もう実家には帰れない。鉄華団に入団するために学校も中退してしまっていた。再就職の宛ても他にないと腹をくくって、カツサパファクトリーで営業職についている。

ナデイ・雪之丞・カツサパとメリビット・ステープルトンが結婚し、子供をもうけて、しあわせになる方法の『お手本』を遺憾なく実践してみせてくれる。ザックだってそろそろ彼女のひとりくらいほしいが、ID改竄という負い目があつてなかなか踏み切れないでいる。

実家という後ろ盾を失い、頼れるものがないので、結婚も考えられそうにない。

生活水準のギャップからくる、遅蒔きな不安だった。

鉄華団に入ったころのザックは、制服は新品がいいとか、食堂のメニューに選択肢がないとか、個室がないとか、……いろいろと文句をつけた。

そのたび、周りからは首を傾げられた。

「はあ？」と呆れてみせたオレンジ頭のチビ、もとい実働二番隊（筋肉

隊) 副隊長ライド・マッスの生意気さといったらなかつた。

そんなものは『当たり前』だという価値観で育ったザツクの持つ『最低限』のラインは高すぎたらしい。

しかしメリビット・ステープルトンCEOがバリバリ手腕をふるうカッサパファクトリーでは当然、ビジネススーツは新品を経費で落とせるし(むろん上限はあるが)、食事は弁当のデリバリー、ケータリング。社員用アパートは単身者用のワンルームをひとり一部屋。

ああ、これぞ普通!! ——と、普通を謳歌するほどにザツクは鉄華団時代に置いてきた戦友を振り返って虚しくなる。

なあハツシュ、知ってるか、これが普通の人間の、人間らしい生活なんだぞ。そう虚空に向かって語りかけたてしょうがなくなる。

「生きるとか死ぬとか、最後までとか。そういうのもういいっすわ。生きてればなんとかなるのに、死ぬなんて、馬鹿じゃないっすか」

「……そうだよな」とユージンは同意する。嘆きである。「お前みたいなのがいてくれてよかったよ」

ため息をついて、緑色のたれ目には涙の膜がはっている。案外泣き上戸なのかもしれない。

おれたちは精一杯やった、頑張った! ……と、叫びたくってたまらない。オルガのようによく通る声をドーンと張って、野郎どもを鼓舞できればどんなによかつたらうか。

殿をつとめた三日月や昭弘、エルガーの尊い犠牲があったから、残党は逃げおおせた。宇宙で散ったシノも、タービンズと蒔苗のじいさんも、みんなの協力があつたおかげで、団員はだいたい無事だ。

あいつらの死は無駄になんかなってない。そう信じたい。

おれたちは仲間を生け贄にして逃げたんじゃない。そう信じたい。基地を爆破して、全員死んだことにしたから追撃もやんだ。クーデリアの悲願だった火星独立も実現できたし、三日月の忘れ形見である暁も元気に生まれてきた。へヒューマンデブリ廃止条約が締結して、もう宇宙ネズミがギャラルホルンを脅かすようなことはない。

だから、死んでいったやつらの犠牲は無駄じゃなかった。

そう思わせてほしいのに、——ライドがそうさせてくれない。

ユージンにつきまとうオルガ・イツカという理想像の亡霊が現れては『おれみたいになりたかったんだろ?』と無邪気に笑ったりする。『オルガの真似はもうしないの?』と青い目の狂犬が余計なことを言う。

別に、圧倒的な戦力差にビビっているわけじゃない。

別に、致命的な敗北に絶望して隷従しているわけじゃない。

MSの購入・維持費用だって、どうしても捻出できないわけじゃない。世界が平和になったから、必要なくなっただけだ。

違法兵器だったはずのヘダインスレイヴで基地ごとずたずたにされて滅んだ過去を追想するたび、引き裂かれるような痛みがある。今もうなされる夜がある。

喪失はすべて『昨日』に置いていく。それは『明日』に持つていく必要のない荷物だと、もう決めたのだ。

平和になった。過去は過去だ。

「おれたちは、前に進むんだ」

潔すぎて生き残れなかったあいつらのかわりに、しぶとく生きるおれたちが。

ユージンの宣言はアルコールにふやけて頼りなかったが、傷を舐め合うにはちょうどいい塩梅だった。

ザックやヤマギが口々にああと同意し、鉄華団残党の夜はゆるやかに更けていく。

この世界はこんなにも平和になった。

頼む、そうだと言ってくれ。

## 第五章 獣の肯定

### 010 反撃開始

俊足がフロアを蹴る。

敏捷な宇宙ネズミがふたり、ビスコー級クルーザーへセイズ∟のタラップから飛び出し、駆ける。

武装は両手で構えた拳銃ひとつ、あとは直感と肉体が武器だ。発煙筒が作り出した白い闇を迷うことなく突っ切って、エンビ、トロウは一直線にそれぞれの愛機を目指す。

身を低くしてマシンガンの雨をくぐる。闇雲に掃射するだけでは当たるはずもない。フロアを蹴るふたつの足音は実に身軽で、侵入者を見失って慌てだす兵士の靴音にばたばたと紛れて行方不明だ。視界の悪い戦場、攪乱ならば阿頼耶識使いにこそ分があるというもの。すばしっこい宇宙ネズミに傷をつけるなら混戦ではまず不可能である。狙っても狙わなくても、凶弾の犠牲になるのは空間認識能力に乏しい側だ。

よし、これで——とライドがタラップを駆け上がろうとした、そのときだった。

ぐわんと空間ごと振り回されるかのように、足許が揺れる。揺れ、というにはあまりに凶悪な鳴動をともなつて、ドックが傾いていることが体感できた。床下で巨大な獣が大口を開けているかの地鳴り、そして断続的に基地を殴りつけるかのような爆発が起こる。足の下から迫り上がってくる不穏な気配。

重力が解放されたのかと思ったが、違う。

ドックどころの話ではない、月面基地そのものが崩壊しているのだ。

……おかしい、ヒルメの狙撃はまだのはずだ。エンビたち実動部隊は生身だし、携帯している手榴弾に要塞そのものを破壊できるレベルの威力はない。

(自作自演か!? まさか老朽化部分を爆破して、基地ごと放棄するつ



もりじや——)

はっと気付けばラスタルの姿は消えている。いや、これはチャンスと思うべきだと駆け出そうとしたとき、アルミリアが腕の中で身じろいだ。

「いやっ、待って!!」

悲鳴はしかし、ライドに向けたものではない。

突き上げるような震動によってひび割れ、不安定に傾いていくフロアの上で、ごろり、ずりりと強制的な寝返りを打たされた金髪。わずかに閉ざし損ねたまぶたの奥から濁ったライトグリーンがのぞく。白くなくなったジャケット、半ズボンから突き出る棒きれのような脚が置き去りになってねじれる。

ずる、ずる、とすべり落ちていく瘦身が、緩慢に遠ざかっていく。

次の瞬間には、煙に隠れて見えなくなった。

「リタ!!」

「お姫さん——!」

薄すみれ色の髪が舞い上がる。ライドの手を振りほどき駆け出した残像のように、散った涙の粒。宙に浮いたまるい水滴が物語るのは、今度こそ重力が解放されたということだった。

心なしか酸素も薄く感じる空間を、ライドの舌打ちが鋭く鞭打った。地響きは増している。ピシピシピシと碎ける音も四方八方から聞こえてくる。天井が崩れるのも時間の問題だろう。

そしてついに壁を走った稲妻模様。

「戻れ! お姫さん、そっちは危ねえ!」

幼い遺体をようやく抱きしめたアルミリアへ、叫ぶ声は届かない。ガクンと嫌な振動があった。突き上げるような衝撃とともに、一際巨大な稲妻がフロアを駆け抜けてくる。迫る。速い。あつと声をあげる猶予もなく亀裂はライドとアルミリアの間を分断した。

裂け目を飛び越えようにも重力は1G未満、……だが体感するに、六分の一というわけでもなさそうだ。一歩間違えば着地点を見失う。少なくともこの重力場はエイハブ・リアクターの制御によって発生させられている。

(慣性制御システムはまだ生きてる……投棄はされないのか？ 一体  
どういう——！)

一瞬の思考、生身で飛ぶには既に遠い。爆発とともに流入した風の  
影響でまだら模様には薄れる白煙の向こう側にはノーマルスーツを着  
用したアリアンロッド兵士の気配がある。リタを抱きしめるアルミ  
リアを追って近付けば、ライドだけ射殺されかねない。そうなればア  
ルミリアが巻き込まれる可能性も出てくる。

ラストル・エリオン公本人ならまだしも、一般兵はアルミリア・ボー  
ドウィン嬢を襲撃するわけにはいかないはずだ。

ライドはふたたび苛烈に舌打ちすると、背にしたタラップへ駆け戻  
ることを選んだ。俊足が不安定な足場を蹴る。すぐさま、革靴の足音  
を察知した銃口が撃ってきた。

『撃て撃て！』と好戦的な号令が響いてくる。マシンガンの咆哮に背  
を向けるなど、屈辱以外の何ものでもない。苛立ち任せにスーツの合  
わせに手を突っ込めば、とめていた窮屈なボタンが勢い余って弾け飛  
んだ。

ハーネスに仕込んだ拳銃を引き抜く。セーフティを解除するまで  
コマ数秒、振り向きざまに三発お見舞いすれば着弾の手応えが聞こ  
えてきた。

「当たんじゃないか……ッ！」

まるで、三日月・オーガスが導いたみたいに。鉄華団の節目節目に  
立ち会ってきた拳銃は、今回もまたライドを守ってくれた。

かすめた程度に銃弾を浴びつつも、悪魔の加護を実感できれば怖い  
ものなど何もない。あるのは背筋が伸びるような緊張感だけだ。何  
発か牽制を放ちながら金属質のスロープを全速力で駆け上がる。カ  
ンカンカンと高鳴るライドの足音を回収するかのようには、ビスコー級  
クルーザーへサイズ<のタラップが繰り上がっていく。

飛び込みの要領でハッチの中へと転がって、跳ね起きて最後にもう  
一発お見舞いし——、わずか一八〇秒で<サイズ>は動き出した。

予定よりも早い。ブリッジのウタも相当焦れていたのだろう。こ  
のままデブリ帯に逃げ込めば、ライドもMSで出撃できる。今はこ  
ブランク

うするのが最善だ。

ライドは壁の通信パネルを殴りつけた。

「ブリッジ!!」

大至急、姫君の救出作戦を練らなければならない。



せつかちな<sup>アラート</sup>警報が四方八方からエンビを責めたてる。赤いランプが白煙を警告色に染めている。スピーカーが捕まえるのがなりたてる侵入者——エンビは、ダークシエードのバイザーに隠れて獰猛に笑んだ。

俊足を駆り立てて月面基地の廊下を抜ければ、外には愛機ヘグリムゲルデ・ヴァンプ〈1号機を待たせてある。途中の分岐点で別れたトロウも、3号機に乗り込むころだろう。

この月面基地は厄祭戦以前から存在するそうで、しかも今回の取り引きで乗り付けたドックは老朽化が進んでいる。脆そうな壁を手榴弾でぶち抜いて突破できるのは都合がよかった。

兵士との交戦を避け、施設の脆弱さを突く。

宇宙ネズミにもそれくらいの頭はあるのだと、奴らも思い知ればいい。

エンビはヘルメットの奥で好戦的にくちびるを舐めるとバイザーを開いた。そして手榴弾をひとつ取り出すと、剥き出した犬歯でピンを引き抜く。壁に向かってブン投げる。入れ違いにバイザーを閉ざし、的確な射撃によって射抜けば、エンビの目の前に立ちふさがっていた壁に直径二〇インチほどの風穴が開いた。

空気が流出する渦の中へ、臆することなく身を投げる。

吸い込まれ、放り出された向こう側にはエンビの搭乗機、鮮紅色の<sup>グリムゲルデ</sup>戦乙女が待っている。

V04vm-0191 ヘグリムゲルデ・ヴァンプ〈1号機。

厄祭戦末期に九機のみ製造されたというヴァルキュリアフレーム、その断片をかき集めた継ぎ接ぎの発展機だ。

ぐるんと滑りでたエンビが曲芸のように一回転し、つかみとつたのはコクピットの緊急解放レバーである。手首でコックをひねれば、ガコンと音をたてハッチが開放された。

すかさずシートまで滑り込むとコクピットハッチを閉ざす。もう一方の手で起動をかける。背中をぶつけるように、阿頼耶識システムに接続——起動完了。

『こちらアルフレッド！』

吠える。呼応するように、トロウの搭乗が確認できた。3号機が目を覚ます。そして肉眼ではとらえきれない距離で、2号機が待っている。

アルフレッドが弾丸に命を吹き込む瞬間を。

『ファイア撃て!!』

刹那、一撃の閃光が飛来する。ヴァルキュリアライフルの狙撃が返事のように狙い澄ました一点を撃ち貫いた。

ヘグリムゲルデ・ヴァンプ2号機、ヒルメ機は頭部センサーを開いてモノアイを露出させた『千里眼形態』に変形し、遠距離からでも獲物を正確に捕捉できる。闇に紛れるような漆黒の機体ゆえ、日ごろはスポッターに撤してくれる縁の下の力持ちだが、射撃の腕もあがってきた。

操舵士ウタ、砲撃手イーサンほかブリッジオペレーターも含めてへハーティ小隊は全員それぞれの持ち場についたようだ。

そして戦闘準備もできた。

バーニアをふかして飛び立つエンビの機体は、目が覚めるような鮮紅に彩られている。一瞬にして監視カメラの視線が集まるのが肌で感じられた。びりびりと伝わる緊張感と敵意。害意。戦意、あるいは純粹な闘志。

かつてマクギリス・ファリドが駆ったオリジナルのヘグリムゲルデ

を記憶する者の目には、この姿がどのように映るのか。

両腕のマニピュレーターでハンドガンをつかむ。主武装は二挺拳銃、右腕の延長線にはヴァルキュリアブレードを展開。

そして腕装甲がスライドし、——リアアーマーと合体する。

変形によって現れたのは、グライダー状の両翼だ。蝙蝠を思わせる鋭角なフライトユニットは、重力と大気の中を滑空するだけが能ではない。

紅い身体、藍の翼。翼と同色で染め抜かれた左肩の稲妻、右肩の  
フェンリル  
狼。

狼とは群れるものだという。 ハーティ H a t i とは、憎しみを意味するという。クリュセの共通語であるアブラウの言葉にも似たような語彙が存在する。

ハーティという名の狼は、今もどこかで月を喰おうと猛っている。だからエンビたちは、憎悪の名のもとに集ったのだ。

『モビルスーツMS隊は散開、おれたちの道を塞がせるな！』  
『ビーストモード突撃形態』に変形して、重砲の遠吠えが地鳴りを大きくする。

力を手放さなければ進み続けることができる。抗い続けていれば、いつかは手が届くはずだ。そう信じている。だからエンビは手を伸ばすことをやめない。

この手で勝ち取ってやるのだ、必ず。  
おれたちの『本当の居場所』を。



「ごっちへー！」

呼び声が聞こえる。びくりと細い肩を跳ねさせたアルミリアは、恐怖で錆びついた首をブリキ人形のようにまわして、あたりを確かめる。予定外に混乱したドックで、アルミリアはライドとはぐれてし

まったのだ。

視界を遮っていた濃霧が晴れ、足場がなくなっていたことを知ってしまった。

アルミリアは今、ひとりぶんだけ残されたトレーのようなフロアの破片の上にいる。少しでも動けばバランスを崩してしまうだろう。この流水がひっくり返ったら、どんな暗い海の底へ落ちていってしまうのだろうか。

抱きしめているはずの愛し子はぐんにやりと脱力していて、冷たい。恐怖が背中を這い回るようで、脚がすくんで動けなくなってしまった。

怖いけれど、死神の足音が聞こえるようでとてもおそろしいけれど、アルミリアがつなぎとめていなければリタの遺体が無重力に流されてどこかへ行ってしまいそうで、抱きしめる腕をゆるめられない。なのに、これ以上の力をこめたら、何かおぞましいことが起こりそうで――。

流れ出る場所もわからない涙でおおきなひとみをいっぱいにして、ようやくふりあおいだ先には、金髪。

(マツ キー……?)

いや、違うとすぐにわかった。

まとめ髪の女性は、マクギリスともリタとも違う、青灰色の双眸でアルミリアを見つめている。アルミリアひとりだけが漂流するための足場しかなくなってしまったドックの床に、靴裏の磁石で着地する。

スカートの端を踏んづけてしまい、「失礼」と短く詫びた。

「ご無事ですか、アルミリア様」

「ジュリエッタさん………」

「安全な場所まで誘導します。早くこつちへ」

「あの……わたし、この子を置いてはいけません」

「構いません。わたしはあなたを運びますので、あなたはそれを落とさないでください」

ジュリエッタの両手が伸びて、アルミリアのええ――とも、いえ――ともつかない声はそのまま途切れた。

さつきライドはひとりしか抱えられないと言ったが、重力さえなくなってしまうえばジュリエッタの細腕でもアルミリアひとりくらい運べるのだろう。両腕に抱きかかえられれば、アルミリアはすんなりとフロアから浮いた。

かつてマクギリスがよくしてくれた、お姫様抱っこだ。

(ライドさんは、いつもお米様抱っこだから)——と、少しだけ気分が落ち着く。

元鉄華団の面々は、誰を運ぶときもたいてい肩に抱えあげるお米様抱っこなのだ。兄弟みたいで微笑ましい。

ふふ、と不思議な笑みがこぼれた。極限の緊張状態から解放されると思いがけず笑ってしまうのは、こういう心理なのかもしれない。

ジュリエッタの華奢な腕はノーマルスーツの冷たさで覆われており、だからこそ付着した血液が滞りなく跳ね返されていく。

兄ガエリオとの結婚も噂される、民間出身の女騎士。長く伸ばしたブロンドをきりりと束ねあげ、凜とシャープな横顔は軍人のそれである。アルミリアを支える腕は、一見折れそうに細いのに、薄くとも柔軟な筋肉で覆われていることが伝わってくる。低重力だから運べる重量とはいえ、力強い戦士の腕だ。

身を委ねるように、アルミリアはそつと目を閉じる。

戦う体躯かそうでないかを、見分けられるようになったのはいつからだろう。

## 011 マーメイド・ラグーン

誰もいない廊下は、どうやら居住ブロックのようだった。

なのに、重力区画ではないらしい。女騎士の腕の中、アルミリアは覗き見るようにあたりをうかがう。この月面基地とは一体どういう作りなのだろう。

誘導用のバーが手すりの位置で行き来しているのが見えたが、ジュリエッタは何にかまることもなくすいすいと無重力を泳いでいく。  
(まるでお魚だわ……)

柔軟な挙動にすっかり感心しきって、アルミリアはほうとため息をついた。

そういえば〈方舟〉の格納庫で同じような感慨を覚えたことがあった。ヒューマンデブリだった少年兵たちが暮らしているところへ、連れていってもらったときだ。

扉をひとつ越えたらそこから先は重力がなくて、アルミリアはふわふわ、ふわふわ浮いてしまうばかりで歩くこともままならなかった。

でも、ライドの手を取って顔をあげればそこは、高い高い天井にまで続く、どんな水族館よりも大きな水槽が広がっていた。まるで、透明な海の底へ来たようだった。

ヒューマンデブリのお仕着せであるという白と赤のノーマルスーツで、子供たちが錦鯉のように悠然と泳いでいたのだ。怪我をして脚がうまく動かせない子供も、脚の発達が阻害されて地上では体重を支えきれなかった子供も、みんな一緒に。

ああ、重力の枷さえなければ彼らはこうも自由なのだ、胸がいっぱいになった。

あの言葉を失うほどの感動を、アルミリアはひどく印象深く記憶している。それでもなおモニターク邸に呼び寄せて一緒に食事をと望んでしまうのは、アルミリアのエゴだ。

無重力では食べ物だって冷たいレーションしかないし、ベッドもふわふわ浮いてしまわないようくくりつけるような作りになる。重力がないとすべてが宙に浮いてしまうから、そういう構造になるのは合



理的かもしれない。でも、1Gではない環境においても快適に暮らせる衣食住がいまだに開発されないのはどうしてだろうと、アルミリアは残念に思う。

人々はどうしてエイハブ・リアクターで重力を発生させ、地球と同じ重力場に作り変えて、地球の文化をそのまま持ち込もうとするのだろうか。

地球生まれの人類は、1G環境に適応できるのかもしれない。だが、地球とは異なる重力環境でこそ真価を発揮する人々は、不自由を受け入れなければならぬのか？ 宇宙開発コロニーでも、たとえば海の底であっても、栄養価が高くておいしいものを用意できる料理人という職業が、確立されていいはずだ。重力がなくても安全であたかな眠りを保証してくれるベッドも。

重力を発生させることも大事かもしれない。エイハブ・リアクターがそれを可能にしてくれているけれど、それでも、無重力用の安寧があつてほしいとアルミリアは思う。

無重力でこそ自由にあれる子供たちが望んでくれるかは、まだわからないけれど。でも、せつかく重力の枷から解き放たれた彼らが食事を制限されたり、冷たく硬い寝具しか選べないなんて。そんなの、不平等だ。

どこにいても自分自身に合った生き方を選べるような『選択肢』に存在してほしい。

二本の脚で歩く生活でも、無重力を泳ぐ生活でも。あるいは車椅子でも。どんな暮らしを選んでも、足りないものなど何もない世界であればいい。どこへでも行けて、どこにいても人が人らしく、幸福を追い求められる世の中になればいいのにと、願ってやまない。

(でも、それっていつ選べばいいのかしら。後になって変わることは、きつととても難しいわ……)

思案に沈んでいると、不意に、とある部屋の前でジュリエッタがしなやかに旋回した。人魚が人間へと変化するような挙動を経て、靴裏の磁石を器用に使って立ち止まる。

小さなドア、個別にロックがついている。インターフォンはないら

しかった。

「両手が塞がっているので……」と、ジュリエッタが端切れ悪く解錠コードを耳打ちする。

どうやら、アルミリアがロックを解除しろということらしい。鍵開けの役目をもらって、ちよつぴり嬉しくなったアルミリアは、内心でごめんねとことわって、リタを抱きなおした。

指先でパスコードを入力すると、空気が擦れるパシユ、という音とともに扉がスライドする。

中は暗く、一步踏み込むことで灯りが点った。やはり重力はない。見渡すまでもない一室は、単身者用のワンルームのようだった。誰の部屋だろう……というアルミリアの心中を察知するかのように、ジュリエッタがこたえる。

「わたしの部屋です」

アルミリアをベッドに腰掛けさせるようにおろしてから、ため息混じりにジュリエッタはヘルメットを取り払った。ついでに窮屈なまめ髪もぎつくりと解いてしまう。

麗しきブロンドの女騎士、ジュリエッタ・ジュリス。ギャラルホルン最大最強の艦隊、音に聞こえた月外縁軌道統合艦隊へアリアンロッドの総司令官だというのに、彼女は一般兵と同じ間取りで寝起きしているらしい。

「気を遣わないでください、どうせ寝るだけの部屋です」

「ありがとうございます……ごぎいます。でも、どうしてわたしをここへ？」

「あなたの身に何かあつたら、きつとあの方が悲しみますから」

無感動な返答は、まるで独り言のようだった。あの方。どこか他人行儀にそう呼んだジュリエッタの表情は読めない。

「お兄様は、わたしの死を悲しまれるかしら？」

「わかりません。わからないけれど、もし……何であれ、わたしは、あなたを死なせるわけにはいかないのです」

マクギリス・ファリドの戦死直後、あの男は実にすつきりとした顔をしていた。まるで憑き物が落ちたみたい。戦闘後はアイン・ダルトン三尉の脳を焼き切つて動かなくなった愛機へガンダム・キマリス

ヴイダールをいたわり、ヤマジン・トーカに礼を述べたと聞いた。もう MS<sup>モビルスーツ</sup>に乗ることはないだろうと告げたとも。

そんな彼が——英雄ガエリオ・ボードウィンが——実の妹の死体を目にしてどんな顔をするのか、ジュリエッタにも想像つきかねる。悲しむか、悲しまないか。泣くか、泣かないかも。兄妹の情や家族愛といったものが、彼の中でどのようなかたちをしているのかも。

予測不可能だからおそろしいのだ。

「正直、あなたがへヴィーンゴールヴを離れてくれてよかったと思っています。『死んだ男のことは忘れろ』なんて、誰の口からだつて聞きたくはない」

後半は、どこか八つ当たりめいた投げやりさでジュリエッタは吐き捨てた。

死んだ男。——ジュリエッタにとっては、ガラン・モツサをも意味する。ジュリエッタが師と仰ぐ傭兵はへヴィーンゴールヴの生まれで、ラスタルとは士官学校時代の同期であったことを話には聞いたものの、ジュリエッタが出会ったときには既に ID も何もかも捨て、ラスタル・エリオン公を影から支える密偵だった。

ギャラルホルン内での立場のことは、ジュリエッタにはわからない。ギャラルホルン特有のルールもすべて理解しているわけではない。

だが、ジュリエッタにとって『ひげのおじさま』は育ての親だ。血のつながった両親よりも思い入れのある男である。父親よりも父親らしく、小さなジュリアを養育してくれた恩人だ。

アルミリアならばまぼろしの存在くらい知っているだろう。革命軍の内偵は、彼が間者として暗躍しているところまでつかんでいた。心の底から慕ってきた傭兵は、死んだ。

鉄華団に殺された。今から八年ばかり昔のことだ。彼の落命は任務中の出来事だったし、存在すら捨てて旧友に尽くすことを決めていた男を偲ぶ資格など、ジュリエッタにはありはしない。

まぼろしはまぼろしとして消え、無に還った。もう戻らない彼を悼み、嘆き、もう一度おじさまに会いたいと泣き叫びたいジュリエッタ

の悲嘆も、同じ無に帰さなければならぬ。

そんな複雑な胸のうちに追い打ちをかけるように『忘れろ』だなんて。絶対に言われたくないとジュリエッタは思う。彼は命の恩人なのだ。家族を亡くしたジュリエッタを拾い、食べ物を与え、教育を受けさせてくれた。何もしてくれなかった善人よりも、救ってくれた悪人にこそ恩義を感じる。当然の心理だろう。

思い出という心の砦を守るのはジュリエッタ自身だ。こればかりはラスタルにだって踏み荒らされたくない。

だからアルミアにとつての『マクギリス・フェアド』もそうなのだろうと、気を回すことくらいできる。

「ジュリエッタさん……」

これまで抱いていたあなたの印象とずいぶん違うわ——と、喉まで出かかった言葉を、アルミアはこくりと嚥下した。

誰にだって、故人を偲び、懐かしむことくらいある。

「あなたは、お兄様と結婚なさるの？」

「さあ。ラスタル様が望まれるなら、わたしに異論はありません」

うつそりと笑んだジュリエッタの横顔は、傭兵を慈しんだ乙女の悲しみよりも、よほど冷たく冴え渡っていた。

ラスタル・エリオン個人の私兵という立場にあるジュリエッタは『准将』という椅子に座るほどの榮譽榮達を叶えてなお、後ろ盾を持っていない。

なぜって、ラスタル・エリオンという男が、あくまでも個人的に所有する私兵なのだ。エリオン家の従者ならば所属は『貴族院』だという秩序の膝元でさえ、ジュリエッタの身許は『月外縁軌道統合艦隊』にある。

新体制となったギャラルホルンは代表一名をトップに、『<sup>アリアン</sup>月外縁軌道統合艦隊』、『<sup>アロッド</sup>統制局』、『<sup>ロッド</sup>監査局』、『<sup>アロッド</sup>警察局』、『<sup>アロッド</sup>総務局』、『<sup>アロッド</sup>貴族院』がそれぞれ連なる構成になっている。（地球外縁軌道統制統合艦隊は『統制局』の下部組織だが、月外縁軌道統合艦隊〈アリアンロッド〉は独立した組織であり規模・任務内容は大きく異なる）

〈マクギリス・フェアド事件〉後は『統制局』管轄下の戦闘部隊に限り

——それもMSパイロットのみ——民間、および圏外圏、またコロニー出身者の志願・登用が認められるようになった。

尖兵となるならば出世の道は開かれるが、それは出自の悪い兵士を前線に出し、出自のまともな兵士のための壁を作ることでもある。

コネがなければ出世どころか、生活さえ覚束ない。一方で『監査局』や『貴族院』といった部署はより身内主義を顕著にし、右手では賄賂を断りながら左手できっちり受け取っている。(昔はまったくの野放しだったのだから、表の顔を取り繕うようになっただけマシなのかもしれないが……)

ともあれ、ジュリエッタは民間の出身。所属はアリアンロッド。万が一にもラスタルがいなくなるようなことがあれば、ジュリエッタはすべてを失ってしまうのだ。地位も名誉も仕事も居場所も、何もかもすべて。

そして今日、衝動的にこう感じた。

復讐者は、いつラスタル・エリオンの喉笛を喰い破るかわからない——と。

体じゅうの血液が温度を下げたような、ぞわりと這い上がるような、それは恐怖だった。焦燥かもしれない。未知の暗闇にひとり置き去りにされたような、得体の知れない不安感が襲ってきた。

後ろ盾のないジュリエッタは、従者として主君よりも先に死ななければならぬ。でなくば生きてまま何もかも奪われるだろう。ジュリエッタはだから、恩人であり養父であり、時の支配者であるラスタル・エリオン公より先に死に損なってしまった場合——思いがけず生き残ってしまった場合——の手を打っておく必要がある。その緊急性を肌で感じさせられた。

もしガエリオ・ボードウィンと結婚できれば、ジュリエッタの所属は自動的に『貴族院』に異動となる。他部署とは違って貴族院は、当主が亡くなっても後継者に仕えることができるシステムだ。やがて次なる主君となる嫡男は、ジュリエッタみずから産めばいい。

セブンスターズ各家門の使用人らは先祖代々お仕えしてきたというルーツが信頼に直結するため、一世代で成り上がれるポストは『妻』

一択。

民間出身の正妻はこれまでいなかっただようだが、ガエリオが望んでいるというなら問題ない。英雄ガエリオ・ボードウインの発言に異を唱えられるのは、現体制のギャラルホルンではラスタル・エリオン公とガルス・ボードウイン公たつたふたりだけだ。

もしもジュリエッタがガエリオによって娶られ、子供でも産めれば、ボードウイン家が新たに後ろ盾になってくれるだろう。男の子が生まれれば跡継ぎとなり、女の子が生まれればセブンスターズの内々で嫁に出される。どちらにせよ貴族院が生活を保障してくれる。それがただ問題を先延ばしにするだけの浅知恵であっても。

どうにか生きていける。女であることを利用し、子供を道具にすれば何とか生き延びることができる。

アルミリアを助けたのも、同じ理由だ。

「何にせよ、わたし自身の保身のためです。できれば戦いの中で死にたいですが、それはわたしが決めることではないので」

とつとつと吐露された打算が、まるで自傷のような苦笑で締めくくられる。

〈レギンレイズ〉の高機動発展型に搭乗するジュリエッタは、もう

モレレアーマー

MSでも暴れだしてくれない限り戦場では死ねないだろう。海賊は弱体化され、傭兵は無力化され、ギャラルホルンのMSパイロットばかりが増加傾向にある。ジュリエッタの仕事は座乗艦のブリッジに座し、尻で艦長席を磨くのみ。

MSでの出撃が許可される作戦は、決して多くない。兵隊として対等に戦えそうな相手も、この世界には鉄華団残党くらいのものだ。ヒューマンデブリという尖兵を奪われた海賊は保身のため欲をかかなくなり、弱体化させられた海賊が返り討ちに遭わないように、それでも非正規航路をくぐり抜けようとする船団を襲撃するようにと民兵への締め付けが日に日に強くなっていく。

テイワズやタントテンポ、モンターク商会などの流通網から旧型量産機が数多市場へ流れているというのに、腕のいいパイロットは戦闘職に就けないよう規制が敷かれ、粗悪品も見分けられない非力な労働

者が小さな反乱を起こしては鎮圧される繰り返し。

三日月・オーガスのように自在にガンダムを駆るパイロットはいなくなつた。

アマダ・アルカのような判断力と射撃精度に優れたパイロットももういない。

悪魔を討つた女騎士ジュリエッタ・ジュリスが一番強くないと都合が悪いからと、他を弱体化させて、仮初めの最強に祭り上げられているのが現状である。

生きる場所も、死に場所も、何も見えない暗闇をさまようような日々を送っている。今回アルミアが鉄華団の生き残りを護衛として同伴していて、ああ、わたしはまだ戦場で戦士として終われるのだ——と、ほっとしたくらいだ。

ジュリエッタの胸中を慮って、アルミアの心は悲しみに似た痛みでいっぱいになった。

お兄様をよろしくお願いします、なんて。とても言えない。MS操縦の腕ひとつで成り上がった凛々しき女騎士とギャラルホルンじゅうが彼女を持ち上げているのに。当のジュリエッタは居場所を得るため、ただ生きていくためだけに、こうも多くの苦悩を抱えているのだ。

白く血色の褪せたアルミアのくちびるが、かほそ繊細くふるえる。

「すべての人々が愛され、笑っていられる世界は、作れないものでしょうか……。大切な人を愛して、手の届く子供たちを慈しんで……。そういう世中にはできないのでしょうか」

「どうでしょうね。ギャラルホルンにとってどうでもいいものは、愛されてはいけないルールですから」

まるで組織を見限ったかのようにジュリエッタが微笑した。けれど、目は少しも笑っていない。リタを見つめて、そして痛ましげに目を伏せる。

金色のまつげは剣先のように鋭く、化粧をしない目許が無感動にまたたいた。

生きる場所は、すべてギャラルホルンが決めるものだ。鉄華団の居

場所は戦場のみと決められ、閉じ込めるように殲滅された。残党たちも、ジュリエツタでさえ、支配者によつて定められた場所ではか生きることができない。

希有な美少年に生まれたことを利用し、待遇に不満を抱かない子供こそ、この世界が望む『いい子』だろう。見目うるわしく生まれ、容姿によつて選別されて男娼となり、欲望を受けとめ、受け入れて儂い天寿を全うした。イズナリオ・ファリドが飼っていたペットはみなそうであつたという。飼い主に尻尾を振り、その幼い身が持てるすべてを使つて可愛がってもらおうとした。

ところが、マクギリスだけが夜ごと性的に搾取されていたという些末な問題にこだわり、拾い育ててもらつた恩を蔑ろにした。せつかく人身売買業者から館に引き取り、服を着せてやり、食べ物も与えてやつた。教育だつて受けさせた。イズナリオ・ファリドは、すべての子供たちに尊い愛情を注いでいた。

中でも破格の寵愛を得ていたのがあのマクギリス・ファリドだ。ただ金髪碧眼がうつくしいだけの男娼を、正式な養子へ、そして後継者の椅子さえ与えるという好待遇に、なぜか不満を抱き、養父を失脚させた恩知らず。

あいつは裏切り者だ。

それが七年前、醜悪なるこの世界が出した答えだ。

あれは卑しい男娼で、火星生まれの孤児だつた——と養父が得意げに暴露したとき、誰もがイズナリオ・ファリド公の肩を持った。

血もつながらない孤児に名前をつけてやり、生まれの悪さ、身分の低さにもかかわらず教育を与えてやり、養子にまで迎えてやつたというのに、立場を弁えず暴力革命に踏み切つた逆賊。親不孝という重罪を暴かれ、マクギリス・ファリドは准将という階級を剥奪され、世界から弾劾された。

怒りの中に生き、そして破滅した男の死に顔は、穏やかさとは程遠かつた。この世界に失望し、諦観しきつた碧眼を陰鬱に伏せていた。

最期の最後まで抗いたかつたのだろうブロンドの美男子は、かつての親友の腕の中で息を引き取つたという。



その亡骸は、尊厳を奪い尽くされた残骸だった。荼毘に付されたとはいうが、それもどういいう経緯で行なわれたのやら。

「その遺体は、わたしが責任を持って葬ります。フアリド公のクローン体ではと疑われるのは、あなたの望むところではないでしょう」

「ありがとうございます、ジュリエッタさん……！」

金髪、ライトグリーンのみとみ、火星生まれの孤児——という条件で九歳まで生き続けることは限りなく不可能に近い困難だ。アルミアが連れていたという情報だけでも、マクギリス・フアリドのクローン説は容易に成立する。

受け取ろうとノーマルスーツの両腕を伸ばせば、白魚の腕がびくりとこわばる。緊張に身を硬くしていることには、アルミア本人が誰より無自覚だろう。無意識の奥底で、理性よりも直感的にジュリエッタを拒否しているのだ。よく見れば頬は青白く、くちびるは色を失っている。この状況でアリアンロッドの指揮官が信用できないのは仕方のないことだと、まつげの剣先をそつとおさめた。

「その子供は、フアリド公の聖遺骸として担がれる可能性があります」  
はつとアルミアが瞠目する。逆賊として断罪された彼を聖遺骸とする者が——革命の徒が、この世界のどこかにまだ残っている。そのことを、ジュリエッタは言外に告げたのだ。

革命思想は潰えていなかったのかと、アルミアの双眸にあつい涙が集まっていく。

「ええ」とジュリエッタは微笑する。一方で、頭の中の冷静さを司る理性は、そうまでして勝ち馬に乗りたいかと浅ましい民間出身者をあざ笑っている。

血に汚れ、屍肉を抱きしめてなお高潔なアルミアを直視しかねて、踵を返す。ジュリエッタはそして、おもむろにクロゼットを開いた。

「わたしの予備のノーマルスーツをお貸しします。これに着替えてください」

そうしたら、小さな遺体はアルミアのドレスにくるんで、骨のかけらひとつ残さないように焼き尽くす。どうか幼い魂が、生前の痛み

や苦しみを忘れ、あるべき場所へ還れるように。

どこへいつても信用のないジュリエッタでも、司令官としてそれくらいの権限はある。

状況が飲み込めないのかパイロット用のノーマルスーツを見つめるばかりのアルミアに、ジュリエッタは不思議とすつきりした気持ちで笑いかけることができた。

「あなたには帰りたい場所がまだあるのでしよう？」

そしてそれは、ここではない。

今のギャラルホルンにはないどこかへ、アルミアは帰ることができきる。

ならばジュリエッタにできるのは、この心やさしいお姫様を然るべき場所まで送り届けることだけだ。

## 012 狩り場

〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉2号機の狙撃は確実に着弾。

しかし堅牢なナノラミネートアーマーで守られた宇宙基地にとっては三〇〇ミリ程度のライフル弾など、道ばたの小石を蹴った程度の衝撃にすぎない。なにせ、ギャラルホルン月面基地は厄祭戦さえ生き残った要塞だ。三百年以上昔から過酷な宇宙空間を耐えてきた。

というのに、ビスコー級クルーザー〈ヘセイズ〉を取り逃がしてしまつたドックが大口を開けたまま痙攣するさまは、まるで俎上の鯉である。

はじめから自爆するつもりで、取り引きの場所に選んだに違いない。

〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉1号機のコクピットから、エンビは胡乱げに月面基地を見つめる。メインモニタの向こう側では身に覚えのない時限爆弾が続々と爆ぜては基地を揺るがしている。

センサーで追えば、老朽化した部分ばかりだ。爆破して、新しくするつもりだったのだろう。いらぬものはテロリストに破壊させ、ついでに死人の口も封じて、賠償金という名の改修費用を自作自演で引っ張ってくる——何とも吝嗇ケチなシナリオだ。

それでもしなければ必要とされない組織なのかと思うと、なんだか寂しくも思えてくる。

月の重力に引きずられて崩れ落ちるドックを一瞥し、スペースデブリの岩場を蹴って飛翔する。反動で蹴り落とされた岩石はカタパルトデッキめがけて落ちていく。

右腕のヴァルキュリアブレードを高くかざした。

燦然ときらめく抜き身の刃が、宙域の光という光を集めたように存在を主張する。カメラというカメラ、警戒という警戒の視線が鮮紅色の機体に集中する。これ以上ないパフォーマンスだろう。

かつて〈ガンダム・バエル〉はこうやって、革命軍の士気を高めた。

しかし今回エンビたちがいるのはデブリ帯ヘルーナ・ドロップのはずれである。エリオン公が放棄する心算の基地だとしても、この状

況でヘダインスレイヴは使えないだろう。禁断の弓矢を違法に所持し、アリアンロッドの拠点たる月面基地に撃ち込むようなテロリストが存在したただなんて事実は、ギャラルホルンの威光を曇らせてしまふ。

追っ手を差し向けるならば、——ああ、さすがはギャラルホルン最強最大の艦隊アリアンロッドの本拠地、もう月の裏側からMS隊が現れた。

スクランブルの要領で駆けつけたのだろう。宇宙戦仕様のヘグレイズが六機だ。

EB-06g 〈グレイズエルンテ〉。

モニタが示した名称は、エンビも初めて見るものだった。緑と赤に塗装されたカラーリングがヘグレイズシルトに似ているが、よくよく見れば腰部のみならず脚部でもブースターが追加されており、膝下が肥大化して見える。

主武装は巨大斧——にしては、刃が大部分を占める、ハンマーチョッパーとハルバードの中間を取ったような姿だ。バトルアックスよりよほど凶悪な斧ブロード・アックス 鉞を携えている。左腕のシルドは丸く、厚い。球体から削ぎ取ってきたようなバツクラは、強いて言えばヘガンダム・グシオンリベイクの手持ち楯に似ている。ヘグレイズシルトや〈獅電〉の大型シルドと違い、角のない楯は混戦になっても取り回せるのが強みだろう。

大型の凶器と丸い楯。かつてタービンのエースパイロットたちに教えを受けた通りなら、接近戦に適した設計デザインのはず。

楯に仕込まれたバルカンが火を噴く。やはり包囲制圧を主な任務とするヘグレイズシルト隊とは違った目的の部隊らしい。

近接戦闘を想定しているにしろ、混戦ならば阿頼耶識使いにとっても得意分野である。ハンドガンで迎撃しつつエンビは友軍を振り返った。

『おれと3号機で引きつける！チャリー 2号機は援護、離脱ルートに近づけさせるな！』ベンジャミン

MS隊が囿になって母艦へサイズを射程外まで逃がす。それまで

に。

『今ここで六機すべて叩き潰せ!!』

『了解!』  
ラジャー

各機から跳ね返ってくる返答がスピーカーの中で集約されてひとつに響く。〈ヘイズ〉のブリッジも久々の艦隊戦にうずうずしているらしい。負けるものかとトロウがひと吠え、双肩の大型砲塔を迸らせた。

向かってくる〈グレイズエルンテ〉隊の行く手を阻む軌道である。だが届かない。どう加速しても追いつけない距離だ、どうせ鼻先を通過するだけだろう——と高をくくって目もくれない、その油断を殴りつけるようにエンビが二挺拳銃をぶっ放す。

ハンドガンなどナノラミネートアーマー相手には豆鉄砲だが、攪乱にはこれが一番役に立つのだ。

このために3号機の重砲に炸薬弾を装填してきた。的確な射撃によって撃ち貫かれたHEAT弾が暴発する。爆ぜる、爆ぜる弾薬の火花が〈グレイズエルンテ〉隊の視界を遮り、反射的に足を止められるパイロットもいれば、取り乱して呐喊するパイロットもいるようだった。

とつさに減速し、回避行動に移ろうとした判断力ある〈グレイズエルンテ〉はライフル弾の直撃を喰らう。あたりを確認しようと剥き出したアイセンサーを砕かれて、視界を失ってもがく。

メインカメラをやられて動きの鈍った〈グレイズエルンテ〉の目前へ、ヴァルキユリア戦乙女の剣が迫る。

一閃——斬撃一刀のもと両断された金属が断面を晒す。上半身と下半身がずるり、スローモーションのようになされた。

特殊金属のヴァルキユリアブレードが、フレームごと斬り裂いたのだ。オイルが散り、〈グレイズエルンテ〉隊が息を呑む気配が緊張感とともにびりびり伝わってくる。〈ガンダム・バエル〉の剣を横して強化された刃がこうまで鋭利とは、エンビも間近で見て驚くほど。

一機目を鮮やかに撃破してみせたエンビの背後に、さらに迫るヘグレイズエルンテ。すかさずトロウが喰らいつき、至近距離で重砲をお見舞いした。大口径の炸薬弾によってコクピットブロックは完膚なきまでに粉碎され、パイロットは跡形もないだろう。

さらに追いつがってくる僚機を後ろ足のドロップキックが突き離す。突き飛ばされたヘグレイズエルンテは、待ち構えたようなエンビのヴァルキュリアブレードに受け止められた。

切っ先に向かって強制的に落下させられ、避ける余裕もなかったパイロットは機体ごと串刺しにされて絶命する。断末魔が響く一瞬すらなかった。胴部に深々と突き立てられ、突き抜けたブレードを引き抜くため、ヘグレイズエルンテを足蹴にする姿はさながら悪魔である。蝙蝠じみた翼に、獣の耳にも似たブレードアンテナ。漏れ出たオイルを払うさまは、ヴァルキュリアフレームの洗練されたシルエツトに相反して禍々しい。

異形のMSが猛り狂うさまにも、しかしアリアンロットの兵士たちは怯まない。

我こそ餓狼を仕留めようと巨大斧を振りかざすが――、狙い澄ましたようにヴァルキュリアライフルの一撃がマニピュレーターを貫いた。手首、手のひらを断続的に撃ち碎かれて武器を取り落とし、左腕ラウンドシールドのバルカンで牽制・撤退を図るも、やはり炸薬弾で楯もろとも砕け散る。

四機もの僚機がまたたく間に撃破され、どうにか連携をとりたいたいアイコンタクトを、すかさず阻むライフルの一撃。矢継ぎ早に繰り出される攻撃が反撃の隙ひとつ与えない。

しかし、ヘグレイズエルンテもやられっぱなしではない。シールドでコクピットブロックを守り、バルカンが火を噴く。メインカメラが無事だったのはヘルメの狙撃の不備ではなく、パイロットの機転だろう。さすがはギャラルホルン最強最大の艦隊アリアンロットのMS隊だ。

ヘグレイズエルンテは増強されたブースターでヘグリムゲルデ・ヴァンプ1号機に突進する。

加速、疾走、振り上げた斧。突き出すシールドは、動きを止めようというのだろう。エンビはヴァルキュリアブレードを構えて応戦を試みる。だが、どれほど頑丈な剣とはいえ「グレイズエルンテ」の斧鉞に比べれば針のように頼りない。

しかし得物のサイズなど歯牙にもかかず、エンビが繰り出したのは強烈な蹴りであった。

蹴り飛ばした勢いのままぐるんと宙返りをひとつ、鮮紅色の機体は身軽に滑空する。横転し、吹っ飛んでいく「グレイズエルンテ」は大岩に叩き付けられて痙攣する。パイロットは気絶したかもしれない。いくらナノラミネートアーマーで衝撃が吸収されるとはいえ、あの速度で落下させられた人間が意識を保っていられるとも思えない。

宇宙での接近戦を想定してブースターにすぐ替えられた足裏では着地がかなわず、推進力に特化した構造があだになった。

小惑星に着地すると、ぐったりと動かなくなった「グレイズエルンテ」に止めを刺す。飛び立つ。すると最後の機が「グリムゲルデ・ヴァンプ」3号機の重砲をもらって爆散するところだった。

ふりあおげば「セイズ」は順調に離脱ルートに乗っている。

追撃が来る前に撤退だ。次のスクランブルは、六機連隊どころではないだろう。

『ブリッジ！』

呼ぶ。叫びに応答するより早く、デブリ帯へと加速していた「セイズ」が、おもむろに艦首を下げた。そのままぐるり、でんぐり返しに回転する。

そして天地を逆にしたまま主砲が火を噴いた。エンビ、ヒルメ、トロウの連携によってすべて撃ち落とされれば、ナノミラーチャフが弾ける。

「セイズ」はミサイル発射を推力に加え、加速とともに半回転して元の起動に戻っていく。――操艦、火器管制の見事な連携だ。

『曲芸射撃が阿頼耶識の特権だと思ふなよなッ！』

離脱していく「セイズ」のブリッジから吠えたのはイーサンである。『負けず嫌いか』とエンビが苦笑し、気安いハンドサインで母艦を見送

る。ビスコー級巡航船クルーザーであるへセイズに阿頼耶識はついていないが、だからといって戦力にならないわけではない。

だがMS隊ほど自由に動けるわけでもない。ナノミラーチャフでLCSは遮断されているといっても、アリアンロッドならばチャフなど歯牙にもかけない高精度のセンサーを持っているはずだ。

焼き払われる前に散開して合流ポイントへ向かう。

四本脚で小惑星を蹴ったへグリムゲルデ・ヴァンプの3号機を2号機がつかまえ、そのままへセイズとは逆のデブリ帯へと加速した。大型ブースターを持つヒルメの2号機は、飛行ポテンシャルのない3号機のキャリアとしての役割がある。青白い炎を噴き上げ、宙域を離れていく。

援軍を警戒しつつヒルメがトロウを拾って離脱するまで見届けると、エンビはナノミラーチャフの中に一機だけ残って、ゆるやかにバーニアをふかした。

ため息のような挙動に相反して、コクピットの中で寧猛にくちびるを舐める。

さて、もう一仕事。

次なる作戦へと、へグリムゲルデ・ヴァンプの1号機が飛翔する。



へルーナ・ドロップにまで逃げ込んで、追っ手は撒いたようだった。ブリッジにはやりきった感が満ちていたが、まさかビスコー級クレーターで宙返りをするなんて聞いていなかったライドには、まったくいい迷惑である。へハーティ小隊が好戦的な性質であることは知っていたにしても、へセイズは強襲装甲艦ではないのだ。

廊下であちこちぶっけながら、ようやくたどり着いたブリッジで、疲れ切ったため息をつく。

「おかえりライド！」と誇らしげに振り向くウタの毒気のなさが憎た



らしい。

この船にはアルミリア姫のお小姓たちも乗っているのだから、今の揺れで確実に何人か酔っただろう。『逸って飛び出さないように』と釘を刺しておくべきだったのは、MSモビルスーツ隊だけではなかったらしい。阿頼耶識もついていないクルーザーがヘイサリビ&ltgt基準で跳ね回るとはさすがのライドも想定外だったにしろ、ヘセイズ&ltgtは予定通りの航路を進んでいる。

イレギュラーは、リタを失ったことと、アルミリアとはぐれてしまったことだ。

ひとまず予定ポイントでヒルメとトロウ、それからエンビを拾うとして、アルミリア救出作戦の立案を急がねばならない。このまま非正規航路を縫って火星方面へ向かい、拠点防衛組にもこちらへ向かわせる必要があるそうだ。エリオン公がモンターク商会ごと切り捨てるつもりなら、&ltgtで待つギリアムたちが危ない。

総戦力が合流すれば、こちらも打てる手は増える。

実働1番組&ltgtの隊長兼頭脳であるエンビ、実働2番組&ltgtのみならずヒューマンデブリをまとめるギリアムが揃えば、実働3・4・5組の&ltgtも動きやすくなるはずだ。

そのときだった。

ビー——!! と突然、ウタの手許で緊急暗号通信のアラートが叫びだした。

「えっ……通信って、どこからっ?」

ウタが慌てるのも無理はない。アリアドネの監視網にはひっつかっていないはずの非正規航路のはずれだ。宙域に機影は見当たらない。エイハブ・ウエーブも検知できない。

しかし、QCCSで投げ込まれたメッセージの発信元は。

「MSから……?」

「レギン——って、アリアンロッドの女騎士様の機体じゃねえか!」

月外縁軌道統合艦隊の指揮官機&ltgt。敵の大將からの連絡など、物騒極まりない。一体どこに潜んでいるのかと、

クルーたちが暗礁に目を凝らす。

ライドだけが神妙な面持ちで操舵席まで歩み寄ると、ウタの肩を通り越してパネルに触れた。暗号によって封<sup>シール</sup>されたメッセージを開く。

『アルミリア・ボードウインの身柄を引き渡したい。ガンダムのパイロットがひとりで指定ポイントへ来るように』——か」

身柄の引き渡しとは、一体どういうつもりなのか。意図は読めない。……試されているのか？ わかるのはただ、発信元が暗号化されておらず、確実にヘレギンレイズ・ジュリアンからの通信だということだけだ。

火器管制席から身を乗り出したイーサンが露骨に眉根を寄せた。

「……罨にしか見えねえよ、ライド」

「でも、腹芸のできそうな女にも見えたくない？」

「そう作ってるだけかもしれないだろ。バカじゃない頭は叩かれる」  
学校がそうだったろ、とイーサンが吐き捨てる。同じ学校に収監されていたウタは形のいい眉を困ったように落とした。

モグラ叩き場のような言いざまは、ウタにも覚えのあるものだ。鉄華団がなくなり、地球へ亡命してIDを書き換え、文字が読めるからと十把一絡げに中学校へ入れられたからよくわかる。たった半年の年齢差で小学校へ入れられていたエンビたちに比べればいくぶんマシな環境ではあったにしても、『学校』という名の檻には嫌悪感しか抱けない。

あそこでは、子供とは大人の言うことをよく聞くべき存在で、口答えをしてはならないと決まっていた。思想を持つてはならず、思考力も歓迎されない。将来的には安価な労働力になるべく育てられているのだから、言われたまま、教えられたまま復唱するのが『正しさ』なのだろう。アンチ・インテリジェンス 反知性を演じなければ矯正される日々にはどれほど閉口させられたか知れない。

IDの次は思考まで白紙に戻して、支配者どもに都合のいい木偶に作りなおされるなんてごめんだ——と、アイデンティティの屠殺場か

ら逃げ出し、ライド率いる『強硬派』についた。

唯一の故郷であった鉄華団がなくなってもなお『本当の居場所』の  
実在を信じ、オルガ・イツカを信奉する強硬派の一団こそ、このへハー  
テイ小隊である。

たどり着く場所など幻想だ、方便にすぎなかったのだとクーデリ  
ア・藍那・バースタインによる救済を受け入れた『穏健派』の軍門  
に下るくらいなら、戦死したほうがマシだという過激思想の塊でもあ  
る。

だってそうだろう、連れ戻されたらまたギャラルホルンの権力の下  
におさまるように説得される。YESと言うまで解放されない。

平和になったとか、戦っても何も変わらないとか、前向きに生きる  
とか。復讐は何も生まないとか。過去に囚われるなどか。要約すれ  
ば「お前は間違っていて俺は正しい、だから俺に従え」で済む内容を、  
手を替え品を替え聞かされ続けるのである。鉄華団が潰えて七年と  
いう時間が経過し、年齢相応に成長だっているのだから、いつま  
でも無知蒙昧な『子供』のままではないのに。

何もかも捨てるしか生きる術はないのかと打ち拉がれていた餓狼  
に、希望を与えてくれたのがアルミア・ボードウィンだった。彼女  
を失っては兵站どころか生活資金もいずれ底をつく。

「……お姫さんの身柄がかかっているなら行くしかねえ」

アルミアを救出することは、元少年兵や元少年男娼の生活を守  
ることもある。たとえ作戦の中で誰かが死んでしまっても、ひとり  
でも多くが生き残るには彼女の力が必要だ。

スーツのジャケットを翻して肩にかけるとライドは鋭く踵を返す。  
「ブランカを出してくれ」

指定ポイントへ、ひとりで向かう。……居場所を守るにはそれしか  
ない。どんな罠が待っていても、罠ごと噛み砕いてやれなければ、生  
きる道は残っていない。

(それでいいんだろう、ラストル・エリオン！)

アルミリア・ボードウインの身柄を引き取りに来るようにと悪魔<sup>ガンダム</sup>を呼びつけたポイントは、月面基地からほど近いヘルーナ・ドロップの一角だ。

月の破片が大小浮遊し、最大で全長1キロ近い大岩まである。月の引力と月面基地を維持するエイハブ・リアクターによって集められた岩石群は絶妙なバランスで成り立っており、常に微細な移動を繰り返すことで三百年の均衡を保ってきたらしい。

この蜘蛛の巣状の迷路を形づくるスペースデブリの密集地に、戦艦での侵入は不可能だろう。火器によって吹き飛ばせば月面基地の存続が危うく、MS<sup>モビルスーツ</sup>のサイズで何とか迷い込めるような隘路である。それでも少し気を抜けば岩石と正面衝突して命に関わる。

ジュリエッタはここで自主的な特訓を重ねてきたから、勝手ならばわかっている。ここがちょうどアリアドネの監視網から影になっっていることも。

何度も迷い、何度も抜け出そうと試行錯誤した、馴染みの迷宮なのだ。帰路を見失う恐怖と向き合い、冷たい汗を流し、奥歯を食いしばってジュリエッタは、この孤独の岩場で純粹な強さを求めた。

『大丈夫です』とアルミリアを安心させようと臍を下げる。

愛機へレギンレイズ・ジュリアは細身のジュリエッタにあわせて改良が重ねられ、コクピットブロックが小型化されたため二人乗りには窮屈だが、無事に引き渡すには他に方法がなかった。

対ガンダム戦を視野に入れ、へグレイズの発展型やへレギンレイズはみなブースターを強化している。量産機にもガンダムフレームのようにエイハブ・リアクターを二基以上搭載する研究は進められたようだが、どのフレームも過負荷に耐えきれず四肢が弾け飛んでしまうらしいのだ。他の方法でツインリアクターに匹敵する機動力を求めれば、結果は自然とスラスターの増強へ結びついてしまう。

へレギンレイズ・ジュリアもまたブースターまみれの高機動仕様だが、動きが単調になりがちなジュリエッタは、阿頼耶識使いのような

敏捷性をどうにか手に入れようと出口の見えない暗礁を泳ぎ続けた。管制官はみな民間出身のジュリエッタをよく思っていないし、指揮官ゆえどこで何をしていても干渉してこないのだ。

無関心という名の自由のおかげで、アルミリアを無事に脱出させることができるのだから、皮肉な因果である。

この迷宮を泳ぎきるために、ジュリエッタは二年近い年月を——いや、三年はゆうに費やしたか。だけど鉄華団のMS乗りならこの程度の局面、たやすくぐぐり抜けてしまうのだろう。

認めるのは業腹だが、この七年で『現実』を見る目くらい身につけた。

『ここには誰も来ません。わたしだって、ここでアルミリア嬢に死なれては困る。出てきなさい、ガンダムのパイロット!』

LCSによる無差別な通信は、へガンダム・アウナスブランカへのコクピットにもきいんと威勢よく響く。

やはり腹芸はできないか——とライドは疑り深いグリーンアイズを剣呑に眇めた。デブリ帯に誘い出し、事故を装って岩石に押し潰させることだってアリアンロッドなら可能なはずと読んだのだが、どうやら考えすぎであったらしい。

ラストル・エリオンの差し金とばかり思っていたが、それも違ったようだった。こんな狭苦しい岩場に誘い出して一体どんな罠を仕掛けているのかと警戒を重ねてここまで来たのに、まさか本当に何も無いとは。

岩陰から姿を現せばへレギンレイズ・ジュリアへのセンサーと目が合う。

『ライドさんっ!』

『お姫さん……?』

『よかったっライドさん……無事だったんですね!』

……出会い頭に他人の心配をするあたり、アルミリアらしい。本当に本物なのだろう。コクピットに同乗していることは伝わった。

へガンダム・アウナスブランカが姿をさらし、剣も楯も持たない丸腰のへレギンレイズ・ジュリアへと向き合う。——こんなブースターだ

らけの機体で、女騎士は暗礁を泳ぐのか。戦<sup>や</sup>りあうならそれなりに厳しい相手に、彼女もまた成長しているのだろう。

『コクピットを開きなさい!』

女騎士が高圧的に声を張ったが、ふと沈黙して『わたしから開くのが筋というものでしょうか?』と自問自答が続いた。ジュリエッタの独り言にライドは答えなかったが、ほどなくコクピットハッチがガコンと開き、シートが上昇する。

あらわになつたパイロットの膝には、揃いのノーマルスーツ姿のアルミリアが抱かれていた。ずいぶんと狭い構造らしいコクピットブロックに詰め込むには、一般のノーマルスーツではかさばるせいだろう。パイロット用のノーマルスーツは細身で、軽量化がなされている。

身軽なしぐさでヘレギンレイズ・ジュリアの手のひらへと貴人の手を引いたジュリエッタは、アルミリアをかばうように支えるとヘガンダム・アウナスブランカへ向かつて声を張り上げた。

『この方を安全な場所まで送り届けなさい! それがわたしがあなたを見逃す理由です』

ライドは無言でハッチを開くと、愛機の手のひらに飛び降りた。

まさか本当にアルミリアを返すつもりだとは思わず、肩すかしを食らった心地だ。何とも言えない居心地悪さを押し込めて、胡乱に首を傾げる。

『……あなたは、ラスタル・エリオンに心酔してるわけじゃないのか?』

『ラスタル様はわたしの誇り。ラスタル様の剣となり盾となつて戦うことがわたしの望みです。いつかそのときが来るのなら、あの方とともに滅ぶ覚悟もある』

主君のために戦い、そして恩義の果てに戦死すること。それ以外にジュリエッタが望むことはない。死を恐れてしまう己の弱さを受け入れて、命あるものとして強くなろうと決意した。

人とは、死ぬものだ。永遠のものではない。

ジュリエッタが自問の果てにたどり着いた人間らしきとは『死』そ

のものだった。命には必ず終わりがあり、奪うこともできる。傷つけば血は流れる。あんなにも強かったへガンダム・バルバトスへのパイロットでさえ、殺せば死んでしまったように。

ならばジュリエッタにできることは、主君のために戦って戦って死ぬことだけだ。どんなに恨みを買っていようとラスタルは恩人なのだ。身寄りのないジュリエッタには教育を与え、戦う力を与えてくれた。ジュリエッタが慕う傭兵のように、最期の最後までついていく。わたしはラスタル様さえいればいい。——それがジュリエッタに出せる唯一の答えだった。

叶うならばラスタル・エリオンの『剣』としての一生を全うしたいが、剣になれないのなら『楯』でも構わない。実子のいない彼が『娘』にと望むならばそれでもいい。

『女』としてボードウィン家との婚姻を望むのならば、それでも。

民間出身のジュリエッタが恩人の役に立てる方法は限られているし、血統主義のギャラルホルンにおいて、ジュリエッタは『私兵』以上の地位は得られない。階級が何であれ、後継者とは認められない。なにしろへヴィーンゴールヴへ外に生まれた以上は出自が悪いのだ。地球の片田舎に生まれ、どこの馬の骨かもわからないジュリエッタは『身分に問題あり』のレッテルを剥がすことができない。

でも、——もしも生まれも身分も関係ない〈法〉と〈秩序〉が実現された未来なら、きっとその限りではない。

『アルミリア・ファリド——わたしはあなたこそ、ギャラルホルンの次期代表として適任だと思っています』

『ジュリエッタさん……………』

正統なる血筋に生まれ、理想と思想を持っている。セブンスターズという既得権益の中、生まれながらボードウィンの名を持っている。なお、アルミリアはみずからの持つ力に自覚的だ。地位、財力、雇用関係、性別といった『力』の天秤が、支配と抑圧の構造を生み出していることを知っている。

階級の高い者に逆らえない構造は、戦場では指揮系統として連携を有利にするかもしれない。だが上官は往々にして無自覚だ。銀のス

ブーンをくわえて生まれてきたギャラルホルンの将校は、みな非対称な力関係に無頓着なのである。みずからの言動がいかにか部下を萎縮させ、どのように影響するのか、考えたこともない。

兵隊を使い捨てる作戦など立案されないような、花嫁が結婚という市場で売買される政治の道具にされないような——そんな生まれも身分も関係なく幸福を求められる『ここではないどこか』を作りたいと願えるのは、アルミリア・ボードウィンしかない。

罪の意識を抱きしめて生きる彼女なら、いつか被害者を生まないような法と秩序にもたどり着くだろう。加害者であるという苦しみから目を逸らさない強さがアルミリアにはある。

世の中に深く根を張ったカースト意識をなくすことはできなくとも、せめて誰も泣かずに済むようなシステムを。

あなたならきつと実現できる。

ジュリエッタは同じパイロットスーツ姿のアルミリアの背中を突き放すようにそつと押した。慌てそうになる耳元に『そのまま』とアドバイスすれば、まつすぐに進んだその先でライドの両腕に抱きとめられた。

見届けるが早いか女騎士はコクピットへと戻り、まるで捨て台詞のように『アルミリア嬢の安全は、このわたしが保証すると約束します』と事務的に告げた。鋭いまつげの剣先が、どこでもない虚空を見つめる。

『あとを頼みます。鉄華団のパイロット』

祈るように残された言葉を胸に抱きしめ、アルミリアは暗い暗礁へと去っていく女騎士の背中を見送る。

ライドに手を引かれ、そして宙域を離脱するへガンダム・アウナスブランカへのコクピットで同志たちの未来を願うことしか今はできない。

『……あなたも、どうか』

どうか。



▼  
視界の悪い暗礁を、鮮紅色の機体が泳ぐ。

〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉1号機は月面基地の一角へと高度を下げると、隠れるように膝を折った。センサーにかからないよう建物の陰に伏せると、コクピットハッチを開く。

エンビが〈ヘサイズ〉に合流するのはヒルメとトロウよりも後だ。飛行変形機構を有する1号機が機動力に優れ、敢えて2・3号機と別のルートで退却したのだから、ランデブーまでの猶予期間に、打てる手は打っておきたい。

携帯端末の電源を切ってシートに放り捨ててから、バックパックの小さな翼を展開する。

辺りを警戒しながら、基地施設の中でも人気のないブロックへ。

目的は、単独での〈ヴァナルガンド〉奪還。

不可能ではないはずだ。月面基地の設計図は頭に入れているし、足音の響き方も覚えた。今度はもつと深くまで潜入できる。

やられっぱなしではいられない。だって、アルミリアは対価を支払ったのだ。〈ヴァナルガンド〉と〈ガンダム・バエル〉を買い取るために全額耳を揃えて払ったのに、金だけ騙し取られて黙っていても舐められるだけだろう。また同じことを繰り返される引き金にもなる。いかにラスタル・エリオン公といえど随意に踏みにじっていい消耗品ではないのだと、銃口を突きつけてやらなければ。

ふうとヘルメットの中でため息をつく。深呼吸をひとつ、エンビは無重力を蹴った。

世界平和の礎のため、使うだけ便利に使って用済みになれば廃棄する——エンビたちは確かにそういう生まれなのかもしれない。作られなかった子供のくせに役割をもらえて、害獣にもかかわらず生かしてもらえて、しあわせなのかもしれない。

だけど。欲しかったのは『本当の居場所』だ。誰に害されることもなく生きられる日常だ。学校でテロリスト呼ばわりされない、ガキは

黙っている抑圧されない、そういう未来にたどり着くために戦ってきた。

一度死んだから平和に生きられるとか、平穏な日常に帰ってこいとか、そうやって善意100%で魂を砕きにかかってくる救いの手を取って、量産型の奴隷に成り下がるなんてごめんだ。

エンビにはエルガーとともに生まれ、ヒルメやトロウとともに育ち、ライドとともに戦ってきた過去がある。それを偽造した真実で上書きして、死ぬまで我慢しなければいけないなんて、いつそ一思いに殺してくれとさえ思う。

ギャラルホルンが提唱する幸福の規範をなぞってしまったら、そんなの虐殺への加担じゃないか。労働者を使い捨てる凶行に見て見ぬ振りして、銃殺されるヒューマンデブリを助けてやろうともしない、そんな卑怯な生き方はできない。

学校では少年兵はテロリストだと繰り返し繰り返し教えられ、作文まで書かされて、耐えかねて『デブリ堕ち』したクラスメートが何人もいた。俺も同じ少年兵だと名乗り出られない悔しさで、腸が煮えくり返って死にそうだった。

生まれを呪え、過去を憎めと言い聞かせられる平穏な日常を耐え抜きながら、エンビはただ、力があればと強く願った。

理不尽な現状を打開するための力が——殺されないために抗う力が欲しかった。火の粉がかからない安全圏に逃げ切って、この世界は平和だなんて言っていられるお花畑どもを焼き払ってやりたかった。

何も知らないでいることが一番の幸福だというラストアル・エリオンの言葉は、確かに真実なのだろう。

なんてたつて軸のないやつはブレないし、芯がないやつは折れない。道がないやつは迷わない。通す筋がないなら、手段なんか選ぶ必要もないだろう。何も持たないなら、捨てるものだって何も無い。意志を捨てさせられる絶望も知らず、魂を砕かれる痛みも知らず、強者の思い通り誘導されるまま、支配者のための円滑なる歯車となれるのだろう。

踏み台にされていることから目を背けて楚々と生きる家畜たちの

幸福を、ライドは非難しないけど。

(俺はそんなに甘くなれない)

筋を通す生き方を、鉄華団が教えてくれた。変えられない未来なんてないんだと信じる力を与えてくれた。——だから。

アイデンティティの屠殺場で白紙に戻されてしまった過去を、名前を、居場所を、俺がこの手で取り戻す。

その向こう側へたどり着いたとき、ようやく前に進めるんだ。

## 014 レトログレード

——本当にこれでいいのかしら……本当に、これで……っ

部屋に閉じこもって泣いていた、女の声を覚えている。母の嘆きだ。正しくエリオン家当主の座にあつた父にはふたりの妻がいた。

ひとりとは政略結婚の正妻、もうひよりは士官学校時代から連れ添つた内縁だった。

正統な血筋に生まれたラスタルと、妾の子ジュリアス。奇しくも数日違いで生まれた腹違いの兄は、母親譲りのブロンドにブルーグレーのひとみが野暮ったく、姿かたちのどこをとつてもエリオン家の表札そのものであつたラスタルとは似たところがひとつもなかった。

異母兄はおつとりとして素直で、少し鈍臭いところがあつたが、思慮深く、読書家であつたと記憶している。紙のあたたかみ、ページをめくるときの音が好きなのだど照れたように笑っていた。そんなところまで、こちらのほうが合理的だとタブレットで読書をするラスタルとは正反対だった。

同じ母のもと、乳兄弟として成長した幼少の日々。あのころは、どこにでもいる『似ていない兄弟』にすぎなかった。

しかし、いつのころからだつたらうか。ジュリアスはなぜだか、彼とは血のつながらないはずの、ラスタルの母のようなことを言い出したのだ。

——ねえ、ラスタル。僕たちは本当にこれでいいのかかな？

世界のあり方への、素朴な問いかけだった。

——ぬるま湯の合議制をとりながら、軍事力で世界を管理する……そんな二律背反に、誰ひとり問題意識を持っていない。セブンスターズは、ギャラルホルンは、本当にこのままでいいのかかな？

異母兄は問う。厳しいお父様の前じや言えないけれど、きみならばわかってくれると思つて……と、懇願のような目を向けられるたびに、ラスタルは母の嘆きを思い出した。

正統なる妻としてエリオン家に嫁いできた、ボードウィン家の息女だった。世継ぎを作つて生むだけ生んで、息子は父親のもとで内縁の

妻が育てているのだから、忸怩たる思いもあつただらう。ラスタルよりもジュリアスのほうが誕生日が十日ばかり早いのだ。エリオン家の長男であるジュリアスは妾の子ゆえ、正統な血筋のラスタルは次男坊ゆえ、エリオン家の『嫡男』とは一体誰なのかと陰からひそひそ笑う声は絶えなかった。

彼女は、エリオン家のお荷物だった。表舞台に立つときにだけ正妻として求められ、でなくば部屋を出てくる権利もない。お嬢様育ちのせいで子育てどころか紅茶ひとつ自分では淹れられないのだ。深窓の令嬢として育ち、若くして『花嫁』という政略結婚の道具になり、夫の帰りを待つ家具であつたはずが、『妻』の役目も『母』の仕事も別の女がすべてひとりでごなしてしまう。

今のままでいいのかと、本当にこれでいいのかと、ただ泣いてばかりいた母。純粹無垢でうつくしい淑女という商品であつたがために、ひとりでは生きていくことさえままならない。現状を悲観し嘆くばかりで、行動の起こしかたひとつ知らない無力な女だった。

円満とは言いがたかつた家庭で、ふたりの母親とも異母兄とも距離を測りかね、いつもどこかで『飢え』に苦しんだ子供のころ。

誰からも愛されるクジャン公が父であればと何度も思つた。

—— おお、お父上の少年時代そっくりじゃあないかエリオンのぼうずよ！ このヨーク・クジャンに、お名前を覚えてくれないかな？！

初対面の子供をひよいと抱き上げてみせたクジャン公は細身で、よろめきそうになつたら部下たちが押し寄せるようにして支えていた。

—— はっはっは！ 近ごろは足腰が弱くていかなア！ みなを支えがあつてこそわたした、うむ、ありがとうな！

朗々とした声はやかましくもあるのに、景気がよくて不快さがない。深く刻まれた目尻の皺が垂れ下がる笑顔は太陽のようで、不思議な愛嬌のある御仁だった。ヨーク・クジャン公はよく笑う方だった。周りにはいつもキラキラと希望を目に宿した家臣たちがプライベートを潰してまで付き従っていた。

厳しかった父に忠臣はおらず、いつも閑散としていたエリオン家にも太陽があればとため息をついたこともある。

まだ言葉も覚束ない一人息子を置いてクジャン公が亡くなられたとき、ラスタルは初めて彼が幼少よりずっと病弱であったのだという、秘められていた事実を知った。ずつと剛胆で、声の大きな御仁とばかり思っていたのに。明朗快活であった姿はすべて空元気であったらしい。病は気からと言うのなら、気から病をはね除けてやろうぞと、抗いながら生きたことを葬儀の場で聞かされた。

なかなか世継ぎができないことを気に病み続けていたことも。晩年ようやく子供ができたことを、それは喜んでおられたのだとも。

どうか、どうかイオクをよろしく頼むぞ——と、今際の病床で流された一滴の涙が、長い長い闘病の果てにはじめて見せた彼の弱さだったことも。

嫡男イオク・クジャンは顔立ちこそ母親似であったが、生き生きと朗らかな物言いや、大げさなしぐさが年を経ること父親に似てくる。それが血というものなのだろう。健康優良児として産まれてきてくれたクジャン家の新たな太陽は、ただ笑っているだけで家臣たちをしあわせにする。まるで晴天の使者かのような血族だ。

先代クジャン公のためにも立派なご当主に育てあげねばと、クジャン家ゆかりの臣だけでなく、ギャラルホルンの誰も彼もが奮起した。それからいくばくもしないうちに、ジュリアス・エリオンが死んだ。事故死だった。

〈ゲイレール〉の整備中、誤ってキャットウオークから転落したのだという。エリオン家の長男だというのに葬式に先んじて遺体は火葬され、弔いの花を手向けた棺桶の中に遺体はなかった。

妾の子ジュリアスではなく、正統な血筋のラスタルこそ次期エリオン家当主にふさわしいと誰もががしゃべりたて、半分だけ血を分けた兄の死は、風のように忘れ去られていった。

純血でなければ嫡男とは呼べない。ギャラルホルンはそういう組織だったらしい。

士官学校で一緒だった旧友だけで集まって、自棄酒をあおった。

それから彼のことは忘れたように生きていたが、あるとき、思いが

けない出会いがあった。

立場に縛られて動けないラスタルのため、傭兵としてヘヴィーン  
ゴールヴの外へ出ていた旧友——当時は『ブレア・ジュリス』と名  
乗り、やがて『ガラン・モツサ』として散った男——が、懐かしい面  
影をともなっていたのだ。

ラスタルは折りを見て、肉と酒を手にお忍びで傭兵たちの野営地を  
訪ねていたのだが、あるときバーベキューグリルの上で珍しいものが  
焼かれていた。

マシユマロである。

野営地の一角、むき苦しい傭兵団の誰かが持ち込んだにしては不釣  
り合いに可愛らしい甘味だ。

どうしてこんなものを……とラスタルが首を傾げれば、ブレアは  
「おうよ」と笑んだ。

大柄な肩をひよいと逸らせば、隣にはキトンブルーの双眸が愛くる  
しい少女がひとり。八歳くらいだろうか。ホットココアのマグを両  
手で包んで、「こどもあつかいしないでください」と不服そうにくちび  
るを尖らせる。舌足らずだが、何とも小憎らしい物言いの子供だっ  
た。

——驚いたか、ラスタル！ こいつは『ジュリエッタ』だ。

きのこのようなブロンドをぐしゃぐしゃかき回して、友は鷹揚に  
笑った。この娘も傭兵団の一員として立派に仕事をしており、もう銃  
もナイフも爆弾だって自在に扱える戦士に育っているという。

M Sモビルスーツの操縦も見込み充分、実に将来有望な女戦士アマゾンネスの卵なのだ、自  
慢げに笑う。

——ジュリアスに娘が生まれたら、こんな感じだったかもなあ！

「——さま、……ラスタル様？」

呼び声に、ふつと意識が浮上する。いつの間にか眠ってしまったとい  
たようだった。重たいまぶたをこじあげれば、あの子の少女がラス  
タルをのぞき込んでいる。

「ジュリエッタか」

「ラスタル様、どうかなさいましたか」

「いや……」

ただ、懐かしい夢を見ただけだ。ラスタルがまだ、月外縁軌道統制統合艦隊のいち兵士であったころ、事故死させられた異母兄のことを思い出していた。そして窮屈なへヴィーンゴールヴを抜け出し、傭兵のキャンプで夕食を囲んだときのことを。

ブロンドにブルーグレーのひとみ、拾い子の名はジュリエッタ。

実に不思議な巡り合わせだと今でも思う。『ひげのおじさま』と傭兵を慕うのでジュリエッタ・ジュリスと名乗らせたが、やっぱり『モツサ』にしておけば……などと、傭兵の偽名が変わるたびにむぐむぐと文句を言っていた。

異母兄の娘のつもりで養育し、いずれは後継者の椅子に座らせるつもりだ。はじめはガランの後釜に据えるつもりだったのに、十五年の月日の中で、いつしか情が湧いてしまったらしい。

傭兵の後任として使える駒は他にいる。

「少し、居眠りをしてしまったようだ」

「お疲れなのではありませんか」

「そんなことも言っておれん。月面基地の修復に取りかからねば」

「わたしはラスタル様の剣となり、楯になりたいのです。どうか何なりと——」

「ジュリエッタ」

呼べばすんなり押し黙り、遮ったつもりもないのに命令を待つ忠犬のように、ジュリエッタは眉尻を下げた。拾ったころはほんの小さな子供だったのに、すっかり美人になった。養父としてのひいき目もむろんあるだろう、成長を見守ってきた娘のような存在が、可愛く見えないわけがないのだ。

アルミリア・ボードウィンがモンターク商会を引き継ぎ、鉄華団の生き残りを雇って密偵の役目を請け負ってくれたおかげで、ジュリエッタは手許に置くことができた。

自身の後釜に据え、この子にはどうか安寧に生きてほしい。民衆か



らは相当な恨みを買っているだろう。ラスタルがいなくなっても生きていけるように、ガエリオ・ボードウィンに嫁がせるつもりだ。母をボードウィン家にお返しするという、意趣返しでもある。

フアリド家のハーブビーク級へヴァナルガンドへ、そしてへガンダム・バエルへは既に売り渡した。

三百年前、厄祭戦を終わらせた英雄の搭乗機——へガンダムバエルへ。

かつては錦の御旗として崇められもした。しかし支配者が変われば、旧時代の神も、新時代の悪魔になりうる。逆もまた然りだ。

近日、アウナスともどもその首級をもって出自不問の榮譽栄達をもたらすだろう。英雄の時代は終わり、旧時代の信仰はかたちを変えらる。三百年前に人類を守った悪魔は、今度は万人に奇跡を呼ぶ、出世の引き金となる。

それこそが最適化されていく世界の正しいあり方だろう。

指導者は七人もいらぬ。七十二柱もの英雄に守られていた時代は終わったのだ。旧時代の遺物など崇める愚者どもは、そして歴史の闇に葬られる。

みなが単一の神を信じるようになれば。争いをなくすことが可能だろう。そのためには敵が必要だ。無辜の民を傷つけることのない、思慮と思想あるパイロットを乗せた外敵が、新たなる神話を作る。

「ジュリエッタ。お前は、『人らしく生きたい』と考えたことはあるか？」

「ラスタルさま……？」

当惑にキトンブルーの双眸がまたたく。重いまぶたは野暮つたくも見えるが、目の大きな顔立ちのジュリエッタにはちょうどいい塩梅だ。

これが親ばかというやつかと、いまだ独身のラスタルは自嘲気味に笑んだ。

「人であるのだから、人でなく生きることなどできん。獣ならば人のように生きたいと願うやもしれんが——」

「……獣の考えることは、わたしにはわかりません」

「そうか。『獣』だからこそ奴らは『人』に焦がれるのだろう」

幸運な女騎士は、従順に目を伏せた。ああ、とラスタルは頷く。家畜を御するのはこうも容易で、獣を狩るのもひどくたやすい。退屈だが、退屈であるほどいいのだ。平穩とはそういうものだ、ジュリエッタも大人になればわかるだろう。何も起こらないことが、兵士の仕事など存在しない世界が、何よりの平和なのだ。

思考を摘み取り、思想を削ぎ落とし、人はみな『普通』の範疇の中に収まるように育てばいい。そうすれば争う必要性はなくなるだろう。その世界には復讐も報復もない。役目を理解し、力の及ぶ限りで精一杯生きていけばしあわせに生きられるのだから。

みな、美味しい肉を食いたいのだ。動植物、魚、労働力、女子供を食い物にできなくなるとあれば、当然反発が起こる。これまで当たり前に使ってきかたものに好き好んで対価を支払いたい者はいない。

肉には肉の、ただ黙って喰われているという重要な役割がある。ものを考える子供など可愛くない、物言う女など生意気だと思っているのはテイワズも同じだ。従順であればこそ幸福を享受できるのだとレールを敷いて物心つくよりも前から刷り込んでやれば、女子供を円満に懐柔できる。

子供とは無邪気で愛くるしく、学校と勉強が大好きで、大人の言うことをよく聞くものだというプロパガンダも、圏外圏じゆうに行き渡ったところだ。やがては内々で『常識』という名のルールから逸脱しそうな杭を打ちあうようになるだろう。『このままでいいのか』と体制に疑問を抱く不穩分子は、自然と淘汰されていく。

もしも反乱に発展するならばギャラルホルンが出勤し、治安維持を行使してやればいいが、——それはまだ先のことだ。

「釘を刺しておかねばならんな」

先ほど、基地内に侵入していた諜報員をひとり捕らえてしまった。尋問は兵士に一任してある。汚れ仕事にジュリエッタを関与させたくないと、わざわざ執務室まで呼びつけたのだった。

目尻の皺を深くし、ラスタルはふうとため息をついた。

「心が痛むよ」

言葉に反して、くちびるは愉快げに歪む。



作戦開始から十九日目——月面基地を離れて六日目。

へグリムゲルデ・ヴァンプⅠ号機を回収するはずだったランデブーポイントに、エンビの姿はなかった。

肩すかしを喰らったような安易さでアルミリアが救出できた矢先の事態に、艦内には動揺が広がりがりつつある。連絡を取ろうにもビスコー級クルーザーへセイズⅡがいるのは非正規航路の真っ只中。こんなデブリ帯でMSモビルスーツを見つけると、砂漠で米粒を探すようなものだ。

いくら鮮紅色の機体が目立つ色彩とはいえ船体各部カメラの映像は岩石で遮られて虫喰い状態である。これではお互いが双方向から探していたって合流は容易ではない。

「エンビからの連絡は？」

「まだ、何も……」

ウタが力なく首を振る。この任務中、火星から月までの道中はMSのコクピットで待機することも視野に入れていたから、みな保存食はひと月分ほど積んであった。にしても、コクピット内の酸素は十日もしないうちに尽きるだろう。

カウンタダウンは残り四日。へグリムゲルデ・ヴァンプⅢ機の中でも1号機アルフレッドは高機動型だし、エンビはよく動き回るから推進材の残量も心配だ。スラスターのガスが尽きたらMSは動けない。

そろそろ連絡があってもおかしくないころなのだが……。

「どこかで入れ違ってしまった、とかかな……」

「ありえねえよ」

「でも俺、もしかしたら見落としたりしちゃってたかも……っ」

「エンビと俺たちに限って、ありえねーって言ってんだよ！」

イーサンが間髪入れず噛み付いて、ライドもああと首肯した。そうだ、ウタが弱音を吐く必要はない。鉄華団残党で構成されたへハーティ小隊は、同じ戦術で育ってきたのだ。鉄華団時代に培った知識や、学校で覚えた憤り。共有する過去あつてこそ、戦略的に思考したとき限りなく同一の『最善』をはじき出す。以心伝心の連携は、餓狼の群れの中で構築された価値観のもとで算出される『最も合理的な選択』を取り続けるからこそだ。

ウタがポイントを再計算するとき、エンビもまた同じデータと数式を用いて計算を行なっているだろう。

もとよりへグリムゲルデ・ヴァンプの2・3号機は二機セットで、1号機は単騎で、それぞれ動ける機体性能である。隊長が別行動をとることくらい、へハーティ小隊にはよくあることだった。

しかし、エンビが六日も戻って来ないととなると、……さすがに初めてだ。

前例がないだけに、搜索・哨戒に撤することしかできない。ヒルメとトロウも疲れているだろうし、またそのうち駆り出さなければならぬことを思えば、一分でも長く休息をとらせてやりたい。

代わりの実働部隊が必要だろう。

「イーサン、へガルム小隊を呼んでくれ」

艦内放送をかければ、ほどなくブリッジの扉が開いた。

番犬たちのリーダーは右腕と左腕を従えて、グリーンのみでライドを見上げる。

「任務ですか」

「そうだ。昨日ついたばかりだったのに悪いな、ギリアム」

「いえ。呼んでもらえて、うれしいです」

ギリアムの言葉に、？はないのだろうか。ライドも「そうか」と中身の無い通過儀礼を返す。

拠点防衛組として火星の共同宇宙港へ方舟に残っていたメンバーを呼び寄せたのだ。これまでモニターク商会を手足に使っていたラ

スタル・エリオン公に切り捨てられたのであれば、火星の拠点も安全ではない。

マーナガラム実働2番組へガラム小隊は元宇宙海賊の勘をもってデブリ帯を最短距離でぐり抜け、昨日ビスコー級クルーザーへセイズに合流した。アルミリアの歓迎を受け、相変わらず格納庫で寝起きしている。……まったく、相変わらず頼りになる子供たちだ。

「早々だが、哨戒をお前らへガラム小隊に任せたい。戦闘にならないように周囲を見張ってしてくれるか」

「はい！」

相変わらず景気のいい返事である。両翼も即座にこくりと頷く。糸目のフェイトとどんぐり目のエヴァンは、ギリアムがいなければ口もきかない犬猿だろうにタイミングばつちりだ。むしろ一卵性双生児であるはずのギリアムとエヴァンのほうが感情の発露に差異がある。そっくり同じ顔をしているせいか、見せる表情の違いがよくわかるのだろう。

三人揃ってブリッジを出て行き、センサーが自動的にドアを閉める。

そして——、知らず知らず息を詰めていたのか、イーサンが長々とため息を落とした。

「……ちっこくても元デブリは迫力あるぜ……」

「弟くんのほうは天然っぽいけど。戦闘になったら結構やるもんね」

「そうじゃねえよ……」

ぐしやりとブロンドを乱して、イーサンは頬杖ごと火器管制席に沈んだ。何とも言えない顔をするのは、ブリッジクルーという非戦闘員ゆえの葛藤だった。

あの双子にはアストン・アルトランドの面影がある。……というのは、ああいった褐色肌かつグリーンアイズの相違点が認知できない白人特有のイメージなのだろう。宇宙海賊へブルワーズから鹵獲されてきたヒューマンデブリ特有のガツガツした戦闘員のイメージを、人種という大雑把な共通点を持つ子供に重ねてしまうのは、ただの偏見でしかない。

同じオリーブ色の肌を持つウタは、『褐色』といえはヘルメのようなチヨコレート色を連想する。

双子の年齢を「十三歳くらい」とぴたり言い当ててみせたのもウタだけで（アルミリアが回収したIDに十三歳とあった）、イーサンにとって異人種の年齢は謎そのものである。トロウもいつまでたつても幼いままいるように見えるし、ヘルメの表情がいまだにうまく読みとれない。〈ハーティ小隊〉でもことさら色素の薄いイーサンに見えている世界は、微妙に色が違うらしい。

そんなもの今に始まったことではないかと、ため息をつく。

「まあ、あの連携は脅威だよな。〈エイサリビ〉ならまだしも〈セイズ〉の兵装じゃ防ぎきれねえ」

個々の力は強くなくとも、四機まとめて相手するなら相当な腕が要る。強襲装甲艦であればMSを振り払うこともできるだろうが、ビスコー級クルーザーの装甲に戦闘に耐えうる厚みはない。

かたや厄祭戦を戦った〈ガルム・ロディ〉四機、かたや厄祭戦後に製造された〈セイズ〉一機。

死ぬのはどつちか、火を見るよりも明らかだ。

ああも鋭い牙を持つ番犬の群れを艦内に飼って、思うさま虐待できる海賊連中の気が知れない。飼い主もろとも全滅してやる覚悟さえ決めれば、強襲装甲艦二隻くらいサクツと沈めてしまえる戦力だろうに。

「弟が甘ったれなぶん兄貴らしくなったんだろ」とライドがたしなめ、そしてブリッジは沈黙した。

ライドやイーサンの目に映るギリアムの姿が十歳そこそこの子供<sup>ガキ</sup>だとしても、中身は子供でいられなかったヒューマンデブリのリーダーなのは周知の事実である。

いつまでも子供のままだかかったリタとは違って。

「……それに、ギリアムの隊にはチップ持ちの参謀がいる」

知識を外科的に埋め込まれ、整備や戦術、厄祭戦当時の兵器のこと

まで知っているメンバーが〈ガルム小队〉に属している。〈ガルム・ロ  
ディ〉2番機のパイロットをつとめるハルは後遺症により下肢が不自  
由なため、無重力環境でなくばギリウムたちと行動をとにもすることが  
できないが。

責任感が強くカリスマ性のあるリーダー、混戦に強い戦力と、知識  
によってサポートする参謀、そして以心伝心の連携——まるで鉄華団  
のミニチュアだ。命令には必ず最短でもって答える。

マーナガルム実働1番組へハーティ小队〉同様、2番組へガルム小  
隊〉もまたライドの指示を待たずとも戦略的に判断できるのが強みで  
ある。隊長を中心に動く共同体、いわゆる『群れ』として、ひとつの  
動きをするのが得意だ。

「あいつらほど優秀な番犬ガルムはいねえよ」

目を伏せるライドは隊長として、この苦しいような悲しいような、  
やりきれない気持ちはどうしていいかわからない。

あいつらは信頼できる兵隊だ。

不条理なほどに。

「哨戒中の〈ガルム小隊〉から通信！ 漂流船を見つけたって」  
どうする、と操舵席からウタがライドを振り返った。

隊長であるエンビが戻らず動くに動けない実働1番組へハーティ小隊に代わり、2番組〈ガルム小隊〉が警戒にあたって三日目。連絡によれば、九時の方角へ一八〇〇いくばくの距離で戦艦を発見したとのことだった。

月面基地からここまで慣性に従って流れてきたようで、どうにも人の手で操縦されている雰囲気ではないという。(ブリッジを破碎したときと同じ挙動だ——という元宇宙海賊の報告には、ぞつとしないが何とも説得力がある)

船体に<sup>フェニル</sup>狼の絵を見つけたが、どうすればいいかと指示を仰いでできた。

モニタに拡大して照合をかければフリード家の紋章と一致する。

「エイハブ・ウエーブの固有周波数も〈ヴァナルガンド〉で間違いないよ」

今しがた解析も済んだ。偽装の可能性は限りなくゼロである。

だが、ウタの表情は冴えない。ハーブビーク級戦艦〈ヴァナルガンド〉が漂流できる宙域ということは、このヘルーナ・ドロップの中でもある程度デブリが晴れているということだ。迂闊に接近すればアリアドネの監視網に捕捉され、ギャラルホルンに〈セイズ〉の位置が割れてしまう。

「……今度こそ畏かな」と不安そうにライドを振り返った。

「まだ何とも言えねえな」

二度あることは三度あると言うが、ジュリエッタ・ジュリスはあのまま帰投したようだし、発信器のたぐいを仕込んだようすもなかった。腹芸の苦手そうな印象通り、実直な女であるらしい。

だが、そういう性質は汚い大人に利用されやすい。

畏かもしれない。……となれば、畏かどうかが判明するまで、アルミリアに〈ヴァナルガンド〉を発見したことを知られてはならない。



場合によっては撃墜も視野にいれなければならないからだ。

「ヒルメとトロウを調査に行かせる。〈ガルム小隊〉を迎えによこしてくれ」

「了解<sup>ラジャ</sup>」と、押し殺すようにウタが答えた。



〈ガルム・ロディ〉が差し伸べた手のひらから、甲板へとトロウが降り立つ。宙域を漂うハーフビーク級戦艦は、静かに慣性に流されているようだった。

船体にフアリド家の紋章を戴く〈ヴァナルガンド〉。マクギリス・フアリドの形見として、依頼主アルミリア・ボードウィンがずっと欲しがっていたものだ。契約書面上は既にモンスターク商会が買い取っているはずの代物でもある。未亡人として夫の面影を追う女主人のためにも、できれば無傷で確保したい。

ヒルメも続いて飛び降りると、非常用のエアロックをこじあけ艦内へと侵入する。MS<sup>モビルスーツ</sup>が四機が周囲の警戒にあたり、ヒルメとトロウが生身で潜入・調査にあたる手筈だ。

長い廊下をふたつのライトが這い回ったが——、人の気配はないようだった。

『このまま内部の確認にあたる』とヒルメがインカム越しに〈ガルム小隊〉へ伝える。

日ごろスポッターをつとめるヒルメのヘルメットには小型カメラをマウントできる機構があり、今回は命綱代わりにケーブルを取り付けた。さすがに映像はざらざらと劣化するものの〈ガルム・ロディ〉のシステムを中継すればLCSで〈セイズ〉のブリッジまで届けることが可能だ。

「頼んだ」と、ブリッジからライドが応答した。

モニタ越しにトロウが頷く。目配せをすると低重力が頼りなく発

生させられているばかりの暗闇へ、銃を構えて踏み出した。

慎重に気配を探りつつ、しんと静まり返る廊下を抜ける。誰もいない居住ブロック、談話室のバーカウンターは空。酒瓶どころかグラスひとつ見当たらない。荒らされたような痕跡もない。闇の中に沈むビリヤード台も、ずいぶん長い間使われていないようだった。食堂、管制室、倉庫、それからハンガーをのぞき込み、医務室を見渡して、たどりついたのは広すぎるブリッジだ。

やはり誰もいないことを確認すると、ヒルメはおもむろにコンソールパネルに触れる。眠りについていただけらしい管制システムが起動し、〈ガルム・ロディ〉から〈セイズ〉につながる。

およそクリアな通信が可能になった。

『メーデー、聞こえるか。とりあえずドアは全部開けてきたけど誰もいなかった。念のためメカニックよこして艦内に生体反応がないか点検してほしい』

『それとMSデッキに〈ガンダム・バエル〉があった。ぎつと見た限り異常はなさそうだ』

推進剤も装填されており、双剣も添えられていた。だがコクピットブロックがごっそり取り除かれているので、このままでは起動もままならないだろう。両翼の電磁砲が撃てる状態にあるかどうかも判然としない。

『それから——』とトロウが珍しく言いよどむ。

ちらりとヒルメを見遣って、頷く。

『カーゴブロックに「アルフレッド」のコンテナが積まれてる』

通信ごしに全員が息を呑んだ。エンビの機グリムゲルデ体がなぜ〈ヴァナルガンド〉の貨物として積まれているのか、因果関係がつかめない。

「……縁起でもねえな」

どうにか絞り出したライドの声も、喉で掠れてうわずっている。

唯一未確認のそれを、これから調査に行くと言ったヒルメの声も緊張に尖っていた。

ふたたび銃を構え、大型貨物を積載するカーゴブロックまでたどり着くと、MS用コンテナの扉を入念に点検する。頷き合って、入り口から侵入。

すると、——機体の膝許に遺体袋ボディ・バッグがひとつ置いてあった。

不穏な予感に背中を冷たい汗が這う。

『……おれらで確認する』

「ああ、気をつけろよ」

精神的な攻撃だろうが、ここで焦って駆けすがって、爆発物や毒ガスにやられることも考えられる。……とにかく、何が仕込まれているかわからない。慎重に近づいたトロウが、黒々と不透明な遺体袋のフアスナーに手をかける。

ゆつくりと引き下ろせば、そこには。

『——っ！ う そだろ ……ッ！』

鋭く息を呑んだのは、そこにある面影が見知った茶髪だったせいだ。もともと短かった髪はさらにざんばらに刈り取られ、頭皮にはナイフの刃がかすめた切り傷が、凝固した血液のかたちで残されている。頬には殴られた痣。乾いてこびりついた血液、体液。あちこちに残って黒ずむ注射針の痕。

暴力の痕跡も明らかに、静かに目を閉じている。

エンビ。——動揺でふるえそうになる手をぐつと握り、冷静さをかき集めるようにフアスナーを下げれば、着衣はなく、胸元には血文字のメッセージがナイフで刻み入れられていた。

“ The 死 body 体 tells は no ら tales. な ”

その文字列を目にした瞬間に、トロウはみずからの識字能力を呪った。ああ、と、ヘルメゲ取りこぼす。かつりと一歩後ずさる足音、取り落とされたハンディライトが転がり落ちて、明後日の方角を照らす。

おそらくアリアンロッドに捕らえられ、尋問を受けたのだろう。何があつたかは想像に難くない。

それでも、エンビは何も白状しなかったのだろう。使われた薬剤は  
自白剤か、覚醒剤か、どんな劇物だったのかはわからない。わかるの  
はただ、長時間かけて痛めつけられた傷の深さだけだ。

肋骨は折られ、脚には三発もの銃創がある。うちひとつは刃物に  
よって抉られ、広げられている。

何も語らないなら死んでも同じだとばかりに、殺されたのだろう。  
全身傷だらけになって、こんな形で帰ってきた。

『うああああああああああ あああ あああ ああああああ—  
——!!』

トロウの慟哭がスピーカーをびりびりと割る。へガラム・ロディの  
コクピットも、へセイズへのブリッジも、血を吐くように悲痛な叫びに  
耳を塞ぐことはできなかった。

ヘルメが崩れるように膝をつく。がくりとくずおれて、ヘルメツト  
のバイザーの内側に涙が落ちた。

おれのせいだ、と嘆く言葉も出てこない。

諜報任務に就くとき、エンビはいつも毒と酸を持ち歩いていた。捕  
まるようなヘマはしないが、万が一のことがあったときには仲間の居  
場所を吐いてしまう前に死ねるようにと。いつも即効性の致死毒を  
持ち歩いていた。足がつかないよう顔面を焼けるだけの強い酸も。

エンビが常に携帯していたはずのふたつの小瓶は、今はヘルメの私  
室に置きっぱなしだ。

——現状維持を選んでいいのはお前じゃないんだぜ、ヘルメ。

月面基地に到着する二、三日前のことだった。厨房を担当し、羊の  
肉を調理したエンビは、少年男娼との接し方に迷うヘルメの眼前に、  
その小瓶を置いていった。

——家族の無事を願うなら、ちゃんとケジメをつけてこい。

あのととき、エンビがみずから汚れ役を買って出たのに。なのにヘル  
メは毒物をキッチンに置いていくのは物騒だからとリスクヘッジを  
言い訳に小瓶を回収して、そのままにしていた。

ヘルメが致死毒の小瓶をエンビに返していれば、拷問が長引くよう  
なことはなかっただろう。

鉄華団という居場所を失い、戦う生き方を全否定され、未来を奪われた同胞が心配だった、だからヒルメは『強硬派』につき、ライドのもとへ集って「マーナガルム隊」で仕事をすると決めたのに。

それなのに、ヒルメの優柔不断が兄弟をこうまで苦しめた。

エンビを殺したのはおれだという後悔が、臓腑の底から迫り上がってくる。

いつか『本当の居場所』にたどり着けたなら、家族みんなが飢えることのない食事があるはずだった。みんな交代でゆつくり眠れるはずだった。寝ている間に死ぬことも、殺されることもない。夜が明ければ全員が生きて朝を迎えられるような、平穏な日々があると信じていた。

威張り散らした大人に殴られたりしない、海賊やギャラルホルンの営業妨害もない。そんなあたたかい場所が世界のどこかにあるのだという、見果てぬ夢をどうか捨てずにいたかったのに。

イーサンの拳がコンソールパネルを打ち付ける。ウタが茫然と涙を落とし、そんな……とくちびるをふるわせた。

遺体袋に取りすがって号泣するトロウの叫び、ハウリングの残響が、鼓膜も心臓も鋭く突き刺してくる。

「何かあったのですか?」

「セイズ」のブリッジの扉が開く。駆け込もうとするアルミリアは、無作法な手によってはね除けられた。

「入ってくるな!!」

唐突な怒鳴り声に怯む。思わず廊下に尻餅をついてしまったアルミリアが見上げて、ライドの手によって遮られたブリッジの中は見えない。

「ライド、さん……?」

ふりあおいでも、ライドの目線はメインモニターに釘付けのまま、アルミリアを振り返ろうとはしない。赤毛に隠された目許は見えず、表情は読めない。ただブリッジじゅうのスピーカーが音割れを起こして嘆き悲しんでいる。響いてくるトロウの慟哭から、心臓が止まりそ

うな焦燥が迫ってくるばかりだ。

おろおろと顔色をなくすアルミリアを、ようやくライドが省みた。しかし、どうにか「すいません」と詫びたひとみは焦点が定まっていない。

何かを振り切るように、首をふる。

ひとすじの涙が蒼白な頬を伝い落ちた。

「……あいつも男だ。多分、あんたには見られたくない」

ふるえる声をぐつと飲み込み、ライドはああと嘆息する。何かを振り払うようにふたたび、首を振った。

察しのいいアルミリアは立ち上がることを諦めて、両手を祈りの形に握った。でも祈ったところでもう遅い。罪悪感が涙をあふれさせ、青く大きなひとみに溜まった熱いしずくは、目を伏せただけでまっげに碎かれて頬を濡らす。

アルミリアのまなうらに蘇るのは、赤いMSの膝許で団子状になって眠っていた三人組の姿だ。警戒心が強く、不眠症がちだったエンビ。無事の帰還を喜び合った兄弟三人で、落ちるように眠ってしまった格納庫。あたたかな眠りから彼らを呼び覚ましてしまいたくなくて、踏み込めなかった領域だった。

彼なら任せても大丈夫だからと頼ってきた、これが結果だ。ただ諜報向きの外見であっただけなのに、たったひとりで地球へ月へ、危険な場所へと送り出す仕事を任せ続けた。

エンビ単独の作戦が当たり前になっていなければ、こんな悲劇は起きなかった。

ああ、どうして、どうしてひとりで行かせてしまったのだろう。

瓦礫になった家族の肖像は、なおも手ひどく碎かれていく。

薄すみれ色の短髪がガラスに写り込んでいる。青いひとみの男は退屈そうに眦を落とし、そして目を伏せた。

窓の向こうは暗礁である。壁一面のガラス窓とアーチ型の天井が展望台らしさを演出してはいるものの、気の利いたBGMひとつかかっていない。

「何も無いところだな、宇宙というのは」

憂鬱な独り言が、静寂にほどける。今のガエリオには答えてくれる部下もいない。ジュリエッタは任務中だろう。ちょうどアルミリアが訪ねてくると聞き、会談に立ち会おうと提案したところ、ラスタルには丁重に遠慮されてしまった。

ひとりの時間を持て余し、月面基地の一角にある展望台まで足を伸ばしたのだが、見えるのはただ岩石ばかり。車いすでは身を乗り出すこともできないが、のぞき込んだところでどうせ三六〇度同じ景色だ。

本当に何も無い。当基地で最もうつくしい展望台だとアリアンロッド兵士から口々に勧められ、不便を押してこんな辺鄙な区画までやってきたのに、時間の無駄だったらしい。

ああ、と無為なため息がこぼれた。

外を眺めるために作られた大窓だろうに、そこにあるのはヘルーナ・ドロップンと呼ばれるスペースステブリの密集地だ。目を楽しませるものひとつなくて何が展望か。木々の緑も、空の青も、海の紺碧も、ガエリオにとって当たり前の光景が宇宙にはない。

いつも夜中の曇り空のような黒で、大岩小岩がひしめいていて。

内装の装飾も黒ずんでいるし、これでは体を悪くしてしまいそう  
だ。

話のわかる側近でもいればよかったのだが、あいにく部下はみな軍

人気質。暇つぶしの種にと面白い話ひとつできない連中と余暇を共にしては気が休まらない。

ガエリオの所属は『貴族院』であり、月外縁軌道統合艦隊の管轄下にあるこの月面基地では部下を連れ歩くことができないのだ。ガエリオをここまで送り届けた戦艦へスレイプニルへのクルーたちは上陸はせず、艦内でいつも通りの生活をしている。

基地内を自由に動くことができるのは、かつてアリアンロッドに身を置いていたガエリオただひとりである。

といっても、ただラスタルに気分転換を打診されただけの旅なので、これといって目的もない。病院と自宅を往復するだけの生活からの逃避も、これではただ問題を先送りにしたただけだ。

しかもこの月面基地、増改築を繰り返しているため段差が多く、車いすでは不便が多い。間取りもあれやこれやと不便で、ガエリオは前々からあまり好きではなかったのだった。

ラスタルのスキップジャック級戦艦へフリズスキャルヴ内のほうがよほど過ごしやすかったなど、いつしか遠ざかっていた過去を振り返る。

アリアンロッド艦隊に身を寄せ、ラスタル・エリオンの側近として戦っていたヴァイダールの時代。

あのころになってガエリオはようやく、マクギリスの語る『腐敗』が間違っていたことに気付いたのだ。

勉強も訓練でも子供のころから常に一番だったマクギリス。憧れていたのに、隣に並びたいと思ったのに、ガエリオに隠れてずるをしていた。

学生時代は父上たちに隠れてギャラルホルンの詭弁を嘆き、監査局時代はこれ見よがしに賄賂を断っておいて、自分はベッド・テクニックで成り上がっていたのだ。そんな淫売が今さら実力主義だなんて、みずからの罪を隠蔽したいだけではないか——とガエリオは憤りを覚えた。本当に本当の実力でなりあがったわけではないくせに。

袖の下を受け取って、うまくいくのならそれが一番だろう。マクギリスだってイズナリオ様に対価を差し出していたのだ。選り好みは



よくない。問うべきは手段ではなく結果であつたはず。

(……いや、七年も前に死んだ男だ。今さら思い出すのもおかしな話だな)

自嘲がちに、窓に映るガエリオはくちびるを歪める。友でも何でもなかつた男を、思い出すたび胸の奥が痛んでしようがないのだ。だから忘れようとした。思い出さないように箱にしまって鍵をかけ、痛みごと忘れてしまいたかつた。

ラスタル・エリオンの統治のもと、世界は安寧を取り戻したのだから。

あんな反乱が起こることも、もうないだろう。治安を乱すような腐敗を二度と赦さないために、ギャラルホルンは再編された。

ガエリオは、面倒だがやはりセブンスターズの一員である以上は相手を見つけないければならないし、早く結婚を、世継ぎをと急かさされる不自由は甘んじて受けている。(不本意だが実にローテクな車いすに乗せられており逃げるに逃げられないのだ)

何度見合いをしても心にぽっかりと開いた風穴を埋めることはできず、気に入つた女がいないと嘆いていたら、ラスタルから「ジュリエッタはどうか」と提案を受けた。

彼女なら気心も知れているし、憎まれ口を叩きながらも受けてくれるだろう。可愛げがないし出自も悪いが、根は素直だし、もつと肉がつけばガエリオ好みの女になる。もともと婚約の噂も結婚の噂もまことしやかに流されていた。

一回りほどの年齢差があるのであまり実感が湧かないにしても、あのジュリエッタも花嫁になるのかと思うと感慨深い。アリアンロツドの総司令官を『寿解任』という形で降り、兵士たちから祝福される姿を思い描けば、存外悪くないと思えた。

こんな陰気な宇宙要塞より、地球本部へヴィーンゴールヴのほうがよほど居心地がいい。ジュリエッタだって、宇宙なんかより地球にいたいに違いない。月面基地はあちこち改修した名残の段差ばかりで何かと不便だし、老朽化も深刻だとラスタルがこぼしていた。

「……ん？」

ふとガエリオの目に留まったのは、ちいさな光の粒だった。砕けた月の破片に埋もれるようにして、きらり輝く青い惑星<sup>ほし</sup>。

岩石ばかりの暗礁で、ひとつだけ尊い青の光。

ああ、ここにいたのか。——ガエリオはごく自然に微笑んでいた。道ゆく兵士たちがしきりにこの展望台を自慢してきたのは、地球の姿を見ることができからだだったのだろう。

かつての英雄たちもこうして地球を眺めたのかもしれない。厄祭戦よりも過去のことなど記録にないし、ガエリオは当然認知していないが、三百年以上前にも世界は存在したことくらい理解できる。

月が欠けるほどの戦禍であったという未曾有の大災害、厄祭戦。人類の二十五%を死滅させたという惑星間戦争を生き残った遺物として、月面基地は一種の縁起物であるらしい。

戦中甚大な打撃をこうむった月に残る唯一の施設だ。頑丈さこそそが取り柄なのだとしても、外観は野暮つたいし、内装もつぎはぎだらけで、もう少しどうにかしてほしいものだ。

そんなことを考えた矢先だった。

不意に、何か不穏な音がした——ような気がした。

ずいぶん遠いが、ドオンと打ち下ろすような轟音だ。ガラスはびりびりと余韻にふるえている。体感できるほどの揺れはなかったものの、ここまで伝わってきているのだから相当な規模の爆発があったのだろう。

耳を澄ませば、何かが滑り落ちる摩擦のような音が続いて聞こえてくる。

すると、突如。

「う、おおおっ?」

ふわん、と車いすがフロアを離れた。持ち上げられたついでに、ガエリオ自身も宙に浮いてしまう。飛んでいきそうになった膝掛けをたぐりよせるが、車いすをつかみ損ねてしまった。

腕を伸ばしても、ふわふわ、ふわふわと浮遊するばかりで届かない。ついにはその場でぐるんと一回転してしまった。

ああもう、これだから宇宙は——！ 苛立ちをどうにかおさめる。

「おいっ、誰か！ 誰かいないか！」

冷静ぶって声を張りあげても、反応はない。展望台に続く廊下はどれもガエリオを無視してしんと静まり返っている。

そこへ、かつりと響いた靴音がひとつ。

どうにか顔をあげれば、くすんだオレンジ色をまとった男が立っていた。ギヤラルホルンの兵士ではない。

「誰だ、お前っ…… そのノーマルスーツは！」

見覚えがある。野暮ったいシルエット、インナースーツが剥き出しのデザインは衝撃を吸収しそうになく、非文明的な火星人の野蛮さを物語るようだと思っていた。

マクギリスと結託していたテロリストグループが着用していたパイロット用のノーマルスーツ。確か、背中に特殊なアダプタがついている——吐き気をもよおすが、今のガエリオはそんな醜態は晒さない。

「薄汚いネズミめ、どうやって入ってきた！」

気丈に糾弾すれば、不敬なオレンジ色はようやくヘルメットのバイザーを開いた。ダークシェードの向こうから現れたのは、白人系の少年だった。

男かと思ったら、子供だ。体格はそれなりのくせに、顔立ちにはまだあどけなさが残っている。生意気そうなグレーの双眸が、ぱちくりとまたたく。

なぜお前がここにいいのかと問いたげだが、それはガエリオの台詞である。

「……あんだ、もしかして『新時代の英雄』ガエリオ・ボードウィンか？」

もしかしてとはご挨拶だが、無様に空中浮遊中なので格好がつきかねる。ガエリオは「ああ」と短く肯定してみせた。英雄、というのはあくまでプロパガンダでも、今のガエリオが担っているのは確かにそういう役割だ。『女騎士』だけでは締まらないから、つがいとなる『英雄』が隣に立っている。おかげでジュリエッタとの仲はずいぶん前から噂されていた。

すると宇宙ネズミは勝ち気そうな双眸を嫌悪感たつぷりに眇めて、ガエリオを睨めつける。目つきの悪さからして荒くれた育ちなのだろう、こんな旧式の車いすで健気に静養しているガエリオに何の配慮も見せはしない。

磁石の仕込まれたタイヤのせいで横転している車いすを一瞥して、忌々しげに吐き捨てた。

「……あんたみたいなやつがいるから、俺たちはいつまでたっても自由になれないんだ」

「なんだと?」

「あんたの妹が何を背負ってて、どんな目に遭ってきたのかも、どうせあんたは知らないんだろう」

「貴様……妹を知ってるのか? アルミリアに何をした!」

まさか彼氏だとしても言うんじやなかうな——と、嫌な予感がガエリオの脳裏をよぎる。月面基地を訪れるアルミリアの用件とは再婚の話だったのか。妹には今度こそ身の丈にあつた男をと考えなくてはなかつたが、同世代とはいえ火星のネズミなど論外だ。そんなことのために火星への留学を許可したわけではない。

マクギリスで一度失敗しているのだから、どうか今度は地球人から、まともな男を選んでほしいのだ。火星にもアインのような誇り高い男はいるとはいえ、上官への忠義忠節のために命を捨てるような男は結婚に不向きだ。火星人はアルミリアをしあわせにはしてくれない。

そんなガエリオの心中など推し量ることもなく、身の程知らずな小僧は「連絡くらい自分でとれよ」と嘆息した。

家族なら、と続ける。

そして手の中の拳銃をガエリオに向けた。

「ギヤラルホルンにとつて火星は『出がらしの惑星』らしいな。そこに住んでるのは『労働力』で、阿頼耶識がついてたら『宇宙ネズミ』……なんでそう呼ばれてるか、あんたは疑問に思ったりしないのか?」

「何を……言っている……?」

「あんたの妹が自分の頭で悩んで、考えたことだ」

「貴様、やはりアルミリアをつっ！」

「……ずいぶん似てない兄妹なんだな」と不遜なネズミは胡乱げに目を眇めた。

そして言葉がクリアなアープラウ訛りに切り替わる。どうやらこの少年は、年齢相応に落ち着いた話し方もできるらしい。

「運よく安全圏に生まれた人間が、運悪く屠殺場に生まれた人間を消費する……、そんな軍事独裁のもとで安逸と暮らせる人間性が俺には理解できない」

目を逸らして語る姿が学生時代のマクギリスに重なって——、ガエリオは秘めた記憶にカツと火が点るのがわかった。教養を感じさせる物言いで、小難しい理屈を捏ねて、騙そうだったって無駄だ。流暢な演説にたぶらかされたりはしない。

「善き支配者が、無垢なる民を治めるのが正しい秩序のあり方だろう！」

「労働者を消耗品として使い捨てるのが『善き支配者』なのか？ 俺を『ネズミ』と蔑むのが、正しい秩序？」

「言わせてもらうがな！ お前たち火星人が地球に侵攻したせいで、どれほどの被害が出たと思う!?! 俺は部下を失い、友を失いつ——友だった男に殺されたんだぞ！ 親友だと、ともに腐敗を正す同志だと俺はずっと信じていたのにつ……裏切られたんだ！」

「……えつと。逆賊マクギリス・ファリドのことなら、討つたのはあんただよな？ 本当か？ 知らないけど、養父に虐待されてた過去を全世界に暴露して袋叩きにしたくせに、どの口が言うんだ」

「なにを……ッ」

「俺たち『獣』の志が、あんたたち『肉食者』と同じなわけないだろう。喰い物にされるのが嫌で武器を取ったんだから、——」

搾取者を殺さずにはいられない。

餓狼が唸るように低く、少年は静かに吐き捨てた。落ち着いた言葉の裏に剥き出された鋭い牙がありありと感じ取れる。記憶の底から蘇ってくるマクギリスとの思い出が、泡のように脆く崩れていくようだった。

ガエリオのくちびるが戸惑いながらわななく。ああ。マクギリス、お前は。

生まれが悪くて、でも努力家で。なのにベッド・テクニクで成り上がった腐敗の象徴で。勉強ができて、強くて、人気者で格好よくて。何をやらせても一番だったお前の隣に、並び立つ男になりたかった。

「マクギリス ス……ッ！」

——政治抗争に腐心し、民間人を虐殺してなお権力の座にあり続けようとするアリアン<sup>か</sup>ロッツ<sup>ら</sup>こそ！ 腐敗したギャラルホルンの象徴である！

耳の奥に蘇る、青年将校の演説。

——平和と秩序の番人であるギャラルホルン。それはセブンスターズの面々が特権を享受するための、都合のいい戯れ言にすぎなかった！

マクギリスが暴力革命に踏み切ったとき、ラスタルには何の相談もなかった。エリオン家の当主へ一言あつて然るべきだろうに。何事も定められた手順を踏み、組織や上官、恩人の名誉を傷つけぬよう配慮すべきだ。

ギャラルホルンを刷新したいから協力してくれと願い出てくれたなら、ガエリオは率先して協力した。カルタだって。七星会議を賛成多数で可決させるくらい、ラスタルとカルタに相談すれば造作もなかったはずだ。イシユ、ボードウィン、ファリド、エリオン、クジャンの賛成によって、残る二家の老人たちを追い詰めることができた。

なのに、マクギリスはそうしなかった。あいつは目に見える『力』に変換できるものに固執したのだ。権力、気力、威力、実力、活力、勢

力、そして——暴力。

あいつは愛情や信頼、この世のすべての尊い感情を蔑ろにした。

そう思っていた。

そう思いたかった。

ついにガエリオの青いひとみから涙がこぼれおちる。我が身を抱きしめて孤独の痛みに耐えるガエリオに追い打ちをかけるように少年は銃口をつきつけた。

ゴリ、と背中に硬い金属がめりこむ。

「この状況で、俺に協力を求めて『ともに戦おう』なんて言わないよな？ 誰と戦うのか理解できてから言えない。ともに戦っても、俺に抗っても、結果的にあんたは死ぬ」

「マクギリスは協力的なんか求めなかったツ……だから、」

「だから、俺は悪くない？」 それとも 〴〵だから、俺も命乞いはしない？」 —— あんた何喰って生活したらそんな平和ボケできんの？」

さつきは英知すら感じさせた口調が復讐に煮えたち、最後は乱暴に締めくくられる。激情と、暴力的な闘志と害意。その変化が、ガエリオには手に取るようにわかった。

銃口がガエリオの背中をぐいと押し、無作法な左手がガエリオの前髪をわしづかむ。

力任せに向き合わされる現実。火星からやってきた、いまだ幼い復讐鬼。殺伐としたグレーの双眸に、宙に浮いたままのガエリオがうつっている。青いひとみは涙で不安定に揺れている。ああ、カルタならば仁王立ちして、この万年みそつかすとても嘲笑してくれたらう。

ガエリオたちセブンスターズの面々が特権を享受し、安全に暮らせる世界を、ギャラルホルンは守っている。そこはガエリオにとつて少しばかり窮屈だが、愛おしい日常だった。カルタがいて、マクギリスがいて。アインと出会って。

奪われたくなかった。壊されたくなかった。

だから楽園を踏み潰したマクギリスを憎んだ。

あいつは貧しく野蛮な火星人による地球侵攻を黙認し、手引きすら

した。そのせいでガエリオはあまりに多くを失った。

ところがガエリオが生きる日常の裏側で、マクギリスは何もかも奪われ続けていたという。

火星人の血を『人間ではない』と蔑むギャラルホルンのルールに、苦しんだのはアインも同じだ。弱冠九歳で婚約させられ『子供のくせに』と陰口を叩かれ、アルミリアから笑顔が消えた。コロニー出身者は明日の夢も見られないと嘆いたマクギリスの部下がいた。

地球圏の豊かさは、各植民地を組み敷いた上に成り立っている。その頂点に君臨するギャラルホルンは、四大経済圏からの出資によって運営されている。

搾取してきたことを認めたくないあまりにギャラルホルンはマクギリス・フアリドを『裏切り者』と呼んだのだ。ただ安逸と生きていただけで『加害』であつた現実を直視できかねた。だつて。出された食事は残さないボードウィン家の美德と、植民地の労働者から絞り出した甘い汁を啜る豊かさとは、同時に呑み込むことができない。ガエリオは何もしていないのに、悪いことなんて何もしていないのに。

友に寄り添いたい思いに？はなかった。なのにガエリオの友愛も、カルタの愛情も、マクギリスにとっては狼が兎に舌舐めずりするような捕食者の欲望としか映っていかなかったなんて。認めたくない。信じたくない。だつて、知らなかったのだ。

ガエリオは所詮、ギャラルホルンの〈法〉と〈秩序〉に基づき、マクギリスたちを食い物にしてきた『罪の集合体』のひとつかけらでしかなかっただなんて。

それでも唯一の友人であつたと言つてくれたのは、マクギリスのほうだった。

「あ……あああ………っ」

慟哭するガエリオを冷めたひとみで見つめ、トリガーに指をかけた獣はシニカルにくちびるを歪めた。嘲笑のかたちだ。なのにグレーのひとみは笑っていない。空調が異常をきたしたかのような寒気がガエリオを襲う。冷たい狂気が展望台を支配し、気温が一度も二度も下がったように錯覚する。



まさか撃つというのか。無抵抗の人間を。武官でありながらパイロットであることをやめ、二度と戦わないと覚悟を決めたギャラルホルンの英雄ガエリオ・ボードウインを。

あのとき仮面を外したマクギリスのように、また。

「なあ、あんたも考えてみるよ？ あんたたちの秩序がただの肉としか扱わない女子供にだって、あんたを喰い殺せる牙はあるんだぜ」

凜猛にトーンが落ちる。——そして。

「復讐くいころされる気分はどうだ？」

銃声が響いた。

## 第六章 喪主は七年前に死んだ

### 016 スケープ・ゴート

きらきらと青白い光線が駆ける。スペースデブリの迷宮を縫うようにしてヘレギンレイズ・ジュリアは奔っていた。

サブモニタをちらりと見やり、ジュリエッタは牽引している柩はこの状況を確認する。凍結率八十七%——あと少しだ。このヘルーナ・ドロップには恒星の光も届かない日陰が多いためか、予定よりもずいぶん順調らしい。

大地のない宇宙において、葬送はこのようにして行なうのが常である。

遺体袋を船尾などに取り付け、引き回せば、何らかの作用によってやがて芯まで凍り付く。真空か低温か、具体的な要因までジュリエッタは関知しないが、そのまま高速で牽引を続ければやがて微塵に砕け散ることと、そうした葬送の手順だけはギャラルホルンの兵士として承知している。

小さな柩はぼろぼろと氷の涙を散らすように砕け、やがて宙域にはジュリエッタひとりが残された。

最後の最後にバーニアをふかし、死の気配を断ち切るように加速する。アルミリア・ボードウィンとの約束通り、責任を持って葬送を成し遂げたのだ。これでリタ・モンタークの魂はあるべき場所へと還っただろう。

幼き日のマクギリスに瓜二つだったという金髪碧眼の少年は、血染めのドレスに包くるんで永遠の眠りに送り出した。

(……どうか安らかに。もうひとりのマクギリス・ファリド——)

目を閉じて、なけなしの祈りを捧げる。魂の在り処などわからないけれど、それでもどうか、彼女との約束を果たせたと信じたい。

モヤモヤとどうしようもない感傷を噛みしめるように目を閉じて、ジュリエッタは操縦桿を握りしめたまま、コクピットの低い天井をふりあおいだ。軽量化のたび各モニタが迫ってくるせいで、今やちよっ

と首を傾げるだけで壁に触れられる。ヘルメットがこつりとモニタに触れ、ブルーグレーの双眸は無感動にまたたく。

ああ、ここも棺桶のようだ。

いち個人としてアルミリアに肩入れしても、ジュリエッタはラストル・エリオンの私兵に過ぎない。フェンリルの花嫁が無事であることを願いながら、今後もギャラルホルンの女騎士アイコンとして、使い道がある限り担がれ続けていくのだろう。

地球経済圏、コロニー、圏外圏の出身者でも『悪魔の首を取る』ことができれば出世がかなう——というギャラルホルンの新体制において、ジュリエッタ・ジュリスという前例は必要不可欠である。

悪魔の首を取った凛々しき女騎士の立身出世は、裏を返せば危険な任務から生還した武官でなくば認められることはないという意味でもある。栄誉栄達を望むならば最前線へ志願せよと、地球外出身者を死地へと駆り立てるだろう。

そのようにしてラストルは、保守派にも中間層にも支持される『改革』を成し遂げた。

合議制が解体され、セブンスターズに繰り上がれるはずだった第八席以下の貴族たちからの反発も、ガンダムの頭部に破格の価値を与えたことで至極あっさりといなした。

イシユウ家、クジヤン家、ファリド家のガンダム・フレーム売却を契機に『お取り潰し』という悪習を撤廃したことが大きかったらしい。決して転落することのない永遠の地位を約束された貴族たちは、いらなくなつたガンダムを次々スクラップにしだした。

栄えある地下祭壇には、悪魔ガンダムの首がずらり。  
……つくづく主君の政治力には感服させられる。

ひげのおじさまと慕った傭兵も天性の戦術家であつたが、ラストルは真の支配者だ。

かつてマクギリス・ファリドが目指したものは、生まれも身分も関係なく競い合う権利だった。アルミリア・ボードウィンが彼の思想を引き継ぎ、人が人らしく生きられる〈法〉と〈秩序〉を模索している。

ファリド夫妻が描く未来に、生まれが悪いだなんて発想はない。階

級はあくまで指揮系統としての順列であり、支配と隷属の関係ではない、というのが彼らの描く『平等』だ。出身地、性別、年齢によつて周縁化されるシステムを是としない。

しかしそれでは、貴族からの賛同は得られない。貧民が同じスターラインに立つようになれば、マクギリスやジュリエッタのようなガツガツした下等民が出世レースを勝ちあがってくる可能性があるからだ。

誰も競争などしたくない。戦わず、争わず、平和的に豊かな生活を享受したい。

ラスタル・エリオンはだから、巧妙に矛先を逸らしてみせた。

青年将校らの蜂起にへマクギリス・ファリド事件と名前をつけ、マクギリス・ファリド本人の死をもつて幕引きとしたのは、社会的信用を失いかけていたギャラルホルンの『自浄作用』を印象づけるためだ。抗争を早期に解決したことで改めて綱紀粛正を世界に示し、マクギリスが解消しようとしていた『出身地による待遇の差別』をうやむやにさせた。

火星独立運動の旗頭であったクーデリア・藍那・バースタインが望んでいたのも、力なき子供たちが搾取されない世の中であったという。それを、これまで野放しだった圏外圏の奴隷をへヒューマンデブリ廃止条約によつて制限したことで、解決されたと世界を安心させた。

といつても圏外圏は角笛の音も届かぬ無法地帯。もとより非合法であったはずのマン・マシーン・インターフェイス——阿頼耶識システム——の適合手術が横行していたこともあり、条約の効力などあつてないようなものである。

ならば、取り締まりの必要性が浮上する。ギャラルホルン火星支部の縮小は、そのために行なわれた。へマクギリス・ファリド事件の中で、当時の火星支部本部長をつとめていた新江・プロトが革命軍らに便宜を図ったことも鍵キになった。

これまで火星植民地はギャラルホルンによる間接統治が行なわれていたが、火星支部が衛星基地アーレスにまで撤退すれば、地球経済圏はた

ちまち植民地の運営に行き詰まる。唯一の通信回線であるアリアドネはギャラルホルンが管理しているのだから、情報の封鎖など容易だ。

思惑通り、各地球経済圏は火星植民地域の統治を断念。火星は、宗主国から見捨てられる形で脱植民地化を果たした。

そして発足した火星連合政府は、ラスタル・エリオンとマクマード・バリストンによる傀儡になる。

さらに、初代連合議長をつとめるにふさわしい知名度を持つへ革命の乙女は、火星の人々すべてに教育を与えたいという。

すかさず木星圏や地球圏から大量の教員免許保持者が送り込まれ、宣教師たちは少年兵の残忍さ、凶暴さを切々と説く。人々のしあわせを壊す害獣のいない、優しい世界を作ることこそ、願われた火星の姿なのだ。

マクギリス・ファリドやクーデリア・藍那・バーンスタインの目指した理想の一端を、敢えて実現することによって弱者という弱者の口を塞いでしまった。

出自が悪くとも出世の機会が得られることに感謝しろと、平等を望む声は遮られる。少年兵たちは害獣として迫害され、ヒューマンデブりに身を落とせば銃殺刑に処される。

世界は平和になったのだから、平和な世の中に生かしてやっているのだから文句を言うなど出る杭を打ち合うさまを、はるか高みから睥睨する独裁者ラスタル・エリオン。

これでもう、第二第三の鉄華団が現れてギャラルホルンの威信と繁栄を脅かすことはないだろう。第二第三のマクギリス・ファリドが現れて、周縁化された弱者たちを鼓舞することもない。

永劫の平和が訪れようとしている。

希望も絶望もない、役割だけがそこにある家畜の安寧が実現される日は、もうすぐそこだ。

(それでも、わたしは――)

恩人への忠義忠節のため、人として強くなりたい。

▼  
まったく、何が幸いするかわからないものだ。

へヴァナルガンドの医療ポッドが稼働してよかった、と言うこともできる。さすがギヤラルホルンの戦艦だけあって、医務室には実に高性能なメデイカルナノマシンが備え付けられていた。

ヒルメがメカニックによる生体反応の確認を要請した判断も吉と出た。あのタイミングでメカニックを寄越してくれと母艦へセイズに連絡していたから、火星から合流していたカズマがへヴァナルガンドに向かっていた。小型ランチにドクターを同伴させたライドの人選も正しかった。

尋問の痕跡も明らかかなエンビにすがって号泣するトロウは正常な精神状態とは言いがたく、アルミリアが雇った医師は、錯乱するトロウの対応のためすぐにヘグリムゲルデ・ヴァンプへ1号機のコンテナへ誘導された。カズマはブリッジへ直行し、艦内にスパイが息を潜めていないか再確認ダブル・チェックにあたった。

結果、思わぬ場所から生体反応を検出した。

——脈拍がまだっ……エンビは生きてる！ 待って今すぐ医務室の電源入れる!!

上擦った叫びがきいんと響き渡ったのは、ちょうどヒルメがトロウを押さえつけ、ドクターによって鎮静剤が投与されようとする寸前だった。

すぐにエンビの容態が確認され、投薬による仮死状態と診断された。

格納庫に備え付けのストレッチャーをむしり取って担ぎ込み、医療ポッドに漬け込んで、——今に至る。

漂流していたハーブビーク級戦艦〈ヴァナルガンド〉を回収して、四日あまり。静謐な医務室では、電子音が規則正しい脈拍を刻んでいる。外傷の回復は順調らしく、バイタルの値は驚かされるほど正常だ。

ヒルメはこの数日間で何回ついたかもわからないため息を重く落とすと、手許のタブレットをデスクに伏せた。

(……俺たちはあと何日生きられるんだ)

自問する。答えは出せない。火星にも戻れずさまよって、このまま海賊にでもなつて、アリアンロッドの強襲を受けるまでの命なのか。

瀕死のエンビを〈セイズ〉まで連れ帰るのは難しい状況だったとはいえ〈ヴァナルガンド〉の船体規模では、逃げ隠れしてられる時間も長くはない。火器管制にトリガーロックがかけられていることをイーサンが発見し、今はメカニックによつて解除と再装填作業が進められてはいるが、艦隊戦となると不安が多い。

いつでも乗り捨てられるよう艦尾のウエルドックに〈セイズ〉を収容し、M<sup>モビルスーツ</sup>Sも全機こちらへ移してきた。

戦力は〈ガンダム・アウナスブランカ〉、〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉三機、〈マン・ロデイ〉四機、〈スピナ・ロデイ〉五機、〈ガラム・ロデイ〉十機。それから〈ガンダム・バエル〉を含めて、総勢二十四機。

動けるパイロットは二十二。〈ガラム小隊〉や〈ウルヴヘズナル混成小隊〉から予備パイロットを動員することになるだろう。もしもアリアンロッドの攻撃を受ければ、守つてやりたかつた未熟な弟分たちまで戦場に駆り立てねばならなくなる。

これで本当によかつたのかと自問して、自答できずにまたため息だけ吐き出す。繰り返した。いくらか前にトロウが寝落ちてしまったので、話し相手もない。

医療ポッドに突つ伏して寝息をたてるトロウと、生理食塩水に横たわつてこんこんと眠り続けるエンビを見下ろす。

その胸元で癒えつつある血文字に、危うく騙されるところだった。

Dead man tells no tales.  
// The body tells no tales.  
死人に口無しとは、書いていなかったのだ。

中途半端な知識を嘲笑われているようで、なおさら気が滅入る。

尋問中に死亡したと早合点したが、その実、コールドスリープ、あるいはハイバネーションのような状態であつたらしい。傷口から出血がなかったこと、体温や血圧が極端に低下していたことから、ドクターやメカニツクの慧眼がなければ見落としてしまうところだった。

みな疲れていたし、動転していた。遺体袋ポデイ・バッグに入れられていたこと、死んでいても不思議ではない重傷を負っていたこと、予定外の長い不在にエンビの生存を疑いはじめていたこと——他にも死体と早合点しそうな条件は揃っていた。

あのまま遺体として処分してしまっていたらと考えると、生きた心地がしない。

また新たなため息をついたところで、医務室の扉が開かれた。

姿を現したのはライドだ。アルミリアが続く。見舞い客がふたりも現れたことでヒルメは疲れた顔をあげた。

ライドは気遣うように眉尻を落として、同胞が眠る医療ポッドを見下ろす。

「エンビの調子は？」

「よく眠ってる。命があつただけでも奇跡みたいなもんだから、当分はゆっくり寝かせとけてさ」

「そつか。……死ぬなつて、エルガーが励ましてんのかもな」

「それ、さつきトロウも言つてたよ。エルガーが憑いてんじやないかって」

肩をすくめてみせたヒルメはデスクに伏せたタブレットを回収すると、座っていた椅子を譲ろうと腰を浮かした。

アルミリアはすぐに察して「わたしはここで」と首を振る。ドアのそばで立ち止まり、両腕に抱えていたカラフルな紙の束をライドに手渡した。これ以上立ち入らないという意味表示だろう。開いた両手は祈りのかたちで落ち着いた。

ライドの手によって医療ポッドのそばに置かれた花瓶の中では、不器用な折り目のついた色紙たちが花を象つて咲いている。(アルミリアによれば『オリガミ』というらしいが、紙だなんて高級品を折り畳



むなど火星では考えられない暴挙である)

アルミリアが連れている金髪的美少年たちに作らせたものだと、一目でわかった。

結局何もしてやれないままリタを月面基地に置き去りにしてしまったことを謝罪しようとして、ヒルメはしかし、口を嚙む。

最期を看取ったアルミリアに、現場に居合わせなかったヒルメが詫びを入れてどうなるというのだろう。

後方支援のためヘグリムゲルデ・ヴァンプ〈2号機〉で待機していたヒルメは、モニターク商会社長とラスタル・エリオン公の間でどんな取り引きがあったのか、伝聞でしか知らない。アリアンロッド兵士の前に飛び出したリタは、凶弾に倒れ、アルミリアの腕の中で息を引き取った——という情報を遅馳せに共有しただけだ。

一部始終を見ていたライドとトロウから断片的に得たデータだけで理解した気になれるほど、ヒルメは自己完結が得意ではなかった。

目覚めないエンビの身に何が起こったのかも、いまだ想像の域を出ない。アルフレッドことヘグリムゲルデ・ヴァンプ〈1号機〉は単騎で動ける性能を持っているし、エンビの性格上、単独でヘヴァナルガンド〈奪還作戦に踏み切ることも予想はできた。独断で月面基地に潜入し、兵士と遭遇して銃弾を脚に受け、足止めされて捕らえられたのだろう。

——家族の無事を願うなら、ちゃんとケジメをつけてこい。

忠告通りにリタを毒殺しておいたなら、エンビは無事だったろうか。そんな考えが数秒ごとに脳裏をよぎる。そのたび、ため息がこぼれた。致死毒を返さなかったおかげでエンビは生きて戻ってきてくれたのだと喜ぶべきなのか。……わからない。

家族を守りたくてライドのもとに集い、家族の無事を願うために支払わなければならない犠牲があることも、承知していたつもりだった。なのに二兎を追おうとして、結果がこのぎまだ。

「副団長が言っていたのは、こういうことだよな。戦ったって家族が酷い目に遭うだけだ。だから武器なんか捨てちまえて。もともとまともな死に方できるなんて思っちゃいなかったけど……、さすが

にキツいな」

「……ヒルメ」

このところ心休まる暇のないヒルメを慮って、ライドもまた沈鬱に目を伏せた。ヒルメが頭を振る。その姿はまるで、死神の足音に耳を塞ごうとしているかのようだった。

「ドクターが、このまま意識が戻らないこともありえるって……」

医師の話では、薬の作用以外にも精神的なショックから覚醒を拒否している可能性もあるという。

拷問の記憶から心を守るために、眠りの中へ逃避する症例は決して珍しくないらしいのだ。銃創や骨折といった外傷の回復は見込めても、まだ安心はできない。

「まだ目覚めないと決まったわけじゃない。悪いほうにばかり考えるな」

事実、エンビはまるで双子ふたりぶんの生命力を集約したかのような回復を見せている。深い睡眠状態にあることが自然治癒力を高めているのだろう。傷が癒えれば自然に目覚めるかもしれない。

アルミリア嬢が連れてきた老医師は、こんな任務にまで同行するだけあって、宇宙ネズミについても差別感情を持たない奇特な人物でもある。偏見を持たない——先入観やプロパガンダを『事実』とは受け取っていない——人物ゆえ、知らないことは知らない、わからないことはわからないとはつきり言ってくれる。(ついでに「地球ではこう信じられている」という情報も付け加えてくれ、それを『偏見』や『誤認』だと訂正すれば取り合ってくるといふ、なんとというか、地球人にも会話の成立する人間はいたのかと驚くような御仁だ)

そんな医師の見識をもってしても、一体どんな薬剤が使われたのかは判然としないという。

予防接種などの習慣がなかった火星人は独特の免疫力を持っており、地球で製造されたワクチンやドラッグがどのように作用するかわからないのだ。それがエンビの目覚めを阻害している理由かもしれない。でも違うかもしれない。前例がない。不可知だ。

かといって、メデイカルナノマシンによる細胞の活性化に頼るしか

ない現状がヒルメを悩ませていることもまた事実である。

答えのない問いはただ抱えているだけで精神を疲弊させる。ヒルメは複雑な思いを吐き出すすべもなく、チエアに沈み込んだ。ため息にもなれない嘆息に、口角がいびつに釣り上がる。まるで自傷のようだ。

「信じて待つしかないのはわかってる。けど、そしたら次は、エンビが起きたとき、生きててくれてよかったって言っているのかって考えるんだ」

心配かけてごめん、もう大丈夫だ——と言ってほしいのは目覚めを待っている側のエゴで、エンビはなぜ助けたと憤るかもしれない。

もちろんそんなふうに責めてほしいわけじゃない。だが医療ポツドに横たわるエンビの姿は痛々しく、命があつてよかつたなんて無責任に喜べる状態ではない。歯や爪はすべて無事だったにしろ、肩と肘を脱臼させられ、手首の骨には罅が入っていた。射撃を得意とするエンビが、自慢の命中率を取り上げられてしまったのだ。

脚に三発受けた銃創も、ひとつは執拗に抉られており、傷痕は消えずに残るだろう。主要な骨や筋は逸れているとしても、回復に時間がかかるほど筋力は低下し、俊足を鈍らせる。

一体どんな薬を使われ、どんな自白を迫られたのか——、ヒルメは兄弟の身に降り掛かった暴力を思う。即死の毒薬が手許にあればと願ったかもしれない。ヒルメを恨み『裏切り者』と詰ったかもしれない。

「エンビがどう言うにしたってお前の気持ちはお前のものだ、ヒルメ。優しきで自分をすり減らすな」

「でもさ。生きててほしいのも、死なせたくないのも、俺たちの都合だろ？ 死んだほうがマシな目に遭ってきたなら、生きろなんて追い打ちはかけたくない、かけられない」

首を振る。正直、混乱している。ヒルメの本音はその一言に尽きた。

もし、もしも目覚めたエンビがもう戦えない、戦いたくないと言ったとき、受け入れられる自信がない。

いつそ殺してくれと乞われたとき、どうすべきかも。

だって、CGSの参番組では重傷者は楽にしてやるのが常だったのだ。

戦士の生命線とも言おうべき、Life、Limb、Eye<sup>眼</sup> sight<sup>球</sup>。そのいずれかが失われたら、生きていくのは難しい。

生活のために傭兵として働いている。ならばこそ五体満足であることは必須条件だった。片腕でマシンガンは抱えられない。片足では走れない。盲目では狙えない。仲間の楯になつて死ぬのがせいぜいだろうに、仲間の手を患わせなければ戦場にたどりつくことすらできない。

仕事にならないのに、生活コストは倍増する。すなわち終わりだ。今ある呼吸を続けるために必要な金を工面できなくなった戦友を、楽に眠らせてやるのがせめてもの慈悲だった。

銃口を向けるとき、トリガーを引くとき、罪悪感はともなわない。お前が苦しむ時間がどうか一秒でも短くあるようにと、喉奥で願うだけで精一杯だ。嘆きの声を噛み潰し、揺らぐ視界で最期を看取る。ただ胸をえぐるような悲しみだけが横たわる。

医療の恩恵を受けられない少年兵に、延命治療という観念はない。殺すことは、生きることだった。

かつての火星ではみなそうだった。花街の女たちだって食い扶持のために我が子を殺す。傭兵だって報酬のためにターゲットを手にかける。受けた仕事をやり遂げるため、行く手の障害を排除し、生き残る。それ以外の選択肢はない。

人を殺してはいけない、なんてルールを知ったのだからって学校に収監されてからのことで、それまでは殺さなければ殺される環境で生きてきた。CGSに志願して無麻酔の適合手術を受け、ずさんな手際、金属アレルギー、感染症、阿頼耶識システムの不適合などの理由で仲間はずれにされていくのが『普通』だった。

仲間を使い捨てられる日常のせいで、殺人は『罪』にあたる、なんてルールは地球圏特有のものと思ひ込んでいたくらいである。

齡一桁だった子供のころから、誰かの命を糧に生きてきた。

肉食獣が肉を喰うように。

生命倫理をかなぐり捨てた生存者は、捕食動物と変わりない。

そもそも、人を殺してもこうして正気でいられること自体、異常なのだ。

だから無抵抗で殺されるべきだと、学校で教えているのだろう。

倫理観の破綻した異常者たちは戦闘経験豊富で、鋭い爪と牙を持っている。合理的に思考するため懐柔もきわめて困難である。

ならばどう駆除してくれようかと考えたどこぞの誰かが、『教育』を手段に使った。

少年兵は生まれつきのテロリストで、存在が迷惑で、死ぬべきなのに死なずに生きている邪魔な獣だ——と学校で繰り返し刷り込んでいれば、誰もが少年兵を忌避するようになる。どんな殺し方をされても自業自得だと喧伝する教師の言葉を鵜呑みにして、植え付けられた差別感情のまま人々は『害獣』に石を投げるだろう。

だって少年兵とは残忍で凶暴で、破壊と殺戮を繰り返すテロリストなのだから。

傭兵にせよ暗殺者にせよ依頼がなければ人殺しなどしない、領域を侵されなければ自衛の必要だつてない。殺されないために抗い、死にたくないと願ってきただけだ。——というのはヒルメたち少年兵側の言い分で、そんなことより民衆は、公正なる世界のために『悪者』どもは報いを受けて死んでほしい。

因果関係がどうあれ貧困は自業自得で、少年兵はテロリストだと学校で教えている。生きるために人を殺すなんて人間のやることではないという『規範』がある。

自己否定に苦しみ抜いた少年兵たちは、治安維持という大義名分のもと振り翳される暴力に耐えかね、やがて死という最後の安息に手を伸ばす。

生きたいと願うことさえ、治安を乱した罪なのだ。これまで家族や

兄弟を食わせるため、借金を返すため、自分が食っていくために体を張って働いてしまった『罰』を受けなければならない。

親の借金や病気の弟妹を抱え、今も警備会社で働かざるをえない現役少年兵たちも、みな等しく『罪人』として。

一方、両親に望まれて生まれてきて、愛されて育てられていく子供たちは断罪者ヒューローになる機会を得る。

悪い獣をやっつけて『平和を勝ち取った英雄』気分を味わいながら、のびのびと育つのだ。

そうやって少年兵——死を喰らって生きてきた忌むべき獣は、大義のもとに粛正されていく。

実際、いなくなつてやったほうがいいのだろう。このまま全滅したほうが世界のためなのかもしれない。こうも無抵抗の死を望まれて、どうやって生きていけばいい？

ヒルメはああと長く長いため息を落として、両手で顔を覆った。生きてほしいと望むことがどんな破滅を呼び込むのか、考えるだけで悪い未来ばかり浮かんで消える。

「……知りたくなかつたことばっかりだ」

人殺しがのうのうと生き延びる世界に、善良な市民の安寧はない。

だから人々のしあわせを壊す害獣おまえたちは無抵抗で死ぬべきなのだ、〈法〉と〈秩序〉がそう決めた。

## 017 花と祈り

「……知りたくなかったことばかりだ」

ヒルメの嘆きが医務室の静寂に落ちて、そして沈黙に喰われた。ギヤラルホルンが守る絶対安全圏に生まれて生きた民衆にとつては、あのラストル・エリオン公こそが善なる平和の指導者なのだ。

貧困を自業自得だと罵らせてくれる、待遇に不満を持つ強欲な労働者は圧倒的軍事力で一掃してくれる。経済圏が軍隊なんて物騒なものを持つとしたときには、戦争を起こして警告してくれた。へマクギリス・フアリド事件では卑しい男娼あがりの裏切り者を罰してくれたし、犯罪者集団も殲滅してくれた。へヒューマンデブリ廃止条約を締結し、少年兵を根こそぎ駆除してくれたのだ。

ギヤラルホルン様おかげで平和を脅かすものはなくなった！——と、諸手をあげて喜ぶのが正しい民衆のあり方らしい。まったく、やっていられない。

「あの……わたしがこんなことを言うのは、筋違いかもしれないんだけど」

壁の華がわずかに声をうわずらせれば、ライドとヒルメが振り向いた。二対の眼光が鋭くて、アルミリアは思わず祈る両手を握りしめる。

まるで狼のようだと、無意識のうちに指先は畏怖にふるえていた。

狼。——厄祭戦よりもはるか昔に絶滅してしまった、群れなして生きる獣。賢く勇敢で、家族とともに暮らすイヌ科の肉食動物であったという。糧を奪われ、住む場所を追われ、やがて姿を消したと本で読んだ。マクギリスが遺してくれた紙の本だ。彼の蔵書がなければ、アルミリアは今も無知なままだったろう。

歴史を記した本を読むほど、この世界にはさまざまな心があることを知った。

確かに狼の牙は鋭く、爪は人の肉をやすやす切り裂く。異なる摂理で生きる人と獣が言葉を交わし、手に手を取り合うことは不可能に等しかったかもしれない。

それでも。生き抜くために、家族を兄弟を住処を守るために抗って、そして散っていった彼らを省みる責任が人間にはあるはずだ。侵略者の向ける冷たい鉄の銃口にも果敢に立ち向かった彼らを忘れ、安逸と生きるなんて、卑劣だ。

覚えていなくてはならない。居場所を守りたかっただけの戦士たちを、害獣と呼んで駆除しようとした『罪』の記憶を。

アルミリアは青いひとみで現実を見据える。乙女のくちびるは理想を語る。

「しあわせを望む権利は、誰にでもあるはずなの。犠牲を踏みつけにする世界のほうが間違ってるのよ。罪から目を逸らしながら、しあわせになんて……なれないわ」

「いや、なれるんじゃないですか？ 俺らを使い捨ての道具としか見てない連中は」

「ヒルメ、」

「何も知らないほうがしあわせだなんて、問題意識を持たないほうが正しいなんて、絶対におかしいわ。そんなの、偽りのしあわせよ……！」

「あなたがそういう考え方だから、俺たちはあんたを利用してるんですけど、わかってます？ あんただって、少年兵おれたちを使ってギヤラルホルンのやり方は『間違ってる』って証明しようとしてる。同じじゃないか。ギヤラルホルンも、あんたも、俺たちも。『間違ってる』って言うってほしい、そのために都合の悪いものを否定したいだけだ」

「ヒルメ！ 抑えろ」

「現状、俺ら『少年兵』は生まれたことも生きてることも全部ぜんぶ間違ってるんです。治安を乱す、テロリスト悪者なんですよ！ 宇宙ネズミがあがいたところで正しいのは法と秩序で、ギヤラルホルン作られなかった俺たちだつて、上から目線の同情で生かして欲しいわけじゃない……!!」

激昂のまま椅子を蹴飛ばし、ヒルメの長い腕がもかくように薙ぎ払う。ライドを押しのかたその手がバツと作り物の花を散らして、——ヒルメはようやく我に返った。

医務室のフロアに散った、オリガミの花束。



エンビを見舞うために、ひとつひとつ手で折られたものだ。ひざまずいてひとつ拾い上げると、いびつな折り目を丁寧に正した部分が目に留まった。赤い花、青い花。白や緑、オレンジ色。子供たちに教えながら、アルミリアが折ったのだろう。

「…………ごめんなさい。俺、言い過ぎました」

「いいえ。あなたの言葉に傷ついたのは、あなた自身ではないかしら……。それに、あなたがたの力を借りてギャラルホルンを全否定しようとしたのは、本当のことです」

「俺からも、すいませんでした。俺らはお姫さんに雇われてる傭兵で、あなたの理想の賛同者ってわけじゃない。エンビは……頭のまわるやつなんで、俺らの中じや現状に反感持ってたんですけど。その結果がこんなじゃ、さすがに……その」

「ええ、わかっていきます」

薄すみれ色の長い睫毛をそっと伏せて、アルミリアは祈る。弟分を思いやるライドの言葉は、雇用主アルミリアにかける言葉以上にやさしくあたたく響く。

どうして彼らは、生きることが罪科であるという冷たい棘を飲み下そうとするのだろうか、悲しくてならなかった。

家族みんなに行き渡るだけの食事を、夜の眠りを、戦わなければ得られないものと彼らに教えたのは世界だ。圏外圏に生まれた少年たちを蔑み、搾取し、生きたいと願う自由さえも奪ってきた。

無関心によって踏み躪られ続けた彼らは、夢見る未来でさえ『飢え』を想定する。家族みんなで囲むあたたかい食事を、餓死からの回避としか思っていない。眠るときには交代で見張りを立てるのが当たり前だと思っっている。害されることが当たり前すぎて、哨戒のいらぬ夜を想像することもない。

飢えないための食事と、夜警の合間に得る眠り。彼らが求めているのはそれだけだ。

誰からも攻撃されないことを『平穏』と呼んでいる。

奪う権利と奪われない自由を天秤にかけている異常性に気付くこともできない。

彼らを——マクギリス・ファリドを——そんなふうにした世界を変えなければと思つた。

だからアルミリアはここにいるのに。

当事者たちは泣きたくなるくらいに無欲だ。

過ちを認めるとき、ともなう胸の痛みを思い出す。確かに自分自身を肯定してくれる人は、優しく、あたたかくうつるものだ。厳しい人よりも、赦してくれる人を信じたくなる。犯した過ちを責める人よりも、看過してくれる人こそが『正しい』のだと。

誰しもそうだ、都合良く甘やかしてくれる言葉を求めてしまう。

だからアルミリアは、子供だと嘲笑する者を赦さないと云つてくれたマクギリスを信じた。子供の婚約者がいると後ろ指を差される夫への申し訳なきごと受け止めてくれる彼への愛は深まっていった。

免罪符を欲する弱い心を理解することはアルミリアにもできる。

しかしこうも考えるのだ。

アルミリアが子供であることは、恩赦を乞うべき『罪』だったろうかと。

結婚はファリド家とボードウィン家の間で取り交わされた契約だった。なのに責められるのはいつもマクギリスとアルミリアで、年齢差があることなど百も承知で嫁がせたはずの父は娘を守つてくれない。おしめの取れたばかりの子供と、中身の無いお人形だとひそひそ笑み交わす人々は、アルミリアの耳に触れないよう隠れるだけの罪悪感を持ちながらも、今もどこかで逆賊に利用された未亡人を憐み笑っているのだろう。

ジュリエツタだって、生まれが悪いと誰かが決めたルールのせいで自由に未来を選べない。女性ならばいつかは花嫁になるものと、敷かれたレールの上を葬列のように歩んでいる。

出生地という非選択的要因によって地域的に継承させられた貧困でさえ自業自得だと人は上からものを言う。養父による虐待など些末な問題、略取された過去は恥で、変革を望んだのは不当な暴力だと。阿頼耶識システムは禁断の力であり、人ではないとまで。

そうした支配的な『常識』のもと、社会秩序に根を張ったカースト

意識が積極的に差別を肯定し続けている。

「生きたいと、しあわせになりたいと願う権利をあなたたちから奪ってきたのは、わたしたちギャラルホルンです。恥ずかしいわ。だって、わたしたちは三百年もの長い歳月をかけて、ひとを殺めなければ生きられない世界を作り上げ、守り続けてしまったのだもの……その罪をあなたたちに押し付け、弾圧している〈法〉と〈秩序〉こそ、糾さなければならぬ『腐敗』です」

保護者を失った子供たちには然るべき保護が必要だろうに、そうさせなかつた罪を、今こそ問わなければならぬ。身ひとつでスラムをさまよう子供たちが生きていけないことなど自明だろうに、救済の必要性から目を背けてきた人々が、彼らを傭兵にしたのだろう。少年少女が今日食べるパンのために働かざるを得ない惨状を創造してしまった責任が果たされない限り、世界は前には進めない。

かつて鉄華団が隆盛し、イズナリオ・ファリド公によるアブラウへの内政干渉が暴かれたとき、人々はギャラルホルンの腐敗を目にしたはずだ。当時、地球経済圏はギャラルホルンを重荷に感じていたという。アフリカユニオンが、アブラウが政治の力でギャラルホルンを止めたことはどれほどの希望になっただろう。

鉄華団の活躍は、少年兵の有用性を世界に示し、ヒューマンデブリの増加を呼び込んだかもしれない。それは同時に、飢えに苦しみ寒さに震え、死を待っただけだった少年たちが武器をとる機会を得たことでもある。

孤児院の整備、里親制度、行政による保護と支援——この世界に足りないものは何か、いくらでも目に入ってくる社会へと変わっていったはずだ。

現に〈革命の乙女〉と謳われたクーデリア・藍那・バインスタインは孤児院や小学校を整備し、人身売買の未然防止に努めた。火星連合政府発足後五年以内の識字率九〇％達成を掲げ、学校施設の建造や教員の招致といった具体的な対策を打ち出し、実現にまで漕ぎ着けている。

具体的な目標を設定すれば努力は必ず実を結ぶ。

それでも火星にはまだ、両親の遺産が尽きたからと保護施設を追い出され、路地裏をさまようストリートチルドレンが数多くいる。

リタたちのような幼い子供たちが商品として売買されるだけでなく、孤児院や公立小中学校すらいまだ略取の温床だ。教育機関の乏しかった火星には発達や知能レベルに応じた教室編成が必要で、教師が何人いても足りない。需要と供給のバランス、モラルの低さが、悪質な虐待者をも「先生」と呼ばせてしまう。中絶手術に医療保険が利き、ほぼ無償での堕胎が可能になったことが裏目に出てしまったらしい。

クリュセ市警は賄賂を多く払ってくれる側の味方につく。ホテルの従業員だけでなく飲食店、医療現場でさえ謝礼が待遇に直結する。みな決して高級取りではないから、少しでも安定した生活を求めている。独立以前は無法地帯だった圏外圏の情勢はいまだ不安定で、今日ある仕事も明日も同じように続いているとは限らないのだ。騙し合い、奪い合い、法の目をかいくぐって命をつなごうとする。

そんな世界でさえ、傭兵たちは裏切らない。ライドたちはみな信用を勝ち得ることに重きを置き、勤勉で、真面目だ。家族を大切に思えばこそ、支払われた額面を理由に約束を違えることはない。

そんな少年兵たちと接するたびに、アルミリアは『違い』を思い知ってきた。ヒルメやトロウ、エンビは自身と同じ年ごろなのに、齢一桁のところから兵士として育ち、傭兵として完成した体躯と戦闘技能、戦略的思考力を持っているのだ。

ギャラルホルンには、MSパイロットになるための学校がある。地上で戦う兵士、宇宙で艦隊を指揮する司令官、整備士に技術者——それぞれ別々の教練を受ける。

優秀な演説家をMSに乗せて前線で戦わせたりはしない。機体を調整する整備士がおり技術者がおり、炊き出しをする給養員たちがおり、補給物資を運んでくる需品部隊が行き来するのが軍という組織だ。作戦の立案者も、現場の指揮官も、みなそれぞれの仕事をする。

ところが「ハーティ小隊」の面々は、生身での諜報・暗殺任務、保護したヒューマンデブリたちの教練、果ては食事の支度まで二つ返事で快く買って出る。十代半ばのMSパイロットがそんな万能性を

持っていること自体が異常だ。

それだけの力を宿していなければ生き残れなかった世界のせい、彼らも強く成長したのだろう。長く続いた地球圏による搾取が育ててしまった問題を、少年兵たちは体現している。

「生きとし生けるものすべて、誰もが等しく生きる自由を持っているものよ。それを『命』と呼ぶの。なのに、わたしたちギャラルホルンが——」

「あの。その『わたしたちギャラルホルン』っていうの、やめませんか。あなたは何も悪くないでしょう?」

ヒルメが眉根を寄せ、アルミリアが青い目をわずかに見開く。そしてそつと、薄すみれいろの睫毛がまたたいた。

ゆつくりと、噛みしめるように首を横に振る。

「いいえ。直接的な加害者だけを責める時代は、一日も早く終わりにしなければならぬわ。わたしはセブンスターズの一員ガルス・ボードウインの娘で、英雄ガエリオ・ボードウインの妹。そしてマクギリス・フアリドの妻です。血も、罪も、理想もすべてわたしのものよ」  
アルミリアだつて、犠牲者を喰らってきた罪のひとかけらだ。手放すことはできない。

だから今、少しだけ安心している。

雇用主と傭兵の関係はいつだつて非対称だ。もしもアルミリアが「解雇<sup>ファイア</sup>」と言ひ渡せば一言で収入源を失う。異論反論を述べる権利を奪われた労働者たちは、劣悪な労働環境にも耐え忍ぶほうを選んではまう。不条理な現状か、死か——どちらがマシかと上から突きつけられてきた。

生きた声を聞くことができたのはアルミリアにとって意味ある実りの一歩だ。

アルミリアが行動を起こす力をマクギリスが遺してくれたから、今、ここにアルミリアを子供だと笑う者はいない。十八歳も年の離れたマクギリスとの結婚を『身の丈に合わない』なんて誰も言わない。そんな世界に生きたかった。連れて行ってあげると、彼は約束してくれた。蔵書を読みふけり、モンターク商会を引き継いで得た現在

は、目指していた世界に昨日より確実に一步、近づいている。

(今ならわかるわ、マツキー。わたしには世界が見える。あなたの理解者には……なれないかもしれないけれど)

青い理想があふれさせた透明な涙が一筋、アルミリアの頬を伝って落ちた。泣いてしまっただめだという自制心は、いつの間にか解けている。視界はクリアだ。くちびるは微笑んで、どこか晴れやかですらあった。

医務室に張り詰めていた緊張の糸が緩んでいく。ライドが肩をすくめた。

「なるほど、あの女騎士がお姫さんをギャラルホルンの後継者に推すわけだ」

「女騎士……？」とヒルメが胡乱げに眉根を寄せる。バルバトスの首級を想起したのだろう。

「あの女もお姫さんの味方らしいぜ。俺たちにとっちゃアリアンロツドの総大将に違いねえけどな」

この世界の行く末をアルミリア・ファリド嬢に託したいという一点においては同志だとしても、件の女騎士は主君ラスタル・エリオン公のために戦って死ぬ覚悟だ。オルガ・イツカのために武器を手放さずいるライドたち鉄華団残党『強硬派』とは相容れない。

理想の賛同者ジュリエッタ・ジュリスは、世界に抵抗するための手段たる〈マーナガラム隊〉とは異なる足場の上に立っている。

「わたしにはギャラルホルンの『罪』を暴く責任があります。いつか遠い未来に……いろいろなことがあったけれど、それでもしあわせだったと笑える世界であるために」

染み付いた罪が赦される日など来ない。免罪符などどこにもない。ギャラルホルンが法と秩序の番人であるなら、労働者を使い捨ての道具のように扱う現状を打破し、公正なる平和を実現する義務がある。過去から目を逸らして進んだ未来は、きつと？だ。

忘れることで自分だけ責任を逃れようとするなら、子供たちに目隠しをして無知蒙昧な人形に仕立てようとするなら。

こちらにだって考えがある。

「罪を知らない人々が罪を知る人々を虐げて本物のしあわせが得られるのならそんな世界、いつそ壊れてしまえばいいのだわ」

白い指先を組み合わせ、乙女のくちびるはあくまでも穏やかに平和を祈る。

セブンスターズの一家門たるボードウインの家の名の許に生まれ、三百年間で腐敗しきった楽園に育まれたアルミアには、愛する男の理解者にはきつとなれないだろうけれど。理想の体現者にならばなれるだろう。

怒りの中に生きたというマクギリスの人生を思う。ああ、今なら彼と同じ憎しみを抱ける。

自作自演ギャラルホルンの断罪者を死刑台に送らなければ、狼フェンリルの安息はどこにもないのだと。

それなら、わたしは――。

青く青く澄んだひとみが見据える未来はただひとつ。武器商人の仮面はアルミアにはもういらぬ。決意を閉じ込めた手のひらは、もういかなる神にも祈ることはないだろう。

## 018 モンターク邸炎上

PD三三三年、十一月二日。

夜空まで焦がすかのよう、館は炎に包まれた。

違法なドラッグを火星に流入させているとの通報を受け、クリュセ市警による勧告にも応じないので、ギヤラルホルンが強制査察に踏み込んだ——という情報ならばヤマギも先日ラジオニュースで耳にしたが、へモンターク商会の自社ビルが不審火に見舞われたという報せは、ごく内密にもたらされた。

メールの発信元はユージン・セブンスターク。

ライドがそっちへ行くかもしれないから、気をつけておいてくれることだった。

「……なにこれ、一体どういうこと」

三日早朝、カツサパファクトリーの事務室である。いつも通り出勤してきたヤマギの手許にあるのは、今日の業務内容ではなく物騒なニュースだった。

思わず手から滑り落ちたタブレットをデインが受け止める。

「ごめん、ありがとう」と短く例を述べると、ヤマギは縛り上げていたブロンドを一度ほどいた。(頭が痛い理由がきつく結んだ髪でないことくらいむろん承知だ)

顔を隠すように俯く。 昨晚——いや、今朝方か——寝ている間にモンターク商会の事務所が焼け落ちていたというのだ。まだ公にはなっていない情報だというならなおさら、動揺しないわけがない。

M<sup>モバイルワーカー</sup> W<sup>モバイルスーツ</sup>だけでなくM<sup>モバイルスーツ</sup> Sの整備も請け負うカツサパファクトリーにとって、へグレイズやへゲイレールなどの卸売りをやっているモンターク商会は耳にたこができるほど馴染みある社名だった。

ギヤラルホルン製の旧型フレームは初心者にも扱いやすい設計で、民間警備会社では重宝されている。MS乗りが慢性的に不足している今の火星では訓練期間が短く済み、かつ整備費用が安くあがる機体ほどありがたがられるのだ。

特にへグレイズはコンソールパネルの配置もわかりやすく作られ



ており、高性能マスバランサー、姿勢制御プログラムによる自動危機回避機能などパイロットの負担を最小限に抑えた安定感が特色である。マスプロダクトモデルだけあって他に流通している武器との互換性も高い。カッサパファクトリーのお得意様の間でも人気を博していた。

火星圏随一の武器商人を失い、これから経済的な打撃が津波のように押し寄せるのか……と考えれば背筋が薄ら寒くなる。

モントーク商会のオフィスといえば、かなり大きな建造物だ。市街地側から坂を登っていけばいかにも大企業らしくストイックな玄関口があり、山側から回り込めば『お屋敷』っぽい豪華なロビーにたどりつく設計であることは（ザック情報だが）ヤマギも知っている。高級娼館だった裏の顔は、十数年前に突如廃業してそれきりだと聞いた。

裏表はともかく認知度が低いとは言いがたい建物だし、原因不明の火災で焼け落ちたとあれば遅かれ早かれ報道されるだろう。

それが実はギャラルホルンによる焼き討ちとはぞつとしない。

しかも夜襲だなんて。

（悪いけどライドは工場こころへは逃げて来ないよ、ユージン）

ライドがそっちに行くかもしれない、という文面を指先でなぞる。何をどう気をつけたって、燻り出された彼がヤマギを頼ることはないだろう。

あいつがカッサパファクトリーに救援を求めるようなことは、天地がひっくり返ったってありえない。

半月ばかり前に手酷く振り払われた手を、ヤマギはぎゆうと拳に握った。

出張からの帰り道、赤毛の弟分と出会ったのは偶然だった。隣市メリディアニに出張してクリュセに帰ってくる道中、バイオエタノール燃料の補給のため訪れたシャッター商店街でのことだ。

サイドニア・シヨップینگセンターなんて名前ばかりがご立派な小都市に立ち寄ったのも、昼食を摂らなければという責任感からだった。経理に提出する領収書をもらわなければならなかったから、大型

チェーンのファストフード店に足を踏み入れ、そこでライドに遭遇した。二年ごしの再会だった。

家族のもとへ帰ってこいと説得を試みて、……失敗した。

——あんたらだつて『前』なんか向いてねえじゃねえか。濟んだ過去だったって諦めて、失ったものから目を背けて、『下』を向いて生きるなんて俺はごめんだ！

毛を逆立てたライドに全力で拒絶されてから、ヤマギは『前を向く』とは一体どういうことかと悩み苦しむ日々<sup>かきぶた</sup>にさいなまれ続けている。わずかでも思い出せば瘡蓋に爪を立てられたような痛みが蘇って、呼吸を忘れそうになる。

だつてそうだろう、戦う力を持たないヤマギは、ある程度の妥協を覚えなければ生活していけない。

昔からトロくて鈍臭くて、女みたいだと蔑まれてきた。阿頼耶識のヒゲがついていたって生身でドジならMWでもMSでも同じ轍を踏んでしまう。ライドのような敏捷性があれば、MSに乗ることで手足の長さをカバーできるのだろうけど。ユージンだつて走ることが得意だから操艦には長けたがMS戦はてんでだめだった。シノは、もともと白兵戦が得意だった。歴代流星号は彼の長い手足の延長線上として動けるようにヤマギが整備・調整を重ねていた。

戦力にならないヤマギでも生きていけるようにと、ノルバ・シノが整備担当に移してくれた。生きる希望をくれた恩人を亡くし、やつぱり俺も同じ地獄に堕ちたいと頑是なく泣き喚いたつて、何も変えることはできない。

鉄華団のためにおれも何かできるはずと決意した矢先に、すべて失ってしまった。

だから仕事に打ち込んだ。前を向くために。今度こそ家族のために何かしてやるんだと、淡い恋心は吹っ切らず、生涯独り身を貫くと決めた。過去には『思い出』と名前をつけて鍵をかけた。

それがヤマギなりに顔をあげ、しあわせをつかむ手段だった。

仕事に生きると決めたのだから業務に支障をきたしたくないし、社長おやつさんに心配をかけたくない。専務メリビットのお小言もできれば聞きたくない。

ライドのことも、今は思い出さなくなかったのが正直なところだった。

だが、ライドがああとき「守秘義務のある仕事だ」とだけ答えたことを思い起こせば、すべての辻褄は合う。ライドはモンターク商会に雇われていたのだろう。

そして件の仕事とやらは、傭兵業だけじゃなかった。

「……あの袋の中身はクスリだったってわけか。やってくれるよ……！」

嘆息する。憤りとともに、言葉にならない脱力感がヤマギを襲った。もう『反抗期』では済まされない。あのファストフード店で再会したとき既に、ライドは薬物の売人をやっていたのだ。

足がつかないよう、現地の子供に売買させていたのだろう。上部組織タンクトンボの手前どうにか営業しているファストフードチェーンが備蓄庫となり、ナゲツトの箱なり袋なりにドラッグを忍ばせて、運び屋ライドを仲介して地元の浮浪児へ受け渡されていた。そして、砂塗れになつて逃れてくる失業者たちへと売りさばかせていた。

現場を見ているから疑いようもない。年少のチビたちのために菓子をとりにおいていた昔のライドと重ねてしまったあの日のヤマギには思い至らなかつただけで。

カラクリがあつたのだ。でなくば、あんなサービスイリアに毛が生えた程度の、行政の手も届かない田舎町でファストフード店が商売を続けていくのは難しい。

へモンターク商会といえは、今や火星では名を知らぬ者のない超有名企業である。死の商人ノブリス・ゴルドンに取って代わつた大富豪。流通業界を牽引し、その分野は多岐にわたるといふ。ドラッグの輸出入に手を広げていたとしても不思議はない。

手のひらで顔を覆って、ヤマギは真実を見破れなかつたあの日の浅慮を嘆く。活発でよく笑う少年だったライド・マツスは死んだ。もう

いないのだ。

「あいつはもう俺たちの家族じゃないんだ……。薬物の売買に子供を関らせるなんて、信じられない」

「それが、そーゆう単純な話でもないっほいんっすよねえ」

「ザック……？」

疲れたため息をつき、事務所に現れたのはカツサパファクトリーの営業マンだった。

「はよっす」とザックは首だけで器用にお辞儀をする。

ヤマギとデインも口々に、手身近な朝の挨拶を交わした。いつもも増して気怠げなザックは壁掛け型タブレットに『出勤』を入力すると、片手でわしづかみにした黄緑色のAIをひよいと掲げ、デスクに置いた。(読み書きのできない子供や目の不自由な方に音声による誘導を、というコンセプトでカツサパファクトリーが開発した癒し系ペットロボットなのだが、いまだ量産にすら漕ぎ着けていない)

「そんでこの、いかにもキナ臭い炎上事件っすけど……ここだけの話、内部告発がらみらしいんですよ」

「内部告発？ 誰がどこに密告したら会社が燃やされるわけ？」

文字通りの『内部告発』だとしたら、構成員や従業員が所属組織の不正を外部に漏らすものではないのか？ ヤマギは腑に落ちなくて小首を傾げる。モニター商会の悪事が内部から外部へ告発されたとして、なぜクリュセ市警が勧告し、ギャラルホルンが査察に踏み込み、秘密裏に夜襲をかけるのか。

きつかり十年前にはクーデリア・藍那・バースタインひとり暗殺するためにCGSごと攻撃してきた組織なのだから、民間企業殲滅くらいで今さら驚くことでもないが――。

「詳しく話すとややこしいんですけど。えーつと……」とザックはきょろりと周囲を気にして、内緒話モードにトーンを下げる。「ホントここだけの話っすからね」と前置きした。

「なに。もったいぶらないですよ」

「いやね、モニターク商会が……とある顧客名簿をそこらじゅうの報道機関に送りつけたらしいんすよ。クリュセとか火星とかそういう

レベルじゃなく、地球とかコロニーにまで。しかもそのリストがまたヤベエっていう」

「確かに情報漏洩はマズいけど。何の顧客リストだったの？」

「買春つす、未成年の。ああいう業者は豪邸の地下とかに子供囲って薬漬けにして商品化するんで、強制査察でもしないと発見できないんですよね。現場おさえようにも黒服がガツチリ警護についでるし、市警は賄賂カネで買収できちゃうし。あと、紙幣使つてやりとりしてるから証拠つかむのマジで無理つてチャドさんが嘆いてました」

あ、昨晚チャドさんと飲んでたんですけど、とザックは付け加える。仕事の愚痴を言い合えるのでチャドとは懇意にしているのだ。(お互い、不平不満は適度にこぼして発散しないとストレスでどうにかなってしまう職種である)

紙だなんて高級品が持ち込まれたのは独立以降で、ザックのような一般的な火星人は紙幣なんて見たこともない。だって、デジタル決済が『普通』だったのである。紙も印刷技術もまともになかったせいで、現金という概念ですら鉄華団入団まで知らなかった。

それが最近では『紙幣』の価値が高騰し、額面をはるかに上回る金額で取引されるケースも少なくないという。

現金といえば『金持ちのステータス』であるというパラダイムシフトが起こったらしいのだ。

高級ホテルやブティック、レストランといった一見さんお断りのエグゼクティブ専用店が現金での支払いに対応しはじめ、上流階級では紙幣や紙媒体のサインが大流行。地球かぶれの見栄っ張りどもはこぞつて輸送費用を上乗せされた現金を買い求めた。

〈革命の乙女〉として火星連合初代議長にまで祭り上げられたクーデリア・藍那・バーンスタインの生家が地球と縁深いことも、地球というブランド性を強固なものにした原因のひとつだろう。モンターク商会もまた地球と火星とを往復する独自航路を持っていた。

政治とカネの流れからは、火星生まれ火星育ちの名士たちがこぞつて『地球性』を手に入れようとしていた動きが汲み取れる。

「つつつてもクーデリアさんはああいう立場だし、議会で発言力持つて

る代議士<sup>センセイ</sup>とかの不祥事はつつつきにくかったみたいで……あ、今回の美少年趣味が発覚したのが議員さんに社長さん、ギャラルホルンのお偉いさんとかなんですよ」

「なるほど、それは公開処刑だ」

「社会的に死にましたね。あつちこつちに口止め料ガン積みして違法シヨタデリで遊んでたとか、信用ガン落ち間違いなしですよ」

支持率低下だけでなく、情勢不安も避けられないだろう。『金』法』という人治主義のもと金持ちが買いあさってきた免罪符の数々を白日の元にぶちまけやがったのだ。ギャラルホルンによる焼き討ちだけで済むとは思えない。

それにモニターク商会だって、これで切り札を出し切ったわけではないだろう。

くわばらくわばら……とザツクは両腕の鳥肌をさする。

火星連合傘下の全都市において十六歳未満を動員した風俗営業は一切禁止、買ったほうにも売ったほうにも等しく厳しい罰を科す。売り物たちは逮捕前にモニターク邸ごと焼き殺されたのだとしても、買った側——買春当事者は、これから説明責任を果たさねばならない。

——どういう言い訳を述べるにせよ、違法行為を金銭授受によって帳消しにするという危ない遊びに興じてきた変態のリストはもう、偽名と実名に顔写真、ご希望のオプションまで添えてすべての報道機関に投書された後だ。これであつさり放免されれば、また賄賂で裁きを逃れたのかと疑惑の目が向く。

昨晚チャドから得てきた情報によれば、名簿の約六割がギャラルホルンの将校だったというが、火星連合政府機関はギャラルホルン関係者を裁く権限を持たない。地球圏から赴任してきた各要人も、既に火星圏を出てしまっている場合、違法性を追求することは不可能だ。

妻子を地球に置いて娯楽のない辺境へ単身赴任していた彼らには、むしろ同情が集まるかもしれない。

遊びらしい遊びも花街くらいしかないのに、火星人は変な病気を持っているかもしれない……となると、温室で育てた子供に手が伸び

るのは正当なリスクヘッジだとても主張されたら、またややこしいことになる。(感染症や伝染病を地球に持ち込まないために、圏外圏の子供が生け贄に捧げられることは是か非か——という議論になったら、不利なのは火星だ。今度こそ火星人奴隷化協定が成立しかねない)

売春幫助・に関してグレイゾーンで、現行法では罪には問えない。金銭授受チツブによる見逃しも、今のところ取り締まりの対象にはなっていない。お得意様の接待はどんな企業だって大なり小なりやるもので、多少の口利きは営業努力の範疇だろう。このカツサパファクトリーだって馴染みの弁当屋、居酒屋、工務店キャバクラ雑貨屋マフィア孤児院PMCに政治家事務所までさまざまなコネを持っている。狭い世間ゆえ個人の付き合いとの線引きは非常に難しい。

見分けがつかないからとグレイゾーンを放置していた結果が、先日の連続惨殺事件だ。

先ごろ政治家、医師、弁護士、私立学校連盟長の計四名が相次いで殺害された血なまぐさいあの事件、あれもモニター商会による見せしめだったらしい。『リタ・モニター』なる金髪碧眼の美少年を買おうとした現行犯を摘発するため、暗殺者ヒットマンを雇ったと声明文を出してきたという。

事件はすべて高級ホテルのスイートルームで起こり、第一発見者となったホテル従業員は精神的ショックから次々に発狂、自殺。捜査にあたったクリュセ市警からも離職者が相次いだ。

わずかに原形をとどめただけの蜂の巣を直視し、腐臭を放つ肉塊を検分しなければならなかったのだから、正気を失うのもしょうがない。

〈法〉と〈秩序〉が裁かないのなら我々が私刑を執行します——と、自浄作用のなさを突かれた結果が、このぎまだ。

今回の情報流出は、これまで必死に蓋をしてきた数々の問題を白日の元に晒してしまった。既得権を濫用していた政治家ばかりか、ただでさえ殺人事件があったと噂され客足の途絶えたホテル、志願者が目に見えて減ったクリュセ市警、今度は政治家にギャラルホルンの将校

にまで打撃を上乗せしてきた。

これだけの不祥事が明らかになれば天下のギャラルホルンもすぐには動けないはずだが、事態が収束したときがおそろしい。

子供たちの教育の充実を謳い、高い就学率を誇ってきた火星連合政府の評判もどうなるか……。

「流出したデータによればギャラルホルンに旧姓『モニターク』揃いの金髪イケメン部隊があるとかないとか、あのフアリド公も娼館あそこの出身だったとか……まったくもー、何がなんだか」

ペットロボットと情報端末を兼ねるHARROの頭をぐりぐり撫でて心を落ち着けるザックは、はーつと遣る瀬ないため息をつく。ハ口は慰めるようにころころ左右に揺れながら赤目を明滅させた。

『ザック、ゲンキナイ！ ザック、ゲンキナイ！』とさえずるのは、指紋認証によるものだ。手のひらの温度を感知して表情と照合し、感情を押し量ってくれる。

学校に通えない子供たちにも学習を支援しようとAIなんか開発したところで、空回りするわけだ。

搾取される子供たちを救いたくとも、現行法は売春に携わった両者に等しく罪を問うようになっていて。違法に買われた十六歳未満の少年少女が摘発を行うおうにも、加害者と心中する覚悟が必要になるシステムだ。同胞を裏切ることにもなり、——結果、絶対安全圏にいる富裕層はのうのと野放しになってきた。

上客を逃したくないホテルも、口止め料で潤うクリュセ市警も、少年売春を斡旋する業者もみな連鎖的に口を噤んだ。

クーデリアもまた、『表』の志のために『裏』の顔を見て見ぬふりするという妥協を余儀なくされる。

かつて貧困の中でしか生きられない火星の少年兵問題を憂いたへ革命の乙女でさえも、全市民を守らねばならない立場になって迂闊なことは言えなくなった。最大多数をしあわせにするために目をつぶらなければならぬ問題が増えてしまい、正義感の強い彼女は憤りを抱えているだろう。

今の連合政府が最優先すべきは火星の経済発展だ。ただでさえ



ギャラルホルンとテイワズの傀儡である火星が、地球圏や木星圏に内政を明け渡してしまわないために。親火星派政治家を議席にキープしておく必要がある。

不正を黙認し続けることになっても、社会的弱者の蹂躪など矮小な問題だと議会が一笑に付そうとも。故郷がふたたび一方的な支配を受けるよりはずっとずっとマシなのだ、耐えねばならない。地球圏の植民地に戻ればどうなるか、木星圏の属領になればどうなるか、想像に難くない。

誰も彼もが腐敗を暴けない連鎖の中、しがらみに縛り付けられ、がんじがらめになっていた。

「それで、今の話のどこが『内部告発』だったわけ？」

「あ、モンターク商会の女社長っていうのがマクギリス・フアリド公の元奥さんで、あのガエリオ・ボードウィン卿の妹君だっていう……」  
「俺も言ってると思いますけど、これって内部告発っつーよりアレですね」

ギャラルホルン内部の人間が素性を隠し、ギャラルホルン製MSの流通に携わりながら薬物売買や少年売春をみずから斡旋。それらに積極的に関与にした要人を一斉に摘発し、権力の腐敗をギャラルホルンの罪科もろとも暴いたのだ。一連の暴露は『内部告発』とも『囚捜査』とも呼べなくはないのだろうが、……もっと相応しい言葉がある。ここでザツクが口をつぐんだとしても、きつと誰かがそう呼ぶだろう。

『ジサクジエン！ ジサクジエン！』

## 019 過去の清算

「武器の卸売りから人材派遣、輸送の仲介役まで、金さえ出せばどんなものでも手に入る。」

モニターク商会の謳い文句といえはそんなところだろう。ユージン・セブンスタークが仮面の女社長と会談してから二ヶ月が経とうとしている。あと一歩でライドの足取りがつかめるか——と思っていたのに、モニターク邸は焼け落ちてしまった。

しかもギャラルホルンの夜襲で、だ。

あれから明日で一週間が経つ。坂の上にある大きな屋敷が黒焦げになったのに、六日経つてもまだ何の報道もないなんて、クリュセは一体どうなってしまったのだろう。

苛立ち任せにブロンドをがしがし乱して、ユージンは肺腑の底からため息をつく。

地元の名士たちの不正が次々暴露され、職場であるバインスタイン議長閣下のオフィスも大わらわである。未成年買春をやっていたという顧客データをモニターク商会が全宇宙の報道局に流出させたせいで、各政府関係者も事務所に詰めかけるレポーターのせいで、この一週間窓すら開けられないでいると聞く。

一連の事件には一切無関係なクーデリアのもとにも問い合わせの電話がガンガンかかってきて、通信回線がパンクしている。

……いや、まったく関係がないとも言いきれないのか。

モニターク商会がリアンロッドの強制査察に遭った理由は、違法なドラッグの輸入だ。持ち込まれた薬物を使用していたのは、ほとんどが出席率を底上げしたい教育機関だった。

火星連合政府が就学率の向上を掲げ、生徒総数と出席率に応じて補助金を出していたせいだろう。子供たちはドラッグ入りの給食を求めてうきうきと登校するし、学校の評判があがればあがるほど新入生も集まりやすくなる。学校も薬の売人も、子供たちも誰ひとりデメリットを体感しないwin-winどころかwin-win-winの関係だった。

薬漬けになっていたのは学童だけではない。違法な風俗営業の疑いで暴かれたのは、見目麗しい少年少女を地下室に囲い、前後不覚のドラッグ中毒にさせていた売人どもの存在だった。へヒューマンデブリ廃止条約で失職した連中が、矛先を変えて再起したのだろう。

結局、火星は無法地帯のまま、何も変わっていないかったのだ。

職場ではチャドにククビータ、デクスターといった人当たりのいい頭脳要員を総動員し、受話器片手にペコペコ頭を下げ続けて、今日も午前は潰れてしまった。何だかもうずいぶん仕事らしい仕事をしていない気がする。

あっちこっちで記者会見が開かれては、みな頓珍漢な言い訳をしている。記者の質問に首を斜めに振っては傾げ、要領を得ない。連合政府どころか、クリユセはしばらく停滞状態だ。元気なのは命知らずなジャーナリストくらいだろう。

短気なお前に電話対応は無理だと事務室を追い出され、ユージンは窓のない応接室に追いやられるようにしてSPらしい(?)仕事を押し付けられた。

ソファでは今朝方クーデリアのオフィスビルに現れたちよび髭の男が優雅に紫煙をくゆらせている。

「オイオイ灰皿はねえのかよ、ユージン元副団長ー?」

「あゝ!?! お嬢のビルは全館禁煙だつつつたろうがオッサン!」

「堅<sup>かて</sup>えこと言うなって。この俺様が確たる証拠を持ち込みにきてやつたんだぜ?」

トド・ミルコネンはぺらぺらり紙束を揺らしてみせ、本物の契約書だと不敵に笑んだ。上から目線で脚を組み替えるしぐさが癩に障って、ユージンは「そうかよ」と吐き捨てる。

だがしばらく見ないうちに白髪が増えたトドは、ユージンの記憶の中よりずいぶんと人相が明るくなったように感じられた。

瀟洒なスリーピースのスーツ姿に、こなれた煙草とアタッシュケース。狸親父が、妙に馴染んでいて小憎らしい。目尻の皺は陰険そうだった印象を上書きするように、どこか茶目つ気のある笑い皺を深くしている。

「そいつが流出した顧客リストの原本ってわけか」

「おうよ」

トドが胸を張ってみせる。その『確たる証拠』とやらは、ユージンにも見覚えがあった。要するに紙媒体の契約書そのものだろう。それも直筆の。

「だからあのときわざわざ紙とペンを……」

モントーク商会のオフィスで、ローテーブルにセットされた上等そうな紙の契約書と飾り物のようなペン、インクの壺が脳裏に蘇る。直に見たときは地球圏から持ち込まれた貴族的文化くらいにしか認識していなかったが、確かにギャラルホルンの情報統制が行き届いた現在、持ち逃げできる媒体としてこれ以上なく有効な証拠品だ。

紙が貴重であるがゆえ、火星ではデータというデータが電子化されるのが常である。

おかげで、銀行口座を開設できない子供や貧乏人は貧困から抜け出すこともできない情勢が長く続いた。

現金で支払える店なんてスラム限定で、市街地にいけば『現金』なんて概念すらなかったという。クーデリアのような特権階級、ザックのような富裕層の生まれなら目にする機会もなかったと後から聞いた。

当時、現金といえば貧乏人のものだったのだ。

こんなもの焼けてしまえばおしまいだと目の前でなければなしの給料に火をつけられたことだってある。汚水のタンクにバラまかれ、欲しけりや泳いで拾ってこいやとゲラゲラ笑う一軍の大人どもの罵声は今も耳に残っている。

路地裏で立ちんぼする少年少女の姿が絶えなかったのは、ほとんど物々交換のように生活していかねばならない金融システムのせいだ。食べものをおごつてもらうため、屋根のある部屋に招き入れてもらうため、大人の靴を舐めて命をつなぐ。それが当たり前だった。

CGSは男限定、かつ阿頼耶識システムの適合手術成功を条件に子供も雇っていたから、ユージンは生き残ることができた。IDを洗い出し、フルネームで銀行口座を作り、給金を振り込んでくれるという

優良企業だったのだ、当時は。

今にして思えば、月給は一軍の三〜五％程度しかなく、それも死ぬば全額マルバ・アーケイ社長の懐に戻っていくのだからブラック極まりない。参番組は非正規雇用で社会保障もないし、産業医による治療も診察も受けられなかった。現金で給料を受け取っていた三日月は賢かったということだろう。

それでも、あのころのユージンには破格の厚遇に思えたのだ。成長をうながすサプリメントが盛り込まれた冷たいポレンタだろうと食事があるだけありがたかったし、汗臭い蝟部屋であれ屋根の下で眠れるなら僥倖だった。

給与から衣食住の天引きがあつて月収二万ギャラー程度の手取りではあつたが、大人の『ガス抜き』をほどほどに抑えるなり、一軍に頭のついた作戦参謀を置くなり対策をとつてくれていたなら、オルガとて社長の椅子まで奪うつもりはなかつただろう。（社員も基地もすべて放り出して逃げ出したことは、もはや擁護のしようもないが）ないよりマシなものをかき集め、ユージンたちは大人になつた。だから葉まみれの食事の何が悪いのか、今ひとつ理解できかねるのだ。

学校では読み書きや計算を教えてもらえるのだろう。学費はタダ、制服は無償で配布、給食費もいらぬ。宿舎も無償で提供される。ここでは消灯時間から起床定刻までゆっくり眠つていてもいいのだろう。教師に因縁をつけられ叩き起こされて、サンドバッグとして便利に弄ばれたりはいないだろう。

仕事をしなくても食事があつて寝床もあつて、弾避けに使われて死ぬことも殺めることもない。上等ではないか。

連合政府がラスタル・エリオンによる傀儡でも、命がないよりずっとマシだ。ギヤラルホルンの軍事力に頼りきりの平和でも、テイワズにおんぶに抱つこの学校教育も、ないよりずっとマシだったはずだ。

クーデリアが願つた経済的独立が一〇〇％叶つたわけではなくとも、ひとまず脱植民地化は果たした。鉄華団残党も皆殺しは免れた。学校施設も充実し、すべての子供に教育が行き渡ることを是とする政

府を作り上げた。

当然、それだけでいいなんて思っちゃいない。ないよりマシ、それだけだ。

鉄華団の復興よりも現状維持のほうがマシ。たとえいつ殺されてもしようがない束の間の平和でも、帰る場所がある。真つ当な仕事だけでやっていけるようにもなった。血縁もない男所帯を家族と呼んで、守るための何だの喚いて命を賭けるだなんて馬鹿馬鹿しいことは、もうやめるべきだ。

暁は健やかに育っているし、アドモス商会もカツサパフアクトリーも経営は軌道に乗っている。

もしもトドが持ち込んだ証拠とやらが、この安寧を破壊しかねない災いの種であれば。遠慮なくギャラルホルンに売り渡す。状況の悪化を回避することこそが責務だ。そのためなら手段は選ばない。

国家元首SPとして、今のユージン・セブンスタークにはその覚悟がある。

「俺が聞きたいのは、なんであんたが事務所に来たかだ」

「証拠をおさえたんなら、やるこたア決まっただろ？ 警察があんなザマじゃあ、クーデリア先生の事務所が一番確かな筋じゃねえか」

アタツシユケースをたぐり寄せると、パチンと見せつけるようにロックを解く。トドが手許から僅かに覗かせた中身は、ぎつしりと詰りめ込まれた――、ハツとするどく息を呑む。

「あんたの言いたいことはよおくわかったぜ……。それじゃ、もうひとつ質問に答えてもらおうじゃねえか」

「おうおう、何でも聞いてくれ？ 今の俺様は心が広いからな」

「……いちいち腹立つオッサンだなこの野郎……」と口角を苛立ちに引き皺らせたユージンだったが、そんなことはどうでもいい。「あいつはどこへ逃げた」

「あいつウ？」

「ライドだよ。赤毛のガキだ。あいつは今どこにいやがる！」

「ああん？ モンターク商会は倒産しちゃったから知らねえなア」

「おい、知ってんだろオッサン！ ライドはっ……他のガキどもは無

事なんだろうな!」

「俺はなーんにも知らねえ。あいつらはもう火星にやいねーからな」  
「なんだって……?」

返す言葉を見失ったユージンに、優位に立ってやったとばかり、トドはにんまりと口角を釣り上げた。ジャケットの裡ポケットから携帯灰皿を出して煙草を押し付け、新たな一本に火をつける。

ふうと優越の紫煙を吐き出した。

「七年もありやガキはどうにでも育つてモンよ。おめえもあいつらもみんなクソガキばつかだが、いつまでもガキのままじゃあねーだろう?」

ぐつと二の句を喉に詰まらせながら、ユージンはどうにか「うるせえ」とうなった。あいつらがもう小さな子供じゃないなんて、そんなことは百も承知だ。

だが、ユージンにとってライドは弟分のままだ。快活で、絵が得意で、チビどもにお菓子を配っていた赤毛のガキなのだ。年齢差が埋まらない限り一生変わらないだろう。だって、あいつは鉄華団の兄弟だった。兄貴が弟を心配して何が悪い? あいつらは守ってやらなきゃならないほど弱くないかもしれないけど、それでも。

大事な弟分を庇護してやりたくて、何が悪い。

二年も前からずつと、あいつらが目の届くところにはいないことが不安でしようがない。一日も忘れたことなんかなかった。

「ちくしょう……」と悪態がこぼれる。拳を握る。ライドたちは火星を離れて、ここじゃないどこかへ逃げたつてののか。

目の届くところで元気に生きていてくれれば他には何も望まないのに。せつかく真つ当な仕事だけでやっていけるようになったつてのに。またユージンの気持ち踏みにじつて。

「なんで俺の言うことは聞いてくれねえんだ……ッ! オルガは復讐なんか望まねえ、もう戦う必要なんかねえんだつて何回言つても聞きやしねえ!! お嬢がどんな気持ちで、俺らのために……クソッ!」

苛立ち紛れにソファを蹴る。頑丈な木枠を力任せに蹴りつけたせいで、革靴のつま先が派手に傷んだ。ああ。苛立ちに金髪を掻きむし

り、グリーン双眸には悔し涙が浮かぶ。情けなくなつて拳で拭つた。

ふるえる指先を閉じ込めるように握りこんで、壁を殴りつける。  
(俺たちはもう戦えねえッ……みんながみんなお前らみたいになつてじゃねえんだ……!!)

頼むからもうやめてくれ。止まってくれ。懇願に等しい嘆きを、トドの前でぶちまけるわけにもいかずに嚙下する。咽喉は焼けつくようにひりついて痛む。

家族の死を、もうこれ以上見送りたいくないのだ。どう自己暗示をかけて諦めようと目を逸らしても、仲間が死んでいくことに、もう、心が耐えられそうにない。

まなうらに焼き付いた戦場の情景に、ユージンは今も苦しめられている。指標<sup>オルガ</sup>を失い、理解者<sup>シノ</sup>を失い、手の中にはもう何も無い。あるのは胸にぽっかり開いた大穴と、目には見えない心の傷だけだ。

せり上がってくる嘔吐感を両手で塞いで封じ込め、ユージンは膝をついた。

ぼたり、絨毯に涙が染みる。ひとりぶんの陰の中へ、ぱたぱたと雫が後を追うように雨が降る。フラツシユバックに喉が引き攣るが、慟哭はなけなしの意地でどうか噛み潰した。

オルガが見下ろしている。どうしたんだ、大丈夫か？ 疲れてるなら休むか？ ——だなんて、無邪気に。シノがけらけら笑っている。骨は拾ってやるからよと。たしなめるようにビスケットが苦笑する。

無様にうずくまるユージンをのぞき込んだ三日月の青いひとみは、笑っていない。

その隣から、いつそう冷たいグリーンアイズが、見限るように背を向ける。手の中の拳銃をユージンに向けてくれさえない。

(ラ イド………！)

助けてくれ。もう赦してくれ——解放してくれ。幻覚の中、孤独な戦いを強いられ続けるユージンに救いの手は伸ばされない。

嗚咽はトドが吐き出す紫煙よりも細く頼りなく、ふうと吹かれて霧散する。



嫉妬、憎悪、汚辱に恥辱——消えない過去に縛られて、輝かしいはずの未来はすべて愚かしい過去の清算のみに消費される。

俺たちの踏み出す足は、前に進んでいるだろうか。

心を殺して、魂を売り払って生きるのが『家族の幸福』なら、俺のしあわせは一体誰が願ってくれるんだ？ 無抵抗で死ななきや罪がかさむのが『社会の秩序』なら、大人しく殺されてやるのが『世界の平和』なら、俺たち宇宙ネズミが生きててもいい場所なんて、どこにも存在しないのか。

なあ、ライド。喰い物にされるばっかりの生活はもうやめにしようって、団長は鉄華団を作ってくれたんだよな。俺たちは居場所を守りたくて戦ってた。胸張って帰れる場所はもうないけど、俺たちは……俺はまだ、生きていいんだよな。

だったら、俺は——。

〈ヴァナルガンド〉の医務室にはふたたび沈黙が降りていた。

何のために戦うのかを再考する、これは猶予なのだろう。ライドは壁にもたれかかって白い天井を見上げた。

こうして目を覚まさないエンビのもとに集うのが日課になりつつある。耳に痛いほどの静寂に、規則正しく響くデジタルの心拍音。医療ポッドに頬杖をつくトロウも、一昨日くらいからも一言も発しなくなつた。医務室に来て眠り、当番の時間になつたらふらつと起きだして、仕事を過不足なくこなしたら戻ってくる。

束の間の平穩はどんよりと、鉛で満たした澱を泳ぐように重苦しい。

一度はフロアに散ったオリガミの花を一輪とりあげたヘルメが、またため息をつく。

エンビが目覚めたときのためにと日々の出来事をタブレットに書き付けていても、二行も進まないうちに、この文面をエンビが読んだらどう思うだろう——と立ち止まって、書いて消してを繰り返してしまふ。

「なあ、ライド。俺らはこれからどうするべきなんだ？」

無感動に目を伏せ、ヘルメが口火を切る。視線は花瓶に落とされたままだ。肩をすくめるライドも、敢えて目を合わせることはしない。

「さあな……俺らはお姫さんに雇われの傭兵だ。生き残ってから考えるさ」

「俺は、誰かに『間違つてない』って言うてほしかったただけだったんだ。戦うことを選んだんじゃない、ただ認めてほしかった。だからエンビに、ライドに、お姫さんについてここまでできた」

自己正当化のためだ。醜い承認欲求だ。そのためにリタを死なせた。エンビまで殺してしまうかもしれないなかった。

「それがどうした。俺だつてギャラルホルンやら副団長たちが『間違つてる』って言われたらスカツとする」

「本当は向こうが正しかったとしても？」

「認められないものはある。赦したくないヤツはいる。全否定されたら腹が立つ。そういうもんだろ。間違つてたのは自分かもしれない。いつて悩んで答えまでたどり着けたんだ、お前は強いと思うぜ」

そうだと、自分に言い聞かせるようにライドは細く嘆息した。

誰も皆、誰かの正義にすがりたいのだ。悩むことは苦しい。責任を負うのは恐ろしい。それなら失敗しないように、誰かが敷いたレールの上を歩く従順な奴隷になってしまえば——と逃げだしてしまう弱さを、責めることはできない。

潔癖なエンビは、そんな生き方は卑怯だと毛嫌いしていたが、だから正論のナイフを振り回したしっぺ返しを喰らってきたのだろう。

罪に染まったこの手を未来に向けて伸ばしていいのか、誰もみな自問自答できずにいる。

ここから何処へ行けばいいのかも。わからない。

今までは生活のために戦っていたが、だから世界の波に流されたり振り回されたり、受動的な立場だったのだろう。欲しかったのは家族全員のあたたかい食事と、安全な寝床、それから家族の命が使い捨てにされない仕事。……見果てぬ夢だ。たとえアルミアが『人として当たり前』の権利』だと主張しようが、効力はすぐには望めない。

同じ世界に生きるためには、価値観を統一する必要がある。だからこそ火星市民には『子供』と『少年兵』を別のものと認識させ、子供を愛し、害獣は殺すようにと刷り込みを行なっている。

それが自然の摂理だとして、人間が動物の肉を『糧』と見なししてきたように。

生来の悪者テロリストであれ作られなかった命を捨て、ありとあらゆる屍から目を背ければ安寧は手に入るが、偽造IDで買った日常でさえ無抵抗の死を望まれ続ける。

死に切れなかった孤児にとっては、生き続ける未来そのものが夢物語に等しい。

元副団長ユージン・セブンスターの判断も、ある意味では正しいのだ。

眼前の敵は〈法〉や〈秩序〉ではなく創作された『民意』である以上、迎合するのが手っ取り早く平穏を得られる手段だろう。何もかも忘れて、責任転嫁してしまえばいい。諦めてしまったら楽になれる。鉄華団は反体制組織で、残忍で凶暴で、人々のしあわせを壊す害獣だったから殲滅された。それが世界のためだったんだ、粛正されるべき犯罪者集団だったんだ……とでも自己暗示をかけてしまえばいい。

ギャラルホルンと一戦交えるには力が足りなかったのは紛れもない事実である。できないことをやろうとして殺された、愚かな子供にすぎなかった。

武器一切を手放し、クーデリアの斡旋してくれる真つ当な仕事に就けば、成長して大人になれる。ギャラルホルンが続べる平和の片隅

で、弁えた暮らしをするだけなら取り締まられることはない。  
そこでささやかな幸福を手に入れたいと願う気持ちもわからなくはない。

ただ、それもひとつの人生だと思えるかどうか『穏健派』と『強硬派』の溝になった。

断絶の正体に気付くまでに余計な軋轢も生んだが、ユージンだってヤマギだって、もちろんライドたちだって、家族だった連中の不幸を望んでいるわけじゃない。

ただ安心したい、それだけだろう。

生存や笑顔という目に見えるしあわせの雛形に押し込んでしまえば、不安や焦燥に胸を掻きむしられることはない。

「……打って出よう」

トロウの声が不意に、静寂を割る。童顔の中にあつて一際鋭いダークブラウンの虹彩が、何らかの強い感情を押し込めようと煮えているのがわかった。

気持ちは察せるが……、ライドはつとめて冷静に釘を刺す。

「だめだ、トロウ。エンビの目が覚めるまではこっちから動く気はない。当座は大人しくしてろ」

「逃げるのか？ 諦めるのかよ!?!」

「そうじゃない。今は勝負に出る時じゃないんだ」

「それじゃ俺らはいつ戦うんだよ……? こんな真似されて、黙ってろっていうのか!?! ずっと馬鹿にされて、足蹴にされて、消耗品みたいに扱われて、挙げ句にこんな……ッ!」

眠ったままのエンビを見下ろして、耐えかねて目を逸らす。仮死状態と診断されたとはいえ目覚めない理由は判然としない。投与された薬剤のせいか、それとも受けた精神的苦痛のせいか。傷だらけの兄弟が痛々しくて拳を握る。たぐり寄せた両手の中には何も無い。

「……やられっぱなしじゃ、いらねえよ……!!」

殺してやりたい。殺してやりたい。思いつく限り酷い目に遭わせて、殺してくれと懇願されるまで家族の苦しみを思い知らせて地獄に突き落としてやりたい。——沈黙を守ってきたトロウがぶちまけた

激情にも、ライドは静かに首を振る。

エンビは仲間内では頭の切れるやつで、射撃の腕も確かだった。諜報活動にも長けていたし、頼りすぎていたのは事実だ。だからトロウも自責に駆られ、弔い合戦だと憤りを露わにできなかったのだろう。

一等家族思いのトロウが今の今まで黙っていただけでもリーダーとして褒めてやるべきかもしれない。これまでよく堪えた、とでも。

アルミリアについていってどうなるのか、いくばくかの疑念もある。世界に対して変わってほしいと願うことしかできない彼女に何ができるのかも不透明だ。手は打つてあるとのことだが、深窓のご令嬢の奇策が何をどのように変えるか、予想がつかない。

それにヘマーナガルム隊は、アルミリア・ボードウィン嬢の権力と財力、ご意向なしには動かせないのだ。お姫様が大金持ちで、なおかつ人道主義者だからエンビは医療の恩恵を受けられている。処置が間に合わなければ間違いない落命していただろう兄弟に対し『救命』という選択が公使できたのだから、結局は金の力だった。

このヘヴァナルガンドの医療ポッドでなければ生還できたかもわからない。たとえばヘイサリビのような三百年前に開発されたモデルで、大したアップデートもされていないメディカルナノマシンでも救えたかは五分である。

アルミリアにとって従業員に十分な医療を保障することが当然の義務でも、傭兵が使い捨ての肉盾にすぎない火星では破格の厚遇だ。それが現実であり、この醜悪な世界の『常識』だ。

「ここで動いても無駄に潰されるだけだ。俺らの仕事はお姫さんの護衛なんだぞ？ このヘヴァナルガンドを墜とさせろわけにはいかない。命令は『待機』だ」

「団長だったらっ……こういうとき意味のある仕事にしてくれただろ！ なあ、くれよ、意味を！ 作ってくれよライド!!」

つかみかかる手も、すがるような目にもライドは取り合わない。

トロウの剣幕に圧されることもなく、ただまっすぐに見つめ返して宣告する。

「俺はオルガ団長じゃない」

宣言に続いて、空白。時間が止まったような静寂が降りた。見開かれた目がやがてぱちくりと瞬く。しぐさはいつにも増してあどけなく、トロウを幼い少年のころの面影に押し戻したようだった。

そっか、と、嘆息する。

「……俺ずっと、ライドは団長になるんだと思ってた」

どこかすつきりした顔で、トロウは大きく息を吐きだす。久しぶりの深呼吸、視界が澄み渡って行くような感覚。何度も握った手のひらに、突き刺さり続けた爪の痕。憑き物が落ちたような心地だった。

「でもライドはライドだ」

俺が間違ってた。——そう穏やかにむすんだ言葉に重ねるように、アラートが鳴り渡る。艦内のランプが弾けるように赤く染まる。

警告音の大合唱に身構えたそのとき、ブリτζジからアナウンスが響いた。

『艦隊規模のエイハブ・ウェーブを捕捉！ 総員、ノーマルスーツを着用してください——！』

ウタの声が尻狭みに遠のいたのは、イーサンがマイクを奪い取ったからだろう。

『パイロットは全員MSで待機だ!! いいか、逸って飛び出すんじゃないぞー!』

『警戒レベル最大! アリアンロッドの、おそらく本隊です……!』

「なんだって……!?!」

待ち受ける敵は、アリアンロッドの艦隊が第一、第二——、うごめく機影の最奥にはスキップジャックが泰然と構えている。いつの間に接近していたのか、このヘルーナ・ドロップを丸ごと吹き飛ばせるほどの戦力だ。

三十分以内に開戦可能な距離で、支配者の銃口は狼の群れを殲滅し

ようと待ち伏せている。

## 020 インプリント

医務室に緊張が走る。動揺がへヴァナルガンドへ艦内をすみずみまで揺さぶり、駆け巡るアラートと心音の境界が曖昧になる。

ウタが冷静さを振り絞ったような声で読み上げるには、敵艦は十一隻。

威力偵察から戻った実働4番組のへスピナ・ロデイへ隊は、うち八隻のハーブビーク級戦艦がブリτζを格納し、好戦的な艦首をこちらに向けている状況を確認してきたという。

指揮官を持たない4番組は、今回こそへウルヴへズナル混成小隊へに組み込まれているが、もともとはドルトコロニーの貧民街に生まれた元ヒューマンデブリたちだ。鉄華団のことも、両親の仇である月外縁軌道統合艦隊のこともはつきりと記憶している。ライドが先導して住処を奪った連中への報復も果たした。彼らが憎き仇の姿を見紛うことはないだろう。

……囲まれている。月面基地からの距離を鑑みれば決して展開不能な作戦ではない。資金力にものを言わせた物量戦はギャラルホルン特有のお家芸である。

しかし、どういうことだ？ 補給用らしき巡航船が後ろに四隻控えていて、その中央では赤いヨルムンガンドを載くスキップジャック級戦艦へフリズスギヤルヴへの威風堂々と蛇睨みを利かせているとは。

「アリアンロッドの旗艦が、なんでこんな作戦に……」

ラストル・エリオン公の座乗艦がわざわざ出てきたのは、正直に言って想定外だった。

この船がギャラルホルンという組織の中でどのような位置づけになっているのかはライドの知るところではないながら、へヴァナルガンドへ自体は既にアルミア・ボードウィン嬢に売り渡したはずの品物だろう。現品を渡さず踏み倒し、漂流させた経緯がどう改竄されたにせよ、敢えて本丸を差し向けてくるほどの価値があるとは思えない。

警告が赤々と照らしだす医務室の中で、ヒルメがライドを振り返



る。

「なあライド、やっぱりへヴァナルガンドの索敵システムに細工がされて——」

「その話は後だ。火器トリガーのロック解除だけでも間に合つてよかつた」

言い聞かせるように首を振る。火器管制に何らかの問題が発生していることはへヴァナルガンドを回収してすぐにイーサンが発見し、メカニックが解除・再装填を行なった。カズマの報告によれば主砲を含む全ミサイルが昨日までに修繕されている。

リーダー、通信システムその他——まだどこかに時限爆弾が潜んでいる可能性はなきにしもあらずだとしても、再確認に宛てる猶予はない。少なくともこの船はハーブビーク級戦艦として艦隊戦に臨めるスペックにまで蘇っている。

ただ、補給の宛てがないのは痛い。互換性のある弾薬をへセイズから運び込むこともできなくはないが、それならへセイズを戦闘に出したほうがよほど有用だ。ウタとイーサンの腕があれば砲弾の雨さえくぐり抜けられる。

とはいえ、ビスコー級クルーザーでは防御面があまりに心もとない。

(どうすればいい……！)

一体どうすれば、この場を最小限の犠牲で切り抜けられるのか。焦りを拳で握りつぶし、ライドは思考を駆り立てる。正直なところ、作戦立案はあまり得意ではないのだ。へマーナガルス隊でも知略に秀でるのはエンビくらいで、彼の助言も今は頼れない。目を覚ます気配のないエンビを戦闘に巻き込んでいいものか、答えが出せない。

そのときだった。

医務室の扉が開き、白い子犬が弾丸のように駆け込んでくる。

「俺たちが出ます！ 船の護衛はへガルス小隊の仕事だ！」

「ギリアム……？」

モビルスーツ

MS デツキから走ってきたのだろう。怪我人をすぐに收容するためか、医務室は搬入口から一本道になっている。ヒューマンデブリたちの生活拠点は宇宙港へ方舟から戦艦にやってきてもやはりMS

のすぐそばだ。

マーナガラム実働2番組ことへガラム小隊はギリウム、フェイ、エヴァン、ハルという四人のMSパイロットを中心とした編成で、子供ながら相当に腕が立つ。

かつては奴隷のお仕着せであつた錦鯉色のノーマルスーツ姿で、小さなリーダーは勇猛果敢に胸を張る。

「出撃の許可を！ 相手はへダインスレイヴって武器を持つてるんでしよう？ 宇宙ではいつ使われてもおかしくないって、……エンピさんに教えてもらった。ハルの知識チツプによれば、あれはリアクターに吸い寄せられてくるから、ちよつと避けたくらいじゃ意味がない」

「……何が言いたい」

色の異なるグリーンアイズが睨み合う。赤く染め変えられた空間にあつて、二対の緑色だけは昏く鋭く、光を飲み込む闇のようにある。

「俺たちが囿になります。ひとかたまりになつてれば、被弾するのは前衛だけだ。俺たちデブリであなたたちの道を作る」

「仲間を盾にしようつてののか？」

「そうです」

「死ぬぞ」

「覚悟の上です！」

「……死にたくないやつもいるはずだ」

ライドがうめく。しかしギリウムは動じない。

「いました。戦わない道を選んだやつは、最前衛に出します」

「なんだつて——？」

物騒な物言いに、ざつと血の気が引くようだった。戦わない道を選んだやつ、その言葉に覚えがあつたからだ。

いつだったかギリウムを連れて地上へ降りたとき、学校に通う古い仲間を訪ねたときのことだ。小高い丘の上に厳然と建つ寄宿制の私立校にライドはギリウムを同伴させた。

あのとき車中で交わしたやり取りが脳裏を過ぎる。おぞましい予想が背筋を這い上がる。

「もしかして、おまえ、……」

「銃弾を解体して、中身を食わせるんです。そうしたらみんな言うことを聞く」

「おまえは……っ、」

衝動的に一步踏み出せば、白いノーマルスーツで覆われた両肩がびくりと跳ね上がる。

ふと、嫌なことに気付いた。冷たい汗が伝う。

ギリアムが、ひとりしかいないのだ。いつも半歩遅れて付き従っている両翼が見当たらない。両脇はいつもいつでも腹心と片割れのふたりで固められていたはずだ。そっくり同じ顔をした双子の弟は、MSを降りた瞬間から兄貴のそばを離れなかったはずだろう。

「……なあおい、エヴァンはどうした？ いつも後ろをちよろちよろついてくる、お前の——」

命令よりも早く実行に移す、3番機のパイロットは。

ぐつと呼吸が詰まり、悪寒に指先がわななく。ああ。こいつらは不条理なくらい有能な番犬だ。片腕はどこエヴァンにいて、何をしているのか。雄弁な緑色はもう語っている。

腰抜けどもを薬漬けにしているころだと。

「な　んてことを………ッ!!」

激昂をギリアムにぶつけてしまうまいと堪える両手が御しきれない感情にわなわなとふるえ、ライドは幼い両肩を掴んだ手をほどこくことができな

い。目と鼻の先でどنگり目がキョトンとまたたく。ライドとは異なるグリーンアイズがおろおろと迷う。怯えそうになりながらもリダー然と両足を踏ん張って立っている。

なのに、口が達者なギリアムが並べ立てるのは今日に限って見当はずれな言い訳だ。

「ど　うして、な……で、怒るんですか？　俺、なにか間違えましたか？　あれがMSめがけて飛んでくるならっ、MSを一ヶ所に集中させて狙わせればいい！　俺たちで、守ります。何が、どこが、間違っ

……っ」

こぼれ落ちそうな双眸に涙の膜がふくれあがる。すぐに涙目になる弟と見紛うが、間違いなく兄ギリアムのほうだ。

人望のある小さなリーダー。幼い日のオルガ・イツカとはこんなふうだったろうかと思わしめた統率力、ヒューマンデブリとして生き残ってきた経験に裏打ちされた戦闘力と、臨機応変かつ緻密な連携。その要。そんなギリアムだからこそ、今このタイミングであっても気付くことができたのだろう。

全員を生かしたかったライドの意図を読み取り、己の犯した過ちを自覚することができてしまった。頼りなく垂れ下がる黒髪を振り乱して、しかしギリアムは現実を拒絶する。

「でもっ俺は、俺たちは間違っつてない！ おれたちのつ命も、魂も、全部あなたがくれたものだ！ だからひとつ残らずあなたのために使っつて何が悪いんだ!!」

泣き叫ぶ姿は頑是無い子供がだだをこねるさまそのものだ。こんなときでもなければ、こんな内容でさえなければ、ようやくみずからの確固たる意志でワガママを言ってくれたと微笑ましく喜ぶこともできたろうに。

——あいつらは戦わない道を選んだんだ。

戦場を去って学校へ行く選択をした子供たちのことをライドはどのように評してしまった。

言葉を多く知らないギリアムの前で、だ。礼儀正しい口調に騙されて気付けなかった。この子は学校に通ったこともない、へハーティ小隊の兄貴分に教わるまで文字のひとつも読めなかった、たった十三歳の子供ガキなのだ。

ライドが何か他の表現を選んでいたら、ギリアムが『不戦』と『薬物』を結びつけてしまう悲劇は起きなかつたかもしれない。就学率向上のためにドラッグを与えられていた仲間たちのことを、薬物中毒にされて然るべき生け贄の羊なのだを受け取らしてしまったのは、あの日、あのととき水面下で起こっていたデイスコミュニケーションに気付けなかつたライドの責任だ。

だからアリアンロッドという巨大艦隊を前に恐れをなした仲間を最前衛に出して『楯』にし、戦う選択をした残りが『剣』となってダインスレイヴ隊と直接交戦するだなんて非人道的な作戦を立案させてしまった。

目端の利くギリアムは、アリアンロッドとの戦力差をよくわかつている。もともと生きて帰ってくるつもりはないのだろう。幼くとも〈ガルム小隊〉を率いるために兄貴分の教えを乞い、戦術家として成長してきたからこそ、こんな捨て身の特攻にも希望を見出せると考えてしまったのだ。認めるのは業腹だが、練度の高い〈ガルム・ロディ〉四機ならば、あるいは、〈ダインスレイヴ〉の射線上を遡って砲台を直接叩くことだって可能である。

命を捨てれば目的は達成できる。確かにそうだ。その通りだ。

だからって、こんな仲間を使い捨ての道具にするような決断をしてほしくはなかった。

不甲斐なさで潰れそうなライドの背中に、トロウの声が投げかけられる。

「……団長だったら、そう指示するんじゃないやねえかな」

「トロウ……お前まで何言い出すんだよ」

「オルガ団長だったら、きつとバルバトスが進む道を開けて命令する。それが一番成功率が高いからな。でもライドは、団長でもあるし三日月さんでもある」

鉄華団という群れの父であり母であり、居場所であったオルガ・イツカ。彼の剣となり、エースパイロットとして先陣を切った三日月・オーガス。

今のライドは〈マーナガルム隊〉のリーダーであり、唯一ガンダムフレームを駆るパイロットだ。統率者として長期間火星を離れることはなかったが、潜在的な戦闘力において〈ガンダム・アウナスブランカ〉は、〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉をはじめとする全MSを上回るだろう。

一拍の間があつて、ヘルメがため息めいて首肯する。トロウの諫言を引き継ぐようにタブレットを伏せて立ち上がった。

「ライドは『俺のために犠牲になれ』って言えないんだろ」

「団長だつてそんなことは言いたくなかったはずだ！」

「でも団長は言いたくないことも言ってきた。鉄華団のために、ひとりでも多く生き残ってでっかい未来をつかむために。俺たちの居場所を守るために。オルガ団長は命令をくれた」

「だから俺にもそうしろっていうのか……!?!」

「できないのか?」とトロウが剣呑に双眸を眇める。

「逃げも隠れもできない状況だ。腹決めるしかない、そうだろ?」とヒルメが追い打ちをかける。

「俺たちを使ってください! あなたがいたから、俺たちデブリは今日まで生きてこれたんだ……!」

涙を拭うことも忘れたまっすぐな目が、総大将を——ハリボテの恩人を——見上げてくる。失念していた。潔くヒューマンデブリとしての運命を受け入れ、待遇に不満を抱かないギリアムもまた、この世界が望んだ『いい子』だったのだ。

文字を覚えて本を読むことを覚えても、なぜか戦術ばかり学ぼうとする。拾ったときから暗算の速い連中だったが、武器や弾薬、生き残りと遺体袋を数えることに長けていただけだ。めまいがした。

年長者には敬意を払い、どんな不条理な仕事も喜んで引き受け、愚痴ひとつこぼさずキツチリやり遂げる。判断力に長け、戦闘力に優れ、その幼い身が持てるすべてを使って役に立とうとする、あまりにも都合のいい子供たち。

これまではヒューマンデブリだったかもしれない、でも俺たちはこれから未来を作っていく戦友なんだと説いたつもりでいた。ただ、鉄華団残党『強硬派』にはアイデンティティの上書きに対して強い抵抗感があったせいで、もうヒューマンデブリじゃないんだとは言えなかった。それが使い勝手のいい消耗品だという歪んだ自認であつても、お前は間違ってるだなんて口が裂けても言えなかったのだ。

そして、これがその報いなのだろう。

これまで立っていた足場がガラガラと崩れていくようだ。いや、ライドははじめから、血塗れた瓦礫の上に立っていた。

「俺たちはデブリだ。他に何の役にも立たないゴミクズだけど、戦うことはできる。戦わせてください！ 宇宙は俺たちの持ち場です！」  
「そんなことをさせるために、俺はおまえらを呼んだわけじゃねえ……ッ」

「俺は、頭悪いから……あなたの目的をわかれなかつたけど。でもあなたは、ヒューマンデブリは宇宙で生まれて、宇宙で散ることを恐れないって、言ってくれた！ あなたのために戦えることが、今、こんなに誇らしいんです」

つたなく健気に、ギリアムは戦死を覚悟している。違う、それは俺の言葉じゃないんだ——と懺悔を述べようにも、今さら遅い。

エンビが与えてくれた戦術を生かしたいと真面目な小隊長は果敢に殊死を願い出る。トロウが伸ばしてくれた連携の業を、ヒルメが掬い上げてくれるまで弱かった仲間たちも、今ここで力にしてみせたいと奮起している。

同時に、小さなリーダーの表情には物悲しい翳りもあった。

ギリアムたちは物心つくより前に一山いくらで海賊に買われ、使われ捨てられてきたヒューマンデブリだ。遡る限り古い記憶の中では既に戦場という水槽にいた。麻酔もなしに阿頼耶識のピアスを植え付けられ、MSのコクピットで無理やり接続されて急ごしらえのパイロットになっていた。

生きるだけで精一杯の日々を過ごしていたら、どこか遠く遠い世界の真ん中のほうでは、偉い人がへヒューマンデブリ廃止条約なんてものを作っていたらしい。唐突にデブリ狩りがはじまった。当事者たちは何が起こったのかもわからないまま戦場を追われ、干上がった水底でもがいていた。

そこへ水を注いでくれた、酸素を与えてくれた恩人がライドだ。見出されてモニターク商会に匿われなければ遅かれ早かれアリアンロッドの強制査察に暴かれて、正義の銃口の前にゴミのように散っていたに違いない。

〈マーナガム隊〉に迎えられ、戦闘経験を買われて実働2番組というシエルターを与えられ、世界のことをたくさん学んだ。あたたかい食

事、静かな寢床、穏やかな日々を満喫した。

その中で失ったものもある。

ここには、いつ何時なんどき殴られるかわからない緊張感がない。失敗すれば宇宙に投げ捨てられる不安がない。息を殺していなければならぬ焦燥も、閉塞感もない。誰にも害されないどころか、定時になれば弁当を配ってもらえる。相変わらず人殺しを生業にしている兵隊なのに、与えられる作戦はいつもぬるま湯のように易い。

任務の中で対峙するパイロットなんていつもへなちよこで、ギリアムたちへガルム小隊の敵ではなかった。

なのに帰還すれば大げさなくらいの歓迎を受ける。ライドやアルミリアに過剰なくらいに労われる。

それが申し訳なくて、くすぐったくて、嬉しくて、意味がわからなくて苦しかった。

〈マーナガルム隊〉を率いるライドには感謝することばかりだ。〈ハーティ小隊〉の兄貴分たちから教練を受け、戦術は驚くほど多彩になった。読めない文字は教えてもらえる。得意なことは褒めてもらえるし、弱くても死なないように鍛えてもらえる。混乱する仲間もいたが、その困惑ごと抱きしめてもらえる。

日常は様変わりし、やさしさに飼い慣らされた番犬たちは徐々に士気を下げていった。

次また頑張ればいいと赦してくれるヒルメに甘えてしまう。歩けないときは抱き上げて運んでくれるトロウに頼ろうとしてしまう。

みんな子供なのだ。〈ガルム小隊〉の平均年齢はいまだ十二歳に満たず、誰も彼もがギリアムのように責任感が強いわけじゃない。二十名ほどいる隊員の中では十四歳のフェイが最も年長で、その次がギリアムとエヴァンの双子である。やっと齡二桁に足を乗せた弟分たちもいる。みなライドが大好きだ。〈ハーティ小隊〉の兄貴分を心の底から慕っている。

ギリアムを頂点とする指揮系統がまともに機能する時間はもう長くないだろう。

時限爆弾が爆ぜるように戦場で犠牲が出はじめたら、ギリアムの信



用はがらがらと音を立てて崩れ去る。

タイムリミットを前にして、これが最後だと決意した。  
今こそ全滅の時だ。

穴だらけだった欠陥品はあたたかな手で修繕されて、すっかり自由にはしやぎ回れるようになった。餓死を想定することさえ忘れそうなくらいに食事を与えられ、毎晩のように穏やかな眠りを得た。思考はすつきりと晴れ渡り、驚くほどの万能感がある。

けどライドたちが求める居場所にたどり着いたとき、きつともう〈ガルム小隊〉は生きていない。仕事をするにもギリアムたち戦場育ちの子供には、理想や志は大きすぎてつかめないのだ。この両手で握れるのは、トリガーという名の暴力のみ。汚泥の中を泳いで生きてきた屑<sup>デブリ</sup>には、夢や希望なんてまぶしすぎて直視できない。

だからすべてを託して死んでいく役目が欲しい。道を切り開くという大役を全うし、未来に続く礎になれるなら本望だ。ライドたちなら骨を拾ってくれると確信できる。葬式をあげ、死を悼み、魂があるべき場所へ還れるようにと祈りを捧げてくれるのだろう。たとえここで死んでしまっても、屍は決して無駄にはならない。

もう何も怖くないのだとギリアムがはにかむ。不器用な笑顔だった。

涙の名残に揺れる緑のひとみは、すつきりと晴れている。

「あなたのいない世界に、俺たちは生きられない」

幼い番犬<sup>ガルム</sup>が吐露したのはじめての弱音は、あの夕焼けの中でライドが抱きしめたかった情動そのものだ。

七年前、鉄華団が壊滅した記憶が蘇る。フラッシュバックする。あのときライドは、団長<sup>あなた</sup>の描く未来のために命ごとすべて捨てる覚悟があるのだと、喉を振り絞って叫びたかった。オルガ・イツカの吊い合戦に何もかも擲つことが望みだった。

ずっと違う色合いだと思っていたグリーンアイズは、かつてのライドと鏡写しのようによく似ている。時間の流れに押し上げられるよ

うにライドは成長し、見下ろす立場になった今、類似性が痛いほどよくわかる。

無力と武力だけを併せ持つ孤児<sup>オルフェン</sup>たちは戦場を出て生きる術を知らず、無垢なる期待はひたむきに、名誉の戦死を望んでしまう。

これが鉄華団団長オルガ・イツカが背負ったプレッシャーか。

双肩を押しつぶしそうな重圧に、ライドは我知らずぐらりと一步後ずさる。他に行く場所を持たない子供たちの『世界』のすべてになるということが、その恐ろしさが、七年ごしにようやくわかった。

俺の仇を取ってくれと言ってほしい。

地下通路を越えてたどり着いてくる仲間を待つ間じゅう、ライドの脳裏をよぎるのはそんな血なまぐさい願望だった。

団長が目の前で撃たれ、ほどなく死亡が確認された。遺体は奥の一室に安置されている。チャドは右肩を負傷し、ククビータによる手当を受けているところだ。応急処置しかできないから、できる限り早く医者に診せるようにとのことだった。

無傷で済んだライドは伝令として、鉄華団本部基地からクリユセの発電施設へ続く地下通路のほとりで仲間の合流を待っている。

トンネルの向こう側では今も開通作業が進められている最中だという。こちら側から確認した行き止まり地点の座標を知らせれば、何時間もしないうちに風穴を開けられるとの返事があった。歩いて二時間ほどの距離だというが、——二時間は、長い。

待っている時間は、ただでさえ長く感じられるのだ。胸郭に鉄球を詰め込まれたような重みを感じ、ライドは血に汚れたジャケットの合わせをつかんで、握る。

一刻も早い合流を待つライドの胸に傷はなく、残されたものは何もないのだと実感させられてしまう。

鉄華団が大きくなって外回りの仕事が増えたオルガは、団員からの説得を受けて防弾インナーを着るようになってくれた。当初は筋が通らないだの、家族が頑張ってる中で俺だけ着るわけにいかないだの言って拒んでいたオルガも再三の要請を吞んで、スーツの下には防弾インナーを着用していた。

ところが弾丸は無慈悲にもオルガを貫き、守られたのはライドだけだった。

団長を失えば鉄華団は総崩れになると説得して説得してやつ

と着せた団員の願いの結果だというのに。オルガは防弾インナーを着ている自分自身を楯として使ってしまった。

CGSでそうだった癖が今になって現れたのかもしれない。全身に根を張った自己犠牲精神がそうさせたのかもしれない。広い背中に浴びせられた銃弾は内臓を手ひどく傷つけ、いくら止血したところで体内での出血までは止められなかった。メデイカルノマシンのあてもない。とうに人払いが済んでいたという市街地のど真ん中、また撃ってくるやつらがいなくても限らない。本部基地はギャラルホルンに包囲されていて救援など呼べる状況ではない。マクギリスの協力があつてどうにか包囲網を突破してきたのだ。

メリビットを同伴していればオルガは助かったかもしれない、と願ってしまう心を、握りつぶすようにジャケットの胸許を握りしめる。

医者は全員とつくに辞職していて、唯一医療行為ができるメリビットは本部にいる。先日の戦いで多くの怪我人が出たから、そいつらを基地から運び出す態勢を整える役目があるからだ。担架にも人員にも限りがある中で、全員どうにか担ぎ出して地球まで連れて行けるようにギプスをあて、包帯をまいて、ライドたちの待つクリュセ側まで逃げ出してきたもらわねばならない。全員で生き残るというオルガ・イツカの遺志を継ぐためには、まずメリビットに無事でいてもらう必要があつた。

今ごろは傷に適切な処置を施し、怪我の具合によって移送の役目を割り振るといふ最後の仕事をこなしているはずだ。

意識が戻らない団員もいる。脚を失って動けない団員もいる。眼球が傷つき、目が見えなくなった団員もいる。

担架が必要か、無事なやつが背負つても大丈夫か——といった繊細な判断は、医療に通じているメリビットにしかできない。

もしも彼女をこっちに連れてきていけば、怪我人たちは助からないだろう。動けないやつらは爆破する本部基地に置き去りだなんてCGSの一軍みたいな判断を、鉄華団が許すわけがない。

だけどオルガ・イツカが死んでしまったら、団員が何人生き残れ

たつて一緒じゃないかと、思ってしまった。

胸郭の中身をこっさり抜かれたように呼吸ひとつが重苦しい。喉が悶える。知らず涙があふれてくる。顔ごと袖でぐいぐい拭って、息を吐く。鼻水をすすった。

(……もしも団長が弔い合戦を望んでくれたら、俺たちは戦うのに) 最後のひとりになるまで、ギャラルホルンの喉笛を食い破ろうとあがいてやれるのに。

なのに、記憶の中のオルガ・イツカの声をどのようにつきはぎしても、自身の仇討ちなど命じてくれそうにないから感情の置き場がなくて、憎しみのやり場がなくて、苦しい。

あの声が命令してくれるなら多くの団員が命を捨てる覚悟で、最後まで戦う用意があるだろう。報復を許してくれるなら全員で討って出て、全滅したつて本望だ。あの黒服の連中がギャラルホルンの手先だったかどうかはわからないが、違つたつていい。みんなで戦つてみんな死ねば、そんなことはどうでもよくなる。オルガ・イツカの手の中には、恩義ある団長のためなら命など惜しくない兵隊たちがこんなにも多くあふれている。

戦つて戦つて、やれるだけのことはやつたと胸を張つて鉄華団が潰えるなら、それはそれで悪くないはずだ——と、ライドはそう思うのに。

あの人が戦え、仇を討てとけしかけるビジョンが浮かばなくて、余計に泣きたくなつてくる。

危険な仕事をしているという自覚のもとでも、団員が生き伸び、生き残る未来しか願つてくれない。そんな団長のもとだから命をかけて戦えるという矛盾が、彼をひとりで死なせてしまった。

団長。——ライドは目を閉じて呼びかける。

(あんたがいなくなつた世界で、俺たちは何のために生きていけばいいんですか)

## 第七章 死すべき運命の戦乙女

### 021 リブート

一体誰が、何の目的でこのような事態を招いたのでしようか。わたしは、その答えを持っていません。我々火星連合政府にも責任の一端はあるでしょう。すべての人々に等しく教育の機会を与えようと尽力したはずの行政の……いいえ、学びによって力なき子供たちを救えると妄信してきたわたし自身の見通しの甘さに、忸怩たる思いです。

わたしは昔、こんな演説をしました。長く続いた厄祭戦のあと、火星では四つの経済圏による分割統治が始まったこと。その結果、火星に貧困が蔓延し、子供たちが犠牲になり続けていること。ヘノアキスの七月会議に登壇したときのことです。あれからもう二十年近く経つなんて、信じられません。

ポスト・ディザスター  
P D 三十四年、七月……あの日、火星は冷たい冬に閉ざされて  
いました。

この赤い惑星に生まれ育ったわたしは、幼い正義感のままに行動していました。その結果、多くの犠牲を呼び込みました。それでもわたしは『希望』になりたかった。当時地球圏の植民地であった故郷の経済的独立を夢見、不平等条約の改正を求め、〈革命の乙女〉と呼ばれました。ギャラルホルンから武力による警告を受けてもなお、子供たちが、すべての人々が、不当に搾取されない世界を望みました。

やがて火星ハーフメタルの公正取引は実現しました。  
そして革命の狼煙が空へと昇ったあの日のことを、わたしは今も昨日のこのように思い出します。

何かを成し遂げようとするとき、必ずどこかで、理想を異にする他者とぶつかります。

その中で、傷つく人々がいる。けれど衝突を回避することばかりが平和的解決ではないと、わたしは学んだはずでした。

幸福とは、黙って従うことを対価に与えられるものでしょうか？

……いいえ、違います。しあわせに生きるために他の誰かに負担や

忍耐を強いる時代は、もう終わりにしましょう。

我々の足許には、無数の血と汗と涙、そして犠牲があります。それを『歴史』と呼ぶのです。あなたの足許にも、わたしの足許にも、先人たちが作り上げた尊い大地があります。その足が踏みしめているものは、ただの床フロアではないのです。

どうか世界を知ってください。今を生きる人々の声に耳を傾けてください。生きるうちに犠牲者たちを踏み躪ふみつてしまうその足を、今からでも、どけることができます。

ひとりひとりの勇気が、あなたがた自身や、子供たちの未来を守るのです。

今回の一件では多くの方が深く傷つきました。しかしわたしは今一度問いたい……！ 誰もみな、罪を抱えて生きています。罪とは、赦されるものではありません。責められるものでも、罰されるものでもありません。償うものです。

ともに考えましょう。生きるために罪を重ねてきた過去を、その責任を。どんなに時間がかかっても、真実を見つめたその先にこそ、誇れる未来があるはずです。

わたしはクーデリア・藍那・バーンスタインです。

もし、このわたしが火星連合議会の長にふさわしくないとと思うなら……、構いません。

みずからの手で武器を取り、みずからの責任によってわたしを殺しにおいてなさい！



全宇宙に向けた高らかなる演説は〈ヘセイズ〉のブリッジにも届いていた。モンターク商会のオフィスが炎上した事件が地球や各コロニーで報じられたらしい。

落ち延びた従業員の男女数名（人数未公表）は火星連合政府機関で

保護されたらしく、トド・ミルコネンの動向がうかがい知れる。留守を預けてきたアルミリアつきのメイドたちの無事も連合側で保障してくれるだろう。

ギャラルホルンの強制査察でもドラッグの類いは一切発見されなかつた事実を知る証人が、クーデリアの手許に揃つた。タントテンポからも、アバランチコロニーの農業プラントにドラッグの原料を栽培する余裕などないと発表。もとよりアリアンロットの職域を拠点とする組織だ、タントテンポは〈アリアドネ〉の監視網を欺く手段を持つていない。

一週間の沈黙を守つてきたクーデリア・藍那・バーンスタインは、議長の様子を蹴飛ばしてでも立ち上がることを選んだ。

「革命の乙女」、完ツ全復活だ！」

イーサンが拳を握る。高揚である。クーデリアはこれからまた『子供たちが不当に搾取されない世界』のために動き出すだろう。政治家として不可能なら活動家として行動を起こす。

彼女の掲げる旗の下には、各植民地で今なお不条理に晒されている労働者たちが集う。

あのモンターク邸は元来ギャラルホルン高官御用達の高級娼館であり、火星圏に赴任する将校のため子供たちが搾取されてきた生け贄の館だ。二十年ばかり前に突如社長が交代し、実質的な廃業状態にあつた理由も〈マクギリス・ファリド事件〉でイズナリオ・ファリドが嬉々として語つた過去から推し量れる。

火星の路地裏で金髪碧眼の美少年を見繕つて誘拐し、商品として〈ヴィーンゴールヴ〉に輸出してきた過去は、これまでなら被害者側だけに刻み付けられた古傷だった。

それをアルミリアは、加害者側の罪科として弾劾しようとしていく。

マクギリス

夫の仇討ちと言えばそれまでの報復行動だろう。しかし自由平等を目指すアルミリア・ファリドの志は、構造的搾取解消を願う〈革命の乙女〉クーデリア・藍那・バーンスタインと利害の上で一致する。

報道に踏み切つた各放送局にどういう皮算用があるにせよ、賽は振



られ、一大スキャンダルは全世界にぶちまけられた。これまでギャラルホルンとは『正義』であると疑いもせず信じてきた民衆の鼻先でオブラートを剥ぎ取ってやった格好である。

犠牲を犠牲ともわからないまま屍肉を喰ってきた民衆は、この世界のおぞましさに恐れおののくだろう。

ギャラルホルンによって守られてきた平和とは、肉食者のための楽園だ。

食卓の肉にも命があることを想像しなくていい世界。植民地に生きる人型の家畜から削いだ肉を喰らって生きている『現実』が目に入らないようプロパガンダを操り、ラストル・エリオン公は無知と忘却に基づく平穩を維持してきた。

足許を見れば無数の死体が転がっている。それが現実だ。それを歴史と呼ぶ。それらを踏み躪って生活しているつもりなど、誰にもない。ほどなく何にもしていないのに罪人呼ばわりされた可哀想な連中が不平不満を爆発させることだろう。

クーデリアに物知らず呼ばわりされた彼らは、人間を殺害したことなどないし、女子供を差別したことだつてない。劣悪な環境で使い潰されて死んでいく労働者たちは宇宙植民地に隔離されて目に入らないし、『女』とはいずれ花嫁になり妻になり母になることを運命づけられた生物なのだと思っていて疑っていない。『子供』とは無邪気で愛くるしく、学校と勉強が大好きで、大人の言うことをよく聞くべき存在であるというプロパガンダを、いつの間にか常識として刷り込まれていることに気付いてもない。

害獣に石を投げることは善意の駆除なのだ。加害ではない。そう信じたから濡れ衣を着せようとする小娘の非常識に憤る。

怒り、激昂することで、自身を守ろうとしているのだ。この手の中のペンは労働者たちが折った骨、このインクは彼らが流してきた血なのだ——と認めてしまったら、まともな神経の持ち主から順に気が狂ってもしようがない。

今朝の朝食は労働者から搾り取った血と汗と涙でできていたと知って、さて幾人が嘔吐したのか。

楽園を踏み潰された罪なき人々。哀れな民を、エリオン公ならば庇護するだろう。それは差別ではない、区別だと。あなたがたは無知ではない、それが正しい秩序なのだ。これまで通りに肉を喰っていられるよう取り計らうはずだ。

ギャラルホルンが支配する絶対安全圏を守ると約束すれば、現状に不満を持たない市民は免罪符欲しさにギャラルホルンを支持する。

鉄華団残党『穏健派』もまた、今の生活を守るために見て見ぬ振りをするのだろう。非戦闘員を数多く抱え込んでいる今の彼らには、加害者に紛れ、迎合することしか身を守る術がない。

一方で、アーブラウ政府は既にクーデリアを支持すると表明しており、……場合によっては東西アーブラウの分裂もありえる。アラスカ・シベリアを分かつベーリング海峡が第五の国境になるかもしれない。

情勢不安は全宇宙へと広がっていく。

それこそアルミリア・ボードウインの描いた地獄絵図だ。

「最ツ高じゃねーか！ イカレてやがるぜ」

「だね。お嬢様って本当、何しでかすかわからない」

ブリッジの双壁が拳をぶつけ合ったところで、開け放してあった扉の前で靴音がふわりと足を止めた。振り向けば、女騎士から借り受けてきたギャラルホルンのパイロットスーツ姿。薄すみれ色の長い髪が慣性に流されて揺れる。

「正気ゆえです。ノアキスの七月会議のクーデリア……、彼女の志を信じていました」

青く澄んだひとみが、メインモニタの中でフラッシュを浴びるへ革命の乙女を見上げる。

地球圏はこれまで植民地の献身——いや、蹂躪を大前提とした豊かさを享受してきた。十年前のドルトコロニー事変ですら、アフリカンユニオン側が労働者の待遇改善を提示したことは反発があった。

人々は変化を嫌う。地球出身者とコロニー労働者が平等に評価されることに難色を示す声は少なくなき、現状維持のために不穏分子を武力で一掃することは正しいのだと、アリアンロッドは支持を集め

た。

労働者が黙って我慢していれば物価の上昇はなかった。工場の稼働時間が短縮され、ドルトコロニーの生産量が激減したせいで流通業は大きな打撃をこうむった。経済は停滞し、これまでなら無償で手に入ったようなシロモノにまで対価を要求されるようになったのである。収入は変わらないのに物価だけが上昇し、市民は植民地への反感を強めた。

待遇改善を求めるよりも波風立てぬよう耐え忍ぶことが『平和』と結論づけたのだ。

そんな狂ったスタンダードを、今こそ覆さなければならぬ。

罪悪感という病理が世界を侵し、やがて内側から腐り落ちてしまえばいいのだ。『無知』という麻酔を取り除かれて、みんなみんな、喉を掻きむしって苦しめばいい。

（わたしはセブンスターズの一家門、ボードウィン家の女。だからこんなにはひどいことだってできるのよ）

アルミリアのまつすぐなひとみに相反して、その指先はふるえている。血色をなくした少女の横顔を見とめて、イーサンが目を丸くする。ふうと肩をすくめた。

人類はみな罪人であると知らしめた奇策のおぞましさを彼女は知っていたのだろう。承知の上で、この地獄の選択を背負って立つ気でいるのだ。

「すいません。褒め言葉には、聞こえなかつたですよね」

いかれている、という言葉はアルミリアの耳に入れるには少々不適切だった。足場が崩れ、揺らぐ恐怖のただなかにいる彼女にはなおさら、非難めいて聞こえてしまったに違いない。

苦笑したイーサンは鉄華団育ちゆえ、伶俐な顔かたちにして物言いは何とも粗暴である。〈ハーティ小隊〉の面々はみな丁寧語も使えないが、兄貴分譲りの荒くれた語調は、ある種の合言葉であり、仲間内に残された数少ないアイデンティティだ。思い出、とでも評するのがきつとふさわしい。

意図を察したのかアルミリアがぱちくりと大きな目を瞬かせて、そ

して「いいえ」と首を振った。

文化の壁の向こう側で、ようやく賛辞を受け止める。

「でも、そうね。言葉だけではわからなかったかもしれないわ」

「次から気をつけます」

「わたしも、早とちりしてごめんなさい」

穏やかなやりとりは、やはりガラスを挟んだように近くて遠いままだ。傍目には良家のお嬢様がチンピラに絡まれているような絵面だというのに、和やかさが奇妙に絵画じみている。ブリッジの扉は開いたまま、内側と外側とを隔てる透明なガラスなどない。ただ、お互い立ち入ることのない境界線ポーターラインが厳然と横たわる。

〈セイズ〉はこれから戦闘に出るのだ。

接敵まで残り十五分を切っている。雇用主に歩み寄ったウタがほとんど首を傾げた。

「で、お姫様はどうしてここへ？ この艦はもうすぐ出撃しますよ」

「これを持ってきたんです。——あの、どうかご武運を」

白魚の手が差し出したのはオリガミの花だ。エンビの病室に持ち込まれた『お見舞い』と同じ、色とりどりの造花の一輪。花を支えるようにチヨコレートが添えてある。

紫色だったのは偶然なのか、弁当配り用のがま口バッグの中にはあふれんばかりの花々が赤白黄色と咲き乱れている。

「これは？」とウタは無遠慮に指を差す。

「お守りです。気持ちだけでも応援できればと、みんなで作りました」  
母艦へヴァナルガンドの中枢ブロックで退屈している美少年たちの気を紛らわせるためにもと、オリガミを教えたり、みんなで勉強を試みたり、アルミリアも手を尽くしている。

薬漬けにはされていない彼らの存在は〈モンターク商会〉の営業状態のクリーンさを証明する証拠になるだろう。利用することに心苦しさもあるが、どちらにせよ死なせるわけにはいかない。

不注意のせいで失ってしまったリタのような犠牲は、もう二度と繰り返したりしない。

〈マーナガルム隊〉の面々も同じだ。戦いの中で血が流れることは必

然かもしれないけれど、もう一滴の血も無駄にならないように。

願うことしかできないなら、伝える手段は惜しまない。

「どうも。でも、俺たちは実だけで充分ですよ」

一輪の花をウタがついと受け取って、そのまま薄すみれ色の髪に差した。取り上げたチョココレートの包みだけ指先でかかけてもてあそぶ。〈セイズ〉に積載されていた食糧はすべて〈ヴァナルガンド〉に移したが、生き残った場合のことを考えて各ブロックのコンテナにレーションが備蓄してある。本来は不要な気遣いだ。

それよりアルミリアのほうこそ少しくらい着飾っていたほうがいい。いつでも身綺麗にしていただろう。

商談のためか、愛する夫のためかは当人のみぞ知るところだとしても、モンターク邸にいても、ビスコー級クルーザー〈セイズ〉で火星を発つてからもアルミリアはいつでも清潔なワンピースをまとい、髪を梳かし、穏やかに笑顔を湛えていた。

そのようにありたいと願う姿だったのだろう。

月面基地でリタを亡くしてからは顔色が優れず、つややかな髪にも翳りが見える。

正気ゆえに耐えきれない事態に見舞われた今だって、アルミリアにはアルミリア自身の人生があるはずだ。保護した子供たちのためを思い、雇用した少年兵たちの未来を憂い、気遣いで自分自身まですり減らしていたら本末転倒ではないか。

目標まで見失うほどの献身など求めていない。

ああとイーサンが苦笑する。オリガミの花は髪飾りにしては頼りなく、パイロットスーツにも不似合いだが、少しでも顔色が戻ったなら上々である。

「今の俺らに花は似合わないんでね」

「俺たちだったら、花より狼<sup>ルプス</sup>……いや、エビかな？」

「ははっ、違いねえな。茹でたエビだろ？」

「えび……？」

「七年前、でかくて硬い、エビみたいな船があつたんです。トンカチ頭のサメみたいな船も」

「どつちも喰われちゃいましたけど。華はあつちで現役なんで、あなたがつといてください」

あつちで、とイーサンが親指で指し示したメインモニタでは、クーデリアが記者の質問に答えている。よりいつそう華やかなブロンドを額縁にした白皙の美貌、その耳元で、紫水晶があしらわれたピアスがきらめく。

ライドがデザインした耳飾りだ。

鉄華団がテロリストの汚名を着せられ、そして風化していく流れの中で、ライドはシクラメンを象った鉄の華を彼女に託した。きつと皮肉でもあったのだろう。学校教育によって識字率の向上を目指すクーデリアは、かつてヘイサリビで学のない子供に文字を教えはじめた『先生』だった。

呼ぶためだけにあつた名前にスペルをあて、文字として書き残せるようにしてくれた。宿題を与え、本や手紙を読めるように知恵のハシゴを架けてくれた。

少年兵に読み書きを教えたのは学校ではない、クーデリア・藍那・バースタインなのだ。

十六歳以下だった残党はみな学校に収監されて反知性主義に苦アンチ・インテリジェンスしめられたが、そんな現状は認めがたくとも、クーデリアの志まで否定したいわけではない。

旗として掲げたはずの赤い華は錆びつき、朽ちて形をなくしてしまったけれど、アメジストの種が彼女のもとに残っている。いつか〈革命の乙女〉が教育現場で起きている数々の問題に気付き、対策を芽吹かせれば。火星連合統治下の子供たちの未来だけでも救うことができるはずだ。今ならまだ間に合う。信じている。

「だから俺らに花はもう必要ないんです。お戻りを、お姫様」

アルミリア・ボードウィンは貴族の娘であり、英雄の妹であり、逆賊の妻でもあるのだろう。そのどれかを選ぶのではなく、すべて受け入れて生きるのなら。

狼の群れの行く末を見届ける仕事を、あなたに託していく。

廊下へ、そして母艦中枢へと去っていくアルミリアを静かに見送る。サブモニタで依頼主の退艦を確認して、ビスコー級クルーザー〈セイズ〉はハーフビーク級戦艦〈ヴァナルガンド〉船尾のドックから進み出る。

出撃する船体にはボードウィン家の紋章スレイプニール。乗組員はわずかに残った元ヘイサリビ〈クルー〉たちだ。舵をとるのはユージン・セブンスタークの技巧を体感して育った二名である。

多感な時期にヘイサリビのブリッジオペレーターに抜擢され、背中を見て育ったのは団長オルガ・イツカよりもむしろ艦長ユージン・セブンスタークだった。副団長としてではなく操舵士として、鉄華団の征く道を幾度となく切り開いてきた彼には憧憬だけでは語り尽くせない思いがある。

鉄華団残党『穏健派』の父として戦場を退いてしまった今のユージンに会えば、また傭兵なんて物騒な仕事はやめろと諭されるのだろう。生きるための仕事で命を落とすなんて馬鹿げているとでも。

ギヤラルホルンとの戦力差を鑑みれば、どう戦っても勝てやしない。生殺与奪を握られているなら置かれた状況を受け入れて耐え忍ぶことも、ひとつの人生なのかもしれない。

だが殺されたいだけだけに権力におもねった生き方は命に値しない。

ノルバ・シノを見送ったあの日の悔しさを糧に、この七年間を生きてきたのだ。今度こそスキップジャック級に肉薄し、ヘガンダム・フラウロスに代わって一矢報いてやらなければこのまま生きていたって苦しいだけだ。

モビルスーツ  
MSに取り付かれないようベンジヤミン——ヒルメのヘグリムゲルデ・ヴァンプ〈2号機〉を直援につけ、艦隊の中へ飛び込む。

……こんな捨て身の作戦にライドが領いてくれたのはヘガルム小队の気迫があったからだろう。つくづく、小さくとも元ヒューマンデブリの戦士たちには迫力がある。

齢一桁のころから尖兵として過酷な環境を生き残ってきた生存者たち。戦術に秀でるのは、そうでない命が生き残らなかったからだ。

連携できないパイロットは死んだ。判断力で劣るパイロットはみな死んだ。

少年男娼たちがいやに魅力にあふれているのも、そのように育てられ、それでこそ生き残れたせいだろう。

大人たちが勝手に作った運命ルールに翻弄されて、死というかたちで淘汰されてきた。

「見せてやろうぜ、俺らの力を」

胸を張って、イーサンが拳を突き出す。ああと穏やかにウタが応じる。へイサリビのころが懐かしい。どんなに月日が流れようとも褪せない記憶だ。

「頼むよ、相棒」

オリーブグリーンの双眸を細める。正気でいるはずなのに、死ぬのが怖いとか、そんな感覚はとうに麻痺してしまった。死を厭わないわけじゃない。だが、家族を殺されるほうがずっとずっとおそろしい。

未来を奪われ、生きたまま踏み躪られるのはもうたくさんだ。

生かすために前に進む。屍を踏みつけられないために、尊厳ある終焉を。

勝ち取りに行く。



## 022 ヒューマンデブリの意地

とうもろこし畑が揺れる。

黄金色の穂が午前の陽射しに照らされ、桜農園に収穫の季節が近づいているとささやきあっている。二年かけてようやく四季がめぐる火星において、子供たちが最も豊穡に期待を寄せる季節だ。昼夜に寒暖差のある時期ほどとうもろこしは甘く育つ。

かつて鉄華団と提携してアドモス商会が建てたこの孤児院は、今は公営化されている。食料自給力を高めるため連合政府は農家を手厚く支援しており、ビスケット・グリフォンの給与なしには賄えなかった農場は見違えるほど豊かになった。

常であれば子供たちの遊び場になっているはずのとうもろこしの迷路も、今日に限って人影はわずかだった。

「デルマせんせえ、いかないで……」

幼子が服の裾を掴む。エプロンをとったデルマは、言い聞かせるように首を振った。

膝をついてなだめてやることもしない。そのさまが別れを予感させ、ダンテが苦渋に顔を歪める。

「本当に行くのか？ それが本当に正しいことなのか？」

「……火星は、ブルワーズよりマシだけど、やっぱりいいところじゃなかったから」

デルマの苦笑は虚ろで、どこか物寂しい。ここだっていつへダインスレイヴが降つてきてもおかしくないのだ。鉄華団の基地跡地みたいに、ギャラルホルンの貴族が買い上げて畑にしまったら違法兵器を解禁した証拠は残らない。

遠い目をして見上げる火星の空は今日も青く、ただ遠い。

児童養護施設職員となったデルマはもう、あの空の向こうへあがることもないだろう。基地を放棄して地球へ逃げて、IDを書き換え表向きは別人のふりをすることを条件に、鉄華団の残党は平穏な日常生活に入れた。

——火星はいいところでもないが、海賊船よりはマシだぜ。本部の

経営も安定してきたしな。メシにもスープがつく。

思い返せばオルガ・イツカが亡くなってもう七年が経つのだ。この左腕を失ってから七年。昭弘・アルトランドを戦場に置き去りにして七年。宇宙海賊へブルワーズから賠償金という扱いで鉄華団が身柄を買ってくれたときのことが昨日のことのようにはつきりと思いつけるのに、時間の流れは何もかも過去へと押し流してしまおう。

おっかなびつくりへイサリビに乗船したあのころ、見るもの触れるものすべてがブルワーズよりマシだった。食事も寝床も仕事もすべて、それはもう『マシ』だなんて言葉では失礼すぎるくらいにあたたかかった。

だが、違う。一人ひとりが頑張つて、今日より明日をもっとマシにしようと手を尽くしていたおかげで、不条理の再生産が食い止められていただけだ。

どっちが『前』かもわからない世界なら、一番マシな未来へ進めと旗を振ったのがオルガ・イツカだった。

「……デルマ、もう一度考え直さないか。お前はこいつらを守つただけだ。そうだろう」

「おれだってそのつもりだよ。人手不足もわかつてる」  
「だったら……！」

「だからおれは行くんだ、ダンテ」

首を振る。今ここに残つても現状が維持されるだけだ。それでは『今よりマシ』にはならない。

火星は独立して、学校ができて、この孤児院は子供たちであふれている。……何だかおかしくはないか。ここに入所している幼子たちみんな親がない。死別したり、経済的な理由で手放されたり、面倒を見きれなくなつて捨てられたり……、背景に差異はあれど育ててやれる大人がない。だからここも人手が足りない。

この手の施設で働いているのは『教員免許を持たない者』だ。最近では政府が『保育士』なんて公的資格を発行するようになったが、採用のハードルを上げればたちまち職員の頭数が足りなくなつてしまふ。

朝食の支度をして日中は遊び相手をしながら掃除と洗濯、買い物、夕食を終えたら順番に風呂に入れて寝かしつけ、夜泣きをあやして記録をつけ——、そんな激務が日夜続く職種である。ダンテやデルマのような住み込み職員なら毎日が日勤で夜勤だ。前回いつ三時間以上のまとまった睡眠をとったかも思い出せない。

ヒューマンデブリ育ちのデルマには案外懐かしいスケジュールも、新しく入ってきた職員は三日と持たずに辞めていく。

そのたびデルマは同じことを思った。

(……子供らは他に行く場所なんてないのに)

現状、児童養護施設の職員には資格がいらぬ。あつたほうがいいのだろうが、就労にあたって保育士資格が必須になったらダンテもデルマも勉強する時間もとれないまま職を追われてしまうし、入所している孤児たちを置き去りに職員だけごっそりいなくなるのは自明である。

失業者の増加に歯止めをかけた火星連合政府は、どうあつても資格を必須条件にできない。

高学歴移民の流入により、無学な火星人は『効率化』という名目でどんどん会社を追い出され、劣悪な単純作業の現場に追いやられている。妻子を養うため、借金を返すため、自分が生きていくために傭兵として志願し、惑星間航行に同行したら海賊に襲われて戻つて来なかった——なんて噂も耳にする。

女子供はいつも社会が決めたルールに翻弄されるばかり、割を食うばかりだ。火星は確かに豊かになったけれど、その陰では力なき子供たちが搾取され、犠牲になり続けている。

すがるような目で見上げてくる幼子の頭を撫でてやば、くしゃりと顔を歪ませ、涙目になってしがみついてくる。

「なあ、ダンテ。こいつらの頭触るとき、おれ、いつも思うんだ。こいつらみんな、おれは殴ったりしないって信じててくれる」

ブルワーズでは、身構えないことが『自衛』だったのに。鉄華団も根幹は同じだった。どんな暴力にも怯まず、目を逸らさない『勇気』の証であり、自由を求める戦士の抵抗だった。

そのせいか、兄貴分が頭を撫でてくれるときには暗黙裏に信頼への感謝が乗っていたように思う。

この手に怯えないでいてくれてありがとう。褒めさせてくれてありがとう。そんな不器用な心遣いがどこかにあった。

戦うことしか知らずに育ち、右も左もわからないまま孤児院で働くようになったデルマも同じ気持ちだ。入所している児童はみんな、デルマが伸ばす手を見て慈しみだけを連想してくれる。

これは殴られる時間を短く済ませるための自衛じゃない。暴力に屈しない勇敢さでもない。

だけど、デルマが好きだからという単純な理由でもない。

デルマは父親ではないし、里親でもなく、教員でも保育士でもない。ただちよつと年上で、何も資格がなくて児童養護施設で働いている元ヒューマンデブリの元少年兵だ。だけど衣食住と生殺与奪を握っているから、この子たちはデルマに懐く。食べものを与えてもらわなければ生きられないから藁にもすがる思いで最も身近な大人に媚びているだけだ。

実の親子でも、里親と里子でも、教師と生徒でも、雇用主と傭兵でも、こうした非対称な関係は変わらないだろう。

なのに職員は多忙で睡眠時間もまともにとれず、気持ちに余裕を持ってもらえない。他に縫れるものを持たないこの子たちの信頼に甘えて、過信して、自尊心を補強する材料にしてしまいそうになるのだ。

指一本で命さえ奪える大人はいつだって『脅威』なのに。

「昭弘さんにもらった苗字、おれ、なくしちゃったから……。だからこいつらには家族を作ってやれるように頑張ってたかった。でも、——」  
ある日、デルマは同僚を殴った。

元来、職員と入所児童は家族ではない。これは『仕事』で、ここは『職場』だ。職員には職員自身の人生があり、家族があり、プライベートがある。

施設は『帰る場所』ではない。

いつか本当の家族に巡り会うまでのつなぎの存在として、深く思い

入れてはいけなさと決められている。情を持たないように、持たせないように。寂しくなつて呼ばれる名前になつてはいけな。

ところが鉄華団時代の慣習が残るここでは、就学年齢に達して学生寮へと送り出す子供たちに「ここから通いたい」と毎期のように泣かれる。里親を見つけて送り出すという使命を果たすどころか、みな里子にも出たがらず予算も部屋もカツカツだ。

いまだストリートをさまよっている孤児たちも保護しなければならぬのに、新しく迎え入れてやるスペースが確保できない。

過密状態になるほど子供たちはストレスを溜め、職員の間も届きにくくなる。とうもろこし畑のただ中という閉鎖的な環境、慢性的な人手不足、——院内でいじめが発生しても気付くまでに時間がかかる。人員を増やせば信用できないやつも出てくる。

デルマが殴つてしまった同僚は、人当たりがよく穏やかで、デクスターを二十歳ほど若くしてメガネを取つたような優男だった。保育士資格保持者を各院にひとりずつ置くようにと、公的機関が派遣してきたのだ。博識でダンテからも信頼され、幹旋に関わつたユージンにも好青年と評され、子供たちからもよく懐かれていた。

働き者で、子供が好きな、よく気がつく男だった。

だから、ある夜、デルマが開いているベッドを見つけてしまったのは単なる偶然だった。

消灯時間もすっかり過ぎたころ、夜間は閉じているはずのドアが少しだけ開いていたのだ。この孤児院では数少ない女の子の部屋だったからすぐ目についた。そつとのぞき込めば、ベッドで眠っているはずの姿がない。

トイレにでも行つたのかと廊下に懐中電灯を向けると、今度は夜間は開放されているべき扉が閉じていることに気付いた。夜勤の職員が使う仮眠室だ。地下にある私室とは異なり、当番制で横になるためだけに使っている。

手をかけたドアノブは、しかしデルマの侵入を拒否する。マスターキーは事務室に置き去りだとしても、内側からの施錠なら鍵をかけた人物が中に入らずだ。

——誰かいるのか？　こここのドアは開けとく決まりなんだけど。

——ああ、デルマ先生。すみません、眠ってしまっていました。

なんでもない声で答えたのは、例の保育士だった。相変わらずおつとりと柔らかな雰囲気でデルマのノックに応じる。寝起きにしてはずいぶんクリアな声音だった。

耳を澄ませば、何だか嫌な音が聞こえてくる。引き攣るような呼吸音、衣擦れと粘着質な水音。不穏な気配に背筋がぞつと寒くなる。

——……先生ひとりじゃないですよ？　ここ開けてください！

——いや、僕ひとりだけです？　鍵を開けますから、そんなに慌てないで。ちよつと待ってください。

——は？　明らかにひとりじゃないだろ。開けますよ！

のそのそと緩慢な動きに焦れて、金属製の左腕を振り上げる。一挙動でドアは吹っ飛び、懐中電灯が描く白丸が室内を暴いた。

着衣の乱れたままの男と目が合う。一撃で扉を破壊したデルマの乱暴さを見守るように苦笑しながら、右腕は不自然に背後にかばっている。……デルマは血のにおいに敏感だ。フロアにまだ新しい血痕。膝頭を擦りむいた程度の出血量だが、ここは孤児院である。仮眠室とはいえ室内で怪我をするような棘や角はすべて丸めてあるはず。

ふと視線を誘われた部屋の隅、涙を目に溜めた少女と目が合ったとき、すべてを察した。

——あなた……何やってんだ!!

怒号を押し殺し、生身の右腕でぶん殴るだけの理性が残っていたことがせめてもの救いだった。

翌朝から彼はいつも通りの好青年に戻った。働き者で、人当たりがよく穏やかで、子供たちにもよく懐かれています。さすがに連合お墨付きの保育士だ。ダンテからの信頼も厚く、あの悪夢を言い出せない日々が続いた。

いくらか経った静かな夜に、デルマはまたもぬけの殻になったベツドを見つけた。現場を見つければデルマは彼を殴ったが、毎日では

ない。仮眠室を探し、倉庫を探し、ただトイレに行っていただけとわかったときは安堵で崩れ落ちた。

日に日に不安が増し、いつにも増して眠れなくなっていた。不注意をダンテに見咎められることも増え、子供たちからも目の下のクマを心配されるありさまだった。半年くらいの月日を、デルマはそんな体たらくで過ごし、ユージンに休暇の申請を勧められても、休みはいらない、ここにいななければならないと首を横に振ることしかできない。

また空になったベッドを見つけ、現場にたどり着いて加害者の胸ぐらをつかみあげたとき、組み敷かれていた少女の腹が不自然に膨れていることに気付いて、籠が外れた。

少女には上着を投げつけ、ダンテの通信端末にコールをかけると誰でもいいからすぐに女性職員を呼べと怒鳴りつけた。状況が飲み込めないダンテに、アトラでも桜さんでもとにかく女を叩き起こして現場に向かわせろと部屋番号を告げ、デルマは裏庭に男を引きずり出した。

それからの記憶は、ひどく曖昧だ。

夜が明けて、とうもろこし畑にさわやかな風が吹き抜けたとき、それは冷たくなっていた。

金属の左腕が血でぬめっていた。生身の右拳は握りしめたまま痺れていた。何だか水槽の中でぶくぶくと泡の音を聞いているような、非現実的な心地だった。駆けつけたダンテの指示のもと、男の亡骸を遺体袋に詰めて庭に埋める間も、どこか遠くから地面を見つめているように現実味がなかった。

そして、起きてきた子供たちが園芸用のシャベルを持ち寄って裸足のまままろびでてくる姿を見て、涙があふれた。

花壇に種を蒔くために人数分揃えたシャベルだ。カラフルで、小さくて、死体を埋めるためのものでも、殺人を隠蔽するためのものでもない。中には何が起こったかを察している子供もいる。細い鳴咽をこぼしながらデルマの力になろうとする少女は、誰よりも現実を理解していた。

被害に遭っていた子供は複数いた。一方で、保育士の先生はどこへ行ったの、と無邪気に首を傾げられることもあったが、デルマには何も答えられない。

男女あわせて十名が被害に遭っていたことが発覚し、病院へ連れて行った。十六歳未満の中絶手術には医者にも苦い顔をされ、孤児院でなくて斡旋所だったかと非難がましい嫌味を言われた。言い訳の言葉もなかった。

「おれが殺したのはあいつだけじゃない」

苦い記憶にデルマは拳を握りしめる。病院から戻ってきたのはたったの四人。産婦人科での落命、精神科への長期入院——六人もの少年少女が未来を奪われた。腹の子もみな死んだ。

「ばかやろう……お前は守ったんだ。こいつらを守ったんだよ……」  
「おれだって守りたくてやったよ。だから、殺さなきゃ守れなかったことを……、殺してもまだ守れてないってことを、訴えに行かなきゃならない」

もっと早く情報を共有し、もっと早くクビにすることができていれば。今も元気に院内を走り回っていてくれたかもしれない。過密状態にしてしまったのはデルマたちの責任でもある。入所児童と家族のように接してはいけないルールを守らなかつた。

公的機関から派遣されてきた保育士だからと無条件に信頼した。報告も遅らせてしまった。

火星経済はまだ安定にまでは漕ぎ着けず、学校や児童養護施設、農業プラントは連合政府が手厚く支援してくれる。払いは決してよくないが、行政に守られているので失業の不安がまずない。いつ倒産するとも知れない民間企業とは違ってクリュセ市警に濡れ衣を着せられることもないし、ギャラルホルンの焼き討ちに遭うこともない。安全で、誰にでも挑戦できる仕事だ。

そんな立場を利用して、子供たちを喰い物にしようとする連中もいる。忙しさにかまけて正気を失っていく職員も後を絶たない。



デルマは真面目な職員だし、余暇は食事と睡眠その他生理的欲求ぶ  
んだけあればいい——という気質上、あまり欲がない。職員をまとめ  
る立場にあるダンテには行かないでほしい人材だろう。あんなこと  
があつたから、見知らぬ他人を入れたくない気持ちもよくわかる。働  
き者でも子供好きでも、連合政府のお墨付きがあつたつて、どんな裏  
の顔を持つているかわからないのだ。さすがに疑心暗鬼にもなる。

「こいつらさ、学校にあがったら『人を殺すのは犯罪だ』つて教えられ  
るんだ。先生から。そのとき、守られたことを、悪いことだったん  
じゃないかって疑うかもしれないだろ。それを、また誰にも相談でき  
なくて苦しむかもしれないだろ？ だからおれが、保育士様をクビに  
もできない〈法〉と〈秩序〉がどんだけクソか証明してやるんだ。な  
あ、おれ、何か間違つたこと言ってるか」

「間違つてねえ……間違つてねえよ。でも、なんでお前なんだ。お前  
が責任を負う必要なんてねえだろう……」

「それじゃ今までと変わらない。みんなそう思ってるんだ。自分じゃ  
ない誰かがやればいい、自分には自分の生活があるつて。嫌な仕事は  
他人に押し付けて、……自分たちだけでもしあわせになりたい」

「デルマ………！」

「おれは自首する。こいつらの未来を守るためには、全部暴露するし  
か方法がない」

悩むことは苦しい。責任を負うのは恐ろしい。だからみんな目を  
逸らすんだろう。赦してくれる奴を頼つて逃げるんだろう。隠れて  
やれば大丈夫だとか、口を塞げばバレないとか。市警に金を握らせれ  
ばもみ消せるとか。子供を殺したつて犯したつて処罰されるリスク  
は限りなくゼロだ。成功すれば今度は『次』に挑戦してしまう。うま  
く行けばもう一度、今度はもつと大きな獲物を。もつと豊かに、もつ  
と自由に、もつともつとと際限なく肉を喰いたがる。

野放しになってきた暴食を、抑止するための対策が必要だ。

クーデリアはだから、みずから立ち上がつてみせたのだろう。

——ともに考えましょう。生きるために罪を重ねてきた過去を、そ

の責任を。どんなに時間がかかっても、真実を見つめたその先にこそ、誇れる未来があるはずです。

ともすれば火星連合議長という地位と権力を失うかもしれない思いついた演説は、彼女にとつてどれほどの苦難を強いるのか、デルマには想像ができない。誰が何を言ったって、考えたくないやつは考えない。責任なんか取りたくないやつは、他人になすりつけようと言いつきを考える。この足の下には地面しかないんだと、そこにある屍から目を逸らす。

肉は肉らしく、ただ黙って喰われていればいい。地面は地面らしく、黙って踏まれていればいい。

そうやって『役目』を楯に現状を維持しようとする。

デルマだって宇宙海賊〈ブルワーズ〉で使われていたころは、命令されるまま数多の船を襲い、一方的な略奪のために船員たちを手にかけてきた。

人を殺めることはもちろん怖いが、同時に、それしかできないという危機感もあった。命令通りにできなければ殺される。仲間は次々死んでいく。殺されていく。つないだはずの手が目の前で断ち切られ、握りしめた手の中には死だけが残る。

いつも不安だった。ずっと怖かった。

MSに乗れなくなったら他にできる仕事はない。死なないために、殺されないために、命令のまま撃って撃って殺して殺して……ヒューマンデブリはそういうものだからしょうがないと諦めるしかなかった。

そんなデルマの戦闘技能は、鉄華団が民間警備会社だったから役に立った。実働一番隊〈流星隊〉への配属は誇らしかったし、戦いになればデルマは役に立った。ヒューマンデブリ時代の戦闘経験がデルマを生かした。

裾を掴んで嗚咽をこぼす幼子の頭をもう一度撫でてやりながら、目を細める。孤児院に就職したって「せんせい」なんて似合わない呼ばれ方をしたって、デルマはやっぱり人殺しくらいしか満足にこなせない

い。

こいつらを——まだ何の罪もない子供たちを、おれのようにはしたくない。

「ここは職場だ。帰る場所じゃない。おれは保育士じゃないし、里親になる資格もない。今の稼ぎじゃ手前一人が食つてくだけで精一杯だ。でもおれさ、いつか、ガキどもみんな引き取って本当の家族として暮らしたい。いっぱい働いて、金を貯めて、家を買ってさ。表札は『アルトランド』って、もう決めてあるんだ。……それが、おれの夢なんだ」

いつか生まれ変わって、もう一度帰ってくる『家』を作りたい。昌弘とアストンと、そして昭弘が胸を張ってただいまを言える、本当の居場所を。

「なのに行くのか、デルマ……」

「だから行くんだよ、ダンテ」

おれには夢がある。だからどうか信じていてくれ。踏み出すこの足は、確かに前に進んでいると。

たどり着く場所が死刑台だって、受け入れる覚悟はできている。



カタパルトデッキへ漆黒の機体が進み出る。へヴァナルガンドのMSデッキでは、刻一刻と迫る開戦に向けて準備が進められていた。獣の両耳のようなブレードアンテナ、黄金色のモノアイがぎらりと開眼した。

『ベンジャミン——へグリムゲルデ・ヴァンプ〈2号機、出るぞー！』

背部の大型スラストアーをふかし宇宙空間へと飛び立つ。左肩に稲妻を、右肩には盲目の狼を刻印した戦乙女は、へハーティ小隊の中で最も航続距離が長い機体だ。搭乗するヒルメは戦友が眠るへヴァナルガンドを一瞥すると、大型ライフルを小脇に加速をかけた。

母艦へセイズへに取りつくと、頭部センサーを開き、モノアイを露出させる。

「ダインスレイヴ専用グレイズ」と同様の高精度光学ズームを採用した「ガンカメラモード千里眼形態」。敵陣のただ中へ飛び込み、アリアンロットの旗艦を狙う手筈である。

『続いてへガルム・ロデイへ 4番機。発進どうぞ！』

『フェイ、出ますッ！』

『へガルム・ロデイへ 3番機、発進どうぞ！』

『エヴァンいきます!!』

『へガルム・ロデイへ 2番機、発進どうぞ！』

『ハルです、お願いします！』

『へガルム・ロデイへ 1番機、発進どうぞ！』

『ラッシャー了解』と小さな隊長が細く息を吐く。

これが最後だ。これはへガルム小隊への最後の戦いだ。輸送用のランチを含めてすべての戦力を投入し、予備のパイロットも全員戦場へ向かう。へウルヴヘズナル混成小隊も後に続く。ひとつの大きな塊として、ヒューマンデブリの意地を見せてやると啖呵を切った。

目覚めないエンビの代わりに前線指揮官をつとめる。責任感を未発達な双肩に乗せ、すうと息を吸い込んだ。

『ギリアム、いきます!!』

MS隊が加速する。

『全機、全速前進！ おれたちであるへダインスレイヴ隊を攻略する!!』

この命に代えても、あの鉄杭を打たせやしない。

## 023 不退転

ロディフレームの一団が先陣を切って加速する。

それをビスコー級クルーザー〈ヘセイズ〉が追う。爆ぜる砲火、スラストアの光線が青白く軌跡を描く。脆弱な船体に取り付こうと接近した〈グレイズ〉が腹を撃たれて昏倒した。

宇宙空間に黒く溶け込むような〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉2号機の砲弾は、弱腰に攻撃してくる〈グレイズ〉を撃ち据えては退けていく。

ヴァルキュリアライフルにコクピットブロックを撃ち貫くほどの威力はなくとも、メインカメラを砕けば動きは止まる。撃墜よりも破損、損傷を狙ったほうが今回ばかりは好都合だろう。近づいてくるMSを無力化して転がしておけばいい。

船体上部に機体を固定したヒルメは常のスナイパーライフル、ワイヤーアンカーに加えてハンドガンをもひとつ借り受けてきた。1号機の――エンビの武器だ。

(借してくれよ、お前の力を！)

狙撃に適したひとみは灰色、次いで青だという口伝の通り〈ハイティ小隊〉における火器の取り扱いはエンビ、イーサンが抜きん出ている。

そんなことは百も承知だ、無い物ねだりをしたってしょうがない。

そのために千里眼形態がある。

ヒルメはダークブラウンのひとみを眇め、スコープ越しに目を凝らす。射撃精度こそグレーアイズのエンビに劣るが、広い視野がヒルメの持ち味である。

防衛ラインを築くのは九〇ミリ汎用マシンガンを装備した〈グレイズ〉ばかり、前回交戦した〈グレイズエルンテ〉の姿は見当たらない。及び腰の量産型など〈ガラム・ロディ〉の敵ではない。〈マン・ロディ〉や〈スピナ・ロディ〉も戦線に加わって、近づく機影を猛烈な勢いで弾き返していく。

……このまま近接戦闘用のMSが仕掛けてこないなら、戦艦に比べ

装甲の薄い〈ヘセイズ〉にとっては好都合だ。ヒルメは細く息を吐き、スコープにいつそう意識を集中させる。

ビスコー級クルーザーの船体規模はハーフビーク級戦艦の約八分の一に過ぎず、全長五〇メートルと小柄な〈ヘセイズ〉は、総合的な機動力で各戦艦にかなわない。

だが〈ハーテイ小队〉の操艦手腕があれば、隙間を縫って防衛ラインを越え、奇襲をかけることだって可能だ。

ギャラルホルンは前々から同士討ちも厭わない組織であったし、ハーフビーク級戦艦の主砲で味方MSもろとも宇宙ネズミを葬り去るくらい、アリアンロッドならやってみせるだろう。

それなら玉砕覚悟で突っ込んでいって〈ダインスレイヴ〉による  
フレンドリーファイア  
友軍誤射を狙えばいい。

全速前進、敵陣へ最大加速で突き進む。最前線を切り開く〈ガルム小队〉隊長がサブモニタで叫ぶ。

『正面に〈ダインスレイヴ〉隊を肉眼で捕捉ッ！ 第一波装填をかくにん!!』

ギリアムの声が甲高くぶれる。リーダーとしての矜持と責任感で塗り固められた堅牢な理性で、少年兵は戦場を駆ける。

前線指揮官オルガ・イツカのミニチュアを思わせる小さなカリスマ、その左右を支える両翼が展開し、〈ガルム小队〉が戦闘態勢に入った。突進するMSやランチの群れで作った巨大な楯は、前衛としてマシンガンを構えたらしい。緊迫感がLCSごしにもびりびりと伝わってくる。

『来るのか……!』

第一の目的は、扇状の陣形で待ち受けるダインスレイヴ隊の突破と撃破。母艦〈ヴァナルガンド〉を守るには居並ぶ禁断の砲台を一掃する必要がある。射線上を遡るといふ危険な任務を〈ガルム小队〉が指揮する。

〈ウルヴヘズナル混成小队〉の背後で今は守られているだけの〈ヘセイズ〉は、幼い戦士たちの背中しか見ることができない。

LCSから響いてくる甲高い少年たちの声の中には、ブツブツと火

薬に犯された繰り言も混じっている。細く息を呑む無音の悲鳴と慟哭。恐怖に駆られてガチガチと鳴る奥歯の音。怖い、はやく、まだなのかよ——、悲痛な叫びに心が痛む。

へダインスレイヴへはリアクターめがけて飛んでくるから、再前衛にあたる一列目は敵に背を向ける格好なのだ。

二列目のへスピナ・ロデイへに押し出されながら、へマン・ロデイへの短い両腕が取りすぎるように抱きついているさまが、ヘルメにも垣間見えた。

幼い家族の犠牲を受け入れなければ生き残ることさえ難しい現状を変えたくて、ここまでできたはずなのに。また彼らに任務と言う名目の殊死を強いてしまう。

後列のへガルム・ロデイへがハンマーアックス、ブーストハンマーを構える。

ダインスレイヴ隊との距離約八〇〇、第一波の発射までカウントダウンがはじまる。9、8、7——。

『ミサイル放てえええッ!!』

指揮官が高く吠える。号令から間髪入れず、前列ランチの主砲が迸った。追いかけるようにマシンガンが火を噴く。刹那、ぱつと弾けて霧散する。濃霧が宙域をモニタごと染め変え、スクリーンにノイズが走る。

ナノミラーチャフ。

古くさい目隠しだが、阿頼耶識使いを手つ取り早く優位にするスモークスクリーンだ。ロディフレームの番犬たちは速度を落とすことなく突っ込んで行く。

ヘルメの足許でへサイズへが一気に加速をかけた。へダインスレイヴへ発射前に約八〇〇の距離を走り抜け、アリアンロッド艦隊に肉薄する手筈だ。さすがのギャラルホルンだって、まさか戦闘艦でもないビスコー級クルーザーがこんな動きをするなんて思わないだろう。

視界の悪い煙の中、船体は乱気流になぶられるようにがたがたと跳ね回る。次の瞬間、センサーではなく操艦手ウタの直感が扇状に展開するダインスレイヴ隊をとらえた。

〈マーナガルム隊〉自慢の子犬たちに群がられ、随伴機〈フレック・グレイズ〉が残弾をむしり取られて横転するさまがヒルメにも見えた。犠牲をひとつたりとも無駄にしないために、ウタは操縦桿を握りしめる。隔壁はすべて封鎖し、誘爆のリスクも可能な限り断ってきた。(阿頼耶識がなくても、これくらい……っ!!)

奥歯を噛む。噛みしめる。鉄華団で成長してきたヘイサリビ〈クルー〉としての意地がある。戦場において、前線において、それでもブリッジオペレーターは『戦闘員』の頭数には入っていなかった。

非戦闘員を数多乗せていたからだ。おれたちだって戦えるという矜持を持ちながらも、どうしたって命を守るための存在であらねばならなかった。

だが今は違う。これは魂を守るための戦いだ。筋を通すために戦っている。

このままハーフビーク級戦艦が展開する艦隊の隙間をすり抜けて、旗艦〈フリズスギヤルヴ〉を直接叩く。

近接戦闘はMSの専売特許ではないのだ。阿頼耶識がついていなかったって曲芸航行くらいやってみせる。こちら側から接近すれば、リアンロット艦隊を相手取って白兵戦だって、あるいは。

「よく狙ってよ、イーサンッ！」

「当然だ、ヘイサリビ〉のトリガーは誰が握ってたと思ってる！」

砲撃手は前だけを見据えてくちびるを舐め、野心的な喉が獣のように低く唸る。

これは無謀な特攻ではない。巡航船による近接戦闘だ。直援にくくヒルメが追いつかなくてくる〈グレイズ〉を次々撃ち墜としていく。落とすきれなかったマシンガンの豆鉄砲を喰らったくらい、どうってことはない。

「どうやったって目的を遂げたいのだから、器なんて道具にして捨てたっついいい。」

「墜ちろ、スキップジャック!!」





「タカキ。どうか気をつけて」

「はい。おれも負けていけないので」

拡声器を肩から提げ、タカキは和やかにはにかんだ。事務所の外からは喧噪が響いてくる。火星に比べれば格段に治安のいいアーブラウの首都エドモントンですら、迂闊に市街地へ出れば安全は保障されないというありさまだ。

デモの告知もないのに、市街地のそこかしこで暴動が起きている。生卵の飛来を警戒して雨戸を締めようとした主婦が火炎瓶を投げ込まれて死亡するなど、見過ごせない事態も増えてきた。

全世界がクーデリアの演説にざわつき、何の罪もない民衆を犯罪者呼ばわりしたと憤っている。

——みずからの手で武器を取り、みずからの責任によってわたしを殺しにおいでなさい！

勇敢な彼女の啖呵も、わざわざ火星まで出向かなければ殺せもしないのに、絶対安全圏で何をほざくのかと不満の声があがっている。クリュセのほうがよっぽど危険なのに。ほんの数年前まで無法地帯だった火星には武器の所有に制限がなく、子供が拾い物のナイフや拳銃を隠し持つことだって珍しくない。

圏外圏は傭兵不足に見舞われると同時に銃火器の普及に歯止めがかけられなくなっており、アーブラウよりも断然危険なのだが、……地球人は火星の現状をよく知らない。

知るすべがないのだ。遠く離れた異星についての情報が少ないために、火星人という漠然としたイメージが先行してしまう。圏外圏では野蛮人たちが旧石器時代のような暮らしをしている、なんてステレオタイプがあるせいで、誰も彼もが火星といえは原始人を混同してしまったまま、先入観が邪魔をして情報が更新されず、訂正されること

なく歲月とともに浸透していく。

それが『偏見』だなんて誰も知らない。みんな『事実』だと思っ  
ている。自分が見たもの、経験したこと、これまで読んだ書物に基づい  
てしか、イメージは膨らませられない。

タカキだつて同じで、いまだにバルフォー平原の豊かな緑を物珍し  
く思つてしまう。肥沃な大地と豊富な水資源に恵まれたアーブラウ  
では種を蒔かなくても草木は芽生えるものなのかと、雑草をありがた  
がつて笑われたりもした。雨が降ることに感謝して白眼視されたこ  
ともあつた。

火星生まれのタカキは十三歳になるまで読み書きのひとつもでき  
なかつたが、学校に行くのが当たり前のエドモントンでは文盲なんて  
理解も想像もできないことだという。メガネもいらぬ、視力はメ  
デイカルナノマシンで治るから。車椅子も義肢もいらぬ。ちぎれ  
た手足はメデイカルナノマシンがつなぎ合わせてくれるから、拾い集  
めて医療ポッドに入れば失わなくて済む。

それが当たり前なのだ、ここでは。教育も、医療も、手を伸ばすま  
でもなくそこにある。願うものではない。手に入らない状況なんて、  
この人々は思つてもみない。

想像力のベースとなる知識と教養には、タカキでは考えが及ばない  
ほど深く深い溝がある。たくさん勉強して高等教育を受けている今  
も、大学教授プロフェッサーに提出した小論文は赤だらけになって戻ってくる。

「以前、エドモントンでデモがあつたときの……あの青年を覚えてま  
すか？」と、タカキは独白のように取りこぼす。

S A Uで傭兵の集団死が見つかった事件のあと、軍縮デモは激化の  
一途をたどつていた。アーブラウは防衛軍を解体せよ、奪われた平和  
を取り戻せ——という市井の演説もそこかしこで聞かれるようにな  
つた。

あの日、テレビの中で行進するデモ隊の中で流暢な演説を行なつて  
いた青年。あのときは古い知り合いにそっくりな『同じ顔の三人目』  
だなんてごまかしたけれど、あれはエンビだった。

力強い声の張り方はオルガ・イツカ団長を真似たのだろう。道理で

聞き覚えがあるわけだ。

「あいつ、鉄華団の弟なんです。きつとすごく勉強したんだと思います。文字の勉強を始めたのは、おれと一緒にだったのに」

「タカキ……」

「おれはフウカを守りたくて平穏な道を探してきたけど……それじやだめだって、やっと気付いたんです」

世界中の子供たちのためにできることを見つけたという気持ちは本心だ。もつと世界を見なければ、知識を深めなければ、経験則という狭い視野の中で自己完結してしまう危険も今だからわかる。

タカキ・ウノには、ふたりの家族がいる。

十六歳になった愛妹フウカと、推定十四歳のまま時間を止めた戦友アストン。ふたりとも大切なタカキの家族だ。

ヒューマンデブリとして二束三文で売買され、宇宙海賊〈ブルワーズ〉の兵士として〈ヘマン・ロディ〉に乗っていたアストン・アルトランドは、八年前の国境紛争で死んだ。タカキをかばって命を落とした。

お前らのしあわせを守るためなら何だってするとうっそり笑んだ彼は、しあわせになる方法を知らなかった。想像さえできなかった。

そして初めて自分自身の生存を願ったのは、致命傷を負って命を手放す今際の際だ。

死にたくないことは死ぬことで、生きるとは心を殺して戦うこと。しあわせになることは、生きる力を失うことだった。

そんな生き方でしかアストンが命をつなげなかった原因は、この『世界』にある。

かつて蒔苗氏が諸国漫遊に宛てた日々は、タカキに取って代え難い学びの経験だった。

任期を円満に終えた蒔苗・東護ノ介前アーブラウ代表は、晩年、タカキを同伴して各地を旅した。氏の代表再選がなければ、今ごろアーブラウはギャラルホルンの傀儡になっていただろう。彼が語らなければアーブラウは知らないままだった。圏外圏に蔓延する貧困、誘拐、ヒューマンデブリ問題。植民地として支配されていたクリュセで

日常化している弾圧。

かつてアーブラウ防衛軍の軍事顧問をつとめた子供ばかりの民間警備会社〈鉄華団〉が、不当な情報操作で殲滅されてしまったこと。

忘れるなど薄情ではないかと、老いに痩せこけた手でタカキの手を握った。火星からやって来た少年たちがこのアーブラウのため最前線まで体を張り、命をかけて国境紛争の尖兵となったというのに。老いぼれが何も残せんでは、死んでも死に切れんよと。

アーブラウのため献身的に戦い続けた少年兵たちの勇氣について、蒔苗老は語り続けた。

その努力が、今日の火星連合との友好につながっている。

「だから今度は、おれが証言台に立ちます」

「わたしたちも同志ですよ。できる限りのバックアップをさせてください」

「ありがとうございます。でも、もしアレジさんたちが危険になるならおれのことには切ってくれて構いません。フウカを……妹のことは、お願いします」

「わかりました。約束します」

ハンカチで目頭をおさえるアレジに、タカキは「大げさですよ」と微笑した。

「フウカが生きる未来は、人殺しがのうのうとのさばっている世界であってほしくない。ロールモデルになれるなら、おれ、本望です」

すつきりと笑んで、タカキは扉へ足を向ける。外は危険かもしれない。けれど、だからこそ。マシンガンではなく声を届けるための器材を肩に提げて、タカキは行く。

もとより、八年前の国境紛争で未来を奪われた民衆の復讐心を追い風に成り上がってきたのだ。黙殺された戦争の生き証人として望まれた政治家秘書。学もないタカキが議員候補だなんて分不相応な地位にあるのは、東アーブラウに根付く反ギャラルホルン感情のせいではない。

防衛軍の兵士だった息子を亡くした母の涙。手足を失って我が子を抱けなくなった父の慟哭。軍医だった婚約者を失い、花束を抱いて

泣き崩れた若者。国境を渡れずに、敵性国家のただなかで飢えに苦しみ、寒さにふるえた旅行者や留学生。

あの戦争で、多くの人々が生活を激変させられた。

忘れないでくれ、覚えていてくれ——そんな誰かの悲痛な叫びがタカキを今ここに立たせている。

あのころのタカキは、どれほど憧れたって三日月・オーガスに手が届かなかった。表面的な憧憬ばかりを募らせて、本質を理解できていなかったのだと、あとになって気付いた。

罪のすべてに償いができたらそのときは、愛妹を力一杯抱きしめられる気がする。

だから世界を変えよう。ともに生きていける未来を作ろう。ここは、ヒューマンデブりの子供たちが、しあわせになりたいとみずからの意思で世界じゃないから。

アストン。お前にもらった命だから、おれたちのために使いたいんだ。死ぬとか殺すとか、そういう戦いばかりじゃない。

死なせてしまったラックス、トリイ——地球支部の戦友たちのためにも銃は取らない。

(そうですよね。……ラディーチェさん)

地球支部を売り渡した裏切り者。そんな男を信じてしまった弱い心を、殺すために扉を開ける。

武器は声だ。クーデリアのように言論という名の戦場を選ぶ。

それが確かな未来への一歩と信じて、タカキは踏み出していく。

## 024 指針

『ヘレギンレイズ・ジュリア』——ラスタル様のため、出撃します！』  
月面基地から女騎士の機体が飛び立つ。青白く吹き上げたガスはモビルスーツMSにあるまじき力強さで迸る。

さながら碧の彗星だ。ジュリエッタの愛機は機動力増強のためブースターまみれに改良され、ギャラルホルン製MS随一のスラスタ―出力を誇る。

戦端は既に開かれており、月外縁軌道統合艦隊指揮官ジュリエッタ・ジュリス准将の参戦は遅すぎるくらいだろう。

真打ちらしく遅れての登場……とでも言えば聞こえはいいが、実情は招かれざる客の闖入にすぎない。

ジュリエッタはため息を飲み込んで、重力の反動もかまわず戦闘宙域へと急ぐ。

(こんな作戦でアルミリア様に死なれるわけには……！)

くちびるを噛む。こんなもの、ただの『出世レース』だ。生まれも身分も関係なく悪魔の首を取ることができれば出世がかなう、だから栄誉栄達を望む地球外出身者が駆り立てられるように最前線へと志願した。

立会人としてアリアンロッド艦隊旗艦ヘフリズスギヤルヴンが出ている。

こんなところでアルミリアを失っては、何のために彼女をガンダムパイロットたちのもとへ返還したのかわからない。秘密裏にリタ・モンタークの遺体を葬送した意味だって。

——ラスタル様。わたしも出撃します。

パイロットスーツで敬礼してみせたジュリエッタに、支配者はああと頷いてみせた。

思い出すのは先刻、月面基地にある執務室での一幕だ。壁一面の大きな窓には、スキップジャック級戦艦ヘフリズスギヤルヴンからの中

継が映し出されていた。

遠目には綿<sup>コットン・キャンデー</sup>飴のようなナノミラーチャフの塊の中から、凶悪な爪楊枝が無数に飛び出してくる。めちやくちやにひん曲げられた軌道からして、あの煙の中では今も戦闘が行なわれているのだろう。

どこへ飛んで行ったかもわからないへダインスレイヴ<sup>スレイヴ</sup>がどこぞのコロニーにでも激突したら——と考えるとぞつとしないが、ジュリエッタの心配は禁断の矢の犠牲者たちより、むしろ禁止兵器を平然と運用するアリアンロッドへの反感だ。

きつとあのへヴァナルガンド<sup>ヘヴァナルガンド</sup>では一部始終を録画しているに違いない。アルミリアが映像を公開すれば、ジュリエッタは全責任をかぶせられて死刑台に送られる。

女騎士の憂いを知ってか知らずか、ラスタル・エリオンはプレジデントチエアを軋ませ振り返った。

——もう行くのか、ジュリエッタ。

ゆつたりと余裕をもって微笑する。支配者の碧眼に映る戦場は、取るに足らない矮小なものだろう。ラスタルにとつてはテロリストに破壊された月面基地の修繕のほうがずっとずっと重要なのだ。

この執務室だって月外縁軌道統合艦隊司令のためにあるはずだった。なのに後任司令官であるジュリエッタには引き継がれず、ラスタル・エリオン公の部屋であり続けている。

彼の威光のもとに悪魔を討ち取って出世したジュリエッタは、この部屋にふさわしくないのだ。出自が悪く、そのうえ女である。MSに乗って前線で戦う以外に何の取り柄もない軽い神輿に、誰も役職なんて与えたくない。仕事なんて任せたくない。本音では出世だってされたくないだろう。

こんな小娘を重要なポストにつけることを、ギャラルホルン上層部を取り仕切る守旧派貴族は快く思っていない。

出自には貴賤があるというカースト意識に基けば、ジュリエッタは生まれが賤しい。出身地はアフリカユニオン北部だが、そこは貧しい田舎町だった。

詳しいことは覚えていない。ただそこに横たわる貧困、なぜだか

襲ってくる爆発——そういったものに振り回されてばかり、誰も助け  
てくれなかったことだけぼんやり記憶している。

いつもお腹をすかせていた子供時代。もつと食べたいと駄々をこ  
ねては母親を困らせ、どうして涙ぐまれなければならぬのかと悔し  
い思いをしたものだ。わたしはこんなにお腹がすいているのに。  
我慢しなければならぬ理由を両親でさえ教えてくれない。

今にして思えば彼らも知らなかったのだろう。市場に並ぶしおれ  
たパンや埃っぽいチーズがどこからきたのかも。食事も寝具も満足  
に手に入らない冬のどん底で、ジュリエッタには家族がいた。いつも  
いらいらしていたから近寄りがたくて、もう顔も思い出せない。

初めて手を差し伸べてくれたのは母でも父でも兄でもない、通りす  
がりの傭兵だった。

ジュリエッタが生まれて初めて口にしたあたたかい食べ物は、ひげ  
のおじさまが手渡してくれたホットチョコレート。湯気が目に入っ  
て、ぱちくりと目を瞬かせたジュリエッタの目の前で、こうやって冷  
ますんだと教えてくれた大きな手のぬくもりを忘れない。

初めて食べたおいしいものは、彼が焼いてくれた動物の肉。みずみ  
ずしさにびっくりした。かじりついて頬張って、目を輝かせたジュリ  
エッタを、傭兵はいい食べっぷりだと褒めてくれた。

彼にマシユマロを焼いてもらうまでお菓子なんて存在すら知らな  
かった。甘いものも甘くないものも、すべておじさまが与えてくれ  
た。

お腹いっぱいごはんを食べて、弾薬を数え、武芸を教わり、大きな  
いびきを子守唄にぐつすと眠るようになった少女時代。

ジュリエッタはしあわせだった。

ガラン・モツサという偽名とともに散った彼が、たとえどんな悪人  
であつたとしても、ジュリエッタの中の幸福な記憶はすべて彼がくれ  
たものだ。MSに乗ることを教え、兵士候補生としてラストル・エリ  
オンに推薦してくれたから、幸運にもギヤラルホルンの制服に袖を通  
している。

ギヤラルホルンの貴族たちが生を受けた瞬間から地位と権力を継



承するように、貧困と無知もまた、命とともに受け継がれる。再生産され続ける。貧しさだけが根付く場所に教育はなく、医療も福祉もない。就職の際にも差別され、低賃金で危険な仕事に従事するしかない。

火星やコロニーといった経済的に不利な立場からも成り上がってくる将兵はいたが——アイン・ダルトン、石動・カミーチェ、旧姓『モンスターク』のブロンドたち——、みな実父なり養父なりがギャラルホルンの高官だ。

父権にハシゴを架けてもらってようやく、その実力を発揮してもいい立場になれる。

生まれが悪いから、出自に問題があるから、権力を持つ者に『依怙鼻員』してもらわなければ、どんな可能性も持ち腐れてしまう。

一方で、セブンスターズは生まれたときから死ぬまで豊かだ。

ヴェインゴールヴで純血の子として生まれた男は、有能であれ無能であれ、いずれは七星会議に名を連ねる。そういう運命と決まっているのだ。厄祭戦を戦った七十二人の英雄の血を継ぐ者として、支配者の椅子に座る。

傭兵になる必要はない。非合法な手段で生活費を稼ぐ必要もない。武官になっても、行なうのは『治安維持』だ。どんな暴力も彼らが行使するだけで『正義の鉄槌』になる。

免罪符によって守られ続けるセブンスターズの御曹司を裁く法は存在しない。いかなる場合にも秩序は彼らを赦し、清廉潔白なる子女らを弾劾する不届き者が現れてはならない。引退後の生活だってガエリオ・ボードウインのようにすべてが保障されている。

——ジュリエッタ、お前は強い。

語り聞かせるようにラスタルは目を細める。ひげのおじさまも、ときどきこうして懐かしむようにジュリエッタを見つめた。

——わたしは、強くなど……。

——人はみな弱い。そして凡庸だ。お前にはまだ難しいかもしれないがな……。誰もみな変化を嫌い、孤立を恐れ、それでいて正義でありたがる。人類とはそういうものだ。

——ラスタル様……？

——犯した過ちを認め、受け入れるには強い心が必要だ。へ革命の乙女は善意というものの残虐性がわからないらしい。勇気というものの希少性も。

ふうと重くため息を落とすラスタルの目にうつるのは、失望とは似て非なる感傷だった。彼の言葉の持つ大きすぎる意味が、今のジュリエッタにはわかる。

政治とは、支持層からの賛同を得られなければはじまらない。弱者の肩を持ったところで予算は降って湧いてはこないのだ。

セブンスターズの解体がわかりやすい例だろう。これまで七星会議によってのみ下されていた決議に、参加できる人数が増えた。参政権を欲しがっていた貴族たちはラスタルを支持し、反対したのはネモ・バクラザンとエレク・ファルクのたつたふたり。多数決に押し切られ、ギャラルホルンはより民主的な組織になった。

七つきりの椅子をめぐる蹴落としあうことはもうない。

血統第一主義に叛旗を翻し、自由平等を求めたヘマクギリス・フリード事件の終結を純血の英雄ガエリオ・ボードウィンと民間出身の女騎士ジュリエッタ・ジュリスが預かったことも、出自の貴と賤を併せ持つことを印象付ける世間体政治の一端だった。

最前線を下層民どもで賄えることになった保守派貴族たちは、安全が確保されたと安堵し、ラスタルを褒めそやす。改革派も、出世のハシゴは降ろされたのならと譲歩を見せた。

下賤な猿どもを黙らせた素晴らしい指導者に敬意を評し、ギャラルホルンの上層部にはびこる血統主義者たちは喜んで予算会議を通すだろう。

今だって出世の引き金を求めて多くの兵士たちが最前線へと向かった。何を守るためでもない、ただギャラルホルンが定めた『生まれの悪さ』というカーストを受け入れ、みずから望んで最も危険な場所へと赴く。

出撃理由が単なる出世レースでは都合が悪いから、ラスタル・エリオンは月面基地を破壊することで戦う理由を自作自演してみせた。

モントーク商会に雇われてみせ、アルミリア・ボードウィン嬢を裏切って破壊工作に勤しんだテロリスト集団の断罪のため、治安維持組織は兵力を差し向ける……という筋書きである。

そんな出来レースでさえ圏外圏出身者が乗せられるのは何の変哲もない「ヘグレイズ」だ。

ナノラミネートアーマーの前には豆鉄砲でしかないマシンガンだけ与えられ、狼の群れの中へ放り込まれる生け贄の羊たち。退路はリアンロット艦隊に塞がれて、ガンダムのパイロット——鉄華団の生き残り——の前に散っていくのだろう。

首狩りに特化した「ヘグレイズエルンテ」ならまだしも、ただの「ヘグレイズ」の機動力では太刀打ちできない。

ガンダムの脇を固める三機連隊のヴァルクリアフレームには阿頼耶識システムが搭載されており、それぞれ異なる可変機構を有している。かつて「ガンダム・バルバトスルプスレクス」と戦ったとき、対MSの制圧戦しか想定していなかった「ヘグレイズシルト」は次々あの尻尾にやられたのだ。

前例に学ぶこともできず可変機と戦わされる供物たちが哀れでしかない。

こんな無意味な戦いに巻き込まれてアルミリアが落命したとしても、事故死として処理されてしまう。

早く戦闘を終わらせ、彼女を連れ戻さなければならぬ。

——期待しているぞ、ジュリエッタ。

——はい。……お任せください、ラストル様。

ジュリエッタに科せられた使命はハーフビーク級戦艦「ヴァナルガンド」の回収と、アルミリア・ボードウィン嬢の保護だ。いっそ悲しくなっていく。「法」と「秩序」の番人であるギャラルホルン、その最強最大の艦隊リアンロットが、悪魔狩りのためだけに、こんな略奪じみた作戦を執行しているなんて。

急がなければと苛立つ足でペダルを踏み込む。戦場に追いついたところで歓迎されないことは重々承知だ。既に『准将』にまで出世しているジュリエッタにトロフィーは譲りたくないだろう。

見渡す限り敵ばかりだ。

それでもジュリエッタはこの世界の円滑なる歯車にすぎず、命令に背く権利を持たない。

(わたしは弱い。わたしは……自分がいやになるほど弱い!!)

せつかく鳥籠から解き放ったはずの希望を、また閉じ込めなければならぬ。

これが内通者としてアルミリアに与した代償なのか。いや、ジュリエッタもまた、変化を恐れ、受容と承認を求める有象無象のひとつかけらにすぎない。

そんな弱い心を支える柱こそラスタル・エリオン公なのだ。



見送りを終えたへヴァナルガンドのブリッジに、もはや人影はない。ビスコー級クルーザーへサイズを前線に投入するという無謀な作戦のせいで、母艦に残ったのは非戦闘員ばかりである。

船体上部では睨みを利かせるトロウのチャールズ——へグリムゲルデ・ヴァンプの3号機を直援に残して実働1番組へハーティ小隊は全員出払ってしまったし、3、4、5番組で編成されたへウルヴヘズナル混成小隊も実働2番組へガラム小隊が率いてすべて連れて行ってしまった。

残るMSはパイロット不在のへグリムゲルデ・ヴァンプの1号機、へガンダム・バエル。

これが最後になるだろう出撃を目前に、へガンダム・アウナスブランカの搭乗者が軽く伸びをした。

相変わらず似合いもしないギャラルホルンのパイロットスーツ、赤みの強い癖毛が揺れる。

「おれも出る。カズマ、船のことは任せてもいいか?」

「よしきた任せろ……って、言わなきゃだめか、やっぱり」

がらんどうのブリッジで、カズマが所在なげに肩をすくめる。いくら最年長で、比較的古株だとしても、カズマはメカニックだ。ライドの代わりに艦長席に座るなんて、何とも居心地が悪い。

ハーフビーク級戦艦だけあってオペレーター席はざつと二十ほど作られているのに、誰もいないというのはなかなか不気味である。

スペックとしては戦闘艦だが、今のヘヴァナルガンドは非戦闘員ばかりを残している。依頼主アルミリア・ボードウィン嬢に、金髪の美少年たち、それから医師や整備士たち。医務室の怪我人<sup>エンピ</sup>はまだ目覚めない。

あくまで自衛のためにしか発砲は行なわず、後方で守られていることが仕事だ。

前線に出ないとはいえヘダインスレイヴに狙われる可能性は充分にある。最深部の気密エリアならまだしもブリッジは、当たりどころが悪ければ命の保障はない。

しゃーねーか、と独り言ちる。カズマだって元鉄華団団員だ、一度死んだときに腹は括っている。こうなつてはライドを送り出すくらいしかできることもない。

「戻ってこいよ。必ず」

「ああ、わかっている」

「頼むよ。お前が守ってくれなきや、メカニックはお前を助けられないんだからな」

カズマが突き出した拳をこつりと軽く殴りつけ、ライドはああと屈託なく笑んだ。どこか懐かしい少年の笑顔だ。鉄華団のころ、まだ快活だったころのライド・マッスの面影が浮かんで消える。

胸の奥から去来する郷愁を零してしまわないように、カズマは拳を握りしめる。

（ライド……お前はずっと『光』を目指して進んできた。それが『前』かどうかはわからないけど、それでもおれは、お前の選択は間違つてなかったと思うんだ）

成長し、そしてブリッジを出たライドは格納庫へ、そして愛機へとたどり着く。

右肩には盲目の狼、左肩には稲妻のシンボルをそれぞれ描いた白い悪魔。へマクギリス・ファリド事件へを受けてファリド家がお取り潰しとなり、売却された曰く付きのガンダムフレームだ。かつてバルバトスと死闘を繰り広げたM<sup>モビルアーマー</sup>A ハシユマルのビーム兵器を受け継いでいる。

狼の魂が息づく世界に残された光のMS<sup>ガンダム</sup>。

『へガンダム・アウナスブランカへ——出撃する！』

白く清廉な光。窓辺でさえざる小鳥の声。

コンコンと控えめなノックの音でアルミリア・ボードウインの朝は始まる。天蓋つきのベッド、真白いシーツの上で、薄すみれ色の髪がさらりと泳ぐ。

眠気眼をこすりながら身を起すころ、ちょうど砂時計が起床時間を告げるのだ。

紗うすぎぬのカーテンを持ちあげれば、アーリー・ティーの支度をしていたメイドがうやうやしく一礼する。

「おはよう。とってもいい香りだわ」

ソーサーに乗せて差し出された今朝の紅茶は花やかにかぐわしく、水色すいしよくは赤味がかって鮮やかだ。昨夜は天候が芳しくなかったから、晴れの日を思わせる茶葉がセレクトされたのだろう。湿気の多い日は、芳醇な香りをいつもと違った趣で楽しめる。

アフリカンユニオン産のとある銘柄をつぶやくと、メイドが「お見事です、お嬢様」と缶のラベルを見せた。

はにかむアルミリアは、気恥ずかしくも誇らしくて、胸を張って紅茶を一口ふくむ。……やっぱり、アルミリアが淹れた紅茶よりずっと香り高くておいしい。

婚約者に振る舞ってあげたくて練習しているうちに、すっかり紅茶の味を覚えてしまったのだけれど、まだまだメイドたちの足許にも及ばない。

ファリドのお屋敷でもお茶を嗜んでいるだろうにアルミリアの紅茶をおいしいと褒めてくれるマクギリスの気遣いに、嬉しくなる一方で情けなさも募ってしまう。

「マッキーは、今日こちらに戻ってくる予定よね？」

「はい。午前十時には〈ヴィーンゴールヴ〉にご到着と、当家執事が

承っております」

「ほんとう？ 予定より少し早いわ！」

歓喜に声を弾ませたアルミリアは、身を乗り出してしまったことに気づいて、コホンと小さく咳払いをした。結婚を目前にした淑女の振る舞いは、もっと優雅ではくはならない。

姿勢をただして紅茶を飲み干すと、微笑ましげなメイドにソーサーを返却した。

フィアンセの帰還を待ち焦がれていたことを知っているから、ボードウィン家の使用人たちの心遣いはあたたかだ。

それがどこか腫れ物にさわるふうでもあって、なおさら軽妙に振る舞わなければと気が引き締まる思いもある。

ボードウィン家は先日、長男ガエリオ・ボードウインの葬送を済ませたばかりである。

エドモントンで名誉の戦死を遂げた兄は、最期まで誇り高く、武官としての務めを全うしたのだと聞いた。〈ヴィーンゴールヴ〉をあげて執り行われた葬儀では、誰もがガエリオの早すぎる死を悼み、嘆き悲しんだ。

のびのびと快活で分け隔てなく、清らかだったガエリオ・ボードウィン。年の離れた兄と死別し、アルミリアは目が溶けるほど泣き続けた。

しかし家人が悲しむほどに屋敷の空気は重くなっていき、ボードウィン邸はガエリオがいたころの陽気さを失ってしまう。カルタ・イシュー嬢の戦死、イズナリオ・ファリド公の失脚——暗いニュースばかりが舞い込んで、アルミリアの母上もふさぎこんでしまっている。平和の守護者であるギャラルホルンがそんなでは、世界だって混乱に閉ざされてしまう。

明るい話題として、マクギリスとアルミリアの結婚式が求められているのだ。

だから立派なレディにならなければ。エドモントンの一件から多忙を極め、なかなか会えない婚約者を機嫌よくお出迎えすることが、今日のアルミリア・ボードウインに果たせる責任なのだから。



いつもより丁寧に身支度をととのえ、朝食を終えたアルミリアが向かったのは温室だった。

剪定ばさみを手に、大輪の白百合を摘み取っていく。

誇らしげに花開いたカサブランカは庭師が育ててくれたものだ。アルミリアにできるのは水を与えて愛でることと、うつくしく咲いた花を刈り取ることだけ。

育て方を教えてほしいと乞うたけれど、お嬢様に土仕事をさせるわけにはと拒否されてしまった。

そんな日々も、もうすぐ終わる。

ぱちん、と鋏が茎を断つ。倒れてくる花をやわらかく受け止める。庭師の気遣いであらかじめ花粉を取り去られた百合はアルミリアを汚すことなく、それでも香しく咲き誇る。

(マッキーは、どんなお花が好きかしら)

摘み取った百合を抱きしめ、寂しく微笑むアルミリアは、ボードウイン家で育てられてきた十一年の末にフアリド家へと嫁ぐ。

あなたはマクギリス様のもとへお嫁に行くのよ——と母に聞かされたのはアルミリアが八歳のときである。そのころには彼に恋をしていたから、青き狼フェンリルの花嫁として認められたのだとはしやいでもまったものだ。

立派なレディに成長したから選ばれたのではなく、結婚が決まった以上は淑女でなくてはならないだけなのに。

この屋敷で、あたたかい家族に育まれてきた。いつか花嫁になるための準備期間を、父と、兄と、母とともに。いとoshい日々である。父ガルスも兄ガエリオも軍人であったから任務で留守にする日は多かつたけれど、帰還を「おかえりなさい」のキスで迎えれば、しばらくは在宅でいてくれた。

〈ヴィーンゴールヴ〉にいるのならお見合いでも……と縁談が持ち上がった途端、はぐらかすように任務へ行ってしまうようになってのは、いつのころからだっただろう。

武官であったという兄がどんな仕事をしていたのか。アルミリアは何も知らない。危険がともなうことも知らなかった。火星に監査へ赴いて、それから不在がちになっていたガエリオが戻ることは二度となかった。

お兄様『も』お仕事がんばって、と子供じみた意地悪をして送り出したあの日、どうして頬にキスをしなかったのだろうかとアルミリアは後悔し続けた。軍人になってから疎遠がちだったカルタのことも、もつと話をしていればと悔恨が胸に刺さってじくじくと痛む。

当たり前だった日常を恋しく思う。

もう戻れないことが悲しくて、どうしようもなく胸が詰まるけれど、亡くなった戦士たちの誇りに恥じないように生きていくことが、残された者のつとめであるはずだ。

マクギリスの帰還は午前十時と聞いたが、〈ヴィーンゴールヴ〉に戻ってくる時間が予定よりも早くなっただけで、アルミリアとの逢瀬の約束が早まるわけではない。

待ちわびる足は落ち着かず、廊下の踊り場に出てはうろうろと迷ってしまう。立ち止まっては時計ばかり見てしまう。

不意に、ボードウイン邸の前に見覚えのある車が停まった。ぱつと顔をあげたアルミリアは窓辺に駆け寄ると、身を乗り出しそうにガラスに両手を触れる。

(マツキー！)

焦がれた婚約者の到着だ。車を降りたマクギリスは運転してきた将校と言葉を交わし、おそらく暇を出したのだろう、青い軍服姿の部下が一礼して去って行く。

車を見送ったマクギリスは、腕時計を見て、そして空を見上げた。微かな風にブロンドが揺れる。きらきらときらめいて、まるで遠い世界の王子様のような。なのに彼は顔を伏せて、指先で前髪に触れる。まるで絶世の美貌を隠しているように、アルミリアには思えてならなかった。

彼の目線の先に何があるのか、アルミリアにはわからない。ぼんや

りと虚空を見つめるひとみは、鳥を見送っていたかもしれないし、それとも何も映していなかったかもしれない。

ただ、悲しい目をしていた。

マクギリスもまた親友を亡くして間もない身だ。兄とは幼馴染みであるとともに、仕事の同僚でもあったという。思いがけずファミリー家当主に繰り上げられて、アルミリアには計り知れない心労もあるに違いない。

(マッキー……)

かけられる言葉はなく、時計の針だけがカチコチと進む。

そして約束の時間になって初めて、逢瀬を告げるチャイムが鳴った。執事が玄関を開き、客人を迎える用意をしている。

アルミリアは鏡に姿をうつすと、両手のひらで両頬をつつんで、ぎゅうつと押し上げた。落ち着いたグレーのワンピースに、白いパンプス。喪服の時間は終わったのだから、沈痛な顔なんてしてはいられない。

(しっかりとして、アルミリア・ボードウィン！ わたしはフェンリルの妻になる女よ)

とびっきりの笑顔で愛しい人をお迎えするのが、淑女としての矜持だ。手袋をはめて、その上から指輪をつける。白いグローブを戒めるように輝く金色のリング。婚約指輪だ。もう十一歳の子供ではいけない、いてはいけない。

逸る足に落ち着きなさいと叱咤して、玄関へと駆け下りる。

「いらつしゃい、マッキー！ お仕事お疲れさま！」

「ありがとう、アルミリア」

飛びついてしまわないように、精一杯の背伸びをして駆け寄った幼いファイアンセに、マクギリスはやわらかく笑って頬を寄せた。

ただ身長差のある恋人のように。それだけで胸がいっぱいになる。

「おかえりなさい……っ！」

ハグを交わした背中ごしに見れば、彼を運んできた車とは異なるリムジンが停車していて、運転手はギャラルホルンの軍服姿ではなかった。

あの金髪の青年はマクギリスの部下ではなく、ファリド家お付きの運転手だろう。

監査局での仕事ときは監査局の部下をともない、新しく異動した統制局での任務には統制局の部下を連れ、私用のときにはファリド家の従者に送迎をさせるよう、マクギリスは取りはからっているようだった。

軍の内情はわからないけれど、カルタ・イシュー一佐の後任として地球外縁軌道統制統合艦隊の指揮官になるのだと噂に聞いた。

ボードウィン家使用人たちに見送られ、アルミリアは温室で手ずから作った白い花束をふたつ抱えて、車に乗り込む。

両腕いっぱいのカサブランカの花束は思いのほか大きな荷物である。マクギリスが手伝いが必要かと尋ねたが、アルミリアは自分で抱えていたのだと首を振った。

前々から約束していた今日の逢瀬は、デートだけれどデートではない。

車窓から見える景色はほどなく、歴代セブンスターズが眠る霊園へとたどりついた。青く整えられた芝生に見守られ、ご先祖様たちが眠っている墓地である。アルミリアがここを訪れるのは、兄ガエリオの葬儀以来だ。

ボードウィン家の紋章たる八本足の軍馬スレイプニールが描かれた門を開き、華奢なヒールで厳かに足を踏み入れる。

「お兄様、お爺さま、ボードウィンに連なる英雄諸卿。ごきげんいかがですか」

花束を抱きしめ、アルミリアは丁寧に膝を折ると、碑の向こう側へと語りかけた。

礼儀正しいしぐさで微笑む。

「ご先祖様がたに、今日は明るいニュースを持ってきたのよ。近ごろは悲しいお話ばかりだったけれど、もう大丈夫。わたし……、アルミリアは、このたび結婚することになりました。といってもね、お相手は以前もご報告したマッキーよ。でも、お式の前にもう一度お伝えし

ようと思ったの。おめでたいニュースは、何回聞いたつていいものでしょう？ それに、次に会いにくるわたしはアルミリア・ファリドなのだもの。アルミリア・ボードウィンとして最後のご挨拶をしないといけないはずだわ」

用意してきた報告を終えて、一度立ち上がる。今朝摘んだばかりのカサブランカの花束を手向けると、両手のひらを祈りのかたちにあわせた。

「……あのね、お兄様。お兄様が、亡くなられても……マツキーがね、娘婿としてボードウィン家を継いでくれるって、約束してくれたの。ボードウィン家はセブンスターズの一家門のままよ。このお墓も、わたしたち夫婦でずっと大切に守っていくわ」

だから安心して、と、続けようとした言葉が、涙に？まれてかすれる。泣いてはだめだと自制心で嗚咽を飲み込む。また子供だからと笑われてしまう。

こぼれおちそうな悲しみを振り切つて、アルミリアは踵を返した。カルタにも白い花を捧げなければならない。今日はそのために来たのだ。

栗鼠ラタトスクの紋章が守るイシュー家の墓碑を振り返つて、ふと、ひどく胸がざわついた。

かつては姉のように慕つたカルタもまた、マクギリスに恋をしていた。セブンスターズの第一席イシュー家の誇り高き一人娘として、席次の低いファリドの庶子と結ばれることは決して赦されなかつたけれど。

花嫁を夢見る少女にとってマクギリス・ファリドとは、まるで絵本から出てきた白馬の王子様だ。透き通るブロンド、伶俐な碧眼。紳士的な立ち振る舞い。彼に焦がれる女性は数知れない。婚約披露パーティーでも、頬を寄せたいと近づく妙齡の淑女たちのドレス姿を、アルミリアは何度でも思い出す。

うつくしい彼女たちから、彼を奪ってしまう。ボードウィン家という血筋と家柄だけを理由に、身の丈に合わない子供でしかないアルミリアがマクギリス・ファリドを手に入れる。

……だからみんなつらくあたるのだろうか。

「アルミリア？」

ざわりと響いた潮騒がアルミリアの心をかき乱して、そして遠ざかっていく。

「マツキー、あのね、わたし……………」

何かを口にしようとして、しかしアルミリアは首を振った。祈りのかたちに組み合わせた指先が婚約指輪に触れて、ぎゅうと握る。

言いたいことは、本当はたくさんある。

マツキーはどこにも行かないで。本当はお仕事にももう行かないでほしいわ。だって死んでしまうかもしれないでしょう？ 戦わなくていいなら、戦わないほうがずっといいでしょう？ 今ごろどうしているのかって心配しながら待つのはもういやよ。あのね、マツキー。あのね。わたし、わたしは――。

無責任なわがままを押しとどめるために、アルミリアはもう一度、みずからに言い聞かせるように首を振った。

ガエリオもカルタも失って、悲しみの淵にいるのはマクギリスも同じだ。なのに、久々に会って何を話せばいいかわからないアルミリアのことも真摯に見つめていてくれる。子供の婚約者がいると笑われてしまう彼のためにアルミリアができることは、一日も早く立派なレディに成長することだ。

花嫁となり、妻になり、母になる『役割』を果たせるなら、きつと誰も指差して笑ったりなどしないはずだ。

「何でもないわ。うんと素敵な結婚式にしましょうね！」

今は笑っていなければ。家柄だけで選ばれたちぐはぐなふたりの結婚式は、また冷たい言葉の雨に晒されるかもしれないけれど。祝福してもらえるかはわからないけれど、それでも。

あなたの帰る場所になるために、わたしはいつも笑っていたって思うの。

誓いをたてようと強がるのに、青いひとみからはころりと涙がこぼれおちる。

アルミリア、と呼んだ静かな声が耳朶を打って、抱き上げられたこ

とがすぐにわかった。マクギリスがお姫様抱っこをしてくれなければ抱きしめ合うこともできないのだ。

「慣れない靴では疲れただろう？ 気付くのが遅れてすまないね」と、やさしい彼は赤くなっただかかを見つけて言い訳にしてくれる。

「マッキー、あのね」

「うん？」

「だいすきよ」

この世界であなただけが、わたしをわたしとして見てくれる。

だからあなたのためにできることなら、わたしは何だつてしたいのよ。

## 第八章 ウイル・オー・ザ・ウイСП【完】

### 025 戦う相手

『へガンダム・アウナスブランカ』——出撃する！』

狼の紋章を戴くハーフビーク級戦艦へヴァナルガンドから仄青い光線がほとぼしる。飛び立つ機影が『ガンダム』であることを、アリアンロッドのMSモビルスーツ隊はさっそく感知したようだった。

ざわりと空気が変質する。あらゆる注意がこちらへと向く。その極端なまでの温度変化は、阿頼耶識のないコクピット内でもありありと感じられた。

はるか遠くに黒煙が見える。どうやらハーフビーク級戦艦が航行能力を失って傾いているらしい。制御の利かなくなった巨躯はエイハブ・リアクターが発生させる重力に従って浮遊するだけの金属塊になる。

隙間を縫って跳ね回る光線はビスコー級クルーザーへセイズ——ウタとイーサンか。

それならあちらはまだ大丈夫そうだと、ライドは細く息を吐いた。サブモニタを一瞥する。接近してくる敵MSは四機。最前線まで突出してくる機体はすべてEB-06「グレイズ」。主武装は九〇ミリ汎用マシンガンで統一されている。

会敵まで3、2、1——。弾丸の雨をくぐる。はらりと身をそらしてかわす。なおも果敢に向かってくる機体と装備と、浴びせられる感情の渦がどうも噛み合わない。

(何だ……?)

奇妙な違和感に、緑色の双眸を眇める。

決定打となる打撃武器を持っているMSが見当たらないのだ。

(それにこの感じ……殺気とは何かが違う……!)

嫉妬、羨望——何らかの我欲。手に入れたというプリミティブな願望。戦略も連携もそっちのけでマシンガンを撃ち尽くす「グレイズ」をいなしながら、ライドは戸惑いを禁じ得ない。



鹵獲が目的なのか。確かにエイハブ・リアクターを二基搭載したMSは七十二柱のガンダムフレームのみであるし、ギヤラルホルンはいまだ、ツインリアクターの機体を実現できていない。

だがギヤラルホルンは最も多くのガンダムフレームを所有してきた組織だろう。この〈ガンダム・アウナス〉だってファリド家が取り潰されたときギヤラルホルンに売却された経緯がある。

三百年前の骨董品にもはや意味などないのだと、ギヤラルホルンは全世界に向けて示したはずだ。

七年前、純血の英雄ガエリオ・ボードウインが、ラスタル・エリオン公やイズナリオ・ファリド公の後押しを得、逆賊マクギリス・ファリドを断罪した。

〈マクギリス・ファリド事件〉によって命の価値は血統にあるという、この世界の真実が証明された。

革命軍は壊滅。クーデターに加担した犯罪者集団も駆除され、悪名ごと闇に葬られた。路肩に咲く花に誰も気付かないように、〈鉄華団〉という民間警備会社があったことすら記憶の彼方に置き去られていく。

命の糧が戦場にあった時代は、そうして非可逆の終焉を迎えた。

だからギヤラルホルンは形骸化した英雄伝説ガンダムフレームを手放せたのだろう。

……自分で放棄したくせに、大人は勝手だ。

ライドは吐き捨てるように嘆息すると、ぐっと操縦桿を握りしめ、ボタン式のトリガーを引く。ビームで牽制しつつ旗艦へヴァナルガンドに取り付かせないよう注意を引きつける。目くらまし程度にしか役に立たないことなど百も承知だ。マシンガンが豆鉄砲なら、ビームは水鉄砲も同然である。

近接戦闘に備え、リアアーマーに懸架していたランドメイスを構えようと手を伸ばす。

ところがライドの眼前で、熱線をもろに喰らった〈グレイズ〉がモノアイをぶつりと暗転させた。

(動きが止まった……っ?)

まるで打ち上げられた魚のようだ。力なくただよう〈グレイズ〉を

目の当たりにして、ライドは目をまたたかせる。ビーム兵器はMSには効かないはずではなかったか。

だが、その挙動には見覚えがあった。

モビルアーマー

〈獅電〉のときと同じ現象だ。M Aと対峙したとき、ライドが乗っていたイオフレーム・獅電はビームの熱に電気系統をやられ、動けなくなった。

ロディフレームに熱線が無効であることはチャド・チャダーンが証明しており、ヘマン・ロディに足をつけて地上戦に対応させただけのヘランドマン・ロディは確かにビームを通さなかった。

いつぞやアバランチコロニー付近で戦った〈ジルダ〉もどきも同様の耐性を持っていた。ロディフレーム、ヘキサフレームとも厄祭戦中期に製造された機体であり、当時のMSにとってビーム耐性は必要最低限の機構だったはずだ。

カズマの見立てによれば、ヴァルキュリアフレームにも理論上無効。〈グレイズ〉はその後継機と聞いていたから、当然ビームは弾くものとはばかり思っていた。

だが厄祭戦終結以降に製造・開発された量産型<sup>マスプロダクト・モデル</sup>という点では〈獅電〉と共通する。

「……それなら、あいつらは止められる!!」

いかに水鉄砲といえど宇宙空間で光は無限にまっすぐ進む。ダインスレイヴ隊はみなグレイズフレームだ。射出専用〈グレイズ〉と随伴機〈フレック・グレイズ〉、あれらがビームで動きを止められるなら。

駆けすがってくるヘグレイズをランドメイスで強制的に黙らせながら、ライドは片手でコンソールパネルを弾く。モニタにダインスレイヴ隊の位置関係を表示させた。

扇状に展開していたのだらう部隊は中央を強行突破され、番犬たちに群がられて風穴をじりじり拡大させられている。

三段構えの中段は約七割、上段・下段約二割が機能を停止。……両端の砲台は概ね無事だ。あの弓さえあれば残弾はいくらでも追加できる。月面基地にはヘヴァナルガンドひとつさっくり沈められる弾数が揃えてあるだろう。無駄撃ちはギャラルホルンのお家芸だ。

「あいつを墜とせれば……！」

照準を合わせ、照射。宙域をまばゆく照らす光の柱が一直線に描き出された。咆哮の切っ先がダインスレイヴ専用グレイズに到達、そして横薙ぎに払う。

ところがビームの強襲はへフレック・グレイズから残弾を取り落とさせただけに終わった。隊列は何の乱れも見られない。

「効かない……!?!」

ただの量産型とは違うのか。困惑とともに、第三射撃のためコンソールパネルを叩く。襲ってくるへグレイズにビームを浴びせるが――やはり効果がない。距離が問題だったのかという疑念はあっさりと碎かれる。

(あいつが整備不良だっただけかよ……!!)

鋭い舌打ちが鞭打つようにコクピットに響いた。ライドはランドメイスを薙ぎ払い、へグレイズの腹を刈り取るように払い除ける。

新たに接近してくる四つのエイハブ・ウェーブの反応もやはりへグレイズ。装備も同じマシンガンだ。頭部を狙ってくる弾丸の雨をくぐる。肩を狙われれば身をそらしてかわす。滑るように着弾を避けつつ、ライドもまたサイドスカートから同じ九〇ミリマシンガンを掴みとった。

牽制、しかしへグレイズは姿勢制御プログラムによりすんなりと回避する。もとよりオートコントロールに長けたへグレイズだ。ならば照準システムも正常だろう。

なぜか攻撃パターンが一定なのは、パイロットの意図と解釈していない。

頭部や肩部をしきりに狙ってくるせいで、くぐるか反るかで回避できてしまうのだ。

だから殺意がまるで感じられないのだろう。頭にコクピットブロックを搭載しているヘキサフレームと違って、ガンダムフレームの頭はただのセンサーだ。パイロットどころか、カメラアイとアンテナくらいしか積んでいない。

メインカメラを破碎する以外にも、手足を挽ぐなり武装を強制解除

させるなり、あるいはコクピットを潰してパイロットを殺すなり、やりようはいくらでもあるはずだ。

量産型のパイロットたちは、相手の動きを止めることを想定していないようにも感じられる。ツインリアクター機であるガンダムフレームに機動力でかなうわけがないのに、推進力の対策もされていない。

こいつらの動きは、まるで、胸部コクピットブロックにパイロットが乗っていることを想定していないかのような――。

(なんだこの違和感は……!!)

逡巡している間にも、敵MS隊はへヴアナルガンドへに近付いてきてしまっている。こちらのMSは二十二機きりで、うち二十機をダインスレイヴ隊攻略とアリアンロッド旗艦撃墜に回っていて防衛ラインを作る余力は残されていない。トロウが双肩のヘビーマシンガンで追い払ってはいるものの、直援機はへグリムゲルデ・ヴァンプへ3号機たった一機である。艦を盾にして死角にもぐりこまれたらブリッジをやられてしまう。

その時だった。

ブランク愛機のセンサーが新たなエイハブ・ウェーブの信号を拾う。

機体の形式番号はEB-06g へグレイズエルンテへ。

腰部・脚部のブースターを強化したへグレイズへの発展型だ。近接戦闘用の武器を持った六機の編隊。月面基地から離脱したときに見た覚えがある。左腕の小型ラウンドシールドからバルカンがほとばしる。

へグリムゲルデ・ヴァンプへ3号機のコクピットでトロウが低く喉を唸らせた。

『このやろう……ッ！』

跳躍。四ツ足で飛びつき腕部マニピュレーターをガツンと蹴飛ばす。衝撃に腕ごと腕がれたへグレイズエルンテへは、しかし左腕のバツクラードで果敢に応戦する。

体当たりをするように押し返し、獣の喉笛へバルカンを連射する。

『――ぐ、やりやがったな！』

空色の獣が身を起こすような一挙動。変形を解いたヘグリムゲルデ・ヴァンプの3号機の左腕——ヴァルキュリアシールドがヘグレイズエルンテのバックラーをじりじりと押し戻す。右手がサイドスカートから引き抜いたのは、エンビから預かってきたハンドガンの片割れだ。

押し付けるようにして発砲する。連射。ガンガンガンと至近距離で撃ちまくればヘグレイズエルンテはなすすべもなく身悶える。なおもトリガーを引き続け、ついにバックラーは完膚なきまでに打ち砕かれた。

そのうちにヘヴァナルガンドを狙おうとした一機をドロップキックの要領で弾き返す。

黄金色のカメラアイが凶暴に光を散らす。

医務室では兄弟がまだ眠っているのだ。目も覚めないうちに船を沈めさせるわけにはいかない。

トロウとて仕事内容がアルミリア・ボードウインの護衛であることは理解している。だが雇用主の命令よりも、家族の生命のほうがつつと大切に決まっている。

取り落とされていた斧フロード・アックス 鉞をとっさの機転でつかみとると、振り向きざまヘグレイズエルンテをフルスイングでぶん殴った。回避運動が間に合わず、胴を潰されて吹っ飛ぶ。パイロットは原形もないだろう。

獯猛に息を吐いたトロウが顔をあげれば、そこには見覚えのある機体があった。飛来する碧の彗星。ライドもはつと気付く。

ヘレギンレイズ・ジュリア——あの女騎士の機体だ。

トロウの双眸が煮えたつように色を変える。ヘグレイズエルンテの右腕マニピュレーターがぶらさがったままの巨大斧を両手に構えると、闖入者に斬り掛かった。

『お前が——!!』

斬撃をジュリアンソードが受け止める。凄絶なスパークが両者のモニタを染め、鏢迫り合いに腕がギリギリと軋む。操縦桿を握る腕をほんの少しでもゆるめれば弾き返されてしまう。一歩たりとも譲れ

ないせめぎあいの中、ジュリエッタが上擦る声を張り上げた。開きっぱなしの通信回線から直接呼びかける。

『わたしは月外縁軌道統合艦隊指揮官ジュリエッタ・ジュリス！ 目的はアルミリア・ボードウィン嬢の保護です！ 無益な戦いはやめてください！』

『だったらそっちが退きやがれ！ いつもいつも先に仕掛けてくるのはギャラルホルンのほうじゃねえか!!』

過剰な戦力をもって殲滅にやってくる。みんなやれば怖くないとも思っているかのように、絶対安全圏から撃ちまくるのがギャラルホルンの常套手段だ。

CGSを襲ったときも、鉄華団を潰したときもそうだった。情報を封鎖するも偽装するもギャラルホルン様次第、ありもしない罪状をでっち上げて世論を意のままに操作して、さも正義の鉄槌を振り下ろしたように支配者側の勝手な都合を振り回す。

それでなくともエンビが傷だらけで戻ってきて以来、トロウは虫の居所が悪いのだ。

頭部バルカンを連打し、ヘレギンレイズ・ジュリアを猛攻する。

『この、犬ツ……!!』

『お前こそ権力の犬だろうが!』

『わたしはアルミリア様を迎えに来たのです!!』

『自分で連れてきておいてツ……勝手なんだよお前らはア——!!』

黄金色のモノアイが剣呑な光を発し、ブレードアンテナに稲妻が駆け上がる。関節がギギギと軋みをあげ、武者震いのような震動とともにヘグリムゲルデ・ヴァンプ。3号機は殻を脱ぎ捨てるように変形した。両手足のホバーユニットから青い炎がほとぼしる。

突撃形態。武器を手放し、体当たりのまま突っ込む。

『うおおらああああああああああ!!』

『邪魔を、——おとおおッ!』

流されるまいとジュリエッタはフットペダルを踏みしめる。脚部、腰部、背部スラストー全開、猛々しく噴き上げられた奔流が力を見せ付けあう。ヘグリムゲルデ・ヴァンプ。3号機も善戦するが、両者譲ら

ぬ拮抗にはほどなくほころびが見え始めた。

ヴァルキュリアフレームはもとより軽量ゆえの機動性を特色とした機構である。〈レギンレイズ〉の高機動発展型には純粋なパワーで劣る。推進力ではレギンレイズ・ジュリアに軍配があがった。

各部ブースターが奔騰すれば、まるで仄青い光の塊のようだ。餓狼を力任せに圧倒し、奔流は彗星のように加速する。

両機もろとも〈ヴァナルガンド〉に激突した。

〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉3号機のシグナルをロスト。

「トロウ!! おい、応答しろトロウ! トロウ!!」

呼びかけても〈ヴァナルガンド〉の船体に遮られてLCSが届かない。薄情なグレイズエルンテ隊は上官だろうジュリエッタを見捨ててライドのほうへと群がってくる。トロウの救援に向かう余裕はない。ランドメイスを一振りして距離をとるが——〈ダインスレイヴ〉が装填準備をはじめている。

ここでこいつらを足止めしたところで意味はないのだろう。先行した〈ガルム小隊〉のおかげで弾数はかなり減っているようだが、中央に風穴が開いたためか逆扇上に陣形を変更し、より攻撃的に〈ヴァナルガンド〉を狙う格好になっている。

こちら側にはジュリエッタ・ジュリス准将がいるのだとしても、リアンロッド艦隊がアルミリア・ボードウィンごと〈ヴァナルガンド〉を沈めるつもりで弓を引くなら女騎士は確実に巻き添えを喰う。

彼女として所詮は民間出身の軽い神輿、戦死者にして『次』を立ててしまえば済むことなのだろう。

目撃者のいない戦いであればこそ、情報統制も容易だ。

そして禁断の砲台が、断続的に矢を放つ。

〈ダインスレイヴ〉が発射されれば近いものから順に被弾していく。一掃だ。着弾とともに吹っ飛ばされ、不明瞭なうめき声が短く途切れると同時に押し流されていくさまは、まさに掃討の一言がふさわしい。MSが、影という影が宙域から遠ざかっていく。〈グレイズ〉も〈グレイズエルンテ〉も転がる石ころもろともすべて巻き添えにしなから、鉄杭は無数に降り注ぐ。

急襲する凶弾のひとつが天啓のように目にうつった。スローモーションのような一瞬。

ああ、これは。

「止 まれええええええ——!!」

このままではブリッジに命中する!! 無意識に突き動かされるように手を伸ばしたのは必然だった。

被弾の瞬間には、あつと声をあげる暇もない。間に合えと願って伸ばしたマニピュレーターを鉄の杭が貫通する。命中したのは手のひらだというのにへガンダム・アウナスブランカの上体がぐわんと振り回された。コクピットまで揺さぶる衝撃とともに右肘の関節が砕け、肩が外れる。アラートというアラートが叫びだす。

それでも理性をかき集めるように顔をあげればへヴァナルガンダムに被害は見て取れない。当たりどころがマシだったのだろう。運がよかった。外装が一部ハリネズミと化したくらいでハーブピーク級戦艦は沈まない。

だが、通信回線からはコクピットを貫かれた断末魔が聞こえてくる。苦悶、喉が潰れたようなうめき声。最期に家族の名前を呼ぶ兵士の涙。スラストターの機能が停止し、あるいはカメラアイを潰されて帰投できないと救援を呼ぶ情けない悲鳴。

ああ、とライドはそつと目を伏せた。

こうした声を敢えて聞かせて戦意を喪失させようとしてもしているのだろう。死を目前にした人間のあがきは、確かに心に訴えるものがある。危険と隣り合わせの宇宙空間ならばなおさらだ。正気の間人ならばきつと恐怖に駆られ、焦燥によって冷静さを削り取られる。

人を殺しても平然と生きていられる獣たちがいかに異常か、思い知らせる心理戦のつもりか。

精神攻撃に屈してやる気はさらさらないが、これほどまでの犠牲を出してもギャラルホルンは変わらないのだろうと思えば、何もかも無駄に思えてくる。体制を維持することが『大義』であると、疑わぬ者だけが生存を特赦される楽園<sup>ディストピア</sup>。

不適合者はへダインスレイヴで一掃してしまえば、不満の声など



あがらない。

コクピットに火花が散る。〈ガンダム・アウナスブランカ〉も右腕を  
持っていていかれた。息も絶え絶えの〈グレイズ〉が這い寄り、最期に一  
旗あげてやると吠えるかのように拾いものの斧を振りあげる。

運よく生き残ってくれたビームで応戦するが、出力が安定しない。  
これまでか。

覚悟を決めそうになった刹那、目の前に迫った〈グレイズエルンテ〉  
のマニピュレーターがぐしやりと砕け散った。

砂嵐を移すだけになっていたサブモニタの一角がパツと灯る。

『ライド!! 無事かッ?』

ハツと顔をあげれば、ぎよろぎよろと特徴的なカメラアイと目があ  
う。〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉2号機の千里眼だ。バイザーを開いて  
露出させたアイセンサーは〈ダインスレイヴ専用グレイズ〉と同様の  
高精度光学ズームを搭載している。漆黒の機体は宇宙に溶け込むよ  
うな保護色で、浮遊するスペースデブリによって恒星の光が遮られが  
ちな宇宙では見落としてしまうのだ。

「ヒルメ……い。ああ、よく戻った!」

『今すぐメインカメラを破壊しろ! 連中の目的はおれたちの掃討  
じゃない、ガンダム<sup>ッ</sup>の首級だ!』

「はあ?! いきなり何を……ッ、ブランカに阿頼耶識はついてねーん  
だぞ!」

右腕を失い、ビームも頼れそうにない。スラスターのガスも残りわ  
ずか、満身創痍の上にメインカメラまで失ったら戦闘の継続は不可  
能だ。

二の句が継げないライドのサブモニタに新たなウィンドウが割り  
込んでくる。

『ライドさん!!』

「お姫さん……?」

なぜ〈ヴァナルガンド〉のブリッジにアルミリアがいる? 中枢ブ  
ロックに隠れていると言い含めたはずなのに、艦長席からパネルに身  
を乗り出してくるのはアルミリアだ。

涙でいっぱい青いひとみから、涙は落ちない。長いまつげに割られた水滴が無重力にきらきら舞い散る。

『へガンダム・バエル』につ……、バエルに乗ってください！』

MSでは戦えない、わたしの代わりに、どうか。

涙の訴えに、目が覚めるような心地だった。アルミリアだつて叶うのなら自身がバエルを駆って亡き夫の足跡を追いたかっただろう。ハーフビーク級戦艦へヴァナルガンドもガンダムフレーム第一号機へガンダム・バエルも、マクギリス・フアリドが死出にもなった形見の品だ。

戦えるようには育てなかった籠の鳥。戦いたいときに戦えない苦しみを、戦う力の得難さを、ライドは知っている。そんな背中をヒルメが押す。

『行け、ライド！ お前がバエルで戻ってくるまで、ここは死守する！』

メインモニタに重なるように道が描きだされる。へグリムゲルデ・ヴァンプⅡ号機からQCCSで飛んできたのはへヴァナルガンドへの帰り道だった。

漆黒の機体が寄越してきたのはそれだけではない。マニピュレーターが放り投げたそれを、左手でどうにかつかみ取る。

エンビの戦線復帰が無理ならばと、トロウとヒルメでひとつずつ持ち出していたハンドガンだ。

「……拳銃自殺とは穏やかじゃねえな」

軽口をたたきつつ受け取ると、へガンダム・アウナスブランカへのこめかみに銃口をあてがう。装甲の隙間に押し付け、めりこませれば不完全でも破壊できるだろう。意を決してトリガーを引く拳動はどうしてか、祈りに似ている。

発砲。

刹那、白い装甲が砕け散る。同時に砂嵐が覆ったモニタの向こう側で、漆黒の機体が親指をたててみせた気配がライドにも確かに伝わった。

## 026 奴隷たちの英雄

ハンドガンで頭部を撃ち抜く。装甲の隙間にめり込ませた銃口からほとばしった弾丸はヘガンダム・アウナスブランカへのダクトを砕き、メインカメラを損傷させた。もう一発。千切れた細かいケーブルが散らす火花と、循環していたオイルがずるりと漏れだす。

三発目。頭が吹っ飛ぶまでには至らずとも内部機構が露出し、白い破片が飛散する。

ツインアイはひしやげて歪み、視界の大部分が失われた。感覚がより研ぎすまされていくようだ。ああ、この空気のざわつきは、モニタに降り注いだ砂嵐のせいではない。

首級を見失って茫然と立ち尽くすヘグレイズエルンテへのモノアイを、ヴァルキュリアライフルが撃ち貫いた。

追い討ちをかけるように白の欠片も片っ端から潰していく。

『急げ！　それでバエルで戻ってこい！』

「わかってる！　……死ぬなよ」

『ああ。だから早く帰ってきてくれ』

大型ライフルを構えなおし、ヒルメは帰投するヘガンダム・アウナスブランカへの背中を押す。わらわらとやってくるアリアンロッドの増援がライドの目に入らないようにと、千里眼がぎよろりと宙域をあらためる。

加勢に現れたのはヘグレイズシルトへのようだ。制圧用の大きな楯に、ハルバードを構えている。猪突猛進なヘグレイズエルンテと比べると足が細く、ブースター出力も過不足なく小回りが利く。集団で囲んで制圧することに適した機体と言えらるだろう。

鉄華団最後の日、ヒルメはあれをイオフレーム・獅電で迎え撃った。ひとりでここを守るのは大変そうだと嘆息する。

エンビもトロウも一緒ではない戦場など生まれてはじめてだ。

(それでもやるさ……！)

腰背部のブースターが力強く青い炎を吹き上げる。頭部のような小さな撃ち貫く無謀を諦めて胴部を狙うも、戦闘練度の高いヘグ

レイズシルトは楯を構えて傷ひとつつけさせない。

さすがにヘグレイズとは違うか。アンカークローを放つがシルドで押し切るように圧倒され、体当たりを喰らって吹っ飛ぶ。

『ぐうう……っ』

そこへ狙い澄ましたようにヘグレイズエルンテが巨大な首狩り斧を振り上げた。

ひゅつと喉が鳴る。とっさに左腕を振り回し、破れかぶれに薙ぎ払ったワイヤーの先、鉤爪クローがヘグレイズシルトの肩装甲をとらえた。振り回されるようにしてどうにか離脱する。バーニアをふかして立て直そうとあがくが、しかしヘグレイズエルンテが追いつがるほうが一足早い。さすがに機動力自慢の機体だ。脚部・腰部のスラスタを全開にして襲いかかる。

巨大斧の軌道はコクピットへの直撃コースだ。回避——間に合わない。

(ライドごめん——!!)

操縦桿から手を離すこともできないまま目をつぶる。脳裏にはトロウにエンビとエルガー——家族の顔が走馬灯のようによぎる。

ところが死に至る衝撃がヒルメを屠ることはなかった。

錆びついたようなまぶたを剥がして目を開ければ、眼前にはヘグレイズシルトの背中。あの大型シールドでヘグレイズエルンテの斧を受け止めているらしい。

一体何が起こっている……? 当惑するヒルメのサブモニタにウインドウが割り込んできた。

『貴様に味方する気はないぞ、ヘグリムゲルテのまがいもの! これ  
は過去の清算だ。我々にも、守らねばならない矜持がある』

オーブンチャンネルで通信を試みてきたパイロットは金髪碧眼の将校だ。三十代半ばくらいに見えるが眉目秀麗で、おじさんと呼ぶことに抵抗感を持つ美丈夫である。(ライドやトロウならば遠慮なく呼んだのだろうか)

ブロンドの彼の旧姓が『モンターク』であることが、その美貌から察せた。

涼しげにつり上がったグリーンアイズが画面ごしにヘルメを見据える。

〈ヴィーンゴールヴン〉において、イズナリオ・ファリド公が金髪碧眼の少年を買い集めていたことは公然の秘密だ。それが七年前の反乱で世界に向けて明らかになったことで、男娼あがりには厳しい目が向けられるようになった。

衣服を与え、食事を与え、教育まで与えてくれたイズナリオ様を恨むだなんてとんでもない——と貴族の温情に感謝してみせなければ白眼視され、恩知らずどもめと罵倒される日々が続いた。

自分はマクギリスのような裏切り者とは違うのだと、踏み絵を乗り越えなければ出世の道が鎖とぎされてしまう。

刻み付けられた古傷を抉られ、世を儂んで首を括った者もあつた。

『我々は、長く生きたほうだな』と男は独り言ちる。

自嘲だった。貴族が愛でるためだけに生まれて死ぬ美少年という生き物ならよかつたのに、生物学的には人間であり、男性だ。ぱつちりと丸かつた目は年月とともに鋭く研がれ、輪郭のまろみもシャープになっていく。絹のような金髪がダークブロンドに落ち着いていき、おおよそ茶髪になる者も多かつた。

ほくろやそばかす、声変わりといった『劣化』を理由に養育を放棄された同胞たちは、……今だからこそわかるが、〈ヴィーンゴールヴン〉内の研究施設に送られ、阿頼耶識システムの被検体となっていたのだらう。

運よくプラチナブロンドを維持できた者だけが生き残り、十三歳を過ぎれば用済みになって士官学校へ放り込まれた。

最後の生存者たちはMSパイロットとなったものの、いかにもイズナリオ公の好みそうな風貌だと下世話な視線がそこかしこから飛んでくる。ご主人様にはいい思いをさせてもらっただろうと。お前が誘ったんじゃないのかとまで。顔や体を値踏みして言いたい放題言ったあとには『被害者面をするな』『恥知らずめ』『お前の外見が悪い』と続けるのだ。

彼らに悪意はない。暴言であるという自覚もない。ただのくだら

ない閑談だ。出自の賤しさという〈罪〉を抱えたままギャラルホルンに足を踏み入れた犬に意思を投げることに、罪悪感などもなわな  
い。

愛玩動物が意思を持ち、あたかも人間であるかのように言葉をしゃべることが奇異なのだ。ギャラルホルンはそういう秩序カーストによって支配されている。

そんな暗闇の底から救い出してくれたのが彼女だった。

『我らの主人は今もカルタ・イシユール様ただひとり！』

出自よりも実力を見てくれた、この世界でたったひとりの女主人。

胸を張りなさいとカルタは命じた。式典での展示飛行を見せる地球外縁軌道統制統合艦隊ならばこそ、洗練された姿かたちもまた得難い資質のひとつだろうと。セブンスターズ第一席イシユール家の誇り高き一人娘カルタ・イシユール一佐の親衛隊として何人なんびとにも馬鹿にさせはしないと。

彼女によつて見出されるまで、容姿端麗であることは搾取の記号であつた。それさえ『美』というシンプルな価値にしてくれた。文武両道。才色兼備。恥辱にまみれた過去の上に、カルタ・イシユールは誇りを与えてくれた。

心ない言葉が降り注いでも彼女ひとりで受け止め、女だてらにと擲揄されても意に介さず、わたしは花嫁にも妻にも母にもならないと肩で風を切つて歩いた女傑。閑職に追いやられてなお第一席の誇り高き一人娘としての矜持を抱き、眉ひとつ動かさなかつた。任務のたび月外縁軌道統制統合艦隊に先回りされても。役目を全うしようと忍耐に徹していた。

病に伏す父君オルサー・イシユール公の名誉のため、地球外縁軌道統制統合艦隊に所属する地球外縁軌道統制統合艦隊家族の団欒のために、カルタ・イシユールは孤独に戦い続けた。

しかしセブンスターズの老人たちが彼女を軽んじるほどに、これ以上プライドを傷つけられまいと抗うようになっていった。父君のため部下のため、耐えるしかできない日々は厳しかったのだろう。耐えれば耐えるほどに増長し、イシユール家の名を蔑ろにし続ける七星会議

のありさまに、耐えかねたに違いない。

いつしか彼女もまた、かつては忌み嫌っていた特権を振り翳し、腐敗した支配者たちと同じ土俵で戦うことを選んでしまった。

イシユウ家を守るために後見人イズナリオ・ファリドを裏切ることのできなかつたカルタ・イシユウ一佐は、雪原で戦死した。

剥がれ落ちてしまった彼女の理想も、潔癖ゆえに抱えた二律背反も、すべて承知で彼女を陥れた男——マクギリス・ファリド。

あの男もまた願ったのだろう。最期まで自由には生きられなかつたカルタ・イシユウが心のまま、高潔なままいられたならばと。

『カルタ様を穢したこの世界への復讐が、もしも叶うのなら……ッ』  
『グレイズシルト』がハルバードを高く掲げる。二機、三機と後に続く。

この楽園を統べる大人の靴を舐めなければ出世は叶わず、地位を奪われ、命すら——。そんな世界でも生き延びたいのなら立ち上がって殺されるより、うずくまって耐えることが賢明な判断だった。

組織には変えられないルールというものがある。個の力ではどうしようもないことであふれている。生まれには貴賤がある。命の価値は血統で決まる。そうした数多の理不尽を黙って呑み込むことを『大人になる』と呼んできた。

これが現実だ、大人になれ——と自分自身に嘘をついて、保身という浅知恵に魂を汚してきた。

だからこうもまぶしいのだろう。何色にも染まらない悪魔の精彩が。

生け贄の館であったモンターク邸の『真実』は暴かれ、貴族主義による孤児の商品化が白日のもとにさらされた。

この世界の〈法〉と〈秩序〉に基づけば犠牲者側の『恥』でしかない過去も、狼の花嫁が導く未来では搾取者側の『罪』になるという。ならばみずから彼女に牙を剥くことで加害者に忠誠を示せと命じられた。

これは踏み絵だ。

本作戦では養子やコロニー出身者、地球外縁軌道統制統合艦隊の生

き残りが起用され、前線へと逐次投入されている。自由平等など望みませんと意思表示してみせよとの命令だ。この世界に適応し、順応しますからどうか生きることと赦してくださいと媚びへつらい、みずから奴隷の足枷をはめる。それができないパイロットは味方に背中から撃たれる。生き残っても帰れる場所などありはしない。

だがもし、もしもアルミリア・ファリドが生き残れば。

我々は肉ではない。〈法〉と〈秩序〉に踏み躪られることを運命づけられた消耗品ではないのだと、ギャラルホルンが定めた不条理にふたたび叛旗を翻すことができるだろう。

マクギリス・ファリドが力を示すまで、この世界は変えられないものだ。誰もが諦めていた。彼が敗れたときでさえ、愚かな男だったと目を逸らした。〈マクギリス・ファリド事件〉の戦犯として貶められた彼の願いは、ギャラルホルンという強大なる権力の前には風前の灯火にすぎなかったのだ。

力に固執した人間の愚かな末路。それが逆賊の亡骸に貼り付けられたレッテルだった。

あんなふうに潔く抗えたならばと、己の弱さを恥じた。

自由平等などという見果てぬ夢を追いかけ、燃え尽きた最期を笑って忘れてしまったのは、この世界は何も変わらない。肉は肉のまま、地面は地面のまま、未来を削り落としていくばかりだろう。

七年ごしに革命が遂げられるのなら、今度こそ、立ち上がる覚悟がある。

今や賞味期限切れのこの命、ただの一度も喰われるためにあったことなどないのだと。

『我ら、地球外縁軌道統制統合艦隊ッ！』

ぴしりと重なった呼び声に答えるように、ずるりと一隻の戦艦が、アリアンロッド艦隊を抜け出すように突出した。何の前触れもなく加速しだしたハーフブーク級戦艦の機影に、ヒルメがひとり身構える。

しかし周囲の〈グレイズシルト〉は敬礼でもするかのようにハルバードを掲げて微動だにしない。



コンソールパネルを叩き、エイハブ・ウェーブの固有周波数を表示させる。

『これは……』と、ヒルメは思わず言葉を失った。

〈ヴァナディース〉——既に売却されたはずのカルタ・イシューの座乗艦だ。

そのさらに後ろから、ダインスレイヴ隊を轢き潰すようにしてハーブブーク級が続いてくる。

エイハブ・ウェーブの固有周波数は同じく売却済だったはずのクジヤン家の戦艦〈フラペンシユマル〉だと語る。

『苦節七年！ 我らクジヤン家忠臣一同がようやく探し当て、取り戻した、これは形見の品！』

『若様は心優しいお方。ラストル様を慕っておられた。よもや復讐など考えなされますまい。……だが、それとこれとは別の問題ッ!!』

『敵の敵は味方とはよく申したものです。我らは一族郎党女子供に至るまで、みなクジヤン家に忠誠を誓った身!』

涙混じりの雄叫びが、彼らの厚い忠誠心を物語る。

クジヤン家最後の当主イオク・クジヤンは正義感が強く純朴な青年で、澆刺として分け隔てなく、部下や使用人の子供とふれあうことも多くあった。幼子たちもみな若様、若様とイオクを慕ったものだ。庭師の娘が編んだつたない花冠を黒髪に飾り、どうだ、似合うだろう！と胸を張ったクジヤン家の太陽。遊び相手のいない子供時代を過ごした背景もあつてか、愛されることに長けた少年だった。

そんな主人が遠征地で戦死したことを感じ取ったのか、愛犬はまるで後を追うようにして息を引き取った。

悲しみに暮れるクジヤン家に追い討ちをかけるように、当主を失ったことで実質上のお取り潰しになると通達があつた。ガンダムフレームは解体され売却、首だけ残してどこへ行ってしまったかもわからない。あれよあれよと右往左往しているうちに、何もかも失ってしまった。

残されたのは後悔だけだ。

見目こそ強くきらびやかなギャラルホルンだが、その実は錆びつき、腐り、ラスタル・エリオンという唯一の柱によってどうにか支えられている惨状である。情報統制によって強大に見せ、傭兵や海賊の力を削いでどうにか体裁を保っているだけだ。ひと押しすれば倒れる砂上の楼閣にすぎない。

髓まで腐敗していることが明らかであれども、柱が倒れてしまったら今度こそ世界は混迷の闇に投げ出されてしまう。

現状維持。

それがラスタル・エリオンの方針だった。

そんな政策に救われている者も数知れない。組織が抱えた不治の病を表層化させることなく秘匿し、地球圏の豊かさを守護しているのは彼<sup>ラスタル</sup>である。

ほころびが見え始めた十年前。力任せに権威を回復した七年前。ガエリオ・ボードウインの活躍がギャラルホルンが統治する世界を救った。

数多の犠牲の上にも『何もしていない、ただ平和に生きているだけ』と清らかな心で屍肉を喰らえる精神性こそ、エリオン公の治世を支えるロールモデルだ。正統なる血統に生まれ、健全に育ち、正しく運命に導かれるまま誇り高く成長した『英雄』によってしか、今のギャラルホルンは正当化しえない。

現状に問題意識を持つことなく、与えられる教育に疑念を抱かず、プロパガンダを体現するかのよう<sup>ヒェーロー</sup>に害獣に石を投げる純血の断罪者。御曹司らが大義の名のもとに逆賊を肅正するとき、そこに理由や原因がなくとも『正義の鉄槌』ということになる。対等な諍いにはなりえない。殺人には貴賤があり、貴人の行なう治安維持は何にせようまくいなのだ。圧倒的な軍事力が、反骨の気概を削ぎおとす。

決して覆らないはずだった階級社会は、残酷にも太陽を貶めた。

主君を失った忠臣に帰るべき家はもはやない。すべてを失って初めて、靴裏の下にべったりと貼り付く無数の腐乱死体に気が付いた。『イオク様、ヨーク様……お元氣な姿を拝見できるだけで幸福と思い、

若様を真にお支えしなかつた我々の懺悔を、どうか……ッ——今度  
は、我々クジヤン家忠臣一同が命を捧ぐ番でございます！』  
〈グレイズシルト〉の一团が、まるで勝鬨をあげるかのように武器を掲  
げる。〈フランペンシユマル〉が方向転換してみせたことで、ヒルメは  
彼らの目的を察した。押し流されそうになりながら、加速しだす戦艦  
に取り付いてどうにか姿勢を維持する。

『うそだろ……特攻……っ!?!』

おぞましい予感を肯定するように、ワタリガラスの紋章を抹消され  
た〈フランペンシユマル〉は愛する主君の名を叫びながら、アリアン  
ロット艦隊旗艦へと突進する。

絶対安全圏に告ぐ。これは同士討ちではない、決意表明であると。  
『ラストル様、どうかお聞き届けいただきたい!! 我らの願いも恨み  
もただひとつ、クジヤン家の未来のみとオ——!』



戦場はここだけではない。この世界のあちこちで、いろいろな人が  
戦っているのだろう。

火星連合議長クーデリア・藍那・バースタインの演説。各経済圏  
の意思表明、質疑応答。街頭デモで声を張り上げる若者たち、労働者  
たち、女性たち——〈ヴアナルガンド〉のモニターでは映しきれない世  
界各地で、戦いは続いている。犠牲も増え続けているはずだ。

艦長席に座すだけのアルミリアは、彼らに手を差し伸べることで  
きかない。

過去の所業を暴露したことでギャラルホルンの権威はふたたび失  
墜し、人々は不安に陥っている。この地獄絵図はアルミリアが作った  
ものだ。

今のままでいいのかと、本当にこれでいいのかと、世界に向けて問  
いかけたせいで世界は混沌に焼かれている。

——知らないほうがしあわせだということもある。みずから考えず、定められた規範に従うことで人類は安寧を手に入れられる。

耳の奥に蘇るラスタル・エリオン公の言葉が、いつにも増して重く感じられた。

ここからは見えないモニタの向こう、もつと遠い世界のどこかでは、家族の暴虐を暴かれた子供が泣いているのだろう。何も知らず、パパは何か悪いことをしたの、と問うのだろう。ママはどうして泣いているのと声をふるわせるのだろう。

秘匿されてさえいればしあわせな家族のまままでいられたのに——と、楽園を踏みつぶされた人々は憤るのだろう。

正論のナイフを降らせ、アルミリアはたくさんの絆を引きちぎってしまった。

きつと誰も、信じていた人の『裏』の顔なんて見たくはなかったはずなのだ。少女を搾取する父も、子供を差別する兄も。破壊と虐殺を繰り返していた治安維持組織（ギャラルホルン）も、現状を明らかにした少年兵たちを悪者扱いして権威を取り戻す支配者も。

知りたくない。信じたくない。やさしくてあたたかい『表』の顔だけ見ていたかったと、思ってしまう。かつてのアルミリアもそうだった。

あんなことがなければ——と革命を恨んだこともあった。

ラスタル・エリオンはだから、何も知らなくていいのだと無知を赦してきたのだ。

植民地を搾取しなければ成り立たない豊かさ。労働者に正当な対価を払わないことに慣れきってしまった冷たさ。自分さえよければいいと他者を道具のように使い捨てることに疑問を抱くこともない、人々の無関心。

そんな停滞した世界では、知性を嫌い、孤独を恐れ、不変を愛し、免罪符を抱きしめる者だけがしあわせに生きていける。

無知と忘却によって守られた肉食者の楽園。

だから知恵の実をかじらされて食あたりを起こしてしまう。

「わたし、とつてもひどいことをしたわ。もしも同じ場所へ墮ちて、また会えたのなら……マツキーはわたしを責めてくれる？」

それとも見放してしまうかしら。虚空に問いかけるアルミリアに答える声は、マクギリスではない。

——さあ？ ……あの世で怒ってりやいいなつて思ってますけどね。おれは。

いつかのライドの言葉である。モンターク商会の少年傭兵部隊〈マーナガルド隊〉を率いる彼は、誰かの言葉を上書きするようなことは決して言わない。そういうところが居心地がよかった。

夢でいいからあのひとに会いたいと願う夜をいくつも越えてきたけれど、たとえ夢で会えたとしても、都合のいいまぼろしを創り出してしまふ自分自身が赦せない。

マツキー。

子供のころのように呼ぶ。思いを馳せる。七年前の彼はどのように、この艦長席に座したのだろうか。

両膝がもぞもぞと落ち着かず、アルミリアは所在なげにオリガミの花をもてあそんだ。慣れないパイロット用のノーマルスーツは、矢面に立つて戦うこともできないアルミリアには不似合いだ。

花嫁になるために生まれ、育てられてきたアルミリアが受けた教育といえはワルツやピアノくらいのものである。そのウインナワルツだって、夫と踊れたことは一度もない。手をつないでいるだけで釣り合わないとくすくす笑われ、父にも無理はするなと微笑ましげに止められた。

妹として生まれてしまった以上、士官学校になんて当然入れてもらえない。パイロットなんてもつてのほかと両親に反対されてしまう。カサブランカを摘んで花束を作っていたころだって、種を蒔くことも、花を咲かせることもアルミリアにはさせられないとやんわり拒絶されていた。

百合を象ったはずの紫色の造花は、紙を折り畳んでできていて、かぐわしく香ることはない。まるでボードウィン家のヴァイオレットに染まってしまったアルミリアのようだと、自傷のようにくちびるを

微笑ませる。

ファリド家のハーブビーク級戦艦へヴァナルガンドのブリッジに、その中央に、アルミリアは到底ふさわしくないだろう。ここは艦隊の指揮をとる『艦長』のための椅子なのだから。ファリド家の従者の血筋に生まれ、士官学校を主席で卒業して、一般の部隊に配属されて経験を積んでファリド家の艦長にふさわしいと認められてようやく座ることが赦される。

権力を振り回し、生まれ得た財力を使ってへマーナガルム隊を雇ったアルミリア・ボードウィンには不相応な玉座だ。

月面基地への旅で、ビスコー級クルーザーへセイズの艦長席にはライドたちが交代で座っていた。航行の指示をだし、火器管制、モビルスーツMS隊の作戦指揮に海賊との交渉まで、彼らはすんなりこなしてしまふ。

アルミリアが紅茶を淹れる練習をしていた幼い時間をすべて使って、彼らは戦闘技能を磨いてきたのだ。

望む望まぬではなく周囲が決めたルールによって、そうさせられていただけだけれど、それでも彼らは彼ら自身が持てる力を愛している。宇宙ネズミと蔑まれても、阿頼耶識システムによってMSを駆る自由を誇りに思っている。

そのように教えてくれた男がいるという。鉄華団団長、オルガ・イツカ。彼らにとっては父であり母であり、死に場所であったのだそうだ。

命をかけるに値する目標を持たたおれたちは幸運だとも言いだげに少年兵たちは笑う。

それなら、アルミリアだってしあわせだ。

最愛の夫は妻をひとりぼっちにするひどい男だったけれど、アルミリアには彼以外のすべてを遺してくれた。

書籍も、財産も、ボードウィン家という帰る家も。もしも未来を探しに旅立つのなら、モンターク商会のお屋敷を。アルミリアがいつか遠い未来でしあわせだったと思えるように、道を照らしてくれていた。

本当は、ふたり一緒に笑っていられる日々だけあれば何もいらなかった。しあわせな花嫁になりたかった。母上がそう教えてくれたように、参列者に祝福されて永遠を誓う花嫁に。妻となり母となつて、一緒に老いていきたくかった。

与えられた教育は洗脳と同義であつたかもしれないけれど、アルミアがそうありたいと願う姿は今も変わらない。生まれてきてよかつたと思えるだけの愛情を家族から注がれてきた。

血統書付きの淑女として産み落とされ、愛する男と婚約をした。〈ヴェインゴールヴ〉では異例の幸運だろう。政略結婚が常態化し、女性には政治の道具でしかない。

差別と搾取で塗り固められた楽園で、アルミアは、淑女には与えられないはずのなかつた未来を手にした。

アルミアのしあわせを壊したのは夫ではない。  
ギヤラルホルンが決めた運命<sup>カースト</sup>だ。

アルミアが子供であることは恩赦を乞うべき『罪』なのに、結婚を決めた大人が責められることはない。マクギリスが養子であつたことを『恥』と笑うくせに、彼を貶めた養父が咎められることもない。

悔しくて両手を握れば、オリガミの花がよれる。

「わたしが一番赦せないのは、わたし自身だわ……罪を罪と知らなかつたわたしは、あなたに償うこともできなかつたの」

夫の謀反を知らされても、志まで理解できなかつた子供のころ、どうしてアルミア・フアリドは彼の理解者たりえるレディではなかつたのだろうか。

「無知だつたわたしが赦せない、お兄様が赦せない、お父様もイズナリ才様もラスタル様も、みんなみんな赦せない……！」

お兄様が羨ましい。妬ましい。幼馴染みであり親友であり、仕事の同僚でもあつた兄なら理解者たりえたはずだ。なのになぜ考えてくれなかつた？ 兄はどうして、二十年もの長い間マクギリス・フアリドを苦しめてきた体制を支持して、犠牲の上の楽園を守ろうとしてしまったのだろうか。友であつたのならどうして、命も尊厳も何もかも奪い尽くしてしまつたのだろうか。

〈法〉と〈秩序〉の番人であるならば、対価を支払おうとしない経営者に何か言うことがあるはずだ。声をあげる労働者を焼き払うのではなく、誰よりも彼らを人として対等に扱うべきだった。少年たちを髪や肌やひとみの色で選別するより先に、今日食べるパンを手に入れるために危険な手術に臨んだ子供たちを『宇宙ネズミ』と蔑む前に、やるべきことがあったはずだ。

脚が不自由なら車いすを、義足を、あるいは無重力環境を。目が不自由ならメガネを、杖を、音声による補助を。人が人らしく、幸福を求めるための選択肢が実現されてこそ世界は『公正』であれるのだろう。テクノロジーによる補助を配備するのは行政の役目だ。

彼はギャラルホルンを裏切ってなんていない。奪われるばかりの過酷な少年時代を経て、それでも少年のように純朴に、すべての人が『機会』を逸しない、アグニカ・カイエルの理想の実現を願っていた。アルミリアはだから、無知蒙昧ゆえに彼の心を見つめることができなかった過去を憎む。

マクギリス・フアリドが願った未来の世界でなら、ふたり一緒にしあわせになれたかもしれない。あのととき革命に『裏切り』だなんてレッテルを貼ったギャラルホルンの報道を鵜呑みになんてしなければ、彼に寄り添うことができたかもしれない。

——みずからの罪を暴かれるのが怖いかな？

そんなの誰だって怖い。罪と向き合うのは苦しい。清廉潔白でありたいという願望は誰しも少なからず持っているものだろう。だから今ある自分自身を正義にするために、言い訳を重ね、弁明をして、正当化しようとしてしまうのだろう。間違っていないと確信したい一心で他者を蹴落とそうとする。

両腕には免罪符を抱きしめて、両足は犠牲者たちを踏みにじる。そんな卑怯な〈法〉と〈秩序〉に守られ、アルミリア・ボードウィンは生きてきた。

悔しき、情けなさに涙があふれて止まらなくて、両手のひらで顔を覆う。紫色のオリガミに、しずくが触れてにじんでいく。罪が洗い流されることはない。



あのへガンダム・バエル〈の白い翼で宇宙へ飛び立つことはできない。い。



MSデツキがせり上がり、帰投してきた首のないへガンダム・アウナスブランカ〈が整備用ドックに到達する。機体が固定されるよりも早く、ライドはコクピットハッチを開いた。

白いノーマルスーツの少年がキャットウオークで大きく手を振り、こつちだとライドを呼ぶ。

無重力を泳ぎだせば、追いつくように合流した錦鯉がドリリンクボトルをふわりと差し出す。片手でキャッチするとライドは「ありがとう」と短く礼を述べた。

三人、四人と次々にライドの周りに集まってくる。川の流れに誘導されて格納庫にたどりつけば、カズマが振り向いた。

へマーナガルム隊〈のメカニック、実質的な整備長だ。背中に阿頼耶識はないが気の置けない元鉄華団の仲間であり、整備の腕も抜群にいい。

軽く手を挙げればゆるくカールのかかった黒髪が無重力に揺れる。「バエルの改修、どうにか間に合ったよ。へガルム小隊〈の整備クルーがよく働いてくれた」

「そうか……！ お前らよくやった！」

手近な子犬たちを両腕でかきあつめるように肩を組んで抱きしめる。ぐりぐりと頭を順番に撫でると、おれもおれもと群がるように飛び込んでくる。

非戦闘員まで薬漬けにされて連れて行かれてしまったと早とちりしてしまったが、ギリウムはちゃんとメカニックやオペレーターを『戦力』として数えていたらしい。こいつらは戦意を認められ、今できる限りの仕事をしてきている。無事だったこと、頑張ってくれてい

ることに熱いものがこみあげる。

「遠慮なく褒めてやっちゃって。こいつら、モビルワーカーM Wでへヴアナルガン  
ド」の主砲外して持つてくるなんて無茶やらかしてるんだから」

「久しぶりだったから、ちよつと手間取ったけど……でもちゃんと使  
えるから！」と予備パイロットだった少年がライドを見上げる。

ヒューマンデブリだったところに海賊船でやらされていた仕事なの  
だろう。戦艦そのものよりも分解し、バラ売りしたほうが買い手がつ  
きやすく、足はつきにくい。

だがナノラミネートアーマーもないMWで外に出るなんて、まった  
く無茶なことをしでかしてくれる。ドンパチやっている真つ最中で、  
それでなくともここはデブリが多く浮遊するヘルーナ・ドロップの  
すぐそばだ。トロウが直援について守ってくれていたとはいえ、外は  
危険まみれだったろうに。

「ああ、ありがとうな。よく頑張ってくれた」

彼らが力を尽くして強化したへガンダム・バエルを見上げると、ラ  
イドはおもむろにヘルメットを取った。癖の強い赤毛がやつと開放  
されて、汗の粒がきらきらと重たいグレーの闇に散る。

「抜かれてたコクピットは『アル』から移植してある。武装はデッドウ  
エイト承知で船にあるだけ積ませてもらったよ。バエルのシステム  
は謎が多くて、固有の装備がどうなってるかわからないから外付けの  
武器だけでも戦えるように調整させてもらった。見かけによらずス  
ラストー出力がエグいから重量に関しては心配いらない。残弾が尽  
きた武装からガンガン放棄パーンしてつてくれていい。引き継がせたブラ  
ンカとアルフレッドのセッティングがどう反映されてるか不安は残  
るけど——、阿頼耶識の動作は正常オールドクリエ」

艦のブリッジはカズマに代わり、今はアルミリアが預かっている。  
……夫マクギリス・ファリドの最期はこのへヴアナルガンによる  
特攻だったらしいから、馳せる思いもあるのだろう。艦長席は明け渡  
し、雇用主から直々の依頼を受けてカズマはアルフレッドことへグリ  
ムゲルデ・ヴァンプ1号機からコクピットブロックを移植する作業  
に取りかかった。

エンビが使っていたヴァルキユリアソードを二本、ヘヴァナルガン  
ドの対艦武装からもらってきた砲身を四本追加して、ガンダムフ  
レーム第一号機へガンダム・バエルは腰元にオーバーサイズの黒い  
翼を二対生やしたような装備になった。

もともとの白い翼とあいまって、六枚羽の墮天使のような外観であ  
る。

「へガンダム・バエルフルアーマー」。バエルの恩寵でどうだ？」

カズマが片目をつぶってみせる。親指をたててみせる愛嬌とは裏  
腹に、手のひらに食い込む四指には切実さがにじむ。

これで最後なら、残っていた装備をすべてライドに賭ける。全力を  
尽くした結果でさえ完全ではないかもしれないという不安はあるが、  
それでも今あるすべてを出し切った。

単騎で艦隊に挑んだマクギリス・ファリドや、死闘の末にMAを撃  
破した三日月・オーガスほどの戦闘力はライドにはない。彼らほどの  
実力者は、もうこの世界のどこにもいない。ヘヒューマンデブリ廃止  
条約〉締結をきっかけに海賊、傭兵、ギャラルホルン兵士でさえ劣化  
の一途をたどっている。

世界の流れに逆らえるほどの力は、お姫様に雇われた少年傭兵部隊  
にすぎないへマーナガルム隊〉にはなかった。

ああと頷いたライドは、挑戦的に笑む。

へガンダム・バエルフルアーマー〉。——ライドを取り巻く少年たちが  
必死にかき集めてくれた力が、この一機に詰め込まれた。

「……へハンニバル〉か。悪くねえな」

やおら喉元のファスナーに手をかける。ギャラルホルンの一般兵  
と同じ仕様のパイロットスーツでは、阿頼耶識につながるができな  
いのだ。インナーも脱いで上半身をさらす。汗ばんだ赤毛が低い重  
力に揺れる。余った袖は腰もとで縛り付けた。

コクピットへ飛び込み、阿頼耶識システムに接続する。どくりと膨  
大な情報量がライドを襲う。全身を熱い血がどくどくとめぐりはじ  
め、バエルの赤い双眸が輝いた。

見送るように手を振って、くちびるを噛み締めた少年たちは帰って

きてくれと叫びだしたい声を噛み潰す。

無数の願いをすべて背負って、ライドは前へ進む。カタパルトハッチへ降りれば、ブランカのビーム放射器が既に用意されている。整備済みだ。ライドが機体を乗り換えていたほんの短い時間でやってくれているらしい。

帰ってきて礼を言わなきゃな。苦笑する。おかげでますます死ねなくなつた。

『コントロールはそちらにあります。行ってください！』

お姫様の激励がブリッジから届く。凜と強く張られた声ににじんでいた涙は、阿頼耶識がなければ感じとることができなかつたに違いない。

それが今ここで果たすべき責任だとして、アルミリア・ボードウインは泣かない。

ああとうなずく。息を吐く。剥き出しの両腕で操縦桿を強く押し出す。

『ライド・マッス！　へハンニバルへ出る！』

愛機へレギンレイズ・ジュリアの手のひらから飛び降りると、息をひそめ、非常用のエアロックを慎重にこじあける。道連れにへヴァナルガンドに激突した蒼のへグリムゲルデもどきに搭乗機を破壊されてしまっていたら、ここから帰ることはできないのだろうと、ジュリエツタは自嘲気味にくちびるをゆがめた。

潜入して無事でいられる保障もないのだ。宙域では依然として激しい戦闘が繰り広げられており、へダインスレイヴの命中だつてありうる。

だが、せめてアルミリアだけでも連れ戻さなければならぬ。

ジュリエツタが意を決してへヴァナルガンド艦内に侵入すると、内部は暗く、しんと静かだった。人気はない。あたりを見回し、ブリッジを指さそうとフロアを蹴った次の瞬間、暗闇から伸びてきた手が視界をよぎった。

ハツと息を呑み、銃を構える。とつさに身をそらさなければ頭部をわしづかみにされていただろう。俊敏な動きだった。

気配も感じられないのに一体どこから——！ 焦るジュリエツタは宙返りの要領で着地するが、四方八方を闇に閉ざされていて、今の方向感覚が狂ってしまった。逃げ道もない。焦燥に浅くなる呼吸をどうにか嚙下する。

そろりと身を低くした次の瞬間、一滴の水滴が見えた。

(そつちか！)

浮遊する水の粒。ブラフである可能性は考えずに銃口を向ける。しかしその手は打ち払われ、ジュリエツタは勢いのまま吹っ飛ばされてしまった。「ぐう……っ！」 肘が外れそうな衝撃、パイロットスーツの柔い部分を的確に狙っている。まるで鉄パイプで殴られたような痛みだ。それだけじゃない。

(無重力でこの瞬発力……！ これが阿頼耶識の、——ツ)

感触からして徒手空拳だとわかるのに、打撃を食らった手首はじんじんと痺れて力が入らない。生身でこの威力か。無重力環境での俊

敏な動作には定評があつたジュリエッタだが、宇宙ネズミ相手の格闘戦となるとこうも不利とは想定外だった。

暗闇に気を取られないよう身構える。駆け出した手首を引きずるように掴まれたが泳ぐようにひらりと抜け出す。銃口がターゲットをとらえた。抜き身のナイフのような双眸が浮かび上がり、ぞくりと背中を怖気が這う。

一瞬にも満たないわずかな隙を見せたが最後、足首を掴まれ、ぶんと振り回されて壁にしたたかに叩き付けられた。

「がはッ……いー あぐ……っ」

壁に縫い止めるように腹にめりこむ銃口。胃液が逆流する。意識だけは手放すまいと歯を食いしばると、頬に一滴の生理食塩水がぶつかった。

ぬるい呼吸が断続的に頬に触れる。おそるおそる目を開けると、目と鼻の先で、さんばら髪を濡らした少年が揃わない呼吸を整えようと両肩で呼吸をおさえつけている。

逃げ出そうにも、ぎりぎり押さえつけられた右手首に指が食い込み、痺れて感覚がない。みぞおちを圧迫する拳銃のせいで身動きどころか声も出ない。両脚も壁に押し付けられている。

せめて左手でハンズアップのポーズを作り、降服を示した。

「……はあ、っは、……話がはやくて、助かる ぜ……っ——今ので傷が開いちまった」

できれば女は殴りたくなかったんだけど、と少年がうめく。ぜいぜいと荒い呼吸に相反して、顔色は青白い。

手負いの獣のようだというジュリエッタの直感は的中し、視線を下げればパイロットスーツの大腿部が赤黒く変色していた。くすんだオレンジ色にじわりと新しい血がにじむ。

水滴は、今しがた医療ポッドから起き上がったためなのだろう。よく見ればあちこち生傷だらけだ。治療中だったことが見て取れる。

暗闇に目が慣れ、この少年がああ赤いヘグリムゲルデもどきのパイロットだと思ひ当たった。茶髪に近いダークブロンド、灰色のひとみ。間違いない。ID上のフルネームを思い出したがあんなものど

うせ偽名だろう。

月面基地内で発見・拿捕し、アリアンロッド兵士が尋問を行なったという侵入者だ。テロリスト

「アルフレツ ド……生きて、いたんですね……」

「お かげさまで？ 家族んとこに帰してくれたおかげ で、よく眠れたぜ……！」

切れ切れでも果敢に軽口をたたき、シニカルにくちびるを歪めた。

……嫌味を言われるのもしようがない。彼にとってはアリアンロッドの指揮官であるジュリエッタこそが拷問を命じた加害者なのだろうから。

「エンビさん—— ジュリエッタさんっ!!」

つたなく壁を蹴つて近付く呼び声に、ジュリエッタがはつと顔をあげる。

アルミリア様……と安堵の色を浮かべる女騎士とは対照的に、エンビはふと片眉をつりあげた。アルミリアが着用しているパイロット用のノーマルスーツは女騎士の予備かと思に至る。スベア

腹芸のできそうにない女だ。ヒルメの日記にあった通り、賛同者と見ていいのだろうとため息をつく。

「……お姫様を、拉致しにきたんだな」

人聞きの悪い言い方に、ジュリエッタが柳眉を歪める。だが否定するのもし言い訳がましい。

ええと簡潔に首肯した。

「ここで彼女に死なれては困るので」

「それは任務か？」

「ラスタル様のお手配です。ギャラルホルン月外縁軌道統合艦隊所属、ジュリエッタ・ジュリス准将が直々にお迎えにあがるよう命を受けました」

「ふーん？ ……その時々で都合のいい奴に尻尾振る権力の犬って、おれ、嫌いなんだけど……、それじゃあどうにもならないってことは、学習させてもらった」

潔癖な正義感は社会悪と紙一重だ。黒をも白にしてしまえる強権

に抗うには、黒は黒だと叫び続けても全滅させられないだけの頭数が  
必要になる。

どんなに正しくても、どんなにやさしくても、聞く価値のあるやつ  
が語らなきや誰も耳を貸さないものだど、今回の一件で身をもって学  
んだ。

いや、知っていた。エンビが諜報任務でこなしてきた演説だって、  
内容よりもどんな格好のやつがやっているかが重要だった。良家の  
子女ふうの服装、大学生っぽいファッション、人種、髪と肌とひとみ  
の色——言葉よりも外見で判断される。中身なんてなくていい。第  
三者の手じゃブラックボックスの蓋は開けられない。

ジュリエッタ・ジュリスも礼にもれず金髪に青いひとみの白人で、  
場合によって『元民間人』と『女騎士』というふたつの服を着られる。  
ラストル・エリオン公の忠実なしもべか。

アルミリア・ファリド姫の理想の賛同者か。

今のお前はふたつのうちのどちらだと、この中でもっとも青さのな  
い双眸が獰猛に眦められる。エンビのブルーグレーは、ジュリエッタ  
のそれとは似て非なる、刃のような色彩だ。

「身の安全を保障するならお姫さんの身柄を引き渡す。ただし条件つ  
きだ」

「その条件とは？」

「脱出用小型艇ランチの誘導」と声は恫喝じみて低くなる。「乗ってるのは全  
員モニターク商会の従業員だ。どこをどう叩いてもホコリの出ねえ  
ドクターや、メカニックにオペレーター、中には子供も、怪我人もい  
る。それを全員生きて安全な場所まで連れて行くことを誓ってもら  
う」

むろん内訳は元ヒューマンデブリや、アルミリアが保護した元少年  
男娼たちだ。どこをどう叩いても埃が出ない——というのは医師く  
らいのもので、他は叩かれれば砕けるような被差別階級ばかりであ  
る。

そんなことはお互い承知だろう。わざわざ申告して味方を不利に  
追い込むような真似は当然しない。



「できなければ?」

「今ここであんたもろとも全滅したって結果は同じだ。取り引きに応じるメリットがない」

「……わかりました。わたしの権限すべてを使い、アルミリア・ファリド夫人とその従者を安全な場所まで送り届けます」

「二言はないな」

「はい。もし何かあれば、アルミリア様はわたしを赦さないでしょうから」

ちらりと視線を落とせば、アルミリアの手にはサバイバルナイフが祈るように握られている。『FOOD 食 ON 物LY の』と書かれているのが何とも不釣り合いで、ジュリエッタはうっそりと笑んだ。

拳銃のたぐいはすべて戦闘員のために出払っているのだろう。お嬢様の細腕には切れ味鋭いナイフのほうが役に立つ。

「ならいい。交渉成立だ」

突き付けられていた銃口が離れる。エンビは壁を蹴ると拳銃を持つ手をひらりを降つて、無重力へと浮き上がった。ついでにジュリエッタが持ってきた銃を拾い、自身のホルスターにおさめてしまう。

傷が痛むのか、しばしただようことで休息を得ようとしているようだった。

「……あなたは、どうするんですか」

アルミリアに駆け寄ったジュリエッタがふりあおげば、少年は悲しく笑う。

「おれにはまだ仕事が残ってる」

どこか遠くを見るように、双眸が細められる。ジュリエッタのひともは灰色がかった青だが、エンビのそれは青みを含んだグレーだ。鉄華団があったところには十歳になるかならないかの幼い子供だったろうに、鋭利に研がれた抜き身の刃のような目をしている。

この戦いもまた『テロリストの敗北』で終わるだろう。歴史を綴るのはいつも勝者だ。この三三三年の間、勝利は常にギャラルホルンの手の中にあつた。

絶対的な権力に逆らう『大人になれない子供』たちは死というかた

ちで淘汰される。諦めて、受け入れて、何も知らないふりをするなら  
生きたまま『大人』になれる。

ここはそういう世界だ。

「生きたい場所も、帰りたい場所も、もうおれにはない」

家族だった連中は帰ってこいの一点張り、鉄華団など忘れられた  
ほうがいとばかりにみんな過去から目を背ける。つらいことを思  
い出すくらいにならなかつたことにしてしまつたほうがマシだと嘆  
く。そんなだから学校環境は一向に改善されないし、結局、誰も何も  
変える気はないのかとため息をついた。

おれたちはただ、大人から殴られない日常を夢見ただけなのに。

ずっとバカにされて足蹴にされて、いいように扱われてきたおれた  
ちが、今度は家族と信じたはずの年長者から『善意で』同じ目に遭わ  
されるのでは、希望なんか持てやしない。

言うことを聞かせるためにオルガ・イツカの名前を持ち出し『団長  
は望んでない』の一言でコントロールしようとする場所には、帰れな  
い。

ただ、生きていてもいい場所がほしかつただけだ。なのに帰る場所  
を作ってくれたオルガ・イツカは七年前に死んだ。人生の『続き』を  
生きることが、もう誰も認めてはくれない。人生を正しくやり直せる  
ようにとアイデンティティの屠殺場に収監されて、少年兵は無抵抗で  
死ぬべき害獣ですと復唱しながら永らえる木偶にはなりたくない。

——だから。

「……死に場所くらい、自分で選ぶ」

ジュリエッタに銃口を向け、距離をとつてから踵を返す。捨て台詞  
が物悲しく、ただよう水滴を揺らした。

そして暗闇の向こうへと消えた彼の行き着くその先を、ジュリエッ  
タが知ることはないだろう。



ビームの光線が宙域を切り裂く。

白き英雄の再来に、宙域の目という目が注意を向ける。三対の翼を広げたヘガンダム・バエルへの登場に集まった視線には、その変貌への驚きも含まれていた。

コクピットで好戦的にくちびるを舐める。ライドにとっては久しぶりの阿頼耶識搭載型だ。

調子を取り戻したビーム兵器がアリアンロッド艦隊を突っ切った。

案の定、両翼に内蔵されている電磁法はロックされていて撃てない。やはり火器は使えないように細工がされていたらしい。索敵システムはヘガンダム・アウナスブランカから問題なく引き継いでいる。ヘグリムゲルデ・ヴァンプ1号機の蓄積データを継承しており、これなら射撃精度もあてにできるだろう。

状況を鑑みるに、敵MSの数を減らすのはまずい。

〈ヴァナディース〉はこちらの側につき、〈フランペンシユマル〉が呐喊した。どちらもライドたちの味方ではないが、あの女騎士と同様にアルミリア姫の理想の賛同者だ。

『バエル……バエルだ…… 准将……！』

不意に動けなくなった〈グレイズ〉から途切れ途切れの繰り言が聞こえてくる。バエル。バエル。夢見るように陶然と、彼は今は亡き上官の名を叫んだ。

『ファリド准将……！！』

『ヘガンダム・バエル……！！ アグニカ・カイエルの魂！』

『ああ、バエルが帰ってきた——！！』

歓喜に沸き立つ声という声が、英雄の再来を叫ぶ。バエル。バエル。長い雌伏の七年を経て、喜びの歌は次第に大きくなり、またたく間にオーブンチャンネルを埋め尽くすほどの大合唱になった。

バエル！ バエル！ バエル！

バエル！ バエル！ バエル！

虐げられた獣たちが英雄を呼ぶ。バエル。バエル。七年前に失わ

れた群雄の長が、ふたたび我々を救いに現れたと。マクギリス・ファリドが道連れを望まなかったせいで現世に置き去られていた魂が息を吹き返す。

救世主の復活に歓喜する。

もう二度と折れない剣を掲げれば、餓狼の雄叫びがスピーカーをびりびりと割るようだった。

「……聞こえてるか、お姫さん。旦那への大喝采だ」

白き英雄のコクピットで、ライドは雇用主に語りかける。感涙にむせぶアルミリアの姿が目には浮かぶようだった。

彼女が待ち望んでいた以上の希望が、この世界にはまだ残っている。革命思想は潰えていない。だからこそ逆賊として断罪された彼の死を悼み、復活を切望する声が月の蛇を喰うほどまでに朗々と響きわたっているのだろう。

この渦が無視できないほど巨大になれば、アリアンロッドの力をもつてしても排除しきれないほどの声になれば。〈法〉を改め、〈秩序〉を再構築することもできるだろう。

罪を償うことで自由平等は実現されるとアルミリア・ファリドが信じ続ける限り、この世界の醜悪さを誰かが見つめるだろう。『公正』とは何かを、考えざるをえない状況に陥った。

ラストル・エリオンとアルミリア・ファリドの対立構図は完成した。

次に軍事クーデターが起これば、次もまたラストル・エリオンが勝利する保障はない。

マクギリス・ファリド以外に誰も立ち上がろうとしなかった敗走から七年、今度は〈革命の乙女〉クーデリア・藍那・バーンスタインや、アーブラウ政府、ギャラルホルン革命派将兵がアルミリア・ファリドの側につき、二度目はないと抵抗を見せることだろう。

世の中に深く根を張ったカースト意識をなくすことはできなくとも、せめて誰も泣かずに済むようなシステムを。

大切な人を愛し、手の届く子供たちを慈み、誰もが人間らしく生きていける未来を。

切なる願いの実現を。

「おれたちで勝ち取るんだ!!」

燦然ときらめく抜き身の刃が、宙域の光という光を集めたように存在を主張する。かつての〈ガンダム・バエル〉が革命軍の士気を高めたあの日のように。

背にした〈ヴァナルガンダム〉が動き出す。まるで最期の日を再現するかのよう。

マクギリス・ファリドが死出の旅路に誰もともなおうとはしなかったのは、いつか来る今日のため、幼妻が革命を望んだときのために戦力を残存させる意図でもあったのだろう。

盛大なる鬨とぎの声はファリド夫妻への祝福をも意味する。

〈ハンニバル〉が腰元の黒い翼を展開すれば、大型滑腔砲が熱をまとう。戦艦の主砲だけあってMSには過剰な火力がある。元ヒューマンデブリの少年兵たちの思いに背中を押されるようにして、ウイングスラスタールが力強く羽ばたいた。

飛翔する白き英雄ガンダムに、青年将校たちが続く。中にはラスタルのために斧を振り翳す〈グレイズエルンテ〉の姿もある。ハルバードが一閃し、〈グレイズシルト〉が応戦する。もう動けない〈グレイズ〉たちもまたバエルを呼ぶ。バエル。バエル。英雄の復活を歓喜する叫びはやまない。

虐げられた獣たちは結束し、強権に牙を剥く。

互いに味方ではなくとも同じ夢を追う。自由平等という見果てぬ夢を、戦いの先に見据えている。生きとし生けるものすべてが己のために戦おうと奮い立つ。

奪われた安息を、みずからの手でつかみとるために。  
革命の狼煙がほとばしる。

——〈マクギリス・ファリド事件〉まで遡った過去七年が〈フェンリル革命〉と名付けられ、一連の軍事クーデターは一応の収束を見せた。

今回の争乱でギヤラルホルンは戦艦やMSを多数失い、経済的にも、社会的にも大きなダメージを受けた。しかし、これまで積み上げてきた発言力を利用し、アルミリア・ファリドが〈革命〉の必要性を改めて世界に訴えたことで、戦場は武力ではなく言論へと移行しつつある。議論は地球圏、火星圏、木製圏にまで広がっている。

逆賊の妻と呼ばれた彼女の立場は、七年前とは大きく様変わりした。

治安維持組織としてのあり方を見つめなおすと約束し、自由平等を願いつける未亡人。もう彼女を子供と笑う者はいないだろう。勇敢な妻を持ったマクギリス・ファリドを笑う者もない。

重ねてきた罪と罰について毅然とした態度で演説する彼女の戦いは、これからも続くだろう。

また、一連の事件との関連性は不明であるが、砕けた月の破片が飽和する月外縁最大のデブリ帯ヘルーナ・ドロップ付近では、正体不明の光芒が観測されるようになったという。

鬼火の原因は投棄されたMSから漏れた気体に引火したものであるとも、エイハブ・ウェーブの干渉により自然発生したプラズマとも、諸説浮上している。

しかし、戦死した兵士たちが投げどころを求めてさまよっているのではないか——という物騒な噂は、まことしやかに囁かれ続けた。

行方知れずの〈ガンダム・バエル〉の首級を得ようと宙域を改めたギヤラルホルン兵士、海賊、捜索隊が誰ひとりとして生きて戻らなかったこともまた、その光芒の不気味さを強調している。

件の不知火は通称を『ウイル・オー・ザ・ウイスプ』。

あるいはこうも呼ばれた。

イサリビ。

## 終幕

P. D. 334

あんたにこの手紙が届いたってことは、おれはもう戻らないんだろう。

おれの機体が動かなくなったら投函されるようにカズマに頼んでおいたんだ。

っても、これを読んでものが誰なのかはサツパリわからない。

おれはユージン・セブンスタークという名前の男にこの手紙を送ったが、鉄華団の生き残りはみんな偽名を使って、捏造したIDで生き延びてる。

だから、これを受け取って読んでもあんたが副団長本人なのかどうか、おれに確かめるすべはない。わざわざ紙とインクなんて高級品使って、届く保証ないって不便だよな……。

すこし、昔話をしようか。

おれはクリュセ郊外の娼館で生まれて、引き取る父親がいなくて捨てられた。女に生まれてれば商品にできたんだろうが、男のガキは金にならない。ま、フツーそうだよな、とびっきりの金髪美少年でもない限りさ。おれはブロンドじゃないし、赤毛ってそのうち色素が安定して茶髪になる確率が高いんだってさ。

おれみたいなのはフツーに傭兵として出稼ぎさせて、弾避けになつて死なすのが一番安全で、一番儲かるようにできてた。今だってそうだ。ヒューマンデブリが廃止になっても、売人どもは別の仕事見つけてうまくやってる。海賊も見逃された。

火星の学校じゃ、おれらみたいな少年兵を生来のテロリストって教えてるみたいだけど、違うよな。

生まれながらの生け贄じゃねえ？（笑）

運が悪かった、生まれが間違ってたってんならそうなんだろう。

だけど、もしも生まれ変わりってのがあるなら、そのときも間違っ

て生まれてきたいとおれは思うよ。

そうしたら困ってるガキが目に見えるだろう？ 自分の目の前が平和だからって、見えないものを見ないフリしなくて済む。自滅するかもしれないなくても、行き場のない連中と一緒にあって本当の居場所を探しに行けるだろ。

ここじゃないどっかを目指して進み続けるほうが、おれには性に合ってるらしい。

だからさ、おれはこれでよかったんだ。IDなんか変えなくたって、一生お尋ね者だって。

案外しあわせに生きられるってことを学んだよ。

さて。

察しのいいあなたならもうわかったと思うが、おれの復讐はこれでおしまいだ。

テロリストは生け贄として死んで、狼にプライドをかじられた汚い大人が新しい戦いをはじめらるだろう。

ここはそういう世界だ。そうだろう？

それじゃ、愛をこめて！

鉄華団実働二番隊（筋肉隊）副隊長 ライド・マッスより。



「ライド……………ッ」

便箋に綴られた文字は、お世辞にもきれいではなくせに思い切りよくセンスがあつてあいつらしい。

手紙を読むユージンの双眸がくしゃりと歪む。便箋を握る手がどうしようもない感傷にふるえた。

そのときである。

聞き覚えのないブレーキ音が外からいくつも響いてきて、ユージンはハツと顔をあげた。



火星連合議長のオフィスに来客予定はないはずだ。反射的に窓まで駆け寄れば、やはり見覚えのない高級車。さらに護送車じみたつくりのトラック二台、三台と続く。

停車したすべての影にギャラルホルンのエンブレムが見て取れた。開け放たれた扉から降り立つ緑色は、見紛うはずもないアリアンロッドの軍服だ。

仮面じみたヘルメットで顔を隠した歩兵がぞろぞろと降り立ち、――ざつと五十人、いや、もつとだ。

噂の強制査察か。

鋭い舌打ちが静寂を鞭打つが、オフィスビルは兵士たちに取り囲まれてしまった。先頭を歩く女騎士は、館内に足を踏み入れたのだから。

ここは十五階だ。ビルごと封鎖されては逃げ場もない。

どうすべきかと奥歯を噛んだそのとき、デスクの上のタブレットがビイイと叫び出し、ユージンは両肩を大げさなほど飛び上がらせた。

……まったくタイミングが悪い。心臓が口から飛び出すほど驚いてしまったが、送信元はクーデリアだ。

内容はラテン語の格言が一行きり。

「<sup>戸</sup>Hannibal<sup>ロ</sup> <sup>ニ</sup>erat<sup>バ</sup> <sup>ル</sup>portas<sup>タ</sup>」……？」

そのフレーズは確か、危険が迫っているという意味ではなかったか。

さつと血の気が引くがここから飛び降りることは不可能だ。そうこうするうちにもオフィスの扉が次から次へと開けられていく。

銃声は聞こえてこない。おそらく誰かを探しているのだろう。

ついに目の前の扉が開かれ、ぞろぞろと響く足音が室内へなだれ込んでくる。

先導する月外縁軌道統合艦隊ジュリエッタ・ジュリス准将が白いブーツの踵を鳴らした。

マシンガンの銃口に見つめられて、ユージンは諦めたように両手を

挙げる。

ジュリエッタの目配せで、兵士のひとりがおもむろに銃をおろして進み出た。

開いた両手で仮面を脱げば、癖の強い赤毛がようやく開放されたとばかりに揺れる。

「お迎えにあがりました。元鉄華団副団長、ユージン・セブンスターク殿」

The END.

## 断章 朝まで続く永い夜 前編

P. D. 336

ああ、ようやく帰れる。

……うん？ いや、今日はアルミリア様が視察にくるって話だろう？ お帰りの船に便乗して、俺も地元に戻ろうと思ってる。

休暇じゃなく、除隊を申請しようと思うんだ。

俺の地元、シアトルなんだよ。SAUの北部も北部、アーブラウとの国境線まで車で二時間って距離でさ。そう、魚介が最高に美味いところ。俺のおすすめはオイスターな。ロブスターの巨大さじゃ東海岸に一步劣るけど、クラムチャウダーは西海岸がオリジナルだよ。あー帰ってー！

実は俺、18のときに大学受験に失敗してさ。両親が無理して学費出してくれて、親戚のツテでギャラルホルンに志願して……教官のコネでアリアンロッドに入隊させてもらえたんだ。そのときは取り返せたと思っただよ。これで順風満帆に返り咲けたって。家族に顔向けできると思った。

なのに、それからの俺の人生と云ったら、もうめちゃくちゃさ。

ある日突然、SAUとアーブラウの戦争はエリオン公が黒幕だっただなんて濡れ衣を着せられたんだ。覚えてるだろう？ あのヘマクギリス・ファリド事件だよ。そう、それ。ああ、あれから十年も経つのか。時間が経つのは早いよなア。クーデターが起こったときは、本当、どうなるかと思っただぜ。

紛争の原因が何であろうと俺には関係ない。ファリド准将が戦死したって聞いたときは、不謹慎だけど心の底からホッとしたよ。あのときの俺は、とにかく自分が勝ち馬に乗れるかどうかで頭がいっぱいだった。

それからは真面目に仕事に取り組んで……出世欲があったわけじゃなかったから、安定した収入があればそれでよかった。なのに〈フェンリル革命〉で裏切り者に逆戻り！あの国境紛争は『白色テロ』だったって確定する方向に世論が動いて、アリアンロッド所属だった俺が帰省なんかしたらどうなるか……。

けど、ここまでやれば大丈夫だろうか？せつかく入隊させてもらったアリアンロッドを諦めて、こんなアウトローに身をやつしてまで地元の側についたんだ。もう充分頑張った、そうだよな？

だから俺はここらで退役して、実家に帰って、手頃な嫁さんでももらって、分相応に暮らそうと思うんだ。退職金も年金も弾んでもらえるって話だし。生きてるうちに親孝行しなきゃだろうか？反抗期ごっこはおしまいさ。

……うん？

なんだよこのガキ、どっから……おい、お前、やめ、待つ——

!!

銃声。

そして、一連の告白が彼の最期の言葉になったという。

不運な目撃者は声を詰まらせながら、同僚が目の前で惨殺された過程を語った。見かねたライドがエチケツト袋を手渡すと、涙声で「すみません」とことわろうとした言葉もなかばに嘔吐する。

血飛沫と失禁によって汚れたアリアンロッドの軍服を恥じる余裕もないようだった。

(……無理もねえな……)

同僚が目の前で拷問のうちに殺害されたのだ、正気を保っていられないほうがむしろ正常だろう。健全な精神を持っていたことが裏目に出てしまう状況なんて、戦場にはつきものである。

彼よりも上位の階級章がついた軍服に身を包むライドは、同情に目を眇め、胃液のストックがなくなってもまだ嘔吐をやめられない証言者の背中を見つめたが、そのうち勘案に疲れて目を逸らした。ため息をつく。死体はひとまず遺体袋ポデイ・バッグにおさめたものの、このロツカー

ルームはもうだめだろう。換気口は正常に動いているはずだろうに、それでも緩和しきれないほどの死臭が充満している。

曲がりなりにライドは少年兵育ちであるし、死体など見慣れている。折れ曲がっていても、臓物をぶちまけていても、今さら動じることはない——が。

「さすがにひでえな」と、独り言を敢えて聞かせてやる。

すると哀れな目撃者は、嗚咽をこぼしながらうなずいた。吐瀉物の上に降る涙は、生理現象だけが原因ではないだろう。

殺人現場となったここは、ハーブビーク級宇宙戦艦へヴァナルガンDのロツカールームだ。主にM<sup>モビルスーツ</sup>Sパイロットたちによって使われており、居住者の誰がいつ訪れても不思議ではない。

証言によれば、今日の訓練を終え、同僚と談笑していたところだったという。

——アルミリア様の視察を最後に退役して、家族のもとへ帰りたい。革命に興味はない。

遺言となった彼の言葉の内容は、それだけだったようにライドには思えた。

かねてより革命思想を『反抗期』と形容していたらしい彼の真意がどこにあったかは、今や何とも言えない。

殺人鬼が彼をあの世へ送ってしまったからだ。

ロツカーの陰から小柄な人影がぬうと現れたと思うと、おもむろに銃口を向け、静止を叫んだ彼の脇腹に一発目の弾丸がお見舞いされた。彼は尻餅をつき、逃れようともがいたが、抵抗を封じるように二発目が脚部に叩き込まれた。膝を碎かれる痛みにうずくまり、とっさに丸めた肩へと三発目。断末魔をほとばしらせる余裕も与えず四発目で耳を削ぎ落とす。衝撃で倒れこんだ体を蹴って仰向けにし、そして彼の意識が途切れるまでトリガーを引く指を止めなかった、——ひとりの少年兵。

気絶か死亡か、意識が途切れたらあっさりと銃をおろした。

遺体に致命傷となる外傷はなく、循環性ショックによって絶命するまで放置されたことが直接の死因らしい。

……痛ましい事件だ。

少し離れたチェアに腰掛けて証言を聞いていたアルミリアは、長いまっげをそつと伏せた。

「同志たちが傷つけあうようなことは、これでおしまいにしたいものですね」

タブレットを両腕で抱きしめる。画面には殺された兵士の履歴書レジュメが表示されている。

略歴によれば彼は現在は33歳。P.D. 303年にSAUで生まれ、19歳で訓練校に志願し、22歳で卒業。月外縁軌道統合艦隊〈アリアンロッド〉の第五艦隊に配属されたとある。

P.D. 325年に勃発したアブラウとSAUの国境紛争は、その実、ラスタル・エリオン公の密偵ガラン・モツサが誘発させ、制御していたことが告発された。あの悲劇はアリアンロッドが職域を侵してまで仕組んだテロであつたと全世界に向けて暴露されたのだ。そのことで家族や隣人から非難されはしないかと、彼は肝を冷やしたのだろう。

結果的に革命軍は敗北し、一連の出来事は〈マクギリス・ファリド事件〉と名付けられて収束した。

彼の生活もまた、アリアンロッド艦隊——ラスタル・エリオンの勝利によって守られた。

……アルミリアにとっては最愛の夫を不当に貶められ、孤独と絶望の底に突き落とされた苦い記憶だ。

だが、エリオン公の罪状が隠蔽されることによって救われた兵士たちは、相当な数いたのだろう。のちにライドが〈ガンダム・バエル〉を再起動させ、革命思想が息を吹き返した折りにも、あくまでも故郷に帰るための布石としてアルミリア側についた者たちも少なからずいるようだった。

彼にとつても、アルミリア・ファリドに賛同することは過去の清算でしかなかったのかもしれない。

そして、これで胸を張って故郷うちに帰れる——とロツカールムで友人相手に本音を打ち明けたところを、惨たらしく殺されてしまった。殺人鬼は十代半ばと思しき少年だったという。拷問の間じゅうずっと、彼が生き絶えるその瞬間まで、まるで次なる獲物を値踏みするかのように、緑色のひとみでじいっと目撃者を見つめていたそう  
だ。

怯えきった証人に反撃の意思がないことを確信したのか、そのまま部屋を後にした。

「エヴァンでしようね」とライドがつぶやく。

乗艦する少年兵たちの中でも最も排他的なグループ「ヘガラム小队」、その鉄砲玉がエヴァンだ。17歳になっているが実年齢より幼く見える。

かつてモンターク商会所有の少年傭兵部隊「マーナガラム隊」が火星の共同宇宙港「方舟」の格納庫に隠れ家を持っていたころ、侵入者を生きて返さないという物騒な防衛ラインを形成していたのが彼らだった。防犯カメラのない場所で悲鳴をあげさせることなく抹殺する手口は、彼ら「ヘガラム小队」のものと特徴が一致している。拷問のとき、彼らは動脈を傷つけないのだ。そうすることで出血は少なく済み、苦痛は長く続く。意識が飛べば終わりともなし、剥ぎ取った衣服を雑巾がわりに使って証拠隠滅を計る。

黒い髪に緑色のひとみ、十代半ばのパイロット。特徴からして下手人はエヴァンで間違いないだろう。

「呼び出しますか？」

「……ええ」

ライドの提案に、アルミリアは頷くことしかできなかった。

ふう、と、小さくため息をつく。膝の上に置き去りの白いハンカチに目を落とす。11歳で夫と死に別れ、14歳でモンターク商会を引き継いで、18歳で革命の指導者になって、……いつしか血なまぐさい事件にも慣れてしまった。

やおら天井をふりあおぐ。

なぜかはわからないけれど、どうしようもなく、誰かを赦してあげ

たい気持ちになった。

この月外縁でアリアンロッド艦隊と革命軍がぶつかってから、三年といくばく。〈ガンダム・バエル〉の再起動をきっかけに、ギヤラルホルンは転換期を迎えている。

生まれも身分も関係なく、人は人だと認められる世界を実現したくて、アルミリアは力を尽くしてきた。

しかしすべてを救うことはかなわず、広大なデブリ帯ヘルーナ・ドロップにて激突したMSや戦艦の残骸を回収するには至っていない。

停戦信号が輝いた刻を<sup>とき</sup>保存するジオラマのように、戦場は放置されたままだ。

回収のための人員と予算が捻出できなかったのである。

この広い宇宙のそこかしこには厄祭戦の遺物が散らばっているというが、それらが『デブリ帯』と呼ばれるようになる以前には、各宇宙で行われた人々の祈りがあつたのだろう。

なすすべなく生き絶えていった犠牲者たちの亡骸もまた、失われた時間とともに凍りついている。

今を生きる人々だけでも救いの手を差し伸べなければとアルミリアは奔走し、残骸の回収は難しくとも補給なら続けていけることをつきとめた。

アリアンロッド艦隊の旗艦であったエリオン家のスキップジャック級戦艦〈フリズスキャルヴ〉、ファリド家のハーフビーク級戦艦〈ヴァナルガンド〉、同じくクジャン家の〈フランペンシユマル〉、カルタ・イシユアの座乗艦〈ヴァナディース〉、そしてアルミリア・ボードウインの〈ヘイズ〉の集合体として維持する。

引き離すのではなく融合させることが正式に決定され、〈ウェイル・オー・ザ・ウイスプ〉と名付けられて新たなサテライトベースとなった。

当初はIDを持たない少年兵たちの療養の場と位置付けられ、ギヤラルホルンの医療技術部、兵站部隊、技術開発班が送られた。



その後、各部隊に続いて形ばかりの搜索隊らも艦内に移り住み始め、月面基地の一部としての地位を確立しつつある。ライド・マツスが特務三佐待遇でギャラルホルンに入隊して以降、アリアンロッド艦隊の中でも革命を支持するメンバーたちが着々とヘウイル・オー・ザ・ウイスプに集まっていた。

そして現在のギャラルホルンは『ファリド派』と『エリオン派』という二分裂の状態にある。

思想を異にするふたつの派閥がおよそ対等な対立関係を築くに至ったのは、アルミリアの内部告発とともにへ革命の乙女くクーデリア・藍那・バーンスタインの再起があり、火星連合議会やアープラウ政府による支持表明があったからに他ならない。

戦場ではライド・マツスによるへガンダム・バエルくの再起動が、七年間ずっと息を潜めさせられていた革命思想がふたたび沸き立ってきたけとなった。

クジャン家の忠臣たちやカルタ・イシユール親衛隊がハンニバルの奮戦に続き、へマクギリス・ファリド事件くはまだ終わっていないかつたことが公に認められた。

弾劾により、ギャラルホルンの罪過は明らかになった。

P.D. 325年から333年にわたる静かな戦争と偽りの平和はへフェンリル革命くと名を改められた。

アルミリアは今後のギャラルホルンの課題は問題改善と治安維持に取り組んでいくことと約束し、かつてマクギリス・ファリドが願ったように、人が人らしく生きられる平等な組織に回帰していくと誓いを立てた。

革命は大きな爪痕を世界に刻みつけたが、ゆるやかな再生と自浄が行われているはずとアルミリアは信じていたのに。

(わたしは……ひとを信じすぎてしまったのかしら)

三年あまりの時間をすべて使って、アルミリアは傷ついた兵士たちのために何ができるかを考え続けてきた。少なくともアルミリアはそのつもりだった。脚が不自由なら車いすを、義足を、あるいは無重力環境を。目が不自由ならメガネを、杖を、音声による補助を。この

世界がフェアであるための選択肢を、作り出さねばと力を尽くしてきた。

今回の訪問も、個人用ウィングスラスターの調整のためだ。バックパックに装着し、車いすの代わりとなる小さな翼を、地球本部へウィーリングールヴで研究・開発している。

技術者たちは驚くほど早いペースで低重力用の『脚』を作り上げてくれた。〈マーナガルム隊〉の少年兵たちが被験体として協力してくれているおかげで、今後三年以内には実用化に漕ぎ着けそうだ。

アルミリアはだから、この〈ウイル・オー・ザ・ウィスプ〉に暮らす兵士たちもまた、ひとりひとり問題に向き合い、自立と自律によって自由平等を目指そうとしてくれるものとはかり思っていた。

……いや、違う。アルミリアは革命側につくこと自体を目的と考える兵士のことを、失念していたのだ。

同志でも戦友でもない、ただどちらに所属するかを選択した職業軍人。思想や理念がどうあれ、官軍の側に身を置くことで自身と家族の安全は守れる。

ここはそういう世界なのだ、ただ無事でありたいと願うことは、とても自然なことだろう。

生きるか死ぬかを天秤にかけなくて住む場所で生きていたい。

きっと、誰もがそうだ。

派閥が大きくなるほどに、そういった兵士たちも増えていく。予想できたはずだった。エリオン陣営とファリド陣営が対等に議論するようになったことは喜ばしいが、現状維持も革命も、どちらも安全に選ぶことのできる選択肢になったのだ。

そして負の側面は、争いというかたちで表層化する。

目撃者となってしまうた哀れな兵士を下がらせると、入れ違いに少年は姿を表した。

証言通りの黒髪に、緑色のひとみ。あどけなさの残る顔面には生々しい傷跡が残されている。〈ガルム小隊〉の隊長だ。

「ギリアム？ エヴァンはどうした」とライドが片眉をつりあげた。

車椅子を押してきたヒルメに視線をやるが、困ったように苦笑するだけで答えない。ちよつと咳き込んだタイミングでライドの疑問をスルーして、器用に足だけで両輪のロツクをかけた。

確かにギリアムとエヴァンは一卵性双生児で、顔立ちこそ同じでも見間違えることはありえない。

双子の兄・ギリアムは三年前の戦いで足をやられ、重力ブロックでは歩くことができないのだ。まだリハビリの段階にもないギリアムが、このロツカールームにやってきて闇討ちなど不可能だろう。

証言によれば二本の足で歩いていたとのことだったから、下手人は双子の弟・エヴァンで間違いない。

「どつちだつて同じことです」とギリアムはまつすぐにライドを見上げた。

「いくら以心伝心の双子だつっても、お前らは別人だろうが……」

「裏切り者をやっちまったんでしよう？ 俺たちならみんなそうする。もちろん、俺も」

一度裏切つたやつは、次も必ず裏切るから……とグリーンアイズが忌々しげに眇められる。声変わりを済ませたせいか、やけに不穏な気配を帯びていた。

いや、17歳にもなれば否が応でも大人びてくるものか。

「そうか……」とライドが独り言めいて嘆息すると、ギリアムは不安そうな目になる。

「……俺たちは、またなにか間違えましたか？」

捨てられた子犬のように、ライドを見上げる。心細げに声が揺れた。

だが『裏切り者の粛清』に対する罪悪感は微塵も垣間見せない。ギリアムの関心はただ、ライドやアルミリアの意向に背いてしまったかどうかだけだ。

かつてギリアムたちが同じ手口による防衛ラインを築いていたころ、彼らへ番犬ガラム小隊の機転は確かに仲間たちを守っていた。海賊船育ちの少年兵は、侵入者を水際で排斥することには非常に長けてい

た。

ただ、あのころの警備体制は、速やかに射殺し、証拠を隠滅する――というものだったはず。

今回の一件は防衛というより処刑だ。恐怖による支配、見せしめの意味合いが強い。おそらく、ギリアムたちがモンターク 商会に保護される以前に宇宙海賊どもが裏切り者を粛清していた手口なのだろう。

ギリアムたちは、その恐怖政治体質を無自覚に受け継いでしまっているようだった。

こうした残虐性がこれまで問題にならなかったのは、ひとえに〈マーナガルム隊〉の堅牢な結束ゆえだろう。

実働1番組へハーティ小隊〉はみな鉄と血の絆を重んじ、弟分たちを掛け値なしに大事にする。2〜5番組の元ヒューマンデブリたちも総指揮官のライドをはじめとする兄貴分によく従った。ギリアムは指揮能力に長け、内輪揉めひとつなかった。

それもこれも、彼らの内側に根を張っていた階級意識、上下関係による自己統制、力を持つがゆえの攻撃抑制が、あの格納庫を安全に保っていただけだったというわけだ。

外敵には容赦ない。

「すいません。間違ってたんなら、俺……」

車椅子の上で小さくなるギリアムに、アルミアはそっと歩み寄ると静かに膝をついた。

握り締められた拳に手を添える。

三年前にはあどけない子供だと思っていた少年は、ずいぶん大きくなった。

「ひとを殺すことは、可能な限り、避けなければならなかったわ」

祈るような切実さで、アルミアは噛みしめるように言葉を選ぶ。「でもね？ それは、あなたたちの不安をそのままにしておいていいという意味ではないの。ここは『戦場』ではなく『生活圏』であるはずだった……不安要素を武力によって排除しなければ安心して暮らせないような場所であってはならなかったのよ」

殺されてしまった彼はただ、平和な故郷に帰りたかっただけだろう。他意はなかったのではないかと、アルミリアは思う。もしかしたら、革命を軽んじていたのかもしれないけれど。どうして『反抗期』という言葉を用いたのかも、もうわからないけれど。

わからないからこそ悪いように考えたくはないとアルミリアは思ってしまうのだ。

犠牲者の心を美化したくなってしまふ。善良な軍人であつたのに殺されてしまったと思いたくなる。

だって、彼だって一度はマクギリス・ファリドの思想の賛同者であつたはずなのだから。

「彼の死を、わたしは悲しみます。あなたが彼を手にかけてしまったことも、とても悲しいことです。こんなことは二度と起きてはならないわ」

「ごめんなさい……」

「そうね。一刻も早く、あなたたちが人を殺めなくても安心して過ごせるように、わたしももつと気をつけなければいけません。だから、『裏切り者』かもしれないと思つたときは、わたしやライドさんにも教えてくださいな？ みんなで話し合つて、伝え合うことで、それぞれの思いがわかります。わたしは、それを『真実』と呼びたいわ」

はい、とギリアムは素直に頷く。だが彼ら〈ガルム小隊〉の面々にとって、やはり今回の殺人は正当なリスクヘッジにすぎないものなのだろう。帰郷を望む兵士を裏切り者と断定し、拷問のち排除したことに、アルミリアが想定するような人並みの罪悪感を覚えることはない。

仲間と居場所を守るためには、見せしめのようなぶり殺す必要があつたのだろう。

そうしなければいつ全滅してしまうかわからない過酷な戦場を、彼らは生き延びてきた。

「……お姫さん。今日はもう、部屋で休んでください」

「お気遣いありがとう、ライドさん。でも、わたしは……」

「においがついたら厄介だと。現状ここは水不足で、あんたの長い髪

をそう何度も洗える用意はねえらしいんです」

声のトーンを落として諫言すると、ライドは言いにくそうにアルミリアのそばに膝をつく。ヒルメから何事かの言伝を受けたようだった。

目をそらしてしまったヒルメの表情は読めない。だがライドの声音にはどことなしに焦りがにじみ、ふたりがそれぞれに何かしらの葛藤を抱えていることが伝わってくる。

「一体……何があったんです？」

ライドは横目にヒルメをうかがってから、はばかりようにアルミリアの耳もとで声をひそめた。

「今回の件と、直接関係があるわけじゃなさそうなんですが……、」

水が貴重であるのは、今に限ったことではない。宇宙コロニーはみな水不足と隣り合わせだ。循環システムがあるだけで自給ができるわけではないので、水資源は地球からの輸入を頼っている。月面基地や船舶も同様、テラフォーミングがなされているはずの火星ですら、水は貴重だった。

鉄華団残党にせよ元ヒューマンデブリにせよ、幼少時代に風呂に入る習慣がなかったのは、そうした背景に由来する。

ところが、月面基地から移り住んでくるギャラルホルンの軍人には気兼ねなく湯水を使おうとする者が多い。

水資源が豊富な地球の出身なんだろうと嫌味を言う兵士もいれば、使用基準量を厳守させようとする兵士もいる。少しくらいいいじやないかと笑う兵士もいる。自分だけ節水するのも馬鹿らしいと節度を放り出す兵士も。衛生状態は大切だという主張、水不足への懸念……、さまざまな立場から摩擦が起こっている。

面倒に巻き込まれるのが嫌だからと、ヒルメやギリアムたちもしばらくシャワールーム付近にすら近づいていないという。

指導者であるアルミリアに限ったことではなく、これ以上の死臭をしみつかせれば、いろいろと障りがある。

ライドから耳打ちされた現状に、アルミリアは言葉を失ってしまった。

「まあ俺もここに住んでるわけじゃないんで、……これでも氷山の一角なんだろう、ヒルメ？」

「密告者みたいな言い方やめてくれよ」

目を背けたヒルメの返答は煮え切らない。言葉はNOでも態度はYESだ。

アルミリアの青いひとみが大きく見開かれ、くちびるは色をなくす。

「そんなことが……」

「……すみません。告げ口するつもりで来たわけじゃないんですけど」

「バカ野郎、飲料水不足に発展したらどーすんだ。早いうちに手を打たなきゃならねえ。——お姫さん、一旦ここは開かずの間に」

「ええ……」

立ち上がろうとするアルミリアの前にライドが手を差し出す。厚意に甘えて、その手をとった。ふらつく足はしかし地面のありかを見失って、思うようにアルミリアを立ち上がらせてくれない。

膝の上に置いていた白いハンカチがはらり、舞い落ちたことには気づけたが、アルミリアはそのまま意識を失ってしまった。

## 後編

“子供だから”。

それは、正当な理由なのだ。

アルミリアはまだ11歳だから、七星饗宴なんて分不相応なのだ。おしめのとれたばかりの子供のくせに、ウエディングドレスだなんて。似合わない。つりあわない。

おかしいのだ。

(花嫁なんて、おかしいんだ……だからこれは、当然のこと……つ)

くちびるを噛み締めて、アルミリアはただただ壁の花に徹するしかない。

結婚の儀を終えて、参列者たちもみな祝い事の余韻で開放的になっているようだった。荘厳なステンドグラスの前で行われた堅苦しい誓いの儀式ののち、大広間<sup>ホールルーム</sup>に場所を移したことで、招待客もいくらか増えたらしい。

来賓たちの輪の中では父が——ガルス・ボードウィン公——が笑っていてくれて、……少しだけほっとする。

長男ガエリオの訃報を受けてから塞ぎがちだった父も、これですべて元気になるだろう。

(天国のお兄様、わたし、結婚したのよ。縁談から逃げてばかりだったお兄様みたいにながまま言ったりしない。お兄様のぶんまでしあわせになるって、決めたんだから……！)

ボードウィン家とファリド家は正式な手順で縁<sup>えにし</sup>を結び、格式張った儀式の中でファリド家新当主マクギリス・ファリドは『ボードウィン家の存続』を誓ってくれた。娘婿として、妻アルミリアとともにボードウィン家を永劫に続かせると。

堅苦しい言葉で宣言された誓いを聞き届けて、父もようやく安心できたようだった。

長きに渡って家族ぐるみの交流があったというイズナリオ・ファリド公の失脚は悲しいことだけれど、結果的にアルミリアを『次期当主』ではなく『現当主』に嫁がせることができた。ファリド家が席次を落



としたことで、今はボードウィン家が優位にある。お家の未来も安泰。お世継ぎはまだ望めなくとも、ボードウィン家の血を引く純血のアルミリアならば、夫に先立たれても息子が成人するまで中継ぎの当主をつとめることができる。

やがてボードウィン・ファリド両家の跡を継ぐのはアルミリアがいずれ生み育む兄弟たちだ。

そう、思惑のもとに交わされた契りはすべて、ただボードウィン一族が七星貴族セブンスターズの座にあり続けるためのもの。

花嫁アルミリア・ボードウィンは、そのために着せ替えられたお人形にすぎない。

この日のための豪華なドレスをまもっても、父の関心はお家の繁栄。参列者の関心はセブンスターズの権力。利権。趨勢。夫婦の愛など見向きもしない。

祝福されない花嫁が、壁側で祝賀会の様子を見つめていても、誰も気付かない。

——ボードウィン卿はずいぶんとうまくやられましたなあ！

聞こえてくる陽気な雑談に、アルミリアはただ聞こえないふりをする。

——ガエリオ坊つちやまのおかげでしょう。なんでも、火星の猿をおそばに置いていたほど、心根のお優しい方だったそうじゃあないですか。

——ああ、例の……あのような野蛮人すら手懐けた手腕が知りたいものですね。まあ、それで坊つちやまは亡くなられたのかもしれないですが。

——手を噛まれたと。それは傑作だ！

宴席とアルコールで気が大きくなっているのか、楽しそうな笑い声が響く。

——ご親友だというあのファリド公も妾腹めかけぼろという話……おっと、これは失言かな？

——はははは。おしめがとれたばかりの新婦では、お世継ぎはまだでしょうからなあ。跡取り候補があとからあとから、何人出てくるやら。やあボードウィン公！ 本日はおめでとうございます！

グラスを掲げた客人に、相好を崩す父の姿。ここはお祝いの席だから、みな笑っている。

軽やかな乾杯の音も聞こえないふりをしたいアルミリアは、何も言わず、くちびるを噛んで、笑みかわすホストとゲストのやりとりを見つめる。

（お父様、お父様。その方たちは、お父様の大切な方々？）

そのお客様は、亡くなったお兄様を笑ったわ。わたしの結婚を祝福してはくれないわ。

なのにどうして——。

どうして、あんなに楽しそうに歓談しているのだろう。

悔しくて悲しくて、涙がこぼれそうになる。けれど今ここで顔を覆って泣き崩れてしまったら、きつとまた笑われてしまう。壁際に立ち尽くすばかりのアルミリアのことなんか、誰も気づいていないのだ。気を引きたくて泣きだしたのだと思われるのは不本意だった。

だってアルミリアは眼中にいられてほしいんじゃない。慰めてほしいんじゃない。

ただ、心ない言葉に傷つかないでいたいだけだ。

だからひとみに涙を溜めても構わず、フエンリルに嫁ぐ新婦は必死に背筋を伸ばす。両手はスカートを握りしめる。

黙ってまつすぐ立っていれば、頬に伝う涙になんか、誰も気づきやしないのだから。

ドレスに皺がよってしまふけれど、そんなもの、テーブルの上のシャンパンでもこぼしてみせればいいのだ。そうすれば、お子様が背伸びをして、まだ飲めもしないアルコールに手を伸ばしたのだと誰もが笑って、気にも留めないでいてくれる。

握りしめたせいでしわくちやになったドレスのスカートも、メイドが何食わぬ顔をして処理してくれる。

（わたしは、子供だから……）

子供であることは、罪なのだ。とても罪深いことなのだ。だから大人たちはアルミリアに罰を与えるのだらう。子供のくせに婚約をして、子供のくせに結婚などしてと、まだ世継ぎも孕めない体を貶め、嘲り、笑うのだらう。

アルミリアが大人になるまで、馬鹿にされない権利は得られない。嘲笑されない自由も得られない。

子供だから。罪深き子供は、罰としてどんな誹謗にも耐えなければならぬ。

——マクギリス様は庶子であらせられるそうよ。お世継ぎは、案外早いかもしれないわねえ？

——ふふ、第一子は一体どこのコウノトリが運んでくるやら。……ああ、噂をすれば。ファリド公がいらっしやったわ！

会場がざわめいて、マクギリスが到着したことがアルミリアにも伝わった。

(マツキー……！)

さざめきに変わる来賓の並みの向こう、階段の上に、新郎の姿がみとめられる。踊り場に立つ彼は、青く映えあるギャラルホルンの軍服姿だ。シャンデリアの明かりがシャンパンブロンズをいつそうきらめかせて、まるで夜空の金星のようだった。

神様が作り上げた彫像のような美貌に、ほうとため息がこぼれた。

まぶしさに目を細めれば、涙がころりと頬を伝う。

ああ、早く、はやく彼の隣にふさわしいレディになりたい。

そうすれば何人なんびとにも彼を笑わせたりはしないのに。馬鹿にされるアルミリアのせいで悲しい顔をさせてしまうことだつてなくなるのに。

義父に挨拶をするマクギリスの横顔は、実に礼儀正しく誠実で、知識と教養にあふれて見える。地球外縁軌道統制合艦隊を率いる准将として、仕事も忙しくしているようなのに、疲れた顔は微塵も見せない。

顔見せを終えた彼は、アルミリアの視線の先でふと端正な面おもてをあげる。

何かを探しているようなしぐさに見惚れていたら、すぐに目があつた。

アルミリア。

ざわめきに紛れて声は聞こえなかったけれど、くちびるは確かにそう動いた。

(マツキー……)

ぼうつと見つめるだけのアルミリアの目の前で、らしくなく歩調を急がせると、マクギリスの視線が降りてきた。宝石のような碧眼に、泣きはらした子供の顔がうつつている。

また膝をついてくれたのだと気づくまでに、まばたきふたつぶんの時間を要した。

「どうしたんだい。どこか、痛むのか?」

「あつ……ごめんなさい、これは、」

「ああ、目をこすってはいけないよ。腫れてしまうだろう?」

ポケットを探って、白いハンカチをあてる。丁寧な手つきは、泣きたくなるほどやさしい。

見守る目も、なだめる言葉も。

全部がやさしい。

「だめ……だめなの、わたし、わたしは……っ」

「焦らないでいい。ひとりにしてしまつてすまなかつたね」

「ちがうのっ! マツキーは何も悪くない……わたしが、いけないの」  
子供であることは罪だから。まだ子供を産める体ではないアルミリアは、ここのとり愛人に先を越されてしまつてもしょうがない。ボードウィン家の息女として生まれ、妻となり母となり、偉大なる英雄の系譜を存続させるための道具だというのに、その役目すら果たせないかもしれないと笑われている。

罪深き子供。

だからアルミリアは、下される罰に耐えなくてはならない。

わたしは、子供だから――。

。

。。  
。。  
。。  
。。  
。。  
白い頬を涙が伝う。濡れそぼったまつげが重たくしばたたき、やがてアルミリアは目を覚ました。

救済者の名を呟こうとして、声にはならず吐息だけがこぼれる。見慣れない天井は、曇天のように重たく暗い色をして、長く長い夢を見ていた実感が押し寄せてくる。

「気がつきましたか、お姫さん」

確信を帯びた声音は、<sup>マクギリス</sup>夫のものではない。ついとまつげを上向けると、鮮やかな赤毛が逆光に陰る。

「ライドさん……」

「倒れたんですよ。まあ、あの臭気じゃ無理もないですけど」

ベッドの端に軍服姿のまま腰掛けているのは、革命の同志 ライド・マツス准将だ。アリアンロッド・グリーンは、思いのほか彼によく似合う。

……家族の仇の軍服など、似合ってもしょうがないだろうが。

邪魔な裾を蹴るようにライドは足を組み替えると、何事かうかがいをたてるようにアルミリアを見遣った。地球からやってきたばかりのアルミリアを案じてくれたのだろう。

しかし一瞬だけ交わった視線は、すぐにそらされてしまう。

「すみません、気が利かなくて」

ライドは目を伏せ、ばつ悪そうに肩をすくめる。死臭にあてられ失神してしまったアルミリアを別室へ運びいれたのは、ライドの発案ではない。ヒルメの助言がなければ、あの殺人現場に医師を呼んでしまっただろう。

現在のライドは『准将』の階級にあり、所属はアリアンロッド。本隊に属して新型MSのテストパイロットをつとめている。日ごろは月面基地の兵士宿舎に駐留しているため、このヘウイル・オー・ザ・ウイスプの内側で起こっていることは、ほんの一部しか把握できて

いない。

「いいえ……わたしも、順番を間違えてしまったみたい」

今のライドは、ライザ・エンザに代わり革命軍の陣頭に立つ、新たな旗だ。アルミリアがそうあるようにと望んだ。

今もなおマクギリス・フアリの思想を継ぐ同志たちの期待を背負う立場を担っている。そのせいでライドはここへウィル・オー・ザ・ウィスプで静養している仲間たちとの交流が希薄になりやすいのだろう。

「あんたが現場に駆けつけるようなお方だからついてる連中は多い。間違っちゃいなかったと思いますよ。最善じゃあなかったみたいですけどね」

「ずっと、わたしについてくださったの……?」

「あんたが袖をつかんで離さないもんだから、どこへも行けなかっただけです」

「ふあつ……ご、めんなさい」

慌てて両手の所在を確かめると、右手がライドの袖を握りしめていることに気づいた。

あたふたと手持ち無沙汰になった指先を、胸の上で組み合わせる。あのとぎ拾っておいてくれたのだろう、清潔なままのハンカチを両手で握った。

アルミリアはどうやら、二時間ほど眠ってしまったようだった。壁掛け時計が示す標準時刻によれば、もうすっかり夜だ。兵士たちも健康的な生活リズムの者から順に眠りにつくころだろう。

もつとやるべきことがあったのに。到着早々倒れてしまうだなんて、情けなくて涙が出てくる。

「いえ。あんたの身に何かあったら旦那に祟られちゃいますからね」とライドはしかし、鷹揚に受け流してしまった。

長旅の疲れがあつたんでしよう、と、伸びをしてみせる彼は、本質的に快活な男なのだろう。鉄華団の残党たちが知るライド・マツスの姿とは、きつと、アルミリアの知っている彼とは違う。

アルミリア・ボードウインは21歳になったが、いまだ孤児たちの

オルフェン

過去をよく知らない。

「……彼らは、」

「ギリアムなら、ヒルメが連れて帰りました。もともとへガルム小隊には足の動かねえ参謀がいたんで、当座の生活に不便はないようです。車いすが余ってるそうですよ」

みな時間をかけて回復に向かっており、アルミリアによって手配された医療チームが常駐しているおかげでリハビリも進んでいる。さいわいにしてドクターたちとの衝突もなく、訓練や勉強もできているようで、ひとまず『現役少年兵の療養施設』としては上々だろう。

月面基地の一部となるには、いまだ摩擦があるようだが……。

「ここでの生活について、エンビさんから詳しいお話を聞けるかしら」

「そいつはちよつと……遠慮してもらえると助かるんですけど」

「お忙しいの？」

エンビはへハーティ小隊の隊長だ。ここには常駐していないライドに代わり、ヒルメたちギリアムたちを統括する立場にある。

「いや、そういうんじゃないよ。……あいつ、片耳が聞こえないそうなんです。それで、なんつーか、荒れてて」

三年前の戦いで、エンビはハーブビーク級戦艦へヴァナルガンドで特攻をかけた。アルミリアたちを小型艇ランチャで脱出させ、ジュリエッタに誘導させて、丸腰にも等しい戦艦にひとり残ったのだ。

死を覚悟しての突貫だったが、戦いが終結したときあの紅いグリムゲルデもどきが見当たらないことに気づき、行方を捜した兵士の一団があつたらしい。

エンビの機アルフレッド体はかつてマクギリス・ファリドが駆つたオリジナルのへグリムゲルデと似たカラーリングであつたから、印象深かつたのだろう。

お探しのパイロットなら艦内にいますよ。——という助言が女騎士からあつたとかかなかつたとかで、紆余曲折あつてへヴァナルガンドからエンビとトロウが救助された。

もちろん機体もだ。コンテナに置き去りのグリムゲルデもどきはコクピットブロックがごっそり抜かれ、武装もどこかへ行つていた

が、ヘグリムゲルデ・ヴァンプは三機とも丁重に保護された……という  
ことで落ち着いた。

あれから二年近いメデイカルナノマシンの投与によりエンビは奇  
跡的な回復を遂げたが、右耳の鼓膜が再生せず、今も不自由なまま。

片方だけ聴覚を断たれ、距離感が測りづらくなつたらしく、もとも  
との警戒心もあいまって背後から近づかれることを極端に嫌がる。  
ライドですら声をかけようとして反射的に銃口を向けられた。

心配になつて声をかけても「ちよつと耳鳴りがするだけだ」と聞か  
ず、追求すると「悪いけど少し黙つて」と威圧する。「すぐによく  
なるから」と吐き捨て、その場から逃げだしてしまう。左右のバランスも  
悪くなり、壁にぶつかつてしまつては苛立ちを募らせているようだつ  
た。

エンビに代わりライドに謝罪したヒルメによれば、格好悪いところ  
を見られたくない気持ちを汲んでやつてほしい……とのことだった。

自分自身のままならなさにいらついで、フラストレーションを他人  
にぶつけてしまうまいと壁を作っている。

集中力も射撃精度も以前とは比べ物にならないくらい落ちてし  
まったし、アリアンロットで拷問を受けたときの怪我也完治に至るこ  
とはないようで、もうこれまで通りには走れない。全盛期に比べれば  
弱体化したとはいつても阿頼耶識使い特有の俊敏さは健在で、力加減  
を誤れば怪我をさせてしまうかもしれない。

手負いの獣のようなものだ。

日常生活をともししているヒルメ相手ですえそんなだというのだ  
から、ライドが露骨に避けられたのも頷ける。

「お見舞いに行くことはできるっ。」

「いえ。この時間は麻酔で落ち着かせるらしいんで、そつとしいて  
やつてください。あとで報告書をあげるようヒルメに伝言を頼みま  
した」

「そう……」

アルミリアは目を伏せて、白いシートを見つめた。ライドが腰掛け  
ている方向へ、陰影を視線で追いかける。ため息をついた。



無理もないことだろう。エンビは以前から、警戒心や責任感の強さゆえ不眠症がちだった。

無関心によつて踏み躪られ続けた少年兵たちは、今もなお眠るときには交代で見張りを立てようとする。害されることが当たり前すぎで、安眠もままならない。

飢えないための食事と、夜警の合間に得る眠り。それだけでいいなんて言わせたくない。

誰からも攻撃されないことを『平穏』と呼ばせてしまうのは、あまりに悲しい。

家族みんなに行き渡るだけのあたたかい食事を、夜の眠りを、戦わずとも得られるような世界を、彼らは望んだ。だから鉄華団は生まれ、団長亡きあとはライド・マツスのもとへ集った。彼らが生きる未来のために『革命』は必要だった。……そのはずだ。圏外圏に生まれた少年たちを蔑み、搾取し、生きたいと願う自由さえも奪ってきた罪悪感を、世界中に知らしめなければならなかった。

奪う権利と奪われない自由を天秤にかけていた幼き日のマクギリス・フアリドを救いたかったのに、アルミリアの手は無力で、あまりにも頼りない。

「……こんなことがあったあとで、俺が言うのも変な話ですけど」  
ぽつりと、ライドが独り言のようにこぼす。顔をあげれば、どこか遠くを見るような横顔が、アルミリアを振り返る。

「あんたは——」  
遮るように、ブザーが来客を告げる。

パネルがちかちかと点滅し、ライドは一度、口をつぐんだ。  
立ち上がってインターホンに応答する。モニタに映る顔ぶれに、思わず目を見はった。

医療用の眼帯をつけて、そこにいるのは。

「……トロウ？」

声が届いたわけでもないのに、気配を察してか、トロウはにかつと白い歯を見せて笑ってみせた。

『エンビを連れてきたぜ！ そろそろコイツの出番だろ？』

ぐったりと脱力したエンビに肩を貸し、……いや、担がれているエンビは眠っているように見える。連れてきた、というよりは荷物を運んできたような格好だ。

肩越しにアルミリアを振り返ってから、とりあえず「今開ける」と応じた。

パシユ、と空気が擦れる音とともにドアが開く。

「どーも！ 報告書あげるようになって伝言もらって、エンビお届けにあがりまして」

「お届けっておまえ……」

ピザ屋のデリバリーではないのだから。意識があるのかないのかもわからない状態でただ運びこまれても困る。

呆れて声も出ないライドの態度は意に介さず、トロウは室内のデスクまで踏み込むと足癖悪く椅子をたぐり寄せた。エンビを座らせ、自分も背もたれになってやる。

「エンビ」と左耳に口を寄せると、灰色の双眸が薄く開いた。

「……ああ、悪いな」

「ってわけで。麻酔でちよつと朦朧モロロとしてるけど、気にしねーでくれよな」

「おい、エンビは大丈夫なのか……？」

「何が？ こう見えて中身はフツーに起きてるぜ？」

なあ、と同意を求められたエンビが「ああ」と首肯する。意識の混濁はなく、受け答えはしっかりしているようだった。

「動くのは無理だけど、考え事するならこつちのが都合がいい……報告書、まとめてきました」

「コレな。代筆で悪イんすけど」

タブレット端末をかかげてみせ、トロウは片足を大きく一歩踏み出すと、ずいと差し出した。

横からエンビが「トロウは読み書きが得意じゃない」と軽口を叩けばトロウが椅子の足を蹴る。ずいぶんと気安い応酬だ。

ベッドからようやくと起き上がったアルミリアは、エンビを見やり、トロウを見上げ、片手で突き出された端末と隻眼の青年をもう一

度見比べてから、眼前の端末を両手で受け取る。

人を見上げるのが、なんだか久しぶりのように感じられた。

……それだけライドがへりくだって接してくれていたということだろう。こんなふうにアルミリアを影にして上から見下ろす相手なんて、思えば兄ガエリオくらしいものだった。

「トロウさん。あなたは現状をどのように感じていますか？ 率直で忌憚のない意見を聞かせてください」

「どのようって……別に？ 俺から報告するようなことはないっす」

「えっ……っ？」

「えっ？」

両者同時に当惑の色を浮かべ、三つのひとみがぱちくりまたたく。

先の戦いで眼球を片方失ったトロウは、今も眼帯と包帯で片目を覆っている。清潔な白さからはこまめに取り替えられていることが窺えるにしろ、日常に不便を感じないはずがないだろうに。

「俺は当座の生活に不満とかねえんすけど。何か？」

「い……いいえ、何も。報告書、読ませていただくわ」

不自由していないと言い切られてしまったことに、アルミリアは改めて面食らった。タブレットを抱きしめる。

ここは、水資源の不足や兵士たちの不和をはじめ、多くの問題を抱えているはずではなかったか。だから元ヒューマンデブリの少年兵は危険を察知し、裏切り者を粛清することで平穩を得ようとしたのではないのか？

アルミリアの疑問を察して、ふうと嘆息したのはライドだ。

「ヒルメによれば、エンビは面会謝絶って話だったんだが？」

腕を組み、責めるような音が乗った。トロウが何事か耳打ちすると、エンビも「ああ……」と思いついたような相槌をうつ。

トロウの返答はなんともあつげらんとしたものだ。

「鎮痛剤切れ状態のエンビは歩く地雷原みたいなもんだから、踏み抜かねえように気を回してくれたんだろ？ 昼間なんかおっかなくって近づけたもんじゃねえぜ。事故って背後とつちまったらダツシユで撤退が鉄則だもんな」

「俺としても避けてくれるほうがありがたいしな」

ヒルメらしい——独り言ちたエンビは片耳が聞こえず、アルミリアは育ちがいいせいかな音量に乏しい。どちらの非でもないながら、対面で会話するには障りがある。トロウがこうして通訳に入っているのはそのためだ。

昼間は痛みに思考を遮られてはフラストレーションを溜めており、まともに会話できる精神状態ではない。

正常に思考できるのも痛覚というノイズを薬で散らしている夜間だけで、強い鎮痛剤が身体能力を麻痺させてしまうため、活動するには介助が必要になる。

にしても、この時間は麻酔で落ち着かせると聞いて面会できないと解釈したライドは、まさか半分眠っているような状態で報告書を代筆させ、書き上げて届けにくるとは思わなかったのだ。

「小難しいことはエンビが夜に考えりや間に合うし、面倒が起きねえよう昼はヒルメが目を配ってるし。さしあたって問題はねえつすよ、俺らん中には」

言外に、トロウは外部を突き放す。

今日の射殺事件についても、犠牲者を慮るつもりは毛頭ないような口ぶりだった。

「トロウ。お前、エヴァンの殺しについてどう思う?」

「どう思うも何も。やられる前にやっただけじゃねえか」

「……なんだって?」

「別に。もういいだろ、俺だって死体蹴りみたいなことは言いたくないよ」

「ならエンビはどうだ? お前は どう思ってる」

「ライドこそ、俺らにどう思ってたほしいんだよ? 指導者が誰でもいいやつもいれば、誰でもよくないやつもいる。同じ場所で生きようとすれば、統合か衝突かふたつにひとつだ。……この意味がわかるだろ」

今度はトロウを介すことなく、エンビははつきりと突き放した。

ライドならば理解できるはずだと、長くなつた前髪の奥からスナイ

パー・グレーのひとみが射る。

鉄華団残党『強硬派』にあたる生き残りはみな、整備班のカズマ一名を除く全員がCGS時代からの古参団員である。非合法の適合手術を入社条件とされ、今日の食事と寝床を獲得するために弾除けに甘んじ、一軍のサンドバッグとして都合よく使われてきた。

そんな日常から脱却してやろうと旗を振ったオルガ・イツカのもとで、鉄華団は『本当の居場所』を求めて戦った。

俺たちは本当は自由で、飢えにも、眠りから呼び覚まそうとする痛みにも、それらを押し付けてくる大人にも縛られる必要はない——それがたとえ悪魔の教唆であっても、エンビたちは信じている。

抵抗をしてもいい。

死を望んでくる連中に、黙って従う必要はない。

そうした信念のもと、唯一の故郷であった鉄華団がなくなってもなお『本当の居場所』の存在を信じ、オルガ・イツカを信奉する一団こそ、エンビら〈餓狼小隊〉である。

たどり着く場所など幻想だ、方便にすぎなかつたのだと諦めてクーデリア・藍那・バースタインによる救済を受け入れるくらいなら、テロリストとして戦死したほうがマシだという過激思想の塊でもある。

ユージンら『穏健派』がそうであるように武器一切を手放し、議長閣下の斡旋してくれる真つ当な仕事に就けば、成長して大人になれるのかもしれない。ギャラルホルンが続べる平和の片隅で、弁えた暮らしをするだけなら取り締まられることはないのかもしれない。

それでも。

押し売りされた幸福ではなく『自由』を。

家畜の安寧に取り込まれることなく、みずからの意思で立ち上がる知性と武力を。

勝ち取るために、これまで戦ってきたのだろう。IDの次は思考まで白紙に戻して、支配者どもに都合のいい木偶人形に作りなおされるなんてごめんだ。

だから副団長ユージン・セブンスターから『穏健派』から離れた。行き場をなくして身を投じた先が、アルミリア・ファリド派の革命

だ。

それはエンビたち元年少組に限ったことではなく、元ヒューマンデブリの少年兵たちも、ライドに命を懸けてみせた。

さらに多くの血が流れるかもしれない、全滅しない保証もない。それでも、金と権力を持つ他人の施しをありがたがりながら生きるくらいなら、徹底抗戦を選ぶ。

「……俺らだって、何もかも内々に処理しまおうなんて企んじやいない。報告書はあちらさん側からも上がってくるんだろ？ お姫さんが客観的に判断すればいい」

ご主人様の決定には従いますよ。——宣告を鋭利に締めくくってから、エンビは「トロウ、頼む」と介助者を呼んだ。

ふたりの退室を止める理由もない。

「下がってくださって構いません」とアルミリアが許可すると、あつさり姿を消した。

室内にはふたたび、沈黙が降りる。

静寂に耐えかねて口火を切ったのはライドだった。

「……すいませんね、男所帯だったのにベタベタと……」

あまりの居心地の悪さから、がしがしと頭をかく。癖の強い赤毛が跳ねる。

車いすが余っているというヒルメの報告、背後を取られるのを嫌がるエンビ、トロウによる運搬という三つの要素がパズルのように噛み合って、言葉にならない。

「仲がいいのは素晴らしいことよ。家族だからといって、支え合って生きていけるわけではないのだから。助け合い、気遣いあって、ともに生きていける……それはとても、得難い絆だわ」

ボードウイン家を振り返れば、アルミリアには複雑な郷愁が押し寄せてくる。

両親と、兄と、それから使用人たちと。つつがなく暮らしてきたのだ。何の変哲もない日常こそが何よりいとおしいことを、アルミリアは知っている。

仲のいい兄妹だった。円満な家族だった。

あたたかい時間を多く過ごした。ただ。

痛みや苦しみを分かち合える絆はそこにはなかった。婚約パーティで心無い言葉に傷つくアルミリアに気づいてくれたのは婚約者だった。兄の訃報に嘆き悲しんでいたときも。

軍事クーデター勃発、革命軍のライブ演説スピーチに戸惑っていたとき、そばにいてくれたのはメイドだけ。夫は顔を見せに戻ってくれたけれど、兄はアリアンロッド総司令官のもとにあり続けた。父がフリード邸へとアルミリアを連れ戻しに現れたときは、もう、血の繋がった家族よりも愛する夫の帰還を待つと心に決めたあとだった。

アルミリアが困っているとき、悲しんでいるとき、泣いているとき、アルミリアの家族は。

……母でさえ、そばにはいてくれなかったのだ。「ともに生きるって、一体どういうことなのか……わたしは何も知らない」

家族と過ごしたやさしい思い出、あたたかい記憶。

ひとりぼっちで耐えた冷たい誹謗中傷、孤独。

健やかであるときだけでなく、深く傷ついているときにも家族同士で寄り添う姿を目の当たりにすれば、羨望のような、嫉妬のような暗い情動に胸がつぶされそうになる。

「お姫さん……」

ライドは痛ましげに目を伏せるが、しかし「さつき言いかけたことなんです」とはつきりした口調で諫言した。

「こう言っちゃなんだが、あんたは平和に帰れるはずだ。故郷はまだあって、家族もいるんだろ？ 気が変わればいつだって『帰れる場所』があるんじゃないのか」

「確かにわたしの両親は健在です。亡き夫は、ボードウインの家に帰るといふ選択肢を遺してくれました。だけど……帰れる場所なんて、そんなのないわ」

「帰りたいって言ったら殺されるかもしれない、とか、もし考えてるなら筋違いですよ。あいつらだって筋スジは通す。お姫さんがフツのし

あわせつてのを欲しがったって、文句が出ることはねえでしょうよ」「しあわせになんてもう、なれないわ……もう幸福には感じられない。たとえ『普通のしあわせ』を手に入れても、それはわたしの求める未来じゃないんだもの。家に戻って、血筋の確かな男性と再婚して、血統書付きのお世継ぎをもうけて……それが『しあわせ』だとしても、わたしにとつては生き地獄でしかない……っ」

「そうゆうのを『反抗期』って言うんじゃないんですか」

「どうして……っ！ どうして、そんなことを、」

思わず飛び起き、アルミリアはタブレットを取り落としてしまったことにも気づかないでライドにつかみかかった。

ベッドから転がり落ちそうになったが、押しとどめたのはライドの手だ。

「ギャラルホルンってのは、そーゆう組織なんでしょう？」

呼吸も忘れ、おそるおそる目を合わせれば、ライドの双眸はひどく風いだ夜の海のように静かで、先ほど弟分たちと交わっていた視線よりもずっとずっと温度が低い。

反抗期。

その言葉は、ライドのものではない。処刑されてしまった兵士の置き土産だ。

——だから俺はここらで退役して、実家に帰って、手頃な嫁さんでももらって、分相応に暮らそうと思うんだ。退職金も年金も弾んでもらえるって話だし。生きてるうちに親孝行しなきゃだろう？

——反抗期ごっこはおしまいさ。

彼は、ただ帰ろうとしただけだと思いたい。死者だからこそ、眨めるようなことは言いたくないとアルミリアは思う。

死体蹴りみたいなことは言いたくないと眉根を寄せたトロウの氣遣いに強く共感する。我が身よりも同志をこそ慈しもうとする彼の



献身はひどく尊く、まぶしくうつる。

彼らは誰ひとり、エヴァンによる残虐極まる粛清に異論を述べなかつた。

「しあわせって……どんなものかしら」

「戦いをやめて、実家に帰って、手頃な相手と結婚して分相応に暮らす……でしたっけ？ 俺らみたいなアウトローの側につくことじゃないでしょうね。他人なんざとつと見捨てて、血のつながった家族に孝行すりゃいいんじゃないですか」

「だめよ。そんなのっ、おかしいわ……！」

悲鳴のように裏返って、アルミリアは本来あるべき幸福論を拒絶する。

反抗期という言葉を改めて飲み下せば、その痛みには喉が焼けそうだった。知らず涙があふれて、肩がふるえる。嗚咽がこぼれる。

「すいません」と、ライドが短く謝罪をつぶやいた。

〈マクギリス・ファリド事件〉を発端とした七年間——新たに〈フェンリル革命〉と名付けられた月日の中で、アルミリアは、世界に蔓延する不条理に反発し、改善を訴えたつもりだった。拙くとも切実な願いだった。

その革命は奇しくも、思春期から青春期にかけて実現した。

アルミリア・ボードウィンが11歳から18歳のころ。

ライド・マツスが14歳から21歳だったころ。

ちやうど子供が家という狭い社会から自立していく時期に重なる。

権利獲得のための闘争の中で、エンビたち三人組は20歳になり、ギリアムたち双子も17歳になった。人生のうちでもっとも多感な時代を戦場で過ごした。

反抗期だなんて短絡的な言葉で片付けられてしまうのは本意ではない。

けれど確かに、大人になりたくなくて大人たちの手を噛もうとする子供のわがままなのだ。

現実を受け入れて、現状維持に迎合することで人間はみな大人になる。世界のあり方がいかに理不尽であろうと、そういうものなのだ。

割り切つて、変革ではなく適応を選ぶ。

受容し、順応し、長いものに巻かれる。

それが大人だ。

法と秩序によつて犠牲を生み続ける世界さえ愛せるのが大人の度量だ。

労働者たちが消耗品として扱われる道理を。

孤児たちが戦場に送られ、命を落としていく醜悪な世界を。

残酷さすら愛おしいのだと論点をすり替え、うつくしいものとして肯定しようとする。

そんな矮小な世界の中で痛めつけられながら成長してきた子供たちは、ようやくと安全圏に泳ぎ着けば次は自己憐憫で飾り立てた言葉を並べるようになる。

そしていつかアルミリアを子供だと嘲笑した参列者たちのように、幼い花嫁を誹謗する地位を手に入れるのだろう。

あたかも賢明な生き物であるかのように振る舞つて、安全な場所から弱いものを見下して。

そうやって加害者おとになつていくのだ。

「いやよ……もしそうなら、大人になんて、なれないわ……!」

奥底から湧き上がってくる恐怖に、アルミリアは声を詰まらせる。震える指先で、どうにかライドに取りすがる。

こゝも背筋を冷たくするのは、自己嫌悪だった。

マクギリス・ファリドに出会わなければ、大人になつてしまったかもしれない。

だつて。指導者なんて誰でもよかつたのだ。ただ、愛する人と一緒に、穏やかな日々を過ごせたなら。権力、利権、趨勢——全部どうだつてよかつた。ボードウィン家の繁栄は、父のためにも果たさなければと願つたけれど。

お見合いから逃げ続け、幼い妹アルミリアにお鉢を回した兄は、大人ガエリオだった。青い叛逆は、幼い衝動でしかない。

そして子供であることは、罪だ。

ギャラルホルンという閉鎖的な組織の中にいれば、当たり前前に染まっていく。毒されていく。みんながそのように考え、そのように行動し、そこにある『常識』という名の規範に浸されているのだ。

ルールの中で動こうとすれば、不条理を感じ取るアンテナは知らず知らずのうちに鈍っていく。

無知でいられるという特権を行使していた自身に気づいて、そのおぞましさに凍りつく。

「……選ぶのはあんただ。お姫さん」

「っ……えらぶ、なんて……っ」

「どっちに転んでも地獄でしょう。あんたにとっては、ここも地獄なんじゃねえのか。……引っ込みがつかねえってんなら、」

「だめっ……!! わたしはマクギリス・フアリドの妻です！ だから絶対に、ギャラルホルンを変えるまでは絶対に家には帰らない、帰れない……っ」

もしもアルミリアが加害者側に寝返って、安逸と暮らす地獄を選べば、このへウイル・オー・ザ・ウイスプに暮らす元少年兵たちは殺されてしまう。

彼らの自由を守りたい。安全な場所に匿っていたい。なのに、この手の中の権力が今この瞬間も彼らの生殺与奪を握っている。

そんな世界を、否定しなければならぬのに。

——同じ場所で生きようとするれば、統合か衝突かふたつにひとつだ。

耳の奥を突き刺すようにエンビの言葉が蘇る。世界を愛する加害者に統合されるか、怒りの中で生きる戦士として抗戦するか。中立に逃げようとするれば、そのつもりがなくなるとも前者を助長させ、後者を軽んじる。無関心でいることもまた、前者を黙認し、後者をないものとする。

両極の選択肢しかない。

「……だから、あいつらは殺したんでしよう」

自由のために戦い続けることを『反抗期』と笑ったギャラルホルン兵士たちへの抗戦の意思表示。その執行人を鉄砲玉が買って出た。

裏で糸を引いていたのは、あの三人組だった。

あどけなかつた年少組の面影は、もうどこにもない。

もう何もかも視界にいれたくはないと拒絶するかののように、ライドは一度、ひとみを閉ざした。血塗られた鉤爪のようなまつげが、怪物の爪のようにふたたびモンスター・グリーンをこじ開ける。

マクギリスとはまるで異なる緑色に、アルミリアが息を飲んだ。飼いや慣らされない狼のような威圧感。ぞつと背筋が寒くなった。

赤毛がゆるく揺れ、殺気はすぐに押しとどめられた。

「あなたは……」

「お察しの通りですよ。家族と一緒に馬鹿笑いしたくても、魂を売ることがどうしてもできなかった、クソガキの亡霊みたいなもんだったんだ。あいつらみんな……俺も含めて」

惨殺された兵士には、同情する。嘘ではない。だが彼は、生前の行いがどれだけこのへウイル・オー・ザ・ウイスプ以外どこへも行けない孤児<sup>オルフェン</sup>たちを抑圧し、蔑ろにしてきたか自覚することはついぞなかったのだろう。

理解できていなかったのだと実感できるのは、自分自身が同じ不理解によって傷つき、その不愉快さに胸をかきむしる思いをしたときだけだ。

全身の血液が沸騰するかのような激昂。

あるいは、腹の底から湧き上がる強烈な憎悪。

想像力では補えなかつた黒い怪物が喉奥へとせり上がってきて初めて、共感できていなかった過去の自分自身を俯瞰し、自覚を得ることができる。

この程度のこと軽くいなして忘れてしまえばいいのだ——と鷹揚に笑える寛容な大人に成り下がっていなくてよかったという、いくばくかの安堵とともに。

「引き返すんだったら、多分これが最後のチャンスですよ」

反抗期と馬鹿にされ、嘲笑されながらも革命を望むか。

理不尽を見つめることのない大人になって、安全圏で安逸と暮らすか。

ふたつにひとつだ。

それ以外の未来は存在しない。

「なら、わたしはわたしの筋を通すまでのことです」

白い指先がハンカチを握る。清潔な布に救済者の血液など染み付いてはいないけれど、アルミリアの手のひらには限りなくよく似た手触りを伝えていた。

# 第1章 Born Yesterday

## 第二部

P. D. 340

首の刈り方を覚えた。腕の落とし方も上手くなった。

足の止め方は、鉄華団時代に学んでいた。

あのころの教官はみんなパイロットを殺すことが一番手っ取り早い足止めだと語ったから、エンビにも例外なく、敵MSモビルスーツのパイロットを迅速に殺害しようとする癖がある。

殺さない方が難しい。なのにわざわざ「ゲイレル」の首を狩ったり、「マン・ロディ」の両腕を落としてダルマにしたりとパイロットの安全に配慮しているのは、仕事だからだ。それ以外に理由なんてない。

振り抜いた剣でフレームの関節という関節を切り離すと、散った火花を打ちはらうように「バエルソード改」を収める。

エンビの機体は今も紅いグリムゲルデもどき——「グリムゲルデ・ヴァンプ」1号機から変わっていない。

『——こちらアルフレッド。捕捉した六機をすべて無力化した。これで全部か？』

サブモニタには目もくれず呼びかけると、頬杖をついたままのウタが『だといいいね』と曖昧に応じた。

『「エアリアドネ」に反応はなし。だけど安全って断言するわけにも……ね』

視界の端では手足をもがれた量産機たちが「グレイズ・アダプト」隊によって回収され、バケツリレーの要領で運ばれていく。味方もまとめて帰投してしまったほうが何かと手早く済むだろう。エンビが六機の強制武装解除に成功している間、トロウの3号機チャールズも同数を無力化

しているのだ。

十二ものMSを鹵獲し、コクピットをこじあけてパイロットを捕縛・尋問するなら人手は多いほうがいい。

『……チャーリーは先に帰投させてくれ。俺は警戒を続ける』

『了解。ひとまず俺の交代まではよろしく頼むよ』

『ははっ。わかりやすくいいや』

笑い飛ばして、エンビは改めて宙域を見渡した。

このあたり

月周辺で最も広大なデブリ帯ヘルーナ・ドロップの一角。いかに〈アリアドネ〉のコクーンが四方八方を抜かりなく見張っているとはいえ、厄祭戦で砕けた月の破片に加え、七年前の戦いで投入されたMSやら戦艦やらの残骸までもが大小無数に漂っていて、見通しはすこぶる悪い。エイハブ・ウェーブの干渉による電波妨害も加わって、視界は最悪だ。

もう動かない鉄屑のくせに心エイハブ・リアクター臓だけは一人前に稼働しているから、擬似重力がスペースデブリを次々引き寄せ、月を取り巻く環境は常に変容し続けている。

浮遊するアステロイド片がまるで荊棘いばらの森の中に月を隠すかのように密集し、ギャラルホルン月面基地はいつしか天然の要塞と化した。

……いや、要塞というのは中身を守るためのものか。潜伏や奇襲には適していても防衛にはあまりに不向きで、まったくいらいらさせられる。

宇宙海賊どもがデブリ帯を根城にできていたのは、アリアドネ航路外にギャラルホルンが干渉しなかったせいだったのだろう。エイハブ・ウェーブの影響を強く受けるポイントは地図すら作れない。エンビたちのような阿頼耶識使いの機動力がなければ身動きできない荊棘の迷宮だ。

いつかは隠れ蓑に使っていたが、逆の立場となるとこども面倒だとは。

(……ああ、また耳鳴りがする……)

ふとした静寂の中、聞こえなくなった右耳がまた幽かな金属音を拾

い上げ、エンビは不快感に眉根を寄せた。

七年前の後遺症だ。

メデイカルナノマシンの投与による再生治療は、あくまでも細胞を活性化させることによって人体があらかじめ持つ自然治癒力を向上させるもので、欠損した部位を再生産してくれるわけではない。片耳の鼓膜はなくなったまま、もう元には戻らない。

今は青いパイロットスーツで覆われている脚にも、拷問を受けたとき抉られた銃創が残っている。これからも消えずに残るだろう。

革命の狼煙があがって、七年。

鉄華団が壊滅し、すべてを失ってから十五年。

幼い時間を戦場で過ごしたがゆえか、エンビは今も戦場から離れられないでいる。

離れたたくとも、置いていけないものが多すぎるのだ。それに、戦場を去ったところでどうせ行く場所なんてない。

かつてのモニターク商會が所有していた少年傭兵部隊〈マーナガルドム隊〉は、アルミリア・フアリドの斡旋によって全員ギャラルホルンに再雇用された。

正規兵としての給与、正規兵としての保険、正規兵としての休暇……といった権利を書類上で約束されてはいるものの、保守的なギャラルホルンの軍人たちから見れば、お嬢様の道楽で集められたお遊戯の兵隊でしかない。七年前の戦闘行為によって月外縁の風通しが悪くなったから、そのオトシマエをつけるための盾だ。

死に損ないの月の犬は、月外縁の治安を守る<sup>デコイ</sup>囷として、今も便利に使われている。

ギャラルホルン様にとっては地球経済圏ですら権力争いの駒でしかないのだから、私兵という立場はなかなか上等なのかもしれないが。

(……………)

憂鬱なスナイパーグレーの目を伏せて、閉じる。

ふうとため息をついて、しかし左腕は素早くコンソールパネルを叩いた。指先がマシニングのように駆け抜けると、操縦桿を強く握っ



た。

ゆらりと左腕が持ち上がると、手首にはライフルが既に固定されている。120mm口径、弾倉がマニピュレーターをぐるりと覆うような形状で、凶悪なブレスレットをつけた片腕が指差すように狙う。

砲撃。

一撃、気取られたことを自覚する間もなく「ゲイレル」が横転する。機をうかがって出てきたのだろう。足の裏を見せてしまった間抜けの脚部スラストをライフル弾が削いでいく。

エンビはそのまま銃身を<sup>ロングバレル</sup>畳み、バーニアをふかした。

『あと何機だ！』

飛翔する。どこにでもあるライフルといえど、ナノラミネート装甲の甘い部分には有効な打撃となる。主要なスラストに楔を穿たれば、マスバランサーとエイハブ・スラストによる姿勢制御が関の山だ。ショートバレルライフルで牽制しつつ肉薄、右手でつかんだ剣で、その首を一刀のもと両断した。

焦って飛び出してきた別の「ゲイレル」がつかみかかってくるさまを一瞥し、返す刀で下半身を吹っ飛ばす。バエルソードを鍛え直した折れない剣は、フレームごと切り裂くほど鋭い。

赤いモノアイに銃口をつきつけドンドンと連射すればメインカメラが破碎され、きらきらと散る破片はまるで鮮血のようだ。

もがく腕を落とされてオイルが漏れ出す。逃げる足を奪われて身をすくませる。

それらとは何の関係もなく、戦乙女の姿は<sup>グリムゲルデ</sup>返り血を浴びたようにただ、赤い。

## 001 夢見る宇宙

宇宙を旅するって、とっても危険なことなんだからね！　いつもの夏休みのキャンプだと思つて甘く見ちゃだめだよ。宇宙船の中では、他のみんなを気遣える余裕が一番大事。

忘れ物はない？　あつハンカチ！　ハンカチは多めに持った？　それから酔い止めも！

荷造りはクーデリアもユージンも手伝つてくれてたし、心配してるわけじゃないけど……でもギャラルホルンの基地なんてわたし行つたことないし……そんなことより、宇宙は怖いものでいっぱいなんだよ。何があるかわかんないし、はじめは誰だつて無重力酔いするものだし、途中で嫌になつても降ろしてくださいってできないし！

だから、一緒に行くお友達とくれぐれも仲良くね。何かあつたときはちゃんと助け合うんだよ。女の子が泣いてたら慰めてあげること。暁ならでできるって、信じてるけど……。

「ううう、暁が一ヶ月も帰つてこないなんてはじめてだよーっ！」

両の手のひらで頬を覆つて、ミルクティー色のポニーテールが勢よく跳ねる。しゃがみこんでしまった母親の考えすぎは、まったくいづものことなのだ。

「アトラは心配性だなあ。大丈夫だよ。ただの社会見学じゃない」

「ただのじゃなあい！　先生の話をよく聞いて……あつ軍人さんに失礼なこと言つちやダメだからね！」

がぼつと顔をあげ、またおろおろと視線をさまよわせはじめる。が、それも暁には見慣れた姿だ。あれこれ気を揉むアトラに「持ったよ」とか「確かめたよ」とか、ひとつひとつ適当に相槌をうつて流していく。

「宇宙船の事故なんて大昔の話でしょ。ギャラルホルンの基地を見学しに行くんだから、危険なんてあるわけないよ」

「あーかーっ！　だめだよ、そうゆうのは。いくら学校がやって

る研修旅行だつていつても、クーデリアがお金出して行かせてくれるんだから、ちゃんと勉強しようって心意気で——」

「わかってるってば。じゃ、行ってきますー！」

ひらりと身軽に手を振って、暁は集合場所へと走り出す。

心配性の里親——アトラ・バーンスタインはまだ何か言いたそうだったが、ふっと苦笑してから大きく両手を振った。

「いつてらっしやーい！ 気をつけてねーっ！」

もう一度振り返って手を振って、暁は軽やかにスピードをあげた。お気に入りのスニーカーが大地を蹴る感触、弾むような躍動感。待ちに待った夏休み！ 天気はすっきりと晴れ渡り、桜農園のとうもろこし畑は実に気持ちよさそうに地上の潮騒を奏でている。

二年かけて四季がめぐるクリユセの長い夏が、さあ起き上がろうとしているかのようだ。

アカツキ  
暁・バーンスタイン、14歳。

火星連合公立の小中一貫校に通う9年生だ。クリユセではアープラウやSAUの教育システムを模倣してKキンダー9年生までの十年制をとっているから、これが最後の夏休みになる。

クラスメートの過半数は高校受験を前に慌てふためいている時期でもあるが、暁の成績は上位三分の一圏内。志望校であるクリユセ大附属高校には余裕で合格できるだろう。おかげで、学校主催の研修旅行にも参加できることになった。

旅費は里親であるクーデリア・藍那・バーンスタインが出してくれ、リュックのように背負っているこの白い革製レザーのボストンバッグも、彼女の護衛ホテューガードをしているユージンが貸してくれた。

いつか持ってみたいと憧れていたものの、暁のお小遣いでは到底手が届かないし、どちらの母親にねだるのも気がひけていた大人のアイテムだ。持ってみるとやっぱり、いつもおしやれなユージンらしくセンスがよくて格好いい。

スクールバスの停留所に駆けつけて、ひとつ深呼吸すると、すぐにバスはやってきた。学期中と違ってガラガラの車内に乗り込む。

「おはよう」と挨拶しながら自分の席についた。

膝の上のポストンバッグを高揚感とともに抱きしめる。窓から吹き込んでくる爽やかな風に、母親ゆずりなのだという淡い茶髪がふわとそよぐ。

(これから宇宙旅行。宇宙なんて、初めてだ！)

有史以来、月面基地を火星人が訪れるのは初めてのことなのだという。暁はこれから、ただでさえ民間人立ち入り禁止の軍事要塞に初上陸する火星人になるのだ。わくわくが止まらなくて、思わず口元がゆるんでしまう。

このバスの中のクラスメートたちは、補習授業や夏期講習のために休みを返上して教室へ行くというのに。ほかにも学習塾などの夏期集中講座に通ったり、みんなは将来のためにと人生で一回きりの『中学最後の夏休み』を消費している。

なのに暁は、宇宙旅行。

成績優秀者のための、特別な研修旅行なのだ。

火星連合の議長トップであり、暁の母親でもあるクーデリアは「読み書きを学ぶとか、いろいろなことに興味を持つとか……そういう努力が身を結ぶ世の中にするのが、わたしのお仕事なんですよ」と常々語っている。

未来を担う子供たちに、無限の選択肢を——というスローガンを掲げる火星連合政府は、暁たち子供にいろんな経験をさせようと学校を建てたのだという。

長期休暇バケーションに入ればオリンポス山の麓にあるのキャンプ場がにぎわい、タルシス山トレッキングコースにもブーム到来とばかりに活気の波が押し寄せる。親子連れはもちろん、学生の団体にも人気のスポットだ。ゴミ拾いをするの入山料が割引になり、場合によっては学業成績の一部として評価される。

補習授業でいっぱいいっぱいエクストラ・クレジットのスケジュールだったとしてもハイキングに行くくらいの余暇は残されているから、成績補正が欲しければ山へ清掃に行けばいい。

あるいは、避暑地兼教育都市として知られるノアキスへ一泊二日。隣都市ノアキスはクリュセから鉄道で約半日ほどの距離にあり、車

が砂まみれになってもよければハイウェイもある。

むかしむかし、まだ小さな女の子だったころのクーデリアがヘノアキスの七月会議で活動家をまとめてみせた……という伝説の都市だ。ノアキスの行政を預かるリリアル・ギョウジャン首相もクリュセ大学で教育学を専攻した経歴を持つ才媛で、選りすぐりの名著だけを集めた図書館や美術館、知育遊園地、今度は本物の魚を展示する水族館を建設する予定だという。

さすがにクリュセからの日帰りは難しいが、ノアキスは成績向上祈願の都市として栄えている。

旅は人生を豊かにするとかどうとか言われてはいても、学校の授業についていけなくなったら本末転倒。落ちこぼれに遊んでいる暇はない。クリュセにだって子供く若者向けの娯楽施設は増えているから、学生のうちに惑星外旅行だなんて、特権中の特権なのだ。

(早く船に乗りたくないなあ……！)

スクールバスに揺られながら、暁は初めての宇宙旅行に胸をふくらませる。

片道十四日、到着したら月面基地を半日ほど見て回って、二十七日目には火星に帰ってくる予定だ。月行きの客船には、談話室にビリヤード台やダーツ、スロットマシンが置いてあるとか。食事が豪華なのとか。配布された『旅のしおり』は細々とした注意書きばかりで流し読みだが、面白そうなところはばっちり読んできた。

たった一ヶ月半の夏休みを、まるごと費やしての旅。  
初めてづくしの旅。

軍事要塞なんかより宇宙客船に興味が傾いてしまうのは、そう、仕方がないことなのだ。



火星から宇宙へ出る方法といえば、まず飛行場からマストライバーで打ち上げられて低軌道へと上昇、それから共同宇宙港へ方舟で宇宙船に乗り換えるのが常だ。

今も昔もそれ一択なのだ、旅行前にユージンが語っていた。

暁たちを乗せたシャトルは定刻通りに打ち上げられ、つつがなく〈方舟〉に入港した。乗客たちはターミナルへと降り立つと、次の船に乗り換えるためか、みな足早にコンコースを去っていく。

ばらばらな集団の中でひとり、暁は大きな窓に目を留めた。

上空からクリュセを一望できる、巨大な展望窓だ。暁の住む家の外壁一面よりも大きい。見渡せば、他にもノアキス、メリディアニ、アキダリア……火星連合加盟都市を俯瞰する巨大窓がずらりと並んでいるようだった。

もちろん肉眼で見渡せるような距離ではないから、どれもカメラの映像だろう。〈アリアドネ〉という通信機を経由して、この窓を模したスクリーンに映し出しているらしい。

「はい、みなさん、聞こえますか！」

コンコースの隅っこに暁たちを集め、片手を挙げてみせたのは引率のコーナー先生だ。暁もまた、場所をとらないように荷物をぎゅっと抱きかかえる。

「一般の方もたくさんおられるので、大きな声は出せませんが、改めましておはようございます。遅いですが、まだ午前ひるまえですのですね。おはようございます。えー、今回の研修旅行では、ふたつの船に分かれて、ギヤラルホルン月面基地を訪問させていただくことになります。こちらの船に十三名、こちらの船に九名です。どちらの船に乗るのかは手元のチケットに書いてあるので、よく読んでくださいね。みなさんのお父さん、お母さん、保護者の方々が申し込んだプランに基づいているので、チケットの交換はだめですよ！——はい、『何が違うの？』ですか。いい質問ですね。はい、はっきり言ってしまうと、違うのは、旅費です。お友達と離れてしまつて残念な人もいるかもしれませんが、宇宙旅行はとつても貴重な体験です。たくさんの学びがあるでしょう。学生のうちに宇宙に出るといふこの機会を無駄にしないよう、まずは十四日の往路を楽しんでくださいね。では、添乗員さんについてってください！」

先生の紹介があつて、ふたりの客室乗務員キャビン・アテンダントが旗を振つた。

今回の研修旅行の参加者は、生徒22人、引率教諭2人、合計24人。万が一のことがあったときのためにとふたつの船に分かれる……という古臭いジnkスのせいで、友達と離れてしまったという文句がぼろぼろと漏れ出ている。添乗員が妙齢の美女ではなかった側の13人の中からも、あからさまな不満がえええ、とあがった。

紹介された添乗員アテンダントたちは、正直な反応に苦く微笑する。

出端をくじかれたような空気のまま、連れ立ってタラップを登る。CAに導かれて広いロビーを通り抜け、客室に荷物を置きにいく。すると予想を裏切つて、そこは大部屋だった。

しかも会議室としても使えるタイプの簡素なやつだ。

(えーっ！)

正直な心のうちで、暁は自分自身があからさまに気落ちするのを感じていた。

同室には同じ学校に通うジェイク、ダン、ウイラード。それから見知らぬ顔がひとり、引率の教諭。男子生徒五名に、コーナー先生も加えて一部屋……というのは、期待していたイメージと違う。豪華客船のスイートルームは、どうやら中枢ブロックの数部屋きりらしかった。

女子四名は二人一部屋で、暁たちが寝泊まりする大部屋よりは奥まっけているが、同じくロビーのすぐそばだったようだ。『旅のしおり』のスケジュール表には部屋に荷物を置いてからロビーに戻ってくるまで10分と見込まれていたが、そんなにかかる距離ではない。

「はい、みなさん揃いましたね。わたしは引率の先生の、コーナーです。いつも学校で会っているみなさん、今回の旅が初対面のみなさん。一ヶ月に渡る旅をご一緒しますので、どうぞよろしくお願いします。ええー、わたしたちがこれから行くところは宇宙であり、ギャラルホルンの軍事拠点です。場合によっては危険がともなう旅になりますので、添乗員さんの指示によく従って、勝手な行動は絶対にやめてくださいね。特に機械やパネルには絶対に触らないように。お互いに声をかけあって、くれぐれも注意して過ごしましょう。それから、この船には他のお客さんもたくさん乗っておられます。今回の研

修旅行はみなさんだけのものではないので、譲り合いの心を持って、親切に礼儀正しく接するようにしてください。いいですね？」

「はい、と生返事がまばらにこぼれて、その場は解散となった。」

「……コーナー先生って、いっつも話が長いのよね。やんなっちゃう」と金髪の女子生徒、クレアがこぼす。

「言ってる」とジェイクが笑った。

クレア・ライシュ、ジェイク・スペクターはふたりとも暁と同じ学校の生徒で、隣のクラスだからコーナー先生はまさに担任である。日ごろ学校で毎日会っているから威厳も何もあつたものではないし、いっつもいつでも話が長いから、退屈のあまり聞き流してしまうのだ。今日だって半分も聞いていない。

「しかも独身！ やべーよな。お前もそう思うだろ？」

暁を振り返って、ジェイクが笑う。火星圏は身を固めて子供を育てることが社会的なステータスだ。36歳になつてもまだ独身というのは珍しい。恋人ができなくても、適齢期なら適当な友人と籍をいれて里子をもらうこともできるし、暁の里親だつて女同士、親友同士で結婚している。一緒に暮らせる友達すらいらないなら、注文をかければいい。テイワズには顔写真や基本スペック、希望の条件から花嫁を買求める注文結婚オーダー・ブライドという商品がある。

火星連合は高卒未満の結婚を禁じる超学歴主義社会だとしても、結婚資格を持っているのは過半数が木星系移民。木星圏の常識でなら中学生の幼妻だつて買えるともっぱらの噂だ。それでも敢えて独身を貫くのなら、事情があるのか問題があるのか、はたまたお金がないのかといった勘ぐりを免れない。

……のだが、ユージン・セブンスタークというごく身近な男が独身のため、暁は曖昧な苦笑で濁した。

「まあまあ！ あ、俺はスコット・スギウラつていうの。よろしくな！」と新ニューフェイス顔が割りり込んできたことで、その場は自然と新しい話題に移っていった。

往路十四日間の旅は、滞りなく進んだ。



居室は簡素だが食事はおいしいし、艦内には映画館もある。宇宙について添乗員の案内を聞いたり、夜は先生が寝ている横でゲームをしたり。こっそり部屋を抜け出して船内を探検してみたり。女子の部屋で朝を迎えたときはさすがに大目玉を食らったが、起床時間までにベッドに戻っていれば注意を受けることはなかった。

談話室のビリヤードは難しいが、ダーツは居合わせた老紳士に教わってコツをつかんだ。スロットマシンは未成年のみでの使用禁止で、添乗員さんに利用をやんわり断られて以来、結局まだ一度も遊べていない。

いつの間にか暁、ジエイクにクレア、それからノアキスからやってきたスコットとホリーが仲良しグループとしてひとかたまりになっていた。学校ではできない恋の話をしたり、親の前では言いにくいプライベートな噂話に興じていたら、二週間なんてあつと言う間に過ぎてしまう。

そして、火星を出発して十三日目の夜。

「なーなー、例の『ウィル・オー・ザ・ウィスプ』って見えるかな？このあたりだろ？」

好奇心旺盛なジエイクが身を乗り出すように外を見渡す。明日の朝には月面基地へ到着するというのに、ロビーの大窓からは相変わらず何も見えそうにない。黒い空間に岩石が浮かんでいるのみだ。

「うーん、それらしきものは見えねえなあ……」

暗礁に目を凝らしても、上下左右を見渡してみても、光っているものは恒星ひとつ見当たらない。学校の教室ならクレアが話に乗ってくるころなのだが……、仲良しのリナと別々の船に離れてしまったせいなのか、クレアはこの数日はずっと退屈そうに頬杖をついている。

どうにか盛り上げようとジエイクが話を振っても梨の礫、上の空だ。リナが乗っているのだろう船が窓から見えるだけに、あちら側の様子が気になってしまうのかもしれない。旅行会社こそ異なれど、宇宙の旅とはいくつもの客船や輸送船が連なって動くものらしかった。

クレアは乗ってこないならと、暁がつとめて明るく声を張る。

「その『ウイル・オー・ザ・ウィスプ』って、都市伝説だよな？ 本当にあるのかな？」

「月周辺で最も広大なデブリ帯ヘルーナ・ドロップ……その付近で観測される『鬼火』。投棄されたMSから漏れた気体に引火してるとか、エイハブ・ウエーブの干渉で自然発生したプラズマとか、諸説あるらしいけど」

「あれっ、スコットのここではそういう話なんだ？ ノアキスとクリュセじや違うのかな、俺が知ってるのでは『戦死した兵士たちの魂が抛りどころを求めて今もさまよっている……』みたいな怪談なんだけど」

「そう、それ！ 足を踏み入れた者は二度と戻らない……ブラックホールじゃないかって説もあるらしいぜ」

ジェイクがぐつと拳を握り、目をきらきらさせる。

ところがMSパイロット志望だというホリーが横からクールに一蹴した。

「男子ってバカだよな。あんな場所にブラックホールがあるなら、月が無事なわけないじゃない」

「確かにブラックホールなら窓から見えた時点で俺たち終わってるけど……」

暁が声を落とせば、ホリーと同じくノアキス出身のスコットが「なはは」とソバカス顔をくしゃつと歪める。どちらの肩を持つともなくフオローを入れた。

「都市伝説ってのは、おもしろおかしく話が盛られてるもんだって。地球の『バミューダトライアングル』だってほぼほぼ作り話だったけど、だからこそ話題になった。ブラックホール説もそういう工夫のひとつじやないか」

「へんっ。女子にはロマンってものがわからねえんだよっ」

不満げなジェイクがくちびるを尖らせた、そのときだった。

衝撃、船が大きく揺れる。

ドオンと響いた、地鳴りのような不穏な音。

「うわあつー！」

さらに揺れる。流されないよう身を寄せ合い、壁に捕まろうとするが低重力のせいで思うようには動けない。不安、焦燥。

混乱は伝播し、またたく間にロビーに充満した。

「で、デブリと衝突したとか、かな？」

「まさか！ 宇宙航路は安全で、……っ！」

「ホリーも危ないから捕まってー！」

机につかまったり、椅子に伏せたり、互いに強く抱き合ったり、それぞれに揺れをやり過ごす。

そんな中で、暁だけが窓に貼り付いてそれを見つめていた。

「モビル……スーツ……？」

窓の外は真っ黒な宇宙。見慣れない機影が現れて、短い手を使ってミサイルポッドを運んでくる。コロんとしたフォルムのMSはヘマン・ロディというが、主に無重力環境で運用される鈍重な機体ゆえ暁には馴染みがない。

ばかりとミサイルポッドの蓋が開く。ふたたび船が上下左右に揺さぶられたと思うと、窓の向こうで並走していた船が爆散した。

「うそ……リナ！ リナああッ！」

「大丈夫だよクレア、落ち着いて！ きつと救助されてるよ」

暁の励ましに、ジエイクがひとつ大きく息を吸った。

「そう だよな、宇宙で事故なんてじーちゃん世代の昔話だ。絶対に助かってる！」

「そうだよ！ 絶対に大丈夫だ。信じよう！」

「アカツキくんの言う通りだ……宇宙旅行から戻って来ないこともあったなんて、航行技術が発展していなかった旧時代のことだよね。俺たちが心配することは何にもない」

スコットも同調する。暁の言葉を発端に、みんなが平静を取り戻していくのがわかった。彼の「大丈夫」「信じよう」という言葉の力強さには、不思議と人をほっとさせる力があるのだ。

そんなとき、宙域には別のMSが二機、姿を現していた。やはり暁には見たこともない形状で、一機は鮮やかな鮮紅色スカレット、もう一機は蒼穹色スカイブルー。頭にはウサギの耳のような、それにしては尖ったアンテナらしきものがないと生えている。

初めて見る両機はまたたく間に変形すると丸っこいMSを圧倒した。凄まじいスピード、機動性。猛禽と野獣を思わせる柔軟な動き。

まるで、小説で読んだ吸血鬼ヴァンパイアと狼男ワーウルフのようだった。

(すごい……！)

またも船体は揺さぶられ、次々と襲いくる衝撃に悲鳴があがる。壁に叩きつけられる乗客、むちうちの症状を訴える乗客もいる。若い女性には恐怖のあまり泣き出し、別の女性は涙ながらに「大丈夫よ」「大丈夫よ」と繰り返し子供をなだめている。おろおろとあたりを見回すサラリーマン風の男もいる。蒼白な顔で時計を見ている男も。

だが暁には、なぜだかあの異形のMSが守ってくれるような確信があった。

## 002 イサリビ

『ご搭乗の皆さまにご案内申し上げます。本艦は、ただいま点検のため徐行を行っております。ご不便をおかけしますが、安全確認が済み次第、航行を再開いたします。月面基地への到着は約八時間後となる見込みです。お急ぎのお客様につきましては、二時間後、月面基地直行のシャトルが参りますので、お近くの乗務員に——』

モビルスーツ  
MSの戦闘を目撃してから二時間。

船内には絶えずざわざわと話し声が響いていた。

だが暁の体感では、二時間なんてものではない。まるで時計の針が粘ついた空気に押し戻されているように感じられる。

引率のコーナー先生でさえ状況を把握できていないし、近くを通った客室乗務員キャビン・アテンダントに声をかけても、まるで相手にしてもらえないのだ。医師や看護師が広いロビーに出てきて、乗客ひとりひとりに声をかけているが、暁たちのことはちらりと横目で一瞥したきり。

暁たちは、退屈を持って余していた。

「おれたち一体どうなったんだ？」とジエイクが両脚を投げ出す。

周囲を見渡しても取り乱す人はいない。焦っている人もいない。急いでいる人なら視界の端に見つかったが、搭乗員の乗り換え対応は手慣れたものだ。こういう遅延は、宇宙では案外よくあることなのかもしれない。

船団は連なって動くのが常なら、救助された乗客の合流も待たなければならぬ。この船にリナたちがやってきたら、クレアも元氣を取り戻すはずだ。二時間後には月面基地から臨時直行便がやってくるといい、きつとそれが暁たち研修旅行生を迎えにくるシャトルなのだろう。

すると、ガクンとこれまでとは違う揺れが起きる。

艦内放送とは異なるノイズがスピーカーをザツと駆け抜けた。

『民間航空AS L-58X2便、収容完了。——ご乗船のみなさんにご案内します。こちらは機動要塞ヘイサリビ。搭乗員の指示に従い、総員ノーマルスーツ着用のこと。連携がとれ次第、次の連絡を行

います』

ブツリとすげなく途切れたアナウンスと、機動要塞と聞こえた何かの名称。イサリビ。月面付近の鬼火『ウィル・オー・ザ・ウィスプ』の別名だ。

退屈をはねのける情報の到来に、ジェイクがパツと顔をはねあげた。

「イサリ……って例のブラックホールのことだよなっ?」

「いやいや、あれは都市伝説だから。けど、それと『機動要塞』って言葉……一体どう関係が?」

スコットがなだめると、その肩が背後の人物にぶつかる。「すみません」ととつさに謝った相手は、ワゴンを押してきたCAだった。ワゴンには、巨大な芋虫のような塊がごろごろ乗っている。

「すみません、お客様」とCAがにつこり微笑む。「お話中に失礼いたします。ノーマルスーツをお配りしております」

朗らかな笑顔で差し出された芋虫ともサナギ蛹ともつかない塊は、乗客用の宇宙服であるようだった。暁たちはみな一様に、寝袋のようなそれをしげしげと見つめる。さっきのアナウンスの中で言っていた『総員』の中には暁たち中学生組も含まれていたらしい。

配布されたノーマルスーツは衣服の上から着用するタイプのようで、非常時以外は使用せず滅菌・点検だけして客船に備え付けられているという。(要するに使い回しだろう)

暁たちは安全マニュアル通りに靴だけを脱ぎ、ノーマルスーツに足をつつ込むと、リュックでも背負うみたいに両袖を通し、ファスナーを顎のところまでしっかりとあげた。

パチンと金具をとめれば、砂袋のようにずんぐりとして動きにくい。

「おれもあつちのスーツがいいなあ」とジェイクが愚痴をこぼす。

別のCAが新たなワゴンを押してやってきて、くすくすと微笑ましげに笑う。彼女たちはスラリと細身のノーマルスーツを着用しているのだ。航空会社のロゴが腕章のようにプリントされたデザインといい、パイロットみたいで羨ましい。

「着用を終えられたみなさんに水とおつまみをご用意しています。こちら、レーションバーでございます」

全員が着用完了するまでの中継ぎだろう。文句を言う暇を与えないための粗品サイビスを受け取って、それぞれ「ありがとうございます」と礼を述べた。

ワゴンががらがらと向こうへ行くと、身を乗り出したのはホリーだ。

「糧食レーションだつて！ それも携帯用。珍しいね」

「おれ、はじめて見るかも……」とスコットも声を浮き立たせる。

めいめいに封を切り、意気揚々とかじりついたが、すぐに空気は重くなった。

口に入れるとパサパサしていて、味は薄い。かわいているので口内の水分が足りなくなり、ミネラルウォーターのボトルはすぐ空になってしまった。

おかげで腹はふくれるが……、客船での食事を続けてきたから、なおさら味気なく感じてしまう。

「い、一応これって非常食なん……だよな？」

「どうだろう……こんなばっさばさじや水がいくらあっても足りないし、非常食ではないんじゃないかな、さすがに」

「もし予定通りのスケジュールで月面基地に行けなかったら、帰りのごはんはコレだったりするの……？」

汚いものでもつまみあげるように、クレアが泣きそうな声を出す。

「ひええ、勘弁してくれよ……」

レーションは予想もなかった味で、完食など到底できるはずもなく、諦めてゴミ箱に投げ入れた。他の乗客たちもロビーに集まってレーションを食べているので、粉が散っていてストレスが溜まる。においが無いのがせめてもの救いだっただ。

いつしか会話も弾まなくなり、ロビー全体が静かになっていく。何かゲームでもしようかと考えても、ノーマルスーツの手袋では不自由だ。

あと数時間もすれば月面基地に到着する予定だったのに。わけも

わからず足止めを喰らってしまった。

ふと、機内を見回っていた顔なじみの添乗員が暁たちを覗き込む。籠のなかにゴミを回収しつつ、ワイラードに目を留めた。

「すみません、お客様。ファスナーは顎のところまでしっかりとあげてください」

「はあ？」

「着崩すのはだめだよ。宇宙用の安全防護服なんだから！」とホリーが手厳しく釘をさす。

舌打ちしつつ従ったワイラードをにこにこ見守り、CAはホリーに「ありがとうございます」と耳打ちしてから去っていった。

全員がきちんとノーマルスーツを着用しているかどうか確認にやってきたのだろう。別の若い女性もまた、同じような注意を受けている。一組にひとりかふたりはルールを守らないやつがいるらしいかった。

「ええ、やだ、なんか太って見えるし……」という愚痴が聞こえてきて、クレアがため息をついた。

ふたたび乗り換えをアナウンスする放送が降ってきたが、迎えのシャトルで月面基地に向かうのはギャラルホルン関係者のみとのことで、その『関係者』に暁たち研修旅行生は含まれないらしい。

到着までさらに八時間も待たなければいけないとコーナー先生に説明されて、暁はがっかりしてしまった。

(乗り換えて月に行くんだと思ったのに……)



そんなときだ。

外に出られるという報せが舞い込んできた。

『船内外の点検のため昇降口を解放いたします。非常口付近のお客様は、どうぞご協力をお願いいたします』

暁たちは誰からともなく顔をあげ、歓喜を共有した。ようやくだ。搭乗員たちによって非常扉が解放され、タラップが下ろされる。ノー



マルスーツを着たままでも、外の気配が窮屈さを和らげてくれるようだった。

暁たちはわっと勢い込んでスロープ状のタラップを順番にすべり下りていく。

すると、だだっ広いフロアがカチリと靴底を受け止めた。床はどうやら磁石のような素材でできているらしい。

一面の灰色、この二週間ですっかり慣れた低重力環境。さいわいにも暁は無重力酔いしない体質らしかった。

きよろきよろと見回す。殺風景だが、学校の運動場の数倍は広い。何かの倉庫だろうか、見上げれば上空ではキャットウォークが無数に行き交い、吹き抜けの向こう側にある天井は高すぎて見えないほどだ。

まるで巨大な水槽の底に立っているかのような気がしてくる。

ぐるっと周囲を見渡した暁は、機長らしき人物と言葉を交わしている若い男性を見つけた。きっとあれが、このリーダーなのだろう。着用しているスタイリッシュな宇宙服ノーマルスーツはパイロット専用、しかもギヤラルホルンの指揮官クラスが着用するタイプだ。両肩に赤いラインが入っているからよく目立つ。

ヘルメットらしきヘッドギアをつけているから、もしかしたら。

さつき襲撃してきたMSと、撃退した赤い機体について何か知っているかもしれないと思いたって、暁は思わず走り出した。

背中からスコットが呼び止める声が聞こえてきたが構わず、トランポリンを飛び移るように跳ねていくと、ちょうど話を終えたらしい機長たちが船へ戻って行くのと入れ違いに、リーダーらしき男性に声をかけた。

「あのっ……さつきは助けてくれてありがとうございます！」

声を張って呼びかければ、振り返った男は、引率のコーナー先生よりもだいぶ若いようだった。エンジンよりも、デルマよりもさらに若い。クツキーやクラツカと同じくらいだろうか。白人系で、髪はブロンド系だが暁のミルクティーブラウンよりかなり暗い色をしている。

暁の姿を見とめると、グレーの双眸を大きくみはった。

「……お前は……」

「ボクは暁・バーンスタインっていいいます。火星からきました。窓からMSが見えて……誰が乗ってたのかわかって、ずっと気になってて！」

「アカツキ……そうか。おれはこの機動要塞へイサリビの第一指揮官だ」と落ち着いた声で微笑してから、懐かしそうに破顔した。「見ないうちにでかくなつたな。三日月さんよりもアトラに似てきた」

「父さんのこと、知ってるんですか?」

「もちろん。お前のことも生まれたときから知ってるぜ? おれもアトラのメシで育つたからな」

「アトラのごはん……?」

暁はぱちくりと目をまたたかせる。そういえばユージンも、食卓を囲むときは同じようにアトラの料理を懐かしがる。

……アトラは里親で、血縁関係はない。そのはずだ。実の両親は、暁が生まれてくる前に死んでしまった、とふたりの里親から聞いていた。そもそもクリユセの法律では、血のつながった子供がひとりでもいれば里子を迎えることはできないはずだろう。

「それって——」

しかし、警告音が暁の疑問を遮った。

けたたましく響くアラートに続いたのは、さっきの放送と同じ声だ。

『接近する機影を捕捉! パイロットはコクピットで待機してください』

「……つと。出撃か」と、第一指揮官だと名乗った男が顔をあげる。

「あなたも戦うんですか?」

「飛行形態のヘグリムゲルデ。お前、窓から見てたんだろ?」

さっきの赤い機体のことだ、と暁はすぐに思い当たった。

やはり彼がパイロットだったのだ。蝙蝠のような翼を広げ、まるで小説の中の吸血鬼ヴァンパイアのようだった異形のMS!

「あのっ! ボクにも戦わせてください!」

「誰と?」

「それは……て、敵ど？」

「敵って、誰だよ？」と苦笑する。

「攻撃してきたあの丸っこいMSは敵なんでしょ？　ボクも手伝います。MSで敵をやっつければ、」

「話にならない。とにかくお友達に合流して、先生の言うこと聞いて待機している」

「おれもできることをしたいんです！」

「話は終わりだ、戻ってる。——ギリアム！」

暁の申し出をピシヤリとはねつけ、左腕を掲げる。すると、まるで避雷針に雷が落ちるように、なにかが猛スピードで降ってきた。

人影だ。青いパイロットスーツ姿の青年は掲げられた左手につかまっで一回転、宙返りの要領で勢いを殺すと空中で静止した。背中のバックパックに特殊なアダプタがついており、腰のあたりからは手羽先のような小型の両翼がよきつと生えだしている。どうやらそれで姿勢を制御しているらしかった。

左腕には腕章らしきものをつけていて、狼の紋章と赤いラインに目を奪われる。

第一指揮官の男は、風船でも引き寄せるといって顔を近づけると、何事か小声で耳打ちしだす。

見てはいけないものを見てしまったような気がして、暁はとっさに顔を背けた。うつむいて、両手で顔を覆う。でもなぜだか視線を引く張られて、気まずいのにはちらちら様子をうかがってしまう。ごくんと生唾を嚙下した音が、やけに大きく耳に残る。自分の心臓がうるさいと思ったのは初めてだった。

だって、あんなに近づいたら、他の人が気持ち悪いと思うのに。指揮官が人目を気にしなくていいのだろうか。居心地悪さを我慢しながら盗み見れば、鯉のぼりのように泳いでいる彼の顔には大きな傷痕がある。黒い前髪に隠された額から、頬まで引き裂くような十字の傷だ。見る人を不快にさせるから、痕を残さないように治療するべきだろうに……。

しかし緑色のひとみには、指の隙間からようすをうかがう暁の存在

など、まったく映っていないようだった。ふわふわと宙に浮いたまま「了解」と短い返事をしたのだけが暁にも聞こえた。

そして鷹匠にぶん投げられる猛禽類のように、はるか上空へ飛び立っていく。腰背部の小さな翼にスラスタが内蔵されていたらしい。

海底から水面を目指すように、猛スピードで遠ざかる。

(……まるでサメみたいだ……)

弾丸のような勢いで昇っていく姿は、人間というより水棲生物のように見えた。鳥の凶鑑で見たハヤブサの滑空にも似ているが、それにしては翼が小さく、サメやイルカの鱗程度しかない。

空に鳥がいて海に魚がいるように、無重力には彼のような生き物がいて、あんなふうに飛び、あんなふうに泳ぐのかもしれない。

「——アカツキ。お前、搭乗機はあるのか？」

唐突に話をふられて飛び上がる。

「と、う 乗機っ？」

「お前が乗るMSのことだ。持ってきてるのか」

「……持っていない、です……けど、貸してもらえれば！」

ぐっと拳を握って身を乗り出す。第一指揮官というだけに、これからパイロットたちの指揮をとるのだろう。もしかしたら自分も……と、パイロットへのあこがれ、期待に胸が高鳴る。

しかし、続く言葉は冷淡だ。

「慣熟訓練を受けた機体、練兵教官は誰だ？ シミュレーションは何百時間こなしただ。実戦経験はあるのか。お前の敵は誰で、お前は誰を殺したくて兵隊に志願する」

「かん……？ それは、えっと」

「力もないのに戦場に出るのは、味方殺しと同じだぞ。クーデリア先生がお前をそんな無責任な男に育てたなんて——」

「エーナービー！ あんまりいじめてやるなって」

黒髪の男がすっ飛んできて、リーダーにからんだ。肩を組んで勢いを殺すと、軽やかに着地する。さっきの傷の青年もだが、妙に距離が近い。まるで野生動物のコミュニケーションを見ているようだった。

気付けば、このふたりの左腕にも腕章がある。狼の紋章は同じで、白いラインが稲妻のように入っている。

今度の男は見るからに東洋系で、海賊を思わせる黒い眼帯アイパッチで左目を覆っており、……どうやら隻眼らしい。

「悪いな、アカツキ。こいつ、いつもはこんな嫌味なやつじゃねえんだけど、ちよつと潔癖でさ」

「っるせーなー！」

「ひと回りも年の離れたガキ相手に大人気ねーんだよ！ 職業軍人以外はノーサンキュー、でいいだろうが」

うんざりした声で諫言すると、とりなすように暁に向き直った。

「うちのエースだったらくソ真面目でよお。ともかく、今はここを守らなきゃならねえんだ。お前らは船人中で大人しくしてくれ」

「おつ……おれもMSに乗せてください！」

「訓練校を卒業したらな。そんなときや喜んで背中を預けるぜ。頑張れよ、未来のエースパイロット！」

「戦闘経験ゼロの中学生を戦場に駆り出すのは、世界が終わるかもしれないってときだ」

「えっ……？」

世界が終わる、なんて。何かの物語だろうか。暁の学校にも、そういった物騒なフィクションに傾倒しているクラスメートがいる。思春期に勉強を怠ると、そういった妄想にとらわれてしまうから気をつけなければならぬと、国語の先生が語っていた。

だが抜き身のナイフのようなグレーのひとみの冷たさが、真実味を物語っていて笑うに笑えない。

言葉を失う暁のもとへ褐色肌の男がやってきて、「エンビ」と呼びかけた。どうやら例の第一指揮官の名前らしい。軽いハイタッチを交わすとそのまま、さっきのふたりは飛び去っていつてしまった。

「グリムゲルデ2機から順に出撃だ！ 月面基地からライドの隊も出た。ヒューマンデブリ隊は全員ギリアムの指揮下につけー！」

上空高く格納庫全体に向かって声を張り上げてから、男は柔和に眉尻を下げて、暁を見下ろした。

「お前たちは乗ってきた船に戻って待機していてくれ。民間人が危険な目に遭わないように、おれたちはここにいるんだ」

屈強そうな体軀からは想像もつかなかった穏やかさで、チョコレート色の男は微笑してみせた。

さっきのふたりよりは話が通じそうな雰囲気だが、指揮官といえれば普通はクーデリアのような白人だろう。目の前の男はチャドのように有色人種だし、タカキのような金髪でもない。ユージンのように副官や側近の立場に就くことはできないはずだ。そういうのは認められない。そういえば、さっきの顔に傷がある青年も、隻眼の男も……みんな、これみよがしに汚点をさらしている。

そんな外見で、どうして他人に指示など出せるのだろうか。暁のほうがいいたたまれなくなってしまうて、目をそらした。



機動要塞へイサリビ。そのカタパルトから、ヘグリムゲルデ・ヴァンプ二機が加速する。

月外縁のデブリ帯ヘルーナ・ドロップの一角である。捕捉された敵影はヘマン・ロデイが六機とのこと、接敵まで間がなく、ここまです接近されていたのかとエンビの舌打ちが鋭利に鳴った。

おそらく、船団に張り付いて接近していたのだろう。民間船舶の受け入れを行っている間、一部船体の陰は管制室からもリアドネからも死角になってしまっていた。

民間人の収容など想定してこなかったから対応も後手後手だ。

「エンビ！」

「わかってるー！」

果敢に飛びかかって来た一機を蹴り飛ばして遠ざけ、エンビは主武装であるヘバエルソード改をつかんだ。

「ゲイレル」と併せて十二機を鹵獲してから半日も経っていないというに、一体どれほどのヘマン・ロデイをストックしているのか。

剣を振り抜き、腕を落とす。ぎよろぎよろと逃げ道を探すカメラア

イをフルスイングで砕き、足を止めては武装を強制解除していくが、  
〈マン・ロデイ〉の曲線的なフォルムは斬撃をいなしてしまう。

アルフレッド  
1号機の武装は、装甲に厚みと丸みを持たせた〈マン・ロデイ〉とは相性が悪い。

囲まれるエンビ。背中合わせのトロウが舌打ちする。ヴァルキュリア・フレーム特有の軽さ、阿頼耶識使い特有の素早さがあるので取り付かれることはなくとも、双方ともに決定打を欠く。

3号機——トロウに300mmの弾丸を連打されて動けない〈マン・ロデイ〉を弾き返して足止めしつつ、同時にアンカークローを放った。ワイヤーで脚をとらえ、同時に振り回して〈マン・ロデイ〉同士を激突させる。

ワイヤーアンカー、110mm汎用ライフル、それから腰部両サイドにショートバレルレールガン。当初はばらばらだった〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉の装備は統一され、戦い方は画一的になった。

トロウのレールガンがほとぼしり、背後からハンマーチョップパーを振り上げたマン・ロデイの頭部メインカメラをぶち抜いた。これで三機が機能停止。

残り三機。大型シールドで押し返しながら、エンビは思考する。リアーマーにはブーストハンマーを懸架している。かつて〈ガラム・ロデイ〉が装備していた大型の打撃武器だ。これなら一撃で決められる。

だから使えないのだ。

『……つたく……めんどくせえ、なあ!!』

敵パイロットを殺してはならないという制約のせいで、とれる戦術は限られている。

両手両足と首を落として動きを止めることしか、今のエンビたちには許されない。

そのときだった。

ほとぼしった信号弾が、増援の到着を知らせる。

月面基地から直行した援軍は七機。アリアンロッド所属のレギンレイズのカスタムチューンが一機と、その部下らしきグレイズシルト

六機の編隊だ。

隊長機は〈ヘシュヴァルベ・レギンレイズ〉。

七年前の〈ヘフェンリル革命〉を経てエースパイロットにのみ配備された高機動発展型で、女騎士の搭乗機である〈レギンレイズ・ジュリア〉をプロトタイプとしてチューンナップされた。ジュリアを1号機と数えて五機がロールアウトしたが、実際に運用されているのはまだ二機のみ。

左肩に白い稲妻模様が染め抜かれたシュヴァルベ・レギンレイズ2号機は、通称を『ブランカ』という。

搭乗者はライド・マツス。

『全機散開！ 包囲して鹵獲する！』

命令がオープンチャンネルで鋭く響くと、部下たちの『了解ッ！』という返事が鋭く跳ね返る。

すぐさま〈グレイズシルト〉六機が散開し、〈マン・ロデイ〉隊を取り囲むように加速した。連携をとっていない〈マン・ロデイ〉は〈グリムゲルデ・ヴァンプ〉二機のアンカーから逃れることに必死になり、包囲網から逃げ出す隙がない。

大型シールドを構えた〈グレイズシルト〉六機がぐるっと輪になり、〈マン・ロデイ〉六機を取り囲む。うち三機はもう動けなくなっている。

『放てー！』

ライドの号令で、六機のうち三機の〈グレイズシルト〉が滑腔砲を撃つ。交戦中だったグリムゲルデ・ヴァンプ二機はさっと離脱。〈マン・ロデイ〉六機に命中した弾丸が割れ、トリモチ状の中身が付着する。機体同士や関節に入り込み、動けなくなった。残り三機がネットを放ち、閉じ込める。

うちの一機が破れかぶれでネットから逃れ、ライドの〈ヘシュヴァルベ・レギンレイズ〉に突進するが、強襲したはずの隊長機は一瞬にして視界からかき消える。

パイロットが焦って辺りを見渡せば、背後からレールガンの銃口を突きつけられていた。



『武器を捨て、投降しろ。さもないと――』

ほのかに光をまとったレールガンが脅すようにほとぼしり、へマン・ロディンに害が及ばないギリギリをかすめた弾丸は正面の岩石を粉砕した。大小無数に飛び散る破片、そして全方位へと礫の雨が降り注ぐ。

『どちらにせよ死ぬのはお前じゃない。わかるな？』

威圧的だがどこか悲しそうな目をして、ライドは宣告する。ギヤラルホルンの機体に搭乗するライドが着用しているパイロットスーツには、隊長格であることを示す赤いマーキングが入っている。

アリアンロッドカラーは、ライドの赤毛とグリーンアイズには皮肉なほどによく映える色彩だった。

## 第2章 Living Dead's Scratches

### 003 狼の血

高度一万七千キロメートル。

ギャラルホルン火星支部が縮小された今も、静止軌道基地へアールスは火星を見張っている。

火星連合を治めるクーデリアは、地球へ降りるときも木星圏を訪問するときにも、この基地を経由せねばならなくなった。

民間の宇宙港からは身の安全を保証しかねるからと利用を拒まれ、護衛役を雇おうにも民間警備会社はあてにできない。ユージンらSPもMSにはもう乗れない。ギャラルホルンに頭を下げて、軍港を利用するほかに道は残されていないのだ。

しかし、今回アールスへやってきたのは、クーデリアが火星を離れるためではない。

不意に、回廊の向こう側から華奢なヒールの音が響いて、曲がり角から妙齢の淑女が姿を見せた。護衛には金髪碧眼の将校をたつたふたり付き従え、ロングスカートをたなびかせ闊歩する。

〈フェンリルの花嫁〉は、やがて対面したクーデリアに笑顔を見せると、スカートをつまんでたおやかに一礼した。

「お久しぶりです、クーデリア・藍那・バーンスタイン議長閣下。直接お会いするのは〈フェンリル革命〉のころ以来になりますね」

につこりと微笑するアルミリア・ファリド、26歳。セブンスターズの一家門の息女という立場に生まれついたがゆえか、彼女の立ち振る舞いは素晴らしく上品である。一步を踏み出すたびに革靴を模してデザインされたパンプスがつま先を覗かせ、プリンセスラインのロングスカートが貴族然とふんわり広がる。ビジネススーツのようなテーラード襟が絶妙に調和するアンサンブルドレスは、育ちのいいアルミリアでこそ着こなせるデザインだろう。

ボードウイン家純血の特徴たる薄すみれ色の髪がさらりと揺れる。

「はい、お会いできて光栄です」とクーデリアは朗らかに応じながら、  
——眼前の凄まじくストイックな装いに、ぞつと背筋が寒くなった。  
おそろしい女だ、と肌で感じる。

身にまとっているドレスはオートクチュール、主人のためだけに費やされた職人の努力を背景として備えている。最高級素材を過不足なく取り合わせ、細部にまでこだわりが行き届いた、これは作品だ。アルミリアが自分自身にトップレベルの審美眼を要求していることがありありと伝わってくる。

ギャラルホルンが七家による合議制を廃止してなお巨万の富を相続し、組織内での発言力を保持したままの<sup>セブンスターズ</sup>七星貴族こそ、誰よりも富める者の義務を体現すべき存在だという彼女自身の思想を、見事なまでに体現している。

素晴らしいものを世に送り出すことで、世界全体の財産は豊富になる。

みずから先頭に立って、努力が報われる世の中へと導く。

……そんなファリド夫人の勤勉さは、クーデリアが望む火星連合の教育改革と相性がいい。

巨額の寄付と出資があつて、クリュセでも博物館や資料館の建造が可能になつている。ノアキスの猿真似だ、二番煎じだと嘲笑の声もあがつてはいるが、クーデリアの目的はノアキスが行なっている選別に対する問題提起だ。

ノアキスの行政を預かるリリアル・ギョウジャン首相は、故アリウム・ギョウジャン氏の義妹にあたり、夫の兄の遺志を継いでヘテラ・リベリオニス<sup>レ</sup>を再興させ、見事首相の座を射止めた。

火星独立の祖たる思想家のひとりで、一男一女を育てる母親でもあり、立場は親ギャラルホルン。連合議会でアンチ・ドラッグなど掲げてしまったクーデリアとは比べ物にならないほどの人気がある。

地元の支持率は雲泥の差だ。孤児を守ることばかり考えて本来あるべき家族のありようをないがしろにしている、議長思想はこのわたしの影響を強く受けているというのに嘆かわしいことだ——とクーデリアの政策を手厳しく批判し、……おそろく、火星連合二代目

議長の椅子を狙っている。

リアル・ギョウジャン首相を応援する熱気が今後クリュセにも押し寄せるだろうことは想像に難くなく、そうなる前にクリュセはノアキスとは別個の教育都市として立場を確立せねばならない。(今から26年前、当時6歳だったクーデリアをへノアキスの七月会議に登壇させたのはアリウム・ギョウジャン氏であつて、彼の弟の妻であるリアル・ギョウジャン女史は無関係である)

ノアキスが名作のみを展示する図書館や美術館を建設するならば、クリュセは玉石混交の書籍を並べた書架と、司書あるいは研究者を常駐させる。建物はすべてバリアフリーに、入館料は無料とする。日中に訪ねればいつでも衛生的な水とともろこしのパンが無償で提供されるような、生涯学習施設が理想的だ。

フェンリル

狼の紋章を控えめに添えた建物は生涯学習施設として、地元の雇用にも貢献し、〈マクギリス・ファリド事件〉後、害獣のイメージを植え付けられていた『狼』という獣の名誉もまた、漸進的にだが回復の兆しを見せている。

につこりと微笑むアルミア・ファリドは、おそらく、自身の金銭的援助なしにクーデリアが議長の座にあり続けられないことを誰よりもよくわかっているのだろう。

すべての子供たちに教育を——と、かつてのクーデリアが願ってしまったせいで、数多の就学児童が薬漬けにされてしまった。

教育を与えたいという熱意に応えられる学校環境が整備できなかったことが、根本的な原因だった。

出席率が低迷するほど予算を削減される教育機関は、生徒を呼び寄せるために薬物を利用した。すべての都市に物資が行き渡るようにと作り上げたハイウェイや鉄道は、ドラッグの流通に一役も二役も買ってしまった。

連合という単位で共通の方針を掲げても、具体的な政策は各都市に一任される。生まれた街と水が合わなければ自由に移住してもいいのだという選択肢が提示された結果、火星連合はもはや母星の木星化に歯止めをかけることができなくなってしまうている。

むろん、火星に暮らす人々は、しあわせになっただろう。かつて地球圏の植民地であった過去に比べれば、生活の質は劇的に向上したと言える。しかし、その恩恵にあずかっているのは教育機関を整備するとき惑星外から招致した教育関係者および医療関係者ばかりだ。母星にもともと住んでいた火星人に還元されることはなく、周縁化された子供たちは今もスラムをさまよっているのだろう。

現状を少しでも好転させるために、今回の公式会談はセツティングされた。

火星を治めるへ革命の乙女へクーデリア・藍那・バーンスタイン議長。

世界中の孤児たちを支援するへフェンリルの花嫁へアルミリア・フリド夫人。

回廊の静けさは、ピアノ線を張りつめたような緊張感をそのまま表しているようだ。

金髪碧眼の側近のうちのひとりが、ふとアルミリアの背後をうかがって、内心でため息を落とした。

(ライドは……来ねえか、さすがに)

目を伏せるのは旧名ユージン・セブンスターク、議長SPである。公務員という立場上、本名を明らかにすると障りがあるが、クーデリアの関係者の多くは鉄華団残党であることはもはや公然の秘密だ。

それはアルミリア嬢とて同じで、元少年兵や元ヒューマンデブリを私兵として再雇用しているという。彼女の護衛任務とあらばライドも火星圏にやってきていないはずと踏んでいたのだが、あてがはずれたようだった。

最後にライドと会ったのは、六年前——クーデリアが所有するオフィスビルでの再会だった。

あの日、女騎士が連れてきた兵士の一团に紛れ、ライドはアリアンロッド・グリーン軍服を着ていた。ヒルメヤトロウは生きている、みな宇宙そにいるとそれだけ告げて踵を返し、それきりだ。

バーンスタイン議長閣下の警護を続けていればまた会う機会がめぐってくるはずだという期待が裏切られ続けた月日は、なかなか長

い。

あの日のライドは、ユージンを『迎えにきた』と言った。

ユージンはライドに「帰ってこい」と促した。

両者の主張はかみ合わず、こじれた関係はギクシャクしたまま、修復を先延ばしにした音信不通状態が続いている。

火星を離れたライドはもう家族のもとへ帰ってくる気はないのかもしれない。

一介の護衛にすぎないユージンの視線に気づいているのかいないのか、アルミリアは一瞥もくれない。まあ、当然の反応だろうが。雇用主であるクーデリアもまたSPの気持ちも推し量ることなく進み出て、火星の代表として「フェンリルの花嫁」を気遣うのだ。

「遠路はるばるお越しくださり感謝します。長旅、お疲れではないですか？」

「とんでもない。〈革命の乙女〉とお話できて、すべて吹っ飛んでしまいましたわ！ 通信ではなく対面でこそ築ける関係もあると信じております。あなたを信じる戦士たちの魂に恥じぬよう、わたくしも責務を果たさねばなりません」

外交としての握手、フアリド家当主の仮面が微笑する。和やかな握手を交わして、アルミリアはそつと、クーデリアの手に両手を添えた。まさに白魚の手という表現がふさわしい、傷ひとつない指先だ。そのまま祈るように膝を折り、ひざまずく姿はまるで巡礼者のようだった。

ユージンが片眉をつりあげた以外、彼女の行いを見咎めるものはここにいない。

誰よりも青いひとみを伏せ、長いまつげの下に隠す。

〈革命の乙女〉だけに聞こえるように、アルミリアは告げる。

「戦っています。彼らは、今も——」

彼らが生きる世界のために、抵抗を続けているのだと。

## 004 リビングゲツドの爪痕

月の破片が大小浮遊するデブリ帯ヘルーナ・ドロップの一角に存在する、関係者以外誰も知らない宇宙要塞。

都市伝説『ウイル・オー・ザ・ウイスプ』として知られるこの場所は、その実、七年前の戦いでエリオン家のスキップジャック級戦艦ヘフリズスキヤルヴとファリド家のハーフビーク級戦艦ヘヴァナルガンド、同じくクジャン家のヘフランペンシユマル、カルタ・イシユのヘヴァナデイス、そしてアルミリア・ボードウインのビスコー級巡航船ヘセイズが衝突してできた、スペースデブリの密集地である。ヘフェンリル革命最終後も回収されることはなく、そのまま補修を繰り返され、そこへ小惑星などが貼りついて現在のようになつた。付近を航行してもただの巨大な岩石にしか見えないこともあり、存在を公にしてこそいもの、今では月外縁の任務にかかわるギャラルホルン関係者全員が知る補給拠点のひとつだ。

当初こそ少年兵たちの療養の場と位置づけられていたが、アルミリアを支持する将校たちが相次いで月面基地から移住し、カルタ・イシユ親衛隊やクジャン家家臣および使用人らが集い、一種のシエルターとして機能するようになった。

都市伝説にある足を踏み入れた者は戻らないというおどろおどろしい一節は、彼らが表向き『ガンダム・バエルの残骸を捜索する』という作戦で出撃し、二度と戻らなかつたことに由来する。

紆余曲折を経て、エンビ・ヒルメ・トロウの三人交代制で指揮官をつとめる運びとなり、今では生活物資も合法的に行き来するようになった。ドクターやメカニックも多数常駐しており、アリアンロッド艦隊総司令官ジュリエッタ・ジュリス本部長が立ち寄ることもある。

艦橋にはウタやイーサン、戦闘部隊としてギリアムらヒューマンデブリー、七年前の生き残りだけで全クルーを賄えるというのだから、当時から優秀だった連中がアルミリアを支持しているのだろう。

世界は変わらない。

誰が特別で、何が普通で、どのように普遍であり、どうあれば異常

であるのか、体系的に説明する言葉もないままに、時間だけがただ止まらずに進み続けている。



『シユヴァルベ・レギンレイズ2号機、収容完了。パイロットは次の指示があるまで艦内にて待機してください』

宙域での戦闘を終えたライドを迎えたのはウタだった。鉄華団時代には強襲装甲艦〈エイサリビ〉の舵を預かっていた元少年兵は、今も〈ヴァナルガンド〉もとい機動要塞〈エイサリビ〉の管制官としてブリッジに詰めている。

「了解」

ライドは短く応じると、狭苦しいコクピットで伸びをした。

月面基地から部隊を引き連れてやってきたので、搭乗機の推進剤はそれなりに消耗している。補給はしておいたほうがいいだろう。ライドひとりならまだしも、阿頼耶識なしの七機編成では、デブリ帯を迂回しなければここまでたどり着けない。

「ブランカ」の愛称を持つこの〈シユヴァルベ・レギンレイズ〉は、いつかの〈ヘレギンレイズ・ジュリア〉をシリーズ化した二機目にあたる。プロトタイプだった1号機「ジュリア」同様、ライドの2号機「ブランカ」も、ブースターを増強した高機動型だ。燃費はすこぶるよくなく、燃料も膨大なので、推進剤の補充だけでもそれなりの時間がかかるだろう。

付近に残存兵が潜んでいるかもしれないとして、ライドは部下をともない、しばらくイサリビにとどまるつもりだ。モビルスーツMS隊が補給を完了するのと、月面基地のジュリエッタ・ジュリス本部長が増援を送ってくるのと、さて、どちらが早いか。

何事もなければ雇用主であるアルミリア・ファリドが火星に到着している頃合いだが……、そちらからの連絡はまだないようだった。

「久しぶりに艦内をうろつかせてもらおうとすつかな」

『「随意にどうぞぞ」』



しかし、言いにくそうに『……ただ、』と目をそらした気配が、ヘルメットの内蔵スピーカーごしに伝わってきた。

「どうした？ 何かあったのか」

『いや……ここで民間人を保護するのは今回がはじめてだろ？ 今日にはアリアンロッド正規兵も受け入れてるし、万一遭遇させた場合どうすべきか、俺じゃ判断できない』

「正規兵こっちから干渉しなければ何の問題もねえよ」

今回は特例だ。ギャラルホルンの基地は原則として民間人を招き入れないことになっているが、絶対的なルールがあるわけではない。そもそも民間機の機長が乗客に対して上陸許可を出す場合、基地側への要請が必要になるはずだ。上陸許可をあおがれても管制官のウタ、あるいは指揮官のヒルメが突っぱね、機長キャプテンは乗務員と乗客を従わせるのが筋だろう。

とはいえ、ここは航路にない場所だ。ギャラルホルンが存在を明らかにする前に民間人に知られるとなると、それなりの覚悟は必要になる。

都市伝説として知られるほどには丸見えだったのに、今まで隠れていた気でいられたほうがおかしいくらいだろう。マスコミに圧力をかければ報道一切を操れるのがギャラルホルンという組織だが、情報統制は望ましくない。もっと早く手を打っておくべきだった。

「……苦勞をかけてすまねえな」

自身の心苦しさを紛らわせるようにライドはいたわりを述べた。口先だけなら何とでも言えるというのに、言わずにはいられなかった。

かつての〈ハマーナガルム隊〉は、今は戦力を二分されている。ライドは整備員のカズマだけを連れて月面基地に、それ以外のメンバーは全員この機動要塞〈ヘイサリビ〉に詰めることで、生き残り全員が生きて治療を受け、仕事をしていけるようになった。

ギャラルホルンはもとより地球生まれでない人間ドを毛嫌いしており、月周辺で働くライドたち宇宙ネズミとギャラルホルン正規兵との間には今も深い溝が横たわっている。

火星出身であれば、父親が地球人だろうと火星圏から出られないのがギャラルホルンにおける『常識』なのだ。

火星人が地球へ降り立つことからして罪深い。

いつかはクーデリアが地球へ行こうとした程度でCGSごと潰そうとした前歴に照らせば、ああ、そういう価値観だったのかと諦めじみた納得もできるが、火星人の母親を持つ兵士たちが昇進のハシゴを外されてきた出生地主義の撤廃も含めて、アルミリア・フアリドが目指す『革命』だ。

月面基地とルーナ・ドロップに分かたれてはいても、ライドが属しているのは革命軍側の陣営であるから、どうあっても『ギャラルホルンの常識』や『地球圏での常識』を問わねばならない。

とつとつ住み分けてしまったほうが平穏ではないか、という考えがよぎっては、それではせつかく前に進んでいる経済格差問題を後退させてしまうと、頭を振る。

「お前らがいつも通り仕事できるよう、部下の面倒はこつちで見るとフリーフィングルームひとつ貸してくれ」

『気にするなよ、いつものことだろ？ それより——』

そして続いたウタの言葉は、ライドが耳を疑うものだった。

「なんだって……？」



交戦したマン・ロデイ六機は全機拿捕。パイロットは全員月面基地に送るシャトルに乗せた。六人とも生け捕りにできた今回は、珍しいほどの好調だったと言える。

(いや、ライドの増援があったからだ)

自嘲がちに、エンビは口元を歪めた。

どこの誰だか知らないが、鉄砲玉を大量投入した波状攻撃の甲斐あって、このところよく眠れていない。いつまでストレス性の不眠症など患っているのか、まったく情けない限りだ。

惰性で見渡したドックでは、ヘグリムゲルデ・ヴァンプに加え、ラ

イドの〈シユヴァルベ・レギンレイズ〉、〈グレイズシルト〉など所属の異なるMSがそれぞれに補給・整備を受けている。

アリアンロッドの緑色がずらりと並び、別の色なんかライド機のある白いノーズアートくらいだ。

ここはエンビたちの拠点だというのに、赤い1号機アルフレッドと青い3号機チャールズのほうが、いつそ場違いに思えてくる。

ここ機動要塞〈エイサリビ〉の指揮官はエンビ・ヒルメ・トロウが三人交代制でつとめており、今日の指揮官シフトはヒルメである。なのにパイロットであるはずのエンビが戦闘から戻るや否や呼び出され、まるでヒルメの上官かのような扱いを受ける。

管制室をウタが預かっていたのも同じ理由だ。白人のイーサンは機長やら責任者やらへの状況説明係として慌ただしく走り回っている。

ギャラルホルン、火星連合、テイワズ——どんな組織も首脳陣はもっぱら白人で、ヒルメやトロウの言葉には機長も教師も耳を貸そうとしない。ところがエンビやイーサンが出て行けば、手のひらを返したように話を聞きはじめるのだ。

事故防止のためには、どうしても話を聞かせる必要がある。指揮官が有色人種では業務に支障が出る。軋轢、摩擦、衝突——価値観の違いから揉め事が起こる。それなら長い物には巻かれてしまったほうが、組織は円滑に回るのだろう。

出生地、肌の色、性別、年齢、健康状態……あらゆる要素が人生の障害になる、そんな法と秩序に甘んじてしまえば。

ふうと肺腑の底から、ため息を吐き出す。

背後でかつりと鳴った足音に、振り返るのも億劫だった。

「大丈夫か、エンビ」

「ライド……！　なに、おれ、そんなに景気の悪い顔してるか？」

肩をつかまれ、思わず声が上がった。貼り付けた笑顔も引きつってしまい、エンビは諦めとともに似合わない仮面を剥がす。ライドなら放っておいてくれるはずだという甘えがどこかにあつたらしい。察しのいいライドには、もうすべてお見通しのようなだった。

驚かせちまつて悪いな、と短い謝罪を、前置きにする。

「さつきウタから聞いたんだよ。保護した民間船の乗客リストの中にあった例の名前のこと」

『暁・オーガス・ミクスタ・バーンスタイン』。——母親 アトラ・ミクスタに生まれ、父親 三日月・オーガスとの間で作られた実子。  
彼アカツキ自身は何の罪もない民間の中学生だとしても、鉄華団の年少組にとつては、ある種の天敵のような存在だ。

そんな少年と、エンビは直接会ったのだろうか。

「……もうライドの耳に入ったのか」

「当たり前だ。俺が言うのも変な話だが、お前、ひとりで背負おうとするんじゃないぞ」

「わかつてるよ。みんなわかつてる」

ここでは報告・連絡・相談が原則である。仲間に対して情報を伏せることはしない。

何にせよ、価値観とは総じて集団の内側で形成されるものだ。普遍のものなどないし、世界共通の常識なんてものは存在しない。時代、場所、状況によって万華鏡のように変化していく。

わかっている。たとえユージンら穏健派が『家族Ⅱ血縁』という社会規範に取り込まれていったって、ギャラルホルンの過半数を占めるエリオン陣営が出自の貴賤を重んじる秩序を押し付けてきたって。鉄華団がつかないだ鉄と血の絆が消えるわけではない。

家族なんかじゃなかった、おれが間違ってた、なんて、認めてやる必要はない。

「なあライド。俺だって、ガキが学校に通って、勉強して、友達と馬鹿やって笑ってられるような世の中になったことは、本気で嬉しいと思ってるんだぜ？　ただ、少し……割り切れねえだけでさ」

「俺もだよ。悪いな、フォローしてやるつもりだったのに」

「いいって……過労死されたら寝覚め悪いし。むしろアリアンロッドの師団長様がこんなところにいるって民間人に知れたら、いろいろと面倒なんじゃないのか？」

月面基地での待遇だって、決してよくはないのだろう。

師団長という階級に比してライドは28歳とまだ若く、火星生まれの元少年兵、しかも阿頼耶識のヒゲつきという経歴だ。アルミリアの推薦でギャラルホルンに『特務三佐』待遇で入隊し、武官としてここまで出世してみせた背景には、並ならぬ苦勞があつただろう。

七星貴族の縁者ばかりのギャラルホルンに彼を入隊させて、何か問題がありますか？ ……と剛毅にも言い放つたお姫様も、ここを訪ねてくるたびライドの身を案じている。

アリアンロッドは、アルミリアにとつても鉄華団にとつても『家族の仇』に違いない。

「それでもだよ。結局お前らに苦勞をかけてるんじや、七年前から何も変わってないってことだな」

七年前——へフェンリル革命の終結とともに、ギャラルホルンは『ラストル・エリオン派』と『アルミリア・ファイド派』に分裂した。両陣営は今も水面下で火花を散らしあい、この月外縁一帯にも、ラストル派筆頭ジュリエッタ・ジュリスと、アルミリア派筆頭ライド・マッスという代理対立構図がある。

機動要塞へイサリビへの補給ラインは、ライドがひとりで守っているようなものだ。イサリビに限らず月面基地にだって生活物資を自給する能力はなく、宇宙拠点はいずれも絶海の孤島と同じだ。輸送が滞ればたちまち食糧難に見舞われる。

ライドの存在なしに、エンビたちは生きていけない。

ジュリエッタ・ジュリス本部長の次官、という表向きの立場だって、故郷を奪われた鉄華団残党のひとりとしては耐えがたい屈辱だろう。

耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで、ライドは緑色の軍服およびパイロットスーツをまとい、月外縁軌道統合艦隊へアリアンロッドのMSパイロットとして、師団長という階級を得た。

「ライドはもう充分すぎるほど仕事してるよ。ただ、どうにもならないことが多すぎるってだけだ。世界なんてのは結局『個人』の集合体で、変わる気のねえやつの方が多数派多数派なんじや、当然の結果だろ」

ほんの何人かがもがいたって『全員』は変わらない。

どれほどの悪行が暴露されようともラスタル・エリオンは今もギャラルホルンの代表で、それは暗に、彼の所業に対する『失脚させるほどのことではない』という消極的な肯定だ。

コロニー公社との癒着、労働組合への武力介入、地球経済圏に対する紛争幫助、民間企業への冤罪と弾圧、それから内部告発者が受けてきた虐待の事実を公表しセカンドレイプのち強制失職。報道統制によって創作され、七年間続いた平和を弾劾したのが、七年前のヘフェンリル革命だ。だった。

アルミリアが表舞台に立ち、ギャラルホルンという組織が「そんなつもりで行なっていないので、そうではない」という力技を使えなくなった。

ようやく世界は変わり始めるかと思えば、今度は各経済圏がだんまりを決め込みはじめた。

ギャラルホルンとの対立を恐れて经济圈同士の関係が緊張し、外交を足踏みさせているらしかった。なかでもアープラウは、実質的な東西分裂状態にまで追い詰められている。ただでさえ北半球北部に追いやられた、夏を知らない土地だろうに、このままでは空中分解の結果アフリカンユニオンとSAUに統合されてしまいかねない。

回り回って実害を被るのは、アープラウと縁深い火星連合だ。

今から十五年前、ギャラルホルン火星支部が規模を縮小したことは、火星に暮らす人々にとって決してプラスではなかった。クーデリアが旧蒔苗派とのパイプを持っていればこそ、連合政府は完全な傀儡政権にならずにいられる。

アープラウに潰れられたら、火星は今度こそアリアンロッドの手に落ちる。次の議長選出馬に意欲を示しているリアル・ギョウジャンとかいう女市長も、ギャラルホルンの火星介入を望んでいるという。「誰にせよ、保身が優先だろうからな。火星もコロニーもダインスレイヴ一斉掃射で墜とせちまう立地だし、地球を一步出ればみんな人質も同然だ。下手には動けない」

「どうかな。そんなこともわかってないかもしれないぜ?」  
でなければ、こども聞き分けのいい民衆ではいられないだろう。

「アンチ・インテリジェンス  
反知性主義の爪痕ってやつか……それをどうにかしなきゃなんだ  
が」

舌打ちを交えて、ライドはため息とともにエンビの肩に突っ伏した。

どちらの肩のアーマーにも指揮官クラス特有の赤いマーキングがあるが、エンビのパイロットスーツは革命軍と同じ青。

ライドのそれは、アリアンロッドの緑だ。

人生でこれほど着たくもない色なんて珍しい。おかげさまで、葉や草を描くのにグリーンの絵の具を使うときにまで抵抗感で息が詰まってしまう。

「問題意識を持たないほうがしあわせに暮らせるってのが、この世の真理なんだろうな」

どこか遠くを見るような目をして、苦笑したエンビは七年前の後遺症で右耳が聞こえない。以来、ここイサリビでは誰であっても話しかけるときは左側にまわる習慣が根付くようになった。（今はインカムに骨伝導スピーカーが採用されたおかげで立体的な聴力を得られているが、ヘルメットをとった途端に意思疎通が困難になるようでは、現場が円滑に回らない）

正規兵からはベタベタと気持ち悪い……と白眼視されることも少くない。これが正しい対処法であるという自信もない。それでも仲間同士が歩み寄って不自由を克服するのが、ここでのやり方だった。

火星にいては生きていけなかったから、生きていける場所を求めて逃げて、逃げて、逃げてたどり着いたのがここ、『ウィル・オー・ザ・ウィスプ』だ。

逃げずに向き合うべきだったんじゃないかと悩まない日はなかった。

生きたいなんて願わずに、大人しく死ねばよかったんじゃないかと考えない夜はなかった。

学校で『少年兵は駆除されるべき害獣』と教えられることに疲れていた中学時代が、今はもう遠い昔だ。あのころ、諦めきった目をして

IDを売り払った現役少年兵の同級生たちに、声をかけられておけばよかつたと何度も何度も後悔する。

アルミリアの護衛として雇われたから傭兵として生きながらえた一方で、『デブリ墮ち』した同級生たちはみんな根こそぎ銃殺刑に処された。

〈ヒューマンデブリ廃止条約〉が締結されて、宇宙ネズミの生きる場所はなくなくなった。

数多の死は、害獣への報いだっただけそうだ。

ヒューマンデブリに限らず、少年兵はいわば『殺傷力の高い肉盾』である。宇宙海賊としても民間警備会社としても、安く・早く・確実に手に入る鉄砲玉。需要がある限り密輸業者は必ず現れ、孤児の多い火星圏はストリートチルドレンが豊富にいる。

少年兵として戦場を生き残り続けければ、サバイバーはもはや手に負えないほど屈強な戦士に成長している。

条約が制定されたからといって、生きたまま保護するのは難しかったのだろう。

武装した少年兵の捕縛、身柄の保護、怪我人の治療および自殺防止、食糧と寝床の提供、所有者との交渉とIDの返還、セラピーと再教育に就労支援……といったもろもろのアフターケアを行うには、国家予算規模の莫大なコストがかかる。火星連合とギャラルホルンが協力しあって捻出しなければならず、アーブラウからの寄付金以外に追加資金のアテもない。

ギャラルホルンにとって、ヒューマンデブリの廃止とは経済制裁をも意味していた。

廃止条約締結まで漕ぎ着けたのは蒔苗・東護ノ介アーブラウ前代表がその晩年最も力を入れて取り組んだ仕事あつてこそと報道されていたし、実際、その通りなのだろう。鉄華団の存在が記録に残らずとも、アーブラウの議事堂が『蒔苗記念講堂』と名を改められるなど、旧蒔苗派の影響力は今なお強い。

アーブラウはギャラルホルンによる選挙妨害、国家元首爆殺未遂といった政治への干渉のほか、国境紛争を誘発させられ、植民地にはダ



インスレイヴを勝手に撃たれて、数々の実害をこうむってきた。

ヒューマンデブリ廃止の風は、蒔苗老が最期に放った反撃の一矢に違いない。

火星連合にとっては、地球経済圏の関心を得られたことは意義ある前進である。すぐさま現状を全世界に向けて明らかにし、孤児院への受け入れや教育機会の均等といった政策を掲げた。テイワズが背中を押して、若くして議長に祭り上げられたクーデリア・藍那・バーンスタイン女史の政治手腕を示した。

ところが、そうした迅速な対応はギャラルホルンを急かすことにもなった。

地球経済圏からの出資もなしに、これまで通りの予算の中で、ヒューマンデブリ対策を行なわなければならぬからだ。

宇宙は広く、エイハブ・ウエーブによる通信障害が海賊や違法船を巧妙に守っている。誘拐奴隷の密売業者は健在で、連中がどこに潜み、どこで取引を行なっているのかわからない。非正規航路をくまなく探すのは、時間と人員、予算が新たに必要となる。これまで通りの給与しかないのに、誰がそんな七面倒くさい仕事を引き受けるだろうか。

そんな状況を逆手に取ったアルミリア・ボードウインが率先して傭兵を雇い、ノブリス・ゴルドンを暗殺。貿易商の仮面をかぶってギャラルホルン製の兵器を販売し、資金回収に貢献した。同時にヒューマンデブリ保護にも乗り出したが、しかし、ラスタル・エリオン公は彼女の行く手を先回りするように殲滅作戦を遂行。火星やコロニーで目に付いたヒューマンデブリを粛清し、ヒューマンデブリ所持につきまとうデメリットをアピールする見せしめを行なった。

武力行使を恐れ、海賊や民兵組織は次々にヒューマンデブリを差し出した。

手柄はエリオン公が総取りする結果となり、現役ヒューマンデブリの救済方法は殺してやることだと結論が出された。

そのころ火星圏は、脱植民地化の影響で情勢がひどく不安定だった。軍隊であり警察であり司法でもあったギャラルホルン火星支部

が撤退し、無法地帯を守るものはもう何もなかったころだ。そんな状況において、ヒューマンデブリ殲滅はアリアンロッド艦隊が海賊から火星を守ってくれたと印象付けるには充分だっただろう。

報道統制との二段構えでもって、この平和はギャラルホルンという強大な組織に守られている尊いものだという実感を与えた。

子供が惨劇の目撃者になってしまわないようにと、火星連合政府が16歳未満の就学を義務付けたことも追い風になった。

未来ある子供たちのために学校教育を充実させることが最優先事項だ。少年兵はもう道を踏み外してしまった存在であり、まだ道を踏み外す前の、何の罪もない子供たちを先に保護しなければ対応は後手後手になってしまう。警備会社で働く現役少年兵や児童労働者、ストリートチルドレンも十把一絡げに教室へと詰め込まれた。

教師陣は「少年兵にはならないように」と強く訴えたのだが、何故なのか出席率は回復しない。

ところで、クーデリアは十六歳のとき鉄華団と深く関わったことで、己の認識と現実のズレを自覚したという。

木星から招かれてきてほんの数年の教師たちに、火星の少年兵がどんな暮らしをしているか、どこまで伝えることができたろうか。

閉鎖的な施設に押し込めて「少年兵は無抵抗で死ぬべき害獣です」「生きているのは間違いです」と復唱させるなど、自尊心を削ぎ落とし後天的に認知の歪みを作り出す『洗脳』のテクニックそのものだ。そこから自らの足で地獄から立ち去れるほどの判断力があつた生徒から、死の淵に消えていった。

退学者——実質的な自殺者——に歯止めをかけた学校を救うため、ドラッグの売人が暗躍。薬物を使用すれば、登校する意欲を飛躍的に高めることができる。教育機関はこぞってドラッグの買い付けに走り、給食や空調設備に混入させることで生徒の呼び戻しを図った。

当時の火星連合政府は『就学率アップ』を目標に掲げており、公約を達成できる連合政府、生徒が戻ってくる学校、なんだかい気持ちになれる生徒——というwin-win-winの関係に陥った。

思考能力が低下すれば、洗脳はより効率的に進む。一時は英雄視すらされた『鉄華団』という名前も驚異的な早さで風化し、忘却された。女も子供もぼやぼやニコニコして何もかも受け入れる薬漬けのイエスマンが『模範的』と褒め称えられ、ものを考える異端児として疎まれたエンビたち元年少組は、アイデンティティの屠殺場から逃げ出した。

すべからくして世論は停滞。無知でいることを赦しただけのラスタル・エリオンは、自ら手を下すことなく蒔苗老の報復を打ち砕いてみせた。

PD・331年にヘビューマンデブリ廃止条約が締結されて以来、火星市民の幸福度は高まり、比例するようにクーデリアの支持率も向上。クツキーやクラツカは風評被害から逃れ、鉄華団残党も念願の安息を得た。

そんな平和な日々も、七年前、モンターク邸炎上事件を境に崩れ去る。

アルミリア・ファリドによる告発で『教育機関における薬物の常用』が明らかになったことで、火星の治安は劇的に悪化。〈革命の乙女〉の再起とともにドラッグの流通規制がかけられ、反動で中毒患者が火星じゅうにあふれかえった。

給食からドラッグが抜かれたことに各地で反対デモが起こり、秘密裏に売買される脱法ドラッグをめぐって犯罪が急増した。窃盗や略奪、偽物や不純物混入による薬害問題。病院のベッドはまたたく間に満床になった。

取り締まりを強化しようにも金銭で買収できるクリュセ市警は頼りにならず、医師や看護師、医療施設も足りない。薬に染まりきった当時の火星世論は『適度なドラッグは必要』という結論を出してしまった。議会でも、薬物を全面禁止する法案は反対多数で正式に否決された。

結局、望まれていたのは現状維持だった。

労働者も少年兵も『消耗品』としか思われてはおらず、使えなくなったら不便だ……と不満に思う感性が『普通』だった。見知らぬ他人が

使い潰されても誰も気にしない。植民地に生まれたのだから、生まれてから死ぬまで奴隷でいればいい。どうでもいい。関係ない。多数派の意見は、自分の生活に必要な物資が安く手に入るほうが重要だという、無関心なものだった。

嘆かわしいことに、それが喰い物にしていることだと自覚できるほどの倫理感も、自制心も、想像力もなかったらしい。

これまで教育も法治もなかった火星圏では、むしろ妥当な顛末と言えた。

過去を思い返すほどに、居場所のなさを思い知る。

本当の居場所を探してきまよって、そんなものはオルガ・イツカの方便だったのだという現実には打ちひしがれる繰り返しに、心身を疲弊させている。

アルミリア・ファリドの叫びは確かに響きわたり、〈革命の乙女〉クーデリア・藍那・バーンスタインの完全復活が各植民地の労働者たちに一条の光を見せたものの、社会的弱者が希望を持ったところで、肉食者の楽園が揺らぐことはなかった。

唯一の成果といえばギャラルホルン内部の意識改革くらいのもので、『実力主義』『綱紀粛正』『自己研鑽』が重視されるようになったギャラルホルンは今、深刻な人手不足に見舞われている。

コネ出世だった将校やパイロットが作戦から外されていき、これまで通りの物量作戦が行使できなくなったのである。

ラスタル・エリオンが叶えたのは、ダインスレイヴを大量に配備して「せーの」で発射ボタンを押すだけだいい『罪悪感のいらぬ』永劫の安寧。

アルミリア・ファリドが求めるのは作戦にかかわる全員が個々に知性と勇気、責任感、判断力を持ってみずから『罪悪感と向き合う』公正な未来。

後者の立身により、作戦はみんなでもやるものではなくなった。指揮

官は作戦指揮能力に優れていなければならず、パイロットは操縦技術に秀でていなければならなかった。部下のミスは上官が背負わなければならぬ。

責任逃れのできない秩序に対して「これでは窮屈だ」という声が次々あがった。

役職を追われた貴族たちから「今までならそんなことはなかった」と反発が起こり『血統主義』『年功序列』『男尊女卑』といった、これまでの封建的な体制が声高に賛美されるようになった。

追随するように、アフリカンユニオンは率先して保守に転じ、血統よりも暴力を重んじる無法者としてファリド派を批判している。

ところがエリオン派を批判したラスカー・アレジ代表は、目下原因不明の体調不良で長期入院中だ。

秘書であるタカキ・ウノが代弁者として表舞台に出てきていることから「あいつがやったのだ」ともつばらの噂だが……、万が一の襲撃に対処できる人員として、タカキが弾除けの役目を買って出たのだろう。

一連のバックラッシュが世界を駆けめぐり、革命によって評価されるようになったはずの実力主義的強者——有能な指揮官や腕利きのパイロットたち——は今『力に固執する愚者』と疎んじられている。

かつてラスタル・エリオンが預言した通り、このご時世にギャラルホルンの原点回帰を叫んだマクギリス・ファリドの軍事クーデター失敗は『力に固執した人間の愚かな末路』そのものだったのだろう。

技術の進歩は目覚ましく、今では初心者でも乗りこなせるグレイズが量産され、パイロットの腕などもはやどうでもいい時代である。物量という圧倒的優位性があれば指揮能力など無用の長物。

ダインスレイヴを解禁しうるエリオン陣営は、無敵だ。

もし、ダインスレイヴでこの機動要塞へイサリビが墜とされれば、ファリド派は一掃され、世界は平和を取り戻すのだろう。

「……おれらの中で一番お姫さんの理想に賛同してたのはお前だったってのにな……」

「おれも甘い汁が啜りたかっただけだ。パイロット張れるほど強くな

かったし、白兵戦には背丈も足りねえ、ライドと違って絵も描けねえ。背伸びしたっておれはなんの取り柄もないガキで、幹部と違って暇だったから、本を読んでる時間ならいくらでもあった」

勉強は好きだった。宿題は真っ先に終わらせて、MSのマニュアルを覚えるほど読み返し、孤児院に配布されたものと同じブックデータが鉄華団にもとよこされたときは、あるだけ全部読み尽くした。

インテリ優等生呼ばわりも案外、満更でもなかった。

かつてモンターク邸内には図書室なる倉庫が存在していたから、暇を出されるたび、部屋いっぱいの本棚に魅了されて寝食を忘れたものだった。

アグニカ・カイエルの伝説や厄祭戦当時の記録物、ギャラルホルンの戦術指南書、経済圏の新聞などが室内を埋め尽くすほどに取り揃えられていた一室も、七年前に屋敷ごと燃やされてしまったけれど。

「そういう努力が実を結ぶ世の中になるはずだったんだ、エンビ。お前みたいなやつが出世するようになってくはずだった」

「運よく趣味がベンキョーだった嫌味な野郎がか？ それを努力家だなんて、誰も呼びやしない」

「呼ぶんだよ。いいものをいい、得意なものを得意と認められる世の中ではな」

「そんな世の中になったらみんなが困るんだ。だからおれは死んだ。英雄殺しのお尋ね者にもなれずに、心折れて舌を噛み切ったことにされた」

七年前、エンビは『月面基地への侵入・破壊工作』の罪で捕縛され、取り調べ中に自殺した。作戦に失敗した責任を取らされる前に死んで逃げた、という筋書きだ。

尋問を命じられたアリアンロッド兵士らは危うくサンドバグを殺害しそうになったが、寸前で実行犯になることを躊躇。ラストルは兵士たちの不安に理解を示し、追求しないことを約束した。エンビの結果的生存で殺していないことの証明がなされ、エリオン陣営への忠誠心は増強された。拷問の事実は一Dとともに闇に葬られた。

結果、エンビがガエリオ・ボードウインを襲撃したことも、尋問中に瀕死の重傷を負わされたことも、記録上なかったことになっている。

一連の屈辱的な改竄のおかげで、アルミリアやクーデリアが月面基地の修復費用を請求されず済んだのもまた事実だ。

修復不能なまでの損害をすべて自殺したテロリストひとりにかぶせることで責任の所在はうやむやにされた。

誰も責任をとらなくていいという安心感に、誰もがほっとした。高額な請求をされなくていい、断罪されて地位を失わなくていい。人生を棒に振らずに済んだ。寛容なる支配者ラスタル・エリオン公が導くのは、失敗しても咎を負うことのない、永劫の安寧だ。

正しい秩序が、優しい世界が、結果によって証明されていく。

「おれたちで取り戻すんだ。鉄華団も、お前の過去も。書き換えられたままで黙ってられるほど、おれたちは大人しくない」

そうだろ、とライドは念を押す。手遅れだなんてことは絶対にならない。明日より今日のほうが早いのだ。〈フェンリルの花嫁〉と〈革命の乙女〉の会談をきっかけに、事態はもう動きだしている。

「……また戦いになるな。頭数が足りなくなきやいいけど」

「どうにかしてみせる。諦めたら全部おしまいだ。そうだろ、エンビ」  
「さあな。もう行くこうぜ、ライド。おれらがここであーだこーだ言ってもしょうがない」

生返事のままエンビは踵を返す。格納庫で立ち話をしていたって世界は変わらない。パイロットである以上、次の出撃に備えて休息をとらねばならない。

何とも応じかねたライドだったが、ふうとため息をついて、エンビの後を追った。

「ああ、そうだな。動かなきゃならないのは世界でも体制でもない。おれたち人間だ」

## 005 見えない真実

半ば押し戻されるように、暁たちは客船のロビーに戻ってきた。

艦内は静かだ。他の乗客たちが降りた様子もない。この二週間で聞き慣れた話し声がまばらに聞こえるのと、二週間も経てば気にならなくなつた宇宙船の駆動音。待たされ続けた暁たちは、わずか数分で退屈を持て余した。

何か面白いことはないものかと研修旅行を引率するコーナー先生を横目に見やれば、いつになく青い顔をしていて、ジエイクがため息をついた。

「頼りねえなあ、大人のくせに」

「まあまあ」

スコットが取りなすが、その表情は肯定だ。頼りない大人なんだからしようがないじゃないかと書かれた顔で苦笑する。

声を出して同意することはないにしても、暁もまったく同じ意見だった。

状況について尋ねても、コーナー先生は「機長たちから待機するようキャビン・アテンダントに言われている」の一点張りで、何も教えてくれないのだ。

C Aに尋ねても言うことはみんな同じ。状況を質問して、指示で返される。なんだか部外者扱いみたいで、疎外感を感じてしまう。(ほかの乗客はこの状況について理解したがっていないみたいで、暁はそれも納得いかない)

さつきエンビー——イサリビの第一指揮官だと名乗った男——に手厳しく睨みつけられた直後だからか、なおのことコーナー先生に威厳が欠けているように思えた。

結局、月面基地行きはいつになるかわからないし、ここで足止めされている理由も不明のまま。また船内でノーマルスーツを着たまま待機しなければならぬというのは、あまりにも納得できない措置だ。

重たい空気を吹き飛ばそうとしてか、つとめて明るい声を出したのはジエイクだった。持ち前のリーダーシップで、ぐるりと仲間を見渡



す。

「そういや、宇宙で事故発生なんて、何百年ぶりになんのかな？　俺たちってニユースになる？」

「おっ！　帰ったらインタビューとか受けちゃったりー？」

スコットがお調子者よろしく身を乗り出す。

おかげで場の緊張はやわらいだものの、クレアはまだ不安そうにうつむき、ふわふわの金髪をいじった。

「きつと今ごろ大騒ぎよ……パパもママもお仕事忙しいのに、心配かけちゃう」

宇宙航路は安全で、事故なんてまずありえない。そんなのは常識だ。頭ではわかかっていても、例外的な事件に巻き込まれていると思うと不安は拭えない。二週間も両親と離れる旅行だって、はじめての経験なのである。

この船の設備はしっかりしているし、何かあってもギャラルホルンが守ってくれることは間違いないのだろうが、それまで黙って待てと言われるのは座りが悪い。

そのとき、黒い髪が視界の端で跳ねた。

「ねえっ……何か、お手伝いできないかなっ……！」

勢いよく立ち上がったのはミキだ。ミキ・ロウ。ハロを抱きしめた彼女は、機械が好きでこの研修旅行に参加していた。最近引き取られた里親がカツサパファクトリーの従業員というだけあって、機械工学には自信があるらしい。

引っ込み思案なミキが、珍しく意気込んだ様子だ。

『ハロ、お手伝い！　ハロ、お手伝い！』

『うお、しゃべった……っ？』

『ナンダ、ジエイク！　ナンダ、ジエイク！』

『なんだとはなんだ、こいつ！』

『アーツ！』

「あのね……！　さつき降りたドックに、モビルワーカーMWがあつたでしょ？

わたし、動かせるよ！　整備とか、システムの点検とか……力になると、思う……！」

うつむいてしまったミキを励ますように、ホリーが挙手する。

「それならわたしも！ 実はマニユアル読んだことあるんだよね。ここぞじつとしていても始まらないしさ」

「MWあ？ 目ざといなあ、俺、全然気付かなかったよ」

「俺もだ、どこにあったかも覚えてないや。……そっか、MSは難しくても、MWならトラクターみたいなものだし……」

乗れるかもしれない、と暁は考える。整備を手伝ってみせれば、見直してもらえるかもしれない。信用してもらえないなら、できるところを見せればいいのだ。

「俺は完全未経験だけど、ただ待つてるだけより自分から動いたほうがいいってのは賛成！」

「いよつ、未来のエースパイロットたち！」

ジエイクが続き、スコットが囁し立てる。

しかし、水を差すようにケイティが非難の声をあげた。

「ちよつと、やめてよ！ ここがどこかもわからないのに……あれって戦車なんですよ？」

長いストレートヘアが低重力にたなびく。彼氏に抱きつく姿を見放すように、ホリーがふんと鼻を鳴らした。

「ここにいたいならここにいれば？ わたしは、自分自身の力で現状を打開するべきだと思う！」

拳を握るホリーに、「そうだね」と暁がうなずく。ミキ、ジエイク、スコットが賛同し、クレアも一緒に行くわと微笑した。

「ばかなんじゃないの……」と毒づいたケイティに同意する声はあがらなかった。

ウイラードごとケイティを艦内に置いていくことがすんなり決定し、ロビーを抜け出すタイミングをはかる。コーナー先生が席を外した隙を狙って、非常口に近付いた。

昇降ハッチのレバーを引き、おそるおそるロックを解除してもブザーなどが鳴りだす気配はない。ここから脱出することが可能なようだった。残ろうとしていたダンが、とぼとぼと後をついてくる。

順番に船の外へと出れば、だだっ広いフロアから人の気配は消えていた。……静かだ。さつきは上空のキャットウォークを泳ぐ人影もあつたのに、今は人つ子一人見当たらない。

まるで夜のように薄暗く、しんと静まり返っている。

ホリーが拳を握る。小声で暁たちを振り返った。

「チャンスね！」

「うん」とミキが頷く。「あつちのを、動かしてみようと思う」

そして指差された方角に目をやれば、暁たちはフロアが段違いになつているところがあることに気付いた。そのロフト状のハンガーをよくよく見れば、MWの足らしきものがずらりと並んでいるのが見える。

「あんなんよく気づいたなあ……」

床が2／3階ぶんほどずり上がっていて、手前にはキャットウォークがあるのでMWの全容は見えない。

おそらくあの部分は、エレベーターのように上昇・降下を行なえるのだろう。きちんと止めずに半端なままになつているから、この人たちは案外ずぼらなのもかもしれない。

「整備しといてあげたらきつと喜ばれるよ。ミキは気が利くね」

「あ……りがとう、あかつきくん。わたし、頑張るね……っ」

重力があれば到底よじ登れない段差だが、ここは低重力である。うまくやればトランポリンを跳ねるように上にあがれる。

「よっしゃ。なんだかワクワクするなー！」

まずは運動神経のいいジエイクが駆け出し、硬質なフロアを蹴る。ジャンプするとハンガーに手をつけて、見事MWの手前に着地した。

「イエーイー！ どうだっ」

「俺も……っ」

続いて暁もジャンプに成功し、迎えたジエイクとハイタッチを交わす。

「ようし、わたしもっ——わわわー！」

さらにホリーも成功——と思われたが、着地があまかったのか、バランスを崩してしまった。ぐらついて重力を見失い、落下するかに思

われたホリーの手を、暁がつかんだ。

「大丈夫？」

小柄な体躯にしてはずいぶん大きな手だと、ホリーが思わず目をまたたかせる。引っ張り上げられて、ほっと息をつく。

「あ、ありがと！ アカツキくんはすごいね」

「ううん。クレアもミキも、飛べないなら俺たちで引っ張るよ！」

暁は朗らかに微笑し、階下に手を振ったが、クレアは眉尻を下げ、別の意味で手を振り返した。

「わたしはここで待つわ。残る人も必要でしょ？」

「俺も残るわー。低重力ってなんか馴染まないんだよな」

スコットが肩をすぼめる。機械油のにおいのせいかな、遅馳せに無重力酔いがきたようだった。

「そつか」とジェイクは切り替えも早く？ミキに手を差し伸べた。「んじゃ、お前だけだな、来いよ！」

「ミキ。飛べそう？」と暁も気遣う。

『頑張レ、ミキ！ 頑張レ、ミキ！』

「う、うん。やってみる！」

まずはハロを投げ、ホリーが抱きとめる。続いてミキ自身も床を蹴って、飛び跳ねた。差し出された両手を暁とジェイクがそれぞれとって、引きずりあげる。

フロアに這い上がって胸をなでおろすミキを、ホリーがハロごと抱きしめた。

「やったね、ミキ！」

「う、うん。MW、まずは起動させてみる、ね……」

ところが、いざ近付いてみると、ここにあるMWは予想以上に大柄だった。遠目ではわからなかったが、見覚えのあるMWよりも各部のパーツが一回り以上も大きい。

それもそのはず、火星で稼動しているMWといえば、平均4メートル程度の大きさである。一方、このギヤラルホルンMWは全高六メートルを超える。たとえるなら、二階建てアパートほどのサイズだ。ギヤラルホルン火星支部の撤退を期に地上用MWは撤収を開始し、の

ちのヒューマンデブリ掃討以降はほとんど出番もない。暁たちの世代にはなおさら馴染みがない代物と言える。

「次はこいつをよじ登るわけね!」

「入り口つて上にあんの……? さすがにこれ登るのはなあ」

「ねえ、ここがコクピットなんじゃないかな? これで中に入れそうだよ」

興味津々で機体下部にもぐり込んだ暁は、思いがけずレバーを発見した。火星で最も普及しているヘユニオンMWのコクピットは天井部だが、ヘギヤラルホルンMWは腹だったようだ。

コクピット開放レバーを引く。

『ハッチ開イタ! ハッチ開イタ! ミキ入レル! ミキ入レル!』

「ここから入れるの、ハロ……? それなら……っ」

ミキが脚を踏み入れると、ガコンと音を立ててハッチが閉じはじめた。どうやら、何かフットペダルのようなものを足場にしてしまったらしい。なかば強制的にコクピットシートに押し上げられたミキは、初めて見る光景に息を呑んだ。

半年ばかり前にカツサパファクトリーの従業員に引き取られてから、里親になってくれた父親たちのそばでMWをいくつも見てきた。そのはずだ。なのに、こんな内装は見たことがない。

(……っ……ううん、役に立たなくちゃ。みんなの役に立たなくちゃ!)

やっぱりできませんでした、なんて、ここまできて言えるはずもない。

コンソールパネルをいくつか触ってみれば、電源ボタンに手が触れたようだった。画面が点り、モニタやボタンが明るくなる。起動がはじまったようだった。

ミキは意を決して操縦桿を握ると、ぐつと力をこめた。

一方、MWの外では。

ジェイクが機体をコンコンと叩いて、厚い装甲に感嘆する。上部に搭載されている大砲は、中学生にしては大柄なジェイクがすっぽり入ってしまえそうな巨大さだ。

「すげーな、ミキ。こんなでっけーの動かせるんだ」

「MWって街中じゃ見かけないけど、田舎のほうではトラック代わりに使われてるんだ。俺の家も畑のど真ん中だから、収穫したとうもろこしのコンテナ運ぶとき乗っけてもらったことあるよ」

「へえ！ さすが未来のエースパイロットは一足先を行ってんだなあ」

「へへ。死んだ俺の父さん、すっげえ強いパイロットだったらしいんだ。どんな人だったのって聞いたら『強い人だった』ってみんな口を揃えて言うくらい。だから俺も——」

言葉の途中で、MWがガクンと動き出す。軍馬が嘶くように前輪が持ち上がったと思うと、一輪しかない後輪がそのままギョルルと回転しだした。天高く持ち上がったままの前輪を置き去りに、三本脚の最後の一本が、千鳥足で突進する。

突如として猛進をはじめたMWの重みに揺られ、足場が地震に見舞われる。暁はとっさに膝をついて身をかがめたが、——巨大な鉄の塊はぐらりと傾き、ロフト状になったデッキから落下する。

そこは、クレアとスコット、そしてダンの三人が雑談して待つ階下だ。重さ3トンもある鉄の塊がぼつと姿を現し、クレアが細く息を飲む。中二階、2メートルほどの上空から、ギョルギョルと回転する一本脚が嫌な音をたて、襲いかかってくるのだ。全高6メートルを越える魔獣の影の中にとらわれ、その場にいる全員、脚がすくんで動けない。

その時だった。

「さがれ!!」

突如降ってきた大声に、暁ははつとが顔を上げた。上空から、サメのような何かが猛スピードで近づいてくる。滑空してきた青いパイロットスーツがスラストスターをふかす。ダンを力任せに突き飛ばすと、次はクレアに回し蹴りを食らわせる。転倒したふたりは、キャットウォークに叩きつけられてぐったりと脱力する。ダンの額から血がしたたった。

悲鳴をあげる一瞬の隙もない、ほんの刹那の出来事だった。

まるでスローモーションを見ているかのように、MWは進み出し、傾き、裏返しになってフロアに突進する。その影の下からスコットをはじめ出そうと、青い鮫——ギリアムの腰背部バックパックの小さな翼がありつたけのガスを急噴射する。

そして、家一軒が目の前で倒壊したかのような衝撃がドックを揺さぶった。

大きな振動と、煙。機械油のにおいがいつそう強く、鼻の奥をつんと焼くようだ。

「う………だろ………」

暁の両脚は、凍り付いてしまったかのように動かない。指先一本動かせなかった。ミキを乗せて転がり落ちたMWを見下ろせば、飛散した血液の赤が、花のような模様を描いている。

ダンとクレアは突き飛ばされて難を逃れることができたようだったが、スコットとギリアムが逃げ後れ、下敷きになってしまったらしい。

うつぶせに倒れたスコットが、うめく。どうか這い出そうと動いたが、それだけで引きちぎられるような熱がスコットの全身に襲いかかってきた。

そばかす顔をあげ、おそるおそる振り返る。目を疑った。

右足が、膝から下が、MWとフロアにはさまれていて動けないのだ。借り物のノーマルスーツが赤黒く変色している。

その中にあるはずの足は、数ミリの隙間に収まるようなものだったろうか。

「え？ う………そだろ、あし、あ、足が——ああ、うわああ　っあああ………ああああ………」

潰され、砕けていると認められずに、痛みと不安で涙があふれる。しゃくりあげるスコットの声を遮るように、腰から下を押し潰されているギリアムが血塗れの拳を握った。

「メ　ディカルナノマシン………準備急げッ!!　民　間人が最優先だ、医療ポッドが足　りなきや　重傷者を殺して担ぎ込めエ!!」

何としても子供を死なせるな——血塗れで喚くその姿に、暁はぞっ

と背筋が寒くなった。

細身のパイロットスーツ姿だから、ぐちゃぐちゃになった内臓や、折れて突き出た肋骨まで見えてしまう。下半身は鉄の塊の真下で、あれではペしゃんこだろう。

大量の血液を直視したホリーは、よろめいて尻餅をつき、はっと両手で口を抑えたが、耐えきれず嘔吐してしまう。

「ホリーっ、」

慌てた暁はジェイクを振り返ったが、腰を抜かして呆然としていゝる。クレアとダンは無事のようにだが、MWのコクピットにいるミキの安否はわからない。ハロがびよこんと飛び跳ねてきて、暁は思わず受け止める。

大丈夫だと励ましてくれているのだろうか。耳のようなパーツをパタパタさせるペットロボットを、ただ、ぎゅつと両腕で抱きしめるしか今はできなかつた。

「俺たちはただ、役に立ちたかっただけなのに……っ」

ああ、どうしてこんなことに——打ち拉がれる暁は、まだ何も知らない。



## 006 表と裏

視界が赤い。耳が痛い。大丈夫だ、今助けるからな——と励ます声は上擦っついて、暁は思わず一步、二歩と後退った。

嵐の中に取り残されたようだった。

MWデツキにはさつきまで誰もいなかったはずなのに、赤いランプがぐるぐると暴れだした途端、ものすごい勢いで人が雪崩れこんできたのだ。一体どこにこんなにもたくさんの人々が潜んでいたというのか。転がり落ちたMWのまわりを青いパイロットスーツが埋め尽くし、暁たちは気まずい空気の中に置き去りだ。

開かねえ、と誰かが鋭く舌打ちしたかと思えば、別の誰かがジャツキを持ってこいと叫ぶ。担架を担いで待機する青年たちの目には、焦りがありありと浮かび上がっている。神様にでもすがるような切実さで、彼らの視界に暁たちの姿は入っていないようだった。

「こっちは無視なのかよ……」とジエイクが毒づく声は震えている。

ホリーはまだ目に涙をため、嘔吐して汚れた口元を宇宙服ノーマルスーツの不由な手のひらで覆っているのだ。なのに、救助隊は見向きもしない。

ようやく振り向いたと思ったら、怪我人の救助を行うから退がるようにと追いやられ、追い出され、追い立てられて。

まるで邪魔者みたいな扱いをされ、そして誘導された先は彼らいわゆる『食堂』だという。

重たい足取りでたどり着いた無機質なその部屋はむしろ、理科実験室に似ていた。

奥のほうにはキッチンらしき設備もあるようだったが、タイル張りの床といい、等間隔に椅子が並んだ長机といい、生活するには冷たすぎる。窓ひとつなく、一方の壁だけがカラフルな落書きで埋め尽くされているのが、なんとも異様な光景だ。

ハ口を抱えた暁は、何も言えないまま、黒人の男に促されるまま席に着いた。

暁たちを連れてきたのは、第一指揮官の『エンビ』を呼び捨てにしていた大柄な男だ。

二十代の、半ばくらいだろうか。口調は柔和で、優しそうに見えるのに、なぜか他人に指図したりする。

きっと、本来は雑用係なのだろう。さつき頭をぶつけたダンに消毒用パッチをあてて包帯を巻いてあげる手つきは、何とも手馴れたものだ。

「よしできた。痛むか？」

「い、いえ……だ、だいじょうぶです」

「ならいい。次から気をつけろよ」

「……えっ、……は、はい……どうも」

いつもに増してオドオドした様子で、ダンが頷く。ただみんなについてきただけなのに突き飛ばされて怪我をさせられ、雑用係の男に注意までされて、すっかり消沈してしまった。

一緒にいるジェイク、クレアとホリーも同様だ。

五人の中学生の表情は冴えない。不安よりも、不満のほうが大きくふくれあがりつつあった。

「それじゃ、俺は一旦戻る。すぐに別のやつが来るから、みんなここで待っててくれ」

『待ッテルカラナー！ 待ッテルカラナー！』

ハロだけが赤い目をちかちかさせて応じる。暁たちはみな、気まずそうに目を逸らすばかりだ。

それも仕方のない反応かと、ヒルメは諦めたように眉尻を下げた。

この外見では指揮官だと名乗っても信じてもらえないことを、ヒルメは自身の経験から知っている。見知らぬ土地で、友人が怪我をして、みな不安だろう。そんなときに冷静に周りを見ることは難しいだろう。しようがない。

(しようがないんだ)

しようがない、それ以外に言葉はない。なにせ、彼らの世界の常識では、白人のほうが有色人種よりも生得的に優れている。指導者がみな白人であることがその証左だという。ラストル・エリオン、ガエリオ・ボードウイン、ジュリエッタ・ジュリス、アルミリア・ファリド、マクマード・バリストン、クーデリア・藍那・バーンスタイン、ラス

カー・アレジ、——全員もれなく肌が白い。より民主的に指導者を選ぶようになった今、常識の影響力とは絶大なものだ。

この機動要塞ヘイサリビ内の常識は、お前たちの常識とは異なるのだと説明しても、いたずらに子供たちを混乱させるばかりだろう。

異世界に放り込まれて、すぐさま適応しろというのは酷だ。

彼らが生まれて生きてきた世界の常識がここでは通用しないことを教えてやるのは、ヒルメの役割ではないだろう。今このタイミングで伝えるのが適当だとも思わない。

ヒルメは見守るように目を伏せて、食堂を後にした。

「……迎えがくるまで、この部屋からは出ないでいてくれよ」

小言を置き土産にしたヒルメの大きな背中が扉を越える。パシユ、という音が退室完了を証明すると、暁はやっと、知らず詰めていた息を吐き出した。

ハロを抱きしめる。

このハロの持ち主が今ここにいないから、暁が預かっているのだ。

(ミキ……)

ただみんなの役に立とうとしただけの彼女が、どうしてこんな目に遭わなければならないのだろう。

楽しいはずだった宇宙旅行は、どうしてこうなってしまった？



ヒルメが食堂を出ると、現場から駆けつけてきたらしいトロウが静かに片手をあげた。ヒルメも片手をあげて返す。

「こっちは軽傷者が一名のみだ。そっちの報告を頼む」

「重傷者三名の搬送が完了。緊急手術中だ。ヒューマンデブリ隊のフェイ以下六人が清掃への参加を希望してつから……許可、出してやってほしい」

「わかった。俺もあいつらの希望に沿うようにしてやりたい」

「頼む。それと、……ライドに頼んで月面基地からもドクターをよこしてもらったほうがいいかもしれねえ」

歯切れ悪く、トロウが声のトーンを落とした。

「……ギリアムか」

「いや、あいつもかなり危険な状態なんだけどよ……足りてねえのは、」

——人間専門の医者だ。

苦々しくトロウが吐き出した言葉は重い。

少年兵の療養所として、ここには宇宙ネズミの治療に特化したドクターが多数常駐している。

かつてはワクチンを接種する習慣もなく、幼少期に無麻酔で阿頼耶識システムの適合手術を受け、以来ずっと戦場を生き残ってきたヒゲつきの少年兵は、アルミリア・ファリドの人脈と財力のおかげで『船医』『軍医』といった支援者を獲得している。

ところが今回の怪我人は民間人だ。少年兵とは勝手が違う。

このへウイル・オー・ザ・ウィスプに居るのは、背中に非合法の端子を移植された元少年兵を研究する博士ドクターばかり。かつてへフランペンシユマルでだったエリア、へヴァナデイスでだったエリアには一般兵を診察・治療する医療チームが常駐しているもの、みなギャラルホルンの軍医である。

ギャラルホルンの作戦指揮やりかたでは、要救助者はほぼ100%の確率で見殺しになる。そうした隙について宇宙海賊が幅を利かせてきた。

救助した民間人の外科的手術など、はなから想定されていないのだ。

今回の要救助者は木星圏出身の民間人、それも未成年。各種ワクチンは学校単位で接種済みの健康体、富裕層の少年と少女ときた。

「またライドに頼るしかないってのか」

力なくヒルメが自嘲をこぼす。指揮官とは、医療従事者の不足に頭を抱える立場なのか……と、かつての団長の疲れた横顔を思い出す。

ドクターというのは、名誉と権威がともなう職業である。

鉄華団にはだから、船医がいなかった。

一応、団医……というか産業医ならばいないこともなかったのだが、強襲装甲艦へイサリビ〜に乗艦し、宇宙まで同行してくれるような医師はひとりもいなかった。

少年兵を診たところで何の実績にもならないという、将来性のなさも理由のひとつとしてあるだろう。

しかも職場といえは戦場だ。医療ポッドは医務室にほんの数基、医療機材も数える程度で、薬剤も多くはストックできない。消毒液と輸血パックが底をついたら医務室は店じまいである。

ひとたび宇宙に出てしまえば予定通りに補給ができないことなどざらにある。立ち寄る港によつては薬局がギャラルホルンとつながっていたり、取扱通貨がギャラーではなくメリアであったり、常に多様な障害がついてまわった。治安、怪我人からの数などの事情から医師本人が買い出しに同行できないことも多い。

さらに、歳星なら定価で手に入るものが、たとえばドルトコロニーのような商業用コロニーでは足元を見られる。相場価格もわからない少年兵ではなく、専門的な知識を持った看護師や薬剤師が備品を管理する必要があった。

その上、戦闘員が負ってくる怪我は、ひとりで行うにかできるものではない。外傷は多岐にわたり、四肢の切除を必要とする場合もあれば、体内で傷ついた内臓や動脈を縫合するための開腹が必要になる場合もあった。

くわえて、ただでさえ背中へのヒゲのせいで仰向けに寝にくい少年兵たちは、予防接種ひとつ受けたことがない。治療者側にも感染症のリスクがある。

重傷者のほかに、骨折、擦り傷に切り傷、打撲といった負傷者が一回の戦闘でわつと湧く。

しかも育ち盛りの少年兵は生意気で活発、ドクターに指示された『安静』の時間中ずっと大人しくしてられない。人手は多いほうがいいはずだからと、手負いだらうが這いずってでも再出撃しようとする。

一体何のために雇われているのかわからないと医師は鉄華団を去

り、穴を埋める医療従事者が鉄華団にやってくることはなかった。

そのころだったろうか、メリビットの態度が目に見えて軟化したのは。一連の出来事を目の当たりにして、医師を雇えとオルガをせつづくこともなくなったようだった。

ヒルメたちも応急処置は学んだものの、医療行為が行えたのは鉄華団の中でメリビット・ステープルトンたったひとり。それでも彼女の専門は経理で、本来やるべき仕事を放り出したり、休み時間に働いたりはしない。休むのも仕事だからだ。きちんと休息をとらないと判断力は鈍る。仕事の効率も悪くなる。なのに休日も休憩もなく働き続けようとしてしまう団長オルガ・イツカに休息を申しわたすのが、彼女の仕事だった。

今は常勤の軍医ドクターがこのヘイサリビに複数いて、負傷した三人ともが手術を受けられている。止血帯があり、麻酔があり、輸血パックがあり、医療用メデイカルナノマシンがあり、鎮痛薬もある。アルミリア・フアード夫人が整備してくれた医療設備のおかげで、順番待ちの間に命を落とすようなことはない。

過去を振り返るなら、こんなにありがたいことはないだろう。恵まれている。

だが、万全ではない。

「今回の件にライドを巻き込むわけにはいかない」

ヒルメは静かに決断を下す。トロウがわずかに目を見開いたので、声のトーンを落として「月面基地のドクターが信用できない」と付け加えた。

なにせ、今回の重傷者は民間人だ。事故を起こしたあのMWの操縦席に侵入していた少女は火星人だという。コクピットブロックを解体して救出がなされ、一命はとりとめたが、全身を強く打って意識不明の重体。

もうひとりには木星圏出身の少年で、転落したMWの下敷きになって片足を失う怪我をした。コクピットの中の少女を救助するためには、彼の足を切り落とすしか方法がなかったからだ。膝から下が完全に潰れていたことや、MW内に閉じ込められたままの少女を迅速に救出

する必要があったこと、さらに嘔吐者の吐き出したものの混入など、再生治療ではどうにもならない現象が重なった。

切除に際して麻酔はかけたが、意識のある状態で足の骨を電動ノコギリで切断されたことはトラウマとして残るだろう。今後は義足での生活になるので、もしも両親が「体に異物を埋め込むなんて」といった価値観を持っている場合はケアも難しくなってくる。

現に、月面基地のギャラルホルン兵士たちはインプラント全般に生理的嫌悪感を覚える。

阿頼耶識のピアス、義手に義足、視力・聴力の補正具に関してもそうだ。

もちろんヒルメたちだって、地球では背中のはげやおやっさんの義足が嫌悪されるといふ話は小耳にはさんでいた。だが非合法の阿頼耶識ならまだしも、合法である義手や義足の一体何がどう気持ち悪いのかを感覚的に理解できない以上、彼らの生理的嫌悪感をどうフォローしていいかもわからない。

「さいわい〈フランペンシユマル〉が応援を出せると言ってくれてる。食堂ここにいるガキどものこと、しばらく頼むぞ」

「わかった。お前の決断を信じるぜ、ヒルメ」

「ああ。……悪いな」

今日の指揮官として、ヒルメはライドに頭を下げにいき、普通の医師を寄越してもらおう。おそらく、それが最善なのだろう。

ここに常駐しているドクターはみな、阿頼耶識やインプラントの研究をしている医学博士である。阿頼耶識使いの治療やりハビリを行い、それによって臨床データをとっている。彼らは被験ネズミ体専門医だ。潜り込んできた普通の人間の救命は、彼らの業務範囲から逸脱している。

彼らに業務外の献身を強いることが、指揮官として正しいとは言えない。

しかし、月面基地から人員を呼ぶなら、そいつらは必ず火種を連れてくる。

「いいって、雑事は俺に任しとけよ。ガキのやることが予想外なのは

今に始まったことじゃねえしな」

ヒルメの苦渋の決断にも、トロウは変わらない快活さで白い歯を見せた。ヒルメたちの三人の中では、トロウが最も流血に耐性がある。七年前の戦いで片目を失い、黒い眼帯をつけた今もなお、トロウの軸は決してぶれない。そういう強みを持っている。

廊下を進みだせば、トロウの拳がトンと背中にぶつかる。

「お前ばっか背負うなよ。俺たちは三人いるんだ」

「ああ。……ありがとな」

足を止めて、拳に拳をぶつけかえす。

にと破顔したトロウの面影は、昔と変わらない。……いや、昔のほうが険しい顔をしていたかもしれない。

ただ、子供のころに染み付いた思考の癖が、今も抜けない。

ヒルメも、トロウも、エンビもそうだ。



ふたたび食堂の扉が開く音がしたので、暁はうつむいていた顔をあげて振り返った。

ワゴンを押してやってきたのは、さっきも出会った眼帯の男だ。戦鬨から帰還してきたのだろうか。ギャラルホルンの青いパイロットスーツ姿のまま、よく見れば肩には指揮官を示す赤いラインがある。

食事のトレイを乗せたワゴンに足癖悪くロックをかけて、暁たちをぐるりと見渡した。

「よう。お前らも腹減ったろ？ ギャラルホルンのレーションだから、社会見学だと思って食っていきな！ 台無しになっちゃったつう研修旅行の代わりにもならねえだろうけど、俺らにできることはするからよ」

「って、食えないですよ！ おれたち、……っ」

「わたしも……吐いたばかりで」

「ああ、気が利かなくて悪いな。ゲロった女の子がいるから渡せって



水と薬と持たされてたんだった。ほらよ！」

ミネラルウォーターのボトルをドンとホリーの目の前に置いたトロウは、相も変わらず気が利かない。

薬の小瓶とタライ、白いタオルが次々とテーブルに並べられる。手つきはよどみないが、そこに「大丈夫か？」の一言も添えはしないのかと、冷ややかな視線がトロウに集まった。

体調不良の女の子を前にして、ボトルの蓋をとって差し出す程度の気遣いもできないなんて、きつとモテないに違いない。ホリーはむすりとかちびるを引き結んで、みずからボトルをつかみ、キャップをとった。

「お前らも、いろいろと災難だったな。ともかく、まずはメシだ。喰わねーと持たねえからな。天下のギャラルホルン様が開発しただけあって、そこらのレーションとはレベルが違うぜ？」

「いりませんよ！ 食べません。こんなときに、メシなんて……」  
ドンとテーブルに拳を叩きつけ、うめいたのはジエイクだった。スコットの悲鳴が耳から離れないのだ。

ジエイクの両親や祖父は医療従事者だが、あんな大量の血液、ジエイク自身は初めて見たのだ。クレアも同じく目を伏せる。鳥肌をさす。おそろしかつた。

何よりゾツとするのは、MWの事故ではない。顔に傷のある青年が、血塗れの、青ざめた顔で、やけに満足そうに微笑んでいたことだ。

——……す みません……でもおれ、戦う以外の仕事 できました  
…… 子供は、ぜつたい死なせ るな って、命令——っ

あんな不気味な青年よりもスコットが優先的に救助されたことには、みな言わないだけでほっとしていた。

宇宙要塞らしき場所で暮らす見知らぬ他人よりも、十四日間一緒に旅をしてきた友達のほうがずっと大切だ。パイロットスーツを着ていたから、あの青年は軍関係者なのだろうし、きつと死ぬ覚悟はできていたはずだ。

民間人を守って死ぬのが兵士の仕事だろう。

「こういうときこそ食わなきゃ持たねえぞ。腹が減ってれば気が滅入る。流し込んででもなんか入れとくもんだ」

「わかったようなこと言わないでくださいよ……！」

「そうだな、俺にはわからねーんだろうよ。今はメシ食って、ちゃんと寝て、現実を受け止める。泣いてもいいし嘆いてもいい。お前らにはその権利がある」

押せばあっさり引くので、ジエイクは押し黙った。上から目線で『お前たちはわからないけど俺はわかる』と言われているようで不愉快だと憤るつもりだったが、トロウが引き下がったので、怒りをぶつける場所を失ってしまった。

こんな流血沙汰を見るのは初めてだろう……とも、こんな大事故を引き起こすのは初めてだろう……とも、トロウは言わない。MWにはじめて触れる中学生に、巨大な鉄の塊をにわか知識で動かしたらどうなるか想像できなかったのはしようがない。

彼らは、少年兵ではないのだから。

「ってな。実は、ここで食つとかなきゃ食いっぱぐれつちまうんだよ。お前ら、船に戻って客室乗務員アテンダントに『メシは？』って言わねえか？ 言わねえんなら無理に食わなくてもいいんだけどよ」

「だって……友達がどうなったかもわからないのに……っ」

「ああ。気持ちの整理がつかねえのはお前が正気だからだ。はじめてならなおさらな」

肩を震わせたジエイクに続いて、クレアがぐすんと鼻をすする。みな十四、五歳で、感受性の強い年頃なのだ。あれほどの流血を直視して、刺激が強すぎたことは否めない。

だが、もしも『MWに触らなければよかったのだ』と責めてしまえば、思春期のやわらかい心をいたずらにかき乱すだけだろう。

「……食べる。時間がかかってもいいから全部食え。おかわりもある。お前らは生きてるんだ」

暁たちは目の前に配られたプレートに目線を落とし、おっかなびつくり蓋を取る。

すると、中身は『レーション』とは思えない凝った作りだった。無重力でも開封できるようペースト状でトレーに貼り付いてはいるものの、中にはちゃんと具が混じっていて、彩りも鮮やか。レーションだと言われなければ気づかないくらい、立派なプレートランチだ。スプーンですくって口に運べばあたたかく、味はとてもよく整えられている。

ぱさぱさのレーションバーとは比べられないほど食べやすく――、

「……おいしく」

と、暁の口から本音がこぼれた。

「だろ？」とトロウが笑う。

スプーンで口に運べば、あたたかさが身に沁みるようだった。一口、もう一口とスプーンを動かすうちに、言葉は不要になっていった。同席するトロウをまじえ、それぞれに食事に夢中になりはじめたところで、ふと向こう側の食堂の扉が開く。暁たちが入ってきたほうからは遠い、奥のほうにあるキッチンらしき設備のそばだ。どうやら、ドアはふたつあったらしい。

そしてぞろぞろと入室してきたのは、戦闘を終えたパイロットたちらしかった。

青と緑が入り交じった細身のノーマルスーツ姿が十人ほど。めいめいに棚からプレートをとって、席に着く。

(あれは……)

パイロットの一団の中には、エンビの姿もあった。暁の姿を見とめると、まるで嫌なものでも見てしまったように目を逸らす。

ホリーも鏡のように眉根を寄せて、目を背けた。

「わたし、あの男の人……なんだか苦手」

「あー……いつもはあんな嫌味な感じじゃないんだけどよ。うちのエースは正義感が強いっつうか、今日はたまたまイライラしてるだけっつうか、……その、ごめんな？」

「あの人が、あの赤い機モビルスーツ体……グリムゲルデってやつに乗ってるんですよね」

「ああ。今日はパイロットシフトだからな」

「指揮官なの？」

「この指揮官は三人いる。三人つっても交代制だから、日によつて指揮官ひとり、パイロットふたりが正解だな」

「でも司令官は士官学校、パイロットは訓練校ですよ？ あの若さで兼任つてできるんですか？」

「現にできてる。俺らの経歴は特殊だから、参考にはならねえよ」

これ以上は追求させないような雰囲気、ホリーは口をつぐんだ。ホリーの将来の夢はMSパイロットだ。単身赴任中の父はギャラルホルンの軍人で、いつか入隊すれば出会えるかもしれないと、母に語り聞かされながら育った。ノアキスにある私立中学校に通うホリーは、まだ見ぬ父に追いつくためにも、早くパイロットになりたいし、指揮官にもなれるならなりたい。

第一指揮官とエースパイロットを兼任しているだなんて聞けば、その華やかな肩書きには暁やジェイクだって魅力を感じずにはいられない。

通常、士官学校の卒業年齢は最短でも22歳。エリートコースといえども配属後すぐに指揮官になれるわけではない。抜擢されるまでの下積み期間がある。

訓練校の卒業年齢は、最短で18歳。新米はMWパイロットからスタートで、三尉以上に出世して、MSパイロットに抜擢されて初陣に出られるころには早くても21歳になっている。

その後「エース」と呼ばれるようになるかは、実績次第だとしても容易じゃないことは中学生でもわかる。

なのにエンビは二十代半ばで第一司令官、兼パイロットというではないか。しかも年の変わらない部下から「うちのエース」と言わしめるのは、相当特異な例なはず。

一体どういうカラクリか……と訝しむホリーの目には、まさかエンビ、ヒルメ、トロウの三人がまつたくの同格で、同じように指揮官とパイロットを兼任しているだなんて現実には映らない。

白人が上官、東洋人が部下なのが当たり前だからだ。肌の色を基準とする常識が、ホリーをトロウもまた同じエースパイロットであると

いう発想には至らせない。

グリムゲルデ・ヴァンプ3号機のパイロットはトロウで、既にその姿を見ている暁さえも、名乗り出ないパイロットを蒼穹色そらワーウルフに重ねることはなかった。

そんなときだ。

向こうの方ではエンビが食事を終えたのか、空のトレーを持って立ち上がった。ホリーとジェイクがびくりと肩を跳ね上げ、気配を察知したのか、よく研がれた包丁のような目が暁たちのほうをちらつと見やる。

暁はただ、青い青いひとみでエンビをじいつと見つめ返す。

やがて先に目を逸らしたのは、エンビのほうだった。

緑色のパイロットスーツを着た赤毛の男がエンビに何か言っているようだったが、遠くて何も聞こえない。連れ立って食堂を出て行くのを見送ると、緊張の糸はようやくと切れ、ジェイクたちはめいめいに、テーブルの上へあたりこんだ。

あからさまに疲弊している中学生五人に、トロウが苦笑いを浮かべた。

「悪いな、お前ら……てか、ほんと怯えなくていいんだぜ？ たまたま

虫の居所が悪いだけだからよ」

ははは、と空笑いが引きつる。

元鉄華団団員だけあってエンビは本来、年少者や弱いものに親切な男だ。ヒューマンデブリ隊にも慕われているし、花街へ遊びに行つたときには老若男女問わず可愛がられる愛嬌も持っている。

——ただ。

（エンビの野郎、完ッ全にこいつらを『外敵』としてロックオンしちまってるんだよなあ……）

完全な敵対関係であり、対人距離を図る必要はないと突き放すときに、エンビはああいう目になる。

取り繕うのをやめたとき、自然と尖ってしまうのだろう。トロウ自身も身内に甘く、外敵に容赦がない性質だという自覚があるが、その

『外敵』の判別基準が、ここへきてエンビと割れているらしかった。

どうしたものかため息をつくとき、空気を変えようとしたのか、クレアが小さく拳手をしてみせた。

「えっと……あの、ここって何をするとこなんですか？」

「一応『治安維持』のための施設だな。月外縁の安全確保。さつきみたいな襲撃の撃退も仕事のうちだけど、何にもない日のほうが多い。いつもは訓練ばっかやってるよ」

質問に答えるトロウの視線は正解をもとめるようにさまよって、壁の絵に落ち着いた。ライドが描いた、火星の作物の絵だ。花の絵もあるが、どうもろこしやトマトといった故郷の実りを懐かしいタッチで描いている。

不自然に目を逸らしたように見えたホリーがめざとく質問を追加する。

「その訓練って？ 何をしてるんですか？」

「ここで言う訓練ってのは『戦う準備』だよ。いつどこで何が起ころても速攻で片付けられるようになる」

宇宙航路は安全だと吹き込んでいる手前、まさか「パトロールと救助活動が中心です」なんて口が裂けても言えるわけがない。

「戦いなんて……人が傷つくだけじゃない」と、クレアが青いひとみをうるませる。

きつと心根の優しい少女なのだろう、勝気なホリーも気遣うようにクレアに寄り添う。

そうだな、とトロウも同意を述べた。

「だから、戦えば傷ついて戦わなければ傷つかない証明に、誰かが戦わなきゃならねえんだ」

戦って戦って、こんな戦いはもうやめようと思わせるための赤い血を、誰かが流し続ける。

犠牲は風化すれば、痛みを忘れ、いずれ人はまた兵士を道具のように使い捨てるだろう。兵士になった以上、死ぬ覚悟なんてできているはずだ、それが戦士の誇りだとか適当なことをうそぶいて、敬意という名目を掲げながらいつ死んでも構わない消耗品扱いする。

ギャラルホルンとは市民の安全を守るための暴力装置である——  
というのがアルミア・ファリドの見解だ。

伝統と血統を守護するためにはない。従来の法と秩序を  
不変たらしめるために存在するのではない。治安維持という大義名  
分のもと繰り返し返されてきた白色テロを抑止するために、アルミアは  
月外縁でライドとジュリエッタを睨み合わせる構図を作った。

ライド率いる狼<sup>ファリド</sup>陣営と、ジュリエッタを矢面に立たせた蛇<sup>エリオン</sup>陣営の  
拮抗が膠着状態を作り出し、結果的な平穏を形成している。

この機動要塞へイサリビ<sup>ン</sup>が元少年兵を軍事力として保持している  
のは、一種のオトシマエだ。かつてファリド派が革命<sup>はんらん</sup>を起こして、エ  
リオン派と衝突したから、その尻拭いをしている。

仕掛けてきたのはラスタル・エリオンのほうだと証明し、いつか平  
等に裁かれるために。

トロウの言葉に対し、集まってくる視線の上には『?』マークが飛  
んでいるかのようで、まったく理解できないといった素直な感想が手  
に取るようにわかる。

しかしトロウはつとめて明るく身を乗り出して、手元のボトルを指  
差して見せた。

そしてマシンガンのようにぐるりと見渡す。

「たとえば、だ。今お前ら全員フツーに飲んでるその水、『ボトル1本  
三万ギャラーな』って言われたらどーする?」

すると、ちやうど水を飲んでいた暁のミルクティー色の髪が、うさ  
ぎのように飛び上がった。

「そんなの、無茶苦茶だよ! こんなの高くたって150ギャラーも  
しないでしょっ?」

「たどえ話だよ、たどえ話。考えてみんだよ、ある日突然、水のボトル  
がすげー貴重になって、とても買えないような値段に跳ね上がったと  
したら? ってな」

「……交渉して、値切ればいいんじゃない?」とジェイクが顎に指をあて  
る。

「別のものを買うとか……交換にするとか!」とホリーが身を乗り出

した。

「わたしなら、たくさん持つてる人のところへ分けてもらいにいくわ」とクレアも続く。

「おっ、お前らしい線いつてるな！ それじゃ、子供には渡せないって拒否されたら？」

「それなら大人のひとに頼んで一緒に来てもらえばいいじゃない」

あつさりと暁が正論を述べて、トロウは満足げに笑んだ。

「そーゆうことだな。当たり前みたいに思うかもしれないけど、十七年前には夢のまた夢だったんだ。全部クーデリア先生が実現してくれたことなんだぜ？」

今を生きる若い世代から『盗む』『奪う』『死ぬしかない』といった発想がひとつも出てこないことには、変えがたい達成感があった。

〈マクギリス・ファリド事件〉から〈フェンリル革命〉を経ても、ほうぼうから「労働者に対価なんか払ってたら生活できない」という反発がわき起こった時代に、この少年少女は育ってきた。

鉄華団壊滅から十五年、マクギリス・ファリドの死後十五年だ。

暁たちが育ってきた歳月と、トロウたちがすべてを失い苦しみがいてきた期間はびたりと重なる。

かつて、宇宙植民地に隔離された労働者の姿は、見えないようにされていた。ドルトコロニー群がその一例で、華やかな商業施設と、労働者の暮らす貧民街には、物理的な距離以上に大きな隔たりが存在していた。

武器商人が武器を横流しし、虐殺の中で革命の乙女が立ち上がった。若干十六歳の才媛クーデリア・藍那・バースタインは劣悪な環境で使い潰される犠牲者たちの現状を訴えた。そしてマクギリス・ファリド准将が青年将校を率いて武力蜂起、ギャラルホルンによる経済圏への過剰干渉を暴いた。

それから七年、アルミリア・ボードウィンによる内部告発が世論を動かし、ようやく搾取の実態が周知されはじめている今もなお、物価の上昇が各地で嘆かれている。

見知らぬ労働者の『生きる権利』を認めるために、なぜ生活を圧迫



されなくてはならないのか。奴隷には奴隷たる原因があるのではないのか。たとえば前世で罪を犯した罰だとか！

革命のせいで貧しくなった、息苦しい、昔はよかった——という懐旧の声は今も聞かれる。

かつては「花畑を作りたいたいから、肥料に人間を、一山いくらで」という取り引きが当たり前に行なわれてきた。安価な弾避けが欲しい業者はヒューマンデブリを買い求めた。美少年を可愛がりたい貴族は金髪碧眼の子供たちを選別し、収集した。

そうした行為は子供の心身を、未来を、命までも蹂躪し破壊し尽くす悪行であり、『非人道的搾取』だと再定義されるまで、気の遠くなるような年月がかかった。

長い長い雌伏のときを経てついに革命は成就し、封建的な社会制度は是正されつつある。

保守的な加害者<sup>おと</sup>たちは大切な花畑が枯れてしまうと反発しているが、命は肥料ではない。これまでは問答無用で地面扱いだった奴隷たちが、もう踏みつけられるのはごめんだとNOを突きつけられる時代になってきた。

火星連合発足とともに誕生した暁たちの若者は、もう他者から生きる糧を奪うような事態から遠い、あたたかく平和な世界を生きている。

だから、ちよつとくらい無知でもいいとトロウは思うのだ。

知らなくても生きていけるなんて、そんな幸福なことはないだろう。トロウたちは、知らないことがひとつあるだけで生き残れる可能性が目減りするような人生を送ってきた。だけど暁たちは違う。多量ものを知らなくたって大人や社会が助けてくれる、そんな世界で、きちんと教育を受けて育っている。

悲惨だった昔のことをわざわざ教えるなんて、かわいそうじゃないか。

「お前らみたいなガキが真っ当に成長できるように、俺たちは戦ってきたんだ」

にこにこことご機嫌にトロウが微笑する。まるで人懐っこい大型犬

のように、揺れる尻尾が見えそうなほどだ。

ただし、トロウの価値観はあくまで元少年兵のそれであり、暁たちは普通の中学生には、遠く共有できかねるものだった。

(何がそんなに嬉しいんだろう、変な人だな……)

## 007 すれ違う心

火星、カツサパ・ファクトリー。

和やかな昼下がり、事務室は昼食休憩中だ。業務用のデスクで定食を口に運ぶ合間に、ザックが思い出したように伸びをした。

「うちの子、うまくやってんのかなあ〜」

「大丈夫じゃない？ ミキは引っ込み思案だけど頭のいい子だよ。ハロもついでるし」

端にあるソファからヤマギが顔を覗かせる。商談なども行うので、パーティションがあるのだ。付け合わせが動物の肉だったので、隣のデインのトレーに移す。ヤマギはベジタリアンというわけではないが、なんとなく気持ち悪くて合成肉しか食べない。

「ウス」とデインが礼を述べた。

カツサパファクトリーには設備の都合で社員食堂がなく、昼どきには馴染みの雑貨屋や弁当屋にランチの配達を依頼する。利用する店は曜日ごとあらかじめ決まっておリ、昼前になったら人数分の注文をかけるので、それぞれ好きなものを毎日選べるというシステムだ。

ちなみにカツサパ夫妻は、工場に併設された自宅で食事をとっている。夏休みはふたりの子供たちと一緒に昼食を取れる貴重な期間でもある。年子のきょうだいは、もう10歳と9歳になる。

「見送ったときはヨツシャ俺も夏休み！ って思ったのに、姿が見えないと心配になるもんなんすねえ。女の子ってのもあんのかなー……」

親にも夏休みはあっていいだろう、と思い、ザックは娘を一ヶ月の研修旅行に行かせたのだ。

現状のクリュセにおける里親制度では『婚姻関係にある保護者がふたり』いれば一組につき五人まで里子を迎えられる。年収、環境、学歴、前科や借金の有無など厳正な審査をくぐり抜ける必要があるが性別は不問で、審査が厳しいからこそ『里子を育てている』という事実が『善人』を意味する。

そのポジティブなレッテルを手に入れることに意義を見出す者も

いる。カツサパファクトリーも例に漏れず、壊滅前に犯罪者集団というネガティブなレッテルを貼られてしまった鉄華団残党としては、実に魅力的な肩書きだった。孤児を引き取っていたのは鉄華団も同じであるし、工場に里子がいればカツサパファクトリーの経営状態が良好であることを暗黙裡にアピールできる。

とりあえず社員の中で最も経済的余裕と社会的地位のある営業部長ザック・ロウと整備主任のヤマギ・ギルマトンが籍を入れ、ひとりずつ里子をもらって、それぞれの家で育てている。ふたりとも社員住宅に入っており（ヤマギは一階・ザックは三階だが）、住所は同じなので書類上は『同居』という扱いにできる。

ザックの娘であるミキは、半年ほど前に孤児院から引き取ってきたばかりだというのに勉強がよくでき、学校の授業にもすぐ追いついた。職場に連れてくると手伝いを申し出てくる積極性もある。修理・整備に使うランチの番号を覚え、お茶だって淹れてくれる。そのときは、女の子とはなんて気がきく生き物なのだ……！ と従業員一同で感涙した。

しかも、ザックとヤマギが専門とする機械工学にも興味を持ってくれているらしい。地味で大人しい少女だが、それだけに「将来の夢は整備士……おとうさんたちみたいだな」なんてはにかまれたら総員ガッツポーズ不可避だった。

ザックやデインの教え方がいいのか成績はうなぎ登り、こんな短期間で暁と同じ研修旅行に参加するまでになったのだから、きつと才能があつたに違いない。

「それに比べてうちのは……」

ヤマギがもらってきた里子は暁やミキよりも五つばかり幼い男の子で、雪之丞・メリビット夫婦の二人目と同級生にあたる。

9歳の少年はノルバ・シノ似の茶髪で、運動は大得意のだが勉強は今いちぱつとしない。夏休みは工場のみんなでピクニックでも……とヤマギは密かに楽しみにしていたのに、小学校からもらったスケジュールには補習授業がびっちりだった。

せつかくの長期休暇を親子で過ごすことができなくても、「ヤマギ、

「おこった？」と不安そうに見上げられたら「おこってないよ!!」と力一杯抱きしめてしまう。

黒目がちのタレ目が愛くるしい上に、仕草がどことなしにシノに似ているのだ。年齢からして血縁はないはずだが、つつい甘やかしてしまう。

ザツクとヤマギはもともと恋愛関係でもなんでもなく、里子をもらうために入籍したにすぎない。火星は昔から『戸籍』というソーシャルセキュリティシステムを採用しており、合法的に家族になるためにはまず2名が結婚という手順を踏む必要があるのだ。

鉄華団は家族だとかいう精神的な戯言ではなく、法と秩序に則り、社会的に認められる『家族』になろうという決意のもと、役所に書類を出しに行った。

もらってきた里子たちはカツサパファクトリーの従業員みんなの子供、という心意気で、一丸となって子育てに臨んでいる。カツサパファクトリーには二児の母であるメリビットもいるし、同世代の子供たちが周りにいるから初心者でも育てていきやすい環境だろう。

無償で衣食住を与え、学校に通わせ、宿題を教え、褒めたり叱ったり、対話しながら尊重し、時には失敗しながら試行錯誤している。

「早く帰ってこねえかなあー」

「帰ってきてから始業式まで二日くらいあるし、駐車場でバーベキューでもしよう。うちのも喜ぶしさ」

「いいっすねー！ アトラさんたちも呼びます？」

「そうだね、暁も喜ぶね」

和やかにヤマギが首肯する。自分は対して休めていない大型連休バケーションが開ける日に思いを馳せる。

ミキは元孤児であり、里親の愛情を買おうと従順に『役に立たなければ』と考えてしまう。父親たちの職場であるカツサパファクトリーでも、手伝おうとする。そんな幼い献身が機動要塞ヘイサリビでMWの転落事故を起こし、愛娘ミキが医療ポッドで眠っていることを、まだ誰も知らない。

▼

食事のあと。しばらく閑談していると、引率のコーナー先生が迎えにきた。客船から先生を誘導してきたらしいエンビの有無を言わさぬ空気に気圧されるように、暁たちはまた乗ってきた客船に戻る事になってしまった。

先頭をトロウが歩き、最後尾のエンビにはさまれる格好でクレアとホリー、ジェイク、コーナー先生に寄り添われるようにダン、そして暁がぞろぞろ続く。

暁はそわそわとうしろを振り返ると、おもむろに歩調を落としてエンビに並んだ。見上げる。

「あの……っ！ さつきは、その」

エンビはまっすぐ前を見たまま、暁を見下ろさない。

暁が左側をとったのは偶然だとわかったからだ。

「よかったな、いい勉強になって。『人のものに勝手に触っちゃいけません』。『軍事基地にあるものに迂闊に触ったら命に関わります』って、先生が教えてくれた理由がわかったろ？」

「それは……すいません。僕たち、役に立ちたくて」

「そう思うなら大人しくしてくれ。ただでさえ医療ポッドが足りてないんだ」

「次はもっとうまくやりますっ！」

「お前……」

次なんてねえよ。——冷たく突き放しかけたエンビは、それでも言葉を飲み込んで、状況の説明につとめる。

「次はもっとうまくやれることを、お前は証明できるか？ さつきの件だけでMW一台が損壊、ハンガーは要清掃。軽傷者7名、重傷者3名、救助のために2名が死亡してる。後始末に時間と人員が必要なことくらい、わかるだろう」

「わかります。だから、俺を代わりにMSにらせてください！」

「…………アトラに似たのか？ そんなにMSに乗りたいたいんなら、生きて帰って訓練校を受験しろ。進路が決まってよかったじゃないか。」

成績良ければ七年後にはパイロットに抜擢されるかもしれないぜ」

「でも、いま人手が足りないでしょ？ 俺、ほんとに力になりたいんですよ！」

「いいから何もするな。お前らが大人しくしてくれれば人手は足りる」

「父さんを知ってるんでしょ？ MSのパイロットだったって。すっごく強かったって！」

「……三日月さんはすげー強いMS乗りだったよ」

「俺って父さんにそっくりなんですよ。アトラもクーデリアもそう言う！ ユージンも！ この手は未来をつかむ手なんだって」

ほら、と手のひらを広げる。エンビは一瞥をくれたが、返答は実に冷淡なものだ。

「面影はあるよ。さすが三日月さんが作っただけはある」

「だったらっ！」

「血統に甘えるな。強いのは三日月さんであってお前じゃないだろう、暁・オーガス・ミクスタ・バースタイン」

「甘えるだなんて、そんなつもりは……！」

「……どうだかな」

暁は強かった三日月、子供を望んだアトラ、そして社会的地位も教養もあるクーデリアのもとに育つ、正しい子供だ。

その甘えは、すべての子供に許されている。挑戦すること、失敗すること、迷惑をかけてしまうこと、心配されること、許されること。どんな人間も、子供時代にはそういった経験をする。

その過程を見守るのが親の存在だ。

作られなかった子供たちは、トライアンドエラーという篩にかかれるうちにぼろぼろと死んでいき、もう一握りしか生き残っていないけれど。

「お前がまだ知らないのはしょうがないことだ。想像力や危機管理能力がまだなかったんじゃない」

先生の言うことが聞けなくても、待機の指示を無視しても。手伝おうとした結果、知らず識らず誰かの命を奪っていたとしても。暁が未

成年者だ。責任をとる能力がまだない。地球圏の法と秩序に則るならば、まだ知らなかった罪で裁かれることはない。

「……たとえば俺らがここで全滅してでも、無事に火星へ帰してやるよ。お前がいつかMSパイロットになれるように」

「そんな、おおげさですよ」

「……お前には、そう聞こえるんだな」

とても暗い声だった。



月面基地の執務室。

月外縁軌道統合艦隊へアリアンロッドへ総司令のための部屋は、壁一面が巨大なスクリーンで、リアルタイムで外を中継する疑似の窓でもある。

ため息をついた女騎士は眉根を寄せて、プレジデントチェアをきしませた。デスクに置いた小型のモニタに向かって、ジュリエッタ・ジュリス本部長は否を突き返す。

「出せる増援はグレイズエルンテ六機のみ、それ以上は無理です！こちらの戦力はアルミリア様の警護任務でほとんど火星に出張中なんですから」

『予想はしてたよ、本部長殿。ノーマルグレイズじゃないだけマシか……』

モニタの向こうから応じたのはライドである。機動要塞へイサリビへ出張中のライド・マツス師団長は、月面基地のMS隊を応援によこすように伝えたが、案の定、それは不可能だという返答しか得られない。

「というか、個々の戦闘力はイサリビに常駐するパイロットのほうが高いはずでは？ 師団長殿の知己も多数おられるんですから、そちらで戦力を調達するのが効率的というものです」

『ボーナスも出さねーくせに時間外労働させようとすんじゃねえよ。エリオン派の反乱だぞ？ しかも実行犯に使われてんのは条約的に



ギリギリグレーのヒューマンデブリだ』

「時間外だから働かないというのは怠慢だと思いますが……」

『あんたの周りに不眠不休で働いてる上官がいるのか？ 俺の家族にそんな真似させるならこっちも出るところ出ろ』

恫喝じみた低音に、ジュリエッタは押し黙り、そして口をつぐんだ。ライドのいうことはもつともであるが、七星貴族セブンスターズは生きていること自体が仕事のようなものである。ジュリエッタが敬愛するラスタル・エリオンは、生まれてから現在まで不眠不休で生存という難題をこなしている真つ最中だ。ガエリオ・ボードウィンも同様である。

しかし、そうした『ただ生きているだけで尊い存在』と『生きていても死んでいても大差ない有象無象』を区別するのはやめるべきだとアルミリア・ボードウィンが立ち上がった。彼女の主張もまた正當と感じるからこそ、ジュリエッタはライドに返す言葉を思いつくことができない。

板挟みの中間管理職は、もやもやとやり場のない気持ちを持って余しながら、どうにか二の句を絞り出した。

「我らエリオン陣営とて、一枚岩ではないのですよ……勝手に部隊を動かされて、迷惑千万です」

ギャラルホルン上層部を取り仕切る老人たちは『純血』の『男性』し  
か上官と認めない。女であるジュリエッタは、ライドのような最下層  
の出身者相手ですら強くは出られない。

これまでの常識である『出自の貴賤』『年功序列』『男尊女卑』から  
逸脱する小娘は、31歳未婚。伝統と門閥を重んじる模範的なギャラ  
ルホルン軍人——純血地球人男性——はみな当然のようにラスタル・  
エリオン公の熱狂的な支持者だが、そのエリオン陣営筆頭がジュリ  
エッタ・ジュリス本部長であることには強い不満と反感を抱いてい  
る。

ジュリエッタはだから、そのあたりをきちんと配慮しながら指揮官  
任務をこなしている。部下だろうと男性には敬語を使い、年下であつ  
ても敬意を払う。そうやって周囲との調和、共和をはかるのがギャラ  
ルホルンの慣例と理解している。

女などが座っていい椅子ではないと守旧派貴族からネチネチ嫌味を言われながら、ここに座している。

心細い声にも、しかしライドは取り合わない。

『誰がいつどこで何の作戦を遂行するかも把握できない軍隊なんて、テロリストそのものじゃねえか』

冷たく笑い飛ばして、『そーゆうのは「統率がとれてない」って言うんだよ』と吐き捨てた。

自軍の部隊の動向を予想できず、制御もできないのであれば、組織内にテロリストが潜んでいるも同じである。そういえば革命軍も間者に引つ掻き回されたのだと、命からがら名乗り出てきた生き残りから聞いた。

さいわいにしてライドは想定外の行動に出る部下を持ったことがないので、部下に好き勝手されるジュリエッタの気持ちを推し量ることはできない。

『ともかくアリアンロッドの問題は、アリアンロッドがケツを持って。何のために「宇宙航路は安全」だなんてデタラメ吹いてイサリビの連中にパトロール強化させたと思ってる』

「……アルミリア・フアリド夫人が火星を公式訪問するための布石――約束の場所に現れなかった場合に事件性を疑わせるための「rb:」

印象操作 > デマゴーグ」

『そうだ。お姫さんは自分が船ごと抹殺されても（革命の乙女）に希望を託すつもりで動いてる。私財を投じて火星連合政府と良好な関係を築き、民間人の渡航を封じさせてまでな』

「人質は、そちらにいますね？」

『暁・バーンスタインならイサリビで保護してるよ。いろいろと手を焼かされてるがな……』

三日月の忘れ形見は、元氣一杯の少年に育っている。好奇心旺盛がゆえ、想定外の犠牲を出してくれたが、言うことを聞かなかったからといって未成年に責任を問うことはできない。

「今後のギヤラルホルンと火星連合の関係を決定づける重要人物です。くれぐれも気をつけておいてください」

『言われなくとも死力を尽くして守ってるよ。あんたらとは違う理由でな』

そして、ライドは通信を切った。ため息をつく。

全人類に等しく『生きる自由』があり、子供たちには『健やかに育つ権利』があり、それらは社会によって守られなくてはならない。生きるために武器をとらなくていい、食べるために命を削らなくていい、眠るために危険を犯さなくていい。そういう世の中に変えていくために、一人ひとりが自覚を持って行動する必要がある。……というのがヘフェンリル革命がもたらそうとしている新時代の常識だ。

フアリド派を率いるアルミリアも、火星連合議長クーデリアも、歴代アープラウ代表も理念に殉じる覚悟だが、——ギャラルホルンは違う。そして多くの民間人も。オルガ・イツカを失って分裂した鉄華団の残党たちも。

「ああ。ガキを守って死ぬる大人なんざ、そういねえ。世界の未来よりも自分の過去のほうが大事なんだ。どうせ、みんな。……知ってるっての、そんなこと」

だから俺たちは孤児だった。

## マーナガルの整備長 I I

紅いヘグリムゲルデのパイロットがマクギリス・ファリドだった事実を知る人間は、案外少ないらしい。

今日得た、新しい情報だ。だが書いてみてから、日記帳の一行目としてどうなんだと、首を傾げたくなってきた。いや、ファリド夫人の賛同者としては、なかなか悪くない書き出しだということにしておきたい。

かくいうおれはパイロットの素性を知るところか、本物のヘグリムゲルデすら、実物を見たことがないのだが。

おれの名はカズマ・シャリコフ。アリアンロッド艦隊の整備部隊に所属している。

わけあって一度苗字を失っていたのだが、アルミア・ファリド夫人のお手配で、おれ自身がもともと持っていたフルネームを取り戻すことができた。

今は、マツス師団長の機体を預かる立場、ヘシュヴァルベ・レギンレイズ2号機の専属整備士として従軍している。直属の上司はトーカー部長で、所属は変わってしまったも月の犬、"マーナガルム"には違いない。ならば昔のようにマーナガルム隊の整備長だと自称したつて、差し支えないはずだ。

ギヤラルホルンの正規軍人になってしまったから、家族とは離れて暮らすことになった。だが、おかげさまで、おれは元気に生きている。

先日、三十歳になったんだ。それで、誕生日だって、家族がこの日記帳をプレゼントしてくれた。こんなに分厚い紙の束は、生まれて初めて見たよ。一体どれほど厚いかって、日記帳を押し開いているおれの左こぶしと、ペンを持つ右手の下にあるページの厚みがおよそ同じなんだ。三・二五インチ……いや、もつと。

布張りの表紙には、師団長殿が手ずから花の絵を描いてくれている。紙の本というのは総じてきっちり綴じてあるから、表紙のイラストを眺めながら日記を書くことはできない。それだけが残念だな。おれも、おれの家族もみんな、彼の絵筆が描き出した赤い花がとても、

とても好きだから。

紙とペンだなんて贅沢なものを贈ってくれて、そこに家族写真を添えてくれたことに、おれはとても感謝している。

兄弟みんなしてこつちを覗き込んでいる写真は、厚手でつるつとした紙に転写されていて、裏面には寄せ書きがある。だから透明なフォトスタンドを作ったんだ。古くなった小型タブレットを使つてき。手にとっては裏返すのが面倒だから、鏡をつけて、両面同時に見られるようにしたぞ。紙は水分に弱いってのに、眺めてるうちに目から汗が出てしまうから。天敵であるおれ自身の手から、家族を守つてやらなきゃと思つたんだ。

最近は何よりも深刻で、時間が経つのは早いものだと思感する。三十路はつらいよ。

そういえば、旦那が『錦の御旗』を起動させたのも三十歳前後だという話だっけ。といつても、植民地時代の火星はID管理がすごく杜撰で、誕生日には±三年くらい誤差があるのが普通だったから、あときの旦那が本当に三十路だったのかは誰にもわからない。

一度は犬のように殺された旦那は、奥方様の革命によって、英雄的存在に返り咲いた。英雄的な夫妻になった……と表現するのが正しいのかな。

歴史的な戦いに裏方として関与したおれは、その恩恵を受けている。この待遇がまさにそれだ。空調の利いた一人部屋と、三食昼寝つきの生活。定時になったら仕事をたたんで部屋に戻つて、ぼんやりとラジオを聴いたり、明日のことを考えたりする。

考えるのは、メカニクという立场上、おれには戦つたという実感がないということだ。実際に戦つておれを生かしてくれたのは、おれの大事な兄弟たちだった。戦場に送り出して、全員が五体満足で帰つてきてくれたわけじゃない。後遺症を抱えて、それでもまだ戦つてるやつもいる。

そんな家族のために、おれには何ができるのか、考えている。

ところがいざ日記帳に書き記すとみると、アウトプットについて頭を悩ませる。頭のなかで考えているよりも、この文字のペン運びはど

うだっけ、この語彙のスペルはどうだっけ、……っていちいち考えなきやならない。既に書いてしまった助詞の次に、この形容詞を置いていいものか、とか。

記述するとき、たくさんのものがこぼれ落ちて、なくなっていく。それは、おれが頭の中だけで作られた物語に慣れ親しみすぎたせいなのか。

昔のおれは、よく空想したんだ。十年くらい前だったかな。そのくらい昔の火星では、何か専門的な仕事をしている人の1日をおはようからおやすみまで追跡するドキュメンタリー番組が流行していた。

はじめにナレーターが、母校と専攻、今の職業を読み上げる。そしてカメラが番組の主人公である『仕事人』を大写しにして、そこでレポーターは仕事人本人だつて判明する。

そういう構成がツボにはまって、おれは、おれ自身の仕事に密着する番組になったつもりで過ごしてみたりした。あのころは若かったし、時間も体力も、今よりずっと潤沢に確保されていた。

いや、これを書いている今のおれは、あのころよりも時間があるのかも知れない。おれは機械いじりが趣味だというのに、今では仕事でしか機械に触れなくなってしまった。空き時間の手慰みをなくして、実はちよつと不自由している。だから、何か新しい趣味を持てるようにつて気遣つて、家族はおれの誕生日に日記帳をくれたんだろう。

願わくば、日記がおれの新しい趣味になってほしいよ。信用ならなのおれの言葉が、この分厚い紙の束を埋め尽くしていくのが楽しみだ。これから十年、二十五年という長い時間をかけて、この本をおれの人生の記録にしよう。ひとりぶんの寄せ書きを、おっさんになつて、じいさんになつても綴つていけたら、それがおれの新しい生きがいだつたつてことだ。

おれは今、ギャラルホルン月面基地に住んでいるが、ここは不思議なところだどつくづく思う。宿舎はすべて一人部屋で、相部屋はひとつもないと聞いた。ここには単身赴任でやってきている将兵しかいないのだそうだ。地球に妻子がいたり、両親がいたり。あるいは別の基地に親兄弟が赴任していたりするという。

半年以上とどまるようなことはなく、短ければ一ヶ月、長ければ半年くらいの周期で、地球へ帰省するのが普通らしい。ただ、マツス師団長、ジュリス本部長は出張を除けばずっと月面基地にいる。おれはむしろ、往復するほうが面倒じゃないか？　なんて、自分じゃ旅したこともない帰路について考えをめぐらせてみたりする。

ここには、仕事中毒のやつもいれば、朝から紅茶やアルコールをたしなんでいるやつもいる。各区画にある談話室は、どこも賑わっていて、ビリヤードやダーツが人気だ。カウンターにはバーテンダーが常駐していて、彼もまたギャラルホルンの一員らしい。ここで修行して、将来的には地球本部へヴィーンゴールヴンのバーカウンターでカクテルを振る舞うのが夢なのだと語っていた。彼はトークが上手くて、おれは味音痴だから、客を楽しませる目的で語られた夢の真偽のほどは、おれにははかりかねるのだが。

執事修行のために紅茶を淹れ、掃除を頑張ってる男にも出会った。ある日、今朝は廊下がやけにきれいだとつぶやいたら、そういうのが出世の引き金になるんだと教えてくれた。やりたいことを思う存分やるのが仕事につながってる。おれもそうだ。

ただ、誰にも感謝されないうちに広範囲を清掃する、という苦行がともなっていると、作り話っぽさはあっさり霧散するのだと感じた。今にして思えば、あのと声をかけてくれた彼が掃除をしたのだという事実を、おれは知覚してないというのに。

ここは、とても不思議なところだ。シミュレーター周辺には過不足なく人がいるのに、トレーニングジムは閑散としている。筋トレをしている兵士を見かけたことが一度もない。練兵教官はひとりもいない。

定刻になったら仕事をして、その仕事内容も多様で、おれから見れば『仕事』と『休暇』の見分けがつかない将兵がたくさんいる。たとえばバーで酒を飲む仕事。たとえば談話室でビリヤードをする仕事。たとえば倉庫でサンドバッグにされる仕事、そのサンドバッグを殴る仕事、怪我をしたサンドバッグを治療する仕事。

そういう役割を割り振られているだけだから、勤務時間が終われば

そんなこともないのかと思えば、休暇中も同じ仕事を続けているやつがたくさんいる。もちろん、部屋に引き上げて出てこないやつもいる。一人部屋だから、中で何をしているのかは誰にもわからない。

そんな姿を見て、仕事中毒ってなんなんだろうと考えさせられたよ。おれの仕事って、おれが実現したい夢って、一体なんなんだろうって。

おれは業務時間外にMSをいじることができない。マツス師団長の命令があれば話は別だが、呼び出してもらえない限りは機体に触れることなく待機していなければならぬ。

余った時間を使って、おれが日記を書いていることを、想像するやつがいるだろうか。もしもこの日記を読んだやつがいたとして、それは、この日記帳をプレゼントしてくれたおれの家族のことを、どんなふうに思い描くのだろうか。

もちろん勝手に読まれたくはないが、見知らぬ誰かがこのハードカバーを開くところを空想する。アリアンロッドの師団長様が手ずから筆をとった表紙だ。個人的な贈り物の装丁を、そんな大層な人物に依頼できるくらいだから、日記帳の贈り主は相応の権力者だろう。年老いた両親？ 厳格な祖父母……あるいは地球の我が家でおれの帰りを待つ、お嬢様育ちの奥さんかな。涙が出るくらいかわいなおれの弟たちは、今年で何歳になるだろうか。おれは兄弟の何番目で、おれに子供は何人いる？ 甥っ子や姪っ子は？ おれが帰省しない実家では、犬を飼っていたりするのかな。

考えてみると興味深い。文字列という鏡に映し出されたおれは、一体何者なんだろう。

99・99%違う、いやそれ以上の別人かもしれない。

ただ同姓同名の、まったく違う、カズマ・シャリコフという三十路の男だ。